

# 旭川放水路(百間川)改修 工事に伴う発掘調査 Ⅱ

百間川沢田遺跡 1

百間川長谷遺跡

百間川岩間遺跡

百間川当麻遺跡 1

1981・11

建設省岡山河川工事事務所  
岡山県教育委員会

百間川沢田遺跡 1  
百間川長谷遺跡  
百間川岩間遺跡  
百間川当麻遺跡 1

## 序

旭川放水路（百間川）改修に伴う発掘調査は、昭和52年度に着手して以来4年の年月が経過しました。

昨年は、調査結果の一部を『百間川原尾島遺跡』1として報告しましたが、今年度は、主として右岸用水路及びそれに近接する丘陵部分についての整理を行い報告いたします。これらの調査区においては、弥生時代後期末の水田遺構、平安時代の水田遺構、中世の建物及びそれに伴う多数の陶磁器類が出土しています。中でも百間川当麻遺跡では、畿内で生産されたと考えられる瓦器碗がまとめて出土しており、畿内との交易を示唆するものとして注目されているところであります。

発掘調査と整理作業とを並行したため、記述において不備な点もあるかとは存じますが、この報告書が、文化財の保護・保存のために、さらには歴史研究の資料として活用いただければ、望外の喜びとするところであります。

最後に、発掘調査並びに整理報告にあたって、建設省中国地方建設局、岡山河川工事事務所、並びに百間川遺跡埋蔵文化財保護対策委員会はじめとする関係各位から寄せられた御指導と御協力に対し、厚く御礼を申しあげます。

昭和56年11月

岡山県教育委員会

教育長 佐 藤 章 一

## 例　　言

- 1 この報告書は、旭川放水路（百間川）改修工事に伴い、建設省中国地方建設局の依頼を受け、岡山県教育委員会が昭和52・53年度に発掘調査を行った百間川沢田遺跡・同長谷遺跡・同岩間遺跡・同当麻遺跡の右岸用水路及び、丘陵部分の発掘調査の概要である。
- 2 調査期間は、昭和53年1月5日～昭和54年3月31日である。
- 3 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、旭川放水路（百間川）埋蔵文化財保護対策委員会の助言を受けた。また、石材の同定には、三宅 寛岡山理科大学教授、種子分析には、笠原安夫岡山大学名誉教授の手を煩した。
- 4 この報告書の作成は、昭和55年4月以降同56年3月まで、文化課分室にて整理作業を実施し、文化課職員の担当者が執筆し、文責は、文末に記した。
- 5 遺物の整理、実測及び実測図の浄写・遺構図の浄写は、おもに各担当者が行った。一部の土器の実測については、山本悦世、石器の実測・浄写については、平井典子、遺物の拓影については、北村智子、稲木早苗の助力を得た。
- 6 この報告書の断面図高度値は海拔高である。また方位は磁北である。
- 7 この報告書に掲載の図の縮尺率は、それぞれに示した。出土遺物の実測図で数値で縮尺率の示していないものは、 $\frac{1}{4}$ の縮尺である。
- 8 この報告書で用いる時代区分は、一般的な政治的区分に準拠し、それを補うために文化史区分と世紀を適宜併用した。
- 9 この報告書では、図面に溝→D、住居址→H、土壙→Pの略号を使用した。遺物については、各遺跡ごとに通し番号を付した。
- 10 この報告書に掲載した地形図で、1/5万の地形図は、建設省国土地理院発行のもの、1/1万の地形図は、岡山市発行のものを複製したものである。その他の地形図は、建設省岡山河川工事事務所作成のものをトレースしたものである。
- 11 この報告書に関係する遺物、実測図、写真等は、文化課分室で保管している。
- 12 昭和53年度の発掘調査は、上記の発掘調査部分だけでなく、百間川沢田遺跡、同兼基遺跡、同当麻遺跡の低水路部分、及び下宇治、干物、原尾島の各樋門部分の調査を行っているが、これらは、来年度以降刊行の予定である。

## 目 次

第1章 地理的・歴史的環境	15
第2章 調査の経緯	19
第1節 調査経過	19
第2節 日誌抄	24
第3節 調査の構成	26
第3章 百間川沢田遺跡	29
第1節 第1調査区	30
第2節 第2調査区	44
第3節 第3調査区	48
第4節 第4調査区	58
第5節 第5調査区	61
第6節 第6調査区	63
第7節 第7調査区	67
第4章 百間川長谷遺跡	87
第1節 右岸用水路調査区	87
第2節 丘陵部調査区	94
第5章 百間川岩間遺跡	109
第1節 右岸用水路調査区	109
第2節 丘陵部調査区	125
第6章 百間川当麻遺跡	159
第1節 右岸用水路調査区	161
第2節 丘陵部調査区	303
第7章 まとめ	461
第1節 水田遺構について	461
第2節 中世の土器について	463

## 図 目 次

第1図 百間川周辺遺跡分布図 (S=1/50000)	16
第2図 百間川周辺地形図及び調査区設定図 (その1) (S=1/10000)	20
第3図 百間川周辺地形図及び調査区設定図 (その2) (S=1/10000)	22
第4図 百間川沢田遺跡第1調査区地形図及び調査区設定図 (S=1/2000)	30

第5図	遺構配置図 (S=1/300).....	31
第6図	D-1・2平・断面図及びD-1出土遺物 (1/60・S=1/4) .....	32
第7図	D-3平・断面図及び出土遺物 (その1) (S=1/30・1/4) .....	33
第8図	D-3出土遺物 (その2) (1/4) .....	34
第9図	D-5平・断面図及びD-4・6断面図 (S=1/60) .....	35
第10図	D-7~10断面図 (S=1/60) 及びD-9出土遺物 (1/4).....	36
第11図	D-11平・断面図 (S=1/60) .....	37
第12図	井戸平・断面図 (S=1/30) .....	37
第13図	井戸出土遺物 (1/4).....	38
第14図	土壙平・断面図 (S=1/30) 及び出土遺物 (S=1/4).....	39
第15図	「島状高まり」遺構-4出土遺物 (1/4・1/2).....	39
第16図	「島状高まり」遺構 (S=1/300) 断面図 (S=1/60) .....	40
第17図	包含層出土遺物 (1/4・1/2) .....	41
第18図	第2調査区地形図及び調査区設定図 (S=1/2000) .....	44
第19図	遺構配置図及び南壁断面図 (S=1/100).....	45
第20図	出土遺物 (1/4・1/2) .....	46
第21図	第3調査区地形図及び調査区設定図 (S=1/2000) .....	48
第22図	遺構配置図 (S=1/100).....	49
第23図	微高地南壁断面図 (S=1/100).....	50
第24図	D-5北壁断面図 (S=1/30) .....	51
第25図	微高地~低位部移行部分の北壁断面図 (S=1/60) .....	54
第26図	低位部坪掘り調査区土層断面図 (S=1/60) .....	55
第27図	包含層出土遺物 (1/4・1/2) .....	56
第28図	第4調査区地形図及び調査区設定図 (S=1/2000) .....	58
第29図	水田遺構平・断面図 (S=1/100).....	59
第30図	微高地東斜面断面図 (S=1/100).....	60
第31図	第5・6調査区地形図及び調査区設定図 (S=1/2000) .....	61
第32図	第5調査区断面図 (S=1/150).....	62
第33図	第5調査区遺構配置図 (S=1/150).....	62
第34図	第6調査区T1土層断面図 (S=1/150).....	63
第35図	第6調査区T3土層断面図 (S=1/150).....	63
第36図	第6調査区T4土層断面図 (S=1/150).....	63
第37図	第6調査区T2土層断面図 (S=1/250).....	64
第38図	第6調査区遺構配置図 (S=1/300).....	64
第39図	袋状ピット実測図 (S=1/30) .....	65

第40図	出土遺物 (1/4).....	66
第41図	第7調査区地形図及び調査区設定図 (S = 1/2000) .....	68
第42図	遺構配置図 (S = 1/150) 及び土層断面図 (S = 1/100) .....	69
第43図	百間川長谷遺跡地形図及び調査区設定図 (右岸用水路) (S = 1/2000).....	87
第44図	遺構配置図 (S = 1/200).....	88
第45図	1区溝出土遺物 (1/4).....	89
第46図	1区土層断面図 (S = 1/100).....	89
第47図	1区水田層出土遺物 (1/2・1/4) .....	89
第48図	1区包含層出土遺物 (1/4).....	90
第49図	2区建物平・断面図及び出土遺物 (S = 1/80・1/4) .....	91
第50図	5区土壙遺物出土状態 (S = 1/30) .....	92
第51図	5区包含層及び土壙出土遺物 (1/4) .....	93
第52図	百間川長谷遺跡地形図及び調査区設定図 (丘陵部) (S = 1/2000).....	94
第53図	谷地区遺構配置図 (S = 1/500) .....	95
第54図	谷地区検出遺構平面図及び土層図 (S = 1/80) .....	95
第55図	貼床状遺構出土遺物 (1/4).....	95
第56図	谷地区包含層出土遺物 (1/4・1/2) .....	96
第57図	百間川岩間遺跡地形図及び調査区設定図 (S = 1/2000) .....	109
第58図	I区最終遺構検出面 (S = 1/200).....	110
第59図	I区北壁土層断面図 (S = 1/200).....	110
第60図	I区遺構検出状態 (S = 1/100) .....	111
第61図	I区土器溜り I 実測図 (S = 1/20) .....	112
第62図	I区土器溜り I 出土遺物 (1/4) .....	112
第63図	I区土器溜り II 実測図 (S = 1/20) .....	113
第64図	I区土器溜り II 出土遺物 (1/4) .....	113
第65図	I区土壙 I 出土遺物 (1/4) .....	114
第66図	I区土壙 I 実測図 (S = 1/30) .....	114
第67図	I区溝4出土遺物 (1/4) .....	115
第68図	I区溝4実測図 (S = 1/50) .....	115
第69図	I区井戸平面図・断面図 (S = 1/40) .....	116
第70図	I区人骨実測図 (S = 1/20) .....	116
第71図	I区土壙II実測図 (S = 1/30) .....	117
第72図	土壙II, Pit出土遺物 (1/4) .....	118
第73図	I区包含層出土遺物 (1/4) .....	119
第74図	I区東水田包含層出土遺物 (1/4) .....	120

第75図 I区東水田包含層出土遺物 (1/4) .....	121
第76図 I区東水田包含層出土遺物 (1/4) .....	122
第77図 I区包含層出土瓦 (1/4) .....	123
第78図 I区包含層出土瓦 (1/4) .....	124
第79図 II区検出遺構実測図 (S = 1/150) .....	125
第80図 II区土壤実測図 (S = 1/30) .....	126
第81図 III区検出遺構及び土層断面図 (S = 1/200・S = 1/150) .....	127
第82図 III区建物実測図 (S = 1/150) .....	128
第83図 III区出土遺物 (1/2・1/4) .....	129
第84図 IV区検出遺構 (S = 1/150) .....	130
第85図 IV区出土遺物 (1/4) .....	131
第86図 IV区出土遺物 (1/6) 及び出土状態 .....	132
第87図 IV区出土遺物 (1/4) .....	133
第88図 IV区出土遺物 (1/1・1/4・1/6) .....	134
第89図 百間川当麻遺跡周辺地形図 (S = 1/7500) .....	159
第90図 百間川当麻遺跡調査区分割図 (S = 1/2000) .....	160
第91図 A地点第1遺構面遺構配置図 (S = 1/300) .....	162
第92図 A地点第2遺構面遺構配置図 (S = 1/300) .....	162
第93図 A地点第3遺構面遺構配置図 (S = 1/300) .....	162
第94図 A地点第4遺構面遺構配置図 (S = 1/300) .....	162
第95図 A地点3・4区北側断面図 (S = 1/80) .....	163
第96図 D-1 (S = 1/60) .....	164
第97図 D-2 (S = 1/60) .....	164
第98図 P-1 (S = 1/60) .....	164
第99図 D-3 (S = 1/60) .....	166
第100図 D-4・D-5 (S = 1/60) .....	166
第101図 D-4・D-5出土遺物 (1/4) .....	166
第102図 P-2 (S = 1/60) .....	167
第103図 P-3 (S = 1/60) .....	168
第104図 P-4・P-5 (S = 1/60) .....	168
第105図 P-4・P-5出土遺物 (1/4) .....	168
第106図 P-6 (S = 1/60) .....	169
第107図 P-6出土遺物 (1/4) .....	170
第108図 中世墓 (S = 1/30) .....	171
第109図 中世墓出土遺物(1) (1/6) .....	172

第110図 中世墓出土遺物(2) (1/2)…	173
第111図 井戸1 (S = 1/30) …	174
第112図 A地点の遺構に伴わない遺物(1) (1/4)…	175
第113図 A地点の遺構に伴わない遺物(2) (1/4)…	176
第114図 A北点の遺構に伴わない遺物(3) (1/4)…	177
第115図 A地点の遺構に伴わない遺物(4) (1/4)…	178
第116図 A地点の遺構に伴わない遺物(5) (1/4)…	179
第117図 A地点の遺構に伴わない遺物(6) (1/4)…	180
第118図 A地点の遺構に伴わない遺物(7) (1/4)…	181
第119図 A地点の遺構に伴わない遺物(8) (1/4)…	182
第120図 A地点の遺構に伴わない遺物(9) (1/4)…	183
第121図 A地点の遺構に伴わない遺物(10) (1/4)…	184
第122図 A地点の遺構に伴わない遺物(11) (1/4)…	185
第123図 A地点の遺構に伴わない遺物(12) (1/4)…	186
第124図 A地点の遺構に伴わない遺物(13) (1/4)…	187
第125図 A地点の遺構に伴わない遺物(14) (1/4)…	188
第126図 A地点の遺構に伴わない遺物(15) (1/4)…	189
第127図 A地点の遺構に伴わない遺物(16) (1/4)…	190
第128図 A地点の遺構に伴わない遺物(17) (1/4)…	191
第129図 A地点の遺構に伴わない遺物(18) (1/4)…	192
第130図 A地点の遺構に伴わない遺物(19) (1/4)…	193
第131図 A地点の遺構に伴わない遺物(20) (1/4)…	194
第132図 A地点の遺構に伴わない遺物(21) (1/4)…	195
第133図 A地点の遺構に伴わない遺物(22) (1/4)…	196
第134図 A地点の遺構に伴わない遺物(23) (1/4)…	197
第135図 A地点の遺構に伴わない遺物(24) (1/4)…	198
第136図 A地点の遺構に伴わない遺物(25) (1/4)…	199
第137図 A地点の遺構に伴わない遺物(26) (1/4)…	200
第138図 A地点の遺構に伴わない遺物(27) (1/4)…	201
第139図 A地点の遺構に伴わない遺物(28) (1/4)…	202
第140図 A地点の遺構に伴わない遺物(29) (1/4)…	203
第141図 A地点の遺構に伴わない遺物(30) (1/6・1/4・1/2) …	204
第142図 B地点遺構配置図 (S = 1/300)…	206
第143図 D—6 (S = 1/60) …	207
第144図 D—7・D—8・D—9 (S = 1/60) …	208

第145図 D—10 (S = 1/60) .....	209
第146図 P—7 (S = 1/60) .....	210
第147図 P—8 (S = 1/60) .....	210
第148図 P—9・P—10 (S = 1/60) .....	210
第149図 P—11 (S = 1/60) .....	210
第150図 P—12 (S = 1/60) .....	210
第151図 テラス状遺構1 (S = 1/60) .....	212
第152図 テラス状遺構2 (S = 1/60) .....	213
第153図 B地点の遺構に伴わない遺物(1/4) .....	214
第154図 C地点遺構配置図 (S = 1/300) .....	216
第155図 室町時代以降の遺構配置図 (S = 1/300) .....	216
第156図 鎌倉時代の遺構配置図 (S = 1/300) .....	216
第157図 平安時代・奈良時代の遺構 (S = 1/300) .....	216
第158図 古墳時代・弥生時代の遺構配置図 (S = 1/300) .....	216
第159図 D—11 (S = 1/60) .....	217
第160図 D—12 (S = 1/60) .....	218
第161図 D—13 (S = 1/60) .....	219
第162図 D—14 (S = 1/60) .....	219
第163図 D—15 (S = 1/60) .....	219
第164図 D—13出土遺物(1/4) .....	220
第165図 D—14出土遺物(1/4) .....	220
第166図 P—13 (S = 1/30) .....	221
第167図 P—13出土遺物(1/4) .....	222
第168図 H—1・H—2 (S = 1/60) .....	223
第169図 H—1出土遺物(1/4) .....	224
第170図 H—2出土遺物(1/4) .....	224
第171図 D—16 (S = 1/60) .....	225
第172図 D—17 (S = 1/60) .....	226
第173図 D—18 (S = 1/60) .....	227
第174図 D—18出土遺物(1/4) .....	228
第175図 D—19 (S = 1/60) .....	229
第176図 D—19出土遺物(1)(1/4) .....	230
第177図 D—19出土遺物(2)(1/4) .....	231
第178図 D—19出土遺物(3)(1/4) .....	232
第179図 P—14 (S = 1/60) .....	233

第180図 P-14出土遺物(1/4).....	234
第181図 井戸3(S=1/60) .....	235
第182図 井戸3出土遺物(1)(1/4).....	236
第183図 井戸3出土遺物(2)(1/4).....	237
第184図 井戸3出土遺物(3)(1/4).....	238
第185図 井戸3出土遺物(4)(1/4).....	239
第186図 井戸3出土遺物(5)(1/4・1/2) .....	240
第187図 井戸3出土遺物(6)(1/4).....	241
第188図 井戸3出土遺物(7)(1/4).....	242
第189図 D-20(S=1/60) .....	243
第190図 D-21(S=1/60) .....	244
第191図 D-21出土遺物(1)(1/4).....	245
第192図 D-21出土遺物(2)(1/4).....	246
第193図 D-21出土遺物(3)(1/4).....	247
第194図 D-21出土遺物(4)(1/4).....	248
第195図 D-21出土遺物(5)(1/4).....	249
第196図 D-21出土遺物(6)(1/4).....	250
第197図 D-21出土遺物(7)(1/4).....	251
第198図 D-21出土遺物(8)(1/4).....	252
第199図 D-21出土遺物(9)(1/4).....	253
第200図 D-21出土遺物(10)(1/6).....	254
第201図 D-21出土遺物(11)(1/6).....	255
第202図 D-21出土遺物(12)(1/4).....	256
第203図 D-22・D-23(S=1/60) .....	257
第204図 P-15・P-16(S=1/60) .....	258
第205図 P-17(S=1/60) .....	258
第206図 P-18(S=1/60) .....	258
第207図 P-19(S=1/60) .....	258
第208図 井戸2(S=1/40) .....	260
第209図 井戸2出土遺物(1)(1/6).....	261
第210図 井戸2出土遺物(2)(1/4).....	262
第211図 井戸2出土遺物(3)(1/4).....	263
第212図 井戸2出土遺物(4)(1/4).....	264
第213図 井戸2出土遺物(5)(1/4).....	265
第214図 井戸2出土遺物(6)(1/4).....	266

第215図 井戸 2 出土遺物(7) (1/4).....	267
第216図 井戸 2 出土遺物(8) (1/4).....	268
第217図 井戸 2 出土遺物(9) (1/4).....	269
第218図 井戸 2 出土遺物(10) (1/6).....	269
第219図 井戸 2 出土遺物(11) (1/4).....	270
第220図 C 地点の遺構に伴わない遺物(1) (1/4).....	272
第221図 C 地点の遺構に伴わない遺物(2) (1/4).....	273
第222図 C 地点の遺構に伴わない遺物(3) (1/4).....	274
第223図 C 地点の遺構に伴わない遺物(4) (1/4).....	275
第224図 C 地点の遺構に伴わない遺物(5) (1/4).....	276
第225図 C 地点の遺構に伴わない遺物(6) (1/4).....	277
第226図 C 地点の遺構に伴わない遺物(7) (1/4).....	278
第227図 C 地点の遺構に伴わない遺物(8) (1/4).....	279
第228図 D 地点遺構配置図 (S = 1/300).....	281
第229図 現代の遺構配置図 (S = 1/300).....	281
第230図 鎌倉時代から江戸時代の遺構配置図 (S = 1/300).....	281
第231図 弥生時代の遺構配置図 (S = 1/300).....	281
第232図 D—24 (S = 1/60) .....	282
第233図 D—24出土遺物 (1/4).....	283
第234図 D—25 (S = 1/100).....	284
第235図 D—25出土遺物 (1/4).....	284
第236図 P—20・D—26 (S = 1/60) .....	285
第237図 P—20出土遺物(1) (1/4).....	286
第238図 P—20出土遺物(2) (1/4).....	287
第239図 P—20出土遺物(3) (1/4).....	288
第240図 P—20出土遺物(4) (1/4).....	289
第241図 D—26出土遺物 (1/4).....	290
第242図 D—27・D—28 (S = 1/60) .....	292
第243図 D—27出土遺物 (1/4).....	293
第244図 D—28出土遺物 (1/4).....	294
第245図 井戸 4 (S = 1/40) .....	295
第246図 井戸 4 出土遺物 (1/4).....	295
第247図 D 地点の遺構に伴わない遺物(1) (1/4).....	296
第248図 D 地点の遺構に伴わない遺物(2) (1/4).....	297
第249図 D 地点の遺構に伴わない遺物(3) (1/4).....	298

第250図 トレンチ内出土遺物 (1/4) .....	303
第251図 当麻丘陵地形及びトレンチ設定図 ( $S=1/1000$ ) .....	304
第252図 トレンチ土層断面図 (T-3, 5, 6) ( $S=1/80$ ) .....	305
第253図 全体遺構配置図 ( $S=1/400$ ) .....	306
第254図 調査終了後の地形図及び建物, 柵列配置図 ( $S=1/400$ ) .....	307
第255図 溝-1, 堀-1, 2 遺構 ( $S=1/50$ ) .....	309
第256図 堀-1 内出土瓦 (1/4) .....	309
第257図 堀-2 内出土遺物 (1/4) .....	310
第258図 土壙, 柱穴内出土遺物 (1/4) .....	311
第259図 丘陵北側遺構配置図 ( $S=1/250$ ) .....	312
第260図 土壙墓, 土壙平・断面図 ( $S=1/40$ ) .....	313
第261図 土壙墓出土遺物 (1/4) .....	314
第262図 建物 I ~ V 平・断面図 ( $S=1/80$ , $S=1/100$ ) .....	315
第263図 丘陵南側遺構配置図 ( $S=1/250$ ) .....	316
第264図 東斜面造成土層内出土遺物 (1/4) .....	318
第265図 表土層出土遺物 (1/4) .....	319

### 表 目 次

表 1 編年対比表 .....	18
表 2 百間川沢田遺跡第1調査区溝一覧表 .....	42
表 3 百間川沢田遺跡出土土器観察表 .....	70
表 4 百間川長谷遺跡出土土器観察表 .....	97
表 5 百間川岩間遺跡出土土器観察表 .....	135
表 6 百間川当麻遺跡出土土器観察表 .....	321

### 図 版 目 次

図版 1 百間川沢田遺跡第1調査区1区遺構検出状況 (東から)	
図版 2-1 D-1・2 遺構検出状況 (東から)	
-2 D-3 出土遺物検出状況 (北西から)	
図版 3-1 D-5 遺構検出状況 (東から)	
-2 D-5 断面図 (東から)	
図版 4-1 井戸出土遺物検出状況	
-2 2区「島状高まり」遺構検出状況 (西から)	
図版 5-1 第2調査区遺構検出状態	

- 2 「島状高まり」遺構周辺南壁面
- 図版 6—1 第3調査区溝及び微高地下り検出状況（西から）
  - 2 第3調査区水田遺構検出状況（西から）
- 図版 7—1 微高地下り断面（北西から）
  - 2 T—6断面（北から）
- 図版 8—1 第4調査区水田検出状態
  - 2 第4調査区畔土層断面
- 図版 9—1 第5調査区東区暗渠検出状況（東から）
  - 2 第5調査区西区全景（南から）
- 図版10—1 第6調査区袋状ピット検出状況（北から）
  - 2 第6調査区溝検出状況（東から）
- 図版11 第1調査区出土遺物
- 図版12 第3調査区出土遺物
- 図版13—1 百間川長谷遺跡1区全景（西より）
  - 2 1区土層写真——水田層と畦畔部分
- 図版14—1 2区建物（東より）
  - 2 5区全景（西より）
- 図版15—1 5区土壙遺物出土状態
  - 2 谷地区遺構検出状態
- 図版16 1区出土遺物
- 図版17 1・5区出土遺物（陶磁器類）
- 図版18 5区・谷地区出土遺物
- 図版19—1 百間川岩間遺跡右岸用水路、丘陵両調査区全景（北東から）
  - 2 右岸用水路調査区遺構検出状況（西から）
- 図版20—1 人骨出土状況（東から）
  - 2 土壙Ⅱ（北西から）
- 図版21—1 井戸（東から）
  - 2 溝状遺構（南から）
- 図版22—1 土壙検出状況（西から）
  - 2 土壙Ⅰ（西から）
- 図版23—1 遺物出土状況（西から）
  - 2 遺物出土状況（西から）
- 図版24 土壙出土遺物
- 図版25 出土遺物 円面硯 須恵器
- 図版26 出土遺物 須恵器

- 図版27 出土遺物 須恵器 土師器
- 図版28 出土遺物 瓦
- 図版29 出土遺物 瓦
- 図版30 出土遺物 瓦
- 図版31—1 丘陵調査区 土壌（北西から）  
—2 丘陵調査区 建物（北から）
- 図版32 丘陵調査区出土遺物
- 図版33 丘陵調査区出土遺物
- 図版34 丘陵調査区出土遺物
- 図版35 百間川当麻遺跡遠景（南東から）
- 図版36—1 A・B地点調査区調査前全景（東から）  
—2 B・C・D地点調査区調査前全景（西から）
- 図版37—1 A地点調査区第1遺構面全景（東から）  
—2 A地点調査区第1遺構面全景（西から）
- 図版38—1 A地点調査区第2遺構面全景（東から）  
—2 A地点調査区第2遺構面全景（西から）
- 図版39—1 A地点調査区第3遺構面全景（東から）  
—2 A地点調査区第3遺構面全景（西から）
- 図版40—1 A地点調査区第4遺構面全景（東から）  
—2 A地点調査区第4遺構面全景（西から）
- 図版41—1 P—2検出状況（北西から）  
—2 P—4・5検出状況（西から）
- 図版42—1 中世墓検出状況（東から）  
—2 中世墓古錢出土状況（西から）
- 図版43—1 井戸1検出状況（北から）  
—2 井戸1全景（北から）
- 図版44—1 井戸1構築状況（北から）  
—2 井戸1掘り方全景（北から）
- 図版45—1 D—7～9, P—8～10検出状況（西から）  
—2 テラス状遺構1・2検出状況（東から）
- 図版46—1 P—9・10検出状況（南から）  
—2 P—11検出状況（南から）
- 図版47—1 C地点調査区全景（東から）  
—2 C地点調査区全景（西から）
- 図版48—1 D—11・12検出状況（東から）

- 2 D—11・12検出状況（西から）
- 図版49—1 D—13検出状況（東から）
- 2 P—13検出状況（東から）
- 図版50—1 H—2 検出状況（北から）
- 2 H—1・2 検出状況（北から）
- 図版51—1 D—16検出状況（北から）
- 2 D—17検出状況（北から）
- 図版52—1 D—18・19, P—14検出状況（西から）
- 2 D—19検出状況近景（南から）
- 図版53—1 P—14検出状況（北から）
- 2 P—14検出状況近景（西から）
- 図版54—1 井戸3 検出状況（北から）
- 2 井戸3 遺物出土状況（西から）
- 図版55—1 D—21, P—17検出状況（西から）
- 2 D—22・23検出状況（北から）
- 図版56—1 P—15・16検出状況（南から）
- 2 P—18検出状況（南から）
- 図版57—1 P—19検出状況（西から）
- 2 C地点調査区柱穴検出状況（西から）
- 図版58—1 井戸2 検出状況1（北から）
- 2 井戸2 検出状況2（北から）
- 図版59—1 井戸2 石組み状況（南から）
- 2 井戸2 曲物検出状況（南から）
- 図版60—1 D地点調査区全景（東から）
- 2 D地点調査区全景（西から）
- 図版61—1 D—24・26, P—20検出状況（西から）
- 2 D—25検出状況（西から）
- 図版62—1 D—24・26・井戸4 検出状況（東から）
- 2 D—27・28検出状況（西から）
- 図版63—1 井戸4 検出状況1（東から）
- 2 井戸4 検出状況2（東から）
- 図版64—1 当麻丘陵部調査区全景（東より）
- 2 当麻丘陵部調査区近景（東より）
- 図版65—1 当麻丘陵部調査区近景（北より）
- 2 丘陵部上段より下段を望む（北々東より）

- 図版66—1 丘陵部下段より上段を望む（南西より）  
—2 遺構全景航空写真（西上空から）
- 図版67—1 東西トレンチ（T—6）（東より）  
—2 トレンチ（T—3）土層断面（北より）
- 図版68—1 トレンチ（T—5）土層断面（北より）  
—2 トレンチ（T—6）土層断面（北より）
- 図版69—1 丘陵北端部、堀—1，2，溝—1全景（南西より）  
—2 丘陵北端部、堀—1，2，溝—1全景（南より）
- 図版70—1 堀—1，2，溝—1全景（西北西より）  
—2 丘陵北側遺構全景（南西より）
- 図版71—1 土壙墓全景（東から）  
—2 1～4号土壙墓近景
- 図断72—1 建物Ⅱ、土壙墓全景（北西より）  
—2 建物Ⅲ全景（南西より）
- 図版73—1 丘陵上段西側遺構全景（南より）  
—2 丘陵南東部遺構全景（北より）
- 図版74—1 丘陵南側遺構全景（北々東より）  
—2 建物Ⅴ全景写真（北東より）
- 図版75 右岸用水調査区出土遺物(1)
- 図版76 右岸用水調査区出土遺物(2)
- 図版77 右岸用水調査区出土遺物(3)
- 図版78 右岸用水調査区出土遺物(4)
- 図版79 右岸用水調査区出土遺物(5)
- 図版80 堀—1、柱穴、土壙内出土遺物
- 図版81 堀—2、土壙墓出土遺物
- 図版82 トレンチ、東斜面造成土層内出土遺物

# 第1章 地理的・歴史的環境

百間川は江戸時代（寛文年間）に、津田永忠によって岡山城下を旭川の洪水から守るため築造された一大人工河川である。岡山市竹田から分かれた旭川放水路（百間川）は、旭川左岸を南東に流走して原尾島付近で東に向きを変え、操山山塊の北側を東進し、米田で再び南に流路を変え、沖元で児島湾に注ぐ。その幅200～300m、流程約13kmにおよぶものである。

百間川が位置する旭川の左岸平野（旭東平野）は、北に竜の口山系、東に山王山、南に操山山塊をひかえた肥沃な水田が展開する一大穀倉地であるが、近年市街化の波に押され、その景観は急激に変貌しつつある。

岡山平野は今から約7000年前、縄文時代前期の海進をピークとして、それ以降の海退及び旭川の堆積物によって形成された沖積平野である。この旭川も現在は一流路にまとめられているが、古くは數条に分かれており、また幾筋もの支流が平野一帯に流走していたらしく、それら旧河道の両岸にはいくつもの自然堤防が形成されている。

岡山付近で確認されている遺物のうち、最も古いものとしては、操山旗振台北部遺跡（註1）出土のナイフ形石器がある。これは後期旧石器時代のもので、現在のところこれに前後する時期のものはない。

縄文時代の遺跡は、丘陵に散布する後期の朝寝鼻貝塚（註2）と他に数カ所石器散布地が存在しているが、新たに百間川改修工事に伴い、沢田遺跡（註3）から縄文時代中期の土器片2片、及び同後期の土器片10数片を採集した。この中期の土器片は磨滅が激しく、上流域あるいは丘陵部からの流入の可能性も考えられるが、後期の土器片においては残りもよく、また昭和34年の国道2号線百間川橋建設の際にも出土していることなどから、岡山平野においてはこの時期から沖積地における集落の開始が考えられる。

縄文時代晩期の遺跡は、いずれも弥生時代につながる複合遺跡である。調査で明らかにされた例としては、津島遺跡（註4）、百間川原尾島遺跡、同沢田遺跡、雄町遺跡（註5）などがある。百間川原尾島遺跡においては、遺構の性格を明らかに出来なかったものの縄文時代晩期の柱穴状土壙を検出している。津島遺跡は縄文時代晩期～弥生時代にかけての遺物及び弥生時代の水田遺構、住居址、高床倉庫、貯蔵穴などの遺構が検出されている。雄町遺跡は縄文時代晩期～平安時代にかけての遺物及び、旧河道・溝・住居址・土壙墓などの遺構が検出されており、特に、弥生時代中期の水利施設が明らかにされるとともに居住区と墓域が明確に区別されていることが判明した。

弥生時代の中期の遺跡は、前述の遺跡の他に南方遺跡（註6）、赤田遺跡（註7）、乙多見遺跡（註8）などがある。南方遺跡からは人骨及び土壙墓、灰穴などが検出されており、赤田遺跡からは、高杯形土器で蓋をした甕棺墓が出土している。百間川兼基遺跡は弥生時代中期を中心として、古墳時代



1. 百間川原尾島遺跡 2. 百間川沢田遺跡 3. 百間川兼基遺跡 4. 百間川当麻遺跡 5. 兼基遺跡  
6. 雄町遺跡 7. 乙多見遺跡 8. 赤田遺跡 9. 南方遺跡 10. 一本松古墳 11. 神宮寺山古墳  
12. 唐人塚古墳 13. 儀前車塚古墳 14. 山王山古墳 15. 沢田大塚古墳 16. 金蘿山古墳 17. 旗振台  
古墳 18. 操山103号墳 19. 操山106号墳 20. 澳茶臼山古墳 21. 網浜茶臼山古墳 22. 操山109号墳  
23. 網浜廃寺 24. 幡多廃寺 25. 成光廃寺 26. 賞田廃寺 27. 井寺廃寺

第1図 百間川周辺遺跡分布図 (50,000)

に及ぶ複合遺跡であるが、特に弥生時代中期の土器片とともにガラス滓が多量に出土しており、また1間×2間～5間までの建物を20数棟検出している。なお当遺跡の南側に位置する操山の谷部からは3個の銅鐸が出土している（注9）。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡は、急激にその遺跡数をふやし、当平野に形成された微高地の大半は集落が営まれた可能性が強い。一方、百間川沢田遺跡では、弥生時代後期終末までに洪水によって埋没した水田が明らかになった。これによると、微高地縁辺部及び旧河道上に水田が形成されており、前者は $10m^2$ ～ $40m^2$ 前後の小規模な田面積であるのに対し、後者は $2000m^2$ 前後とその規模も大きい。また最近の調査では百間川原尾島遺跡から弥生時代後期前半に埋没した水田も明らかにされつつある。

古墳時代の遺跡は、百間川原尾島遺跡、同兼基遺跡などがある。兼基遺跡からは、堅穴住居址群とともに、3間×3間の倉庫群が検出されている。一方古墳についていえば、平野の北にある竜の口山系には13面の舶載鏡を出土した備前車塚古墳（註10）が、南にあたる操山山系には網浜茶臼山古墳、湊茶臼山古墳、金蔵山古墳（註11）、東にあたる山王山には、山王山古墳群がある。これらの丘陵上には、これ以降後期古墳も含め200基をはるかに越える古墳が確認されている。

古墳時代以降の調査にかかる遺跡としては賞田廃寺（註12）、幡多廃寺（註13）などの寺址がある。他に百間川当麻遺跡の調査では多量の瓦器が出土するとともに、古代の倉庫群及び中世の建物群を検出している。

#### 註

- 註1 鎌木義昌「第1編原始時代」『岡山市史』古代編 岡山市役所, 1962
- 註2 註1に同じ
- 註3 岡山県教育委員会の昭和53年度の調査において出土している。
- 註4 『岡山県津島遺跡調査概報』岡山県教育委員会1970
- 註5 「雄町遺跡」「埋蔵文化財発掘調査報告」岡山県教育委員会1972
- 註6 『南方遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会1971
- 註7 『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会1976
- 註8 正岡睦夫「岡山市乙多見における構改修工事に伴なう出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告』1973
- 註9 鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」「日本農耕文化の生成」1961
- 註10 註1に同じ
- 註11 西谷真治・鎌木義昌「金蔵山古墳」倉敷考古館1959
- 註12 『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会1971
- 註13 註7に同じ

表1 編年対比表

遺跡 時代		百間川	雄町	上東・川入
弥生時代	前期	津島	百間川前期I	
		門田	百間川前期II	雄町1
			百間川前期III	雄町2
				船山2
	中期	南方	百間川中期I	高田
		菰池		雄町3
			百間川中期II	船山5
				菰池
		前山II		雄町4
	後期	仁伍	百間川中期III	前山東
				雄町5
				雄町6
		上東	百間川後期I	上東・鬼川市0
				雄町7
	後期		百間川後期II	雄町8
				雄町9
				雄町10
		グラント上層		+
			百間川後期III	上東・鬼川市II
古墳時代	前期	酒津	百間川後期IV	雄町11
			百間川古墳時代I	雄町12
			百間川古墳時代II	雄町13
			百間川古墳時代III	雄町14
		王泊六層		雄町15
				川入・大溝上層
				+

## 第2章 調査の経緯

### 第1節 調査経過

この報告に掲載する遺跡を上流から列記すると、百間川沢田遺跡、同長谷遺跡、同岩間遺跡、同当麻遺跡である。今回報告するのは、それら各遺跡を縦断（もしくは横断）する用水路（右岸側）にかかる部分と、削平される丘陵にかかる部分、及び、調査中に発見した、沢田地区内の微高地部分である。今回の報告書では、用水路に關係するものが多く、報告書の主要を成す。それだけに、遺跡の調査範囲は、幅は細く、延長距離の長い帶状のものとなり、遺跡を理解するにも難かしい一面がある。右岸用水路、及び丘陵部にかかる確認調査は、昭和52年5月6日に着手し、5月25日に終了した。その結果に基づきこの報告書に記述する各調査区が設定された。調査は、工事工程に応じて、特に右岸用水路は、昭和53年度全面開通を目指して調査工程が組まれた。右岸用水路、及び丘陵部の調査が、昭和53年12月までに集中するのは、そのためであり、工事工程の緊急度に従って調査工程を編成した。百間川沢田遺跡右岸用水路調査区は、7調査区に分けて調査した。この調査区の遺跡名は、『旭川放水路百間川改修に伴う発掘調査』第1冊（註1）で示したように、百間川沢田遺跡とするものである。その報告書の作成される以前は、第1・第2調査区は、第2微高地右岸用水路調査区であり、第3調査区は、沢田第1散布地（右岸用水路）調査区（西部分）、第4調査区は、沢田第1散布地（右岸用水路）調査区（東部分）、第5調査区は、沢田丘陵部調査区、第6調査区は、沢田第2散布地（右岸用水路）調査区と呼称されていた（註2）。

第1調査区は、昭和53年1月5日に調査に着手し、同年3月31日終了した。調査区は、国道2号線より下流に向けて一直線に延びる旧堤防と、国道2号線よりやや下流で、旧堤防より分れて左にゆるく曲る新堤防が一部築堤されている。その新・旧両堤防の交点から始まる。調査は、その交点に始まって、新堤防に沿って延長約117m、巾約6mの間を実施した。（調査員 松本、内藤 調査補助員 平井）

第2調査区は、第1調査区に続く部分である。調査区の区切りは、百間川内に存在する用水路をもってした。調査区の延長は84mで、やはり、用水路をもって境とした。調査区の幅は、用地杭より内側に3mの範囲である。発掘調査は、11月1日に着手し、11月20日に終了した。（調査員 井上、福田）

第3調査区は、第2調査区に続く部分で、延長210m、幅3mの区間を調査した。発掘調査は、10月31日に着手し、12月27日終了した。（調査員 岡田、中野）

第4調査区から、第6調査区までは、同一の調査員が、継続的に調査した。調査は、まず丘陵部分



第2図 百間川周辺地形図及び調査区設定図 ( $S = \frac{1}{10,000}$ )

から着手し、続いて丘陵の裾部、及び下流側を調査した。それが終了すると丘陵の上流側の調査を実施した。第4調査区は、丘陵の上流側に当るもので、市道を界に第3調査区に続く。第5調査区は、削平される丘陵部分であり、第6調査区は、用水路部分の調査区で、第4調査区に続いて下流側である。つまり、第4・第6調査区が右岸用水路にかかわる調査区であり、第5調査区の丘陵の裾を迂回する様に調査した。第5調査区は、堤防の一部として削平される丘陵部分の調査区である。用水路部分の調査範囲は、幅3mで、延長距離は、第4調査区が90m、第6調査区が110mである。第5調査区の調査面積は、1,900m<sup>2</sup>である。これら3調査区は、継続的に調査したため、1調査区の期間を区切ることは難かしい。そこで、各調査区ごとに、調査の着手日を示すと、第5調査区が、10月3日、第6調査区が、10月19日、第4調査区が11月27日であり、12月27日に全てを終了した。(調査員 下澤、江見)

第7調査区は、工事中発見により緊急に発掘調査を実施した地区である。遺跡を発見したのは、工事のため迂回して掘られた用水路の断面においてである。調査は、工事着工後のことであったため、調査に必要な時間が十分に確保できないため、各班の調査員を動員して、日曜・祭日を返上して行った。調査は、10月9日に着手し、同月13日に終了した。なお、10月9日には、保護対策委員会を緊急に開催し、その取り扱いを協議した結果、慎重に対応するようにとの意見が出された。

百間川長谷遺跡は、用水路部分と、丘陵部分とを調査した。用水路部分は、1期と2期に分けて調査した。1期の調査は、丘陵の裾から下流へ80mの範囲であり、調査幅は、用地杭から内へ6mの範囲であるが、用地界に水路が存在したために、実質的には、幅4mを調査した。発掘調査は、4月10日に着手して、5月22日に終了した。2期の調査は、1期の調査中に新たに発見した場所である。そのため、調査は、場所と期間を改めて設定して着手することとした。発掘調査は、その協議が整った後に、協議の結果に基づいて、6月14日に着手し、7月7日に終了した。調査面積は180m<sup>2</sup>を測る。(調査員 井上、浅倉)

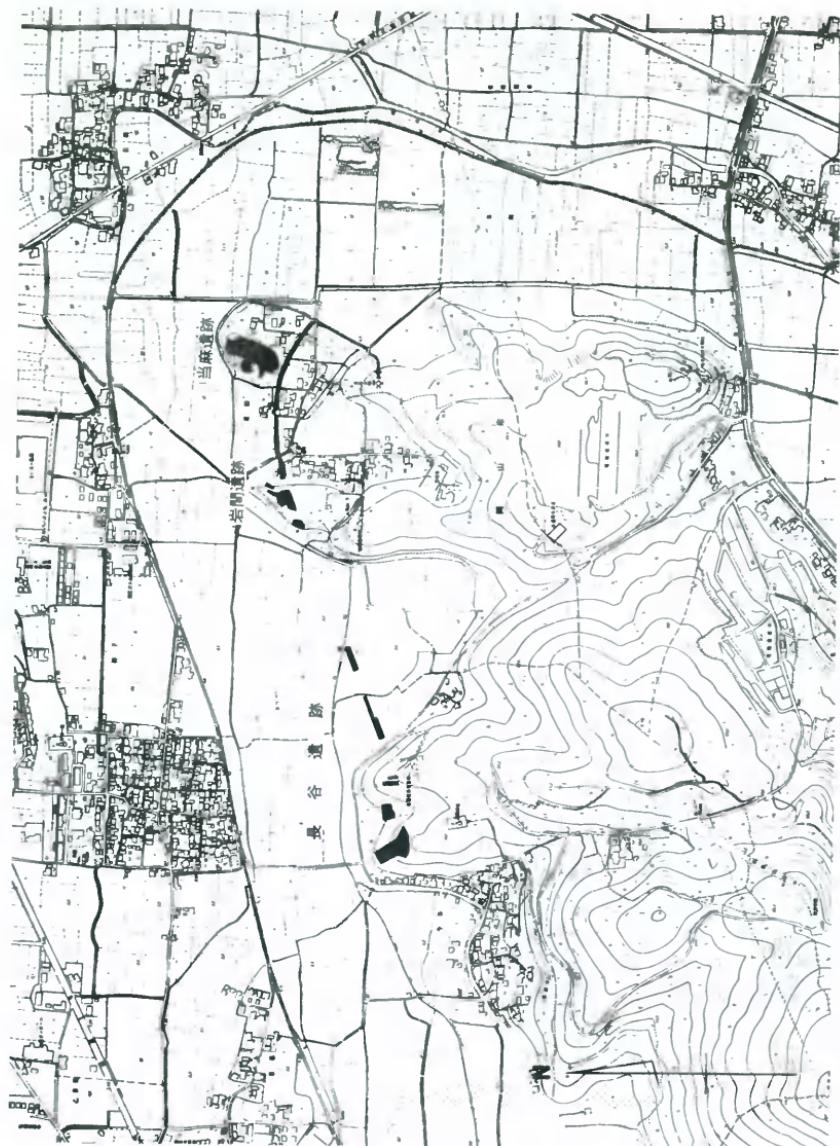
丘陵部の調査は、東尾根、西尾根と、その間の谷部とに分けて調査した。調査面積は、東尾根、西尾根、谷部を合計して、2,200m<sup>2</sup>を測る。発掘調査は、11月21日に着手して、12月7日に終了した。(調査員 井上、福田)

百間川岩間遺跡は、用水路部分と、丘陵部分とを調査した。用水路部分の調査区は、百間川当麻遺跡と接するもので、岩間・当麻の字界に在る市道を界に、西へ山裾までである。調査範囲は、延長40m、幅6mである。用水路部分の調査は、4月3日に着手し、7月13日に終了した。

丘陵部分は、削平される1,500m<sup>2</sup>を調査した。発掘調査は、昭和54年3月1日から13日まで確認調査を行い、その結果に基づいて、同月19日から、31日の間に本調査を実施した。(調査員 下澤、江見)

百間川当麻遺跡は、用水路部分と、丘陵部分を調査した。用水路部分は、岩間遺跡の用水路部分と接して東へ240mを調査した。調査区の幅は6mで調査した。発掘調査は、4月3日に着手し、9月に終了した。(調査員 松木、福田 調査補助員 島崎)

丘陵部の調査は、用水路の調査中に注目され始めたもので、それに伴い、確認の調査を行った結果、遺構の存在することが確実となつたために調査を実施したものである。調査は、丘陵のほぼ全面



第3図 百間川周辺地形図及び調査区設定図 ( $S = \frac{1}{10,000}$ )

## 第1節 調査経過

を調査するもので、調査面積は2,300㎡を測る。調査は、用水路の調査に継続して実施し、9月7日に着手して、11月10日に終了した。(調査員 松本、二宮 調査補助員 島崎)

百間川当麻遺跡は、当初右岸用水路部分のみと考えられていたが、右岸用水路の調査の過程で、丘陵部に遺構の存在する可能性が強くなってきた。また、丘陵部の東側平地においても同様の可能性が強まってきた。そこで、遺跡確認のための調査を行い、遺跡の存在することを確認した。その後、建設省との協議を経て、丘陵部の調査に着手した。

### 註

- 註1 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39 岡山県教育委員会
- 註2 『岡山県埋蔵文化財報告』8 1978.3 岡山県教育委員会  
『岡山県埋蔵文化財報告』9 1979.3 岡山県教育委員会

## 第2節 日誌抄

昭和53年

1月5日

百間川沢田遺跡右岸用水路第1調査区の調査に着手する。

3月31日

百間川沢田遺跡右岸用水路第1調査区の調査を終了する。

4月3日

百間川岩間遺跡、同当麻遺跡右岸用水路調査区の調査に着手する。

4月10日

百間川長谷遺跡右岸用水路調査区の調査に着手する。

5月22日

百間川長谷遺跡の範囲が拡大することが判明し、建設省との協議が終了するまで一時調査を中断する。

6月14日

百間川長谷遺跡の調査を再開する。

7月7日

百間川長谷遺跡右岸用水路調査区の調査を終了する。

7月13日

百間川岩間遺跡右岸用水路調査区の調査を終了する。

8月22日

百間川当麻遺跡の範囲の拡張に伴い、調査区を西へ延長する。

9月7日

百間川当麻遺跡丘陵部調査区のトレンチ調査に着手する。

9月13日

百間川当麻遺跡右岸用水路調査区の調査を終了する。

9月27日

百間川当麻遺跡丘陵部調査区のトレンチ調査において造構を確認したため全面調査に着手する。

10月3日

百間川沢田遺跡丘陵部調査区（第5調査区）の調査に着手する。

10月7日

新発見の沢田微高地（第7調査区）の取り扱いについて緊急調査員会議を開く。

10月9日

同調査区の調査に着手し、保護対策委員会を開催し、その取り扱いについて協議する。

10月12日

百間川沢田遺跡の緊急対応調査区の調査を終了する。

10月19日

百間川沢田遺跡丘陵部調査区の調査を終了し、同第6調査区の調査に着手する。

10月31日

百間川沢田遺跡第3調査区の調査に着手する。

11月1日

百間川沢田遺跡第2調査区の調査に着手する。

11月10日

百間川当麻遺跡丘陵部調査区の調査を終了する。

11月20日

百間川沢田遺跡第2調査区の調査を終了する。

11月21日

百間川長谷遺跡丘陵部調査区の調査に着手する。

11月27日

百間川沢田遺跡第4調査区の調査に着手する。

百間川長谷遺跡丘陵部調査区の調査を終了する。

12月12日

百間川沢田遺跡右岸用水路第3調査区の調査を終了する。

12月27日

百間川沢田遺跡右岸用水路第4調査区の調査を終了する。

昭和54年

3月1日

百間川岩間遺跡丘陵部調査区の確認調査に着手する。

3月13日

百間川岩間遺跡丘陵部調査区の確認調査において遺構を確認して調査を終了する。

3月19日

百間川岩間遺跡丘陵部調査区の本格調査に着手する。

3月31日

百間川岩間遺跡丘陵部調査区の調査を終了する。

### 第3節 調査の構成

発掘調査は建設省中国地方建設局と委託契約を締結した岡山県教育委員会があたり、調査にあたる専門的指導及び助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた下記の方々に「旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」（以下、対策委員会）の委員を委嘱した。

旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会委員（あいうえお順）

岡山大学	小野 昭
岡山理科大学	鎌木義昌
岡山市立岡輝中学校	角田 茂
岡山市教育委員会	出宮徳尚
岡山大学	春成秀爾
岡山女子看護専門学校	水内昌康

昭和52年度

岡山県教育委員会	
文化課長	飛田真澄
課長補佐	塩見 篤
主幹	小川佳彦
文化財主幹	難波 進
文化財二係長	光吉勝彦
文化財保護主査	葛原克人（調査担当）
主事	小倉 昇（庶務担当）
文化財保護主事	伊藤 晃（調査担当、12月まで）
同	松本和男（調査担当、1月～3月まで）
同	柳瀬昭彦（調査担当）
主事	浅倉秀昭（ 同 ）
同	藤井守雄（庶務担当）
同	江見正己（調査担当）
同	中野雅美（ 同 ）
同	内藤善史（ 同 ）
調査補助員	平井泰男

昭和53年度

文化課長	飛田真澄
課長補佐	吉光一修
主幹	小川佳彦

### 第3節 調査の構成

文化財主幹	難波 進
主事	小倉 昇
文化財二係長	光吉勝彦
文化財保護主査	河本 清（デスク担当）
同	正岡睦夫（調査担当）
文化財保護主事	下澤公明（同）
同	井上 弘（同）
同	松本和男（同）
同	岡田 博（同）
同	高畠知功（同）
同	二宮治夫（同）
同	浅倉秀昭（同）
同	福田正継（同）
同	江見正己（同）
主事	藤井守雄（事務担当）
同	中野雅美（調査担当）
同	内藤善史（同）
調査補助員	島崎 東
同	堀川 純

## 第3章 百間川沢田遺跡

百間川沢田遺跡は、岡山市沢田に所在する。遺跡の範囲（註1）は、字名の「沢田」とほぼ一致するものである。この沢田遺跡は、国道2号線百間川橋の下流に展開するもので、南側は、操山山塊に接する。北側には、竜の口山山塊までの間に広い平野が開けている。遺跡地は、第2微高地と仮称されていた調査区である。

百間川沢田遺跡は、昭和51年度の確認調査において、3つの大きな微高地を発見していた内一つである（註2）。確認調査においては、この微高地の存在は確かめていたが、その範囲については不明であった。そこで、昭和52年に、右岸用水路にかかる確認調査を実施したところ、数ヶ所で遺跡の存在することが判明した。その確認調査に基づき、第2微高地（右岸用水路）、沢田第1散布地、同第2散布地、沢田丘陵と仮称される調査区が設定された。それらを、今回報告する調査区と対応させると、第2微高地（右岸用水路）が、第1・2調査区、沢田第1散布地が、第3・4調査区、沢田第2散布地が、第6調査区、沢田丘陵が、第5調査区となる。この調査区の設定は、調査時期、調査員及び調査期間等の関係においてなされたものである。その後、第5調査区の北側において、工事中微高地を発見した。同所は、工事工程との関係もあって、全調査員を動員するような体制で、緊急に調査を実施した。この緊急対応の調査区を第7調査区とした。

百間川沢田遺跡の右岸用水路部分で調査した遺構について概要を記すと、まず、水田遺構の検出をあげることができる。水田遺構を検出したのは、第1～4調査区においてである。水田遺構は、微高地上及びその縁辺部分に造られたものと、低湿地部分に造られたものの二形態が見られる。前者は、各調査区で、後者は、第2調査区と、第3調査区の間に相定される。

「島状高まり」遺構は、第1・2・4調査区で検出している。この遺構については、その性格は、まだ十分には解明されていないが、微高地上の水田遺構に伴って検出されている。その形状は、第1・4調査区で検出しているように梢円形、もしくは不正円形を呈するものと、第2調査区で検出している「土手」状のものとがある（註3）。他の遺構としては、古墳時代の井戸、溝、弥生時代の溝、袋状土壤等を検出している。

今回報告する調査区は、第1調査区が、幅6mで、第2～4・6調査区は、幅3mで調査した。そのため、平面的に広がり等を確認することができず、特に水田遺構などは、その存在することは確認したが、その性格は十分には解明できなかったことなど、問題点はあるが、以下各章で、調査結果について報告したい。

### 註

註1 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」39 岡山県教育委員会, p.25.

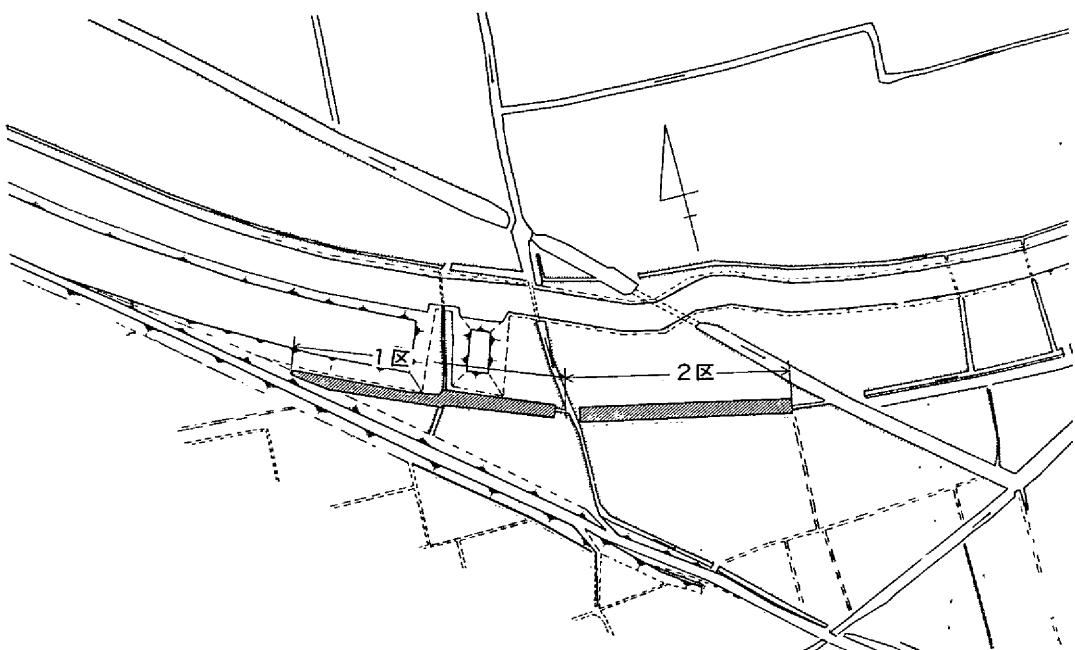
註2 「百間川遺跡第一次調査概報」岡山県教育委員会, 昭和52年3月

註3 本報告書第7章第1節に、水田遺構について述べているので、同章を参照していただきたい。

## 第1節 第1調査区

当調査区は国道2号線百間川橋の約150m下流で、右岸堤防に沿った東西に細長い調査区で、百間川沢田遺跡の一部にあたる。調査区は、現代の農業用水路によって分断された西側を第1区とし、東側を第2区とした。調査は、まず重機により造成土及び表土層を排除した後、遺構検出と平行して土層断面観察を行なった。両壁の土層観察により、1区の東半から2区にかけて、洪水砂により埋没した水田址と「島状高まり」遺構、及び溝状遺構が、1区の西半で微高地と溝状遺構が確認された。その他に当調査区において検出した遺構としては、井戸状遺構・土壙・柱穴等がある。

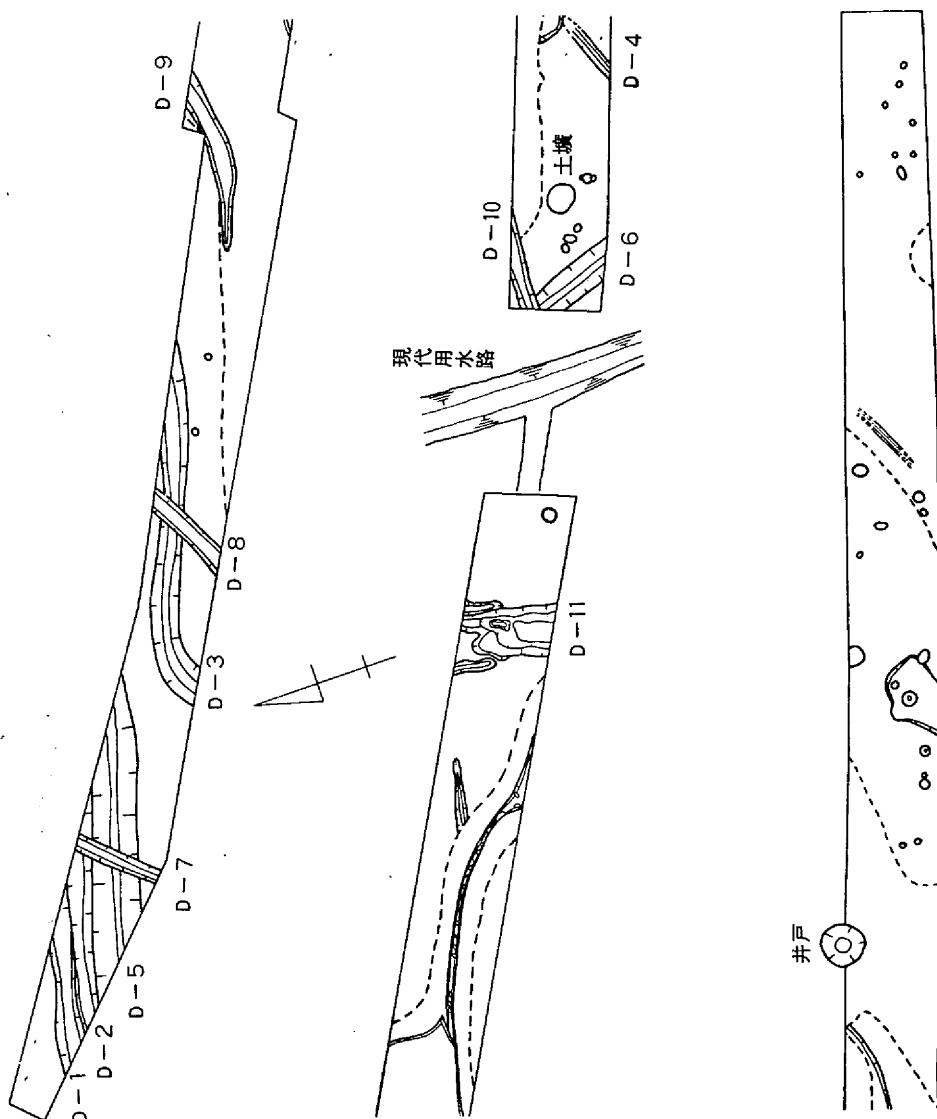
当調査区で検出された井戸状遺構及び、土壙は、古墳時代前期、「島状高まり」遺構は弥生時代後



第4図 百間川沢田遺跡第1調査区地形図及び調査区設定図 ( $S = \frac{1}{2,000}$ )

期末、溝状遺構は弥生時代中期と考えられるものが4本、後期と考えられるものが2本、古墳時代と考えられるものが5本あった。特に「島状高まり」遺構は、円形と土手状を呈するものの2形態が確認されている。出土遺物としては弥生時代中期末～古墳時代後期の土器及び、石器、鐵器、竹製品等がある。特にD-3では百・中・Ⅲの土器が、井戸状遺構からは百・古・Iの土器が一括出土している。また、鐵製の摘鎌が洪水砂層中から出土したことは注目すべき事実である。

なお、当調査区において水田址が検出されたが畔を確認することはできなかった。 (松本)

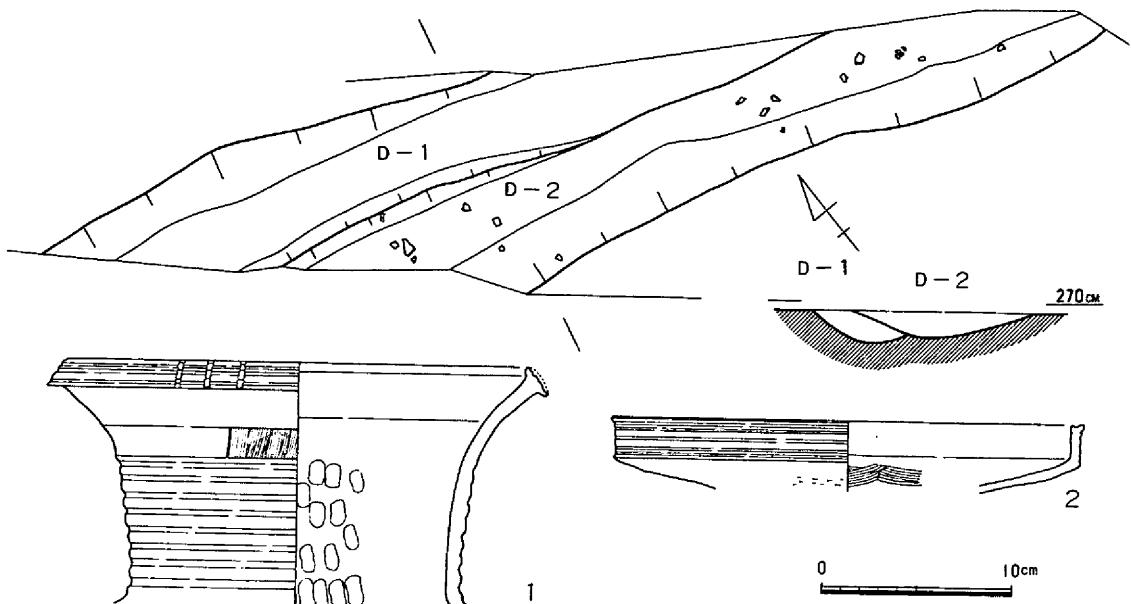
第5図 遺構配置図 ( $S = \frac{1}{300}$ )

## 溝-1・溝-2

D-1・D-2とも第1区の西端部分において検出された溝で、D-2がD-1を切っている。D-1・D-2ともほぼ東一西方向に走っており、底のレベルは、D-1が海拔239cm、D-2が海拔242cmで、D-1の方がやや低く、検出した範囲内では西に向かって数cm低くなっている。

D-1の幅はD-2によって切られているため明らかではなく、深さは検出面より20~25cmを測る。

D-2は、幅約150cm・深さ15~20cmを測り、D-1より浅い。



第6図 D-1・2 平・断面図 ( $\frac{1}{60}$ ) 及びD-1 出土遺物

D-1, D-2とも埋土は灰褐色粘質土の1層であるが、D-2の方がD-1よりやや灰色が強く粘質が弱い。

出土遺物は、D-1から土器が少量出土したのみで、D-2からは出土しなかった。

D-1の埋没時期は、出土した土器から百・中・Ⅲと考えられる。

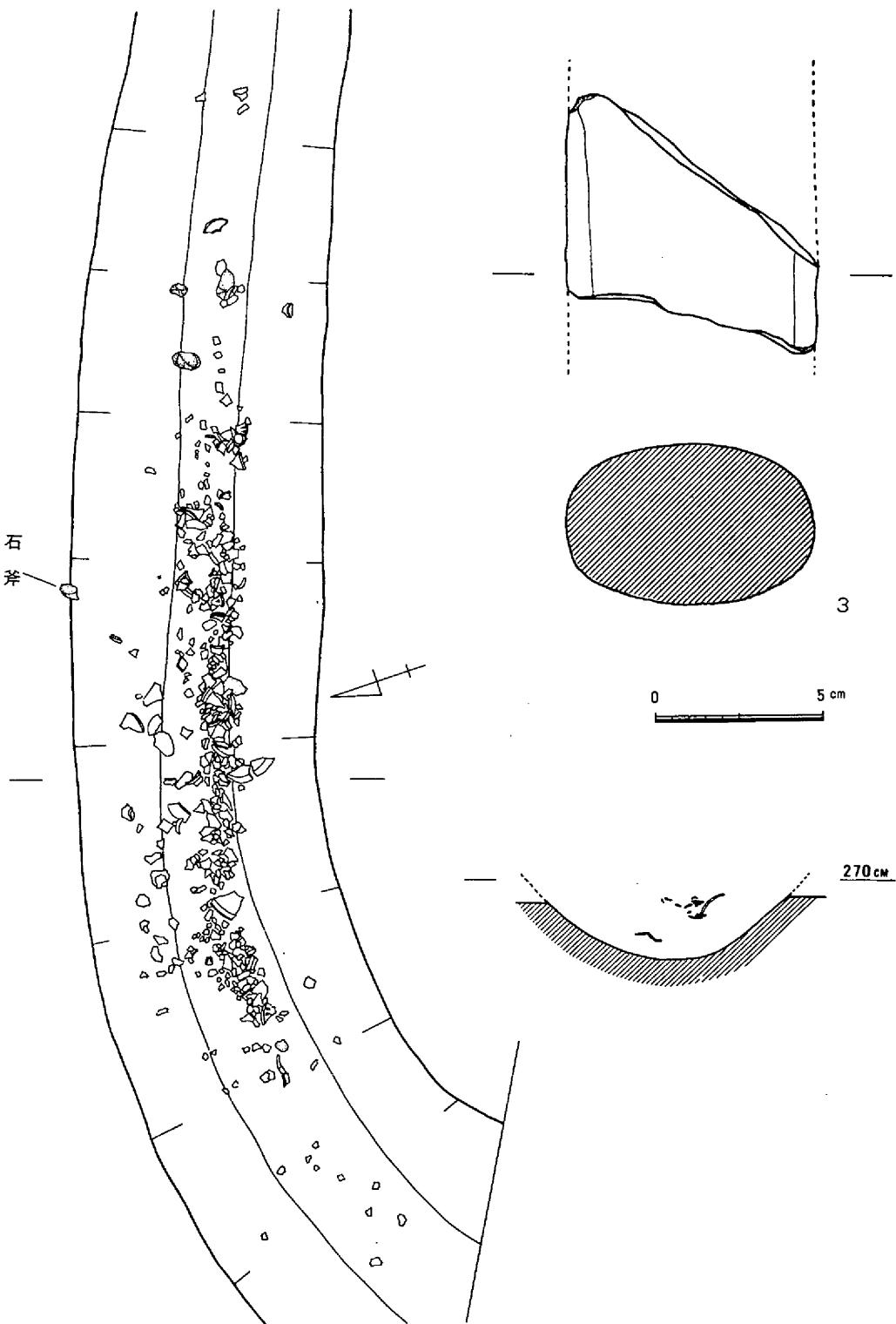
### 溝-3

第1区の西寄りの部分で検出された溝である。ほぼ東—西方向に走り、その西端付近より南方向へ徐々に曲っている。幅100~130cm、深さ約30cmを測り、底のレベルは海拔235cm前後のはば一致した数値を示しており、流走方向は不明である。埋土は、灰褐色粘質土の1層である。

出土遺物のうち土器（第8図4~20）は、台付直口壺・甕・高杯・器台等で、その多くは小片である。これらの土器の殆どは検出した範囲内の中央部分にまとまって出土しており、拳大の数個の石と共に一挙に廃棄された状況を示している。

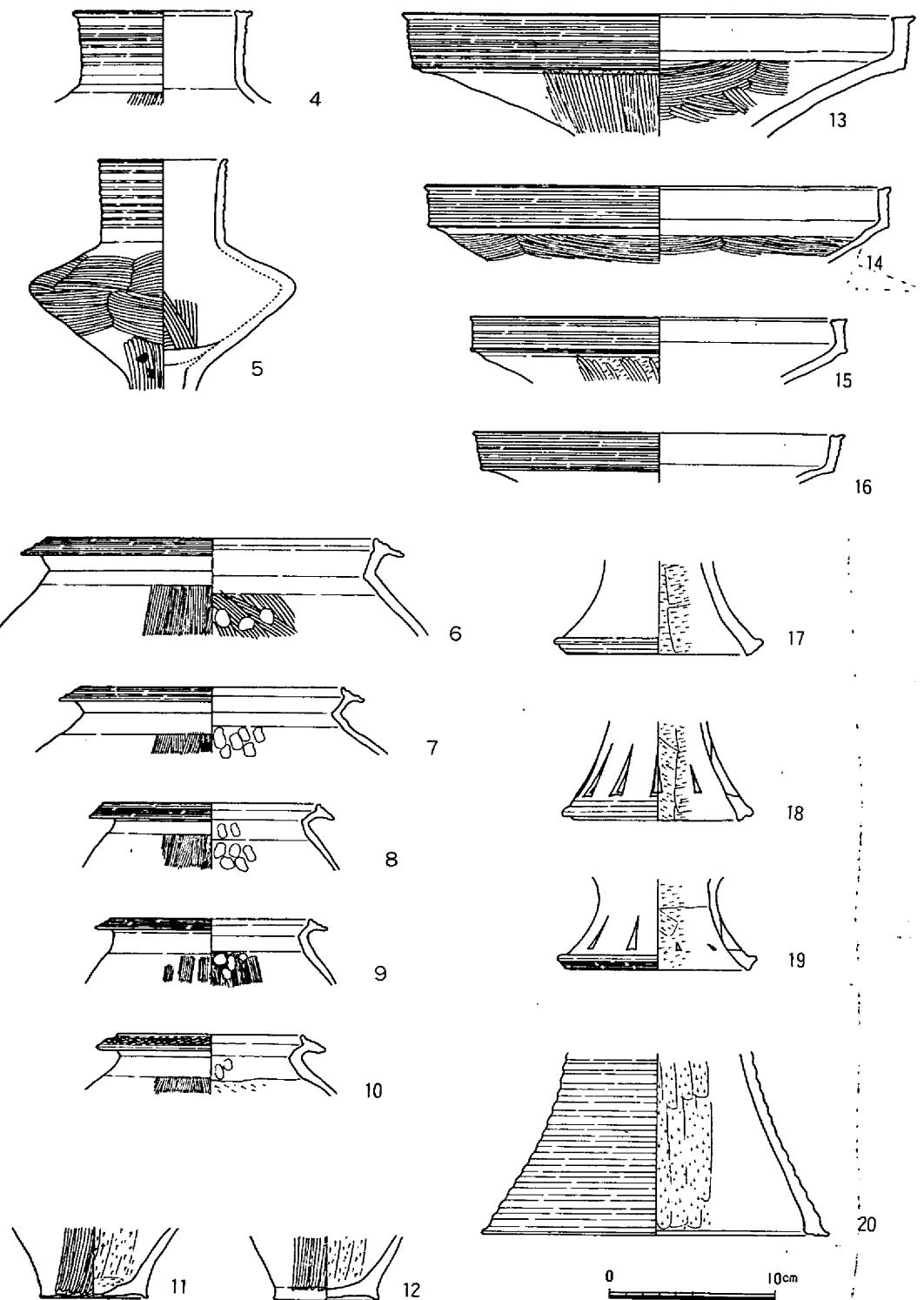
3は、大型蛤刃石斧の破損品で、溝の中央付近の北側の肩口より出土した。現存部分は、最大長6.2cm、幅7.5cm、厚さ4.9cmを測る。図の左上と右下の部分には破損後叩き石に利用したと思われる痕跡が観察できる。

この溝の埋没時期は、出土遺物から百・中・Ⅲと考えられる。

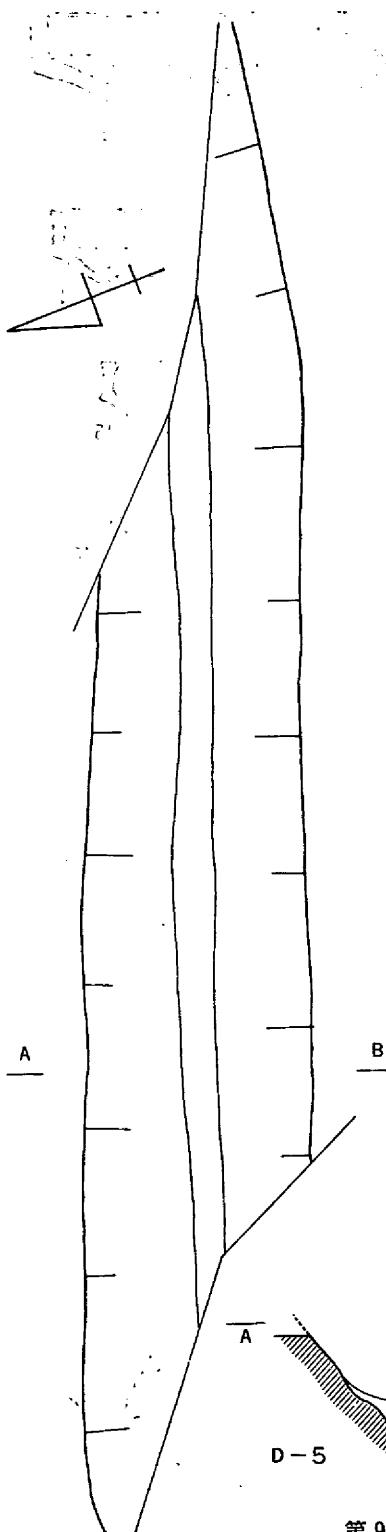


第7図 D-3 平・断面図 ( $\frac{1}{30}$ ) 及び出土遺物 (その1)

第3章 百間川沢田遺跡



第8図 D-3 出土遺物（その2）



## 溝-4

第2区の西部、灰褐色粘質土面において検出された溝である。検出された溝は幅約50cm、深さ14cm前後を測る。底のレベルは海拔約255cmである。埋土は、黄灰褐色粘質土が1層堆積している。

時期については、出土遺物が殆どないため明らかではないが、D-1・D-2・D-3と近い時期と推定できる。

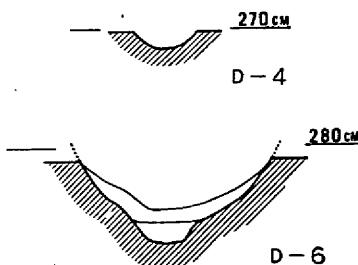
## 溝-5

第1区の西端部においてD-1・D-2の南に接してほぼ東一西方向に検出された溝である。幅160～180cm、深さ約90cmを測り、底のレベルは、海拔215cm前後ではほぼ一致しており流走方向は不明である。断面形はV字に近い形状を示し、底より約30cmの高さに段が認められる。埋土は3層あり、下層から灰色粘土が約10cm、続いて炭混りの灰色粘土が約20cm、そして最後に洪水時の砂と考えられる黄褐色微砂が約60cm堆積している。

出土遺物は、第2層及び第3層中より土器が少量出土したがいずれも細片で図示することができなかった。これらの土器から、この溝は、百・後・IVごろまで機能し、その後洪水によって埋没したものと考えられる。

## 溝-6

第2区の西端部に検出された溝で、北一南方向に走り、北端部の一部はD-10によって切られている。幅約150cm、深



第9図 D-5平・断面図 及び D-4・6断面図 ( $\frac{1}{60}$ )

### 第3章 百間川沢田遺跡

さ70cm前後を測る。底のレベルは海拔約205cmで、当調査区において検出された溝の中では最も低い数値を示している。流走方向は不明である。溝の断面形はV字に近い形状を示し、底より約15cmの高さに段が認められる。埋土は3層あり、下層から灰色粘土が約15cm、続いて灰色粘土混りの灰褐色微砂が約10cm、そして最後に洪水時の砂と考えられる黄褐色微砂が約45cm堆積している。これらの状況は明らかにD-5との類似性を示しており、同一の溝の可能性も含め何らかの関連を考えることができる。

出土遺物が殆ど無く時期は明らかではないが、埋没時期については、洪水時の砂の堆積により百・後・IVと考えられる。

#### 溝-7

第1区の西端部分において、D-2、D-5を切って検出された溝で、ほぼ南西—北東方向に走る。検出された溝は幅約70cm、深さ25cm前後を測る。底のレベルは海拔約285cmで、流走方向は不明である。埋土は、暗褐色粘質微砂が1層である。

出土遺物は、土器の小片が少量出土しているのみである。時期は、百・古・Iと考えられる。

#### 溝-8

第1区の中央よりやや西寄り部分において、D-3を切って検出された溝で、ほぼ南西—北東方向に走る。幅約85cm、深さ25cm前後を測る。底のレベルは、海拔約280cmで、流走方向は不明である。埋土は、暗褐色粘質微砂が1層である。

出土遺物は、土器の小片が少量出土したのみである。時期は、百・古・Iと考えられる。

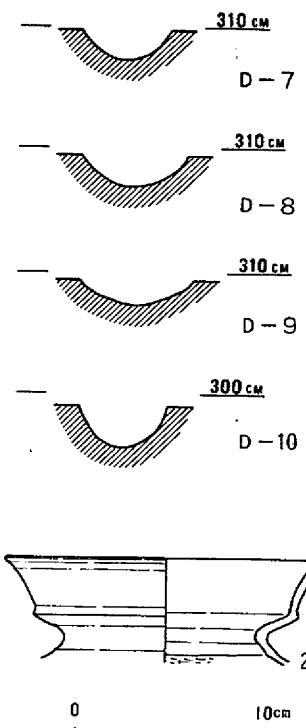
#### 溝-9

第1区の中央部分において検出された溝で、ほぼ東—西方向に走る。最大幅90cm、深さ20cm前後を測る。底のレベルは、海拔約285cmで、流走方向は不明である。埋土は、暗褐色粘質微砂が1層である。

出土遺物は、土器の小片が少量出土したのみである。時期は、百・古・Iと考えられる。

#### 溝-10

第2区の西端部分において、D-6を切って検出された溝で、ほぼ東—西方向に走る。幅約70cm、深さ35cm前後を測る。底のレベルは海拔約255cmで、流走方向は不明である。埋土は、暗褐色粘質微



第10図 D-7-10断面図 (1/60)  
及びD-9出土遺物

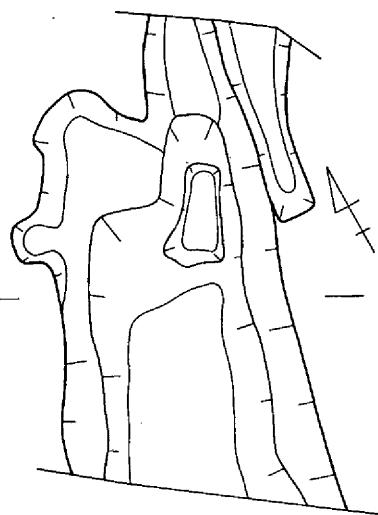
砂の1層である。

出土遺物は、土器の小片が少量出土したのみである。時期は、百・古・Iと考えられる。

#### 溝-11（溝状遺構）

第1区の東端部分において検出された遺構である。検出された範囲内における平面形態は、ほぼ南一北方向に走る溝状を呈しているが、その北側部分は乱れており、一概に溝とは言い切れない。最大幅200cm、検出面からの深さは一様ではなく、南に向かって徐々に深くなっている。埋土は5層ある。

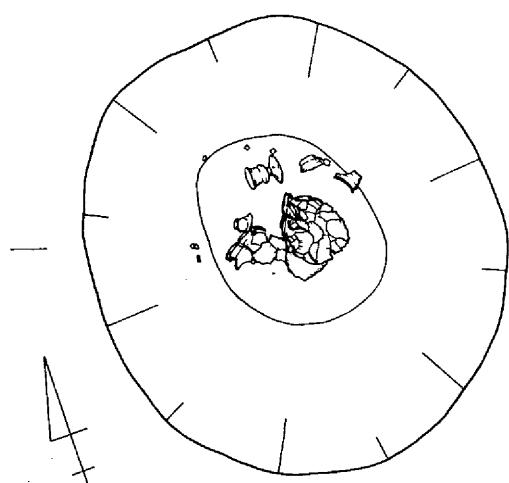
出土遺物は、土器の小片が少量出土しており、時期は、百・古・Iと考えられる。



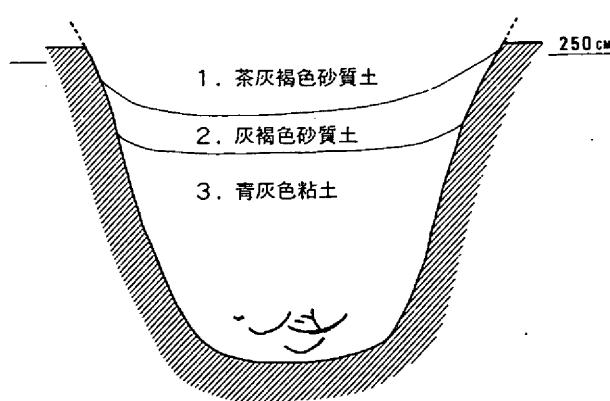
300 CM

- |            |          |
|------------|----------|
| 1. 暗茶褐色粘土  | 4. 茶褐色粘土 |
| 2. 暗茶灰褐色粘土 | 5. 暗灰色粘土 |
| 3. 茶灰色粘質微砂 |          |

第11図 D-11 平・断面図 ( $\frac{1}{60}$ )



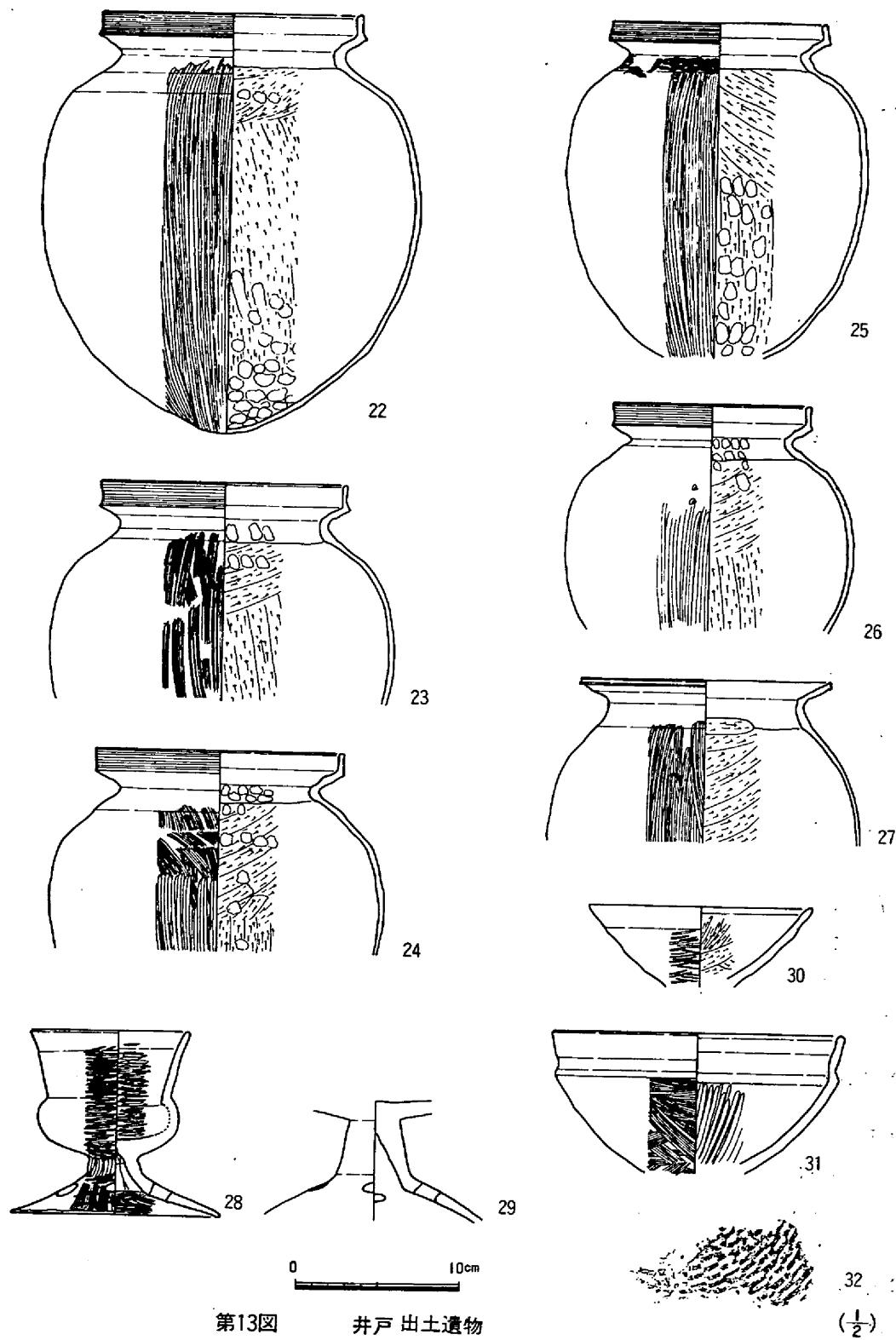
井戸



第12図 井戸 平・断面図 ( $\frac{1}{30}$ )

第2区の中央よりやや西側の北壁隅に検出されたため、一部北に拡張して全体を調査した井戸である。平面形は、長軸180cm、短軸160cmの楕円形を呈する。底に向かって徐々に狭くなっている。検出面からの深さは125cmを測り、底のレベルは海拔約130cmである。埋土は、3層あり、下層から青灰色粘土が約80cm、続いて黄褐色土のブロック混りの灰褐色砂質土が約15cm、そして黄褐色土のブロック混りの茶灰褐色砂質土が約30cm堆積している。

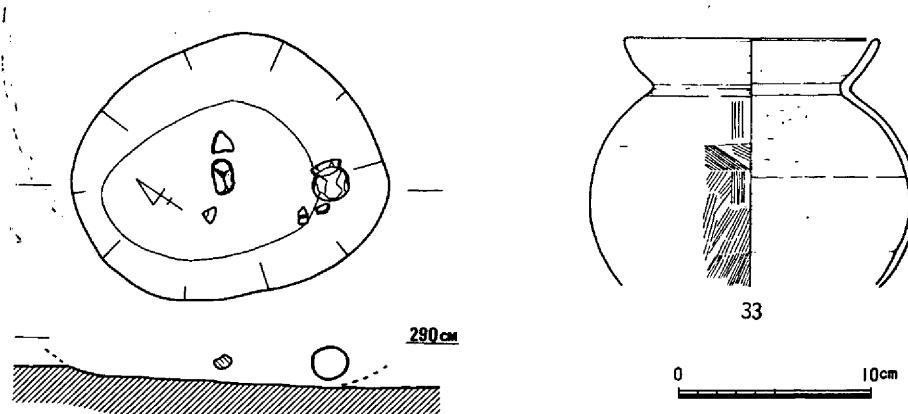
第3章 百間川沢田遺跡



第13図 井戸 出土遺物

出土遺物のうち土器は各層より出土しているが、第3層よりの出土が最も多く、それらも底から約30cmの範囲に多く出土した。図示した土器はすべて第3層出土のものである。

32は、第3層より出土した2片の竹製品のうち残存状態の良い一片で「笊」の一部と考えられる。



第14図 土壌 平・断面図 ( $\frac{1}{30}$ ) 及び出土遺物

また埋土中より種子（註1）及び少量の木片が出土している。

時期は、出土遺物より百・古・Iと考えられる。（平井）

### 土壤

第2区の西端部分において検出された土壤である。平面形は、100~120cmの不整円形を呈し、検出面からの深度は約5cmである。埋土は、暗灰褐色粘質土が1層であり、下部には部分的に炭と焼土の混った層がみられる。

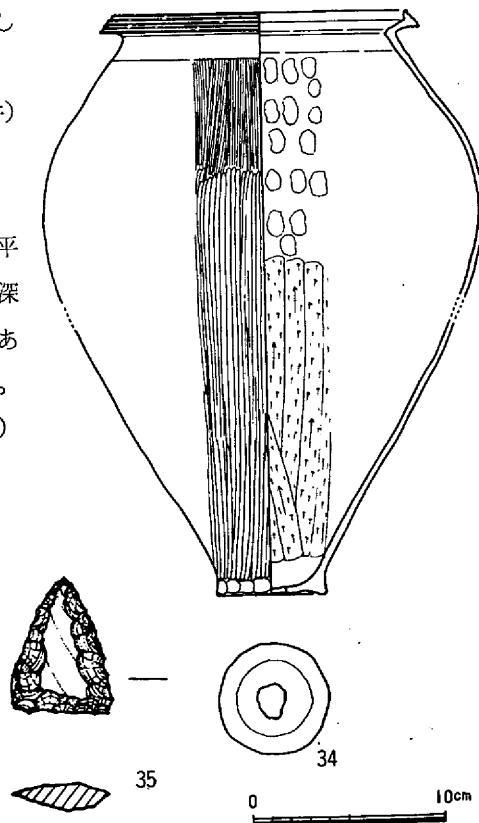
出土遺物は、少量の土器のみで、ほぼ完形の壺（33）以外は小片である。

時期は、百・古・IIIである。

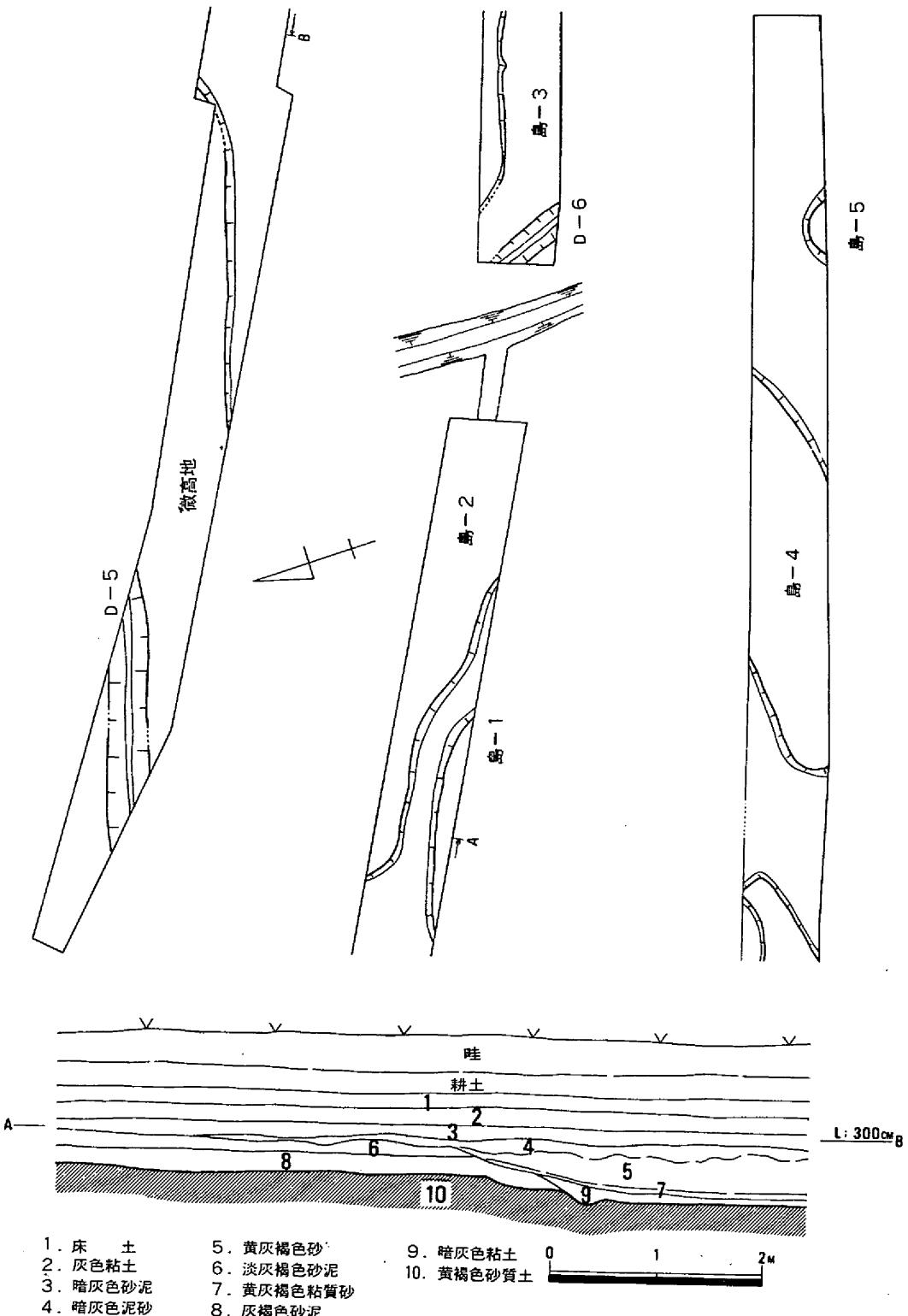
### 「島状高まり」遺構

当調査区の暗灰色粘土層（包含層）の下からは微高地および微高地に類似した「島状高まり」遺構と、洪水により一度に埋没したとみられる40~50cmの黄褐色砂に覆われた、暗灰色粘土の水田層が検出された。

今回の調査範囲が狭小なため、「島状高まり」



第15図 「島状高まり」遺構—4 出土遺物



第16図 「島状高まり」遺構平面図 ( $\frac{1}{300}$ )・断面図 ( $\frac{1}{60}$ )

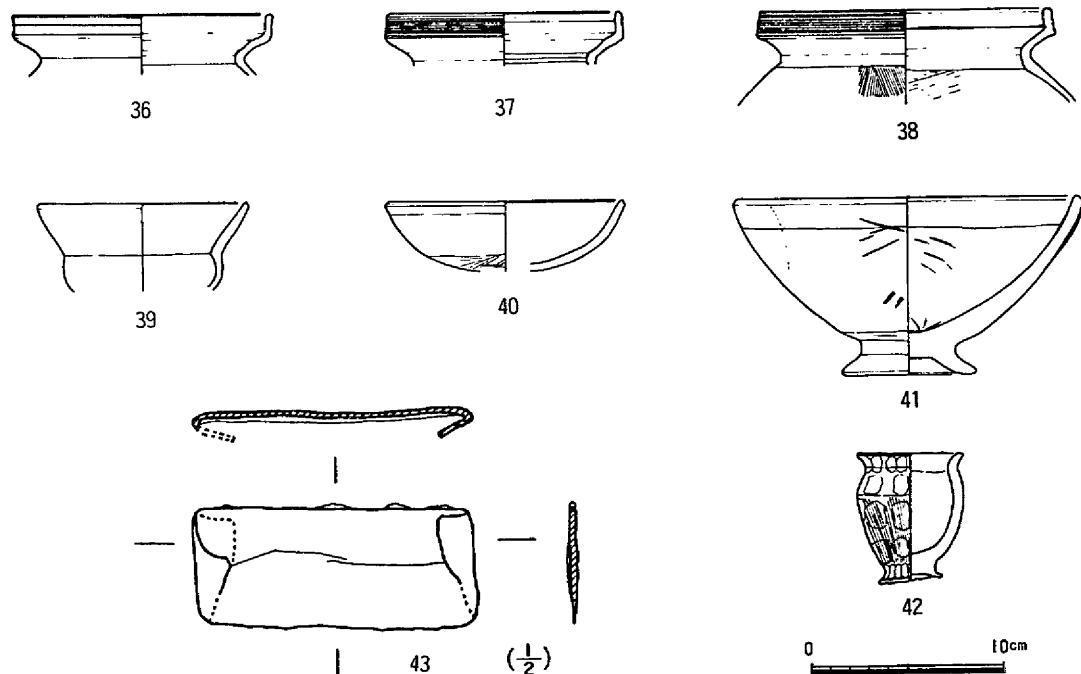
遺構全体の形状等は不明であるが、検出された5つの「島状高まり」遺構はそれぞれ異なった平面形を呈している。

「島状高まり」遺構と微高地の土層堆積は互いによく似ており、土層断面だけで区別することはできない。また両者の端部も似た状況を呈しており、部分的な検出状況から「島状高まり」遺構と微高地の両者を判別することが出来なかった。このため、島一2・島一3がそれぞれ独立した「島状高まり」遺構であるのか、当調査区外で微高地に接続するものであるのか不明である。

「島状高まり」遺構の上面で検出された遺構は、島一3に走るD-6だけで、遺物も見られない。第15図の土器34は、島一4の東部の灰褐色砂泥層から出土したものである。35はサヌカイト製の平基式石鎌で、両面とも丁寧な調整を施している。長さ1.8cm・幅0.3cm・重さ0.52gを測る。

水田層は6~10cmの厚さで、暗灰色粘土が海拔約245cmでほぼ水平に広がっている。当調査区内においては「畔」等水田に伴う遺構を確認することができなかったが、その後行われた百間川沢田遺跡（第2微高地）の調査で検出された水田址（註2）と同じ様相を呈しており、洪水砂で埋没した水田址遺構と考えられる。

当調査区の微高地縁辺部では「島状高まり」遺構が多く見られ、特に島一1と島一2の間は殆ど溝状を呈するまでに隣接しており、もし水田であるとすれば可耕面積の少ない非常に特異な形態を示すものである。D-5は微高地で、D-6は島一3で検出された溝であるが、両者はともに水田と同じ洪水砂で埋没しており、水田と同時期に機能していたものと考えられ、用水路の可能性がある。



第17図 包含層 出土遺物

## 包含層の出土遺物

包含層の土器は細片が多く実測できたものは僅かで、図示した土器(36~41)はいずれも洪水砂の上に15~20cm堆積している暗灰色粘質土から出土したもので時期は百・古Iである。42のミュニチアの土器と43はいずれも島-4の東端部で洪水砂中より出土した。43は鉄製の収穫具(摘鎌)で、折り返し部分の一部を欠くが、ほぼ完形品である。長さ(刃幅)7.2cm・最大幅3.0cm・厚さ約0.1cmを測る(註3)。時期は百・後・IVと考えられる。

(内藤)

## 小 結

以上、当調査区において検出された遺構を個別に述べてきた。当調査区は実質的にトレンチ調査と差異のないもので、遺跡全体について何もいうことは出来ないが、最後に検出した溝状遺構等から考えられることを述べて第1調査区のまとめにかえたい。

当調査区では11条の溝状遺構が検出された。各溝は規模・方向・埋土状況・底のレベル等において、時期ごとに共通性がみられ、D-1・D-2・D-3(百・中・III)とD-5・D-6(百・後・IV)とD-7・D-8・D-9・D-10(百・古・I)の三期に大別できる。

D-1・D-2・D-3はいずれも微高地の端部に沿って流走する溝で底の断面は緩やかに広がる「U」字形を描いている。

D-5・D-6はいずれも黄褐色砂により埋没しているもので、D-5は微高地で、D-6は島-3で検出されたものであるが、微高地と島-3の堆積状況は非常に酷似している。またD-5・D-

表2 百間川沢田遺跡(右岸用水)第1調査区、溝一覧表

区名	名称	幅(cm)	深さ(cm)	底の海拔高(cm)	備考	時期
1区	D-1		25	239	D-2に切られている	百・中・III
1区	D-2	80	22	242	D-1を切っている	百・中・III
1区	D-3	100~130	30	235		百・中・III
2区	D-4	50	14	255		百・中・III
1区	D-5	160~180	90	215		百・後・IV
2区	D-6	150	70	205		百・後・IV
1区	D-7	70	25	285		百・古・I
1区	D-8	85	25	280		百・古・I
1区	D-9	90	20	285		百・古・I
2区	D-10	70	35	255		百・古・I
1区	D-11				溝状遺構	百・古・I

6は規模および溝の断面が「V」字に近い形状を示し、底近くに段をもつ等形態が似ており、両者は同一の溝の可能性がある。この溝が、洪水砂で埋没していることは、水田と同時期に機能していたことを示し、調査区内には施設等の遺構は検出されなかったものの、用水路として充分考えることのできるものである。

百・古・Iと考えられるD-7・D-8・D-9・D-10はいずれも検出規模が小さく、溝の性格は不明である。これらの溝の時期の遺構は他に、井戸・土壙等がみられ、住居址等生活区が近くに考えられるものである。  
(平井)

註

- 註1 笠原安夫岡山大学名誉教授により「ヒエ・コナギ・ザクロソウ・エノコログサ・ノミノフスマ・コゴメガヤツリ・イネ科・ホタルイ・ギシギシ・イチゴ・シソ科」の種子が鑑定された。
- 註2 岡川県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告8』 1978. 3
- 註3 川越哲志「弥生時代の鉄製収穫具について」松崎寿和先生退官記念事業会編『考古論集』 1977. 3

## 第2節 第2調査区

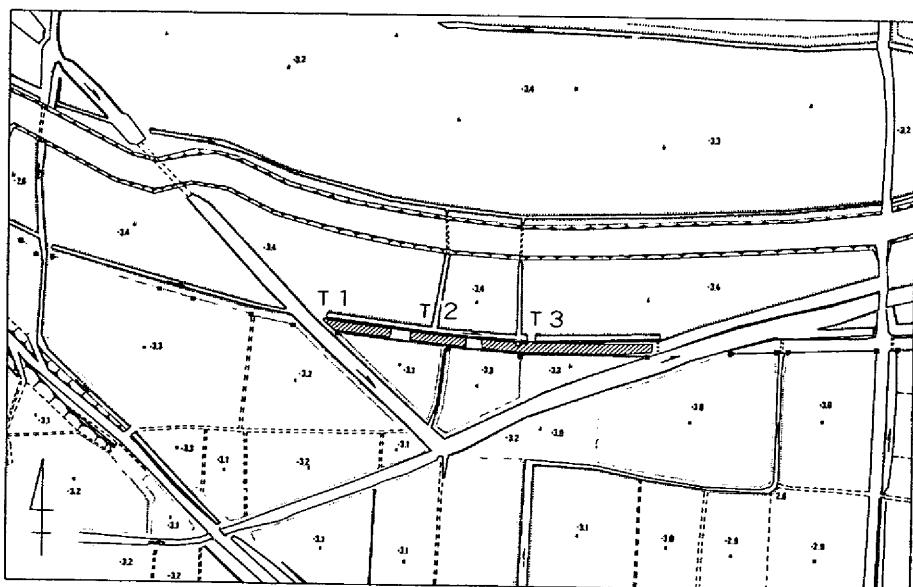
百間川沢田遺跡第2調査区は、同第1調査区に続いて下流側を調査した。調査区は、幅3mで、延長距離80mの範囲である。調査は、調査区の全域を掘り下げるもので、上流から、T-1, T-2, T-3とし調査した。今回の調査で、明瞭な遺構を検出したのはT-1からである。検出した遺構は、溝・土壙・「島状高まり」遺構・畦畔及びそれに伴う水田址である。

溝 調査区を横断する状態で検出した。溝は、幅120~132cmで、深さは12~22cmを測る。溝は、淡黄褐色細砂層を切り込むもので、灰紫色細砂が埋まるものである。

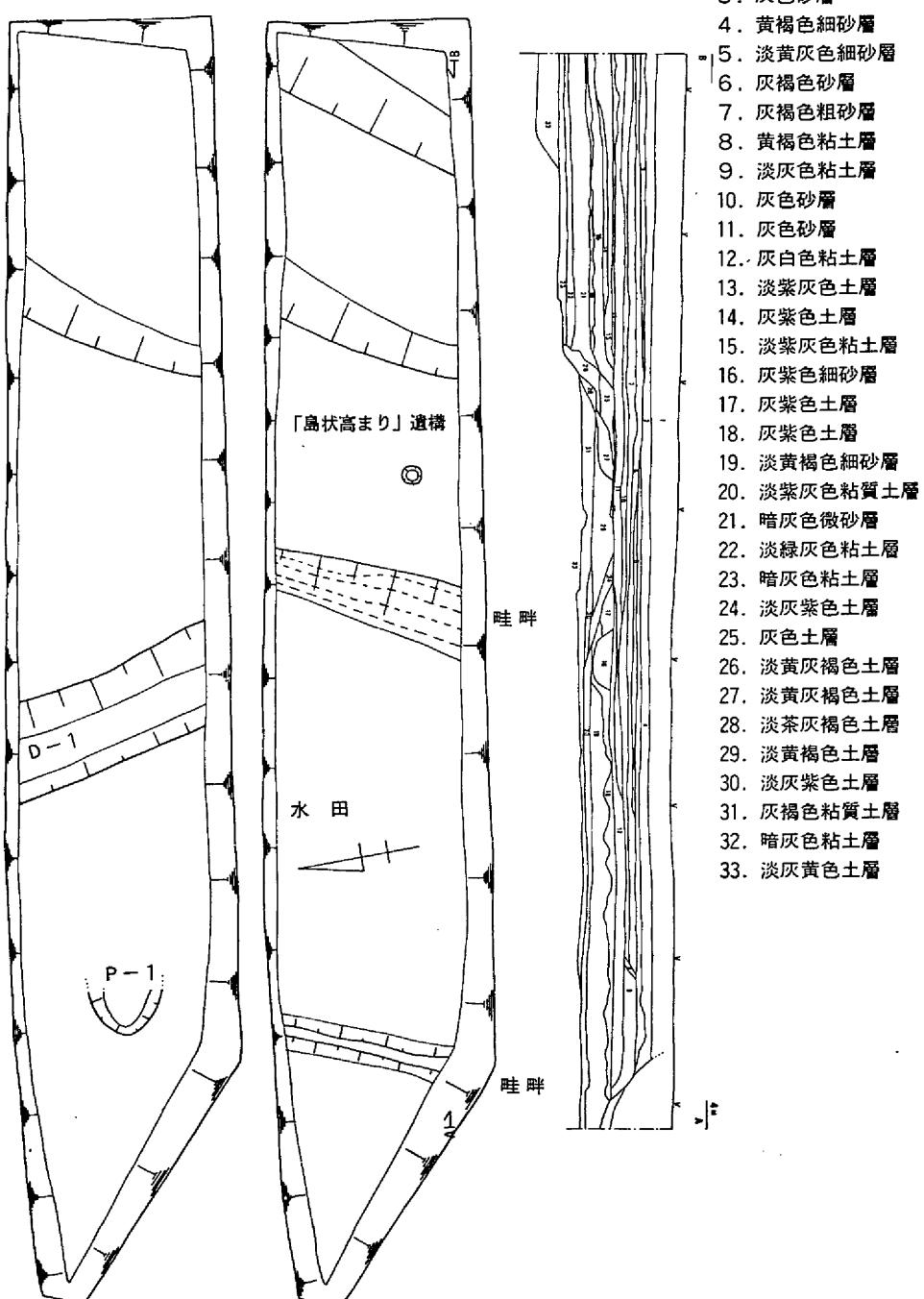
**土壤** 確認調査時の試掘溝により東側が破壊されているため、全体の規模は不明であるが、ほぼ半分が残存するものと考えられる。平面形態は楕円形を呈するもので、検出した土壤の規模は、径103cm、深さ16cmを測る。土壤には、2層の堆積が見られ、淡褐色～褐色を呈する土が堆積するもので、上層には炭化物を含むものである。

「島状高まり」遺構 T-1 のほぼ中央部で検出した。検出した遺構の上端の幅は、2.70m～3.20mを測る。遺構の西側は、斜面に沿って一層の堆積が見られる。東側は、4層が複雑に堆積している。斜面堆積を除いた部分は、水平に堆積する土層が2層観られる。

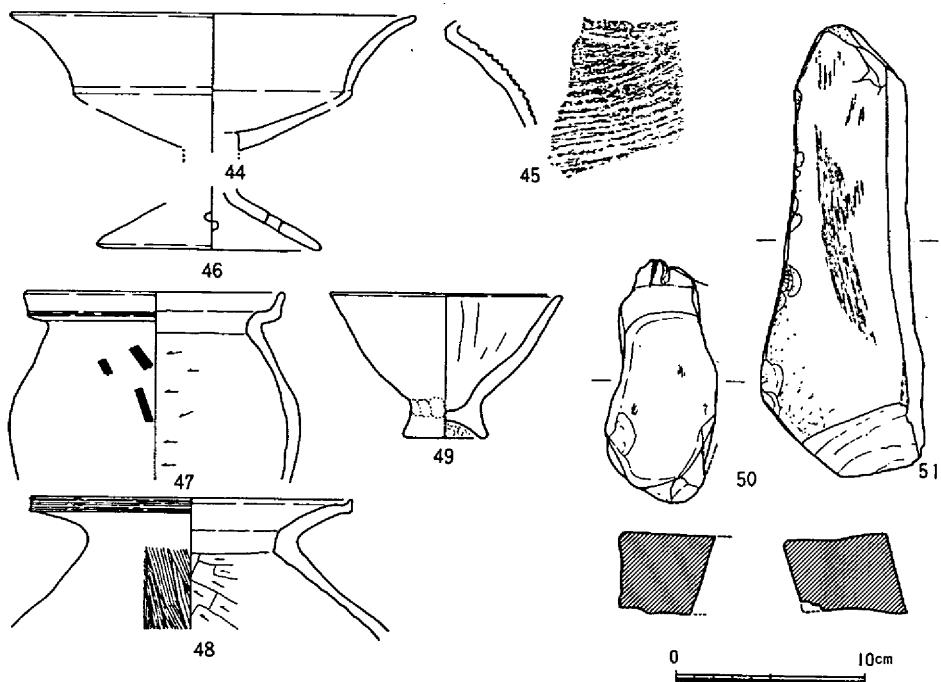
**水田址** 溝が掘り込まれている灰紫色～灰褐色土層の下に、淡黄灰褐色を呈する細砂層がある。砂層の上面は平坦ではなく起伏が見られる。そのため、砂層の厚さは一定しないが18cm～28cmの厚さで堆積している。その下層に、淡紫灰色を呈する粘質土層がある。層の厚さは7～8cmを測るもので、



第18図 第2調査区地形図及び調査区設定図 ( $S = \frac{1}{2,000}$ )



第19図 遺構配置図及び南壁土層断面図 (S = 1:100)



第20図 出土遺物

水平に堆積している。土層断面（第19図）を見ると、水平堆積する同層の処々に、基底部の幅が45～48cmで、高さが4～5cm盛り上る部分がある。盛り上りを見せる部分も、水平に堆積する部分も、土層の変化は見られない。その高まる部分をこの調査区で平面的に見ると、断面に見られた高まりの状態をもって延びる。この調査区は、調査面積が狭いので、一直線に延びた状態でのみ検出した。この高まりが、水田に伴う畦畔と考えられる。また、「島状高まり」遺構の下からも、同様な高まりを検出した。この高まりも、直線的に調査区を横断するものである。

「島状高まり」遺構の東側は、一段低くなる。淡黄褐色細砂層の水準はほとんど変わらないが、その下層に暗灰色細砂層が25～26cmの厚さで堆積しており、その下層に7～8cmの厚さで粘土質の層位が2層見られる。この状態は、さらに東へ、調査区の全体を通してほとんど変化するところはない。今回の調査では、この層位を水田層と認識するに至らなかったが、周囲の状況からして、水田層の可能性は高いものと考えられる。この第2調査区の全体に、この層位変化が認められることは、この調査区の範囲全体に水田層が広がっていた可能性がある。

#### 出土遺物

第2調査区からの出土遺物は少なく、また小破片がほとんどである。そのため、図示できた遺物は第20図に示した8点である。出土遺物の中で、44～46, 51は、淡黄褐色細砂層の上面から出土したものである。他の遺物は、「島状高まり」遺構の堆積層から出土したものである。

砥石

50は自然石の一面に使用痕の見られるものである。使用痕の見られる面の裏面は、節理面において剝離しているため、本来の大きさは不明である。側面は、長辺側の一辺が節理に沿って剝離しているが、範囲は狭いものと考えられ、平面的には、ほぼ元来の大きさを示すものと考えられる。石は、灰色を呈しており、砂岩、もしくは、頁岩と考えられる。51は、44～46と同一層において、近接して出土したものであり、同時期の可能性がある。砥石は、四面ともに使用している。使用痕は四面ともに認められるが、図示した面、及びその裏面において特に顕著な使用痕が見られ、浅い溝状を呈している。縁辺部には、部分的に敲打痕が見られる。石は、黒色を呈し、頁岩製と考えられる。（井上）

### 第3節 第3調査区

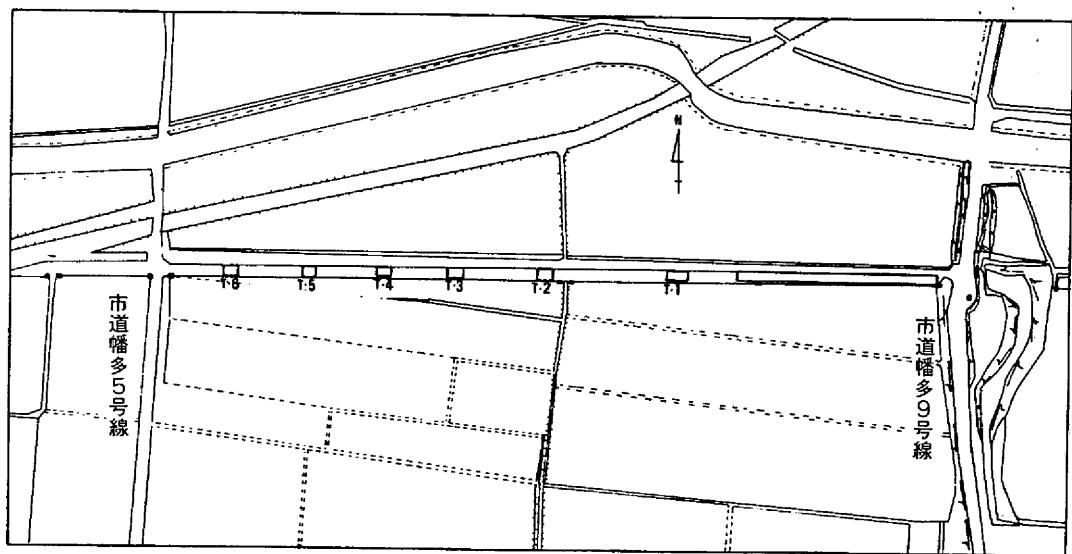
本調査区は、市道幅多9号線から西に市道幅多5号線までの約210m間である。調査は、昭和52年度試掘調査の結果（註1）を参考に、市道幅多9号線の西側に約56mの調査区を設定し微高地の追求と確認に主眼を置いた。さらに西に旧河道の存在及び堆積状況の確認のため6か所（T1～T6）のグリッドを設定した。

調査の結果、市道幅多9号線寄りの調査区では、微高地及び微高地の西端部の下りを確認した。

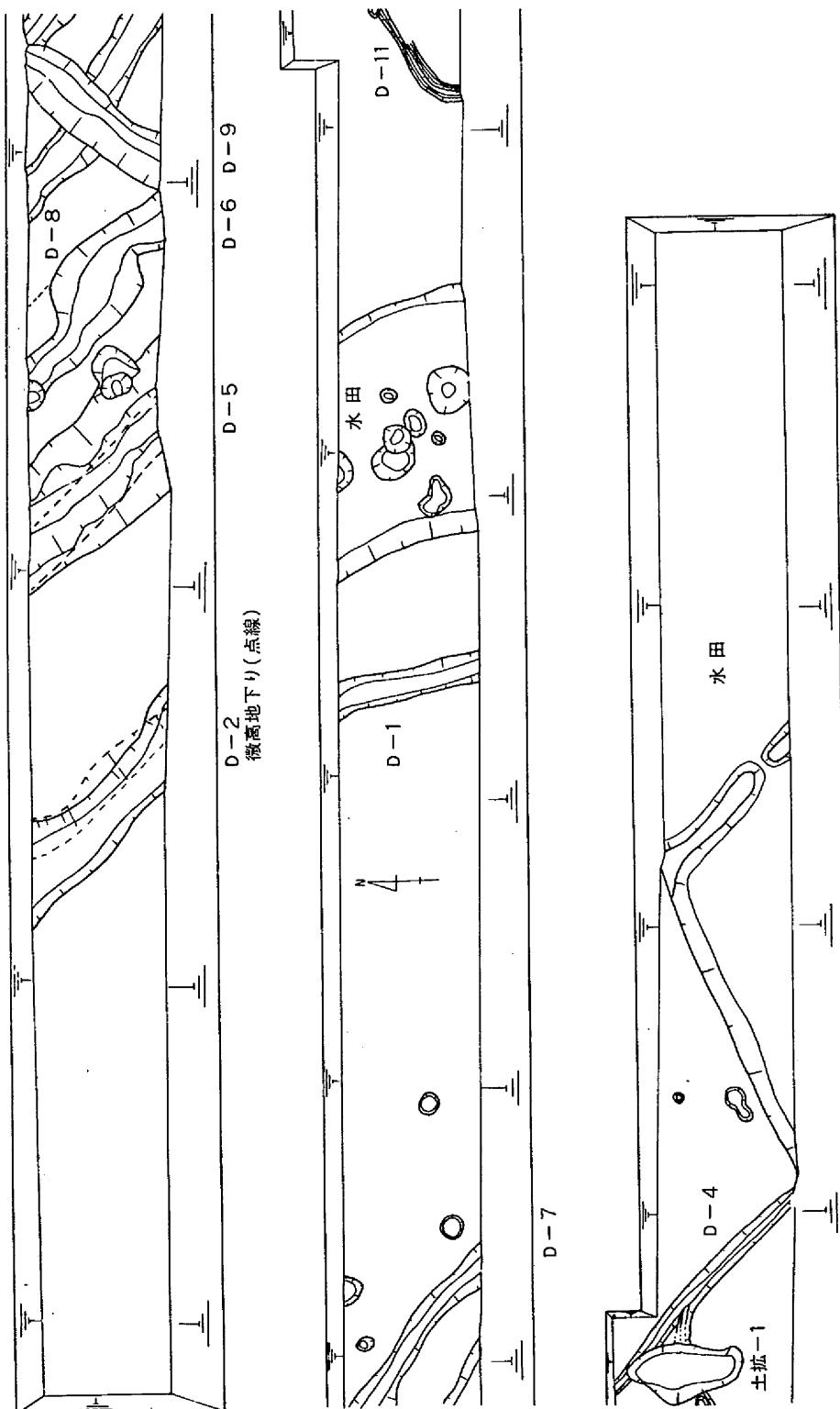
微高地上には、大きく3時期の遺構面を検出した。第1面は、古墳時代を中心とするもので、溝（D-1～4, 11）を確認した。第2面からは、微高地中央部と西端部に洪水層に埋没した水田址を検出した。水田には、畦畔が1本認められ、水口が存在していた。さらに、水田層の下に溝（D-10）が存在した。第3面は、基盤層である黄褐色泥砂層及びやや上層で検出されたものである。検出された遺構は溝（D-5～9）で、微高地西端部に集中していた。

出土遺物は、微高地上包含層及び微高地下りの堆積層からがほとんどで、縄文時代晩期～鎌倉時代に至る土器などが出土したが、量的には少なかった。

また、T-1～T-6では、明確な遺構は検出できず旧河道埋没後の安定した低湿地の堆積状況を認したに止まった。しかし、調査後の検討で、微高地下りからT-1～T-6にみとめられた第26図確第9層は、ほぼ水平堆積を示し、さらに上層には洪水層と類似した層が存在することから、前記の第9層は水田層の可能性が考えられた。

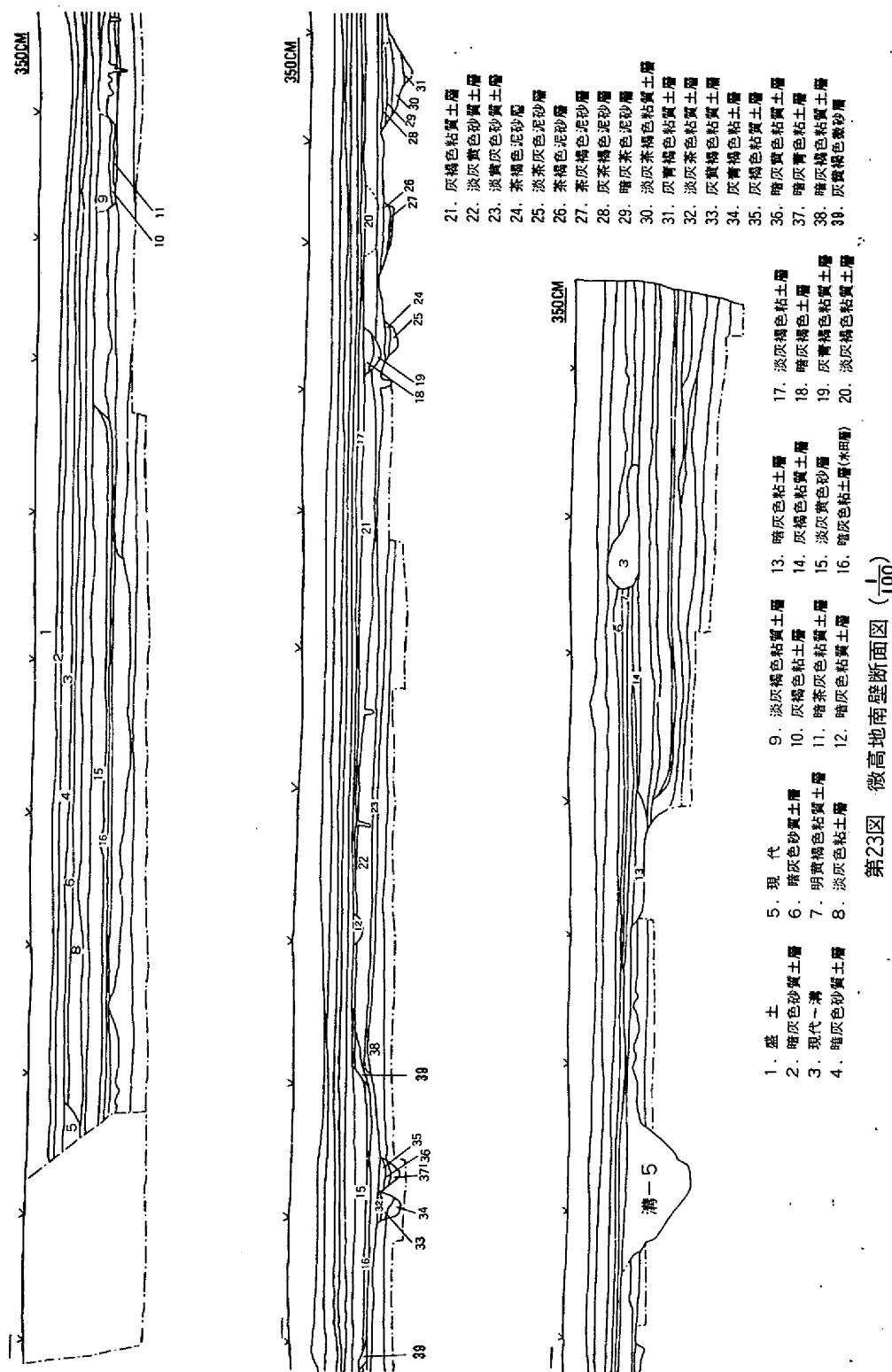


第21図 第3調査区地形図及び調査区設定図 ( $\frac{1}{2,000}$ )



遺構配置図 ( $\frac{1}{100}$ )

第22図

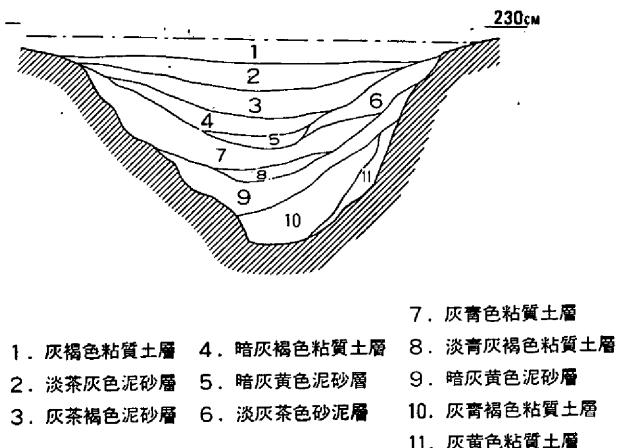


## 溝—5

この溝は、調査区西側の微高地西端に位置する。方向は、北西～南東で微高地の下がりと平行する。

幅約160cm、深さ約80cmで、溝底部は海拔約140cmを測る。

遺物は、縄文時代晚期と弥生時代前期の土器及びサヌカイト片が少量出土した。時期は、出土遺物、層位から考えて弥生時代前期の可能性が強い。

第24図 D-5 北壁断面図 ( $S = \frac{1}{30}$ )

## 溝—9

この溝は、微高地西端部に集中する溝の中にあって、他の溝が微高地下りと平行（北西～南東）するのに対し北東～南西方向に流走する。幅約60cm、深さ約20cmで、溝底部は海拔約210cmを測る。

遺物は、溝底部から弥生時代前期の土器が少量出土している。

## 溝—7

微高地西端部に集中して検出された溝群の東端に位置する。幅40～55cm、深さ約25cmで溝底部は海拔約195cmを測る。出土遺物はない。

## 溝—8

溝—8と溝—6の間に検出された。溝—9と切り合っていたが新旧関係は確認できなかった。幅約60cm、深さ15～20cmで、溝底部は海拔約205cmを測る。出土遺物は、ほとんどない。

## 溝—6

微高地西端部に溝—5と溝—7の間に検出された。溝の南側では、溝—9を一部切っている。幅60～120cm、深さ約10cmで溝底部は、海拔約225cmを測る。遺物は、ほとんど出土していない。しかし、溝—7～9を含めてこの溝も、検出状況から考えて弥生時代前期である可能性が強い。

以上の溝—5～8は、微高地端部に微高地の下がりと平行に流走する溝群である。この様に微高地の末端部に溝が集中する状況は、倉敷市上東遺跡（註2）、岡山市川入遺跡（註3）、さらに百間川原尾島遺跡（註4）など沖積地の遺跡によくみられる状況のもので、いずれも灌漑用水路として判断されてきたものである。

### 第3章 百間川沢田遺跡

#### 溝—10

調査区中央の水田遺構の下部に検出された。北北西～南南東に流走し、幅40～45cm、深さ約20cmで、溝底部は海拔約185cmを測る。

遺物は、ほとんど出土していない。時期は、層位的にみて弥生時代後期と考えられる。

#### 溝—4

この溝は、水田と水田の間に溝—11と一部切り合って検出された。流路は、北西～南東方向に延びる。幅約25cm、深さ約7cmで、溝底部は海拔約225cmを測る。

遺物は、古墳時代初頭の土器が少量出土している。

#### 溝—11

溝—4と一部切り合って検出した。幅約15cm、深さ約7cmで、溝底部は海拔約225cmを測る。この溝は、検出当初において隅丸方形の竪穴住居址の壁体溝の一角をなすものと考えたものである。溝の西側では、溝と重複する同規模の溝も検出された。これは、住居址の建て替えの様相を示していた。しかし、溝の内側には柱穴も検出できなかった。また床面も凹凸が激しく、断面においても明確な住居址の堆積状況を確認できなかった。以上の様な点から、今回の報告では溝としてとりあつかった。

#### 溝—3

溝—7、8の上部に位置する。方向は、北面～南東に検出された。幅約100cm、深さ約20cmで、溝底部は海拔約230cmを測る。

遺物は、土師器が少量出土しているが時期を限定できるものではなかった。しかし、層位的に判断して古墳時代の溝と思われる。

#### 溝—2

調査区西端部の黄褐色土上面で検出された。溝は、微高地下がりと平行の北西～南東に流走する。幅75～100cm、深さ約15cmを測り、溝底部は海拔215cmである。

遺物は、土師器が少量出土した。時期は、出土した土器からみて、古墳時代初頭である。

#### 溝—1

調査区の中央に位置し、ほぼ南北方向に検出した。幅約40cm、深さ約15cmを測り、溝底部は海拔225cmである。溝内は、暗灰色粘土層が堆積し、下部には黄褐色土ブロックを含んでいた。遺物は、須恵器、土師器の破片が少量出土した。時期は限定できないが、層位的にみて古墳時代と思われる。

### 土壤—1

この土壤は、溝—4, 11に一部切られて検出された。長軸約170cm, 短軸約90cmの橢円形を呈する。深さは約30cmを測る。土壤内は、暗灰色粘土が堆積していた。遺物は、ほとんどなく時期を限定することはできなかったが、溝—4, 11に切られていることや層位的にみて古墳時代に属するものと推察できる。

### 柱穴状土壤

今回検出された柱穴状土壤は、20近くを数えるがそのほとんどが基盤層（黄褐色土）での検出であった。規則性を示すものはなかった。土壤内からは、ほとんど遺物は出土していない。

### 水田遺構

この水田遺構は、調査区の東側に「水田遺構—I」「水田遺構-II」の2ヶ所に検出した。「水田遺構—I」は、微高地から低湿地に移る位置に、「水田遺構-II」は、微高地上に、それぞれ形成されたものである。この水田遺構は、いずれも古墳時代の包含層の下層に検出したもので、水田は、洪水によって堆積したと考えられる砂層で埋まっていた。

#### 「水田遺構—I」

調査区の東端部で検出したものである。この遺構は、微高地から直線的に南東方向に約20cm落ちたのち水平（水田）面を形成している。水田には、微高地に直角に取りつく畦畔を1本確認した。この畦畔は、幅約50cm, 高さ約10cmのもので、北西～南東方向に延びる。また、畦畔には、1ヶ所途切れる部分が認められ、これは「水口」と考えられる。

水田耕作土は、厚さ約5cmで暗灰色粘土層がほぼ水平堆積し、下層には床土と思われる淡灰褐色粘土が厚さ約3cm堆積している。また、畦畔を構成している土壤は、水田耕作と同様のものであった。このことは、畦畔が恒常的に存在していたのではなく、毎年造り出されていたと想起される。

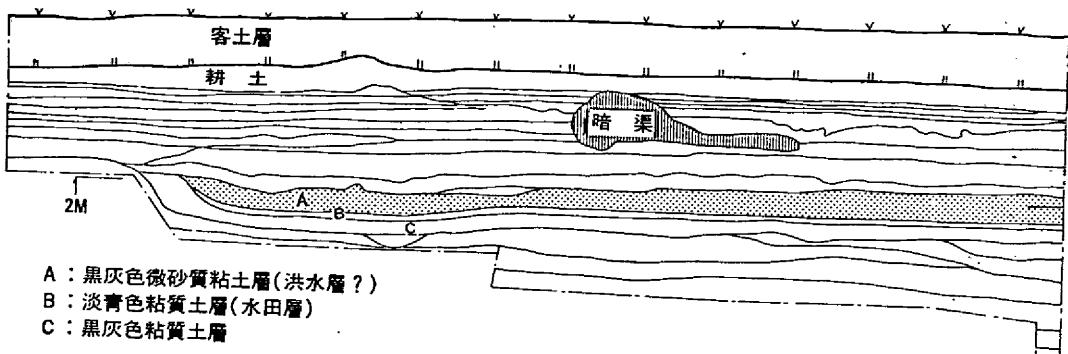
#### 「水田遺構-II」

この遺構は、「水田遺構—I」の西側の微高地上に検出したものである。

この水田は、幅が約350cmで、ほぼ南北方向に帯状に延びるものと思われる。また「水田遺構—I」と同様に、微高地上面から傾斜したのち水平面を形成している。なお畦畔は、存在しなかった。

水田層は、水田耕作土、床土と水平堆積が認められた。さらに、その下層に水平堆積を示す粘土層が存在している。また、この下層の水平堆積層に続く微高地の肩部は、上層の水田層の微高地肩部より東西に各々約40m拡幅している。このことは、上下2枚の水田層が存在していたことを示し、上層の水田は、当初形成された下層の水田よりやや縮小された様子がうかがえる。

上記の水田遺構からは、時期を示す遺物は認められなかったが、百間川の低水路部で実施している



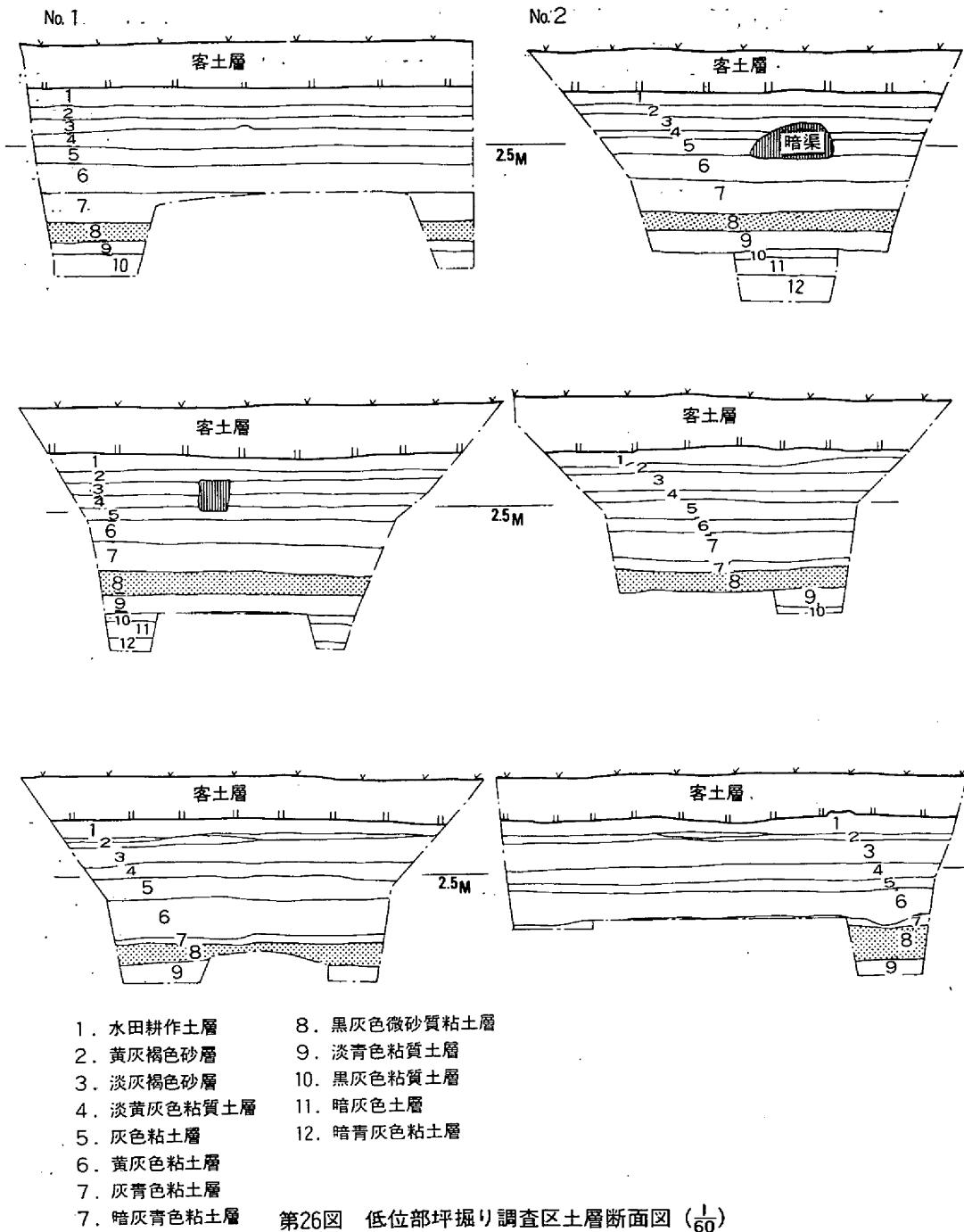
第25図 微高地～低位部移行部分の土層断面図 ( $\frac{1}{60}$ )

調査では、弥生時代後期末の時期が与えられており、層位関係から同時期と考えられる。

(中野)

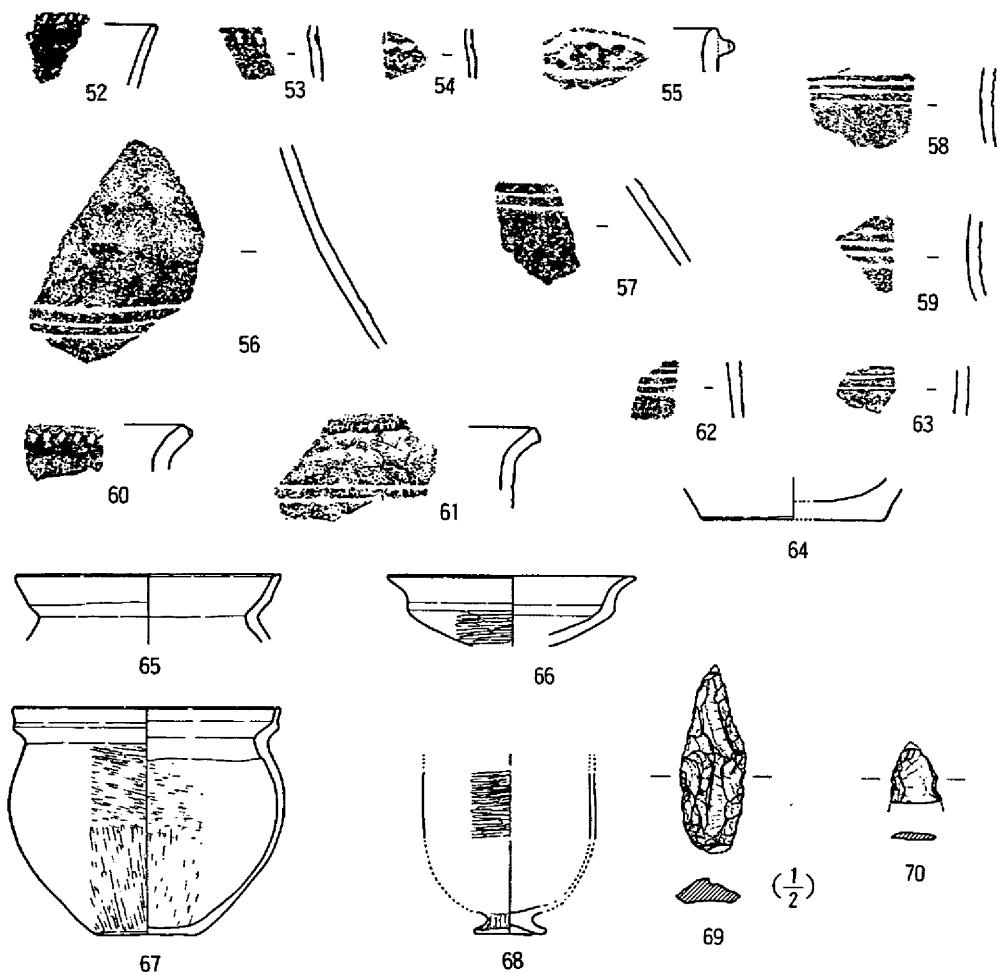
#### 微高地下降部及び低位部坪掘り調査区の概要

微高地は第25図に示すように、基盤層が緩かに下降し、低位部に移行する。この基盤層は明褐黄色を呈し、比較的堅硬かつ安定した土層である。低位部における層序は、この基盤層のレベルまでは、微高地部分との層位差は認められず、約10～15cm下降した部位より厚さ約20cmを測る極めて軟弱な黒灰色微砂質粘土層におわれた淡青色粘質土層が認められる。一方、低位部に設定した坪掘り調査区の土層壁の観察によっても、この土層が水平に認められ、その性状から水田層の可能性が十分に考えられるという結論に達している。第25図に示すA・B層、第26図に示す第8・9層がこの水田層を示しているが、A層・第8層は洪水等による、水田廃絶時の堆積層と考えられよう。この水田層は、従来確認されている水田土壤、すなわち褐灰色土壤とは異なり、微高地の東半調査区で確認された水田土壤とも全く趣を異にしている。つまり、従来確認されている一部の水田が、その形質状態の観察から半乾田的な様相を示しているのに対し、この水田層は湿田的様相を示していることが注目される。この水田層は海拔約2.1m～1.88mに位置し、下層に厚いグライ土壤が存在しており、湿田的性状を端的に示しているとみてよいだろう。なお、微高地に近いC層(第25図)からは、弥生時代後期に比定される木炭細片を伴う製塩土器片が集中的に出土しており、水田の形成時期の上限を示している。いずれにせよ、この水田土壤がほぼ水平に保たれていることは注目に値し、微高地西肩口より西方約100mにかけて設定した坪掘り調査区においても、同様な土層観察所見を得ている。坪掘り調査後においては、小区画の土層壁の観察に重点を置き、発掘区の狭小さのために面的な調査を行うことができなかった。よって畦畔・溝等の付属構造の確認はできず、微高地下降部よりの層序的連絡を確認するにとどまった。なお、この調査区の西方約150mの地点で行われた「原尾島樋門調査区」の発掘調査においては、調査対象となった同様な土層面をある程度まで乾燥させた後の精査によって、明瞭な畦畔を検出することに成功し、この土層が水田層であることを確認している。因みに、この際検出された



水田面のレベルは海拔約 2m を示し、本調査区の推定水田層のレベルと近似する数値を示している。

以上のように低位部の調査成果のひとつとして水田層の確認をあげることができると、今後の調査によっては、更に古い時期の水田を検出することも可能ではないかと推定される。 (岡田)



第27図 包含層出土遺物

### 包含層

石鏃69は、先端を僅かに欠き基部は欠損している。現存最大長14.3mm、最大幅13.5mm、最大厚2mm。両縁調整で加工は粗雑である。

石鏃70は、凸基無茎式のもので僅かに欠く。現存最大長47mm、最大幅17mm、最大厚6mm。表面は、調整が全面に及び階段状調整がみられるが、裏面は縁辺部にのみ調整を施している。

(中野)

### 註

註1：確認調査において市道幅多9号線の西側に微高地の存在を確認している。さらに西側では、低湿地の様相を示していた。

註2：伊藤晃・柳瀬昭彦・池畠耕一・藤田憲司「上東遺跡の調査」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」第2集

第3節 第3調査区

岡山県教育委員会 1974

註3：正岡睦夫・枝川陽・大谷猛「川入遺跡の調査」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」第2集 岡山県教育委員会 1974

註4：『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39 岡山県教育委員会 1980

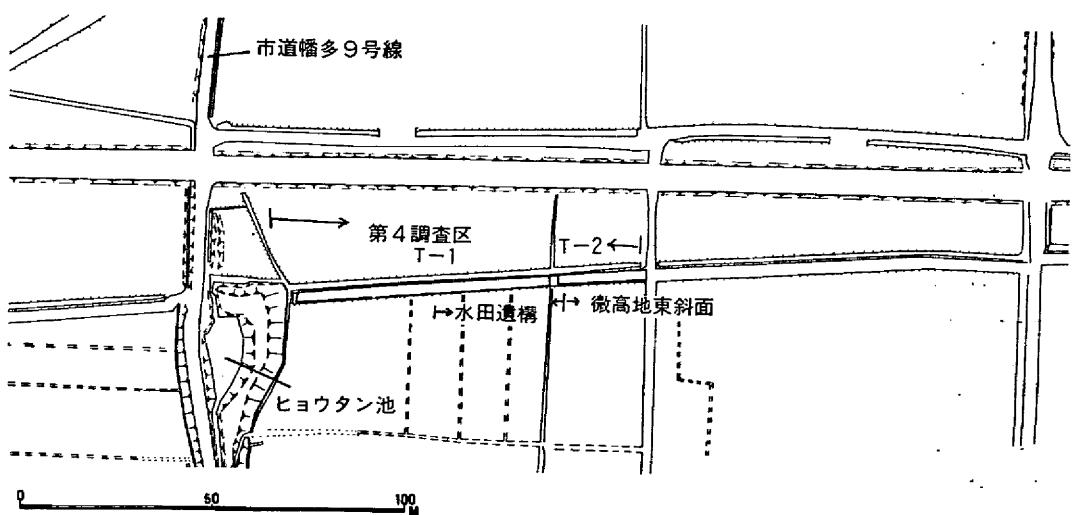
## 第4節 第4調査区

当調査区は南北に走る市道幡多9号線から東の部分約120mの間（註1）である。調査の結果、当調査区は前節の調査において判明した微高地の延長部分であり、微高地上からは水田遺構及び「島状高まり」遺構が検出されるとともに、微高地は調査区西端から70m程東の地点で下がることが明らかになった。

### 水田及び「島状高まり」遺構

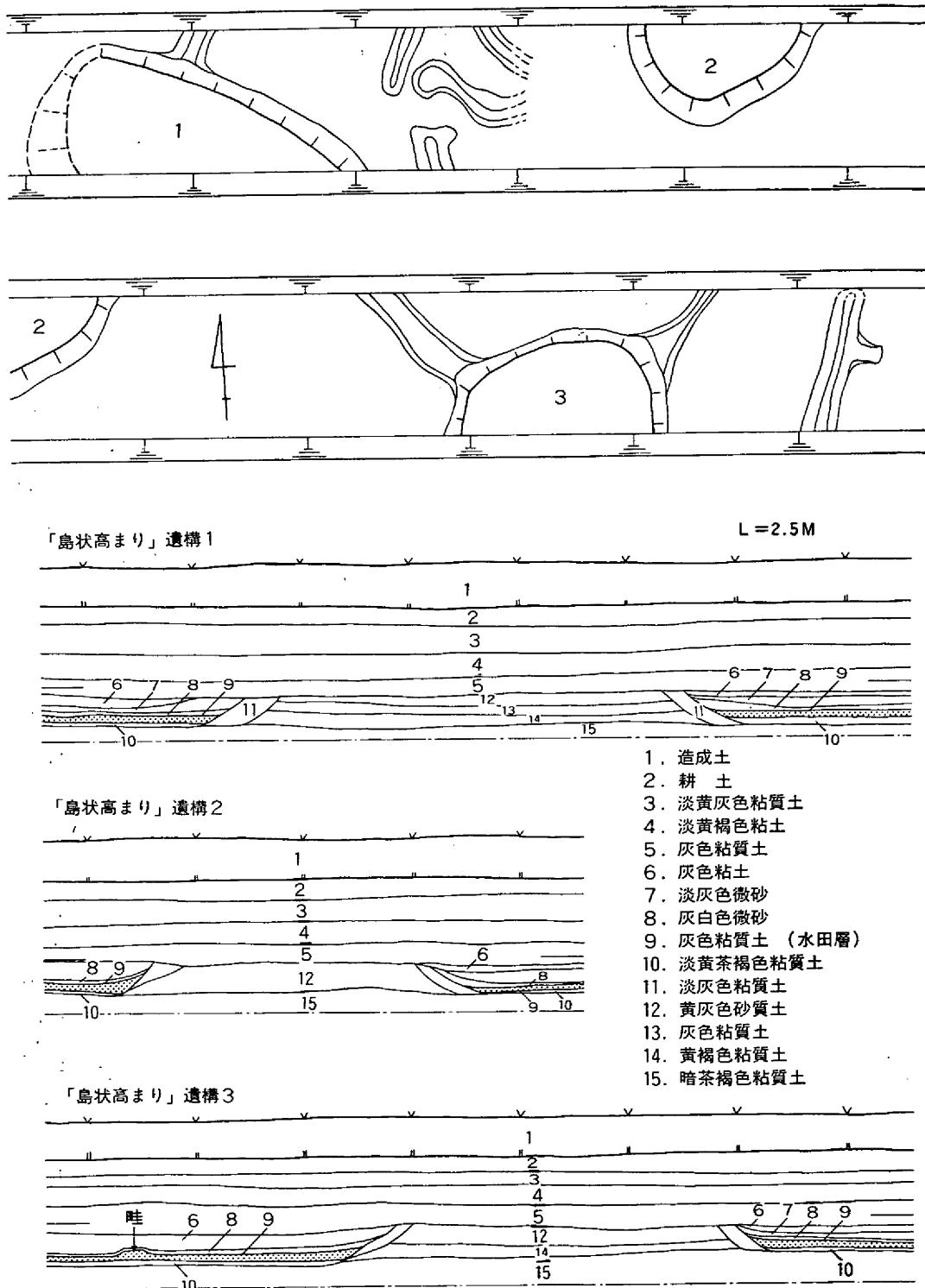
水田遺構はT-1（第28図）から平面的に検出することが出来たもので、「島状高まり」遺構と共に検出された。まず第29図の土層断面から説明を加えたい。水田層と考えられるものは第9層の灰色粘質土層で、同層下面の海拔は約2.0m、厚さ8cm前後を計るもので、同層上面からは数ヶ所に同様の粘質土によって、高さ数cmを計る断面逆台形状の畔をつくりだしている。なお、第9層下には鉄分及びマンガン粒が僅かに認められる第10層が観察されたが、同層は第9層と同様の粘質土であり、乾田あるいは半乾田がなされていたための影響と考えられる。水田層中からの遺物は皆無であった。水田層の上層には洪水層と考えられる微砂層（第7、8層）が堆積していたがこの層においても遺物は皆無であった。なお第5・6層はこの遺跡一帯で確認される層で、古代～中世にかけての遺物を包含するもので、第3～5層は近世の水田層である。一方、第11～14層は「島状高まり」遺構である。第12～14層はほぼ水平堆積していた。これらは基盤層の第15層とは明らかに異なるもののその変化は極めて漸次的なものであった。また、当遺構縁辺部には水田層と接してドーナツ状にめぐる第11層が堆積していた。なお、当遺構からは何ら遺物を確認することが出来なかった。

次に平面プランから説明を加えると、「島状高まり」遺構1は土手状を呈すと思われるもので幅2



第28図

第4調査区地形図及び調査区設定図 ( $\frac{1}{2,000}$ )



第29図 第4調査区水田遺構平面図( $\frac{1}{200}$ ) 及び断面図( $\frac{1}{60}$ )

### 第3章 百間川沢田遺跡

m前後、2・3は円形を呈すと思われるもので直径3m前後、高さはいずれも25cm前後を残す。畔は「島状高まり」遺構裾から派生するものと、そうでないものとがあったが、「島状高まり」遺構1・2の間は4条の畔が接近しており、他の検出例と比較して様相を異にしていた。調査範囲が非常に狭いため水田の区画面積を肥握するまでには至らなかった。しかしながら「島状高まり」遺構は1~2間約5m、2~3間約6mと近接していることから、水田は一区画数10m<sup>2</sup>程度の小規模な田面積をもつものであったものと推定されるとともに、さらに、当水田遺構には遺物が見られず、時期決定に困難をきたしているが他の調査区のあり方からすれば弥生時代後半に埋没したものと判断される（註2）。

#### 微高地東斜面

微高地の下がりは第28図に示すとおりT-2の西部分において確認された。斜面堆積層は自然堆積の状況を呈しており、水田と推定される土層は確認できなかった。また、堆積層からは磨滅した弥生式土器片及び土師器片が数点出土したのみであった。このことから当微高地斜面は前節から続いてきた微高地の東端部分であることが判明するとともに、遺跡は微高地斜面以東には拡がらないことが確認された。

一方、下図西端部では微高地基盤層が10数cm削平され、下部には灰色粘土層の水平堆積している状況が観察された。この灰色粘質土層は前述の水田層と同様のものであることから水田は微高地末端まで拡がっていたことが判明した。

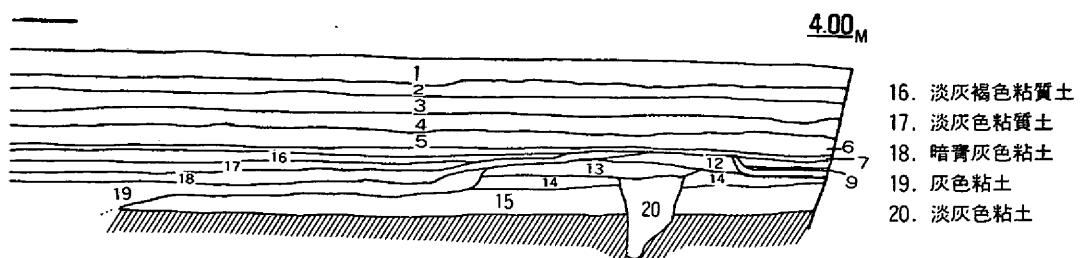
以上略述したように、当水田遺構は微高地を削平して形成された乾田あるいは半乾田と考えられ、「島状高まり」遺構と不可避な関係を持つもので、弥生時代後期後半に埋没したものであることが判明した。

（江見）

#### 註

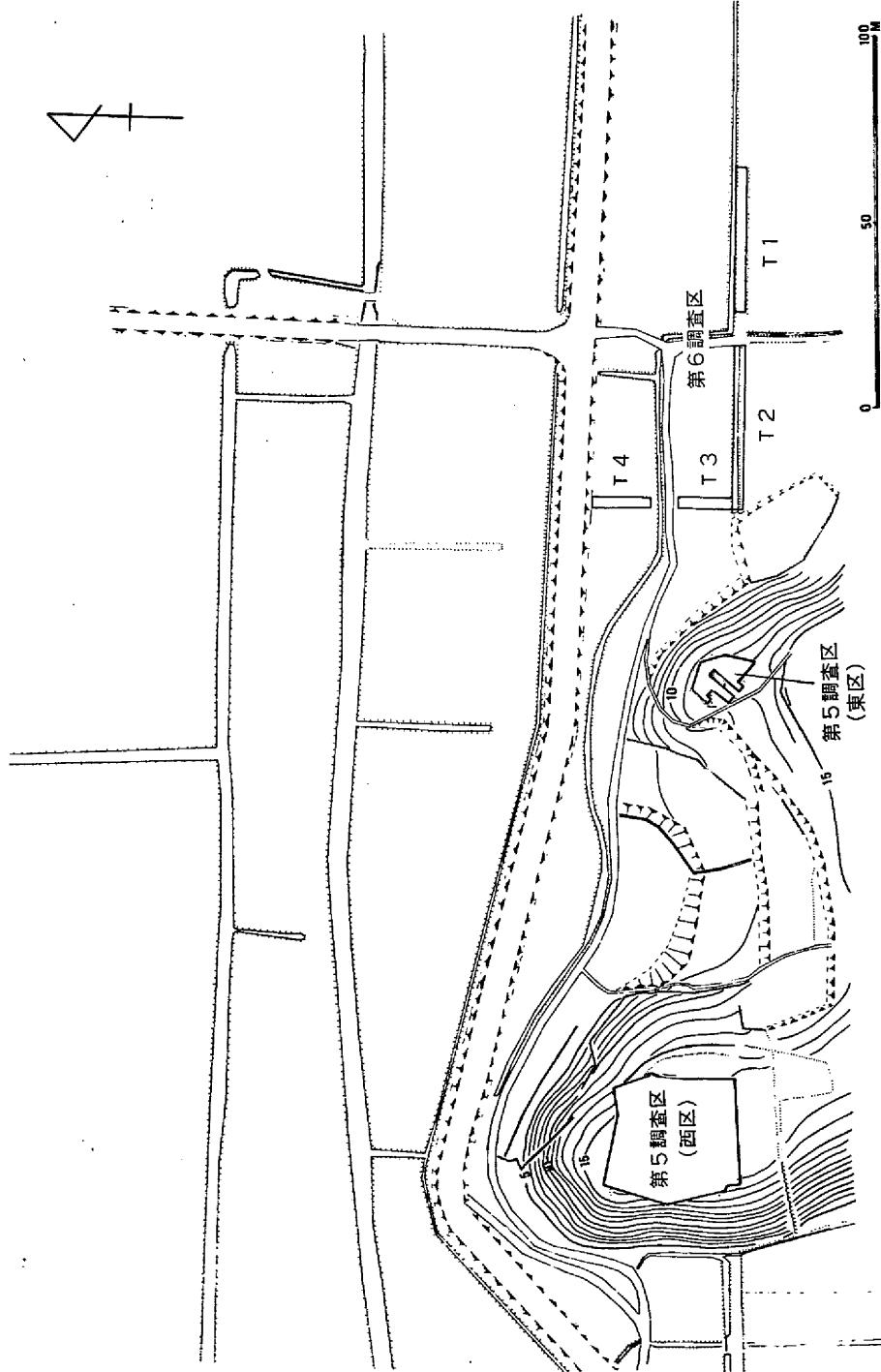
註1 市道幡多9号線の東に所在する通称ヒョウタン池の北端部分も調査範囲に入っていたが、重機による掘削を行ったところ、厚さ4m近くの細砂層の崩壊がみられたためこの部分の調査を中止した。

註2 正岡陸夫・柳瀬昭彦「岡山県百間川遺跡の水田址」『月刊文化財』10 1978 及び最近の調査結果から。



第30図 第4調査区微高地東斜面土層断面図 ( $\frac{1}{100}$ )

## 第5節 第5調査区



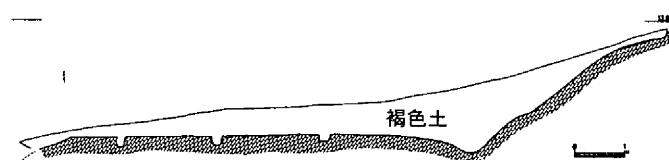
第31図 第5・6調査区地形図及び調査区設定図 ( $\frac{1}{2,000}$ )

西区の調査（第31図）

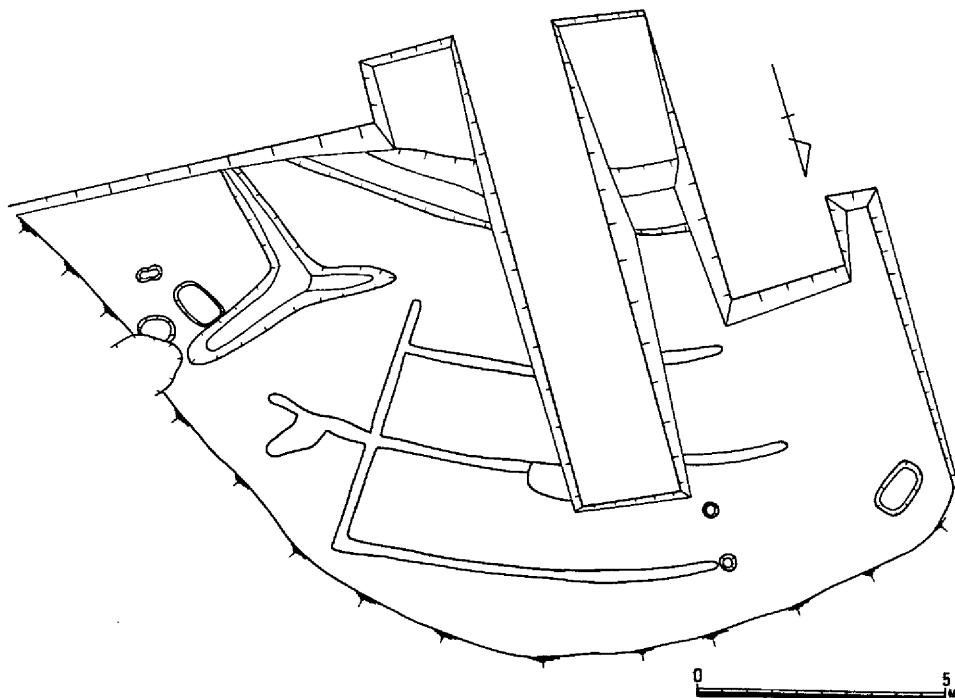
北に迫出する丘陵で、水田との比高は14mほどを測る。この丘陵上には、幡多村（現岡山市幡多）当時に避病院が存在し、その建築の際に古墳を破壊したとの地元の方の話があった。調査の結果、古墳の存在は認められなかったが、大規模な造成がおこなわれていたことが確認された。

東区の調査（第33図）

西区丘陵と谷を隔て東側に位置する。水田との比高は、12mほどである。丘陵斜面を削平して平坦部を造成している。10cmほどの溝が丘陵に並行するものと、直行するものとが確認された。溝内には、いずれも小碟が含まれており、暗渠排水と推測される。この丘陵は柿が植樹されており、これに伴うと思われる。（下沢）



第32図 第5調査区(東区)土層断面図 ( $\frac{1}{150}$ )



第33図 第5調査区(東区)遺構配置図 ( $\frac{1}{150}$ )

## 第6節 第6調査区

第5調査区の東区丘陵の東側の水田部分が調査対象である。T 1～T 4に亘って調査を実施し、T 1とT 4においては遺構は検出されなかった。

溝一1（第38図）

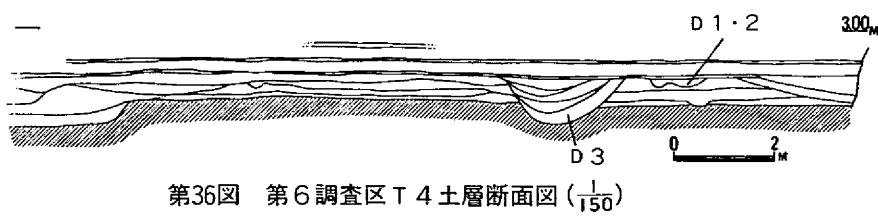
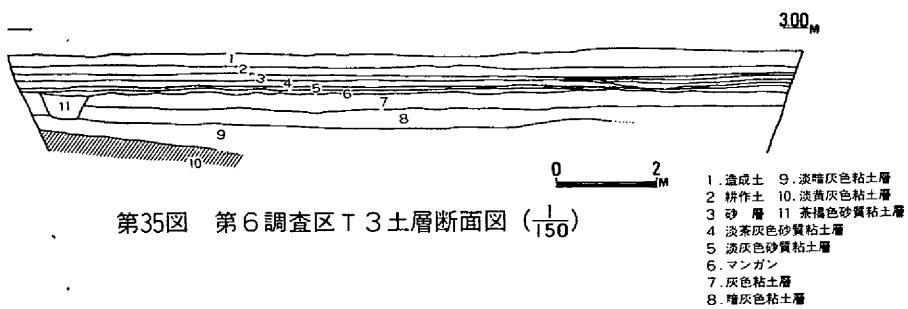
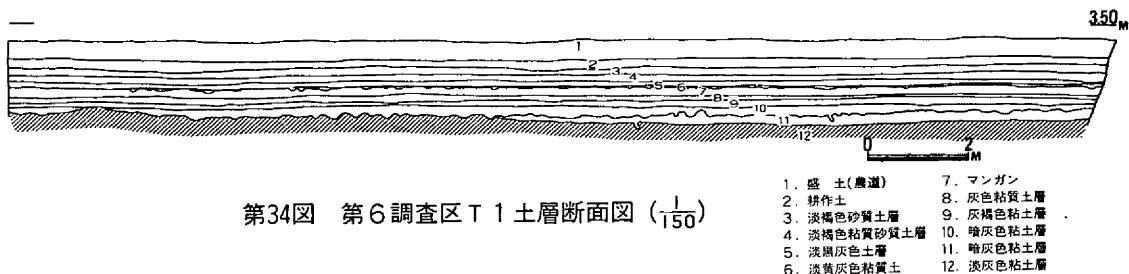
幅50cm, 深さ10cmを測る浅い溝である。出土遺物は、土錐が出土している。

溝一2（第38図）

溝1の西側に検出されたもので、幅76cm, 深さ4cmほどを測る浅いものである。この溝1・2は、T 3において交差した状態で検出され、両者の判別はできなかった。

溝一3（第38図）

溝2の西側に検出されたもので、幅1m50cm, 深さ90cmを測る。断面形は「U」字状を呈する。この溝はT 3において検出している。溝埋土の暗灰色粘質土より溝1で出土したものと同様の土錐を検



出した。

溝—4（第38図）

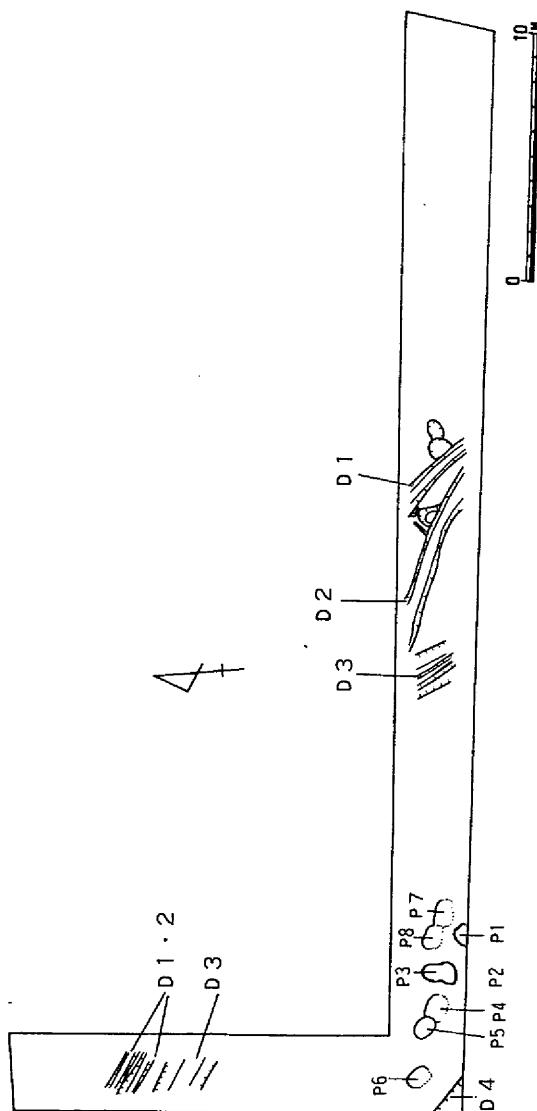
T 2 と T 3 のコーナー部分に東南から西北方向に存在する溝の北東肩を検出したものである。深さは、40cmほどを測る。出土遺物は、73の甕形土器の口縁部が出土している。



第37図 第6調査区 T 2 南壁土層断面図 ( $\frac{1}{250}$ )

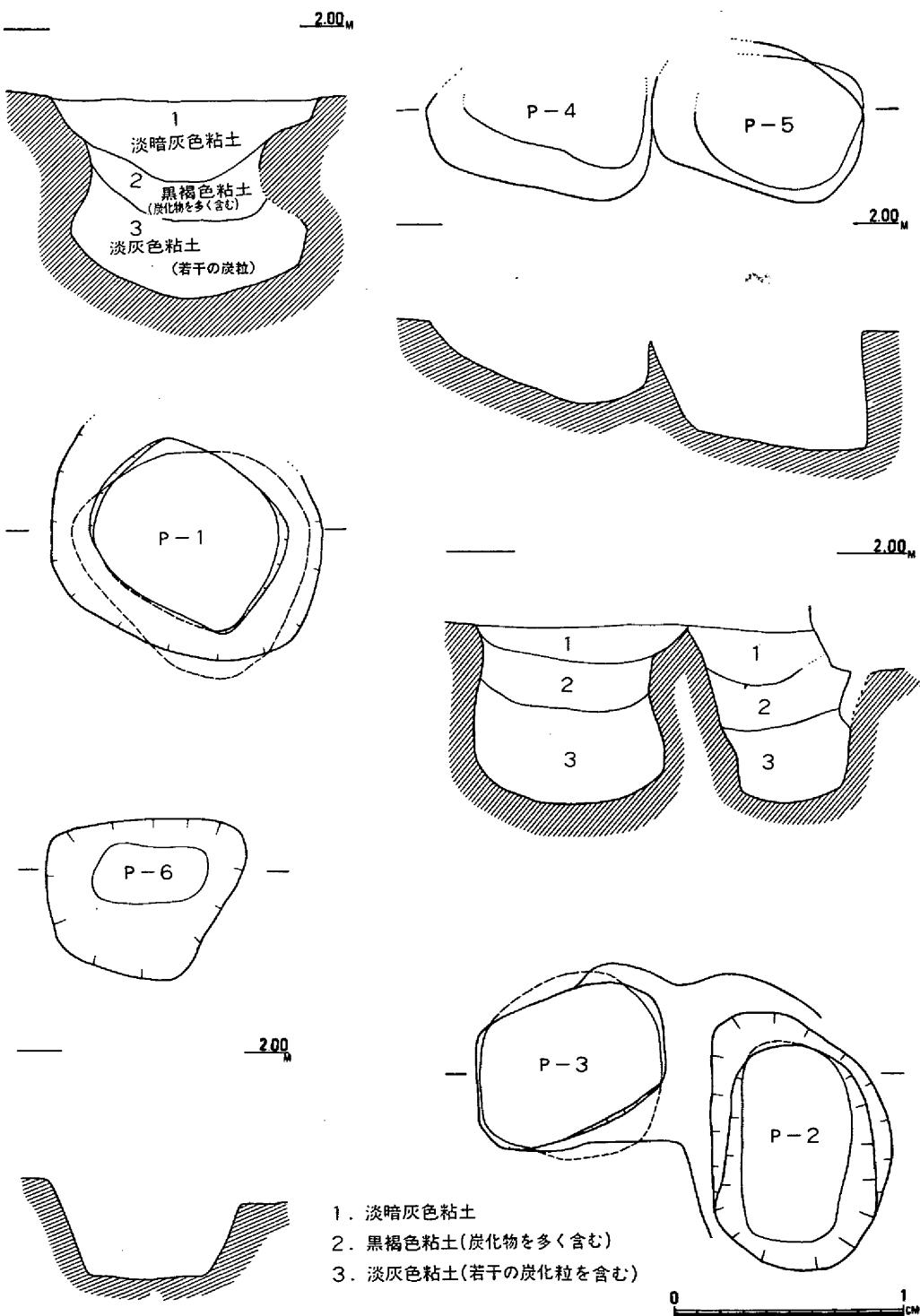
土壌—1（第39図）

平面プランは胸張り隅丸方形を呈し、規模は、1m26cm × 1m2cm、深さ90cmほどを測る。底部は、壁面より広く掘られ、一種の袋状の形態を示



第38図 第6調査区 遺構配置図 ( $\frac{1}{300}$ )

第6節 第6調査区



第39図 第6調査区袋状ピット実測図 ( $\frac{1}{30}$ )

### 第3章 百間川沢田遺跡

す。埋土中には、第2層より炭化物を含む層が存在する。出遺物は、底よりの74の甕形土器の底部が検出された。

#### 土壤一2（第39図）

P-3と接して存在するものである。プランは、隅丸方形を呈し、規模は1m12cm×79cm、深さ43cmを測る。底部は、湧水により崩壊し推定である。しかし掘り下げ中においては、袋状の形態を示す。

#### 土壤一3（第39図）

P-2に接して存在するものである。プランは隅丸方形を示し、規模は、86cm×62cm、深さ68cmを測る。このPitも袋状の形態を示す。

#### 土壤一4（第39図）

プランは隅丸方形を示す。規模は、崩壊のため不詳であるが、深さは36cmである。底は斜めに深くなっている状態を示す。

#### 土壤一5（第39図）

プランは隅丸方形を示し、規模は92cm×63cm、深さ50cmを測る。このPitも一部袋状を示す。

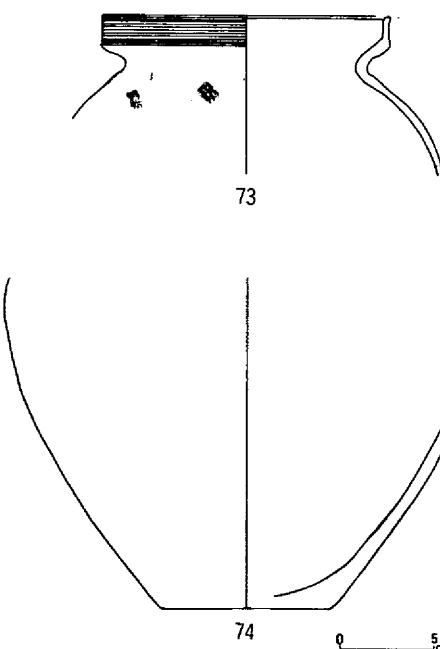
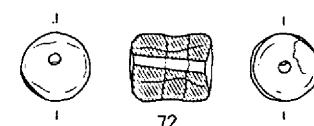
#### 土壤一6（39図）

プランは隅丸方形を示し、規模は86cm×72cm、深さ44cmを測る。底部は台形状態を呈する。

これらのPitはその形態から袋状Pitとして呼ぶべきものを含むが、このような低湿地にこの種のものが存在するのか問題であり、性格については、類例をまちたい。

#### 出土遺物（第40図）

71は溝1から、72は溝3から出土したものである。両者とも中央部に摩耗痕がみられる。胎土は比較的きめの細かい粘土を用い、焼成は良好である。色調は、淡乳灰色及び淡灰色を示す。（下沢）



第40図 第6調査区出土遺物 (1/4)

## 第7節 第7調査区

この調査区は、第6調査区の北にある。調査区は、低水路掘削工事のため、既存の用水路を迂回させる工事中に、掘削された用水路で発見したものである。工事中発見であるため、岡山河川工事事務所と協議を行い、工事工程を考慮して、調査日程等を協議した。その協議が成立すると、直ちに調査に着手した。そのため、十分な調査日程を設定することは無理であり、一部調査区の調査を中止して、この調査に取り組んだ。

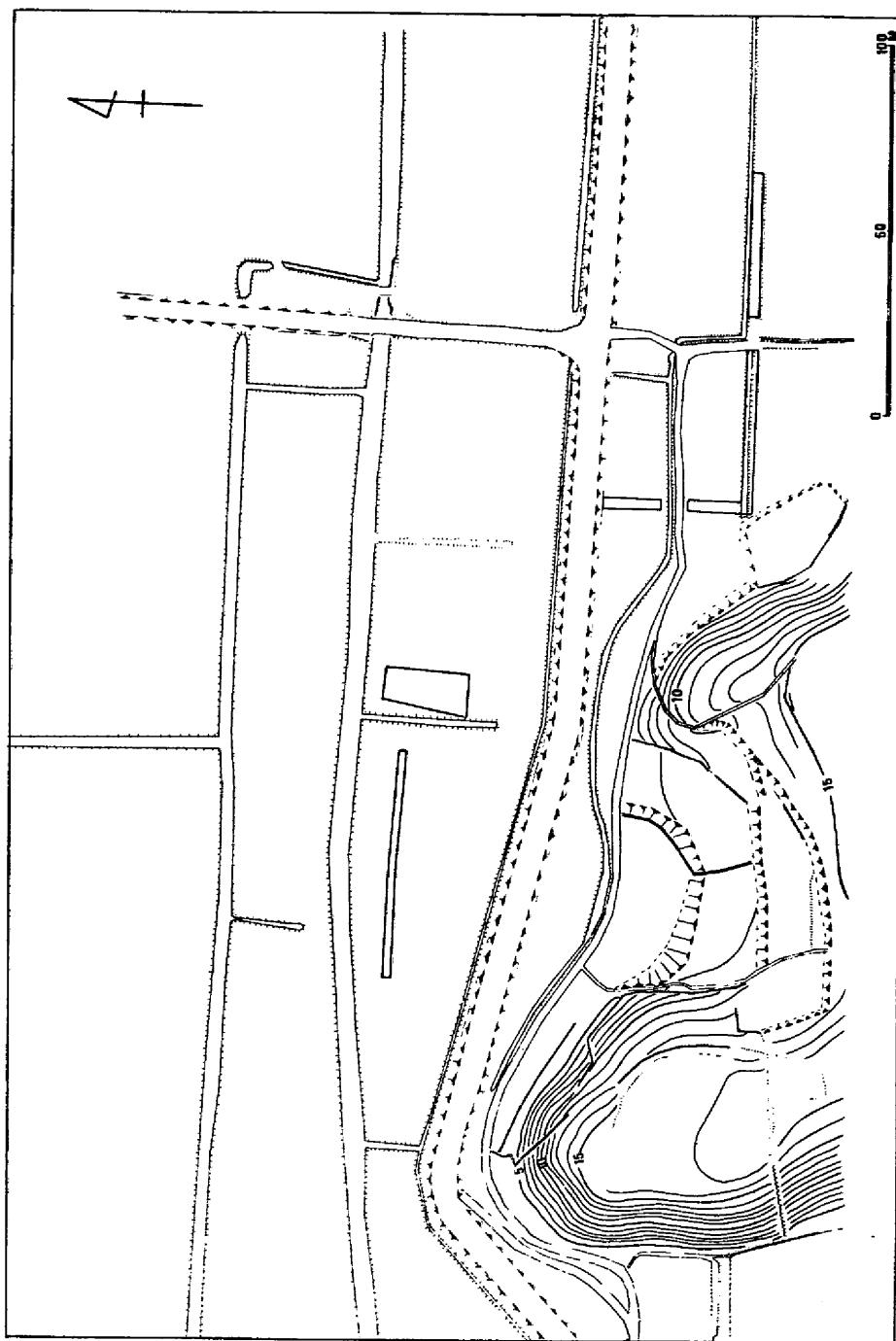
調査区の位置であるが、現在の沢田の集落の東側に、操山山塊から発生する尾根がある。その尾根には、沢田大塚古墳等が所在する。その尾根の先端が、一部北側に突き出た状態を呈している。その突き出た尾根の先端の北東側に調査区は位置する。

調査は2区に分けて行った。1区は、平面的に広げ、360m<sup>2</sup>の区画で調査した。この区画は、遺跡の中心部を成するものと考えられる位置に設定された。他の区画は、調査工程等を考慮して、遺跡の広がりを早急に知るためにトレーニングを設定した。そして、そのトレーニングに遺構の広がりが見られればそこを中心に調査区を拡大する目的で設定した。このトレーニング調査区は、1区の北壁を延長するように、西に向けてトレーニングを設定し、調査した。トレーニングの延長距離は62mを測る。

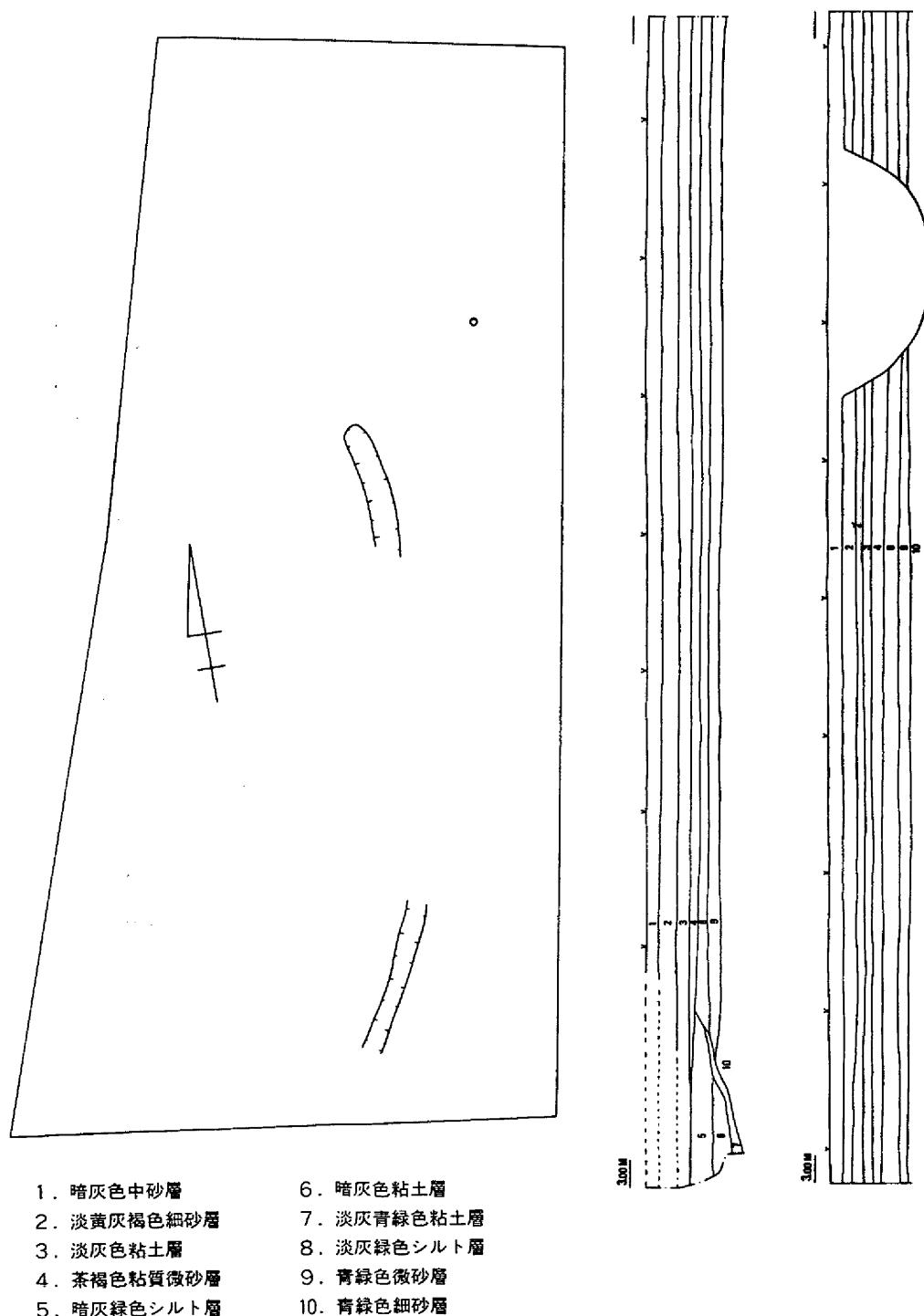
調査は、日程等の関係もあって、微高地の直上と思われる処まで重機により掘り下げた。その後、遺構の検出作業と、下層の確認調査を実施した。その結果、遺構面とされるのは、最初の一面のみで、下層には無いものと予測された。また、東壁の土層断面で見ると、北端近くで、微高地の下がるのが観察された。そのことから、同調査区の北端部は、微高地の端部に近いものと考えられる。同区で検出した遺構は、柱穴状ピット1と溝状遺構2である。ピットは、ほぼ正円形を呈し、径17cm、深さ18cmを測るものである。北側の溝状遺構は、浅く窪むもので、ゆるやかに曲る状態で検出した。溝状遺構の規模は、深さ3～4cm、幅50～55cmを測り、長さ2.9mを検出した。南側の溝状遺構も浅く、深さ3～4cm、幅40～50cmを測り、長さ3.3mを検出した。この調査区からの出土遺物は、非常に少なく、さらに、小破片であるため実測は不可能であった。

トレーニング調査による壁面観察によると、土層の堆積は、ほぼ水平堆積を示している。上層から見ると、暗灰色中砂層で、元の耕作土である。その下層に淡黄灰褐色細砂層がある。その下層は、淡灰色粘土層になり、古代末～中世に堆積した層位と考えられている。その下層に、茶褐色粘質微砂層があり、この調査区の遺構検出面に相当する。その下層は、淡灰緑色シルト層、青緑色微砂層となり、この2層以下はグライ化していく。以上のことから、この調査区における生活面は、茶褐色粘質微砂層がそれに相当するものと考えられる。

第7調査区においても、微高地は検出した。また、第6調査区においては、溝・袋状土壤を検出しておらず、その前面に広がる微高地であるため、その関係については注目されるところであった。しかし、その関連性を示すような遺構等は、何ら検出されなかった。この第7調査区は、遺構の検出状態やトレーニング調査による土層の観察等からして、未発達の微高地であったと考えられる。（井上）



第41図 第7調査区地形図及び調査区設定図 ( $\frac{1}{2,000}$ )



第42図 遺構配置図( $\frac{1}{150}$ )及び土層断面図( $\frac{1}{100}$ )

### 第3章 百間川沢田遺跡

表3 百間川沢田遺跡出土土器観察表

D-1・2 第6図

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弥生土器	1	復元口径14.0	○口縁部は内傾し、上下に拡張している。 ○長頸部は口縁部に向って鶴頸状に開く	○口縁拡張部に3条の凹線と3本が1セットの梢円形の割目のついた押出浮文が施されている。頸部外面は縱方向の刷毛目及び8条の凹線、内面は指頭押え。	○淡灰黄色。 ○1mm以下の砂粒を含む。
	2	復元口径 内径23.6 外径25.0	○口縁部は深い杯部からほぼ垂直に立ち上がり、端部は外方に僅かに肥厚している。	○口縁部は上端面に1条の凹線、外面に5条の凹線、内面に刷毛目が僅かに残存。杯部外面は窓切り、内面は弧状を描く丁寧な窓磨き。	○赤味がかった灰黄色。 ○1mm以下の砂粒を含む。

D-3 第7図

弥生土器	壺形土器 (台付直口壺)	4	復元口径 外径10.8 内径 8.6	○体部からほぼ垂直に立ち上がる頸部をもつ、口縁部は横方向に僅かに肥厚。	○口縁上端面に2条の凹線。頸部外面は横ナデ及び6条の凹線。肩部に縱方向の丁寧な窓磨き。	○赤味がかった灰黄色。 ○精製粘土。
		5	復元口径 7.8 体部 最大径16.0	○ソロパン玉状の体部からほぼ垂直に立ち上がる頸部をもつ。 ○円板充填	○頸部外面は横ナデ及び9条の凹線、体部外面は7單位の弧状を描く丁寧な窓磨き。内面は粗い刷毛目。 ○脚部外面は細かい刷毛目及び縱方向の丁寧な窓磨き。	○灰白色。 ○外面に一部丹塗り痕。 ○1mm以下の砂粒を含む精製粘土。
壺形土器	6 10	復元径 6 - 19.6 7 - 15.6 8 - 13.0 9 - 12.0 10 - 11.0	○口縁部は「ハ」字状の肩部から急に外方に折れ曲がる。端部は内傾し上下に拡張するもの(7・10)と主に下方に拡張するもの(6・8・9)とがある。体部と口縁部の境に明瞭な稜線(6・8・10)口縁端部内面には全て明瞭な稜線がある。	○口縁部は内外面とも横ナデ。 ○口縁端部外面には3~5条の深い凹線が施されているもの(6~9)と輪描波状文が施されているもの(10)とがある。体部上半の外面は全て縱方向の刷毛目である。内面は刷毛目及び指頭押え(6・9)、指頭押え及び横方向の窓削り(10)とがある。	○6は淡茶灰白色(外)、淡茶灰色(内)、7は淡茶灰色。 8は灰褐色(外)、淡茶灰色(内)、9は淡茶灰色、10は乳白色。 ○いずれも1mm以下の砂粒を含むやや良質の胎土をもつ。	
		11 12	復元径 11 - 6.4 12 - 6.4	○やや内湾しながら上方に向う。 ○僅かに上部底を呈する。 ○焼成後の穿孔がある。(11)	○外面は縱方向の丁寧な窓磨き。内面は下から上の窓削り。 ○端部は指で押えながら僅かにつまみ出している。 ○底は不整方向の指ナデ。	○11は黄灰白色(外)、淡褐色(内)、12は黄灰色(外)、灰白色(内)。1mm以下の砂粒を含むやや良質の胎土。
高杯形土器	13 16	復元口径 13 内径28.4 外径31.4 14 内径26.8 外径28.4 15 内径21.0 外径23.0 16 内径21.0 外径22.8	○口縁部はやや外湾する杯部からほぼ垂直に立ち上がるもの(13・14)と、やや内傾しながら立ち上がるものの(15)と、やや外傾しながら立ち上がるものの(16)とがある。口縁端部はやや外方に肥厚し、面を形成している。	○口縁部は内外面とも横ナデ。外面には4~8条の凹線を施し、上端面にも1~5条の凹線を施す。 ○杯部外面には丁寧な窓磨きを施し、弧状を描くものもある(13・14) ○15の杯部外面は窓削りの後に窓磨き。	○13・15は赤味がかった灰黄色、14・16は黄灰色。 ○13・16は精製された粘土を使用。 ○14・15は1mm以下の砂粒を含むが良質の胎土。	
		17 19	17復元径10.8 18復元径 9.8 19復元径11.0	○17・18は「ハ」字状に外反しながら下方に広がり、下端部は斜め上方に拡張し、逆三角形を呈す。 ○19はやや直立ぎみに「ハ」字状に外反しながら広がり殆ど拡張しない。	○内面は全体に横方向の窓削り。 ○18の外面は縱方向の窓磨きが僅かに観察できる。 ○下端部外面はいずれも横ナデを施し、17・19は凹線を施す。 ○18・19は窓状の工具による三角形の透し孔がある。	○17は灰白色、下端部外面に黒斑。18は赤味がかった灰黄色。19は灰黄色。 ○18は精製粘土。 17・19は1mm以下の砂粒を含む。
器台形土器	20	内径18.2 外径21.2	○「ハ」字状の幅広がりを呈し、裾部端は僅かに外方に肥厚している。	○外面全体に凹線、内面は下方向の窓削り。 ○裾部下端面に2条の凹線を施す。	○淡茶灰白色。 ○1mm前後の砂粒をやや多く含む。	

D-9 第10図

土師器	壺形土器	21	復元口径17.2	○口縁部はやや開き気味の二重口縁を呈する。	○口縁部は内外面とも横ナデ。 ○体部内面窓削り。	○淡褐色。1mm以下の砂粒を含む。
-----	------	----	----------	-----------------------	-----------------------------	-------------------

## 井戸 第13図

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器	22 25 26	22口径 16.0 体部最大径 23.4 器高 26.0 23復元口径 15.2 24口径 15.4 25口径 13.2 体部最大径 19.8 26復元口径 12.4	○口縁部は「く」字状に外反し、端部は上方に拡張する。拡張部は、直立するもの（22~24・26）とやや内傾するもの（25）とがある。 ○体部は、やや肩の張る卵型を呈すると思われる。 ○22の底部は、僅かに平底を呈する。 ○大型のもの（22~24）と小型のものの（25・26）とがある。 ○22・24・25は、ほぼ完存品である。	○口縁部内外面は横ナデ。拡張部外面には7~8条の横平行沈線文。 ○体部外面は基本的に刷毛目の後窪磨きと考えられるが、22・25は肩部上半まで丁寧な窪磨き、23は肩部上半まで刷毛目のみ、24は肩部下半まで丁寧な窪磨きが施されている。 ○体部内面は、基本的に指頭押え及び窪削りであり、指頭押えは体部下半が主で、底部には特に著しい。窪削りは体部下半においては上方向、体部上半は斜め及び横方向である。 ○体部と口縁部の境に指頭押えのみられるもの（23・24・26）がある。	○22・24は淡灰褐色、23は暗灰褐色（内）、25・26は灰褐色（内）。 ○23・25の外面は全面に煤が付着している。 ○26の肩部には縦に並んだ2つの浅い刺突痕がある。 ○25には縦状に細んだ植物繊維が一部付着している。 ○22の体部下半には黒斑がある。
變形土器	27	復元口径 15.6	○口縁部は、僅かに内湾しながら「く」字状に外反する。端部は僅かに下方に肥厚している。体部は卵型を呈すると思われる。	○口縁部は内外面とも横ナデ。 ○口縁端面に1条の凹線。 ○体部外面は肩部まで細かい窪磨き。 ○体部内面は窪削り。	○黄灰白色。 ○1mm以下の砂粒を含む。
高杯形土器	28	口径 8.8 器高 11.5	○小型の丸底塔に脚部をつけたような形態を示す。 ○口縁部は、やや平たい球形を呈する杯部から約15°の角度で斜め上方に、僅かに外湾している。 ○口縁端部は丸くおさめている。 ○口縁部と杯部との比率はほぼ3:2である。 ○脚部はやや内傾する短い柱状部から「ハ」字状に広がり、徐々に薄くなる。 ○脚部は左右対称であるが杯部は左右対称ではない。	○口縁上端部は、約1.5cmの幅で内外面とも横ナデ。それ以外の口縁部及び杯部は、内外面とも横方向の細かく丁寧な窪磨き。 ○脚柱状部の外面は縱方向の窪磨きを施し、内面は、窪削りの後、指ナデを施し、しぼり痕が観察できる。 ○脚根部は、内外面とも細かい刷毛目を施している。 ○脚根部には、円形を呈する4つの透し孔がある。 ○杯部と脚部の接合部内面には約5mmの深さで細い穿孔がある。	○黄褐色。 ○殆ど砂粒を含まない精製された粘土を使用している。 ○ほぼ完形品。
	29		○やや内傾する脚柱部から「ハ」字状に広がる裙部をもつ。	○全体に磨滅が激しく調整は不詳。 ○裙部に、円形を呈する4つの透し孔がある。	○赤黃灰色。 ○水洗し粘土。
鉢形土器	30	復元口径 14.0	○体部は、やや内湾する逆「ハ」字型を呈する。 ○口縁部は丸く面をなさない。	○口縁部は内外面とも横ナデ。 ○体部外面は、指頭押えの後、横方向の細かい窪磨き。 ○体部内面は窪削り。	○淡灰褐色。 ○1mm前後の砂粒を含むやや粗い胎土。
	31	復元口径 18.4	○口縁部はやや丸味をもつ体部から一旦内傾してほぼ垂直に立ち上がり、端部は丸くおさめている。	○口縁部は内外面とも横ナデ。 ○体部外面は、不整方向の刷毛目。 ○体部内面は縱方向の窪磨き。	○赤味がかった灰黄色。 ○殆ど砂粒を含まない精製粘土

## 土壤 第14図

土師器	變形土器	33	口径 13.5	○口縁部は「く」の字状に外反し、端部はや、丸く収まっている。 ○体部はほとんど球形を呈す。	○口縁部はナデ調整、体部外面は横方向および斜め方向の刷毛調整、体部内面は横方向の窪削り。	○1~2mmの砂粒を含み、淡黄褐色を呈す。体部下半に煤の付着がみられる。
-----	------	----	---------	--	--	--------------------------------------

## 島状高まり遺構 第16図

浮生土器	變形土器	34		○口縁部は「く」字に鋭く外反し、端部は内側に拡張し面を形成している。 ○体部は口縁部から「ハ」字状に下がり、器高中位よりや上方で最大径を示し、やや外反しながらすばまり底部に至る。 ○底部はやや上げ底である。	○口縁部は、内外面とも横ナデ。 ○口縁端面には4条の凹線。 ○体部外面は刷毛目の後、肩部の下まで丁寧な窪磨き。 ○体部内面は上半部は指頭押え、下半部は縱方向の窪削り。 ○底部は指頭押え及び指ナデ。 ○底部中央部には焼成後の穿孔がある。	○黄灰白色（外）、暗茶灰色（内）。 ○1mm以下の砂粒を含む。 ○外全体に煤が付着している。
------	------	----	--	---	--	--

### 第3章 百間川沢田遺跡

#### 包含層 第17図

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器	36	復元口径13.8	○「く」の字状に折れ曲がった口縁の端部が真直ぐ上方に延び、僅かに肥厚する。	○口縁部はナデ調整され、上方に延びた端部外面には櫛幅平行沈線がみられる。	○1mm程の砂粒を含み、外面赤褐色、内面暗赤褐色を呈す。
	37 38	復元口径12.6 15.3	○「く」の字状に折れ曲がった口縁の端部が少し内傾しながら上方に長く延びる。	○口縁部はナデ調整され、上方に延びた端部の外面に、8条の櫛幅平行沈線を施している。38の肩部外面は刷毛調整内面は直削り。	○1~2mmの砂粒を含み、37は淡灰桃色、38の内面暗赤褐色、外面赤褐色。
	39	復元口径11.2	○口縁部は外反してほとんど真直ぐ斜め上方に延びている。 ○体部はほとんど張りをみせず小さくまとまる。	○ナデ調整と思われるが、不鮮明である。	○1~2mmの砂粒を含み、淡黄桃色を呈す。
	40	復元口径12.8	○内済しながら斜め上方に延びた口縁の端部が僅かに外反気味に収まっている。	○内面および外面上半はナデ調整、下面下半は直磨きされる。	○1mm以下の微砂粒を含み、内面淡赤褐色、外面明黄褐色を呈す。
	41	口径 18.2 器高 9.3	○体部は内済しながら斜め上方に延び、口縁部は肥厚しないで収まっている。底にはつまみ出した台部が付いている。	○体部は刷毛調整の後、直磨きされている。口縁部はナデ調整。 ○台部はナデ調整	○1~2mmの砂粒を含み、淡赤褐色を呈す。内面および外面の一部に丹塗りがみられる。
	42	口径 5.6 最大器高 6.9 体部最大径 5.6	○やや肩の張る体部から僅かに外反する口縁部をもつ。底部は上げ底を呈す。	○口縁部及び底部は指頭押えで作り出している。 ○体部は粗い刷毛目及び指頭押え。	○淡茶灰色。 ○1mm以下の砂粒を含む。完形品。

#### 第2調査区 第20図

弥生土器	44	復元口径21.2	○体部はほぼ直線的に伸び口縁部は屈曲して大きく外反する。	○表面剥離のため不明。	○胎土は良質で、細砂を含む。赤褐色を呈し、焼成は良好。
變形土器	45			○内面はヘラ削り。外面はタタキ。	○胎土には1mm前後の砂粒を多く含み、乳褐色を呈す。
高杯形土器 脚部	46	脚端部径11.8	○脚部は、上部を欠くが、下部は折れ曲がって大きく開き、端部は丸い。	○表面剥離のため不明	○胎土は良質で、細砂を少し含む。赤褐色を呈し、焼成は良好。
變形土器	47	復元口径13.8 脚部最大径 15.3	○口縁部は折れ曲って上方にのげる。	○口縁部は、内外面ともヨコナデ、体部は、部分的にハケ目が見られ、内面はヘラ削り。	○1mm前後の砂粒を含む。淡褐色~褐色を呈し、焼成は良好。
	48	口径 17.0	○口縁部は、外に大きく開き、端部外面には浅い凹線が2条施される。	○口縁部は、内外面ともヨコナデ、脚部外面はハケナデ、内面はヘラ削り。	○胎土は良質で、1mm前後の砂粒を含む。 ○乳褐色を呈し、焼成は良好。
鉢形土器	49	復元口径12.2 器高 7.7 台脚径 4.5	○体部は、直線的に外に開き、口縁端部は丸い、台脚部は、やや外方に開き、端部は丸い。	○体部内面は、ヘラ削り後ナデ、体部と台脚部の境は指頭圧痕が見られる。	○胎土は良質で1mm以下の砂粒を多く含む。淡赤褐色を呈し、焼成は良好。

#### 第3調査区 第27図

縄文土器	深鉢形土器	52	○口縁部は、やや外傾する。口縁端部には、刻み目を施す。	○口縁部内外面には、ナデ調整が施されている。	○色調、黒褐色。 ○胎土、1.5mm以下の砂粒を含む。
		53	○口縁外反部下端の屈曲部片である。屈曲部に文様帯を施す。	○屈曲部下は、擦痕がみられる。文様帯は、半截竹管状の工具による刺突文がみられる。	○色調、暗茶灰色。 ○胎土、0.5mm以下の砂粒を含む。
		54	○53と同様。	○屈曲部下は、擦痕がみられ、屈曲部には、刺突文がめぐる。	○色調、暗茶灰色。 ○胎土、0.5mm以下の砂粒を含む。

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
深鉢形土器	55		○口縁部は、直立気味に立ち上がり端部がやや外反する。口縁端部の外面には、突帯をもつ。	○口縁部内外面は、ナデ調整が認められる。突帯は、貼り付けておりさらに範状のもので刻み目を加えている。	○色調、淡茶灰色。 ○胎土、1.5mm以下の砂粒を含む。
弥生土器	56		○腹部上半部である。	○内外面とも範磨きを施す。 ○突帯は、削り出しにより、1.3cm幅の突帯を作り、その内に1条の沈線を施している。	○色調、淡黄褐色。 ○胎土、2mm以下の砂粒を含む。
	57		○56と同様。	○56と同様。	○色調、白褐色。 ○胎土、1.5mm以下の砂粒を含む。
	58		○壺の頸部片で、やや細みである。	○内面は、ナデにより調整している。外面は、不明であるが、頸部に4条の沈線が確認でき、文様帶を形成している。	○色調、淡灰褐色。 ○胎土、1.5mm以下の砂粒を含む。
	59		○58と同様。	○内面は、ナデ調整である。外面は、削り出しにより突帯を作り、その内に、2本の沈線を施している。	○色調、灰褐色。 ○胎土、2mm以下の砂粒を含む。 ○色調、淡灰白色。
壺形土器	60		○口縁部は、大きく外反し端部はやや肥厚する。端部下部には、刻み目が施されている。頸部には、沈線があがぐる。	○口縁部内外面は、ナデで調整している。 ○口縁部刻み目は、範で施されている。 ○頸部沈線は、範によるもので2条ある。	○色調、淡灰白色。 ○胎土、2mm以下の砂粒を含む。
	61		○口縁部は、ゆるやかに外反する。口縁端部に刻み目を施す。	○口縁部内外面は、ナデ調整である。口縁端部下半の刻み目は、範によるもので、60に比べ大きく、間隔も広い。	○色調、淡褐色。 ○胎土、1.5mm以下の砂粒を含む。
	62		○頸部片である。頸部には沈線があがぐる。	○頸部の沈線は、範によるもので4条施す。	○色調、淡褐色。 ○胎土、1.5mm以下の砂粒を含む。
	63		○62と同様。	○沈線は、範で3条施す。	○色調、黒褐色。 ○胎土、1.5mm以下の砂粒を含む。
壺形土器	65	口径 13.8	○口縁部は、頸部から「く」の字状に外反する。口縁端部は、端面をもつ。	○口縁部の内外面は、横ナデ調整を施されている。	
高杯形土器	66	口径 13.0	○杯部は、やや小型で浅い。口縁は、小さく外反する。	○杯部は、ヘラミガキをていねいに施されている。	
鉢形土器	67	口径 14.0 高さ 12.0	○口縁部は、頸部から「く」の字に外反し、さらに上方にのびる。体部最大径は、口径よりもやや大きい。	○体部は、下半を縦、上半を横のヘラミガキが施されている。口縁部内外面は、横ナデによる。体部内面は、ヘラケズリのち上半をヘラミガキを施す。	
製塙土器	68	底部径 3.3	○脚部は、「ハ」の字に広がる。	○脚部は、指頭にオサエと、ナデを施す。体部は、外面を横方向の叩き、内面をナデによる。	

## 第6調査区 第40図

土器	壺形土器	73	口径 15.1	○口縁部は「く」の字状に外反し、端部は上方に拡張する。	○口縁端部外面には11本の横描沈線文及び内部に沈線を施文する。 ○頸部を横ナデを行い下半について粗いハケ調整。 ○脚部内面は横位のヘラ削り。	○外面一黒茶褐色。 ○内面一暗茶褐色。 ○細砂を含む。 ○外面に煤付着。
		74	底部径 9			○二次的な火を受けており詳細な観察はできず。

図版 1

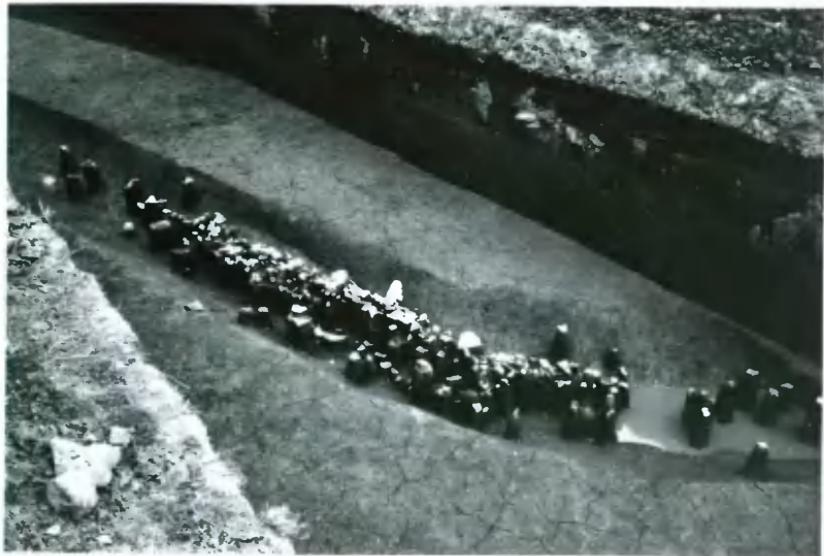


百間川沢田遺跡 第1調査区 1区遺構検出状況（東から）

図版2



1. 第1調査区 D-1・2 遺構検出状況（東から）



2. 第1調査区 D-3 出土遺物検出状況（北西から）

図版3



1. 第1調査区 D-5 遺構検出状況（東から）



2. 第1調査区 D-5 断面（東から）

図版4



1. 第1調査区 井戸出土遺物検出状況（北から）



2. 第1調査区 2区「島状高まり」遺構検出状況（西から）

図版5



1. 第2調査区 遺構検出状態（東から）



2. 第2調査区 「島状高まり」遺構付近南壁面（北から）

図版6



1. 第3調査区 溝及び微高下り 検出状況（西から）



2. 第3調査区 水田遺構 検出状況（西から）

図版 7



1. 第3調査区 微高下り断面（北西から）



2. 第3調査区 T-6 断面（北から）

図版8

1. 第4調査区 水田検出状態（西から）



2. 第4調査区 畦土層断面（北から）





1. 第5調査区 東区暗渠 検出状況（南から）



2. 第5調査区 西区全景（南から）

図版10



1. 第6調査区 袋状ピット検出状況（北から）



2. 第6調査区 溝検出状況（東から）

図版11



第1調査区 出土遺物

図版12



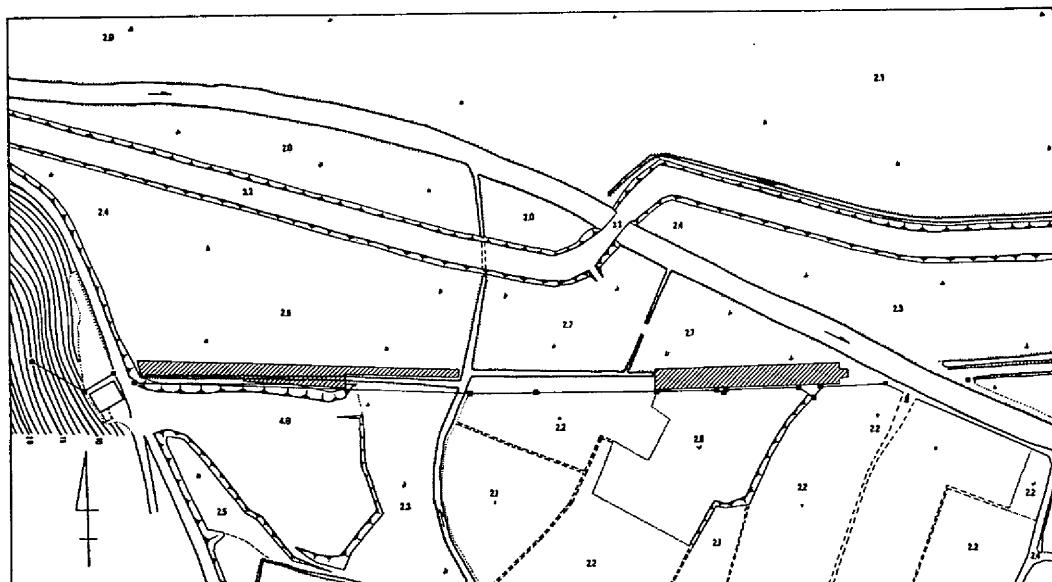
第3・6調査区 包含層出土遺物

## 第4章 百間川長谷遺跡

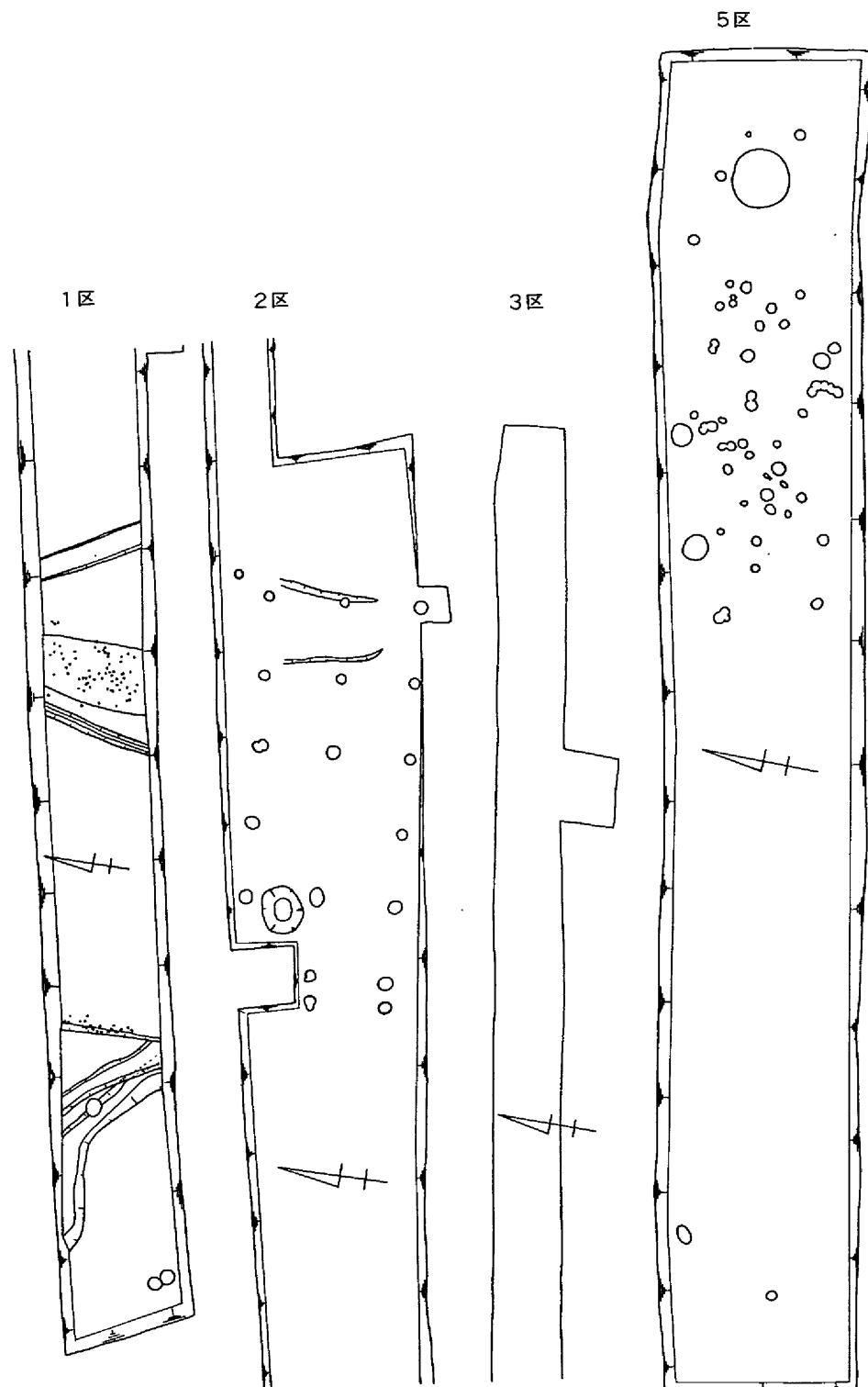
百間川長谷遺跡は、岡山市今谷に所在する。遺跡の背後には、操山山塊があり、その山塊から派生する尾根の先端上と、尾根と尾根にはさまれた低地とに遺跡は立地する。遺跡の周辺には、条里制の痕跡が見られるが、遺跡の近辺、及びその北西部においては、条里の乱れが見られる。その乱れは、北西から南東へ帯状に続くもので、条里制に規制されない河川の痕跡とすることができる。それが、長谷遺跡丘陵部の先端をかすめて、岩間丘陵にぶつかる。そのため、この付近は、条里の施行される頃は河川内もしくは、それに伴う低湿地であったと考えられる。

### 第1節 右岸用水路調査区

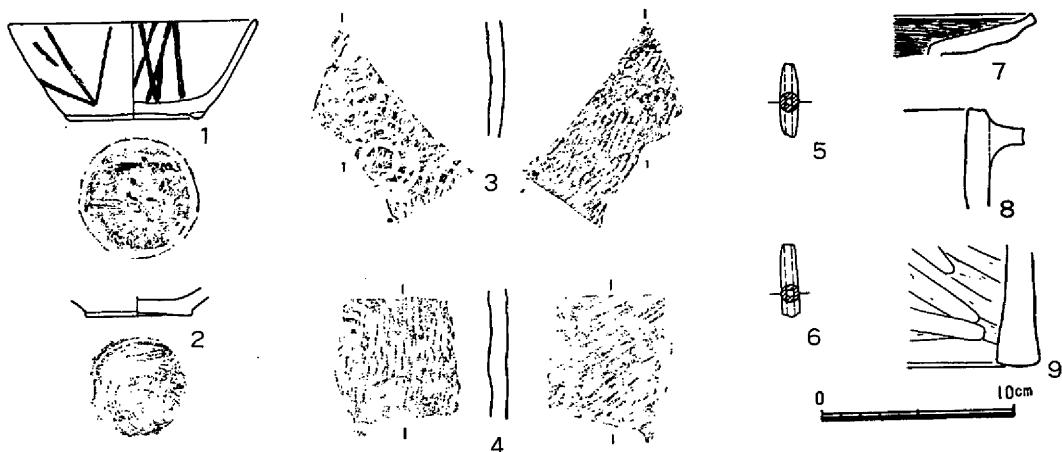
調査は、丘陵の裾から東へ約85mを調査した。調査区は、用地幅抗から内側へ幅6mで、延長40mが調査範囲であった。しかし、調査中に、水田址を検出したこともあって、トレントを延長して遺構の有無を再確認することにした。さらに、東方へボーリング調査を実施し、中世の微高地を発見した。調査区は、1区から5区までに分けた。1区は、最初に調査区を設定した範囲で、溝、水田址等を検出した。2区は、トレント調査中に建物を検出した範囲である。3区は、トレント調査を実施した範囲内で、建物を検出した以東の部分である。4区は、区画は設定したが、ボーリング調査の結



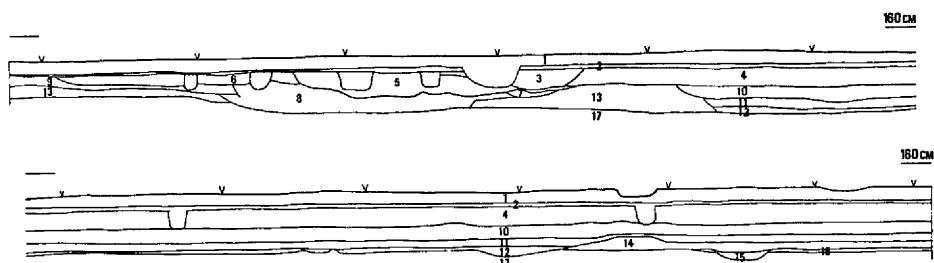
第43図 百間川長谷遺跡地形図及び調査区設定図(右岸用水路) ( $\frac{1}{2,000}$ )



第44図 遺構配置図 ( $S = 1 : 200$ )

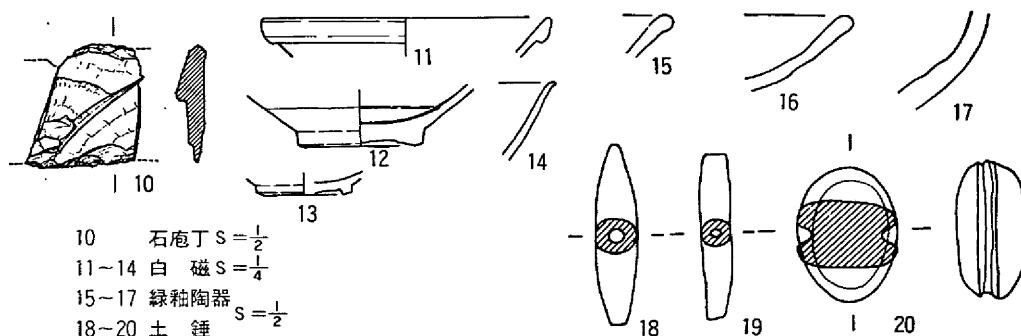


第45図 1区溝出土遺物

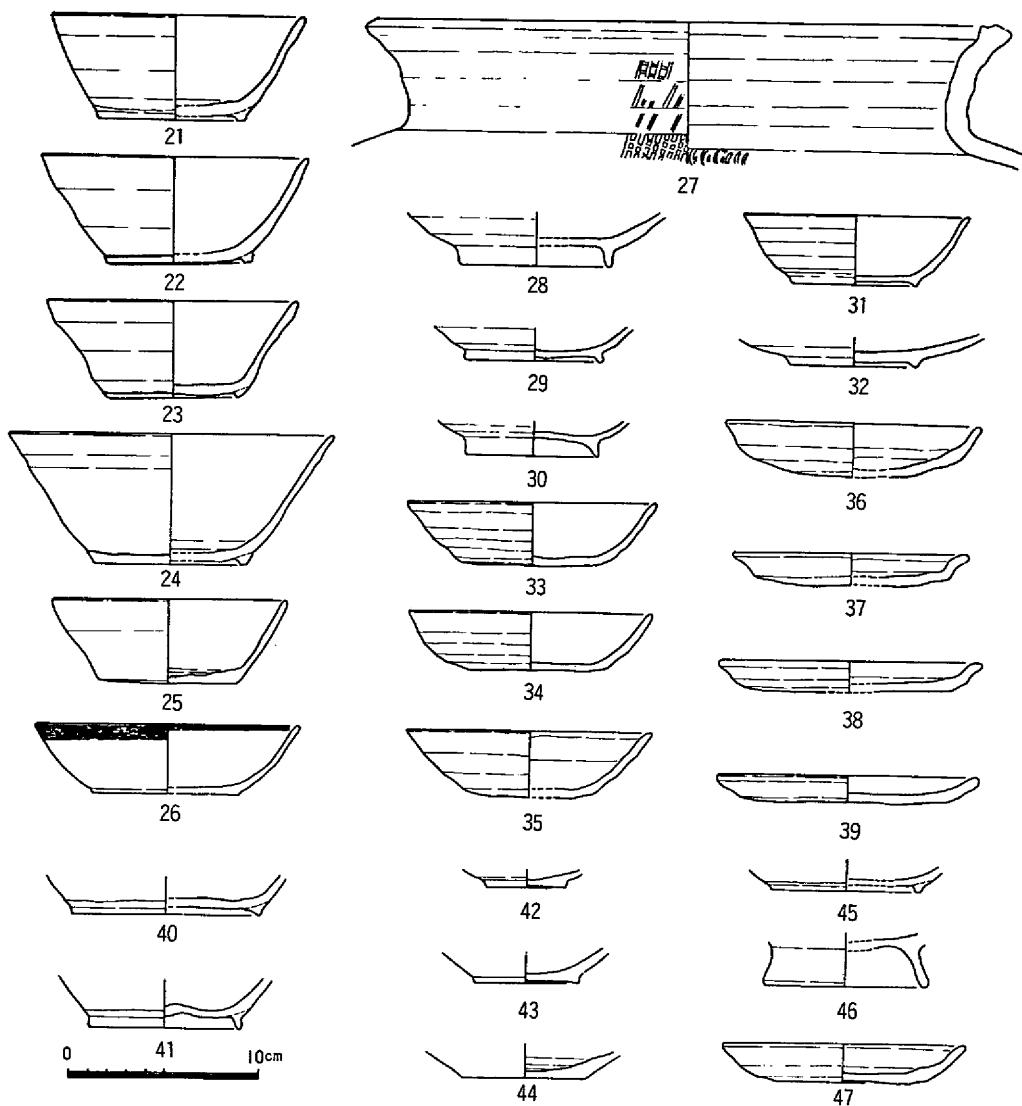


- |           |                  |              |             |
|-----------|------------------|--------------|-------------|
| 1. 耕作土    | 5. 黄褐色粗砂(砾を多く含む) | 9. 黄茶灰褐色砂質土  | 13. 灰茶褐色粘質土 |
| 2. 床土     | 6. 茶褐色粗砂         | 10. 灰青色粘質土   | 14. 黄灰褐色砂質土 |
| 3. 黄褐色粗砂  | 7. 灰褐色粗砂(溝2)     | 11. 灰青色粘土    | 15. 淡褐色粘土   |
| 4. 黄灰色粘質土 | 8. 黑褐色砂質土(溝1)    | 12. 茶褐色土(床土) | 16. 茶褐色土    |
|           |                  |              | 17. 黄褐色粘質土  |

第46図 1区土層断面図 ( $S = 1:100$ )



第47図 1区水田層出土遺物



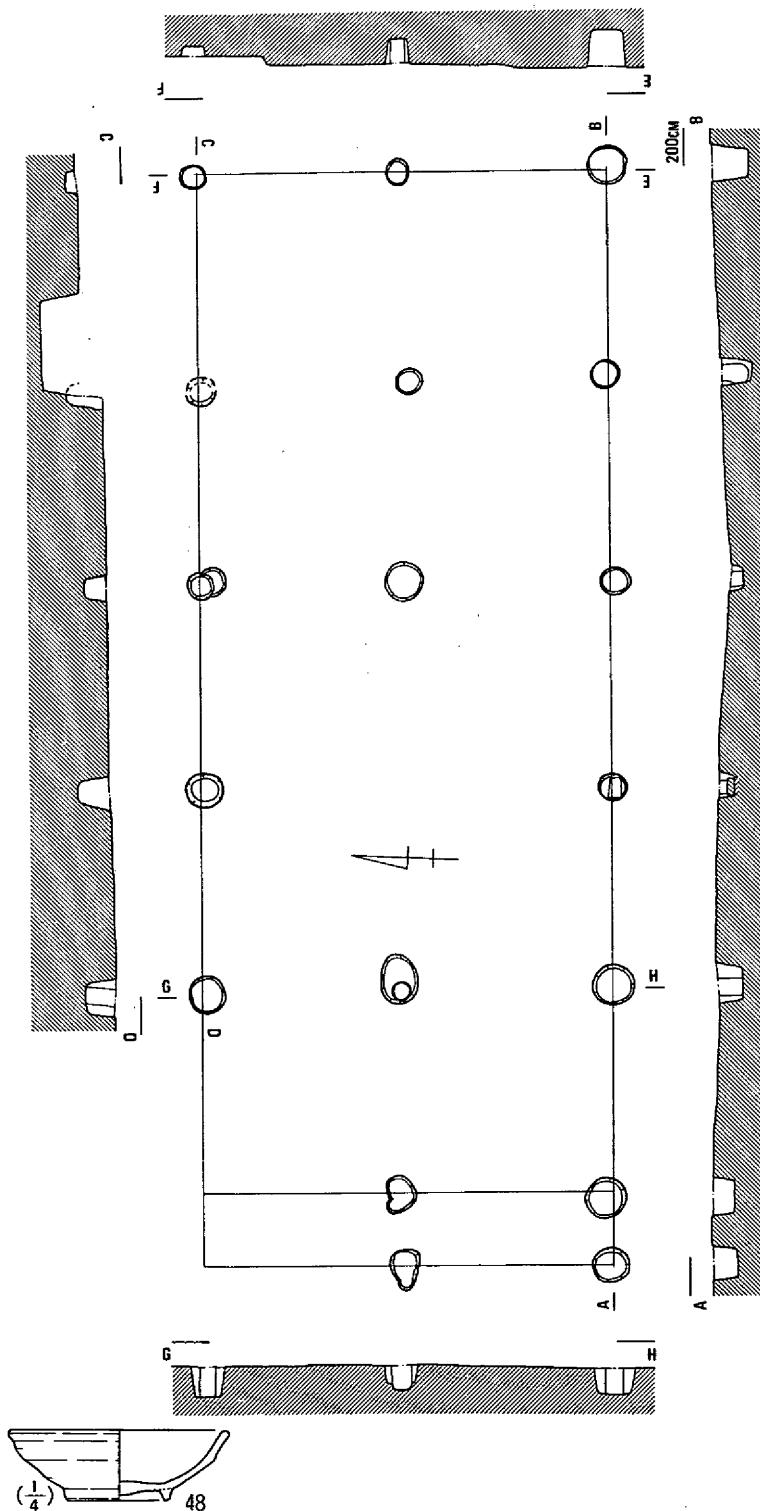
第48図 1区包含層出土遺物

果、低湿地の状況を呈するため、それ以上の調査は実施しなかった。5区は、新たに発見した中世の微高地部分である。

(井上)

#### 溝-1

南東から北西に流れ、大きく湾曲して東流し、更に北流すると考えられる溝で、長さ 6m・幅 75cm・深さ 13~24cm を測る。溝内に堆積している土は、黒褐色砂質土で、土層観察によると、多量の平安中期の遺物包含層である茶褐色粗砂層の下層にあたる。しかし溝1出土遺物と、包含層出土遺物との時期差は全く見られない。両者とも同じ須恵器の高台付杯・糸切り底の杯が出土している。

第49図 2区建物平・断面図( $S=1:80$ ) 出土遺物( $S=\frac{1}{4}$ )

## 溝一2

溝1の東側にあって、一部溝1を切っているので、より新しいことが判る。長さ3.2m・幅50~85cm・深さ5~6cmを測る。遺物は全く出土していない。堆積土は、灰褐色粗砂で礫を多量に含む。  
(浅倉)

## 水田址

溝一1・2の東側で検出したもので、この水田址は、溝を検出した地山を掘り込んで造られており、東側へ広がる。地山を掘り込んだ部分で径5~6cmの杭状の痕跡を多数検出した。その9m東に、水田層のやや盛り上る部分が見られた。上端の幅0.4~0.5m、下端の幅1.2~1.4mを測るもので、発掘区を南北に横断する状態で検出した。このやや盛り上がる部分の土質は、水田層の土質と同じであり、畦畔と考えられる。水田層の下面には、鉄分の集積が見

#### 第4章 百間川長谷遺跡

られた。畦畔と考えられる部分にも、径5～6cmの杭状の痕跡を多数検出した。この水田址は、先述の溝、及び後述の建物との関係から、平安時代と推定される。水田層からは、綠釉陶器片が3点出土した。

#### 建物

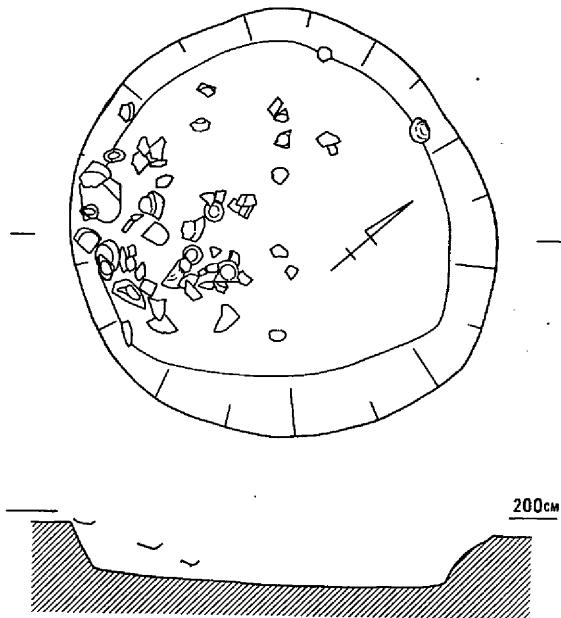
東西方向に棟を持つ掘立柱の建物である。建物の規模は、梁間2間、桁行5間の建物である。北西隅の柱穴は、電柱が存在したために調査できなかったが、他の柱穴は全て検出した。東西方向の柱穴列の中央列、東から4本目は、入念な調査をしたにもかかわらず柱穴が検出されなかったことからすれば、当初からこの部分には柱穴は存在しなかったとすべきであろう。また、西側の南北方向の柱穴列は、2条が非常に近接している。この部分の柱間は、0.8mを測る。北側柱穴列の東から2本目の柱穴の底部から完形の楕形土器が出土した。建物の規模は、梁間4.3m、桁行15mを測る。

#### 5区

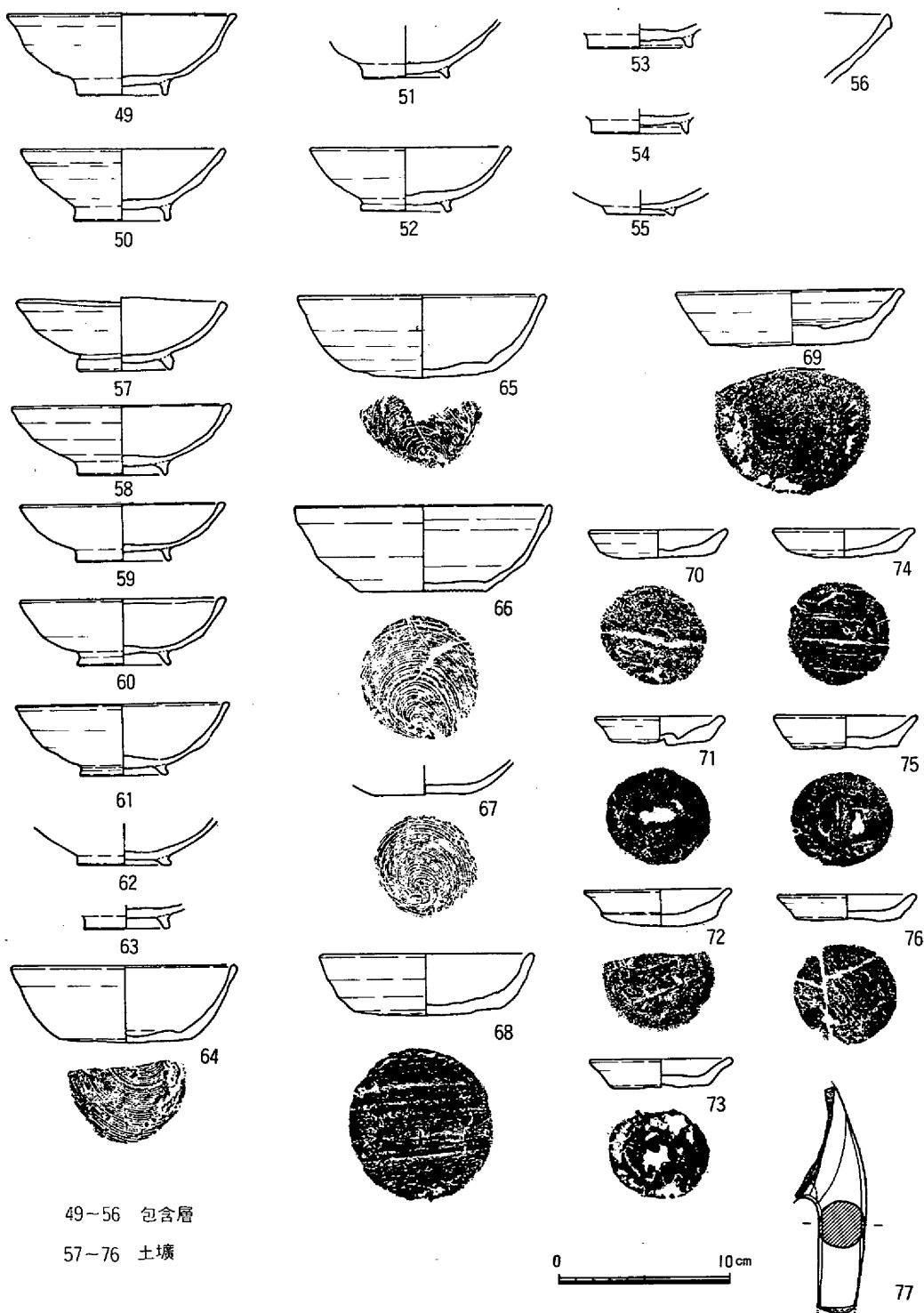
5区は、1区の調査中に発見した遺跡である。地形的には、1～3区のある部分と、5区の間にはは、旧河道が存在するものと推定される。今回の調査では、その部分を4区とし、坪掘りにより湿地層の厚いことを確認した。5区は、砂の堆積による微高地である。遺構は、調査区の東側に集中しており、東側には、2個の小ピットを検出したのである。東側に集中して検出した遺構は、そのほとんどが柱穴と考えられる小さなピットである。柱穴は、多数検出したが、建物としてまとまるものはなかった。

#### 土壤

調査区の東端近くで円形の土壌を検出した。土壌の平面はほぼ正円を呈し、直径160cmを測る。深さは、10～15cmで、底面は、ほぼ平坦である。土壌の南面側からは、中世土器の楕、小皿がまとまって出土した。  
(井上)



第50図 5区土壌遺物出土状態 ( $\frac{1}{30}$ )



49-56 包含層

57-76 土壌

第51図 5区包含層及び土壌出土遺物

## 第2節 丘陵部調査区

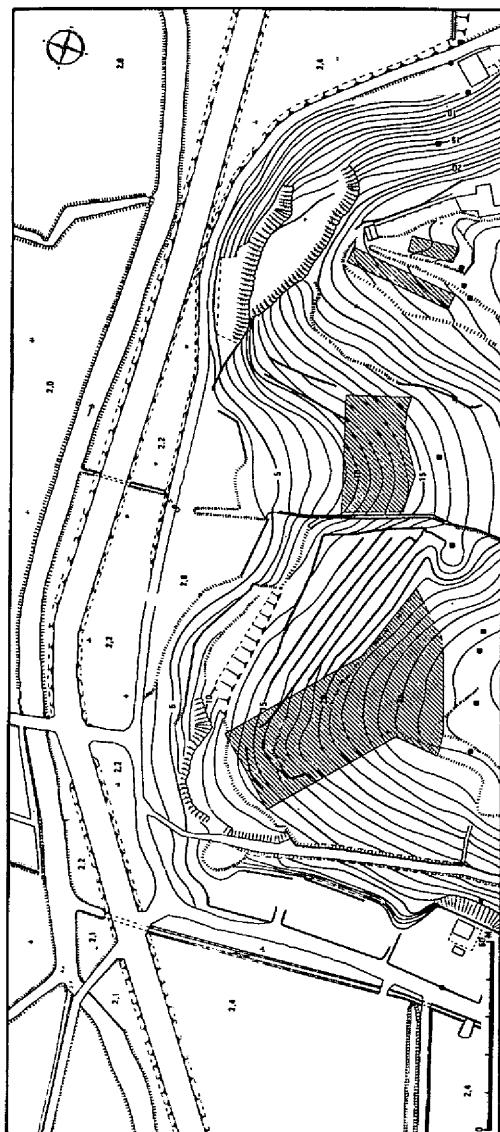
同調査区は、右岸用水路調査区1区の東側に在る丘陵部分である。調査区は、北に伸びる二つの小尾根と、その間の谷部を含むものである。調査は重機により表土掘削を行なった。

### 東側丘陵区

東側尾根は、一部に露岩の見られる部分があり、表土層の薄いことが予測されていた。重機による表土掘削においても、それを裏付けるものであった。この部分には、尾根上にほぼ南北のトレンチを2本設定した。西側のトナンチは小さく、 $4 \times 12m$ の大きさである。表土層は、北西に向けてはやや厚いが、南側では露岩が見られた。東側のトレンチは、 $4 \times 30m$ の大きさである。このトレンチは、北側に露岩が見られたが、南側には表土層が厚く堆積するのが見られた。しかし、竹やぶにより、著しい削平が見られた。いづれのトレンチも、精査したにもかかわらず、遺構は検出されなかった。

### 西側丘陵区

西側尾根は、尾根の面積も広く、等高線もゆるやかであり、地形的には良好なものが見られた。ただ、北向きであることが難点といえるであろう。この尾根上を、ほぼ全面にわたって表土を排除した。表土層は、 $20 \sim 30cm$ で、その下は、黄色の地山になる。重機による表土掘削後の表面観察においては、何ら遺構は検出されなかった。出土遺物としては、小破片の土器片数点が出土した。それ等は、小破片であるため、器形、器種等は不明である。以上のように、西尾根上には、何ら遺構を検出することなく、また、見るべき遺物も出土することなく調査を終えた。

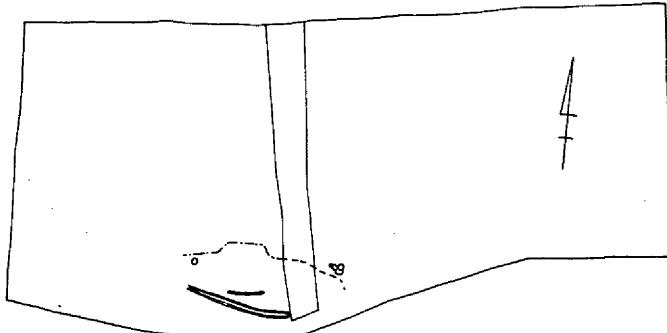
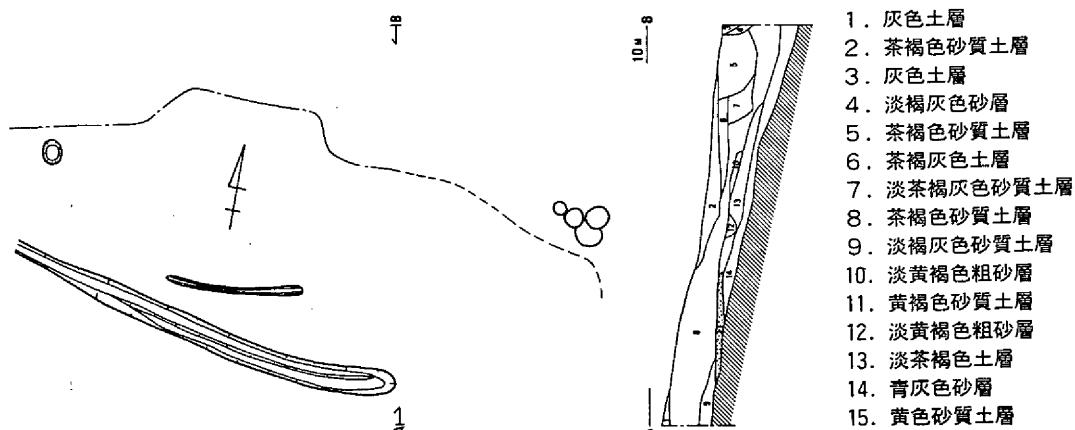
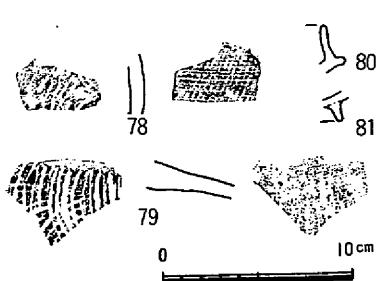


第52図 百間川長谷遺跡地形図及び調査区設定図(丘陵部) ( $\frac{1}{2,000}$ )

## 谷地区

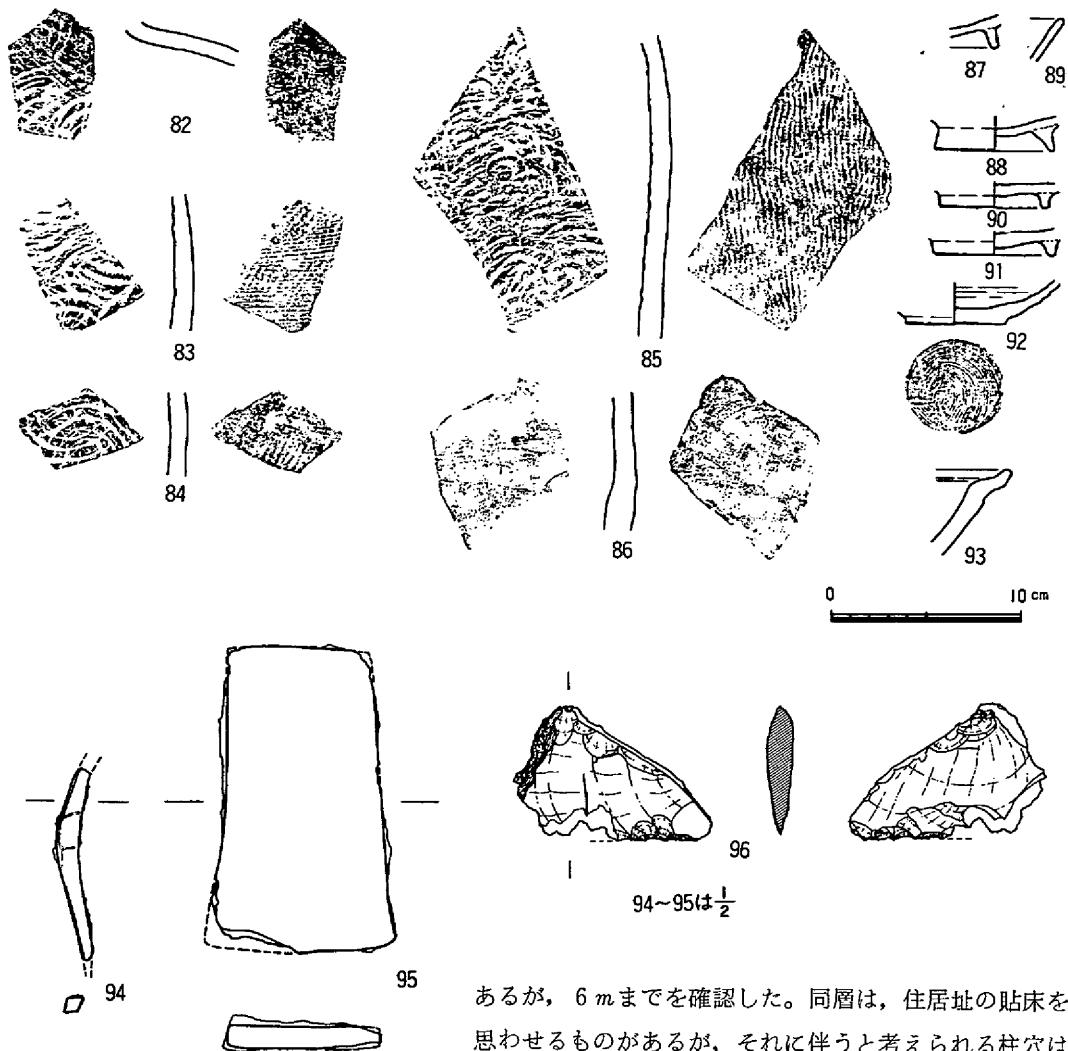
谷地区は、昭和52年度の確認調査において土器片、須恵器等の遺物を採集しており、それにより遺跡として調査対象となった。調査区は、谷地区の地形の比較的ゆるやかな部分であり、東西約40m、南北平均20mの範囲を調査した。

上層部分は、重機によって排除したが、中・下層部分は、人力によった。発掘中においても、出土遺物は多く見られたが、小破片のものが多かった。また、出土遺物にも、各時期のものを含んでおり、単一時期の遺物を出土する層位はなかった。

第53図 谷地区遺構配置図 ( $S = 1 : 500$ )第54図 谷地区検出遺構平面図及び土層断面図 ( $S = 1 : 80$ )

第55図 貼床状遺構出土遺物

検出した遺構は、調査区内のもっとも山よりの地点で溝を2本検出した。溝は、南側のものが大きく、幅30cmで長さ420cmまで検出した。深さは、10cm前後で、ゆるく曲るものである。北側の溝は、幅10cm前後で、長さ150cmまで検出した。この溝は浅く、5cm前後の深さであった。これら溝は、黄褐色の地山上に直接掘り込まれたものである。また、この溝の周辺に、黄褐色の地山土を含む水平な面を検出した。この層位は、南側は直接地山上から始まり、ほぼ水平に北へ広がり最大で180cmまで確認した。東西幅は定かでない部分も



第56図 谷地区包含層出土遺物

あるが、6mまでを確認した。同層は、住居址の貼床を思わせるものがあるが、それに伴うと考えられる柱穴は検出されなかった。そのため同遺構の性格は不明である。この層から出土した土器片の中には、内黒の土師器片（第56図86）が見られることから、造成された年代は、平安期以降とすることができますであろう。

#### 出土遺物

出土遺物のほとんどは、須恵器、土師器片である。その中に2点鉄器が含まれていた。94は、断面が方形を呈するもので、一方に向けて細くなることからすれば、鉄釘の可能性がある。95は、板状の鉄器である。破線の部分を欠損するが、ほぼ原形を呈するものと考えられる。同鉄器は、上半分は長方形を呈すが、下半分は、裾に向けてやや開き、厚さも減じてくる。鉄器の最大厚さは6mmを測る。下端の幅は、一部欠けているため不明であるが、中央部で4cm、長さ8cmを測る。この形態からしてて、板状鉄斧の可能性はあるが、包含層からの出土であるため確定的要素に欠ける点はある。（井上）

表4 百間川長谷遺跡出土土器観察表

D-1 第45図

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	1	口径 器高 底径	13.2 5.2 7.4 ○口縁部、体部は外上方に直線的に のび、端部は丸く收める。 ○高台は扁平で断面台形。 ○底部は平底。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○高台は貼り付け。 ○底部は粘土紐巻き上げ痕が明瞭でヘラ 切り。	○灰色で黒色の火だすきがある。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。
	2	底径	5.6	○底部は上げ底。	○白色。 ○砂礫を少し含む。
甕	3		○体部片である。	○内面青海波、外面格子目叩き。	○灰色
	4		○同上	○内面平行叩きと青海波。 ○外面平行叩き。	○灰褐色 ○砂粒を多含。
土師器	5	長さ 外径 内径	3.9 1.0 0.4 ○紡錘形を呈する。	○ナデ。	○淡茶褐色。 ○砂粒を多含。
	6	外径 内径	0.9 0.4 ○同上	○ナデ	○暗茶褐色。 ○砂粒含む。
土鍋	7		○ほとんど水平に外反する口縁部の 端部は少し上方に折れ曲る。	○内面は細い横刷毛。 ○外面はヨコナデ。	○内面淡褐色。 ○外面黒褐色。 ○礫も含む。
釜	8	口径	22.0 ○口縁端部は水平な凹面を作る。 ○つばは水平に約2cmのび、端部に 凹面を作る。 ○器壁は厚い。	○口縁部・つばはヨコナデ。 ○つば直下は指オサエ。 ○体部内面は粗いナデ。外面は縱方向の 刷毛目。	○暗茶褐色。 ○2mm以下の砂粒を多量に含む。
かまど	9		○脚端部はほぼ水平な面を作る。	○脚端面と外面は縱刷毛。内面は縱方向 刷毛目。	○黄褐色 ○砂礫を含む。

水田層 第47図

中世 磁器	白磁碗	11	○開きながら直線的にのびた体部の 端部を折り返し玉縁に造るもので ある。		○胎土は白色を呈し、釉は透明 であるが、淡い灰緑色を呈し 色調は、淡灰色～淡灰緑色を 呈する。
		12	○高台は、蛇目に造られている。 内面の底部に近い所に一本の凹線 が施される。	○高台は削り出しによるもので、釉は、 内面は全体に施されているが、外面は、 高台及びその近くには施されていない。	○同上。
		13		○高台は削り出しによるもので、釉は、 外面は、高台部分には施されていない。 内面底部は、蛇目風に釉が施されてい ない。	○胎土は、白色もしくは、淡い 灰青色を呈し、色調は、淡い 青色もしくは、淡い灰青色を 呈する。
		14	○外方に開きながらほぼ直線的に立 ち上がるもので、端部は面をもち、 外方へやや広がる。		○胎土は、白色～淡灰色を呈し 色調は、淡灰色～淡灰緑色を 呈する。
陶 器	縹釉皿	15	○開きながら、直線的に立ち上がる 体部で、端部は丸い。	○内外面ともにヨコナデ。	○胎土は、淡褐色～乳褐色を呈 し、焼成は良好であるが、軟 質、色調は、淡緑色を呈する。
		16	○体部は、ゆるく内側に曲りながら 立ち上がるもので、端部は丸い。	○内外面ともにヨコナデ	○胎土は須恵質で、焼成は良好 で、色調は、淡灰緑色を呈する。
	縹釉	17	○臺の脚部かと推測される。	○内面はヨコナデ、外面にのみ釉が施さ れる。	○胎土は須恵質で、焼成は良好 で、色調は緑色を呈する。

第4章 百間川長谷遺跡

1区 包含層 第48図

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須 恵 器	21	口径 13.3 器高 5.5 底径 7.8	○体部はほぼ直線的に外上方にのびる。 ○高台は垂直方向にのび、端部は角張り無い。 ○体部はわずかに屈曲して高台につづく。	○内外面ともヨコナデ。 ○高台は貼り付け。 ○底部はヘラ切り後粗いナデ。	○内面淡灰褐色。 ○外面灰褐色。 ○1mm以下の砂を少し含む。 ○焼成不良。
	22	口径 14.0 器高 5.6 底径 7.7	○体部はやや内湾する。 ○口縁端部は丸く収める。 ○高台は21より丸い感じ。	○内外面ともヨコナデ。 ○高台は貼り付け。 ○底部はヘラ切り。	○内面暗灰色。 ○外面灰褐色。 ○2mm大の粗砂粒を多量に含む。
	23	口径 13.2 器高 5.2 底径 7.6	○口縁端部は丸く収める。 ○体部は少し外反する。 ○体部はやや屈曲して高台につづく。 ○高台は断面三角形。	○内外面ともヨコナデ ○高台は貼り付け。 ○底部はヘラ切り。	○内外面暗灰色。 ○2mm大の粗砂粒を多量に含む。 ○焼成良好。 ○火だすきがある。
	24	口径 17.0 器高 6.9 底径 8.0	○体部はほぼ直線的に外上方にのびる。 ○体部は丸く曲って高台につづく。 ○高台の断面は逆台形。	○内外面ともヨコナデ。 ○高台は貼り付け。 ○底部はていねいなナデ。	○内面灰褐色。 ○外面灰色。 ○0.5mm以下の砂粒を含む。 ○%位の破片。
	25	口径 12.3 器高 4.5 底径 7.4	○口縁端部は丸く収める。 ○体部はほぼ直線的に外上方にのびる。 ○底部は平底である。	○内外面ともヨコナデ。 ○粘土紐巻き上げ痕が明瞭に残る。 ○底部はヘラ切り。	○内面暗灰色。 ○外面灰色で火だすきがある。 ○3mm以下の細縫を含む。
	26	口径 14.0 器高 3.7 底径 7.6	○口縁端部はややとがる。 ○体部は少し内湾する。 ○底部は平底である。	○内外面ともヨコナデ。 ○底部はヘラ切り。	○灰白色で、口縁部に黒色の帯。 ○1mm以下の砂粒を多量に含む。
甕	27	口径 34.0	○口縁部は外反し、端部は肥厚し、内側につまみ出す。 ○体部は肩が張るか。	○口縁部は内外面ともヨコナデ。 ○体部内面は齊海波文叩き目。 ○体部外表面は格子目叩き。	○内面灰褐色。 ○外面暗灰色。 ○1mm以下の砂粒を多量に含む。
土 師 器	28	底径 8.2	○高台は垂直にのび、端部は丸く収める。	○高台は貼り付け。 ○底部は糸切り？	○淡茶褐色。 ○砂少し含む。
	29	底径 7.4	○高台は外下方にのび、端部は角張る。	○体部外表面ヨコナデ。	○内面黒色。 ○外面淡茶褐色。
	30	底径 7.1	○高台は外下方にのび、端部はややとがらす。	○表面磨滅して調整不明。	○淡黄褐色。 ○4mm以下の砂礫を多量に含む。
	31	口径 12.0 器高 3.7 底径 6.8	○口縁端部は丸く収める。 ○体部は少し内湾する。 ○高台は断面三角形。	○粘土紐巻き上げ痕残る。 ○内外面ともヨコナデ。 ○高台は貼り付け。	○内面黒色。 ○外面淡赤褐色。 ○精製粘土。
皿	32	底径 6.8	○高台は断面三角形。	○調整不明。	○黃白色。
椀	33	口径 13.3 器高 3.3 底径 7.5	○口縁端部はややとがる。 ○体部は少し内湾する。 ○底部は少しふくらむ。	○粘土紐痕が明瞭。 ○内外面ともヨコナデ。 ○底部はヘラ切り。	○茶褐色。 ○0.5mm以下の砂粒を多量に含む。
	34	口径 13.0 器高 3.0 底径 7.5	○同上	○同上	○淡茶褐色。 ○4mm以下の砂礫を多量に含む。
	35	口径 13.0 器高 3.5 底径 6.5	○同上	○同上	○茶褐色。 ○1mm以下の砂を多量に含む。
皿	36	口径 13.6 器高 2.8 底径 10.0	○口縁部・体部は内湾し、端部を丸く収める。 ○底部は大きくふくらむ。	○口縁部・体部はヨコナデ。 ○底部は粗いナデ。	○丹塗り。 ○3mm以下の砂礫を多量に含む。

単位:cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器皿	37	口径 12.5 器高 1.7 底径 10.4	○口縁部・体部は1度折れ曲って外反する。 ○底部は少しふくらむ。	○口縁部・体部はヨコナデ。 ○底部は粗いナデ。	○丹塗り。 ○精製粘土。
		口径 14.0 器高 1.6 底径 10.4	○口縁部・体部は外反する。 ○底部は平底。	○口縁部・体部はヨコナデ。 ○底部はヘラ切り。	○淡茶褐色。 ○砂粒を少し含む。
		口径 14.0 器高 1.4 底径 10.4	○口縁部・体部は外反し、端部を丸く收める。 ○底部は平底。	○同上	○色同じ。 ○砂礫を多く含む。
須恵器杯	40	底径 10.0	○高台は断面三角形。	○体部はヨコナデ。 ○高台は貼り付け。 ○底部はヘラ切り。	○灰白色 ○砂粒を少し含む。
		底径 8.0	○高台は外下方へのび、端部が少しとがる。	○体部・高台はヨコナデ。 ○高台は貼り付け。 ○底部はヘラ切り。	○灰褐色。 ○砂粒を少し含む。
	42	底径 4.3	○底部は少し上げ底。	○体部はヨコナデ。 ○底部は回転糸切り。	○灰色。 ○砂礫を少し含む。
	43	底径 5.7	○底部は少し上げ底。	○同上	○淡灰色。 ○砂礫を多く含む。
	44	底径 7.0	○底部は平底。	○同上	○灰白色。 ○精製粘土。 ○焼成不良。
中世土器	45	底径 8.0	○高台は断面四角形。	○ヘラみがき。 ○高台は貼り付け。	○黒色。瓦器 ○砂粒を多く含む。
土師器皿	46	底径 9.0	○高さ2cmの高台は外下方へのび、端部は丸い。	○高台は貼り付け。 ○ヨコナデ	○黄褐色。 ○砂粒を多く含む。
		口径 13.0 器高 2.0 底径 7.2	○口縁部・体部は少し内湾する。 ○底部は少し上げ底。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○底部はヘラ切り後ナデ。	○黄褐色。 ○5mm大の礫も含む。

## 建物 第49図

中世土器	椀	48	口径 11.5 器高 3.8 高台径 5.6	○体部は、ゆるく曲りながら立ち上がり、口縁端部は丸い。高台は、断面が三角形に近く、貼付けている。	○体部の端部内外面はヨコナデ、内面の底部はナデ、底部外面は、ヘラ起し後ナデ、高台の外面はナデ。	○色調、淡褐色、。 ○胎土、2mm前後の砂粒を含む。 ○焼成、良好。
------	---	----	------------------------------	--	---	--

## 5区 包含層 第51図

中世土器	椀	49		○体部は、ゆるく曲りながら立ち上がり、口縁端部は丸い。高台は、幅が細くほぼ垂直に立ち上がり、底部へ貼付けている。	○口唇部は、ヘラ状工具によるナデ、体部外面の端部はヨコナデ、内面は丁寧なナデ、高台の外面は、ヨコナデ。	○色調、褐色~淡褐色、胎土は細砂を含み、焼成は良好。
		50 51 52 53 54	口径 12.2 器高 4.3 高台径 5.8	○体部はほぼ直線に開きながら立ち上がり、口縁端部は丸い。高台は貼付により、幅が細く、ほぼ直立する。	○口唇部は、ヘラ状工具によるナデ、体部外面の端部はヨコナデ、下半部はヘラ削り、内面は、入念なヨコナデ、高台の外面はヨコナデ、底部外面にはヘラ起しの痕跡が見られる。	○色調、灰褐色~淡灰褐色、胎土には砂粒を少し含み、焼成は良好。
		55		○体部は、ゆるやかに曲りながら立ち上がり、高台は貼付けるもので、断面は三角形を呈す。	○体部内面は入念なナデ、高台の内外面はヨコナデによる。	○色調は、乳褐色を呈し、胎土は良質で、細砂を含み、焼成は良好。
		56		○体部は、ほぼ直線的に外方へ開きながら立ち上がるるもので、端部外面に棱をもつ。	○体部内外面ともにヨコナデ。	○色調は、青灰色を呈し、胎土には1mm前後の砂粒を含み、焼成は良好。

## 第4章 百間川長谷遺跡

### 土壤 第51図

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
中世土器	57	口径 12.7 器高 4.4 高台径 5.7	○体部は、ゆるく曲りながら立ち上がり、口縁端部は少し平坦面をもつ。高台は太くやや高く、貼付けている。	○口唇部は、ヘラ状工具によるナデ体部外面の端部はヨコナデ、内面は全体に入念なヨコナデ、高台の内外面はヨコナデ。	○色調、乳褐色、胎土には2mm前後の砂粒を含み、焼成良好。
	58 5 63		○体部は、ゆるやかに曲りながら立ち上がり、高台は、貼付けるもので細くやや長い。	○口唇部は、ヘラ状工具によりナデ、体部外面の上端はヨコナデ、内面は入念なナデによる。高台の内外面はヨコナデ、底部外面には、ヘラ起しの痕跡が見られる。	○色調、褐色一淡褐色を呈し、胎土には、細砂を含み、焼成良好。
	64		○体部は、開きながら、ゆるやかに曲りながら立ち上がり、口縁端部は丸い。	○体部の内外面は、ヨコナデ、内面は、全体にヨコナデ、底部には、糸切りの痕跡が見られる。	○色調は、灰色一淡灰色を呈し端部外面は黒色を呈す。胎土には1mm前後の砂粒を含み、焼成良好。
	65		○同上	○体部外面の上半分はヨコナデ、下半はヘラ削り後ヨコナデ、内面は全体にヨコナデ、底部には、糸切りの痕跡が見られる。	○色調は、灰色一淡灰色を呈し細砂を少し含み、焼成は、やや軟調。
	66		○同上	○口縁部分は、内外面ともに、入念なナデ体部の内外面は、ヨコナデ、底部には糸切りの痕跡が見られる。	○色調は、灰褐色一褐色を呈し胎土は1mm前後の砂粒を含み焼成良好。
	68	口径 12.8 器高 3.7	○体部は、やや開きながら直線的に立ち上がる。	○体部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面は、ヘラ起し後、板目が見られる。体部は、粘土紐巻き上げの痕跡が見られる。	○色調は、淡赤褐色を呈し、胎土は精選されており、焼成良好。
中世土器	69		○同上	○体部内外面はヨコナデ、底部外面は、ヘラ起しの痕跡が見られる。	○色調は淡赤褐色を呈し、胎土は精選されており、焼成良好。
	70 5 76	口径8.0~8.6 器高1.6~2.1	○体部は、外方に開きながら、直線的に立ち上がる。	○体部外面及び内面の全体にヨコナデ、底部外面は、ヘラ起し、もしくは、ヘラ起し後板目の痕跡が見られる。	○色調は、淡赤褐色を呈し、胎土は、精選されており、焼成良好。

### 貼床状遺構 第55図

須恵器	甕	78 79		○78は肩部、79は、口縁部に近い肩部と考えられる。	○外面は、平行タタキ後、クシによるカキ目、内面は、弧状のタタキ目が見られる。	○色調は灰青色を呈し、1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好。
	杯	80		○口縁部がやや内傾するもほぼ垂直に立ち上がり、その端部は丸い。	○内外面ともにヨコナデ。	○色調は青灰色を呈し、胎土には微砂を含み、焼成は良好。
土師器	杯	81		○高台は、細く、ほぼ垂直に立ち上がる。	○内外面ともにヨコナデ。	○色調は淡褐色を呈し、胎土には微砂を少し含み、焼成良好。

### 谷地区包含層 第56図

須恵器	甕	82 5 84		○82は口縁部に近い肩部、83、84は肩部と考えられる。	○外面は格子目のタタキ後にクシによるカキ目、内面は、同心円状のタタキが見られる。	○色調は、灰色を呈し、胎土には黒色の小粒子を含み、焼成良好。
		85		○甕の肩部と考えられる。	○外面は、平行タタキが密に見られ、内面は、同心円状のタタキ。	○色調は、青灰色を呈し、胎土には微砂を少し含み、焼成良好。
中世陶器	甕	86		○甕の肩部と考えられる。	○外面はヨコナデ、内面は、板状工具によるヨコナデ。	○色調は、茶褐色一淡茶褐色を呈し、胎土には1mm前後の砂粒を含む。 ○端前焼と考えられる。

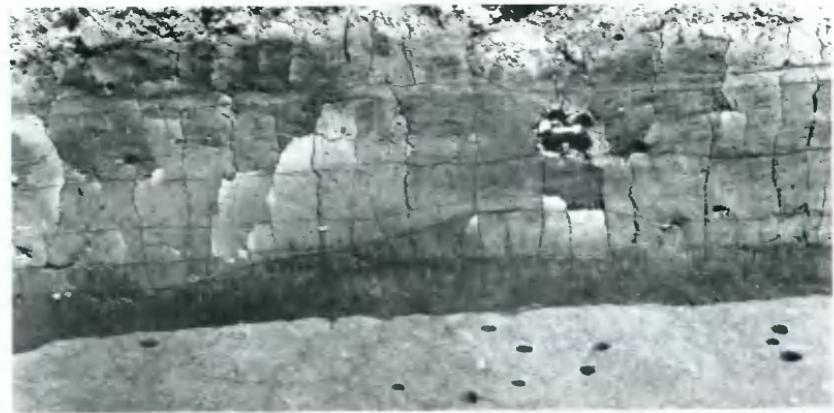
単位：cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器	杯	87	○細く長い高台が、開きながら立ち上がる。	○内外面ヨコナデ。	○色調は、内面は黒色、外面は淡褐色を呈し、胎土には、微砂を含み、焼成良好。
中世磁器	白磁碗	89	○体部は外方に開きながら直線的に立ち上がり、端部は丸い。		○胎土は白色を呈し焼成は良好、釉は淡い緑色をおびている。
土師器	椀	88	高台 径 6.4 ○高台は、外方に開くもので、長い。	○高台は貼付けるもので、内外面ともにヨコナデ。	○色調は、淡褐色～赤褐色を呈し、胎土には微砂を少し含み焼成は良好。
中世土器	椀	90 91	○高台は、ほぼ垂直で、断面は台形を呈する。	○高台は貼付けるもので、内外面ともにヨコナデ、底部内面はナデ。	○色調は、淡褐色～乳褐色を呈し、胎土は細砂を少し含み、焼成は良好。
須恵器	碗	92	○体部は、ゆるく曲りながら立ち上がる。	○体部内外面はヨコナデ、底部外面は糸切り。	○色調は、暗青灰色を呈し、胎土には微砂を含み、焼成良好。

図版13



▼ 一区 土層—水田層と畦畔部分  
▲ 一区 全景（西より）



図版14





1. 5区 土塙遺物出土状態



2. 谷地区 遺構検出状態

図版16



2



13



3



14



5



15



23



17



18



7



28

1区 出土遺物

図版17



1区 出土遺物・緑釉陶器・青磁・白磁



1区 出土遺物・土錘・石器



5区出土遺物・青磁・白磁

図版18



5区及び谷部出土遺物

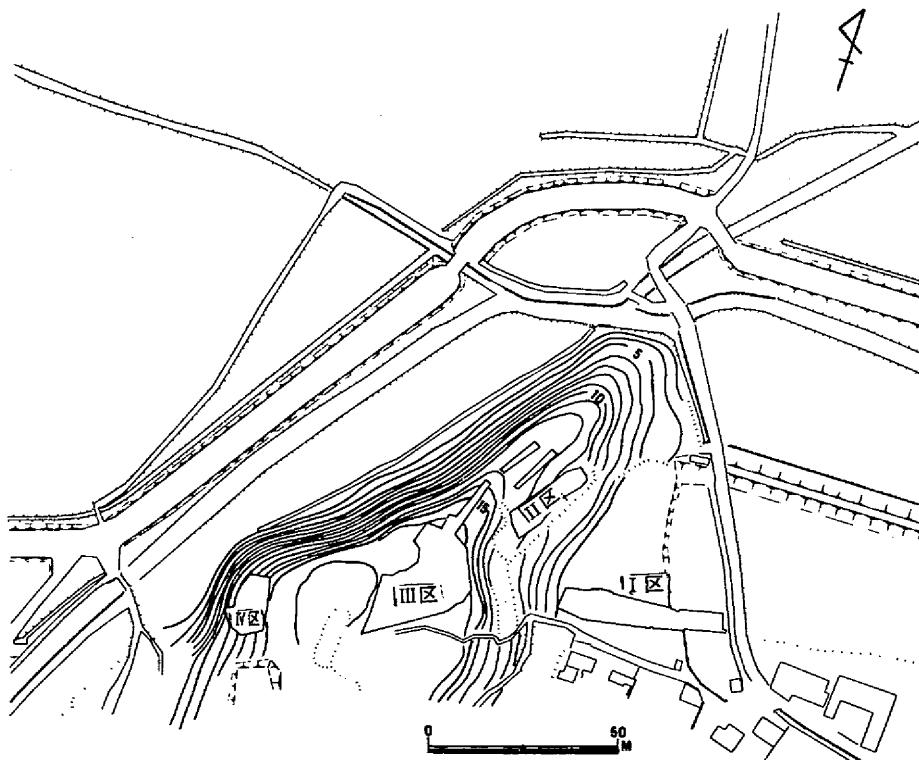
## 第5章 百間川岩間遺跡

百間川岩間遺跡は、岡山市米田に所在する。北の舌状に延びる丘陵と東側の裾部が今回の調査対象地である。調査区は、丘陵裾部をI区、丘陵東側の段部をII区、丘陵中央部をIII区、丘陵西側をIV区として発掘調査を実施した。調査はI区が1978年4月5日から同年7月13日・II区・III区・IV区については、1979年3月1日から同年4月20日において実施した。

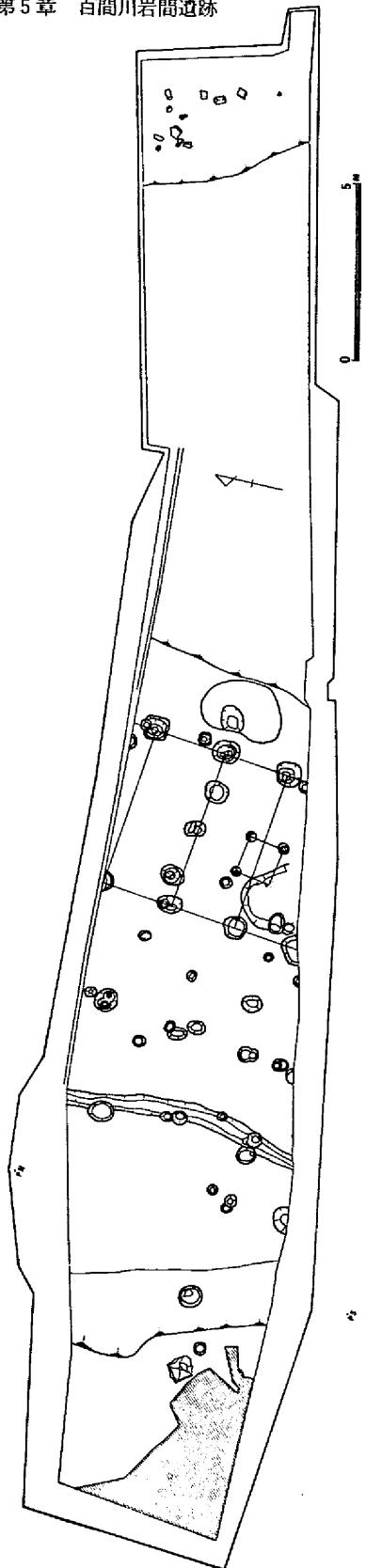
### 第1節 右岸用水路調査区

#### I区の調査（第58～60図）

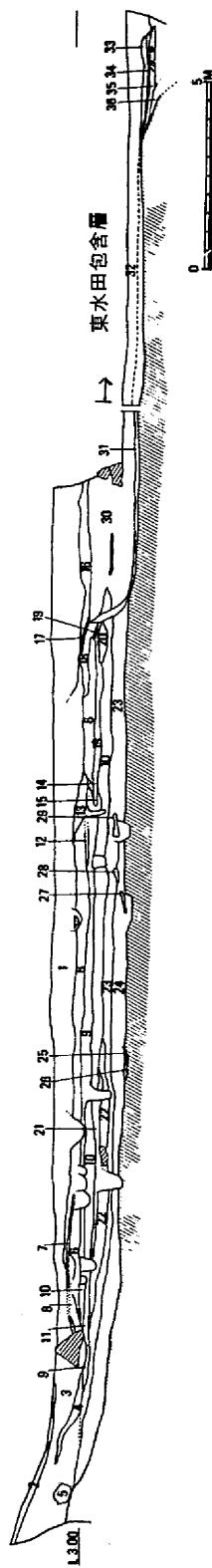
当調査区は、丘陵西裾部に相当する。地表面はほぼ平坦となるが、黄褐色基盤層は緩やかに東に向かって下がってゆく。調査区東側の3分の2は、宅地の造成と水田により削平を受けるが、水田下に包含層の存在を確認する。堆積土の第1層は、宅地造成によりかなり手が加えられている状態を呈



第57図 百間川岩間遺跡地形図及び調査区設定図 ( $\frac{1}{2,000}$ )

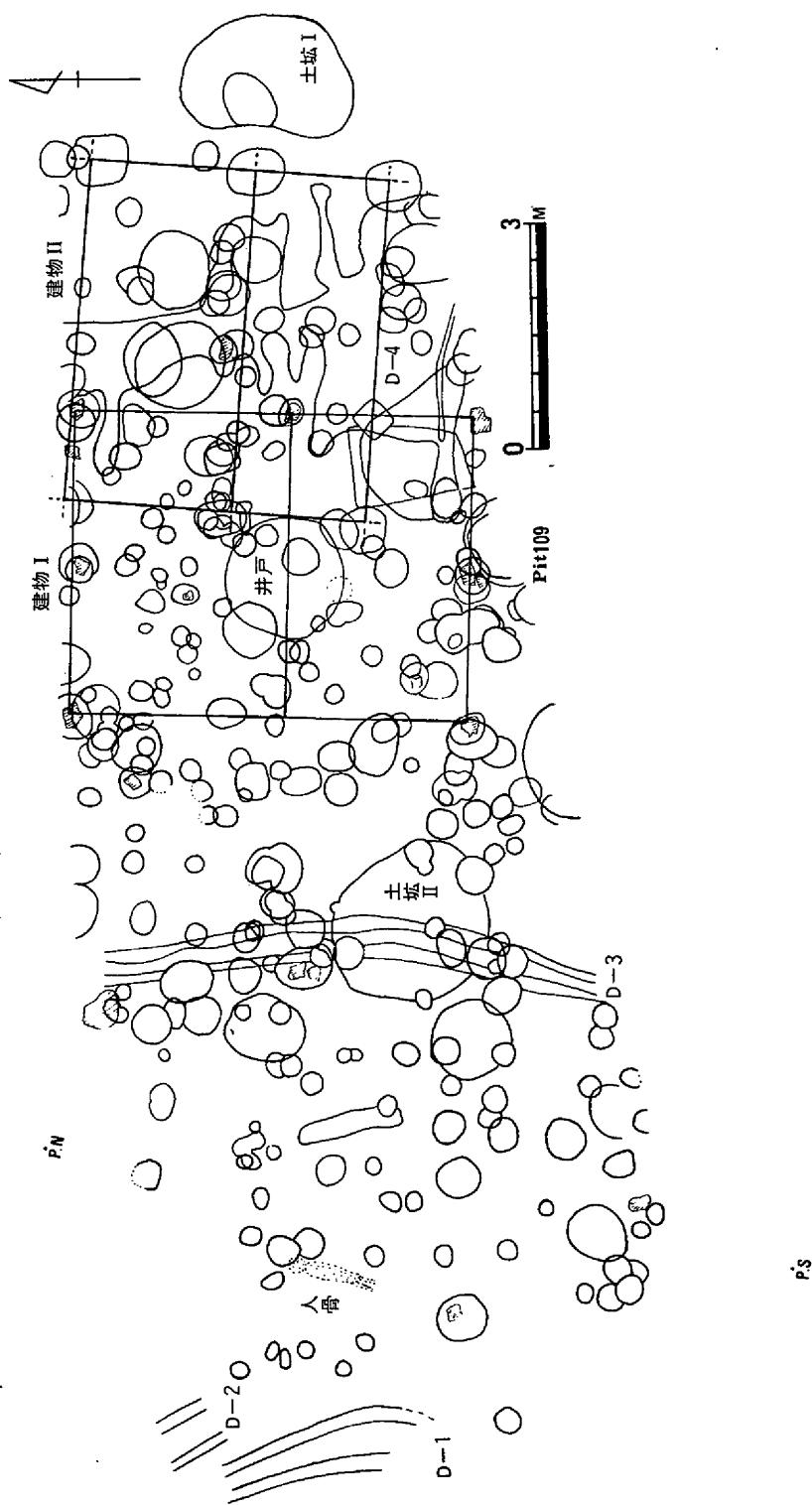


第58図 I区最終遺構検出面 ( $\frac{1}{200}$ )



- |                     |            |               |                 |               |                |
|---------------------|------------|---------------|-----------------|---------------|----------------|
| 1. 表土<br>(家屋の造成土有り) | 6. 茶褐色砂質土  | 12. 暗褐色土      | 18. 淡茶褐色土       | 24. 暗褐色土      | 31. 青灰色粘土(現水田) |
| 2. 淡黒褐色土            | 7. 造成土     | 13. 褐色土(炭化粒)  | 19. 茶褐色土(砂)     | 25. 呉褐色土      | 32. 赤褐色粘質土     |
| 3. 埋壙のため不詳          | 8. 炭化材・焼土  | 14. 淡茶褐色砂質土   | 20. 暗茶褐色土(炭・焼土) | 26. 燃土        | 33. 淡灰褐色粘質土    |
| 4. 礫                | 9. 灰黑色土    | 15. 灰褐色土      | 21. 灰褐色砂質土      | 27. 暗黒褐色土     | 34. 黑褐色粘質土     |
| 5. 暗灰色砂質土           | 10. 灰色砂質土  | 16. 黄褐色粘土ブロック | 22. 茶灰色砂質土      | 28. 黄褐色粘土ブロック | 35. 淡黑褐色粘土     |
|                     | 11. 灰褐色砂質土 | 17. 黄色土       | 23. 暗茶褐色砂質土     | 29. 黑褐色土      | 36. 青灰色粘土      |
|                     |            |               | 30. 造成土         |               |                |

第59図 I区北壁土層断面図 ( $\frac{1}{200}$ )



第60図 I 区遺構検出状態 ( $\frac{1}{100}$ )

## 第5章 百間川岩間遺跡

ていた。遺構が確認されたのは第6層からであり、遺物も中世土器を多く出土するのである。この中世土器は第23層にいたるまでの堆積土中に含まれているのである。そして、第24層と黄褐色基盤層直上に堆積する第23層において7世紀末から8世紀にかけての須恵器を含むのである。調査区東端は、7世紀末から8世紀にかけての包含層が認められた。この包含層については下りを認め、百間川当麻遺跡と直接つながらないことが確認されたのである。

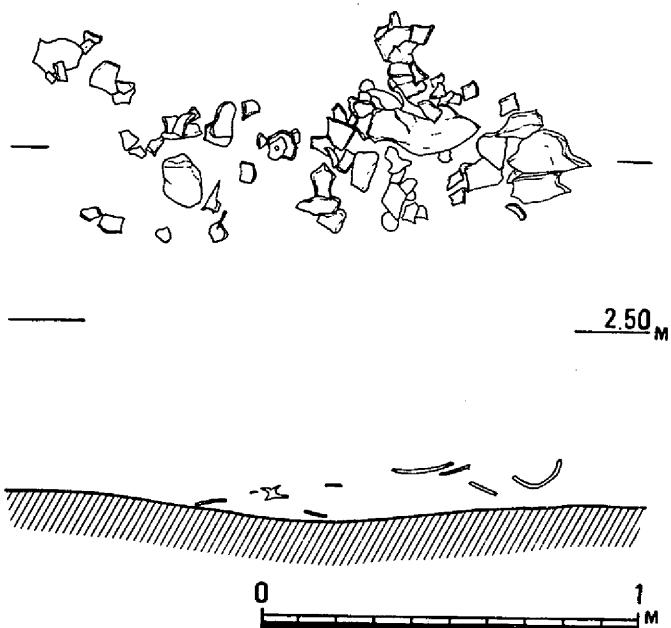
### 土器溜りⅠ（第61図）

検出層序は第23層の暗茶褐色砂質土において検出されたものである。1m<sup>50</sup>cm×60cmの間に出土したものである。遺物検出面における平面的な遺構確認につとめたが、検出することはできなかつた。さらに、遺物の取り上げ後に、断面の観察をおこなつたが、やはり認めるることはできなかつた。

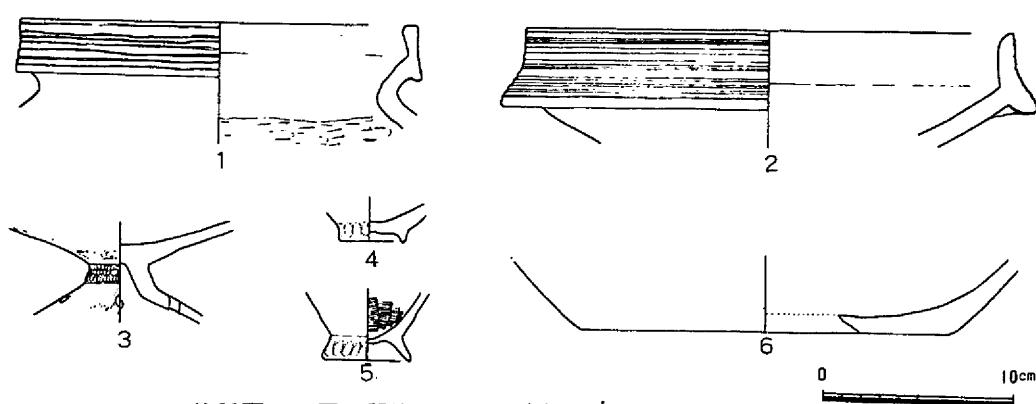
出土遺物は、壺・高杯あるいは器台の口縁部、東杯脚部破片、台付鉢、壺の底部破片である。時期は、百・後、IVの時期と考えられる。

### 土器溜りⅡ（第63図）

検出層序は、土器溜りⅠと同一



第61図 I 区土器溜りⅠ実測図 ( $\frac{1}{20}$ )

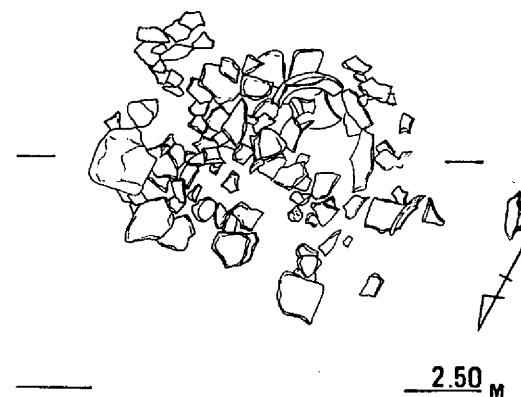


第62図 I 区土器溜りⅠ出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )

内である。検出は、 $1\text{m}15\text{cm} \times 85\text{cm}$ において認められたのである。当土器溜りにおいても、土器確認面および、土器取り上げ後の平面的な追求にもかかわらず、掘り込みなどの遺構は認められなかった。

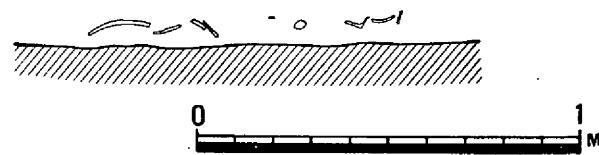
出土遺物は、壺、甕・高杯の脚部破片、底部破片、鉢の小破片が出土している。

時期は、百・後、IVに相当するものと考えられるのである。

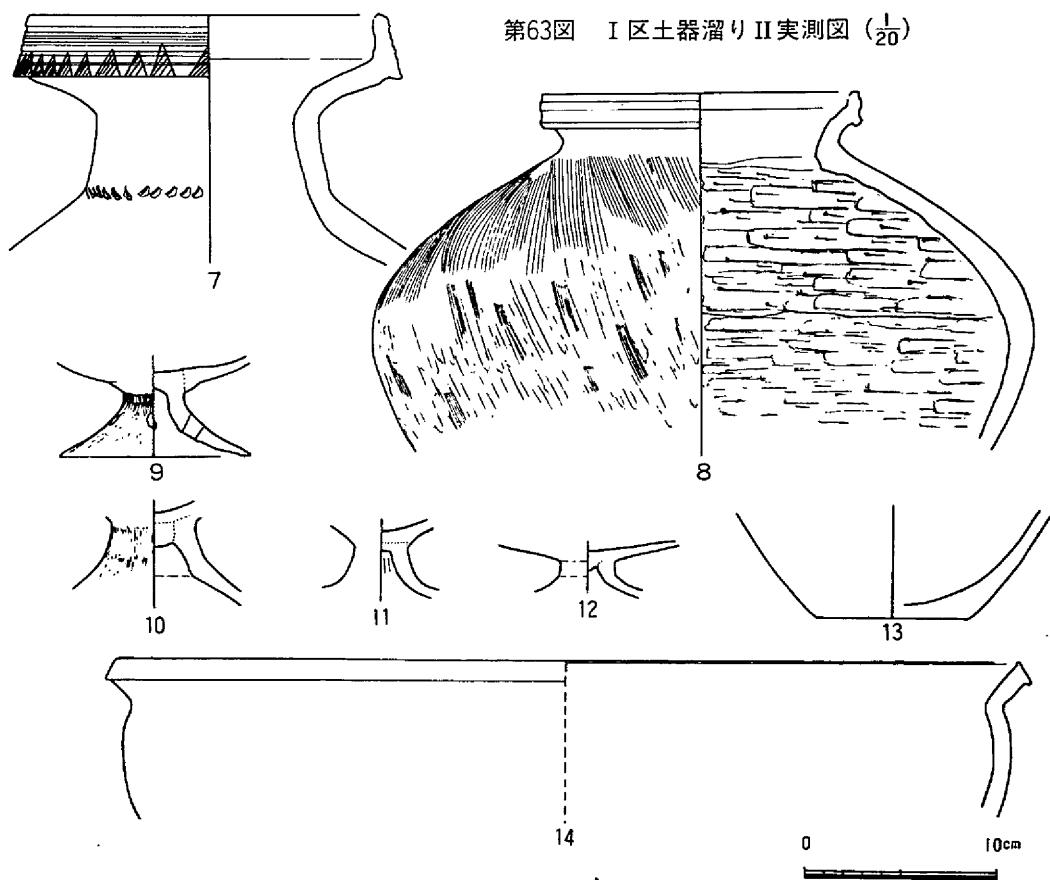


溝一（第60図）

調査区西よりに南北方向に $3\text{m}$ ほどの長さで確認された。幅 $60\text{cm}$ 、深さ $9\text{cm}$ ほどで



第63図 I 区土器溜り II 実測図 ( $\frac{1}{20}$ )



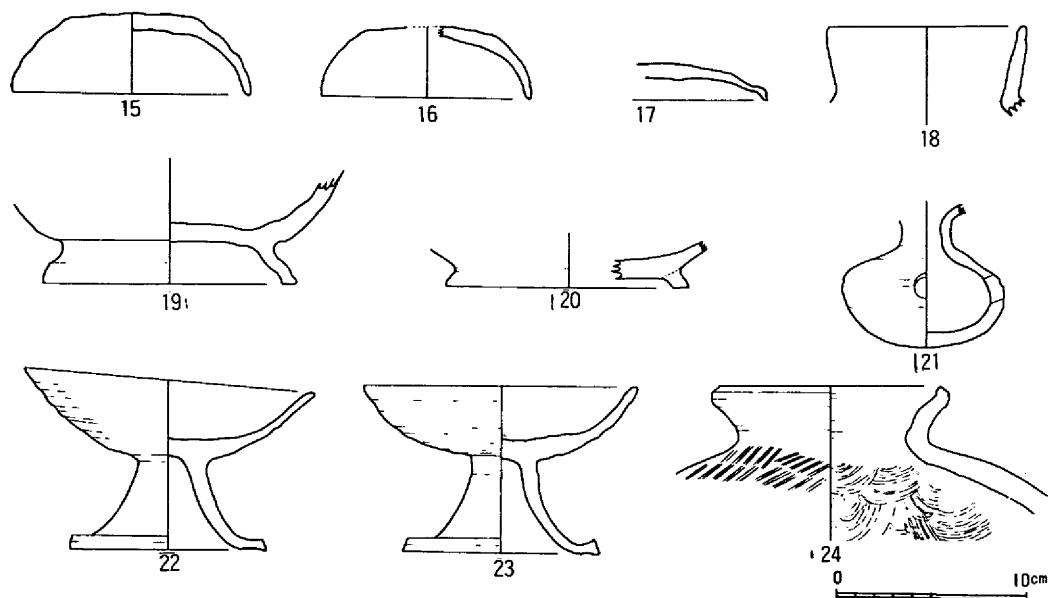
第64図 I 区土器溜り II 出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )

## 第5章 百間川岩間遺跡

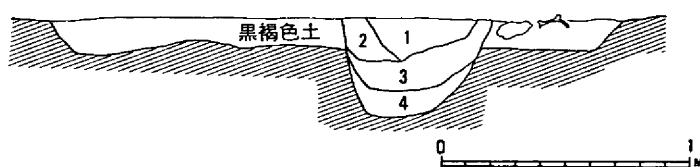
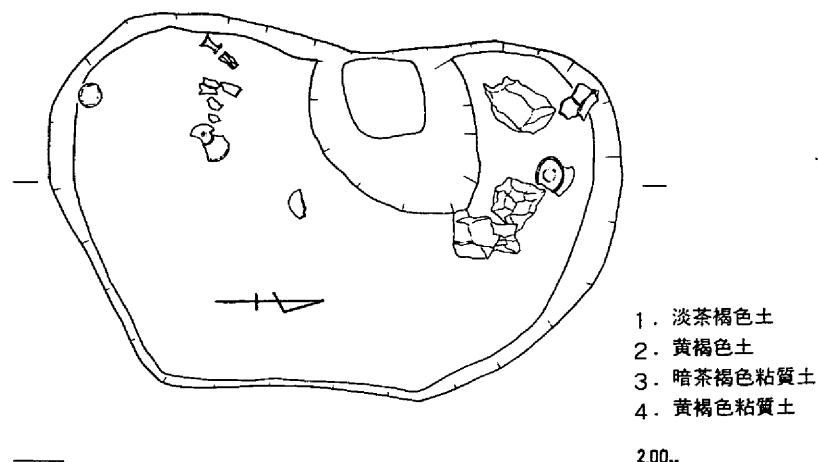
ある。時期は、平安期と考えられる甕の破片を出土する。

### 溝—2（第60図）

溝1の東に並行して、長さ1mを確認する。幅65cm、深さ10cmほどを測る。時期は、平安期に属す



第65図 I区土壤I出土遺物



第66図 I区土壤I実測図 ( $\frac{1}{30}$ )

る高台付の杯が出土する。

溝—3（第60図）

暗茶褐色砂質土の上層においてプラン確認したものである。南北に延び、幅60cm、深さ8cmほどを測る。

溝—4（第68図）

基盤層に直接堆積する暗茶褐色砂質土において確認された。溝全面に焼土と炭化物の散布がみられた。出土した円面鏡から奈良期とされる。

土壌I（第66図）

黄褐色基盤層を掘り込んだ土壌である。2m

- 1. 褐色土
- 2. 褐色土(焼土)

第68図 I区溝4実測図 ( $\frac{1}{50}$ )

第67図 I区溝4出土遺物

— 115 —

## 第5章 百間川岩間遺跡

70cm × 1m 40cm, 深さ10cmほどを測る楕円状のプランを有するものである。土壤西端には、これを切る柱穴が存在する。

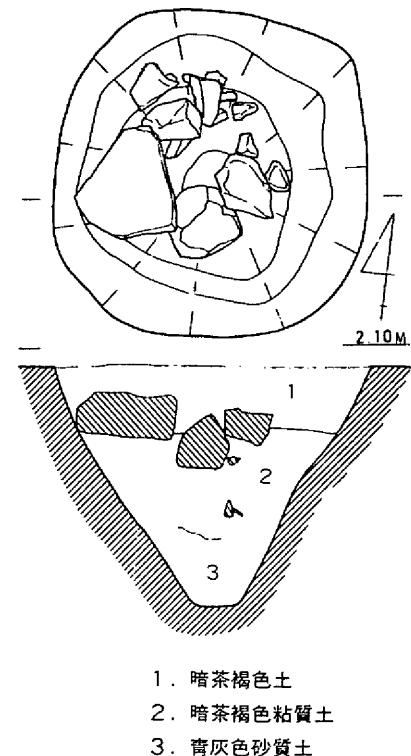
(下沢)

### 建物 I, II (第60図)

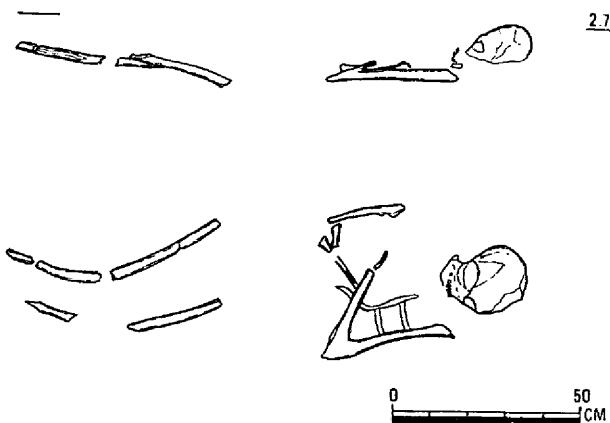
当調査区からは200を越える柱穴状土壤が検出されているが、建物として確認されたものは僅かに2棟であり、建物Iは図上復元したものである。建物Iは梁行4m, 衍行5.3mの2間×2間の建物で、梁行柱間は各々2m, 衍行柱間は、3mと2.3mであった。柱穴はいずれも直径40cm前後の円形を呈し、柱穴内には厚さ5cm程の偏平な礫が根石として置かれていた。遺物は柱穴から土師質の高台付椀が僅ながら出土している。なお柱穴は南北方向の調査区外に延びる可能性がある。建物IIは建物Iと一部重複した東側に位置し、主軸はやや東に振っている。梁行4.5m衍行5m以上で、衍行柱間は2m前後を測る。柱穴は直径50cm前後、深さ40cm前後を測る。また柱穴中央の柱痕跡から径15cm前後の柱が使用されたものと推定される。なお柱穴からは遺物は皆無であったが、他の遺構との関係から当建物は建物Iよりは古いものの中世の範に入るものではないかと考えている。

### 井戸 (第69図)

調査区のほぼ中央から検出されたもので、中世の柱穴状土壤によって一部切られている。平面プランは径175×165cmの不整円形を呈し、断面は擂鉢状を呈し、深さ130cmを測る。井戸内は大きく2層に分かれ、上層は暗茶褐色土が、下層は暗茶褐色粘質土が堆積していた。井戸中央付近には20~50cm前後の角礫が投げ込まれた状態で出土したが、遺物は井戸下半から須恵器片が僅かに出土したのみであった。以上、当井戸は遺構の切り合ひ関係及び出土須恵器から奈良時代まで遡る可能性がある。



第69図 I 区井戸実測図・断面図 ( $\frac{1}{40}$ )



第70図 I 区人骨実測図 ( $\frac{1}{20}$ )

## 人骨

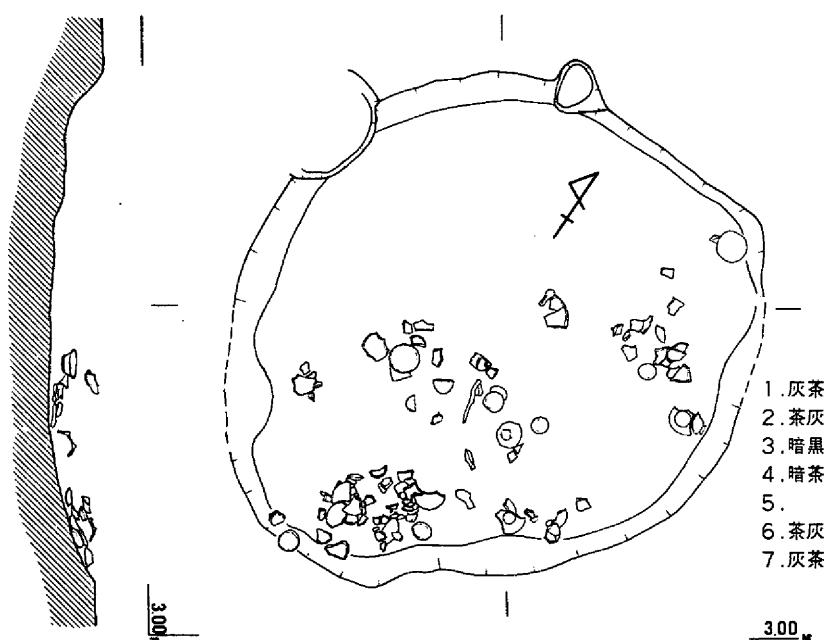
調査区西方の中央付近から検出されたもので、頭部を北に向けた仰臥伸展葬であった。両腕は胸の所で組んでおり、下半身は上半身に比べやや横むきになり、浮いた状態であった。なお、人骨は暗灰色砂層から検出されたが保存状態が非常に悪い一方、他に副葬品、棺痕跡、棺釘等全く検出されなかった。以上、当人骨は中世の中のもので、その検出状況からあまり丁寧に葬られたものではないものと推定している。

## 土壌Ⅱ

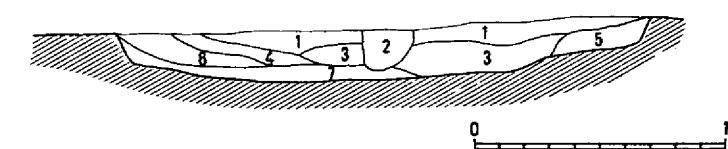
遺構は調査区西方、溝1の上層から検出されたもので、平面プランは径200×230cmの不整円形を呈し、深さ20cmを残す。土壌内は7層に分かれたが、堆積状況から土壌を掘り下げた後、自然に堆積していくものと考えられる。遺物は各層から出土しているが、特に遺構南半分からは土壌内に投棄した状態で出土している。出土した遺物はいずれも土師器で、椀、小皿、皿などであるが、その中には完形の椀6、小皿8、皿3なども含まれていた。椀はいずれも乳黄褐色あるいはそれに近い色を呈し、胎土中には2mm前後の砂粒を含み良く焼き上がったもので、口径11.5cm前後、高径3.8cm前後

の小型の土器である。

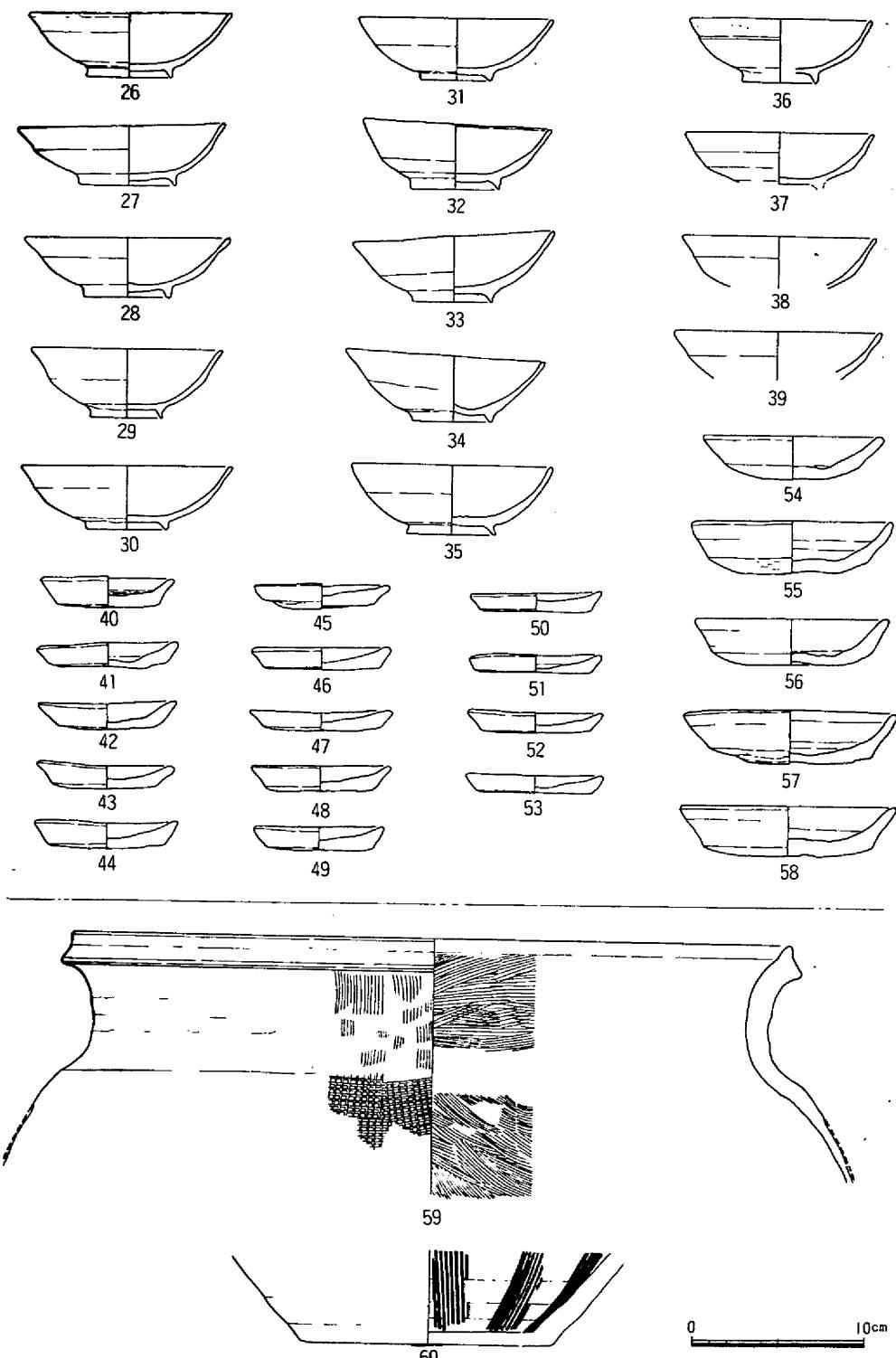
また高台は断面三角形を呈すが、椀底部中央に付けられているものはあまり認められない。小皿は淡茶褐色を呈し、水漉し粘土を使用しており、底部は笠



1. 灰茶色土
2. 茶灰色土
3. 暗黒灰色土(炭)
4. 暗茶灰色土(炭・焼土)
5. "
6. 茶灰色土
7. 灰茶色砂質土



第71図 1区土壌Ⅱ実測図 ( $\frac{1}{30}$ )



第72図 土壙Ⅱ(26~58) pit (59.60) 出土遺物

削りをしている。口縁部径は8cm前後、高さ1.4cm前後で、深さは非常に浅い。皿は色調・胎土・調整とも小皿と同様であり、口径10~12.5cm、器高2.5cm~3cmのものである。

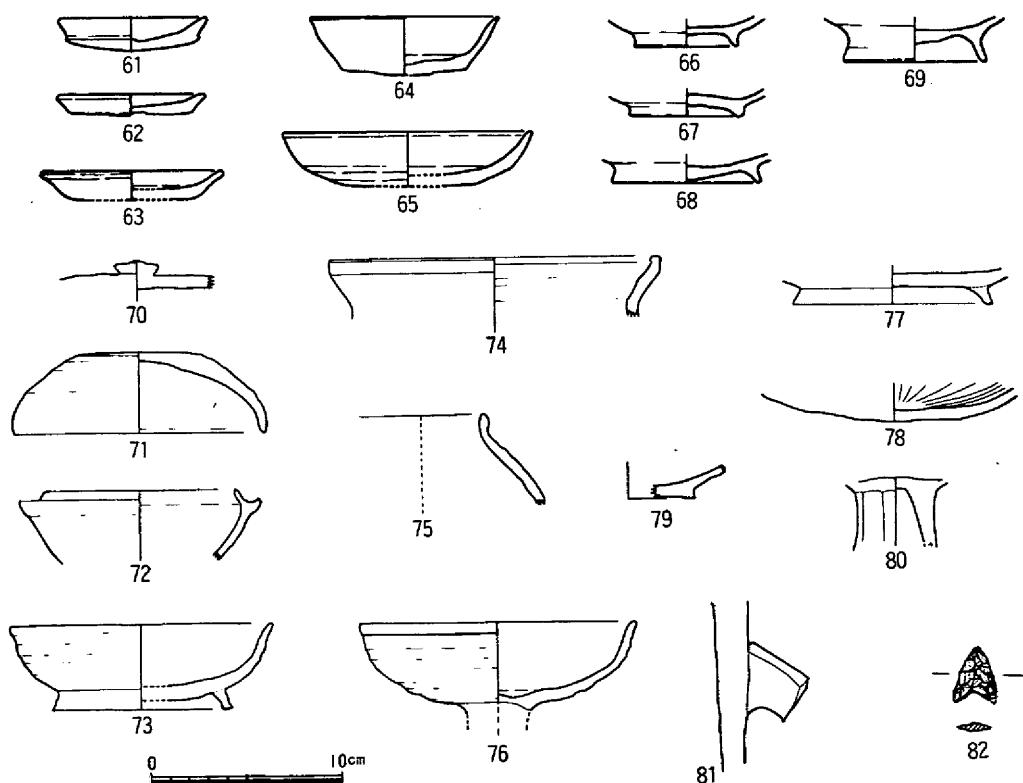
以上、当遺構はゴミ捨場のような施設と考えているが、その時期は出土遺物の特徴から百間川当麻遺跡7区井戸3出土遺物よりは新しい傾向を示している一方、椀において、高台のつかない底部上げ底の椀がみられないことから、大まかではあるが室町初頭頃のものではないかと考えている。(江見)

#### 包含層出土遺物（第73図）

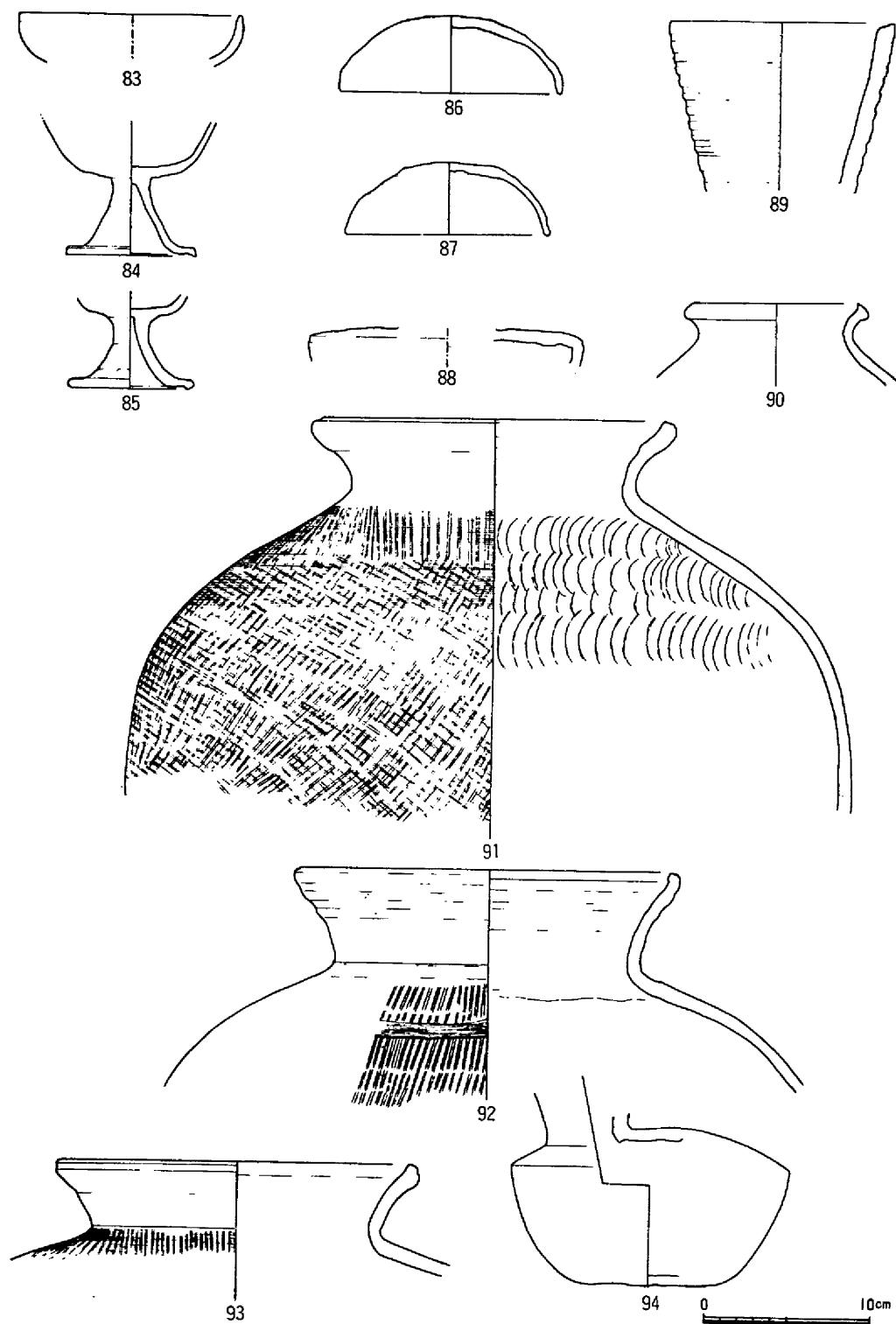
70から81の土器は、暗茶褐色砂質土から暗褐色土にかけて出土したものである。61から68については、それよりの上層より主に出土したものである。この種の中世土器の出土量は非常に多いが、計測が得られる破片は少なかったのである。また、82は灰色砂質土中より検出したものである。表裏面とともに全面にわたって加工を施しているが、一部の脚部は僅かに欠損している。なお、風化が進み、稜線がわかりにくい。石材はサヌカイトである。

150から166は、茶褐色砂質土中より礫と共に不規則に広がって検出したものである。

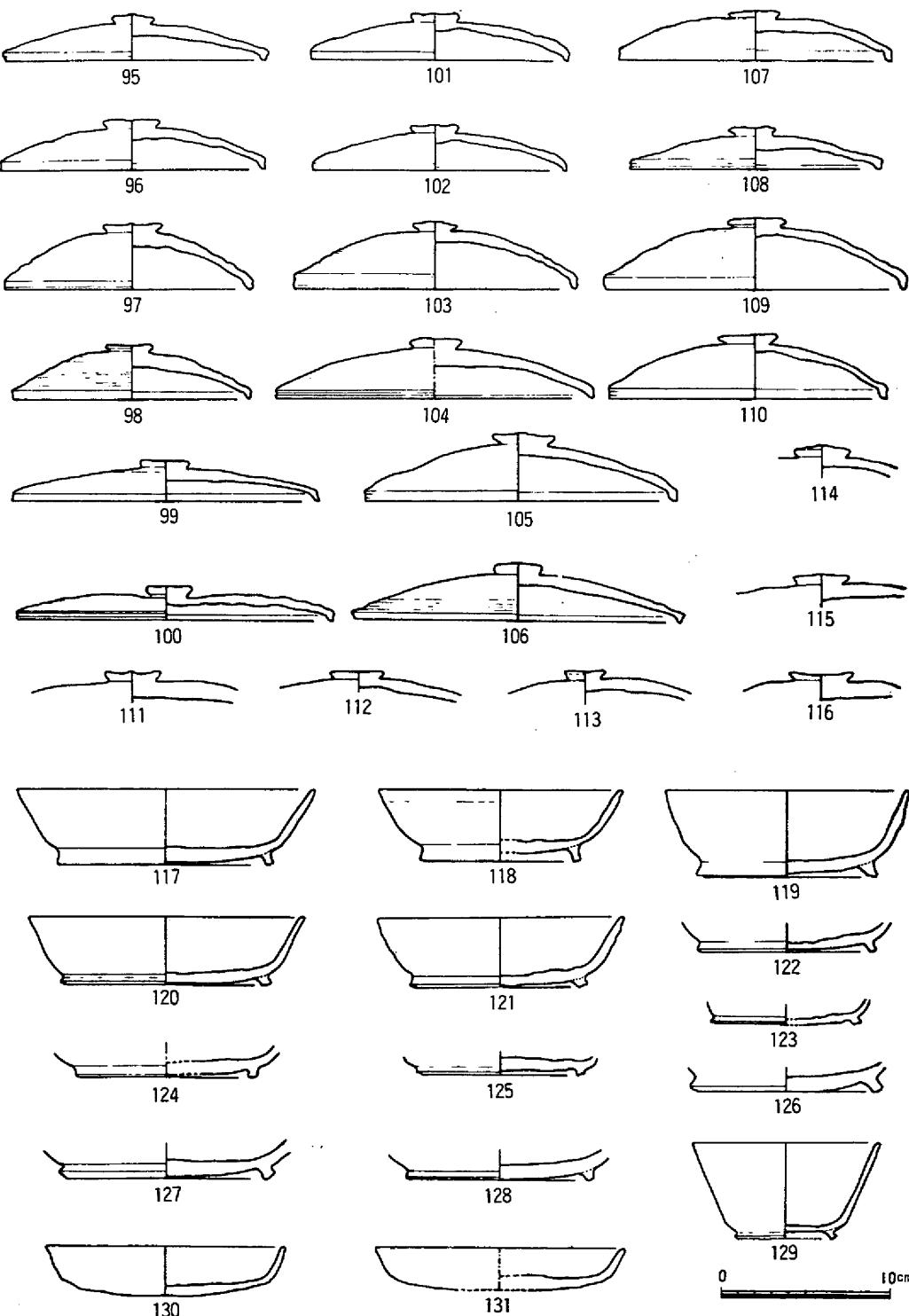
東水田包含層出土遺物は（第74・75・76図）に示されたもので、包含層の下り部分に流れ込んだ状態で多く出土した。



第73図 I区包含層出土遺物

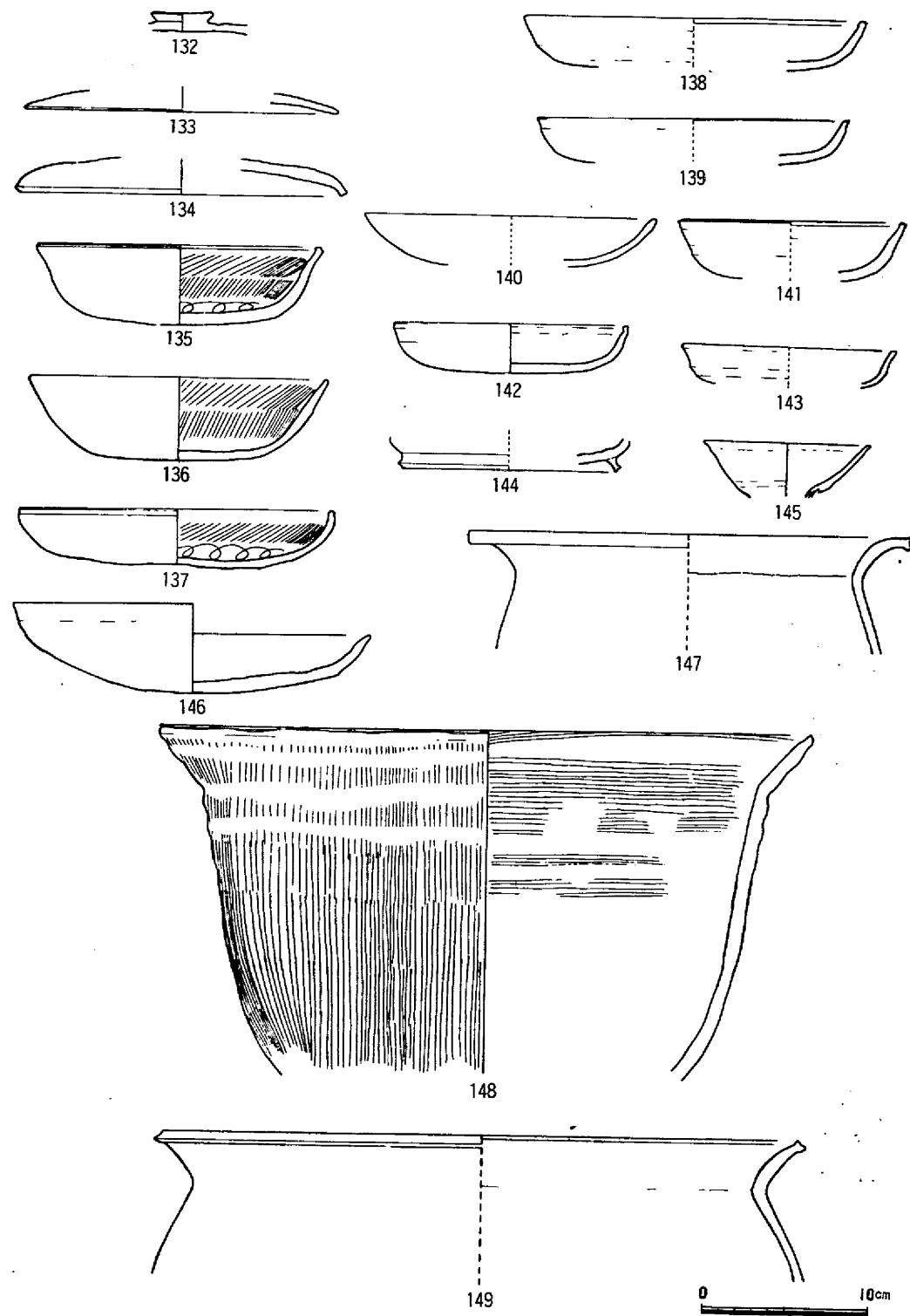


第74図 I区東水田包含層出土遺物

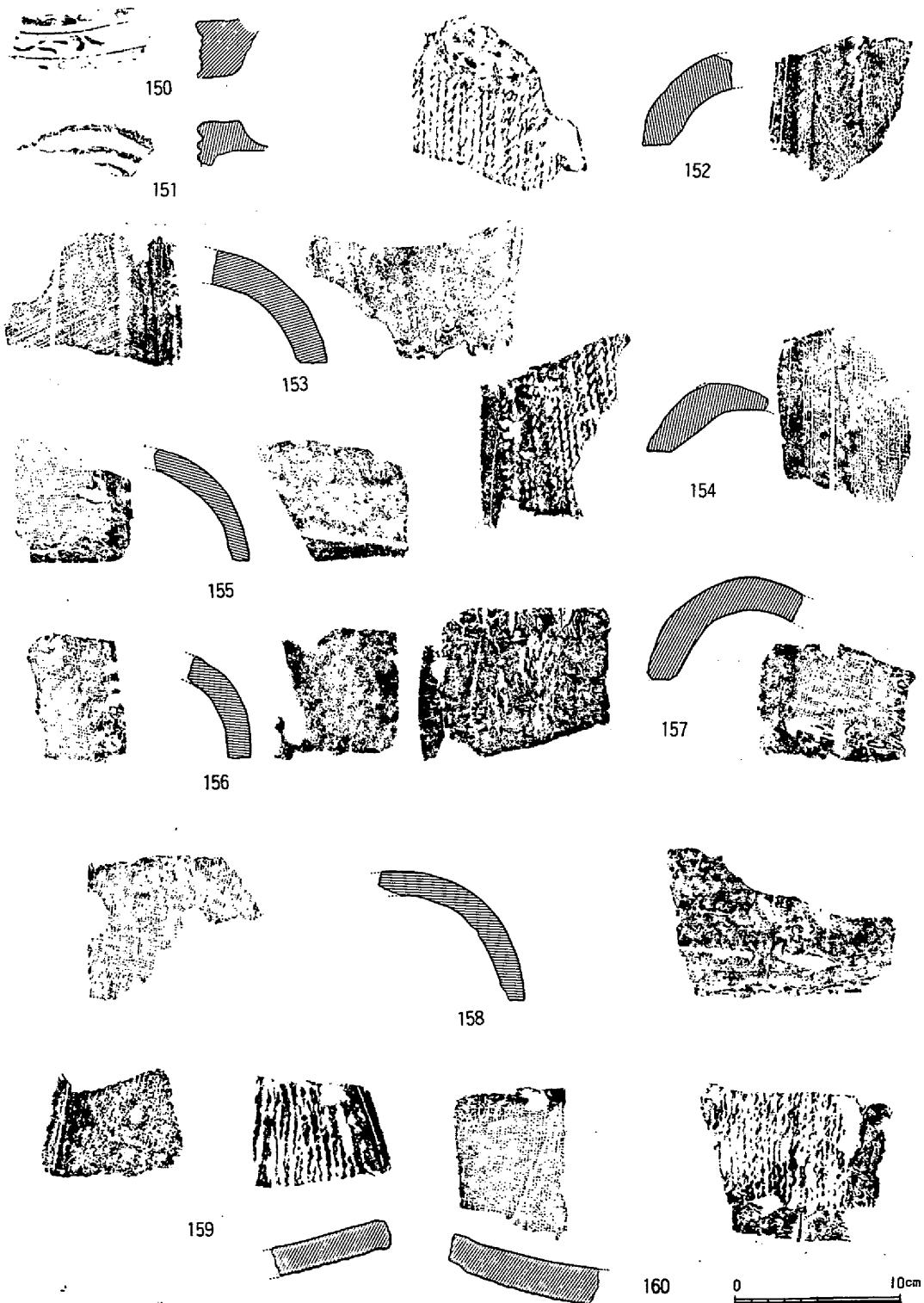


第75図 I区東水田包含層出土遺物

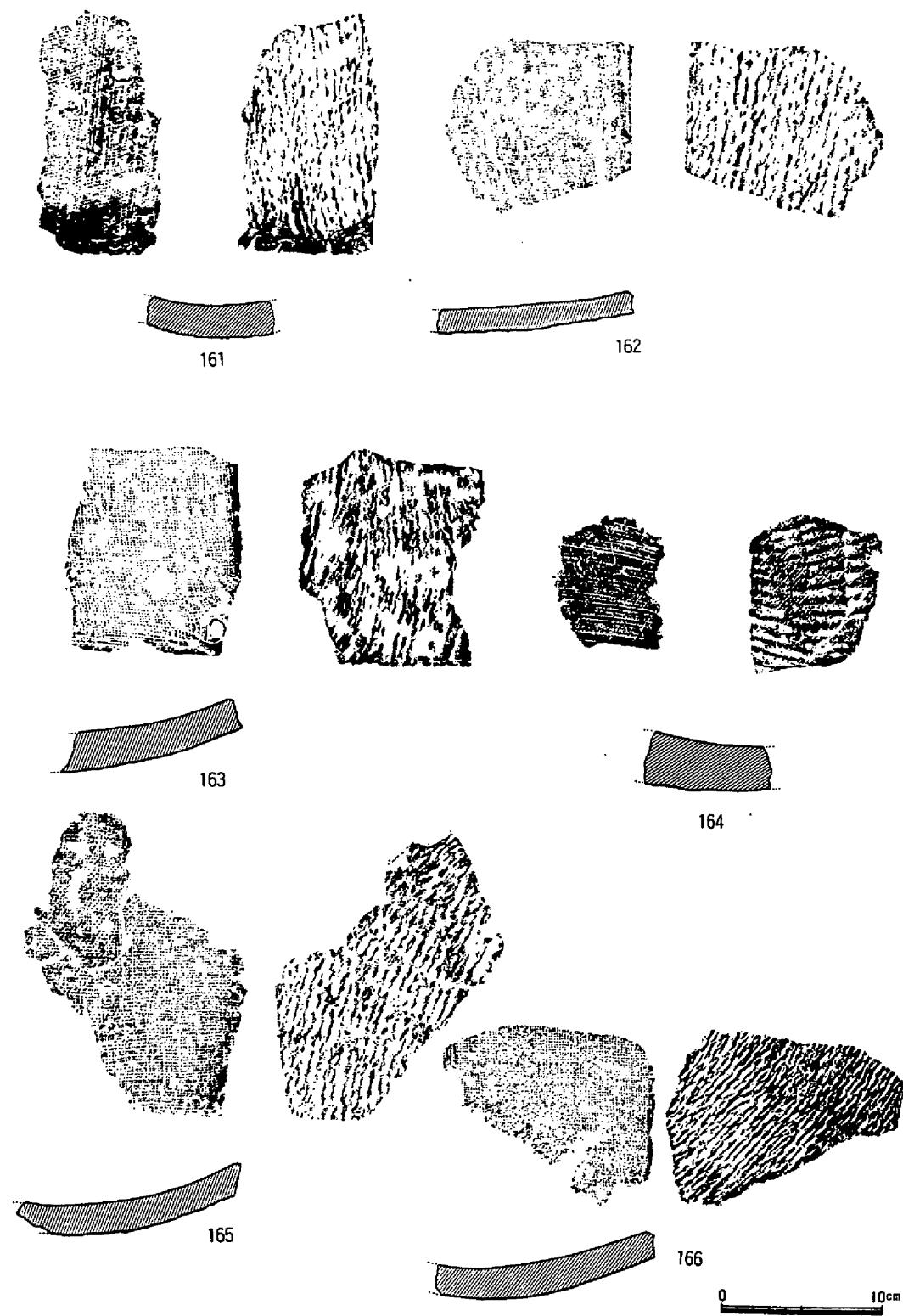
第5章 百間川岩間遺跡



第76図 I区東水田包含層出土遺物



第77図 I 区包含層出土瓦

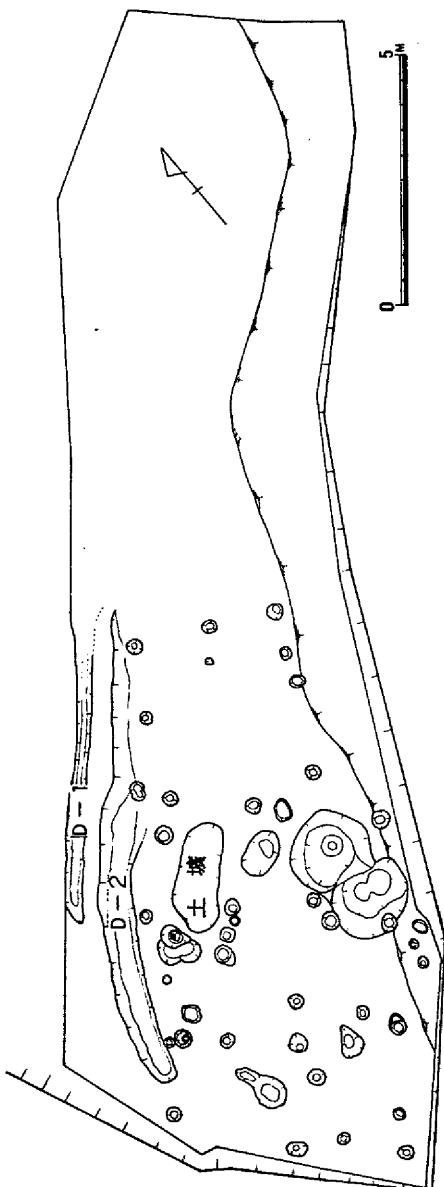


第78図 I区包含層出土瓦

## 第2節 丘陵部調査区

### II区の調査（第79図）

I区西側の丘陵斜面の中腹部に位置する。調査前において、 $30m \times 5m$ ほどの平坦面が観察され、何らかの遺構の存在が予想されたのである。



平坦部の表土を排土し基盤層を露出した段階で、遺構の存在が平坦部の中央から南西部に集中して検出されたのである。北東側の部分については、表土が浅く削平されたものと推測されるのである。

検出された遺構は、丘陵側の落ち際に、丘陵端を沿うように2本の溝が存在する。柱穴は、建物となるにいたらなかった。

#### 溝一1（第79図）

丘陵端に沿うように掘られたもので、西北側の上端はそのまま丘陵斜面へ続く。幅は37cm、深さ2cmほどである。

#### 溝一2（第79図）

溝一1の東南側に並行して掘られており、やや弧状を呈する。幅62cm、深さ7～9cmを測る。

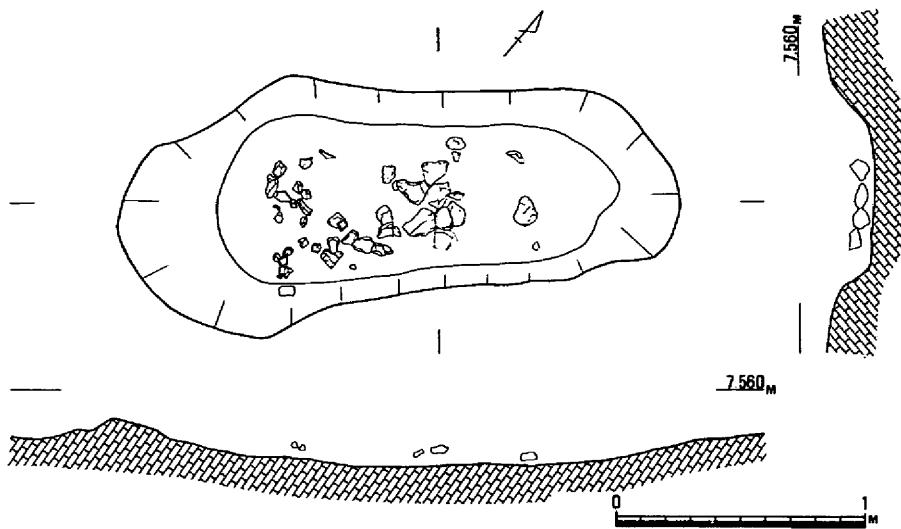
#### 土壤（第80図）

溝一1の東南側に検出されたものである。プランは、橢円形を呈し、規模は $2m22cm \times 78cm$ を測るものである。深さは、最も深い所で15cmほどであり、断面図に示した如く、底面は丸味を有する。

土壤内には、礫が若干浮いた状態で存在した。時期を判断する遺物の出土はみられなかった。

#### III区の調査（第81図）

III区は、丘陵頂部の平坦面に位置する。このIII区とI区との比高差は17mほどを測る。丘陵先端部に



第80図 II区土壤実測図 ( $\frac{1}{30}$ )

ついて2本のトレンチを設定し掘り下げたものである。しかしながら、果樹が栽培されておりかなりいたんでおり、遺物の検出は認められなかった。この先端部から陵部の平坦面へゆく間は緩やかな傾斜を描いている。この地区においてもトレンチを設定したが、表土下20cmほどで基盤に達し、遺構は検出されなかったのである。しかしながら遺物については土器と石器がともに表土中より出土しているのである。

丘陵端部の平坦部については、遺物の存在が確認された。第57図に示した地形図の等高線の17mの一部高い地点は、岩が露出している状態であり、遺構は認められなかったのである。

#### 建物Ⅰ（第82図）

調査区の南端よりに検出されたものである。4間×2間の建物である。桁行4m50cm、梁行8m10cmを測る。

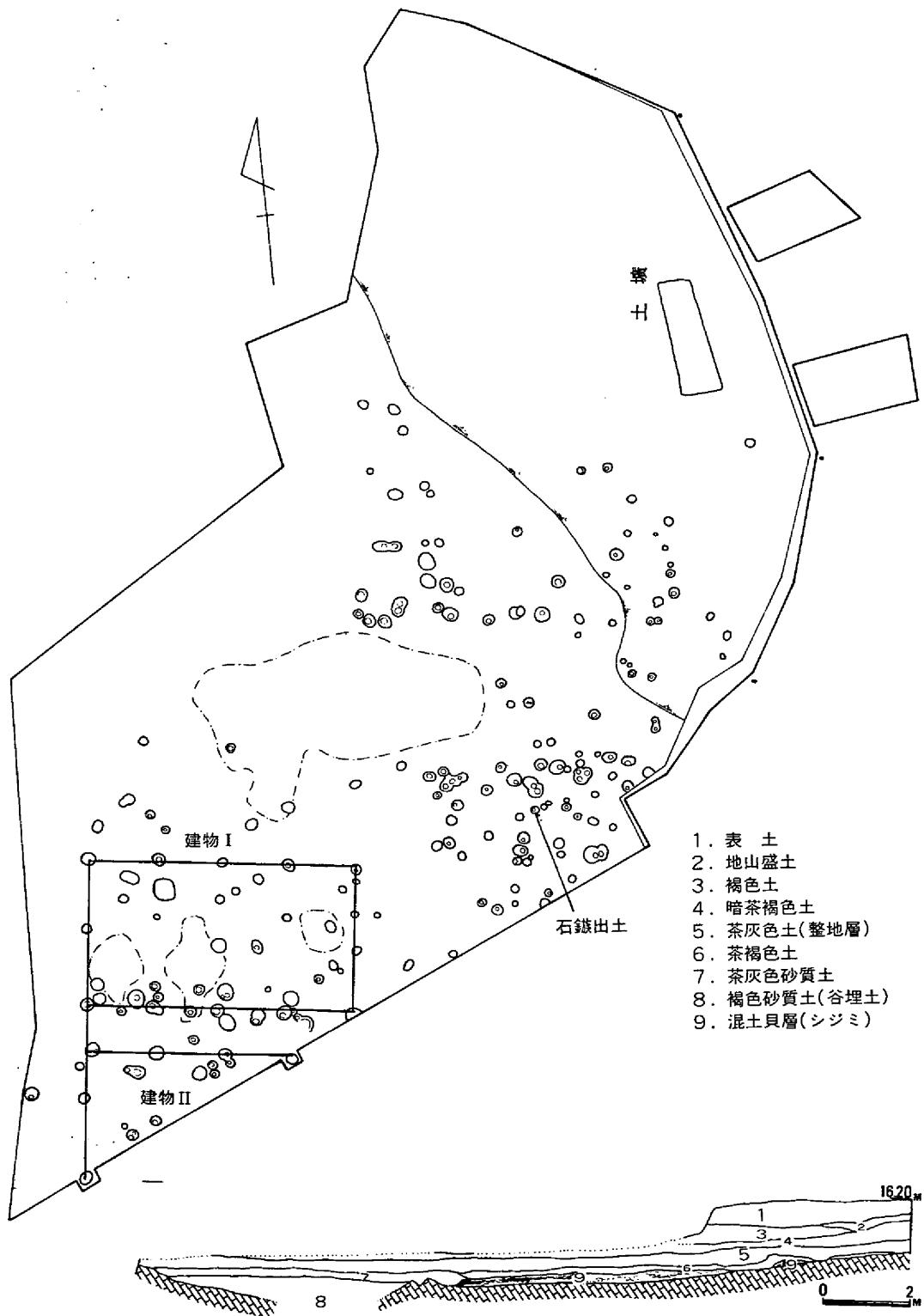
#### 建物Ⅱ（第82図）

建物Ⅰの南側に平行して位置し、一部は用地外により、全容を把握できなかった。桁行3間と梁行2間を確認されただけである。梁行は5m40cmを測る。

この2棟の建物は、1m40cmの距離をおいて並列して建てられている。このことから上屋構造を想定した時に、屋根部分が接する状態になるものではないかとも考えられる。このことから、建物Ⅰおよび建物Ⅱが同一の建物として想定されることも可能であろう。

#### 土壤（第81図）

東よりに検出されたもので、長さ3m50cm、南短辺1m30cm、北短辺1mを測る長方形のプランを



第81図 III区検出遺構及び土層断面図 ( $\frac{1}{150}$ ) ( $\frac{1}{200}$ )

## 第5章 百間川岩間遺跡

示す、深さは12cmほどを測る。遺物はなく、詳細は不明である。

### 石器（第83図）

167は、横剥ぎの剥片を素材としており、二次加工は表裏とも粗い。

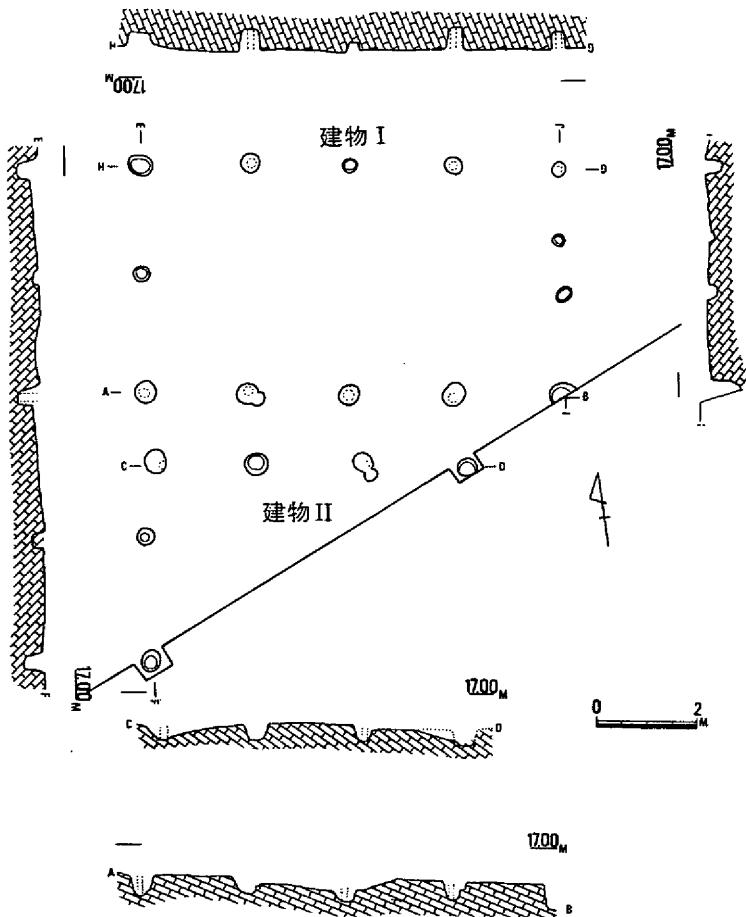
168、表面はほぼ全面に調整をし、裏面は全周縁を調整がめぐる。サヌカイト製である。

169、サヌカイト製である。表面はほぼ全面に調整を、裏面は全周縁に調整がめぐり、磨耗痕の顕著な部分が認められる。先端は欠損の可能性がある。

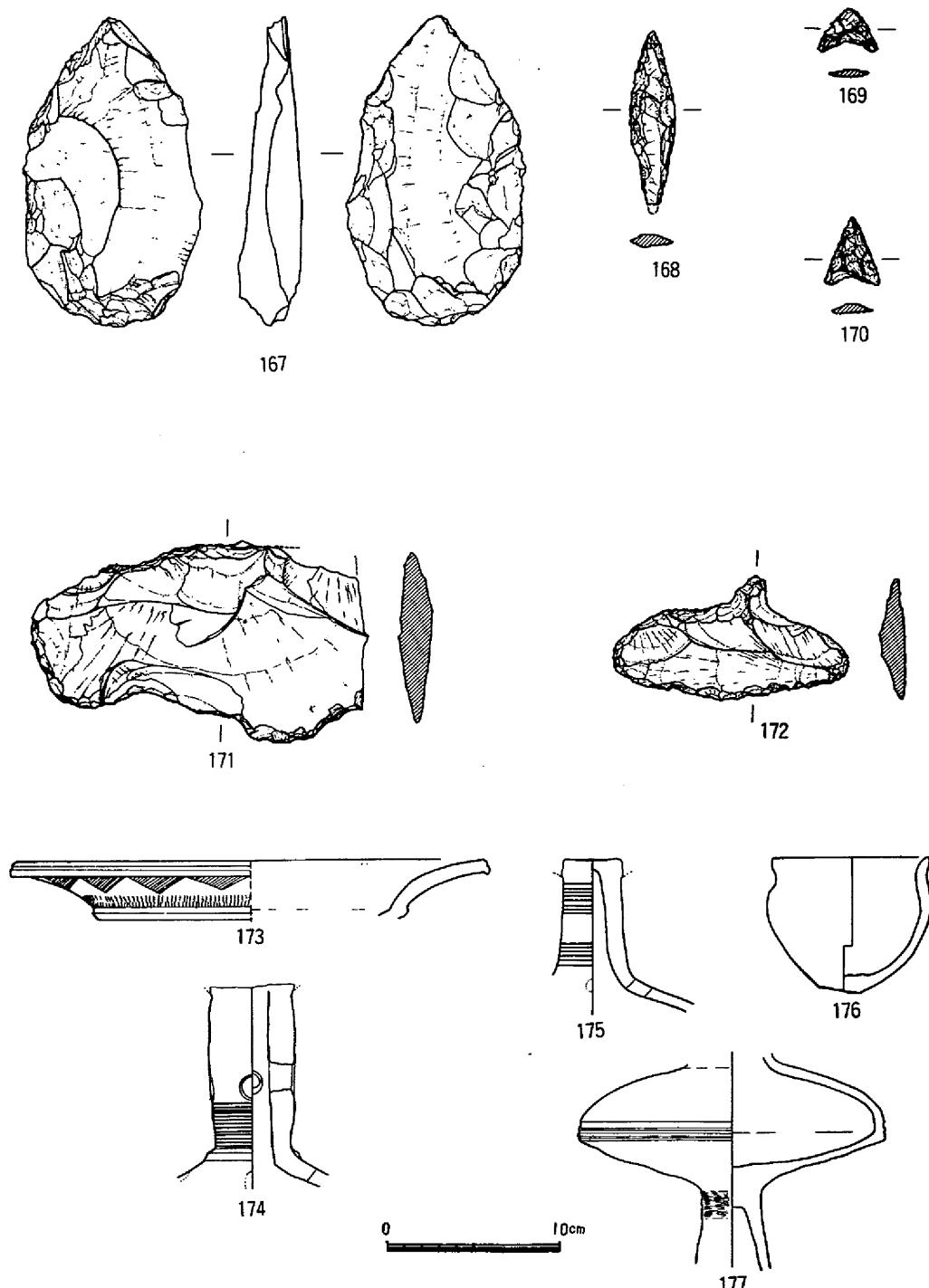
170、加工は両面とも全周に及び、比較的ていねいである。サヌカイト製である。この石器は pit より出土しており、周辺の pit の状態により住居址であった可能性もある。

171 刃部の調整は表裏ともに粗雑で、背部加工は比較的ていねいである。

172 刃部は片面加工であり、比較的ていねいである。サヌカイト製である。



第82図 III区建物実測図 ( $\frac{1}{150}$ )



第83図 Ⅲ区出土遺物（石器  $\frac{1}{2}$ ）

IV区の調査（第84図）

IV区は、丘陵西斜面平坦面にあたる。この地区は、東側および南側については、墓地となっており、これらと関係する2遺構の存在が予想された。

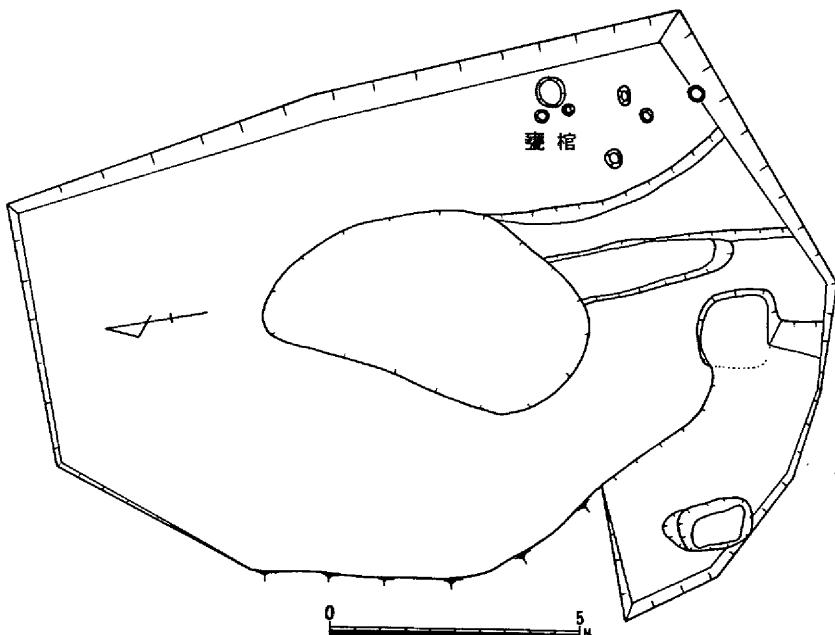
調査の結果は、調査区の中央部に  $6\text{m}40\text{cm} \times 3\text{m}56\text{cm}$ 、深さ  $20\text{cm}$  ほどを測る窪地が存在する。この内部からは、中世から近代にいたる遺物が攪乱状態で出土した。また、周辺からも、かなり乱れた状態での遺物が検出されたのである。

甕棺（第86図）

基盤層に径  $53\text{cm}$ 、深さ  $27\text{cm}$  を測る円形の土壙内に備前焼の甕を安置していた。内部からは、人骨、寛永通宝・キセル・土製動物などが検出されたのである。この甕棺は、蓋に223の盤を、底部に222の盤を用いていた。

190は一見兎に見えるが尾の形態から、ネズミと考えられる。内部は中空となり、鈴として使用したようである。212～221は釘・キセル等である。222は甕棺の底に敷かれた状態で認められたもので、径  $34.2\text{cm}$  を測り、中央部心孔を持つ。なお、図示した円形のものは、牡丹餅である。223は、甕棺の蓋として用いられたもので、径  $50\text{cm}$  を測る備前焼の盤である。

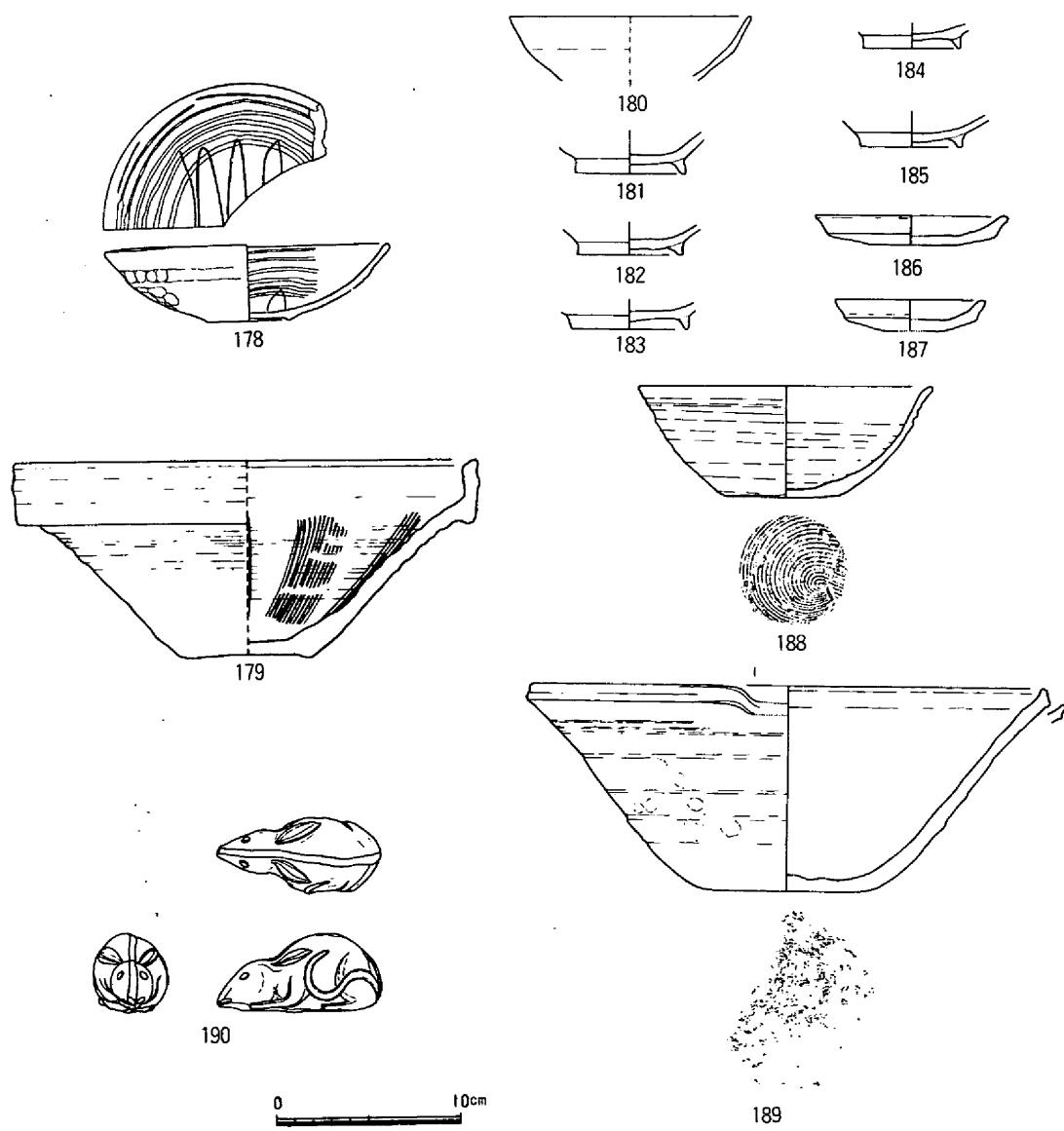
196～198は、周辺から検出された人形の土製品である。出土状態が確認することができなかった



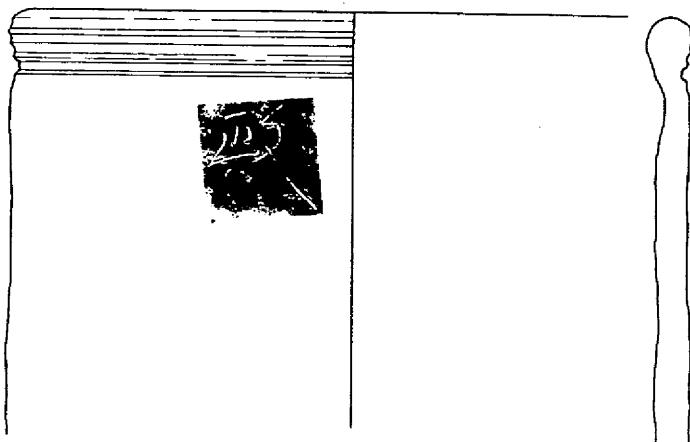
第84図 IV区検出遺構実測図 ( $\frac{1}{150}$ )

第2節 丘陵部調査区

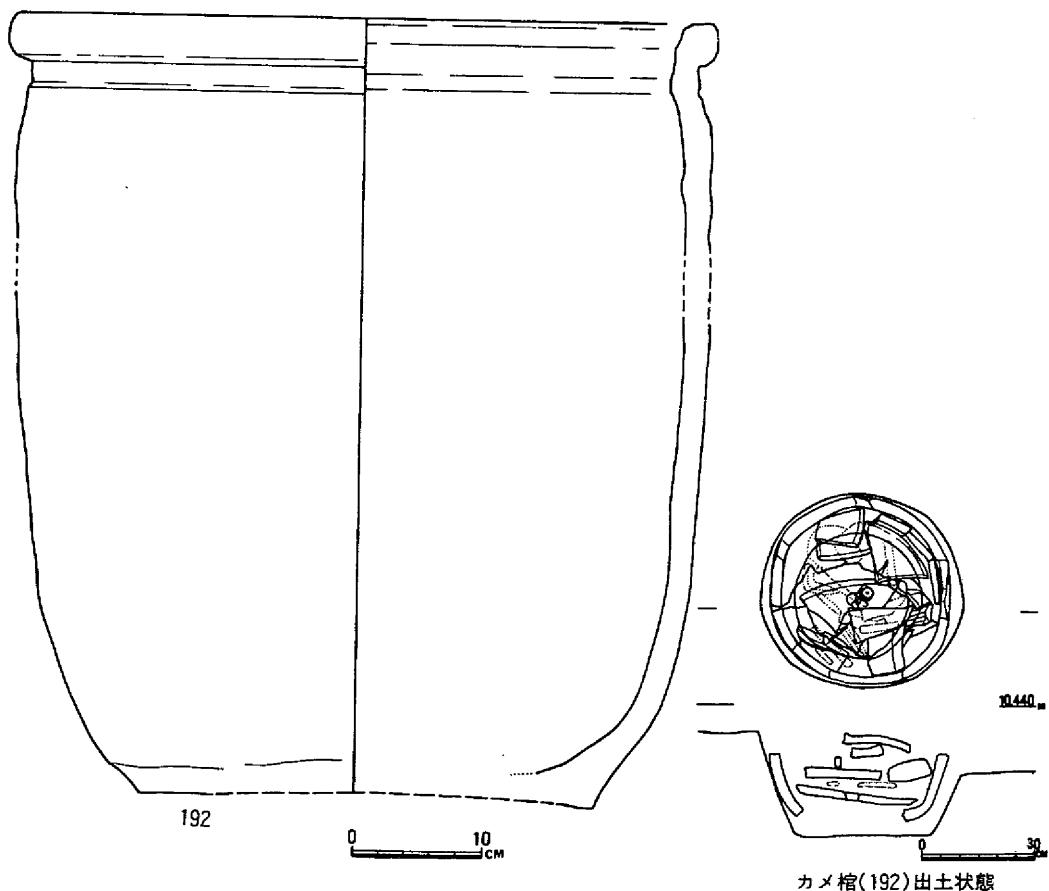
が、193～195の土器類を伴う可能性がある。また、196の人形は緑紬をかけている。(下沢)



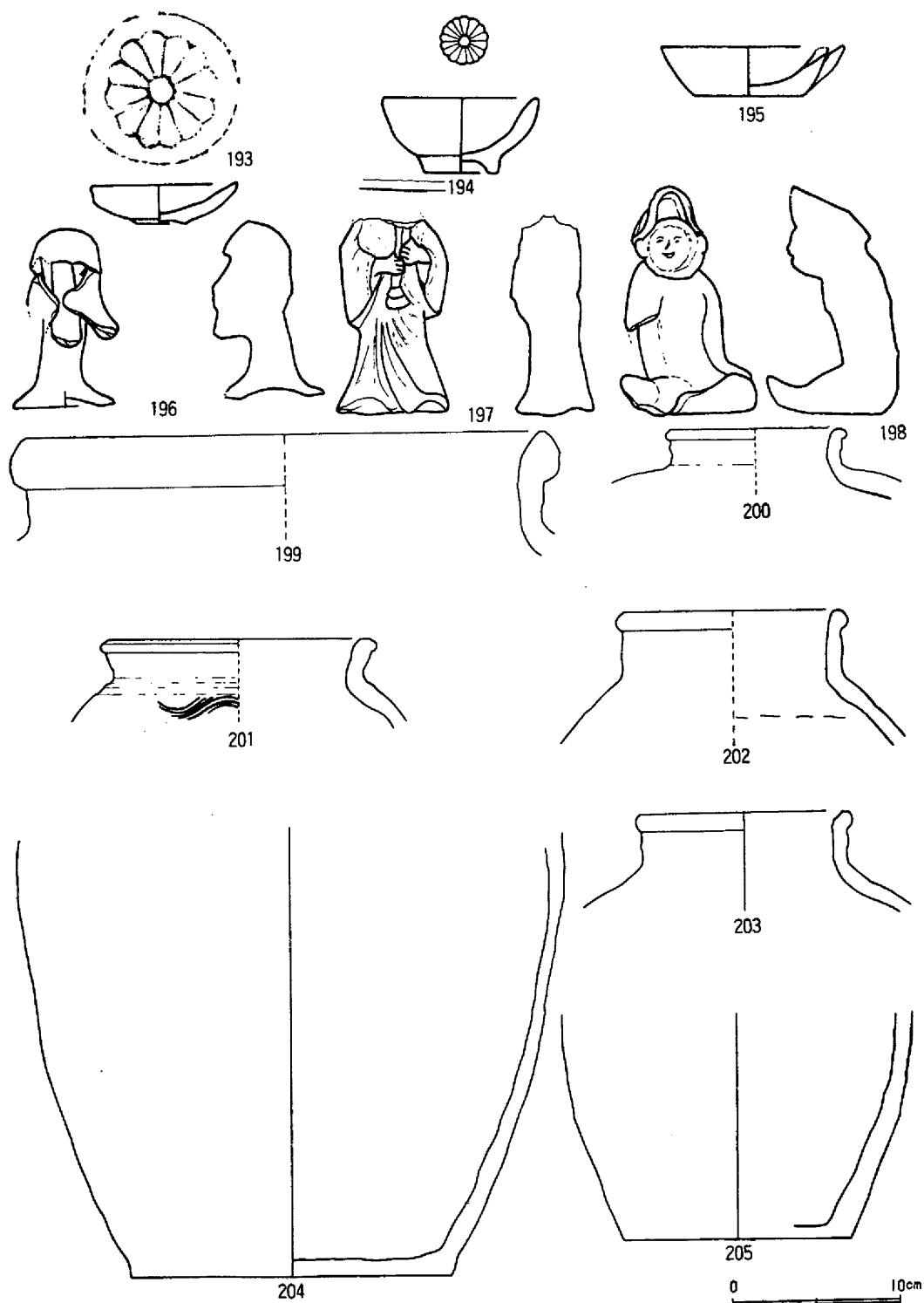
第85図 IV区出土遺物



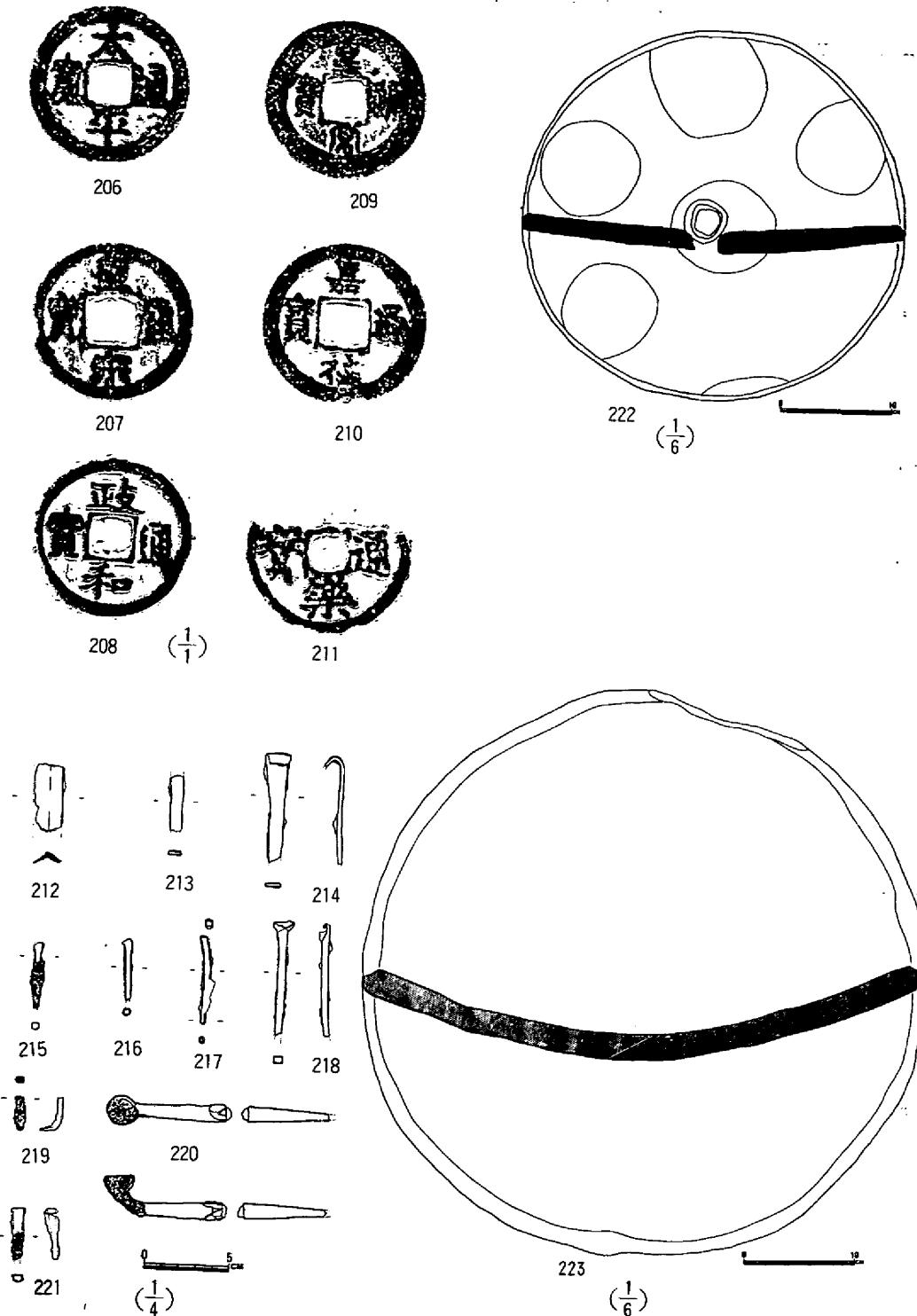
191



第86図 IV区出土遺物 ( $\frac{1}{6}$ ) 及び 出土状態 ( $\frac{1}{20}$ )



第87図 IV区出土遺物



第88図 IV区出土遺物

表 5 百間川岩間遺跡出土土器観察表

土器溜りI 第62図

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
彌生土器	1	推定口径20.5	○口縁部は「く」の字状に外反し、上下に拡張する。	○口縁端外面は7本の沈線を施したのち、横ナデ。	○細砂を含む。 ○焼成は良好。 ○褐色。 ○器面は剥離している。
	2	推定口径26.0	○口縁部は上下に大きく拡張する。下方の拡張部分は、粘土を付す。 ○高杯か。	○口縁端外面には、10本のヘラ描沈線を施す。内外面の調整痕は、風化のため不詳。	○細砂を多く含む。 ○焼成は良好。 ○暗茶褐色。
高杯形土器	3		○短脚のものである。 ○円孔は4個穿っている。	○ヘラ磨きがみられ、脚柱部は丁寧におこなわれている。 ○脚部内面は、端の削り。	○細砂を含む。 ○焼成は良好。 ○褐色。
台付鉢形土器	4 5		○底部が上げ底風のものと台状になるものとがある。	○台部には、顕著な押圧痕を残す。 ○鉢部内面に櫛削りがみられるものがある。	○細砂を含む。 ○焼成は良好。 ○褐色および暗茶褐色。
壺形土器	6		○底部破片である。	○外面から底部にかけて、ヘラ削り。	○細砂を含む。 ○焼成は良好。 ○褐色。

土器溜りII 第64図

彌生土器	7	口径 19.0	○「ハ」の字状に内傾する。 ○頸部を外反させ、さらに上方に拡張して口縁部をつくる。	○口縁端外面には、凹線状の沈線を施こし、さらに斜線充填の鋸歯文を施す。 ○肩部上端には、貝による圧痕が付されている。	○細砂および石英粒を含む。 ○焼成は良好。 ○淡褐色。
壺形土器	8	口径 16.5	○頸部上端を上下に拡張して口縁部をつくる。 ○胴部最大径のやや上よりに、輪積み痕をのこす。	○口縁端外面には、凹線がみられる。 ○胴部外面には、粗い櫛削りの上から、ヘラ磨き。 ○内面は、頸部下半からヘラ削り。	○3mm大の石粒を含む。 ○焼成は良好。 ○外面一茶褐色、内面一暗褐色
高杯形土器	9 12		○いずれも短脚であるが、短い柱状になるものと、「ハ」の字状に広がるものとが存在する。	○脚柱部から襟部にかけて、ヘラ磨き。	○微砂を含む。 ○焼成は良好。 ○褐色。
壺形土器	13	推定底径 8.0	○底部破片である。	○内外面ともヘラ削りをおこない、底部はヘラ磨き。	○細砂を含む。 ○焼成は良好。 ○褐色。
鉢形土器	14	推定口径48.0	○ゆるやかに外反する口縁端部を、わずかながら上下に拡張する。	○外面は、確なヘラ削き。	○微砂を含む。 ○焼成は良好。 ○褐色。

土壙I 第65図

須恵器	杯蓋	15	口径 12.5 蓋高 4.5	○体部から口縁部にかけてややゆるやかに内湾する。 ○口縁端部は丸く終る。	○天井部は未調整である。天井部内面は不整方向のナデを用いる。	○細砂を含む。 ○焼成は良好。 ○灰色。
		16	推定口径11.0 推定口径 3.7	○口縁端部は丸く終る。	○天井部内面は不整方向のナデを用いる。	○微砂を含む。 ○焼成は良好。 ○灰色。
		17		○小破片である。 ○口縁部は、外方に開きぎみとなる。 ○端部は鋭い。	○ロクロは右回転である。	○微砂を含む。 ○焼成は良好。 ○外面一淡灰色、内面一灰色。
	平瓶	18	口径 10.5		○ロクロは左回転である。	○細砂を含む。 ○焼成堅緻。 ○灰色。

## 第5章 百間川岩間遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	19	高台径 13.0 高台高さ 2.2	○高台部分の破片である。	○「ハ」の字状に開く、高台を付す。	○微砂を含む。 ○焼成は堅板。 ○淡灰色。
	20		○高台部の小破片である。 ○底部は扁平で「ハ」の字状に開く高台を付す。	○ロクロ回転は、左である。	○小石粒、細砂を含む。 ○焼成は良好。 ○外面-黒灰色、内面-灰色。
	21	残存高 7.6 体部最大径 8.6	○肩部は外方に下がり、底部は丸い。	○体部上半から頸部にかけて、ナデ。 ○底部外面にかけては、ヘラ削り。 ○最大径の上部に一条の凹線を有し、円孔スカシを施す。	○石粒を含む。 ○焼成は堅板。 ○灰色。
	22	口径 15.2 器高 8.9 脚径 10.3 脚高 4.9	○杯部は、外方に大きく開く。 ○脚部は、「ハ」の字状に開き、裾部は外方へ張り出す。	○回転ナデ。 ○杯部内面底部に不整方向のナデ。	○細砂、石粒を含む。 ○焼成は堅板。 ○灰色。
	23	口径 14.4 器高 8.7 脚径 10.3 脚高 4.9	○杯部はやや丸味をもって外方へ広がる。 ○裾部は、外方へ広がり、端部を若干肥厚させている。	○脚部上端近くに、ナデによる凹部。	○小石粒を含む。 ○焼成は堅板。 ○灰色。
	24		○口縁端部は、内溝気味。	○脚部外面は、平行タタキ。 ○内面は、同心円タタキ。	○細砂を含む。 ○焼成は良好。 ○外面-灰色、内面-淡灰色。 ○二次的に火を受ける。

D-4 第67図

須恵器	円面鏡	25		○陸部は、貼り付けてつくり、その下に空間を形成する。 ○海部は、仕切を設けている。	○微砂を含む。 ○焼成は堅板。 ○灰色。
-----	-----	----	--	--	----------------------------

土壤Ⅱ 第72図

中世土器	碗	26 39	口径 11.0~12.3 底径3.6~5.6 器高3.5~4.1	○口縁部は斜め外方にゆるく開き、端部は丸く收めている。	○口縁部及び高台付近は横ナデ、体部内面はナデしている。	○乳黃褐色を呈し、2mm前後の砂粒を含む。
小皿	40 42	口径7.8~8.3 器高1.4~1.8	○口縁部は斜め外方に僅かに立ち上がりをもつもので、底部の作りは雑である。	○口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。いずれも粘土扭巻きあげ成形である。	○淡黄褐色を呈し、水洗し粘土。	
	43 53	口径7.6~8.2 器高1.0~1.6	○皿部内面が非常に浅いもので、底部から口縁部にかけて徐々に肥厚するものである。	○同上	○同上	
皿	54 58	口径 10.6~12.7 器高2.5~3.0	○口縁部は斜め外方に立ち上がるもので、端部は丸く收めている。	○口縁部は横ナデ、底部は雑なヘラ削りが施されている。 ○成形は小皿同様粘土巻き上げである。	○同上	

P-109 第72図

中世陶器	龜山焼 甕	59		○口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は外反し、肥厚する。 ○体部は肩の張りがない。	○口縁端部は横ナデ。口縁部は刷毛調整のち横ナデ、体部は格子目叩きが施されている。内面は刷毛調整及び横ナデ。	○暗茶色を呈し、1mm以下の砂粒を僅かに含む。
	備前焼 擂鉢	60		○体部破片。	○体部内外面は横ナデ。 ○内面は8本單位の条線を施す。 ○底部はヘラ削り痕が認められる。	○暗茶褐色を呈し、3mm前後の砂粒を含む。

## 1区包含層 第73図

単位:cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
中世土器	小皿 61 63		○土壤出土のものと同様のものであるが、63はやや口径が大きい。	○口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り痕が認められる。	○淡茶褐色を呈し、水漉し粘土。
	皿 64		○底部と口縁部立ち上がりの境が明瞭なものである。	○内外面横ナデ。底部はヘラ削り痕が認められる。	○黄褐色を呈し、1mm以下砂粒を含む精製粘土。
	65		○口縁部はゆるく斜め外方に立ち上がる。	○内外面とも横ナデ。底部はヘラ削り痕が認められる。	○淡茶褐色を呈し、水漉し粘土。
碗	66 69		○碗の高台部である。69は比較的高くしっかりしている。	○いずれも横ナデ。	○乳黃褐色を呈し、1.5mm前後の砂粒を含む。
	70		○天井部中央に、遜平なつまみを付す。	○天井部内面は、不整方向のナデ。	○微砂を含む。 ○焼成は堅緻。 ○灰色。
須恵器	71	口径 13.3 器高 4.3	○天井部は平ら。 ○口縁部は内湾気味	○体部下半から天井部にかけてヘラ削り。	○微砂を含む。 ○焼成は良好。 ○灰白色。
	72	口径 10.1 受部径 12.8	○立ち上がりは内傾。 ○受部はやや丸味を有する。		○細砂を含む。 ○焼成は堅緻。 ○青灰色。
杯身	73	口径 14.0 器高 3.4 台部径 9.6	○杯部は、丸味をもって底部になる。 ○口縁部は、外方に開き氣味。 ○「ハ」の字状に開く高台を付す。	○底部内面は不整方向のナデ。	○細砂を含む。 ○焼成は良好。 ○淡灰色。
	74	口径 17.1	○口縁部は、やや立ち上がり気味。	○横ナデによる調整。	○微砂を含む。 ○焼成は良好。 ○灰白色。
壺	75		○口縁部は、垂直に立ち上がる。		○微砂を含む。 ○焼成は良好。 ○灰色。
	76	口径 14.7	○体部から口縁部へやや開き氣味。 ○端部は丸く終る。	○口縁部外面下半に沈線を施す。 ○杯部下半はヘラ削り。	○細砂を含む。 ○焼成は良好。 ○淡灰色。
土師器	杯身	77	○「ハ」の字状に開く、貼り付けの高台を付す。	○底部は、回転ヘラ削り。	○精良な粘土。 ○焼成は良好。 ○赤褐色。 ○丹塗り。
		78	○底部破片。	○内面に、放斜状の暗文。	○同上
	高杯	80	○軸部破片。	○ヘラにより、8面の削り。	○同上
須恵器	79		○縁縫の小破片である。	○底部はヘラにより蛇目高台風とする。 ○底部はヘラにより調整。	○胎土は非常に密で精良。 ○焼成は堅緻。 ○須恵質。 ○灰綠色。
土師器	81		○小破片		○粗砂を含む。 ○焼成は良好。 ○淡灰色。

## 東水田包含層 第74～76図

須恵器	高杯 83 85		○杯部は、口縁が内傾気味のものと外方に広がるものがある。 ○脚部は細く、下方へ開く。 ○雄部は、下に若干抜張気味。		○微砂を含む。 ○焼成は堅緻。 ○灰褐色および淡灰色。
-----	----------------	--	---	--	-----------------------------------

第5章 百間川岩間遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	87	口径 器高	13.2 4.6 ○口縁部は立ち上がり気味。 ○端部は丸く終る。	○天井部ほどに、回転ヘラ削りを用い、それより上については、不整方向のヘラ削り。 ○内面には、不整方向のナデ。	○粗砂を含む。 ○焼成は良好。 ○淡灰色。
	88	口径 器高	12.2 4.3 ○口縁部は、やや開き気味。	○天井部には、不整方向のヘラ削り。	○1.5mmほどの砂粒。 ○焼成は良好。 ○灰色。
鉢	89		○体部は外傾気味に外反する。 ○口縁端部内面は、凹部となる。	○ナデによる凹部をつくる。	○小石粒を含む。 ○焼成は堅板。 ○灰色。
甕	90	口径	9.8 ○口縁端部は、内傾気味に立ち上がる。		○微砂を含む。 ○焼成は良好。 ○外面一暗灰色、内面一灰色。
	91	口径	20.7 ○口縁部は、肥厚させる。	○端部は丸くし、ナデによる凹部をつくる。 ○体部外面の肩部近くには、平行タタキ、それより下半は格子タタキをし、その上からカキ目。 ○内面は同心円タタキ。	○小石粒を含む。 ○焼成は堅板。 ○灰色。
	92	口径	22.5 ○口縁部は、内傾気味。 ○端部は内側に肥厚させる。	○体部外面は平行タタキ。 ○内面は、押圧痕の上からナデ。	○細砂、小石粒を含む。 ○焼成は堅板。 ○外面一暗灰色、内面一灰色。
	93	口径		○口縁端部は、内傾気味。	○口縁端部外には、凹線を施す。平行タタキの上からカキ目。
平瓶	94	体部径 頸部径	17 5 ○口頸部は、体部中央よりずらし、斜めに付す。 ○底部は扁平。	○体部外面の下端はヘラ削り。	○0.2mm大の白色の石粒を含む。 ○焼成は堅板。 ○灰色。
杯蓋	95	口径 器高	15 2.7 ○天井部中央に扁平なつまみを付す。 ○口縁端部はほぼ垂直に屈曲する。	○天井部ヘラ削り。 ○内面中央部には不整方向のナデ。	○細砂を含む。 ○焼成は良好。 ○淡灰色。
	96	口径 器高	15.8 2.9 ○天井部中央に扁平なつまみを付す。 ○口縁端部は垂直に屈曲する。	○同上	○1mm大の石粒を含む。 ○焼成は良好。 ○灰色。
	97	口径 器高	14.7 3.9 ○天井部中央に扁平なつまみを付す。 ○口縁端部は屈曲する。	○口縁端部は凹線を施す。	○石粒を含む。 ○焼成は堅板。 ○淡灰色。
	98	口径 器高	17.7 4.2 ○口縁端部は、やや内傾気味に屈曲する。 ○天井部中央に扁平なつまみを付す。	○天井部ヘラ削り。 ○内面中央部には不整方向のナデ。	○石粒を含む。 ○焼成は堅板。 ○淡灰色。
	99	口径 器高	19.3 2.4 ○口縁端部は屈曲し、外反する。 ○天井部中央に扁平なつまみを付す。	○同上	○微砂を含む。 ○焼成は堅板。 ○灰色。 ○転用観として使用。
	100	口径 器高	18.9 2 ○天井部分は中央部で窪み扁平なつまみを付す。 ○天井部中央に扁平なつまみを付す。	○同上	○微砂を含む。 ○焼成は堅板。 ○灰色。
	101	口径 器高	15.1 2.7 ○天井部中央に扁平なつまみを付す。 ○口縁端部は屈曲する。	○同上	○同上
	102	口径 器高	15.2 2.7 ○天井部には窪みつまみを付す。 ○口縁端面は内傾気味に屈曲する。	○同上	○微砂を含む。 ○焼成は堅板。 ○灰色。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須 惠 器	103	口径 16.9 器高 4.0	○天井部には扁平なつまみを付す。 ○口縁端部は屈曲する。	○口縁端部外面は凹部となる。 ○天井部ヘラ削り。 ○内面中央部には不整方向ナデ。	○微砂を含む。 ○焼成は堅緻。 ○淡灰色。
	104		○天井部には扁平なつまみを付す。 ○口縁端部は屈曲する。	○同上	
	105	口径 18.5 器高 4.0	○天井部中央に扁平なつまみを付す。 ○口縁端部は屈曲する。	○天井部ヘラ削り。 ○内面中央部には不整方向のナデ。 ○口縁端部外面には、凹部をつくる。	○微砂、1mm大の砂粒を含む。 ○焼成はややあまい。 ○灰色。
	106	口径 19.3 器高 3.4	○天井部には扁平なつまみを付す。 ○口縁端部は内傾し、屈曲する。	○天井部ヘラ削り。 ○内面中央部には不整方向のナデ。	○1mm大の砂粒を含む。 ○焼成は良好。 ○淡灰色。
	107	口径 16.1 器高 2.9	○天井部には扁平なつまみを付す。 ○口縁端部は屈曲し、外反気味となる。	○同上	○1mm~3mm大の石粒を含む。 ○焼成は良好。 ○淡灰色。
	108	口径 14.7 器高 7.5	○天井部中央に扁平なつまみを付す。 ○口縁端部は屈曲する。	○天井部ヘラ削り。 ○内面中央部には不整方向のナデ。 ○口縁端部外面に凹線を施す。	○細砂を含む。 ○焼成は堅緻。 ○淡灰色。
	109	口径 14.1 器高 3.2	○天井部には扁平なつまみを付す。 ○口縁端部は屈曲する。	○天井部ヘラ削り。 ○内面中央部には不整方向のナデ。	○石粒を多く含む。 ○焼成は堅緻。 ○暗灰色。
	110	口径 16.4	○天井部には扁平なつまみを付す。 ○口縁端部は屈曲する。	○天井部ヘラ削り。 ○内面中央部には不整方向のナデ。 ○口縁端部外面に凹線を施す。	○1mm程度の砂粒と細砂を含む。 ○焼成はややあまい。 ○灰色。
	111 ↓ 116		○いずれもつまみ部の破片である。		
	117	口径 17.8 器高 4.5 台脚径 12.8	○口縁部は外傾し、端部は丸く終る。 ○底部は丸味を帯び、「ハ」の字状の高台を付す。	○底部内面は、ナデがおこなわれ、外面はヘラ調整。	○砂粒を含む。 ○焼成は堅緻。 ○淡灰色。
杯身	120	口径 16.5 器高 4.0 台脚径 12.6	○口縁部は外傾し、端部は丸く終らせる。底部は高台との差は、中心部で1mmほどである。「ハ」の字状に聞く高台を付す。	○底部内面は、ヘラ削り。	○微砂を含む。 ○焼成は堅緻。 ○暗灰色。
	119	口径 14.5 器高 4.2 台脚径 9.6	○口縁部は外方に開き、端部は丸く終る。 ○「ハ」の字状に聞く高台を付す。	○底部内面はヘラ調整。	○微砂を含む。 ○焼成は堅緻。 ○淡灰色。
	118	口径 14.4 器高 5.1 台脚径 10.7	○口縁部はやや外傾気味に開き、端部は丸く終る。 ○「ハ」の字状に聞く高台を付す。	○底部内面は、不整方向のヘラ調整。	○微砂を含む。 ○焼成は堅緻。 ○淡白灰色。
	121	口径 14.6 器高 4.1 台脚径 10.5	○口縁部は外方へ開き、端部は丸く終る。 ○「ハ」の字状に聞く高台を付す。	○底部内面は、不整方向のナデ。 ○外面はヘラ切り痕を残す。	○微砂を含む。 ○焼成は堅緻。 ○淡灰色。
	122 ↓ 123		○高台部の破片である。124のように底部が高台よりも張るものも存在する。	○横ナデによる。	○細砂を含む。
	129	口径 11.1 器高 5.7 台脚径 6.1	○深い杯部を有する。 ○「ハ」の字状に聞く高台を付す。		○焼成は堅緻。 ○灰色。
	130	口径 14.3 器高 3.0	○底部はほぼ扁平であり、口縁部は外傾する。	○底部内部に不整方向のナデ。	○小砂、砂粒を含む。 ○焼成は堅緻。 ○淡白灰色。

第5章 百間川岩間遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須磨器	杯身	131	口径 14.9 ○口縁部は外方へ開き、端部は丸く終る。		○微砂を含む。 ○焼成は堅緻。 ○淡灰色。
土師器	杯蓋	132	○つまみ部の破片。		微砂を含むが精良な粘土を用いる。 ○焼成は良好。 ○褐色。 ○丹塗り。
	杯身	133	○口縁部の小破片。		○細砂を含む。 ○焼成は良好。 ○褐色。 ○丹塗り。
		134	○口縁部の破片。口縁端部は、内傾気味に屈曲し、端面は平らになる。		○微砂を含むが、精良な粘土を用いる。 ○褐色。 ○丹塗り。
	杯身	135	口径 17.0 ○口縁部は外方に広がり、端部は内傾する。	○端部外面には沈線を施す。 ○外面はヘラ磨き。 ○底部にかけては不整方向のハケ。 ○内面は、二段となる斜線と底部にラセン暗文を施す。	○微砂を含むが精良な粘土を用いる。 ○焼成は良好。 ○赤褐色。 ○丹塗り。
		136	口径 18.0 器高 5.0 ○口縁部は外方へ広がり、端部は丸く終る。 ○底部は扁平につくる。	○外面はヘラ削き。 ○底部はヘラ削り。 ○内面には二段の斜線の暗文がみられる。	○同上。
		137	口径 19.0 器高	○口縁部は内傾気味。 ○端部外面に凹線を施す。	○外面はヘラ磨き。 ○内面には斜線の暗文。
		138		○口縁部は外方に広がり、端部は平らにつくる。	○底部外面にかけてはヘラ削り。 ○内面に暗文がみられるが、固化できず。
		139		○口縁部は外方へ広がり、端部は平らにつくる。	○微砂を含む。 ○焼成は良好。 ○淡褐色。 ○丹塗り。
		140		○口縁部は外方に広がり、端部は丸くつくる。	○石英粒、小石粒を含む。 ○焼成は良好。 ○暗褐色。 ○丹塗り。 ○二次的な火を受け器面は荒れている。
		141		○口縁部は外方へ広がり、端部は平らにつくる。	○微砂を含む。 ○焼成は良好。 ○淡褐色。 ○丹塗り。
		142	口径 4.2 器高 3.0 ○口縁部は内傾気味に立ち上がり、端部は丸くつくる。	○底部には、不整方向のハケ目がみられる。	○微砂を含むが、精良な粘土を用いる。 ○赤褐色。 ○丹塗り。
		143	○小破片。		○同上
		144	○台部の小破片。		
須磨器	杯身	145	口径 10.1 ○口縁部は、大きく外方へ開き、端部は丸い。		○1mmの大砂粒を含む。 ○焼成は堅緻。 ○茶灰色。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	杯身	146 口径 21.6 器高 4.5	○口縁部は外方へ開き、端部は丸くつくる。	○底部外面はヘラ削り、内面には不整方向ナデ。	○1mmの大砂粒を含む。 ○焼成は堅板。 ○灰色。
土師器	甕	147	○口縁部は強く外反し、端部は平坦面となる。	○口縁部はナデ。 ○脚部外面は斜めのハケ、内面は横のハケ。	○細砂、石粒を含む。 ○焼成は良好。 ○淡褐色。
		148 口径 40.0	○頸部からゆるやかに外方へ開き、端部は丸くつくる。 ○端面には沈線がみられる。	○口縁部から胴部にかけては、内外面ともハケ目がみられる。	○細砂、小石粒を含む。 ○焼成は良好。 ○茶褐色。
	149		○口縁部は外に開き、端面は平坦面となる。 ○ハケで調整する。	○口縁部内外はナデにより、胴部はハケ調整。	○微砂を含む。 ○焼成は良好。 ○淡褐色。

## III区 第83図

弥生土器	高杯形土器	173	○口縁部は外方へ大きく開き、端部は肥厚氣味となる。 ○腹曲部外面は、帯状となる。 ○器台か。 ○脚部片か。	○口縁端部外面に沈線を用いる。 ○杯部外面には斜線充填の鋸齒文及び刺突文を施文する。	○細砂を含む。 ○焼成は良好。 ○褐色。
		174 175	○脚部の破片であり、脚部と裾部には、孔を穿つ。	○脚部上下には輪描を施文する。	○同上
台付壺	177		○直口壺に台部を有するもの。	○脚部最大幅の所に、3本の凹線を施す。 ○脚部上半には、圓化できなかったが、輪描の痕跡を認める。	○同上
甕	176 口径 9.0 器高 7.7 底部径 2.4		○口縁部はゆるやかに外反する。 ○底部は平底となる。	○底部内面は、押圧痕がみられる。	○細砂を含む。 ○焼成は良好。 ○外面一褐色、内面一黒色。

## IV区 第85～87図

瓦器	瓶	178 口径 15.3 器高 4.1 高台径 4.4	○口縁部は外方へ開く。 ○扁平な高台を付す。	○体部中半ばより下半にかけて、指頭によるオサエとナデ。 ○内面には、ナデの後暗文を施す。	○きめ細い粘土。 ○焼成は良好。 ○淡黒灰色。
中世陶器	備前焼 擂鉢	179	○口縁部は垂直に立上る。 ○底部は上げ底氣味となる。	○内面には12本の輪目。 ○口縁部外面には、ナデによる2本の凹線を施す。	○細砂、小石粒を含む。 ○焼成は良好。 ○茶褐色。
中世土器	椀	180 186	○破片である。 ○扁平な底部に短い高台を付す。		○微砂を含む。 ○焼成は良好。 ○淡白灰褐色。
	皿	186 187	○小破片である。		○焼成はモロイ。 ○淡赤褐色。
近世土器	椀	188	○口縁端部は外方へ開き、端部は丸くつくる。	○横ナデをおこない、底部は糸切り。	○きめこまかい粘土。 ○焼成は良好。 ○口縁内外面には帯状に黒灰色を呈し、他は灰白色。
	捏鉢	189	○口縁端部は上方に立ち上がり、底部は平坦である。	○口縁端部外面は凹線状となり、注口部は指頭によるオサエがみられる。 ○底部は糸切り。	○2mm～3mmの大石粒を含む。 ○焼成は良好。 ○暗灰色。
近世土器	碗	193 口径 4.5 器高 1.1 底部径 1.5	○口縁部は外方に広がり、底部は上げ底風となる。	○底部内面には菊花のスタンプを付す。 花弁は12である。	○微砂を含む。 ○焼成良好。 ○淡褐色。

第5章 百間川岩間遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
近世 土器	194	口径 4.8 器高 2.3 高台径 2.2	○口縁部は内湾気味に立ち上がり、 高台を付す。	○底部内面には菊花のスタンプを付す。 花卉は16である。	○微砂を含む。 ○焼成堅致。 ○淡茶褐色。
幅前焼 壺	195	口径 5.0 器高 1.5 底部径 3.4	○口縁部は外方に広がり、底部は平底。 杯中ほどに粘土を付す。	○底部はヘラで丁寧に調整。口縁部分から斜めに穿孔をする。	○微砂。 ○焼成良好。 ○淡褐色。
	199 ↓ 202		○直口し、大きい「玉縁」となるものと、小さい「玉縁」の両方がある。 ○「く」の字状に外反する口縁を有するものも存在する。	○肩部に波状文を付すものもある。	
幅前焼 甕	204 ↓ 205		○壺形土器の底部破片と考えられる ものである。		
	191	口径 50.0	○口縁部は肥厚する。 ○脚部のハリは全くみられない。	○頸部は、太い沈線を用い、口縁端面には凹線を施す。	○3mm大の石粒を含む。 ○焼成は堅致。 ○茶褐色。 ○頸部下に「政」のヘラ書き。
	192	口径 53.6	○口縁端部は「玉縁」状。 ○底部にかけては、なだらかに移行し、平底となる。	○頸部には凹部をもうける。 ○全体はナデ。	○1mmほどの砂粒を含む。 ○焼成は良好。 ○赤銅色。

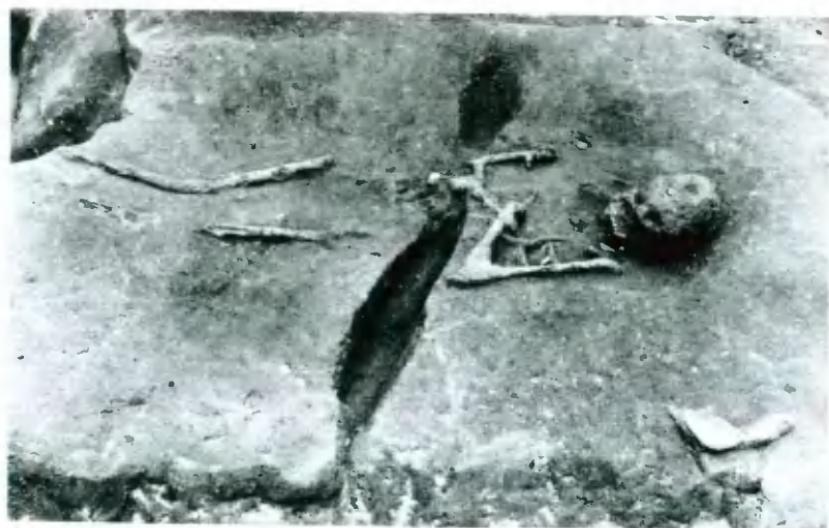


1 岩間遺跡 右岸用水・丘陵両調査区 全景（北東から）



2 岩間遺跡 右岸用水調査区遺構検出状況（西から）

図版20



1 岩間遺跡 右岸用水調査区 人骨検出状況（東から）



2 岩間遺跡 右岸用水調査区 土塙 II（北西から）

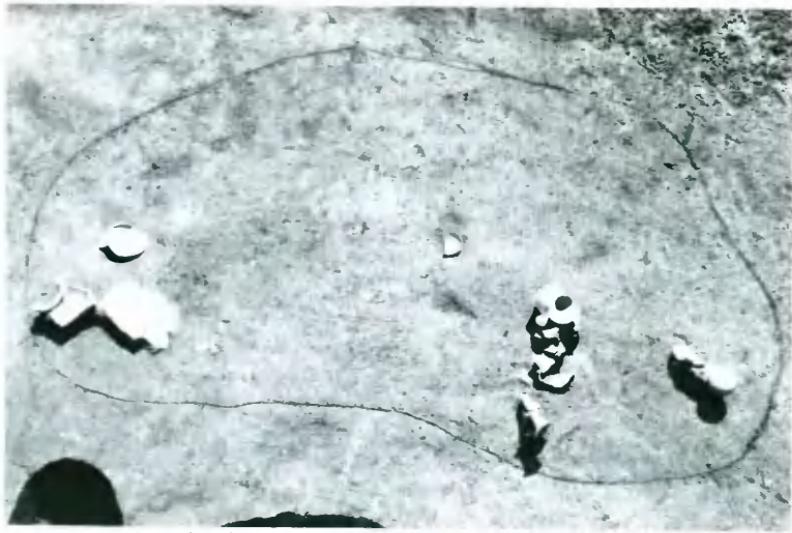


1 岩間遺跡 右岸用水調査区井戸（東から）



2 岩間遺跡 右岸用水調査区溝状遺構（南から）

図版22



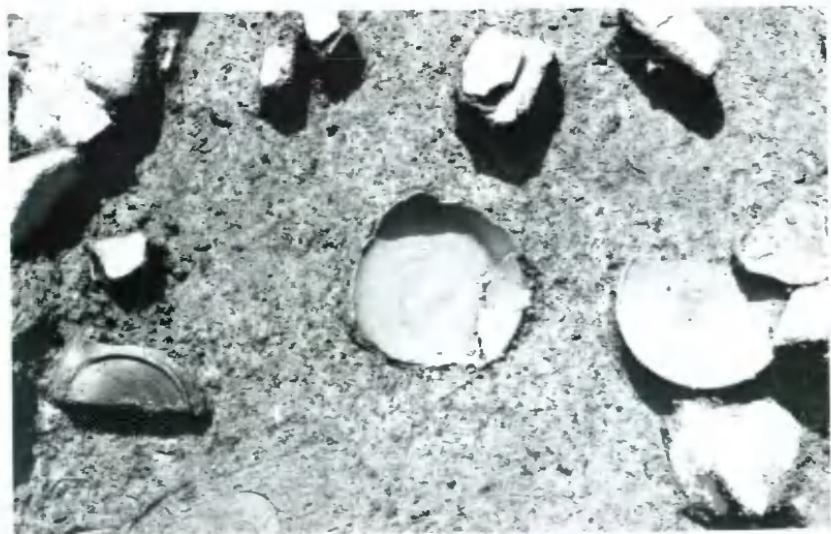
1 岩間遺跡 右岸用水調査区土塙 I 検出状況（西から）



2 岩間遺跡 右岸用水調査区土塙 I （西から）



1 岩間遺跡 右岸用水調査区遺物出土状況（西から）



2 岩間遺跡 右岸用水調査区遺物出土状況（西から）

図版24



30



32



34



57



58



40



45



46



51



53

岩間遺跡 右岸用水調査区土塙II出土遺物



25



25



25



22



23



94



86



87



15

岩間遺跡 右岸用水調査区出土遺物



73

図版26



95



107



104



103



109



96



104



110



98



102



100

岩間遺跡 右岸用水調査区出土遺物



146



119



120



117



118



77



137



135



136



138



142

岩間遺跡 右岸用水調査区 出土遺物

図版28



152



151



153



155



156



158





161



162



163



図版30



164



165



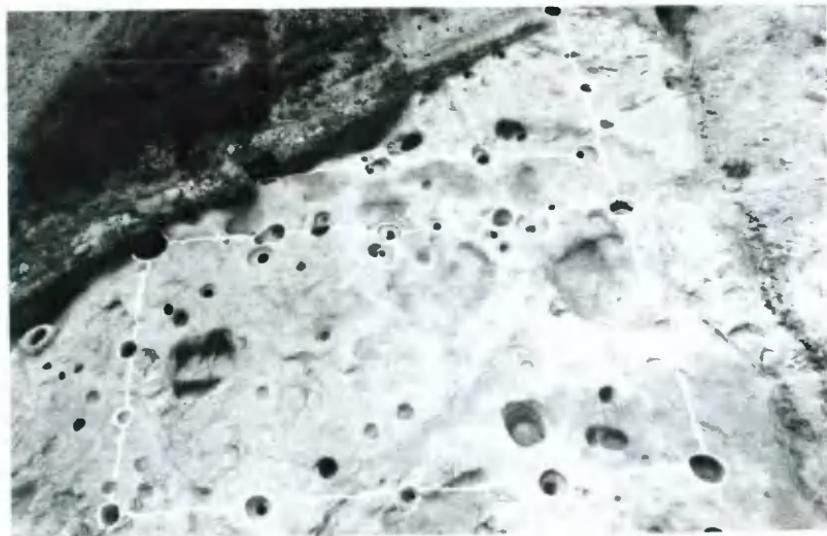
166



岩間遺跡 右岸用水調査区出土遺物



1 岩間遺跡 丘陵調査区 土塙（北西から）



2 岩間遺跡 丘陵調査区 建物（北から）

図版32



169



82



170



岩間遺跡 丘陵調査区出土遺物



189



188



190



193



194



195



198



197



204



206



207



208



209



210



211

図版34



192



191



223



191



222

岩間遺跡 丘陵調査区 出土遺物



205

## 第6章 百間川当麻遺跡

百間川当麻遺跡は、岡山市米田に所在する。この地点は旭川放水路（百間川）の通称「大曲り」と呼ばれる部分の右岸に位置している（第89図）。

昭和51年度に旭川放水路（百間川）全域の低水路部分に実施された遺跡確認調査（註1）によるところ、本遺跡の該当する地域より、土師器、須恵器以外に、平安時代から鎌倉時代に属する遺物が少し出土している。

さらに昭和52年度に実施された右岸用水計画部分の遺跡確認調査（註2）では、本遺跡の地域から遺物包含層や溝と推定される遺構が検出され、備前焼大甕や高台付碗等の中世土器が出土している。

昭和51年度と昭和52年度の遺跡確認調査結果によって、本遺跡は遺構の密度が高くて残存状態が良好な、弥生時代から中世までの集落遺跡が存在することが推察されたのである。

ここに報告している百間川当麻遺跡の発掘調査を実施した地点は、「右岸用水調査区」と「丘陵部調査区」である（第89・90図）。



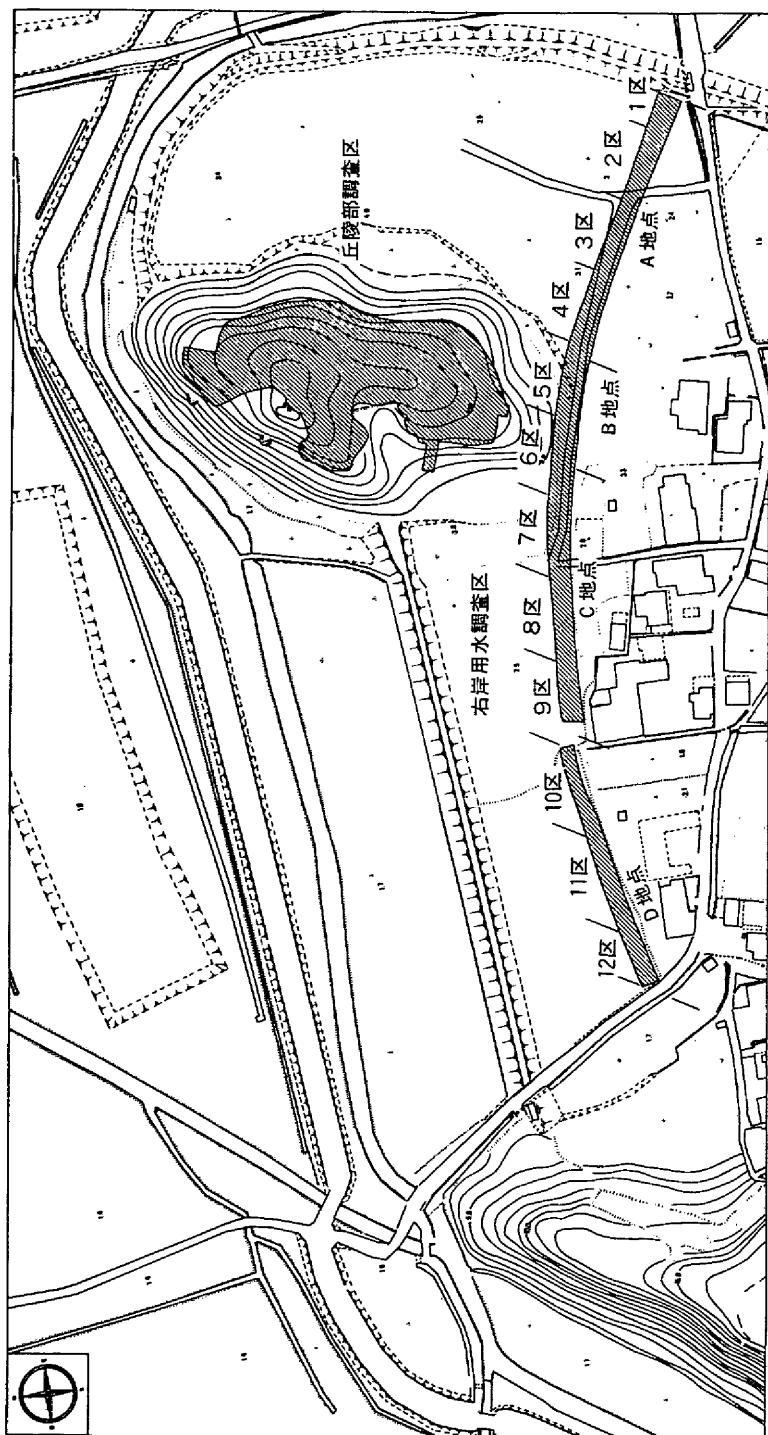
第89図 百間川当麻遺跡周辺地形図 ( $\frac{1}{7,500}$ )

## 第6章 百間川当麻遺跡

右岸用水調査区は、幅約6m・延長約240mの細長い調査範囲であるため、地図に記入されていた建設省のコンクリート杭を基準に、20mごとに1区から12区までの調査区を設定して発掘調査を行い、遺構の検出状況に応じて調査範囲全体をA地点からD地点までの4ブロックに分割して報告するものである。

丘陵部調査区は、右岸用水調査区の調査が完了した後に、丘陵頂部全体の全面調査を実施した結果を報告するものである。

丘陵部調査区の発掘調査を実施する契機になったのは、右岸用水調査区の丘陵斜面に検出した溝状遺構内部から、備前焼の大甕や擂鉢に混在して、多数の埴輪片が出土したからである。多数の埴輪片は、丘陵上から溝状遺構内に流入した可能性が強く、丘陵上に埴輪を有する大規模な古墳が残存することが推察されたからである。



第90図 百間川当麻遺跡調査区分割図 (2,000)

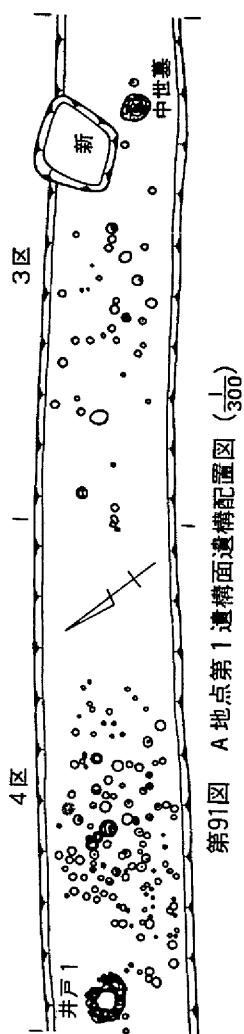
## 第1節 右岸用水調査区

右岸用水調査区は、百間川岩間遺跡（註3）の東端から百間川当麻遺跡丘陵部調査区の南を経てさらに東に延びる、幅約6m・延長約240mの緩やかな弧を描いた調査区である（第89・90図）。旭川放水路（百間川）の右岸に構築されている堰堤の外側で、米田の集落を形成している民家の北端に沿った部分に位置する。本調査区は幅が狭くて細長いから、建設省のコンクリート杭を基準に、調査区全体を20m間隔に1区から12区まで設定して発掘調査を行い、検出した遺構の分布状況に応じて、A地点からD地点まで大きく4ブロックに分割して遺跡の内容を報告するものである。

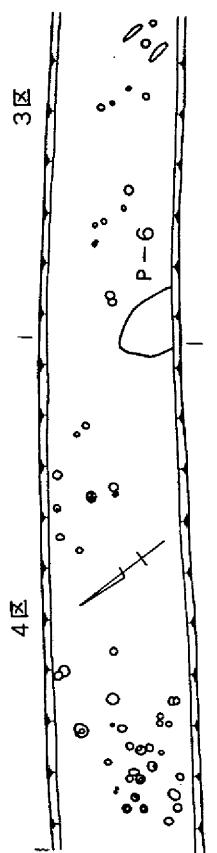
### 1. A地点（1区～5区）

A地点は、丘陵部調査区から南に張り出した低くて頂部の狭い丘陵より東側部分の範囲で、右岸用水調査区の東端部分に位置する1区から5区が含まれる（第90図）。丘陵の斜面に沿って砂礫が何層にも堆積する複雑な層序を形成している（第95図）が、基本的には4面の遺構面が存在し、丘陵部から離れた地点の最下層は、暗黄灰色を呈する粘質土が厚く堆積した基盤になっている。

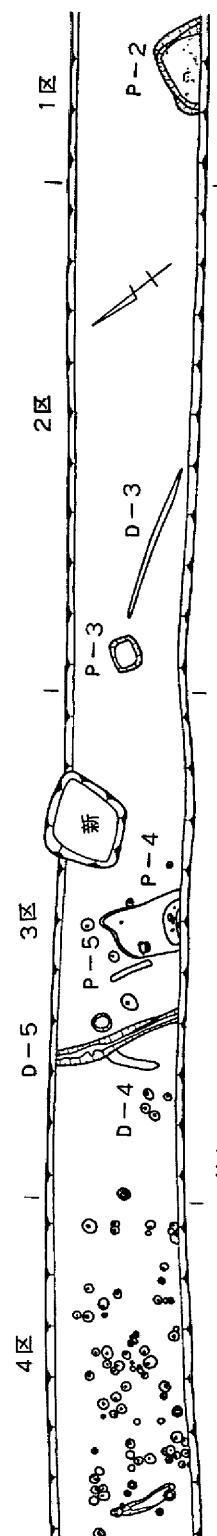
発掘調査の過程では、表土除去作業を行った後に、丘陵の傾斜に沿って斜面堆積している砂礫層を、4面の遺構面ごとに4度にわたって掘り下げを繰り返した。その結果、各遺構面とも溝状遺構や土壙が検出され、表土面からもっとも浅い第1遺構面には、中世墓や井戸も存在した。それぞれの遺構面で検出した柱穴と推定される多数の小規模なピットは、柱根が底部に残存したものも確認しているとはいえ、調査した幅が約6mの狭い範囲に限定されたため、建物としてまとめるにはためらいが感じられた。A地点の調査区でもっとも深く掘り下げなければならなかった地点は、表土面から約2m40cmを測るが、その間に存在する各遺構面の上位に厚く堆積した砂礫層内には、多数の遺物が含まれていた。最下層の暗黄灰色粘質土面に位置する第4遺構面には、奈良時代に属すると推定される遺物が主体で、わずかに弥生式土器や土師器の破片も認められた。第1遺構面から第3遺構面には、層位的に下位であることが明らかな第4遺構面で主体となっていた同種類の遺物が数多く混在し、レベルが第3遺構面から第1遺構面へと次第に上位へ移行するにしたがって、奈良時代以降の遺物が存在する確率が高くなっていた。表土層直下の第1遺構面は、奈良時代以前の遺物も多く認められたものの、中世墓に使用されていた備前焼大甕（第109図58）や、遺構面に密着して出土した土器から判断して、室町時代の生活面と推定される。第2遺構面は、P-6（第106図）より出土した遺物（第107図24～50）から推察して、鎌倉時代に属するであろう。第3遺構面には溝状遺構や土壙を検出したにもかかわらず、残存状態は極めて悪く、漠然と奈良時代から鎌倉時代にかけての時期が考えられるだけである。弥生時代から奈良時代にかけての長期間に及ぶ各時期の遺構は、基盤層を掘り窪めて同じレベル上に重複して存在するようであるが、平安時代以降に属する遺構は、洪水等によってこれまでの遺構が著しく削平されて堆積した砂礫層の上面に構築されていた。この現象は室町時代になっても引き継がれ



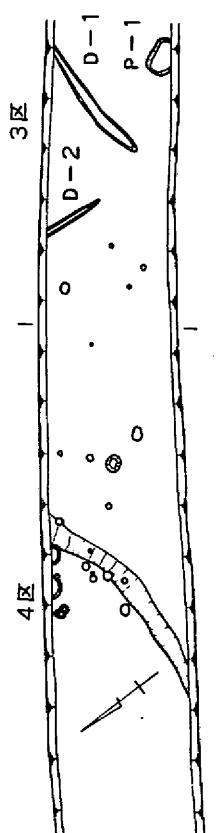
第91図 A地点第1遺構面遺構配置図 ( $\frac{1}{300}$ )



第92図 A地点第2遺構面遺構配置図 ( $\frac{1}{300}$ )



第93図 A地点第3遺構面遺構配置図 ( $\frac{1}{300}$ )



第94図 A地点第4遺構面遺構配置図 ( $\frac{1}{300}$ )

ているから、遺構に伴わない奈良時代以前の遺物は、表土層直下の室町時代の生活面と推定される第1遺構面からも数多く出土したのである。

このようにA地点の層序が複雑な様相を呈しているから、遺構に伴わない遺物は各遺構面ごとに図示するのではなく、それぞれの遺構面から出土した遺物を一括して古い順に掲載したのである（第112図～第141図）。

### 1) 第4遺構面

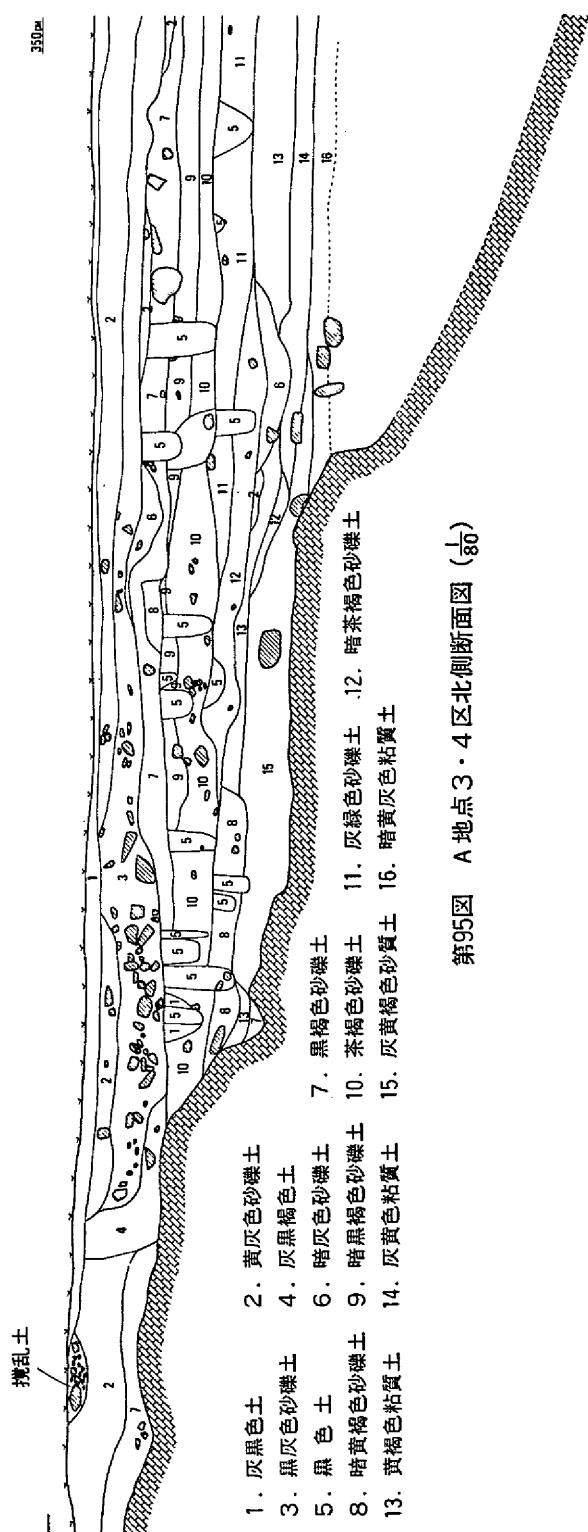
この遺構面は、暗黄灰色を呈する粘質土の基盤層に相当し、西側に位置する5区では丘陵斜面の岩盤が露出していた。検出した遺構としては、柱穴と推定される小規模なピット以外に、溝状遺構2（D-1, D-2）と土壙1（P-1）が存在した（第94図）。いずれも遺物が検出できなかったから、遺構の時期を断定することはできないが、遺構に伴わない遺物として奈良時代に属すると考えられるものが多く出土し、わずかに弥生式土器や土師器の破片も認められたから、奈良時代以前の遺構である可能性が強いのである。

#### 溝状遺構1（第96図）

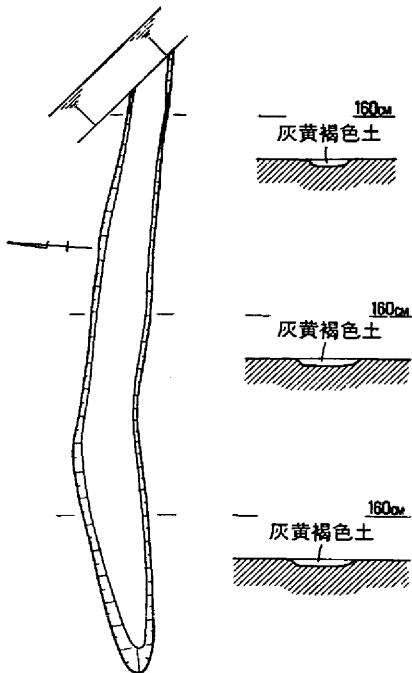
3区のはば中央部に位置する東西方向の溝状遺構である。西端部分は調査区の途中で途切れていた。検出面での最大幅は約50cm、検出面からの深さは、もっとも深い地点で約5cmを測る。遺構内には全体に灰黄褐色土が認められ、遺物は存在しなかった。

#### 溝状遺構2（第97図）

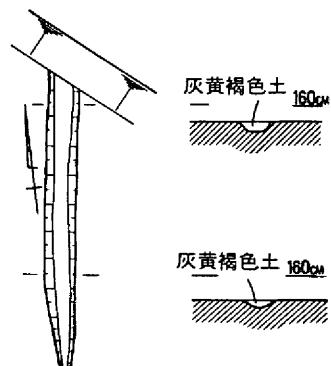
D-1とはば直交する方向の南北に走る溝状遺構である。D-1と同様に南端部分が調



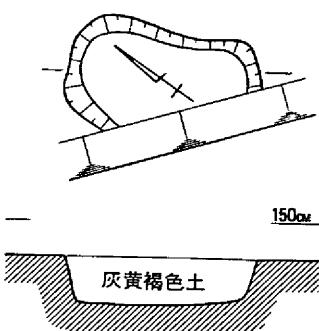
第95図 A地点3・4区北側断面図 (1/30)



第96図 D-1 ( $\frac{1}{60}$ )



第97図 D-2 ( $\frac{1}{60}$ )



第98図 P-1 ( $\frac{1}{60}$ )

査区の途中で途切れていた。検出面での最大幅は約25cm、検出面からもっとも深い所は、北側に位置する調査区の境界地点で約7cmを測る。遺構内にはD-1と同様に灰黄褐色土が認められ、遺物は出土しなかった。この溝状遺構の底部は、南から北方向へ緩やかに低くなっていた。

#### 土壤1(第98図)

3区のほぼ中央部にD-1の南側で検出した土壤である。南側の調査区境界の壁面に接して存在したため、南側の一部は調査することができなかった。平面形は楕円形に近い形態を呈するが、全容は明らかでない。検出面での計測値は、長径約1m50cm・短径約95cmであった。検出面からの深さは、もっとも深い土壤の中心部分で約35cmを測る。土壤内には灰黄褐色土が認められ、精査したにもかかわらず遺物は出土しなかった。この土壤の性格は不明である。

## 2) 第3遺構面

この遺構面は、前述した第4遺構面が砂礫によって埋没した後に形成された生活面である。調査区の東端に位置する1区と2区の地点は、砂礫が堆積しておらず、安定した粘質土によって遺構面が覆われていた。検出した遺構としては、柱穴と推定される多数の小規模なピット以外に、溝状遺構3(D-3～D-5)と土壙4(P-2～P-5)が存在した(第93図)。

### 溝状遺構3(第99図)

2区の西側にP-3と近接して検出した直線的に走る溝状遺構である。両端は途切れで延長が約6m10cmであった。検出面での最大幅は約30cmで、断面形は浅い「U」字形を呈していた。遺構内には灰黄褐色土が認められ、遺物は存在しなかった。

### 溝状遺構4(第100図)

3区で検出した溝状遺構である。この遺構は、ほぼ南北方向に走るD-5によって切られていた。D-5との接続部分は、東方向へわずかに屈曲していた。検出面で残存する長さは約2mを測り、最大幅は約52cmであった。断面形は「U」字形を呈し、内部には灰黄褐色土が認められた。出土した遺物で図化することが可能であったのは、高杯の脚部破片(第101図1)の1点のみであった。

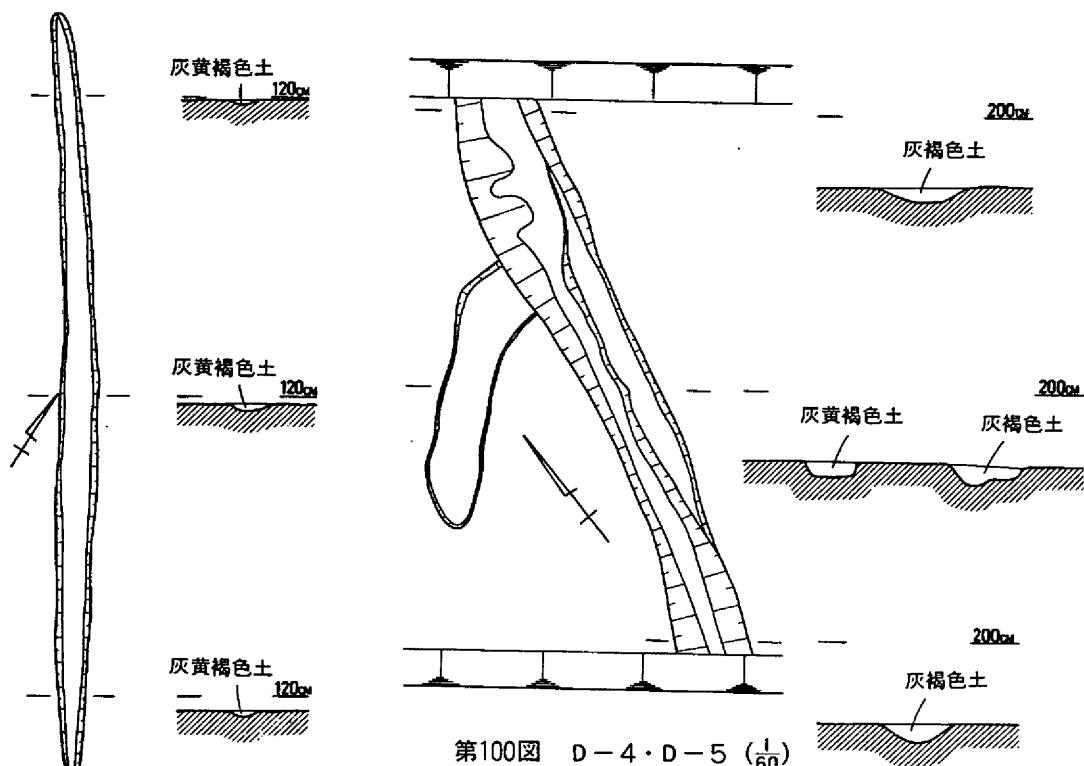
### 溝状遺構5(第100図)

3区の西へ寄った地点に、D-4を切った状態で検出した溝状遺構である。検出面での最大幅は、D-4と接する部分の約82cmであった。この遺構の底部は、部分的に2段になっていた。調査区の境界部分での断面形は浅い「U」字形を呈し、内部にはD-4と異なる灰褐色土が認められた。出土した遺物には土鍋、杯、高台付杯、皿、甕等がある(第101図2～12)が、いずれも破片で完形品は存在しなかった。

### 土壙2(第102図)

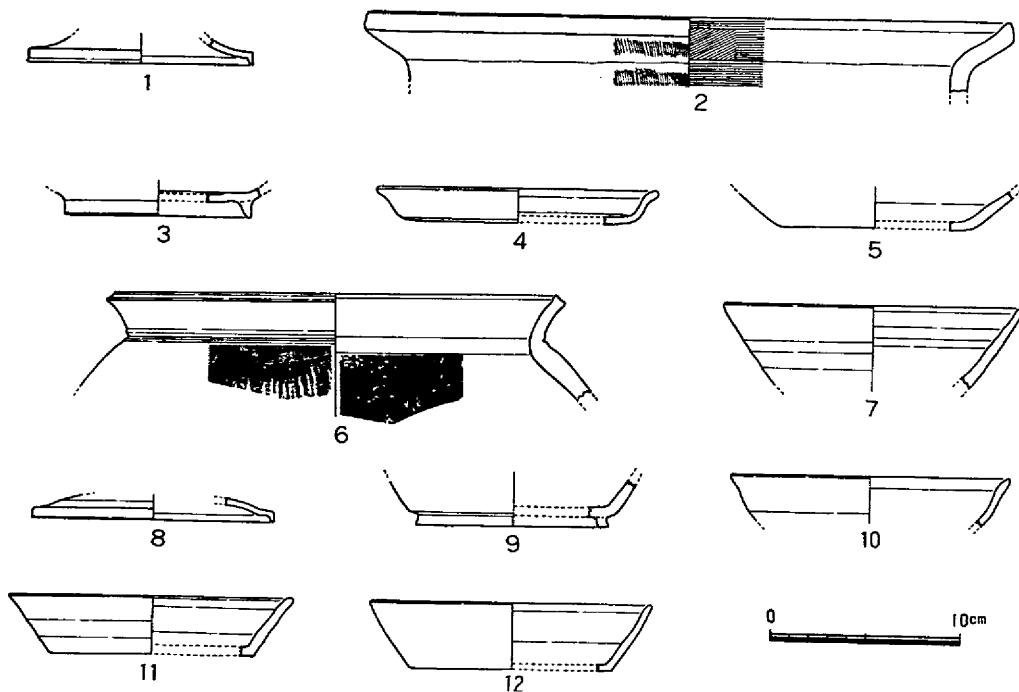
右岸用水調査区のもっとも東端に位置する1区で検出した土壙である。1区にはこの土壙以外に遺構は存在しなかった。南部分は調査範囲外になるため、調査することができなかった。表土面から遺構面までの深さは、もっとも浅い地点で約70cmを測る。調査することができた部分の形態から推察して、平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈するであろう。検出面での東西方向の径は、約3m50cm前後の規模と考える。土壙内の壁面には、部分的に段が認められた。土壙内の最下部には拳大の小礫を含む暗茶褐色粘質土が堆積し、その上位に暗黄褐色土と暗灰褐色土が認められた。土壙の底部は西方向へ緩やかに下降し、もっとも深い地点で約45cmを測るであろう。

出土した遺物は極めて少量で、いずれも小破片になっていたため図化することができなかつたが、胎土や色調から推察して、鎌倉時代に属する高台付椀の破片が主体であると考えられた。

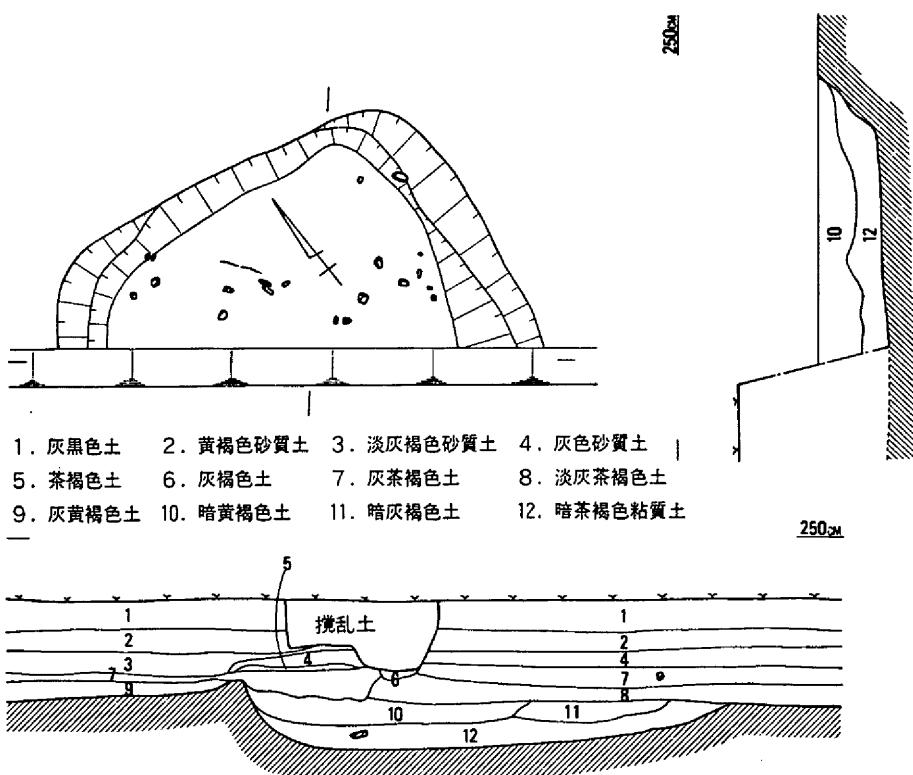


第99図 D-3 ( $\frac{1}{60}$ )

第100図 D-4・D-5 ( $\frac{1}{60}$ )



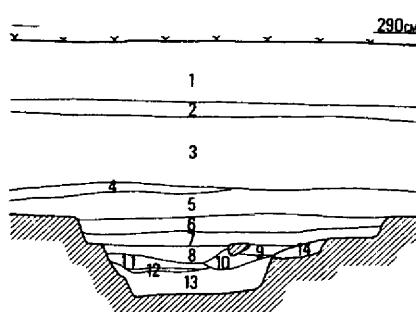
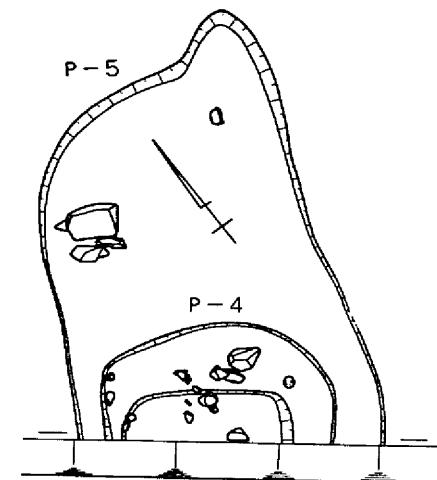
第101図 D-4・D-5 出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )

第102図 P-2 ( $\frac{1}{60}$ )**土壤3（第103図）**

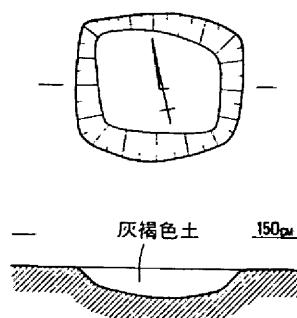
2区の西端にP-3と近接した地点で検出した土壤である。平面形は片方の径がわずかに長い隅丸長方形を呈していた。検出面での東西方向の径は約1m32cm、南北方向は約1m26cmであった。この土壤は規模の大きな建物の柱穴である可能性が強かったが、精査したにもかかわらず柱の痕跡が存在しないのみならず、検出面からの深さが約22cmと著しく浅かったのである。内部には灰褐色土が認められ、図化することが不可能な小破片の土器片が出土した。この土壤から出土した土器片は、奈良時代から鎌倉時代に至る長期間に属する種々様々のものが混在していた。

**土壤4（第104図）**

3区のはば中央部で検出した土壤である。南部分は調査範囲外になるため、調査することができなかった。この土壤は不整形な形態を呈する土壤（P-5）によって、後に削平されていたから、本来の全容を把握することはできないが、調査範囲の境界地点での幅は約1m80cmを測る。内部は2段に掘り進められ、灰緑色粘質土の上位に暗黄灰色土が堆積していた。土壤内から出土した遺物は、土鍋や杯の破片以外に小形壺の完形品（第105図21）がある。この土壤は、奈良時代から平安時代の長期

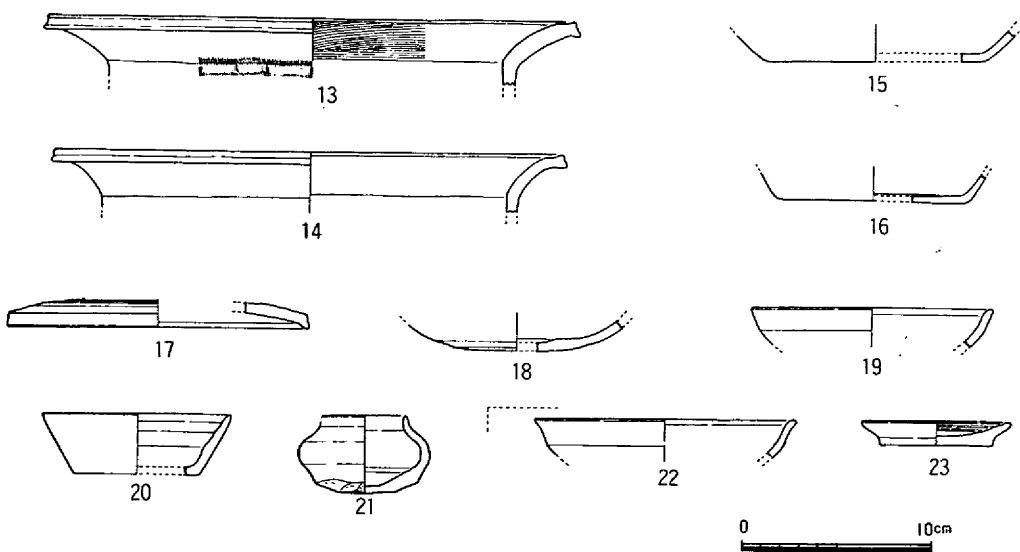


第104図 P-4・P-5 ( $\frac{1}{60}$ )



第103図 P-3 ( $\frac{1}{60}$ )

- |            |             |
|------------|-------------|
| 1. 灰黑色土    | 8. 暗灰色粘質土   |
| 2. 黄褐色土    | 9. 灰色土      |
| 3. 褐色土     | 10. 暗黄褐色粘質土 |
| 4. 淡褐色土    | 11. 暗灰色土    |
| 5. 暗褐色土    | 12. 炭化物     |
| 6. 暗褐色粘質土  | 13. 灰綠色粘質土  |
| 7. 暗灰褐色粘質土 | 14. 暗黃灰色土   |



第105図 P-4・P-5出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )

間にわたって使用されていた可能性が考えられるが、内部が2段になっていることや上面が新しい時期の土壌に搅乱されていることから、奈良時代の土壌と平安時代の土壌が重なっていたのかもしれない。

### 土壤5（第104図）

3区のはば中央部に位置するP-4の上面で検出した土壌である。この土壌は第3遺構面よりやや高いレベルの位置から検出されたため、本来は上位の第2遺構面に構築されていたのであろう。南部分はP-4と同様に調査範囲外になるため、調査することができなかった。平面形は不整形な形態を呈し、もっとも狭い地点の幅が約2m10cmであった。底部は緩やかに西方向へ下降し、深いところで検出面から約40cmを測る。内部には人頭大から拳大の石が数多く存在し、P-4と重なる地点の上面に位置する底部には、炭化物も認められた。土壌内の上位は、暗褐色粘質土と暗灰褐色粘質土が水平堆積していたが、底部に近くになると礫を含む暗灰色粘質土・灰色土・暗黄褐色粘質土・暗灰色土が複雑に堆積していた。この土壌から出土した遺物には、鎌倉時代に属すると推定される高台付椀と小皿の破片（第105図22・23）が認められた。

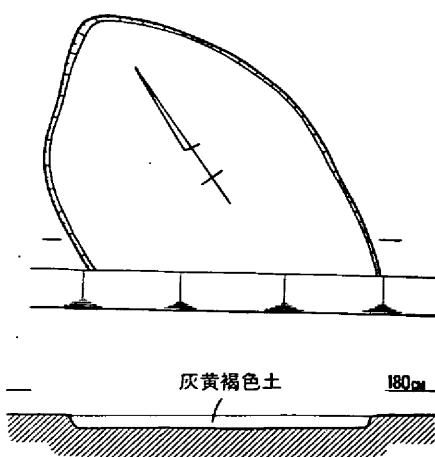
#### 3) 第2遺構面

この遺構面は、前述した第3遺構面が砂礫によって埋没した後に形成された鎌倉時代の生活面と考える。検出した遺構は、柱穴と推定される多数の小規模なピット以外に、土器溜りと推定される浅い土壌（P-6）が存在しただけである（第92図）。

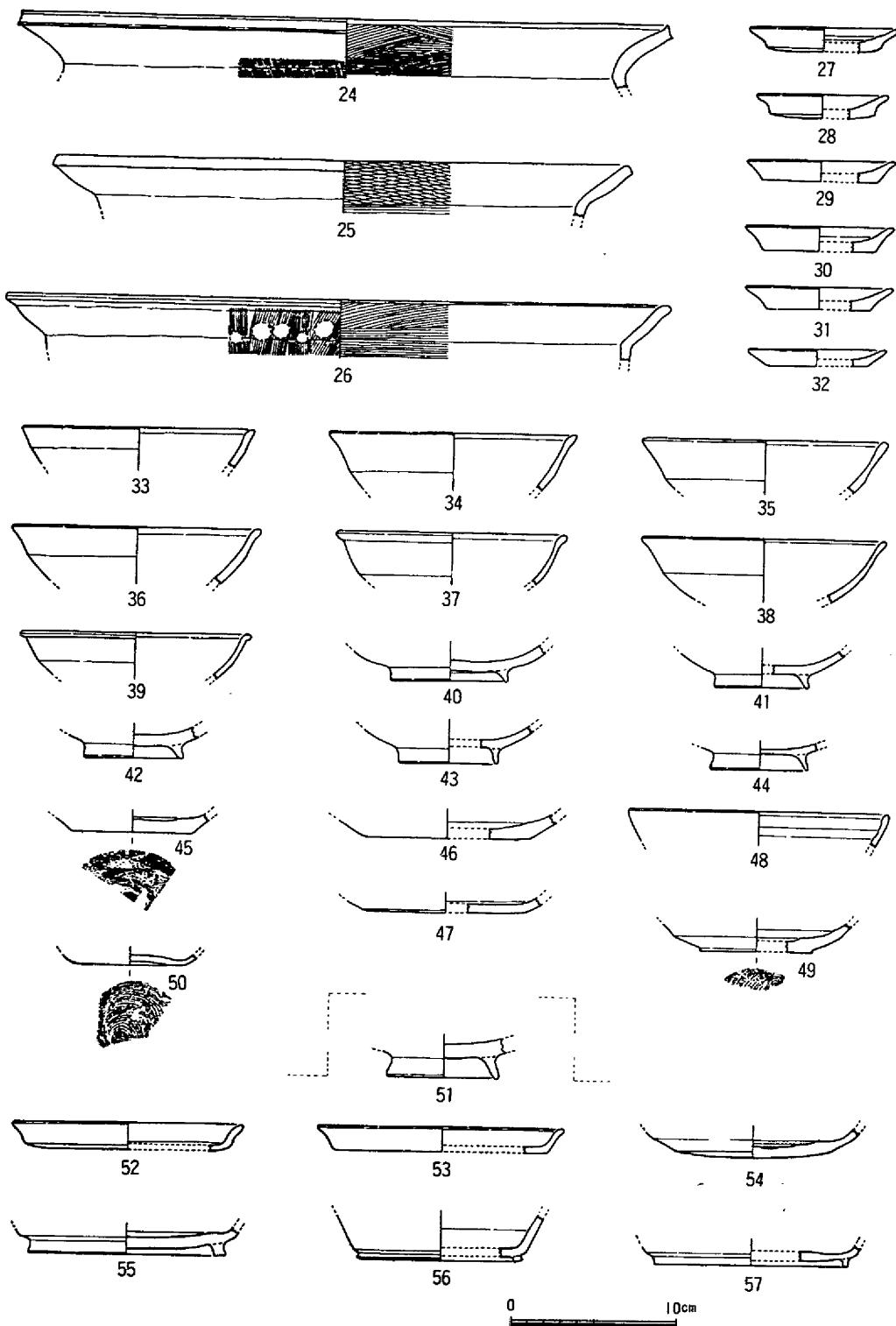
### 土壤6（第106図）

3区と4区の調査区境で検出した不整形な土壌である。この土壌の周辺は、柱穴と推定される小規模なピットが比較的少ない地点であった。南部分は調査範囲外になるため、調査することができなか

た。平面形は楕円形に近い歪んだ形態を呈し、検出面での東西方向の最大径は、約2m10cmになるであろう。検出面から底部までの深さは、もっとも深い地点で約10cmと著しく浅い。底部は全体にはぼ水平な平坦面を呈し、灰黄褐色土が堆積していた。この土壌の内部からは、土鍋、小皿、高台付椀、杯等の破片（第107図24～50）が多量に出土した。丹塗りの皿や高台付杯等の破片（第107図51～57）は、この土壌の検出作業を行っている過程で出土したもので、周囲から流れ込んだ状況を呈していた。この土壌は土器溜りと推定され、鎌倉時代に属するであろう。



第106図 P-6 ( $\frac{1}{60}$ )



第107図 P-6 出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )

## 4) 第1遺構面

灰黒色を呈する表土の下に堆積した、黄灰色砂礫土と黒灰色砂礫土を除去して検出した遺構面である（第95図）。遺構には柱穴と推定される多数の小規模なピット以外に、中世墓と井戸が存在した（第91図）。この第1遺構面は、中世墓から出土した備前焼大甕（第109図58）や、41枚にも及ぶ多数の古銭（第110図59～98）から推察して、室町時代の生活面と考えられた。なおこの遺構面は、以前から存在した古い時期の遺構が洪水等の原因で著しく削平された砂礫に厚く覆われていたため、遺構に伴わない弥生時代から鎌倉時代の土器片が多量に認められた。

(福田)

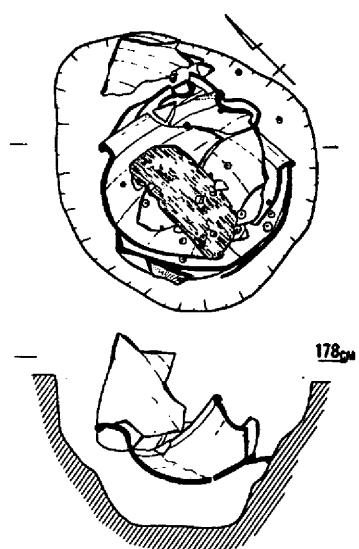
## 中世墓（第108図）

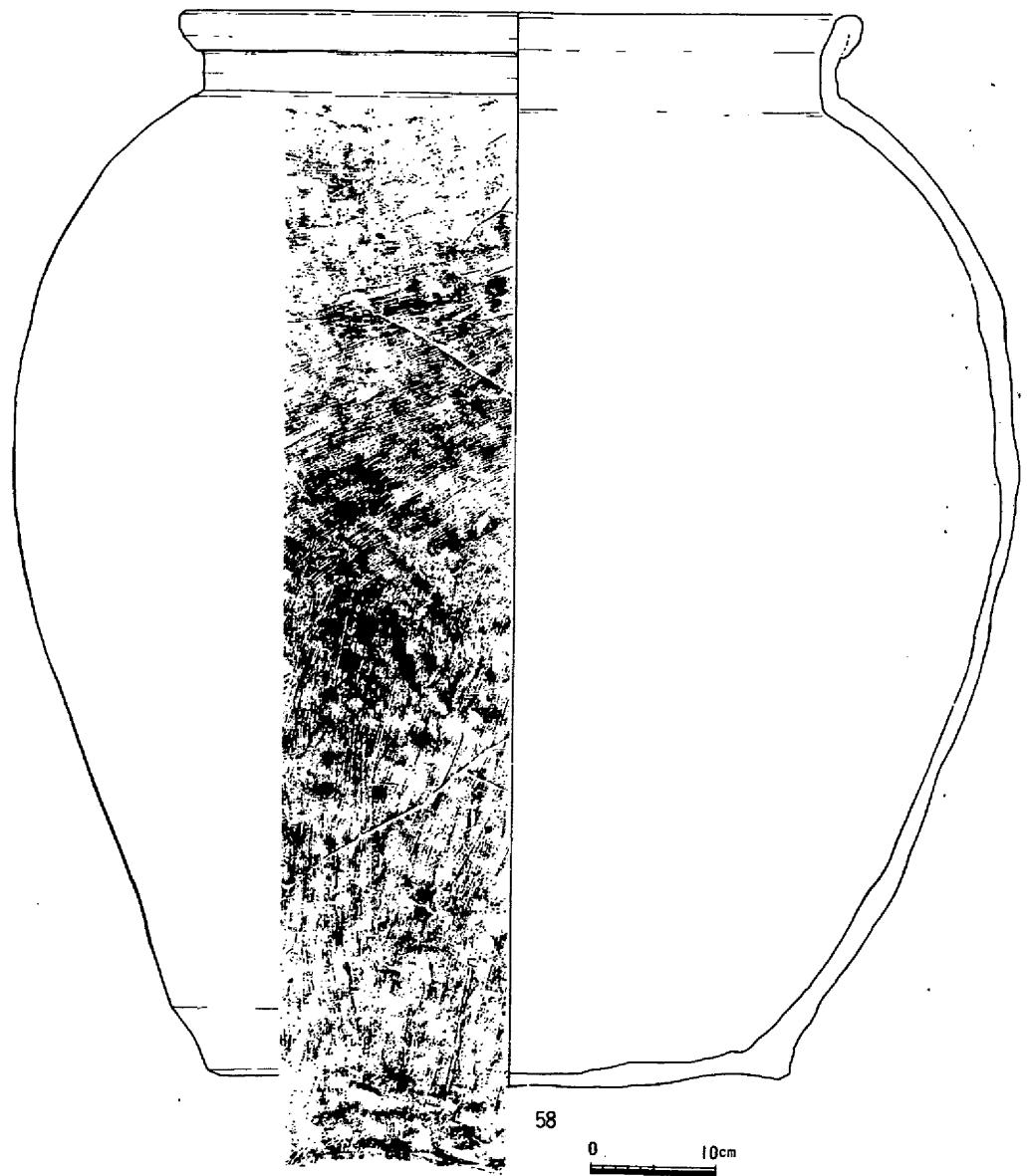
中世墓は、3区の東端で検出した遺構である。この埋葬遺構は、近世の造成土層を除去した後に、第1遺構面で検出された。遺構の平面形は長径1m20cm、短径1m05cmの楕円形を呈し、掘り形は2段掘りになっていた。検出面からの深さは約66cmを測り、内部に意識的に破損した備前焼大甕（第109図）が埋設されていた。この備前焼大甕は、胴部下半に一撃を加えて大きな破片にし、底部を掘り形の最下部に置いた後に、口縁部から胴部までの比較的大きな破片を上位に重ね、さらに縦約50cm、横約23cm、厚さ約0.5cmの杉板をのせていた。遺骸の頭部位置と思われる北端には、胴部の破片をほぼ垂直に立てており、頭部を固定させる配慮がなされていた。

この中世墓から出土した備前焼大甕以外の遺物としては、土師器や白磁の小破片と、41枚にも及ぶ古銭（第110図）が存在した。出土量が多かった古銭は、重ねられた備前焼大甕の破片を除去するごとに4枚ないし5枚が認められ、掘り形の底部周辺からも出土した。これらの古銭は、初鑄造年が

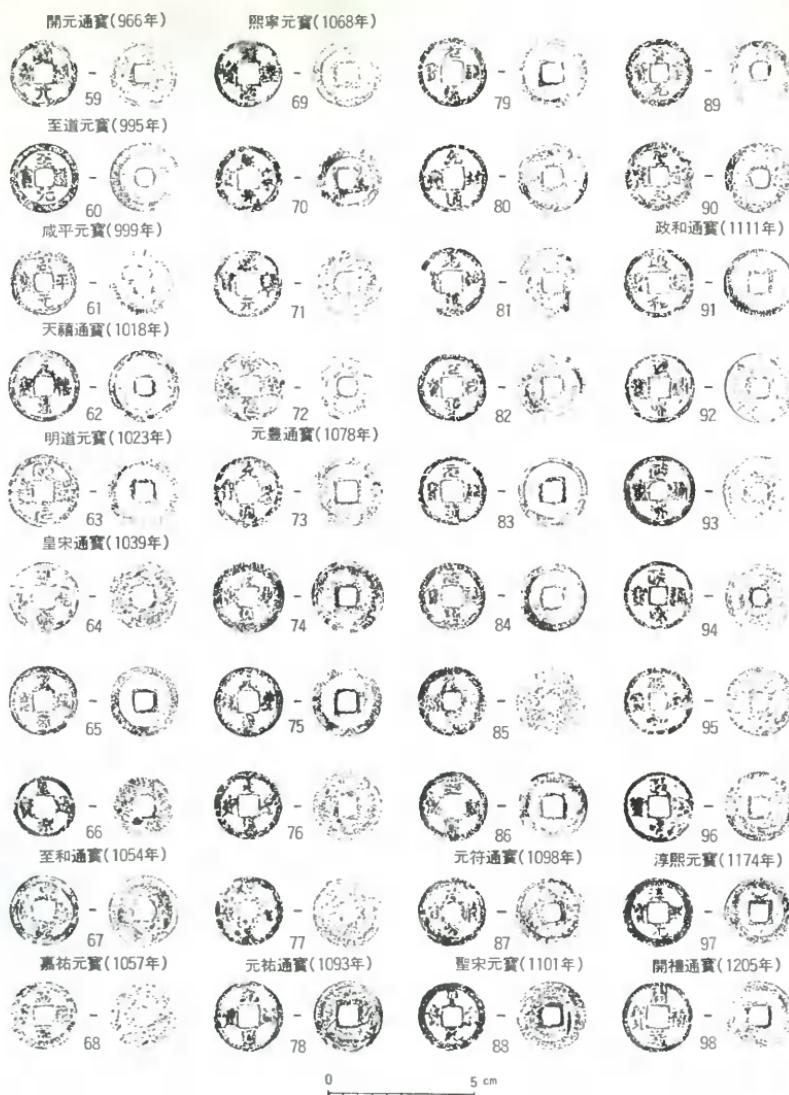
966年の開元通寶から1205年の開慶通寶まで16種類が認められ、初鑄造年が1093年の元祐通寶が9枚でもっとも枚数が多かったのである（第110図）。古銭の出土状況は、単なる副葬とは考えられず、むしろ埋葬儀式が行われたと考えるのが妥当であると思われる。また備前焼大甕は、口縁端部のわずか1片の小破片が不足するのみで、ほぼ完形に復原されたことから考えて、この埋葬地点で備前焼大甕を意識的に破損したと推察されたが、いかなる埋葬観念でこのような儀式を行ったのかは不明である。備前焼大甕は、口縁部の玉縁が垂れ下がるものであり、時期は室町時代前半に相当するものであろう。

(松本)

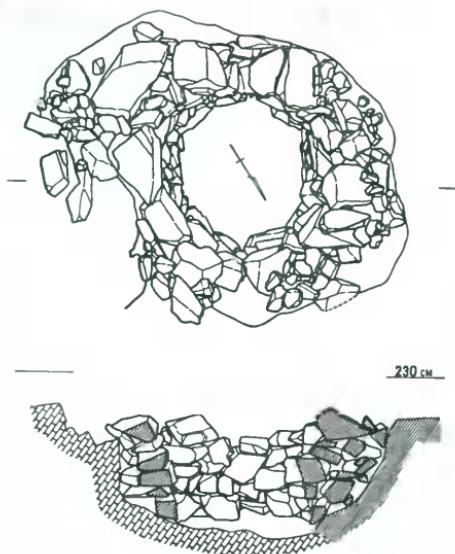
第108図 中世墓 ( $\frac{1}{30}$ )



第109図 中世墓出土遺物（1）(1/6)



第110図 中世墓出土遺物（2）(1/2)



第111図 井戸1 (1/30)

井戸1とした遺構は、井戸本来の機能としての湧水の蓄積を全く果しておらず、むしろ、湧水以外の水の確保、即ち、雨水や谷水等の保水に重点を置いた性格を有するものと考える。

なお、この遺構は、遺構検出時に石組み内部が大小の角礫で充満されており、意図的な廃絶を具現していた。

出土遺物には、中世日常雑器の小皿・鍋・亀山焼の甕等があげられる。しかし、いずれも小破片のため図化出来なく割愛した。

時期的には、室町時代後半から末頃のものと考える。

(島崎)

#### A地点の遺構に伴わない遺物（第112図～第141図）

A地点で検出した遺構面は4面であったから、遺構に伴わない遺物は非常に多量であった。出土遺物のほとんどが土器片であるが、石錘（1066）、土錘（1067～1080）、石臼（1191）、古銭（1193、1194）も認められた。

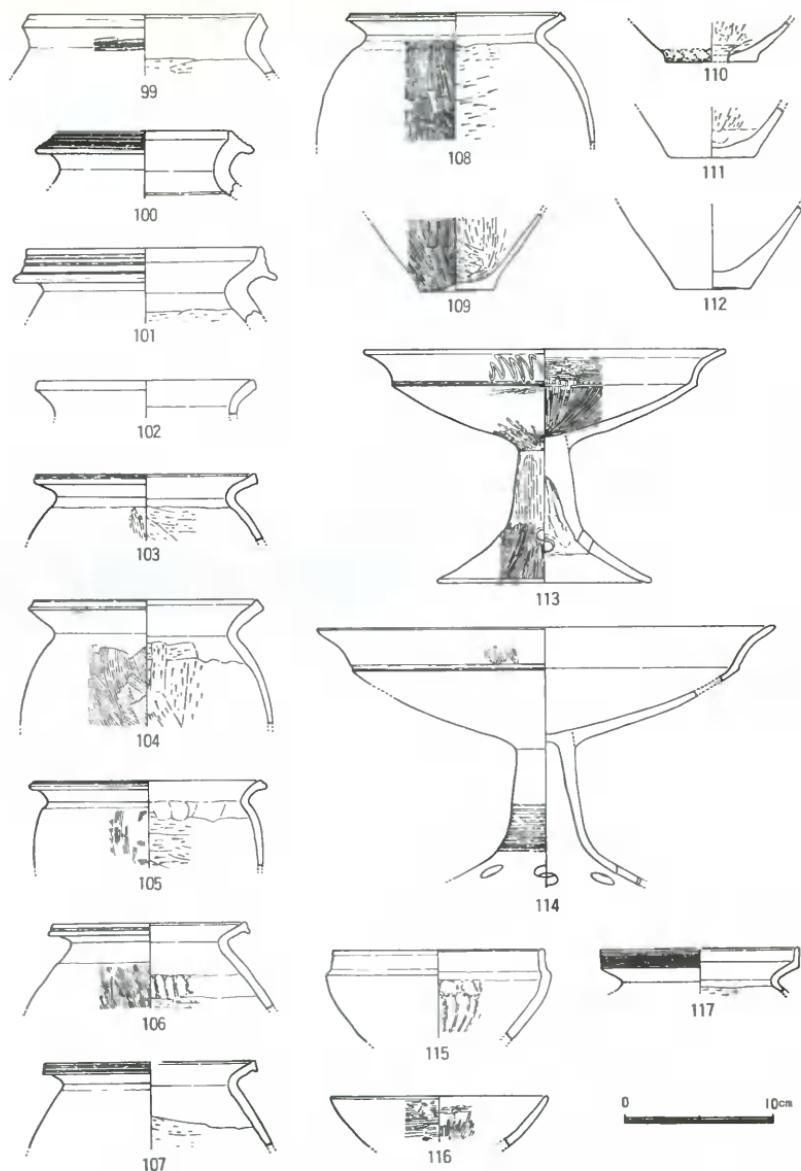
弥生時代後期に属すると推定される土器片（99～115）は、B地点の調査区に近接した丘陵斜面から出土したものであるが、土器片が出土した地点の周辺を精査したが、遺構は存在しなかった。

A地点の調査区では、古墳時代に属すると推定される遺構は存在しなかったのであるが、土師器片

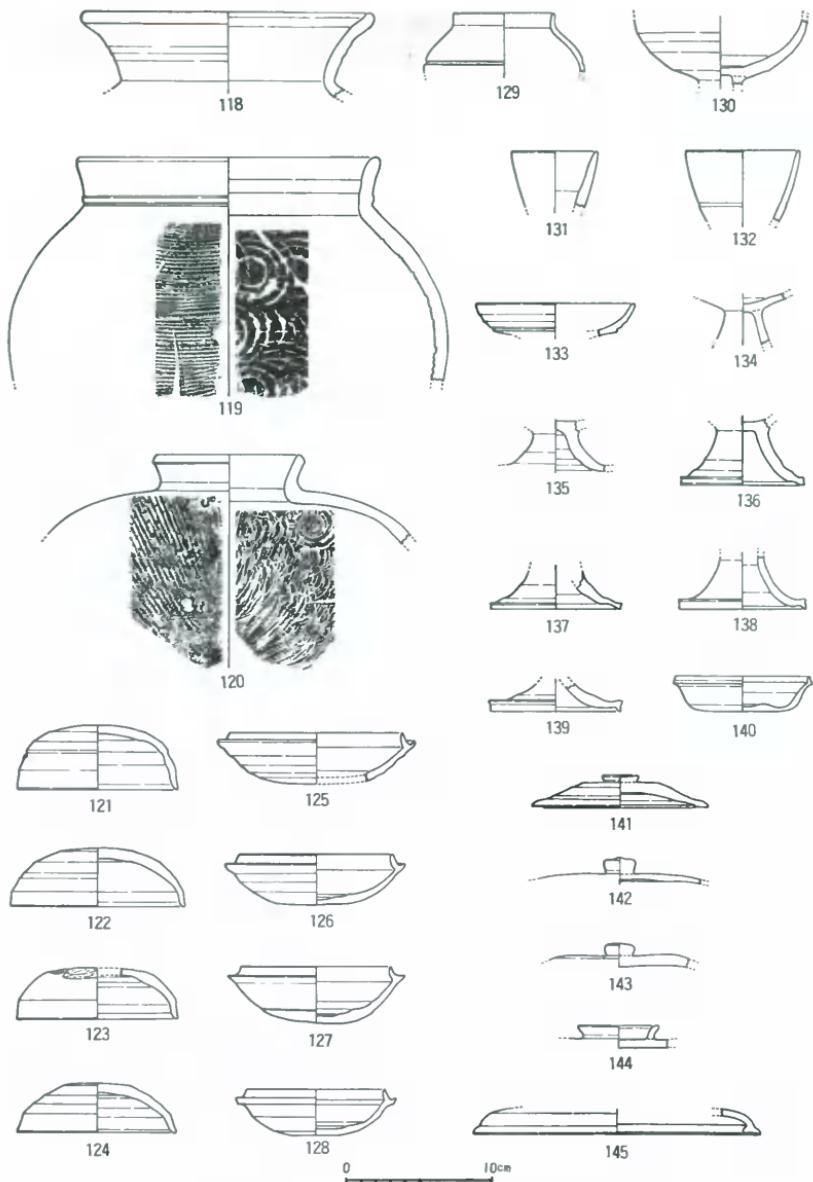
#### 井戸1（第111図）

丘陵南東部の麓に丘陵の岩盤の一部と沖積層を掘削して營まれた石組みの井戸である。

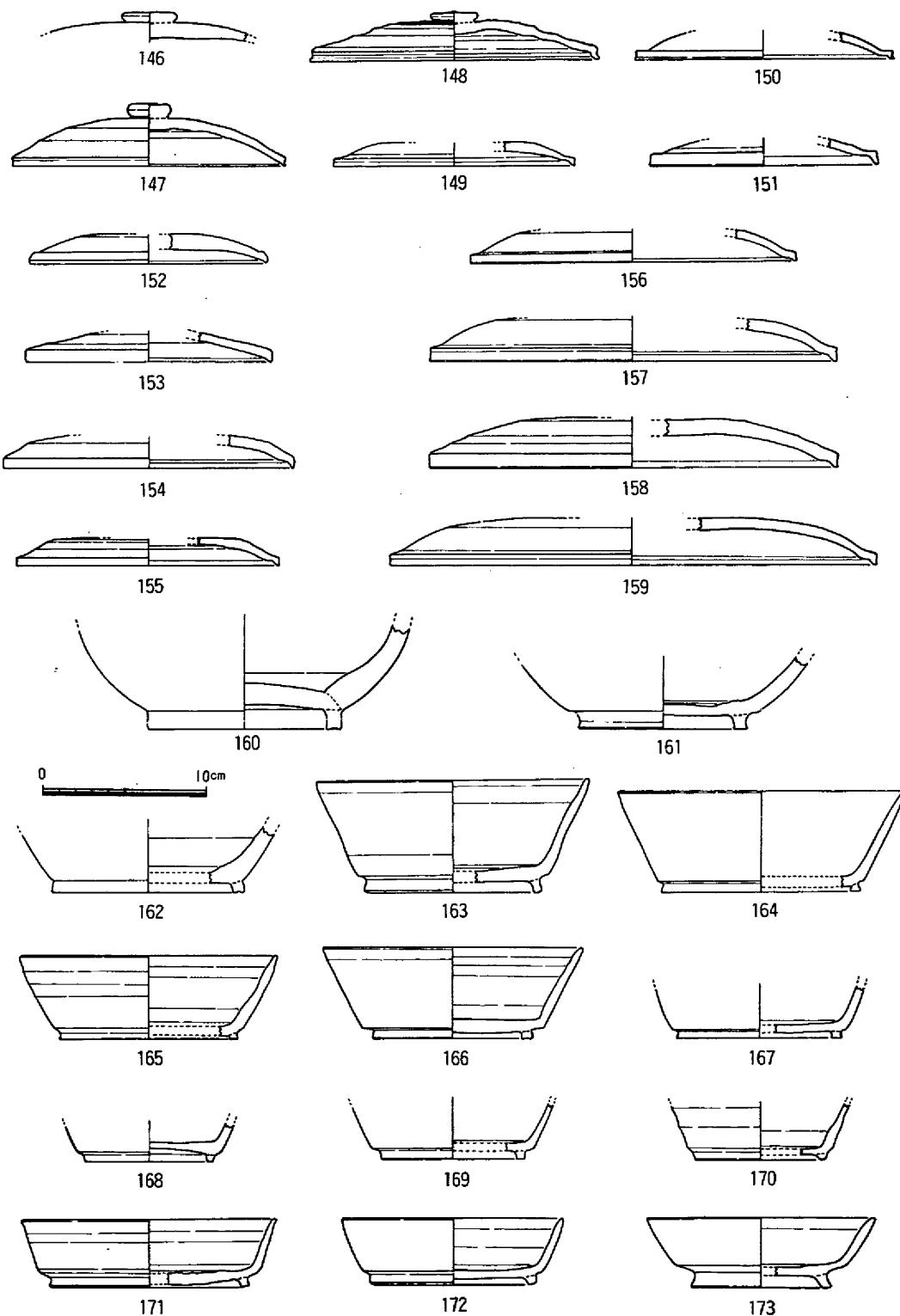
掘り方は、遺構検出上端面で、 $1\text{m}50\text{cm} \times 1\text{m}50\text{cm}$ を測り、円形を呈する。深さは、掘り形上端面から約50cmと浅いものである。その土壤に丘陵の岩盤掘削時に出た角礫を周囲に約5段位に積み上げて石組みの井戸を形成していた。石組み内部の規模は、上端径約80cm×90cm・深さ50cmと、後述する2基の石組みの井戸に比べて小規模なものである。また、井戸掘り上げ後の井戸底からは湧水が現状では全くみられず、わずかに岩盤から水が滲み出す程度に認められたにすぎない。したがって、この



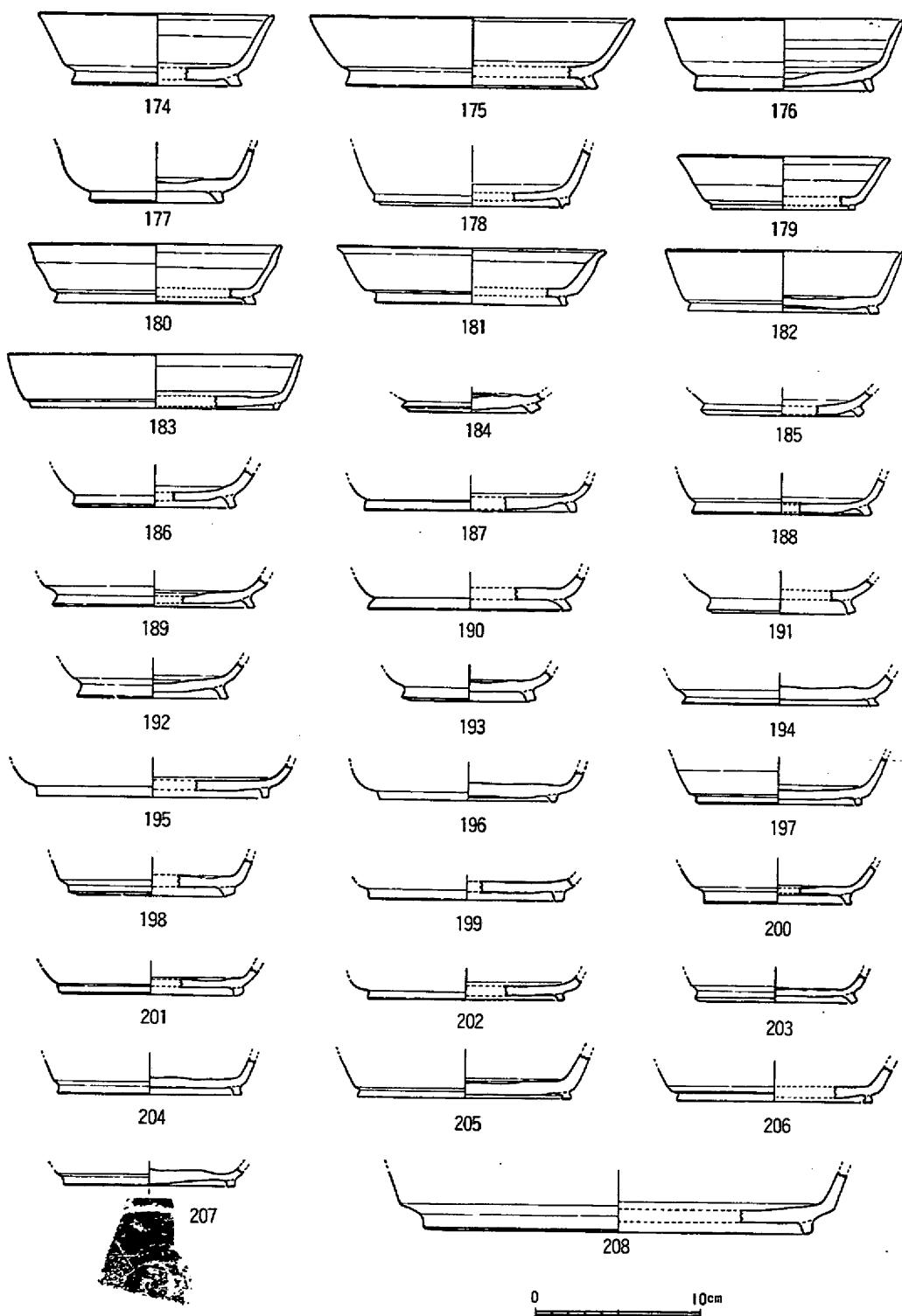
第112図 A地点の遺構に伴わない遺物（1）(1/4)



第113図 A地点の遺構に伴わない遺物(2) ( $\frac{1}{4}$ )

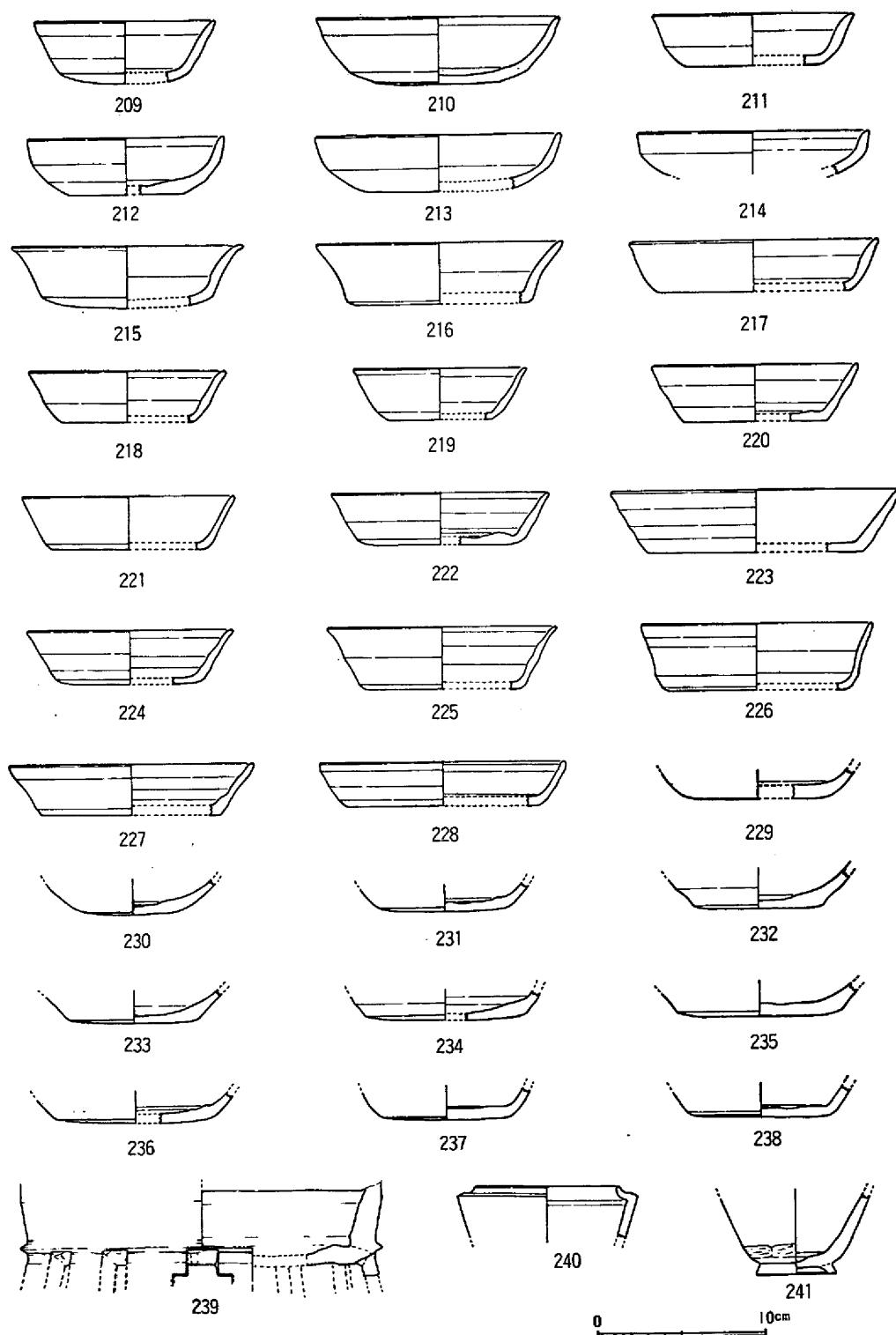


第114図 A 地点の遺構に伴わない遺物 (3) (1/4)

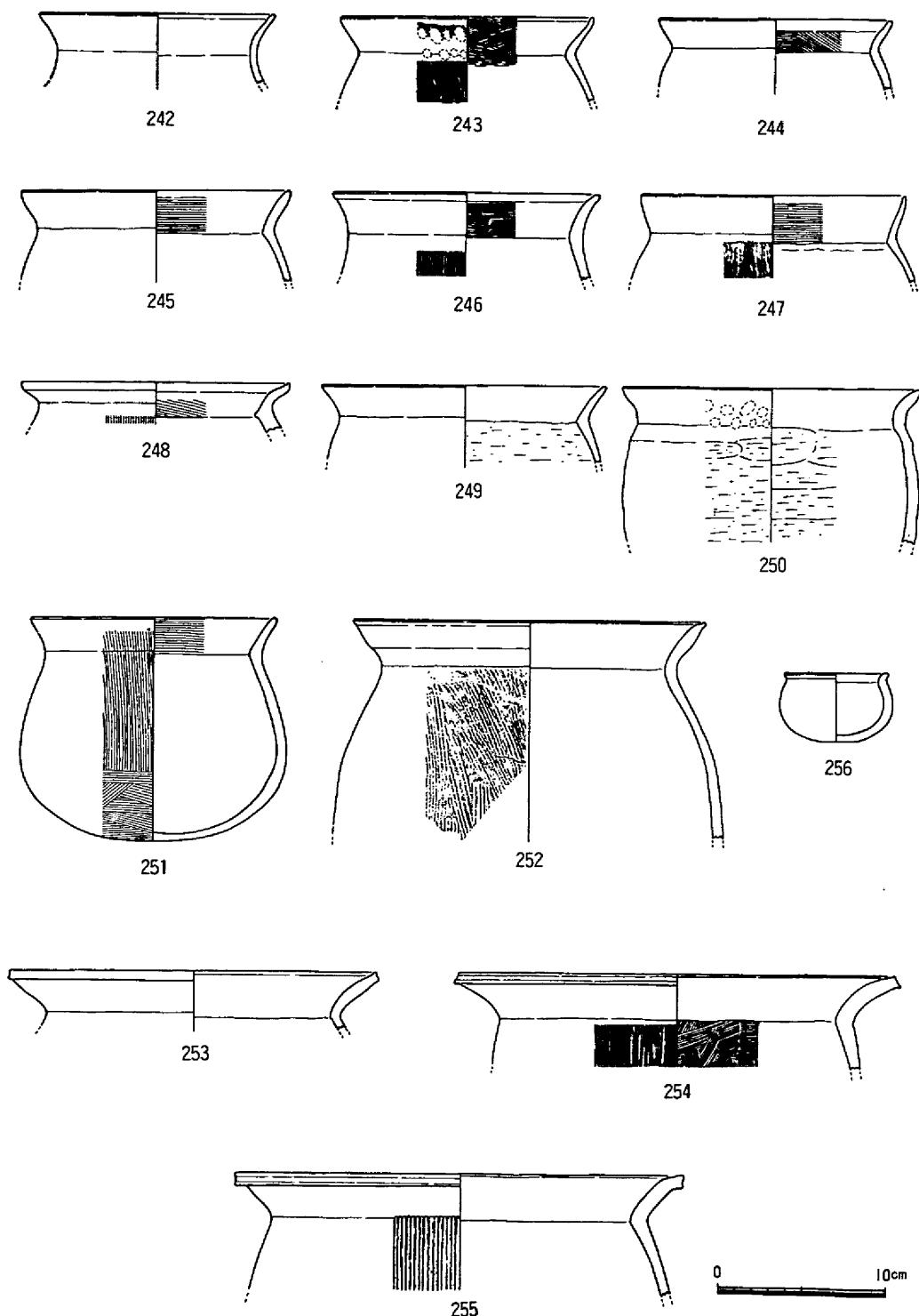


第115図 A地点の遺構に伴わない遺物（4）(1/4)

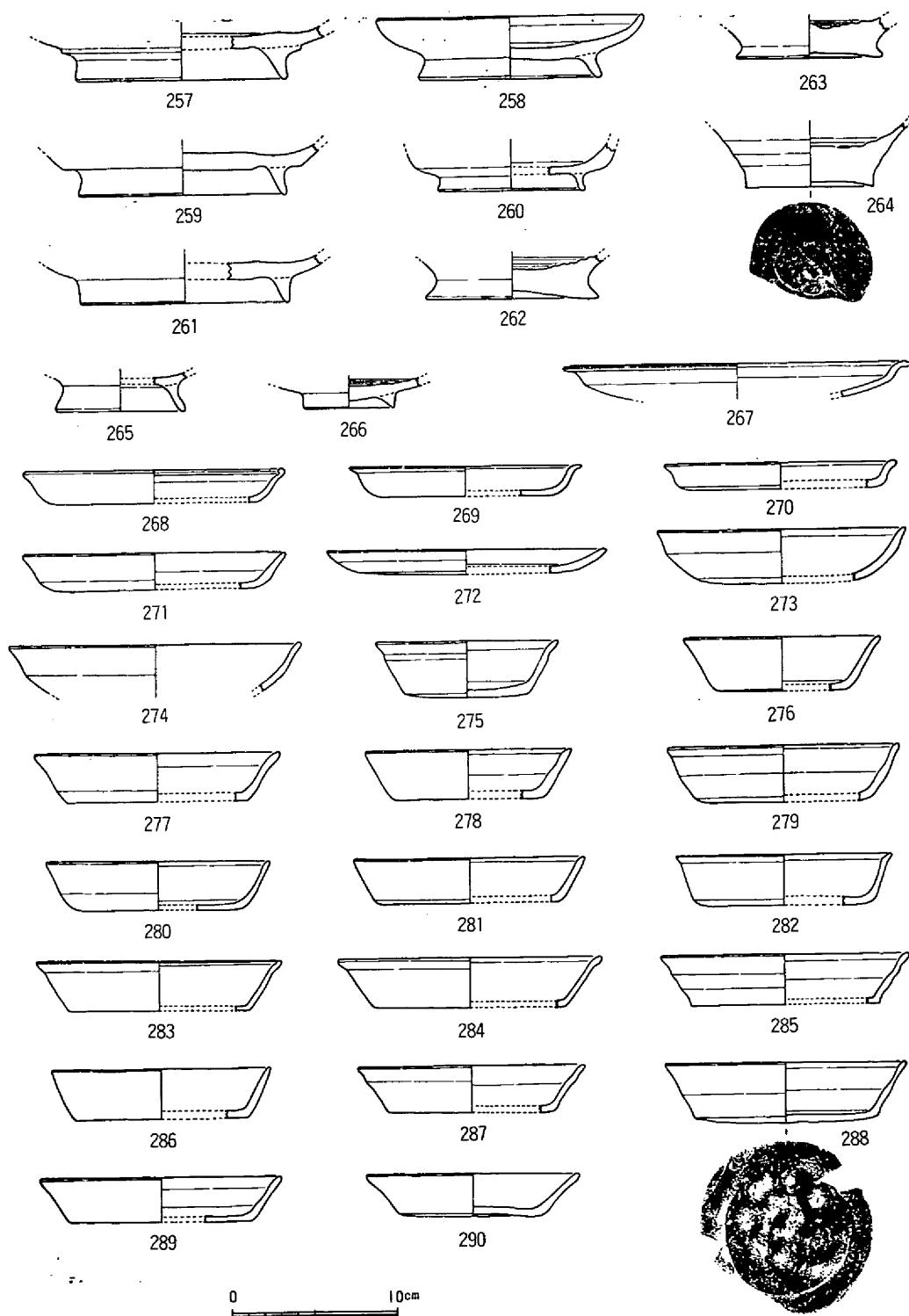
第1節 右岸用水調査区



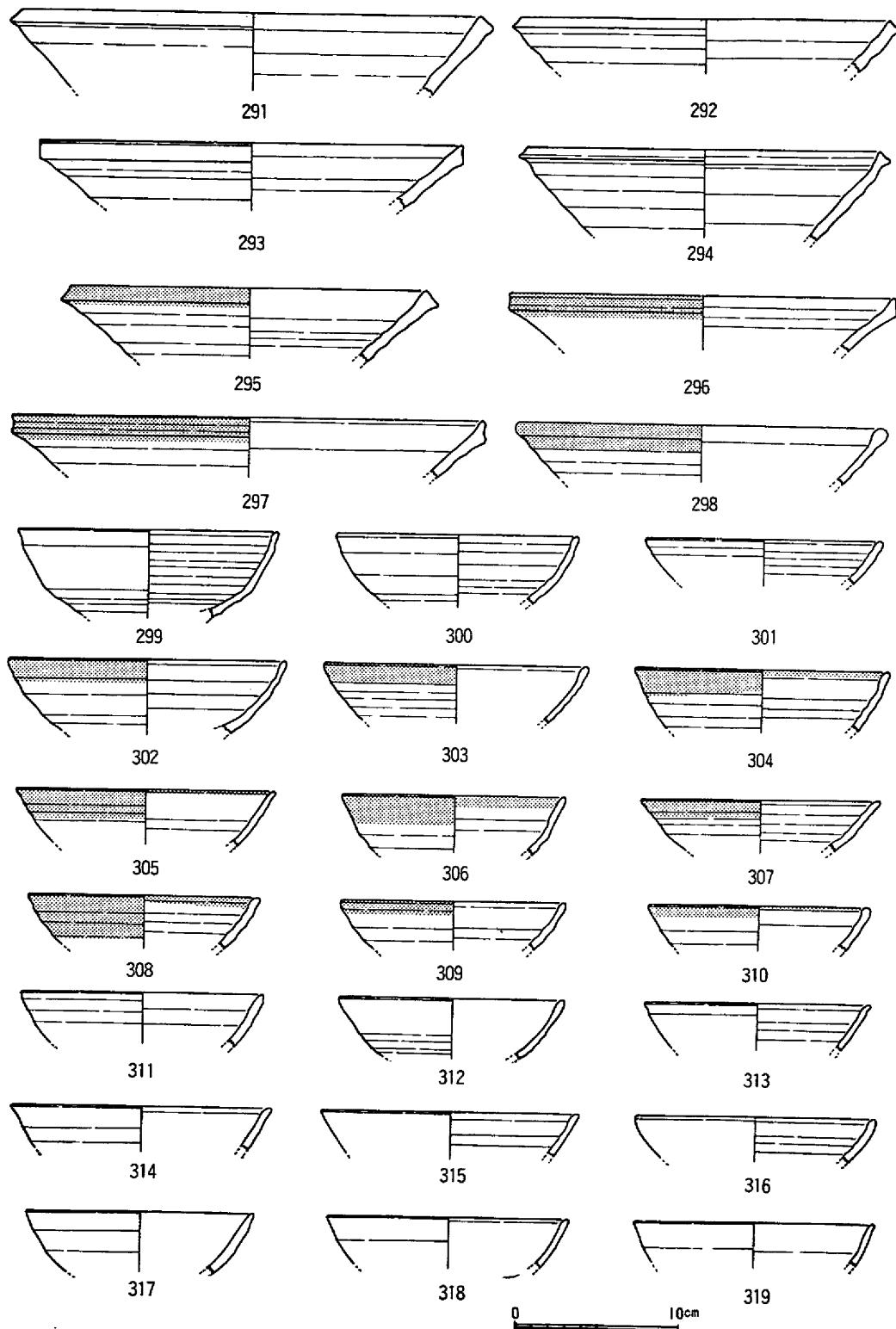
第116図 A地点の遺構に伴わない遺物 (5) ( $\frac{1}{4}$ )



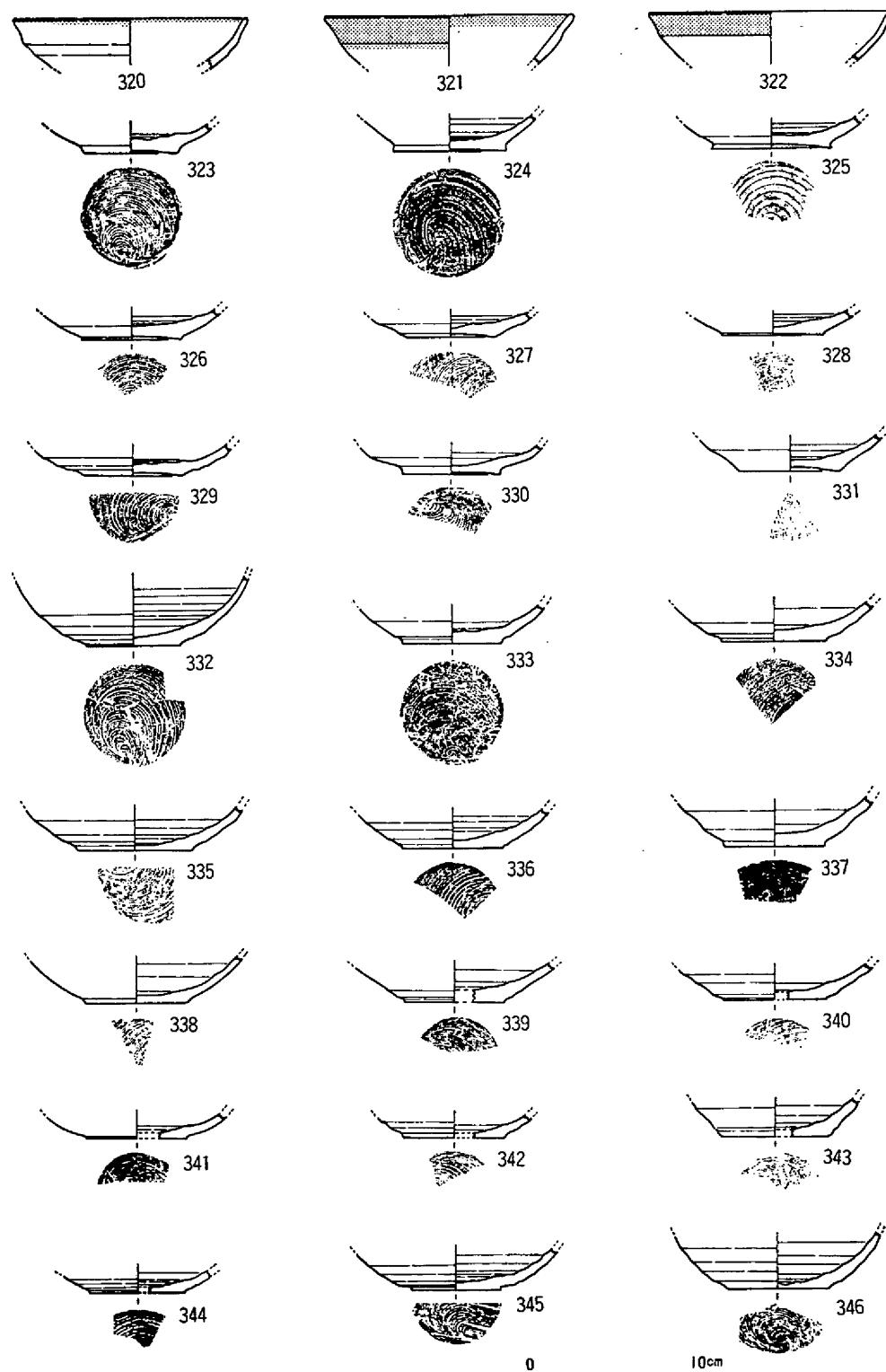
第117図 A地点の遺構に伴わない遺物(6) (1/4)



第118図 A地点の遺構に伴わない遺物 (7) ( $\frac{1}{4}$ )

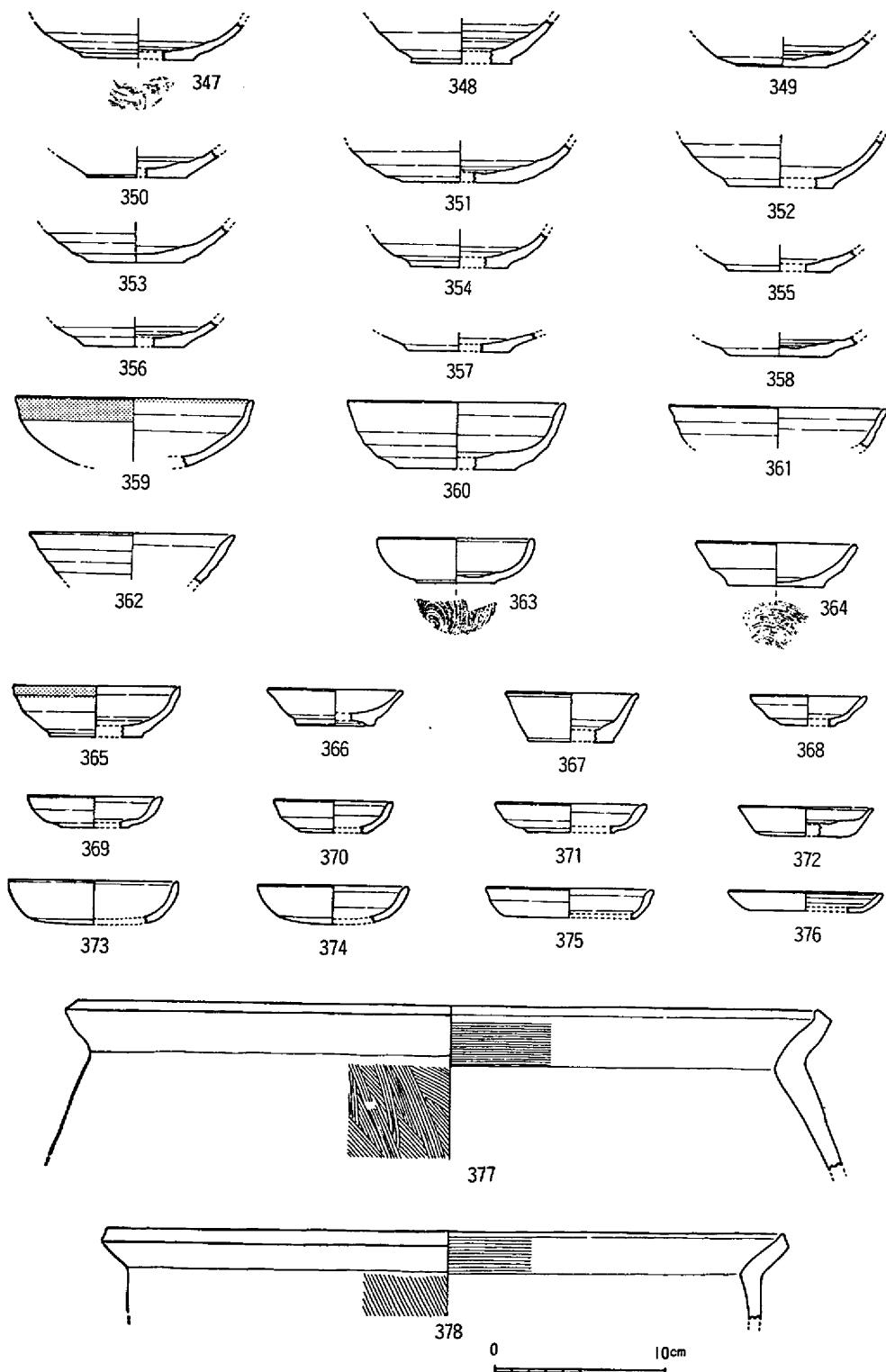


第119図 A 地点の遺構に伴わない遺物 (8) ( $\frac{1}{4}$ )

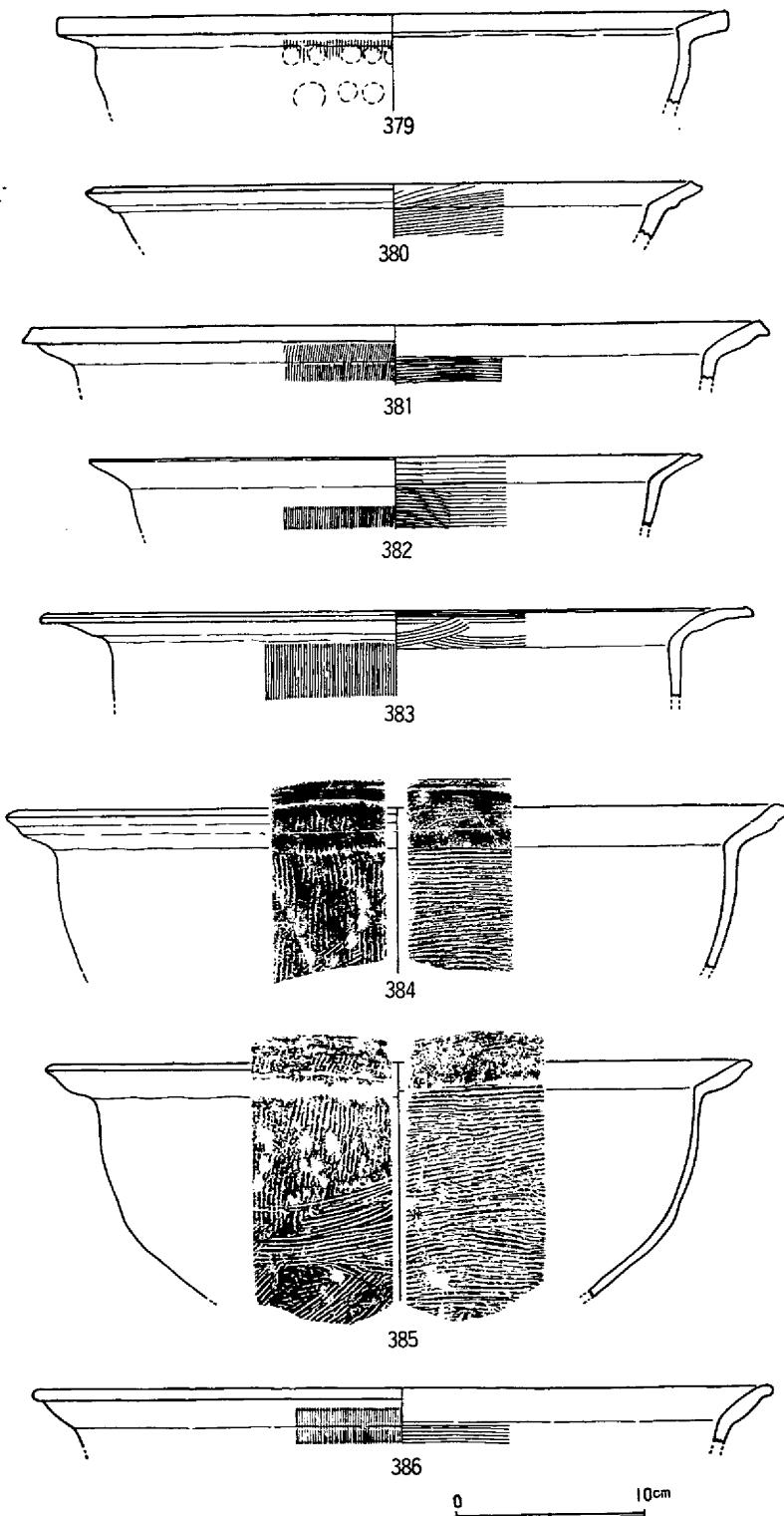


第120図 A地点の遺構に伴わない遺物 (9) ( $\frac{1}{4}$ )

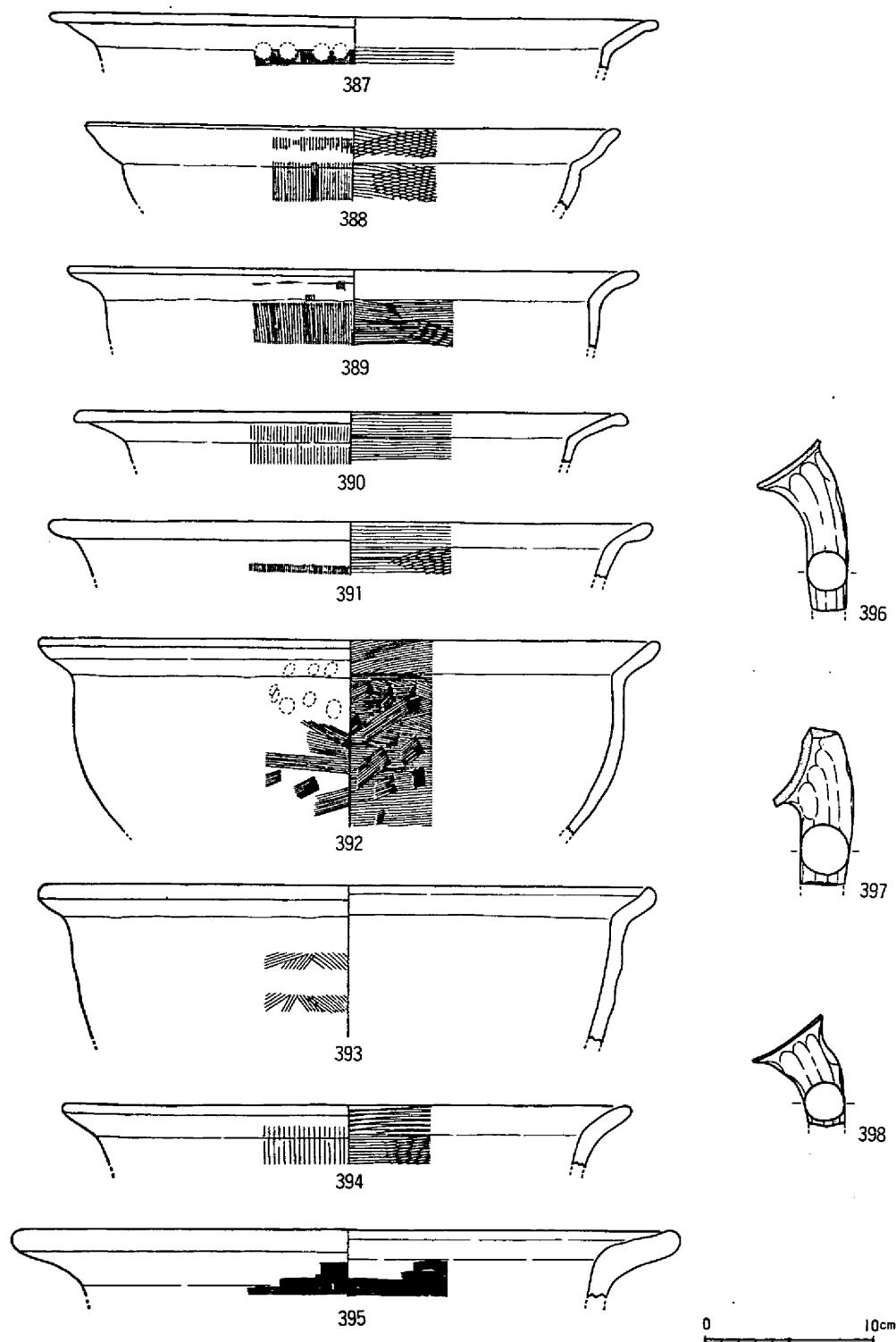
第6章 百間川当麻遺跡



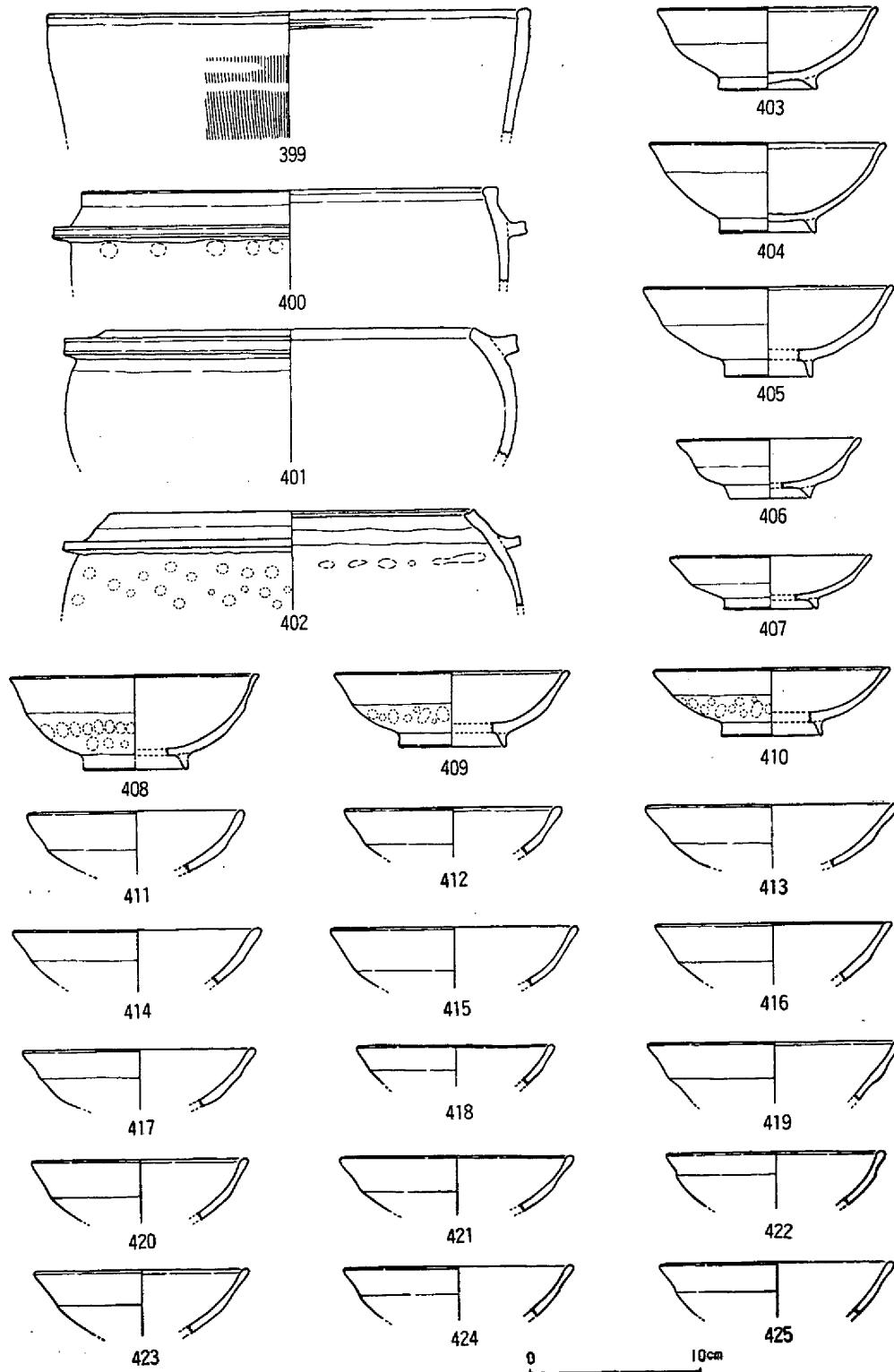
第121図 A 地点の遺構に伴わない遺物 (10) ( $\frac{1}{4}$ )



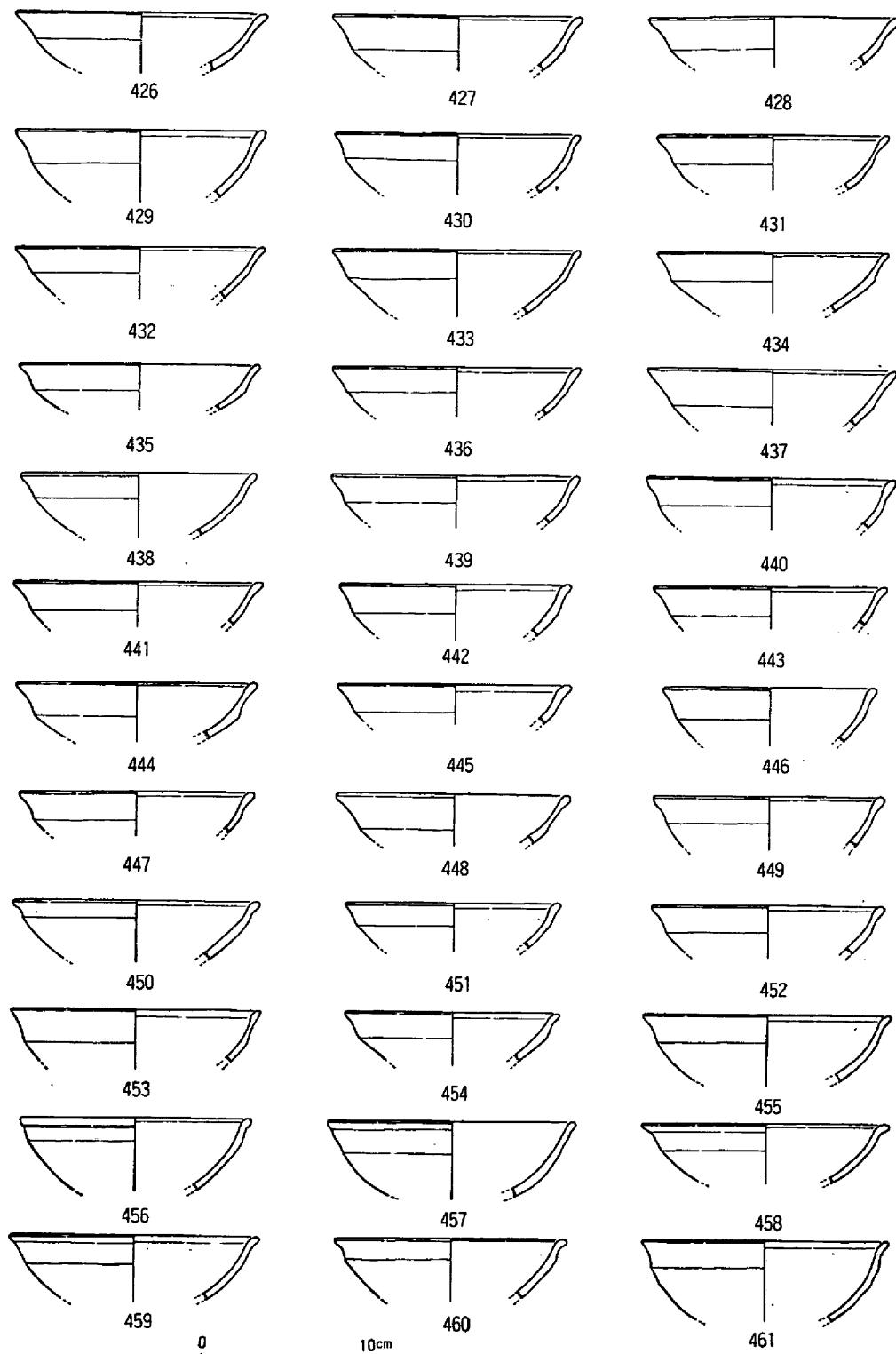
第122図 A地点の遺構に伴わない遺物 (11) ( $\frac{1}{4}$ )



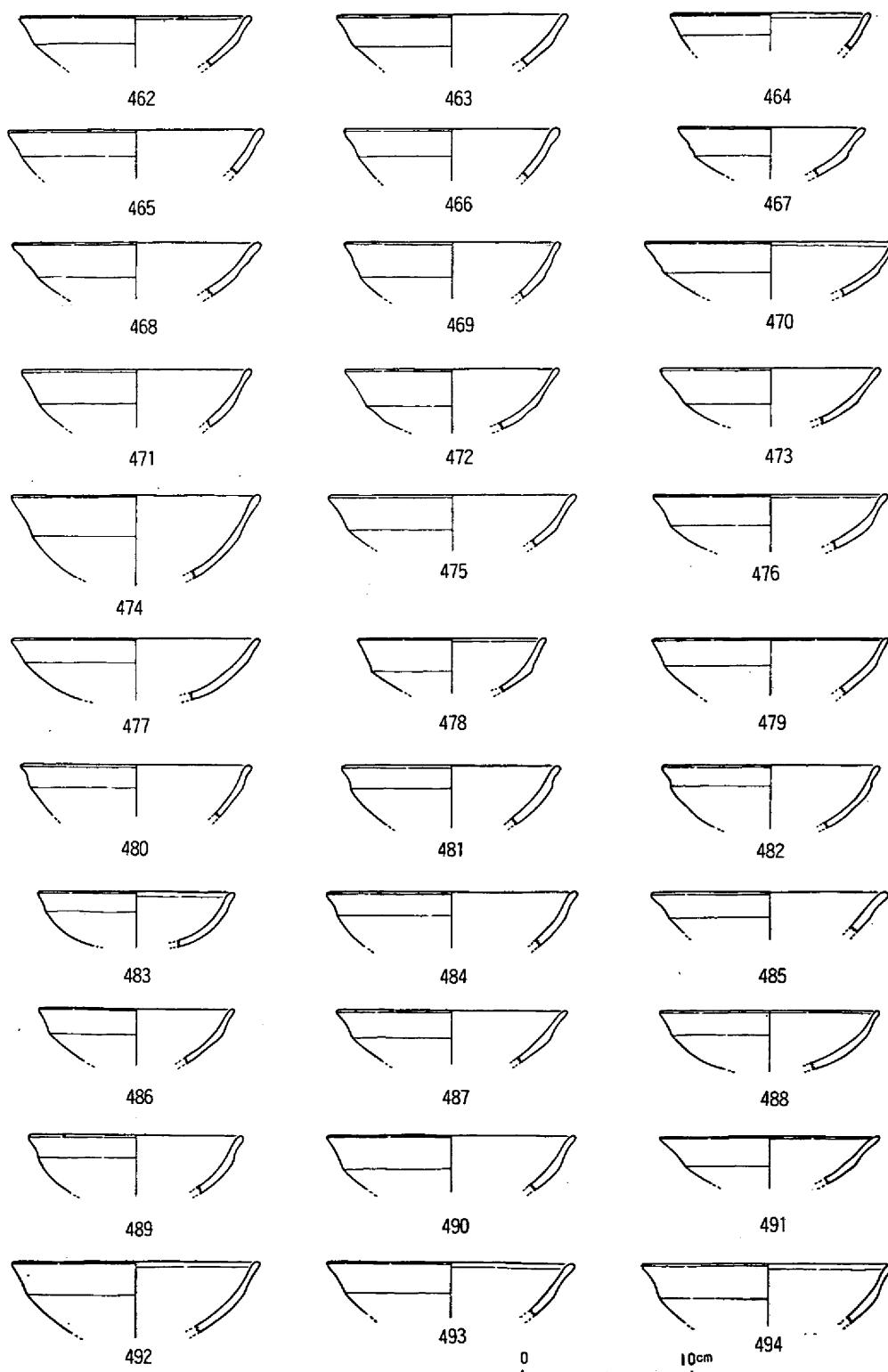
第123図 A地点の遺構に伴わない遺物 (12) ( $\frac{1}{4}$ )



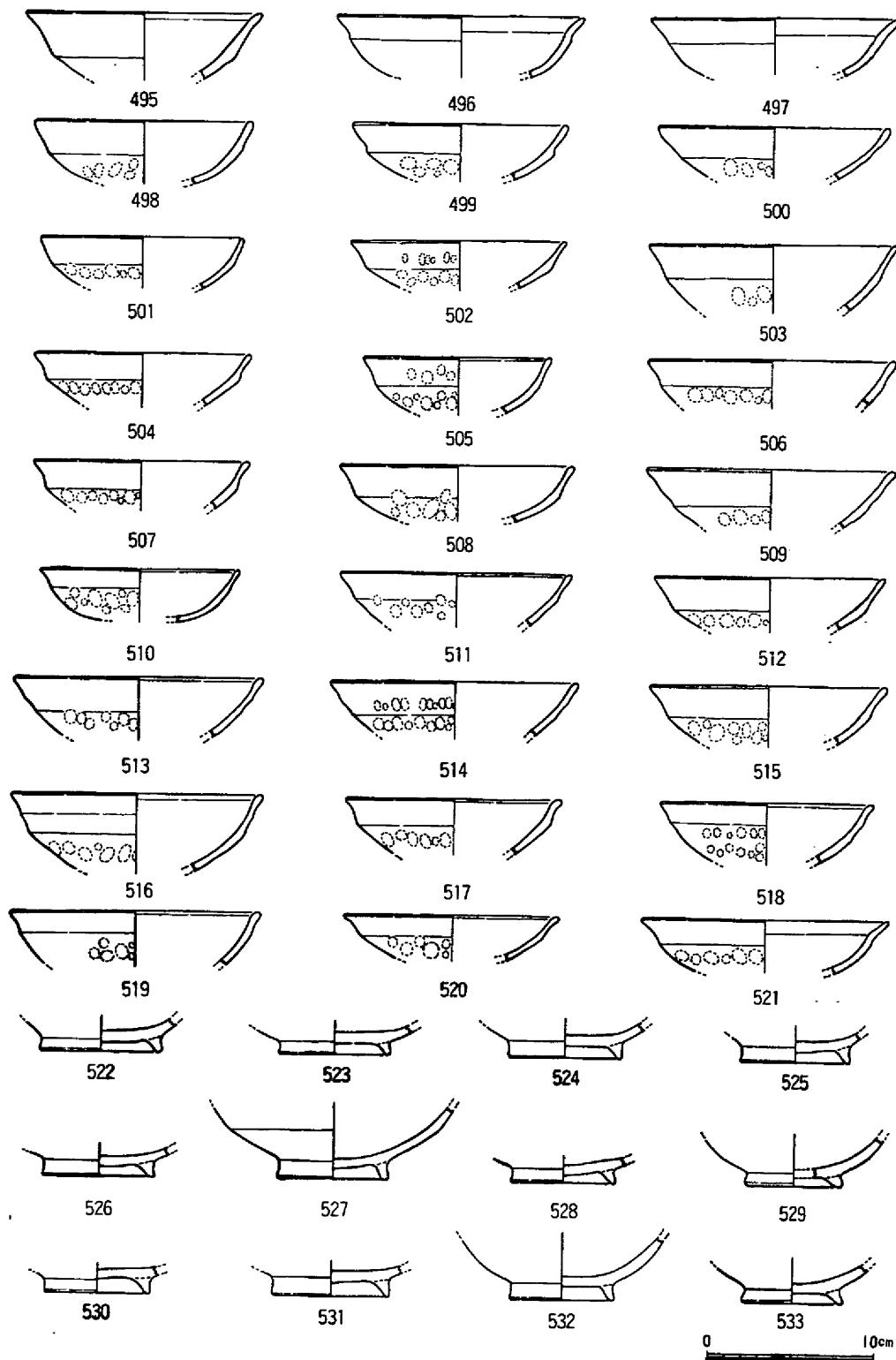
第124図 A地点の遺構に伴わない遺物 (13) (1/4)



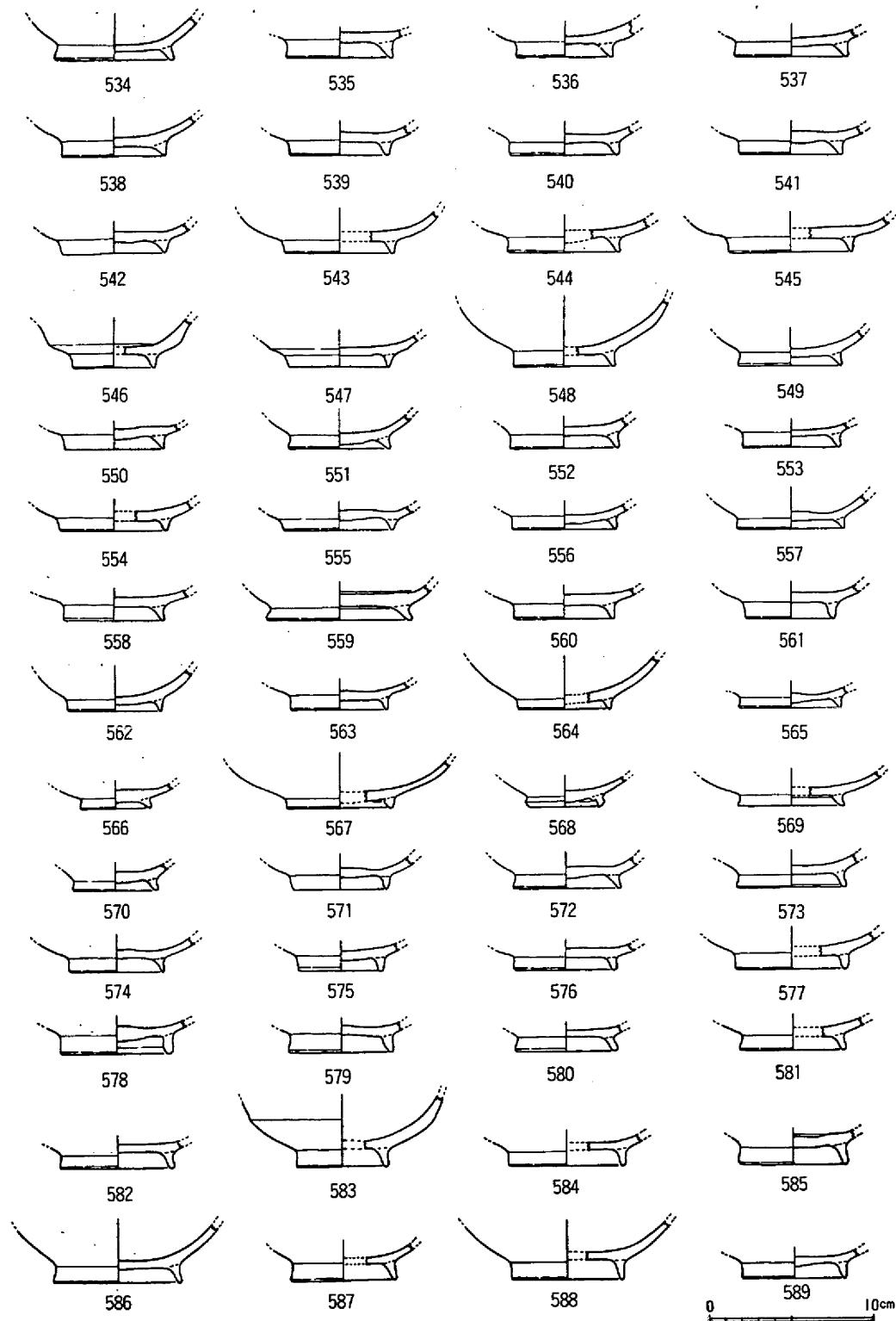
第125図 A地点の遺構に伴わない遺物 (14) ( $\frac{1}{4}$ )



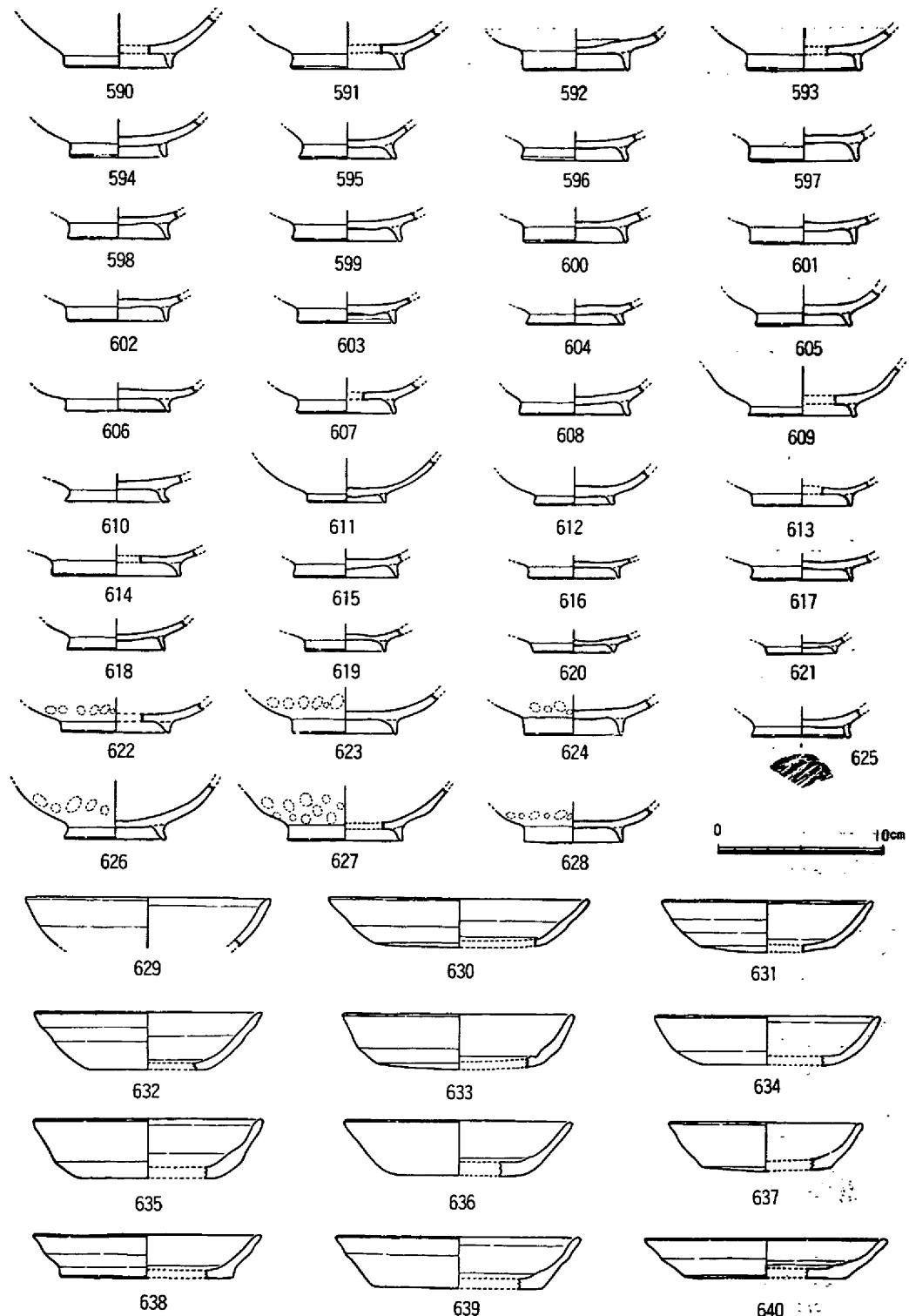
第126図 A地点の遺構に伴わない遺物 (15) ( $\frac{1}{4}$ )



第127図 A 地点の遺構に伴わない遺物 (16) (1/4)

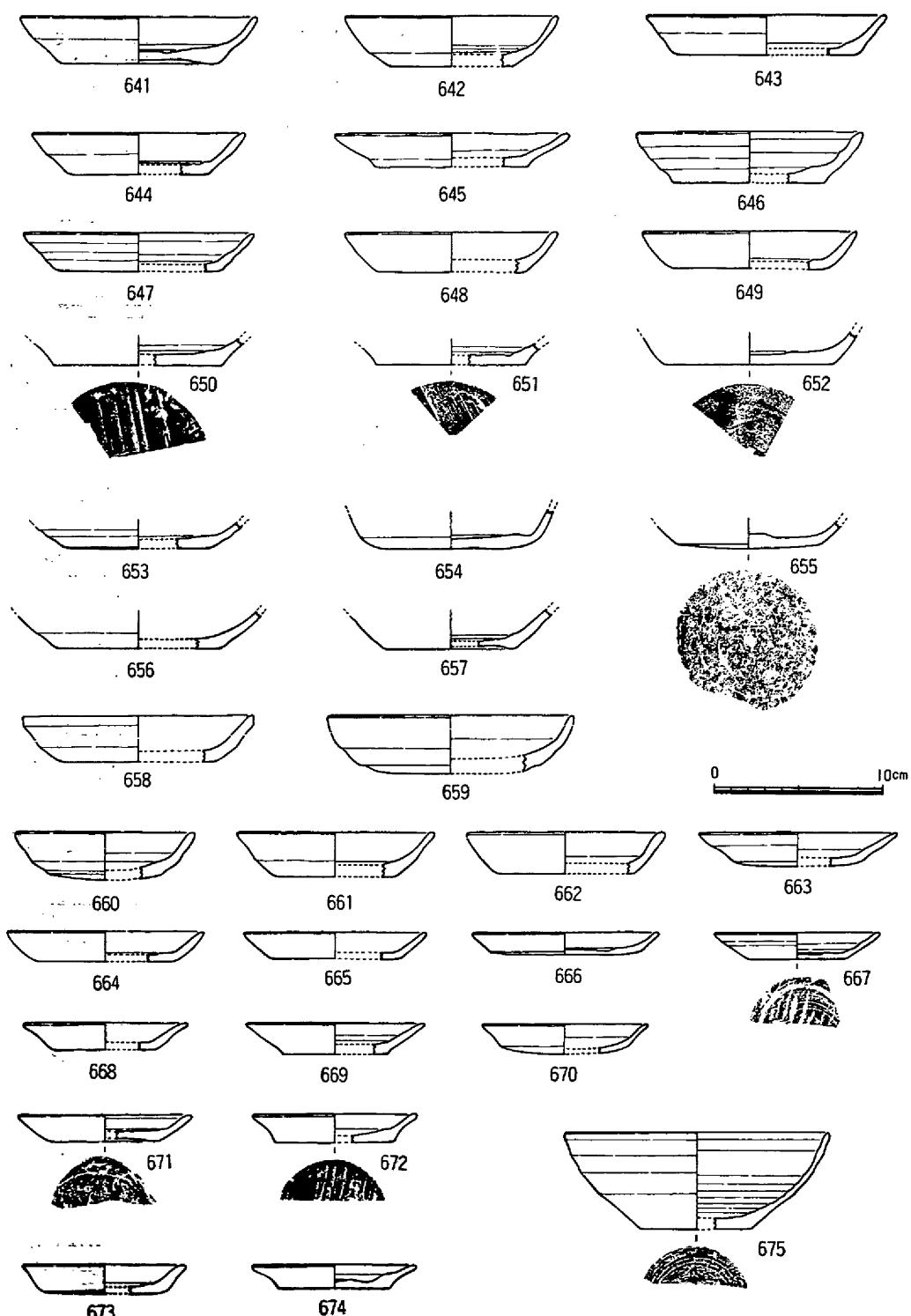


第128図 A地点の遺構に伴わない遺物 (17) ( $\frac{1}{4}$ )

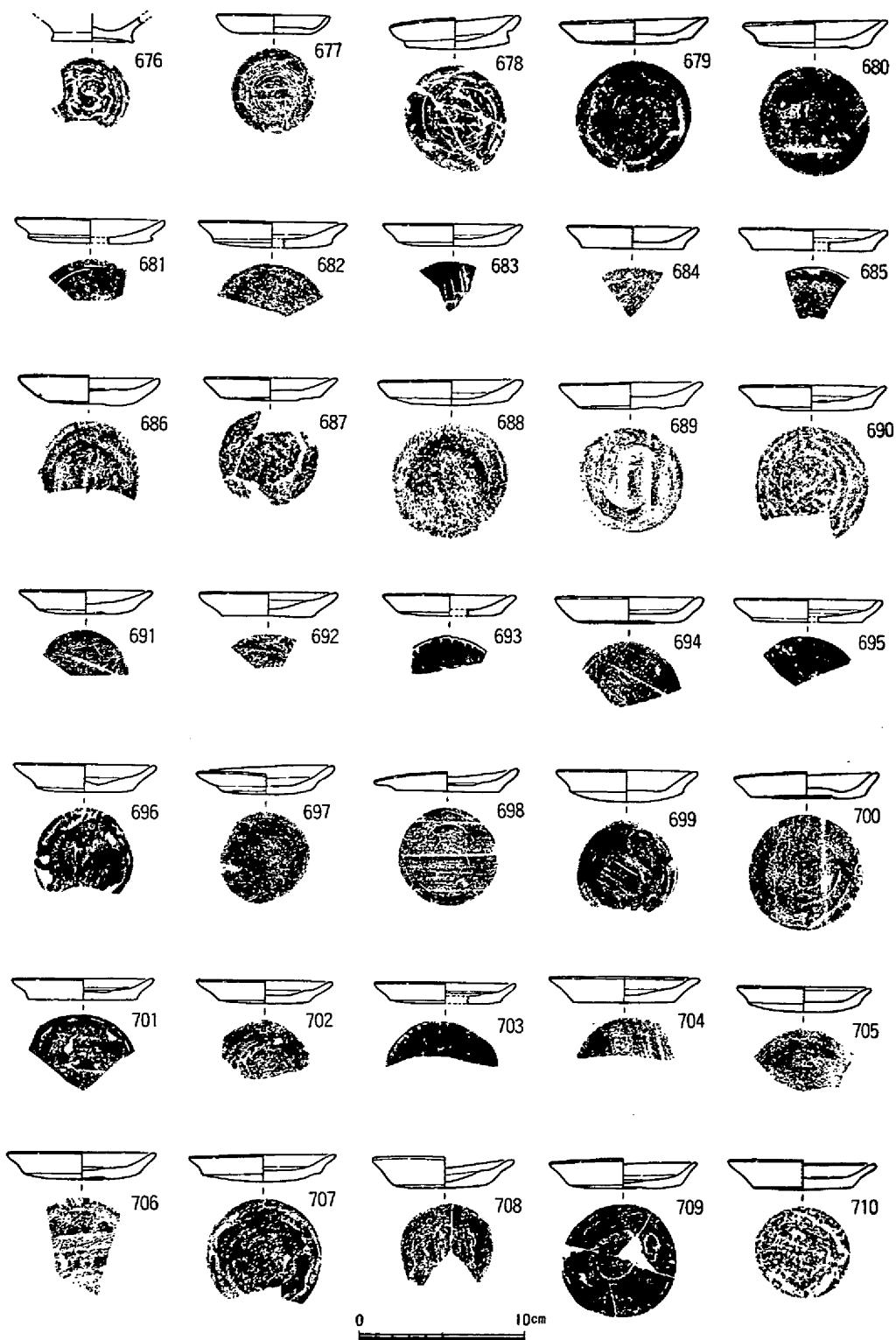


第129図 A地点の遺構に伴わない遺物 (18) ( $\frac{1}{4}$ )

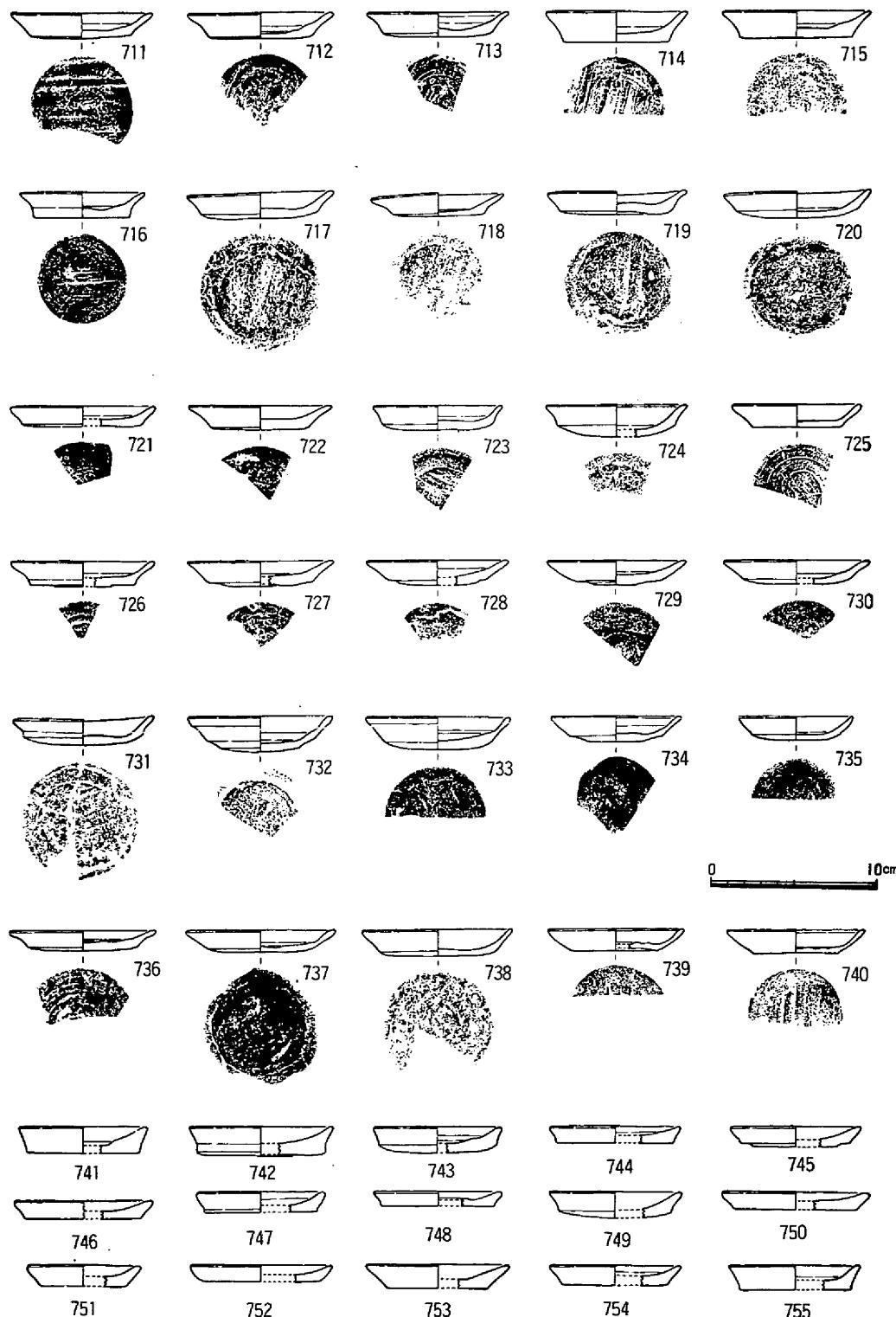
第1節 右岸用水調査区



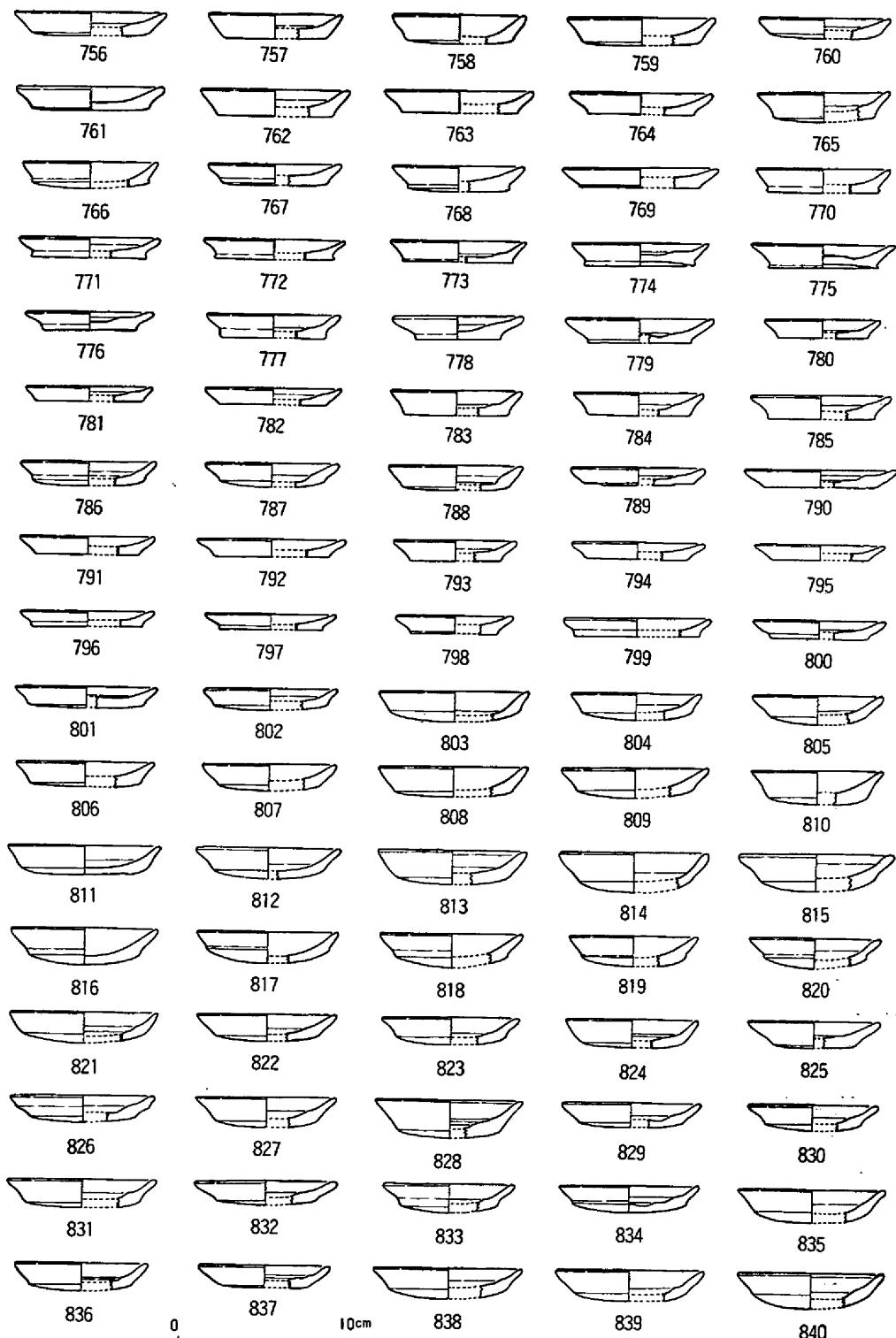
第130図 A地点の遺構に伴わない遺物 (19) ( $\frac{1}{4}$ )



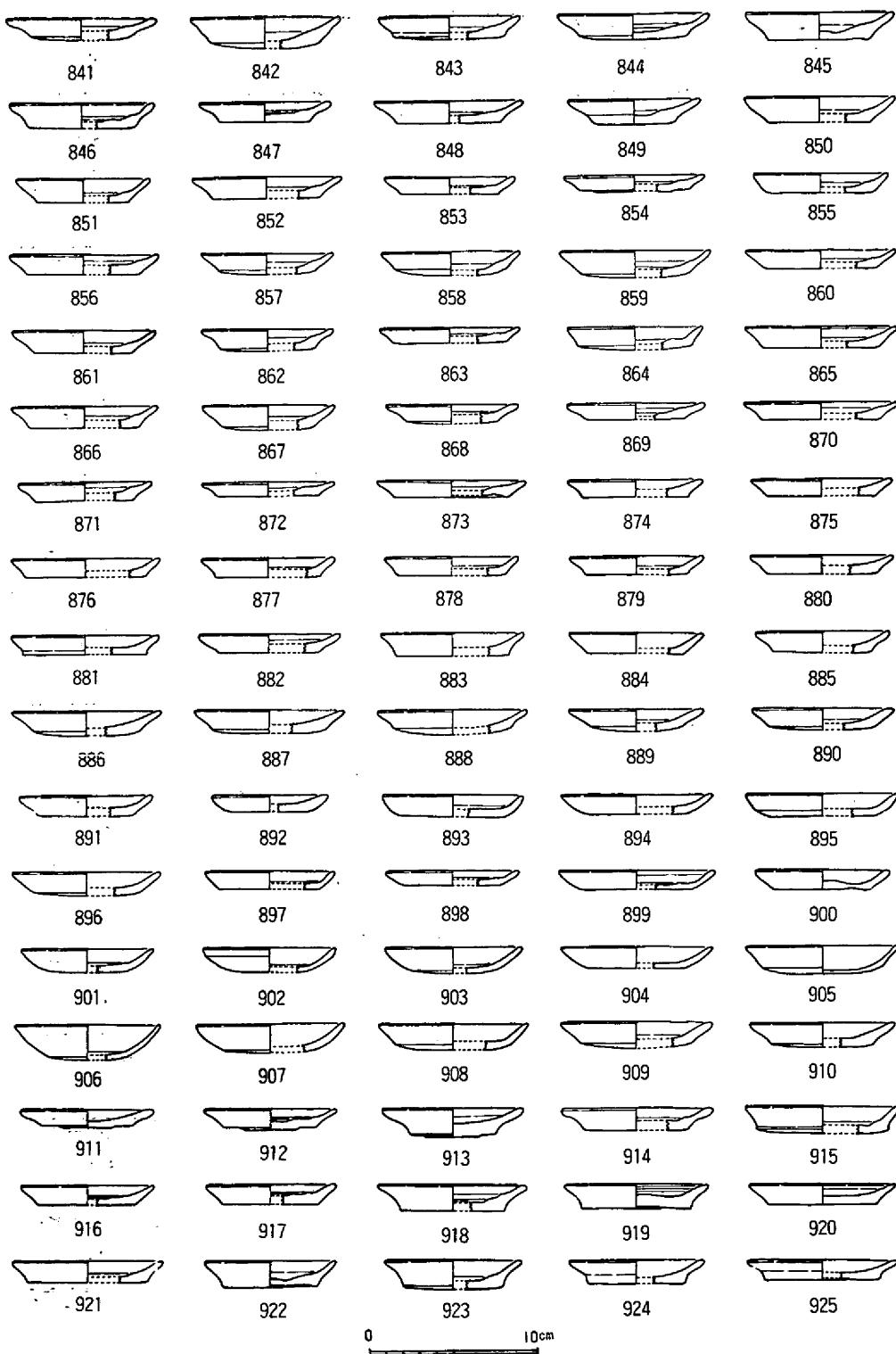
第131図 A地点の遺構に伴わない遺物 (20) ( $\frac{1}{4}$ )



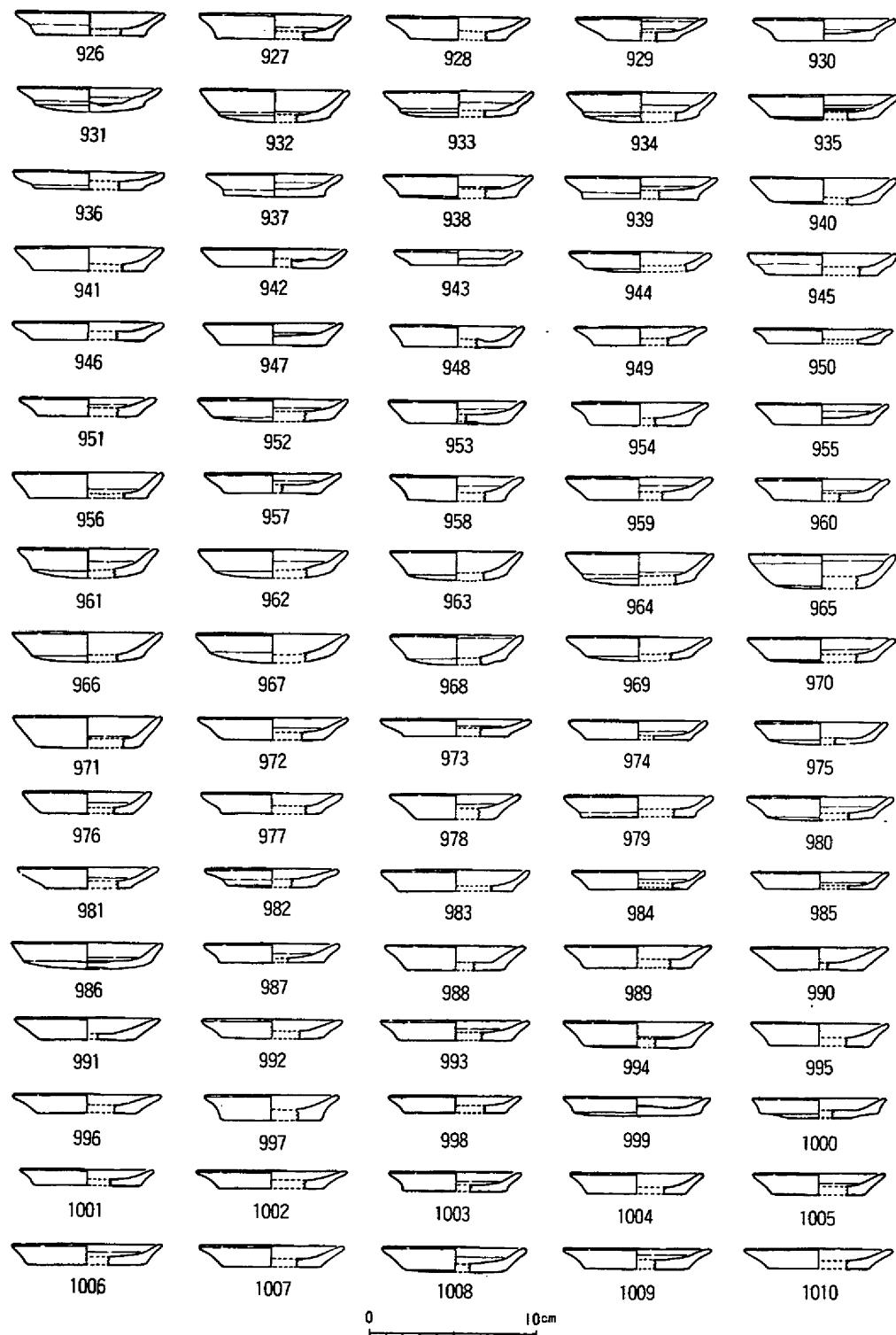
第132図 A 地点の遺構に伴わない遺物 (21) ( $\frac{1}{4}$ )



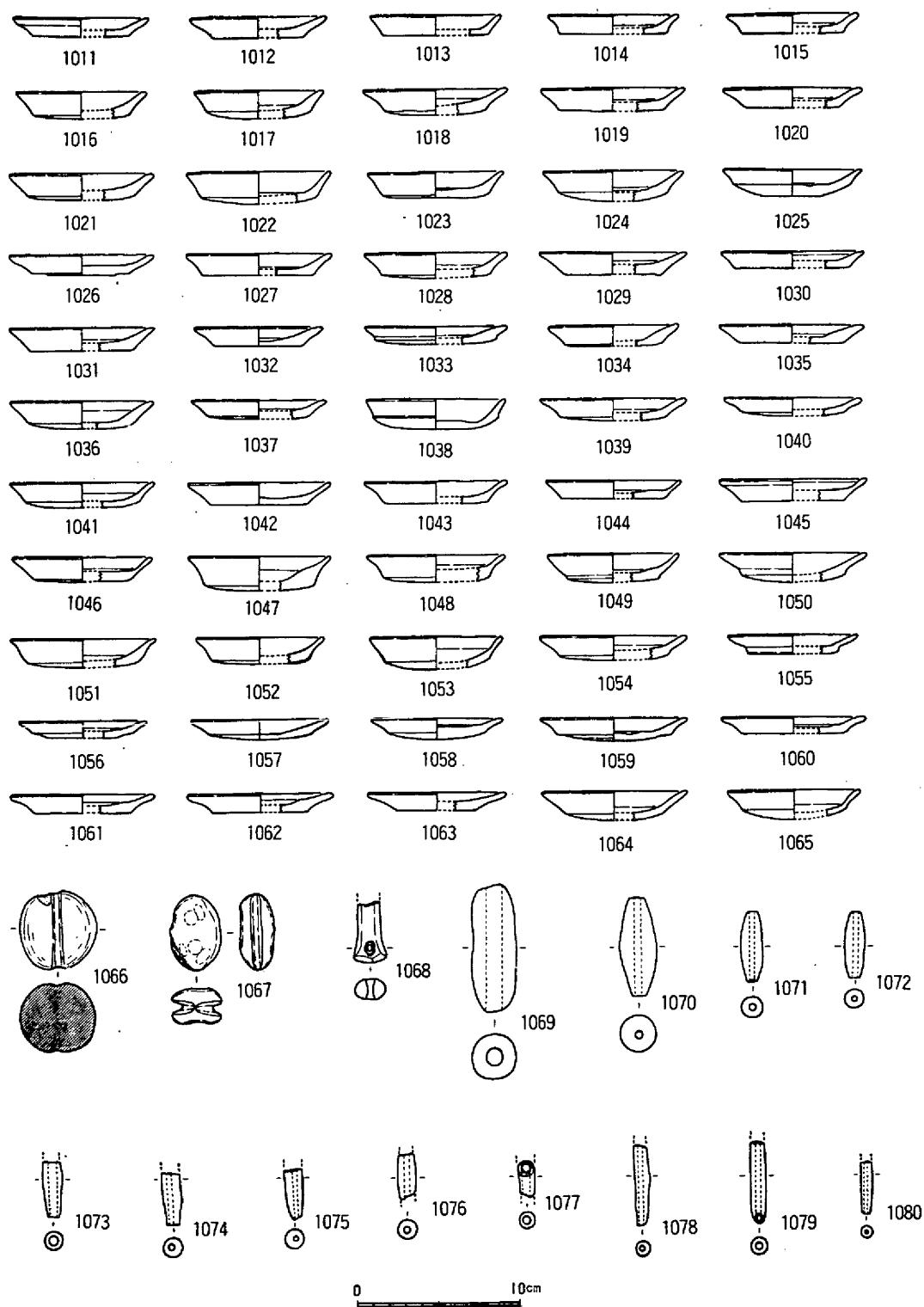
第133図 A地点の遺構に伴わない遺物 (22) ( $\frac{1}{4}$ )



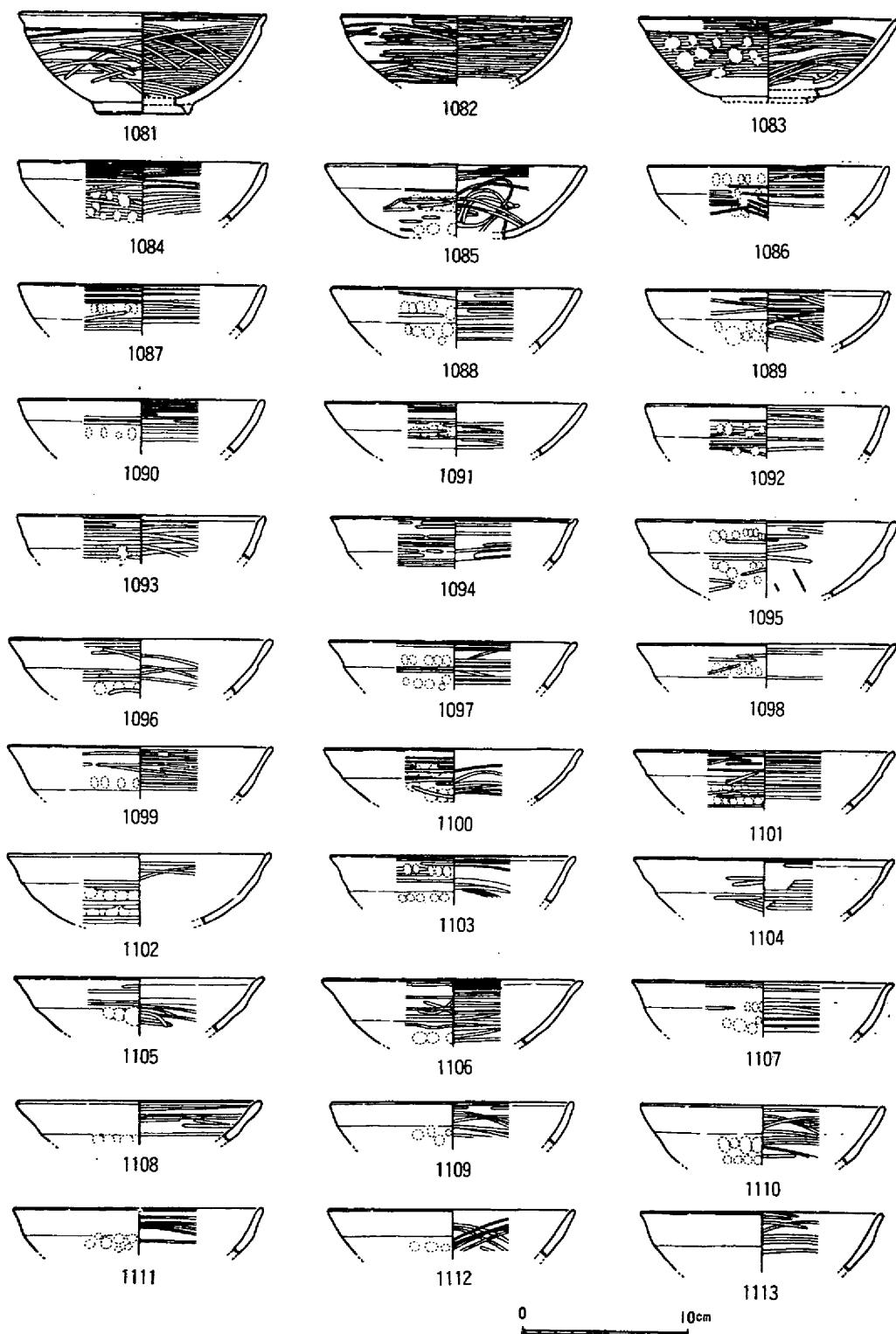
第134図 A 地点の遺構に伴わない遺物 (23) ( $\frac{1}{4}$ )



第135図 A 地点の遺構に伴わない遺物 (24) ( $\frac{1}{4}$ )

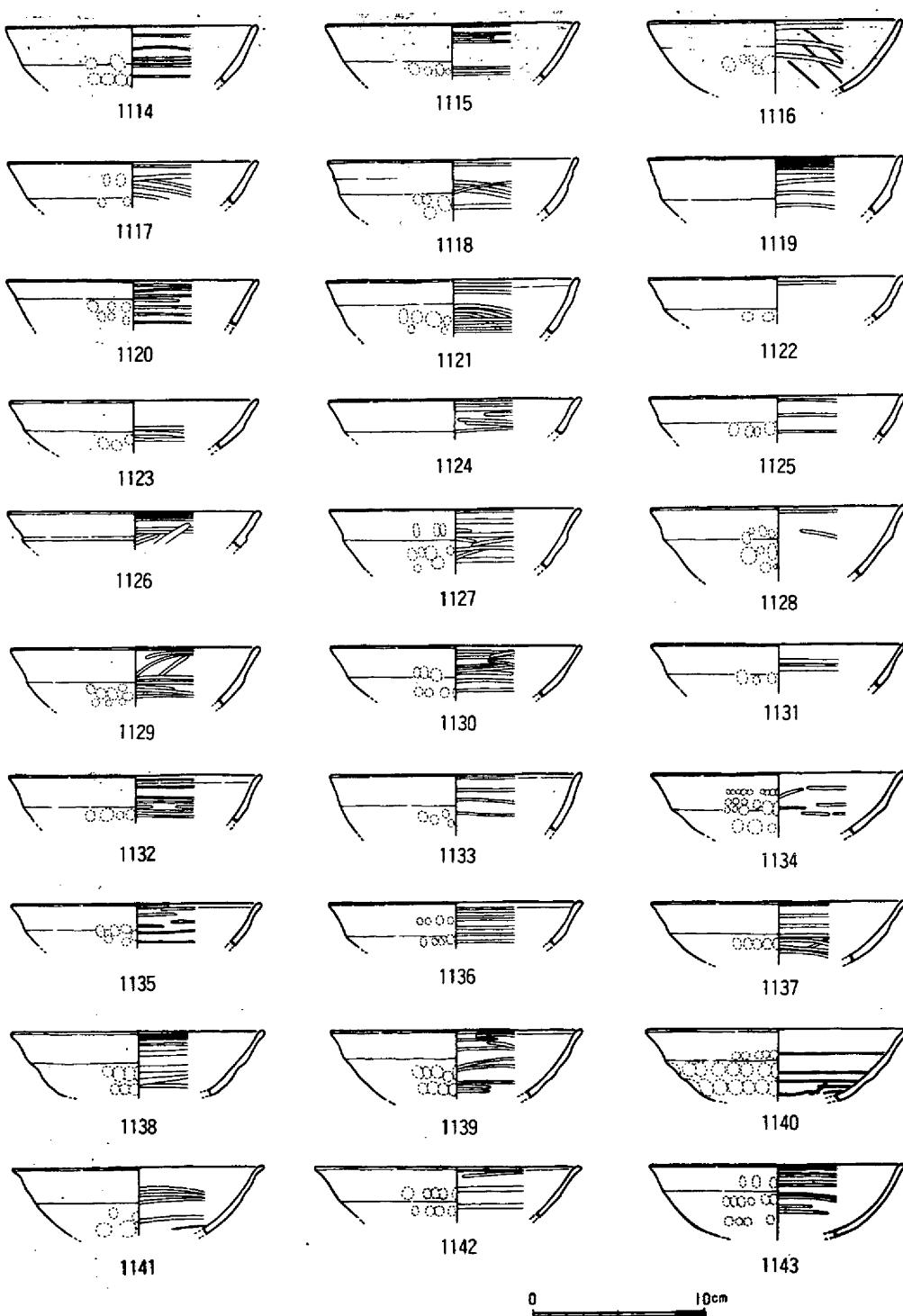


第136図 A地点の遺構に伴わない遺物 (25) (1/4)

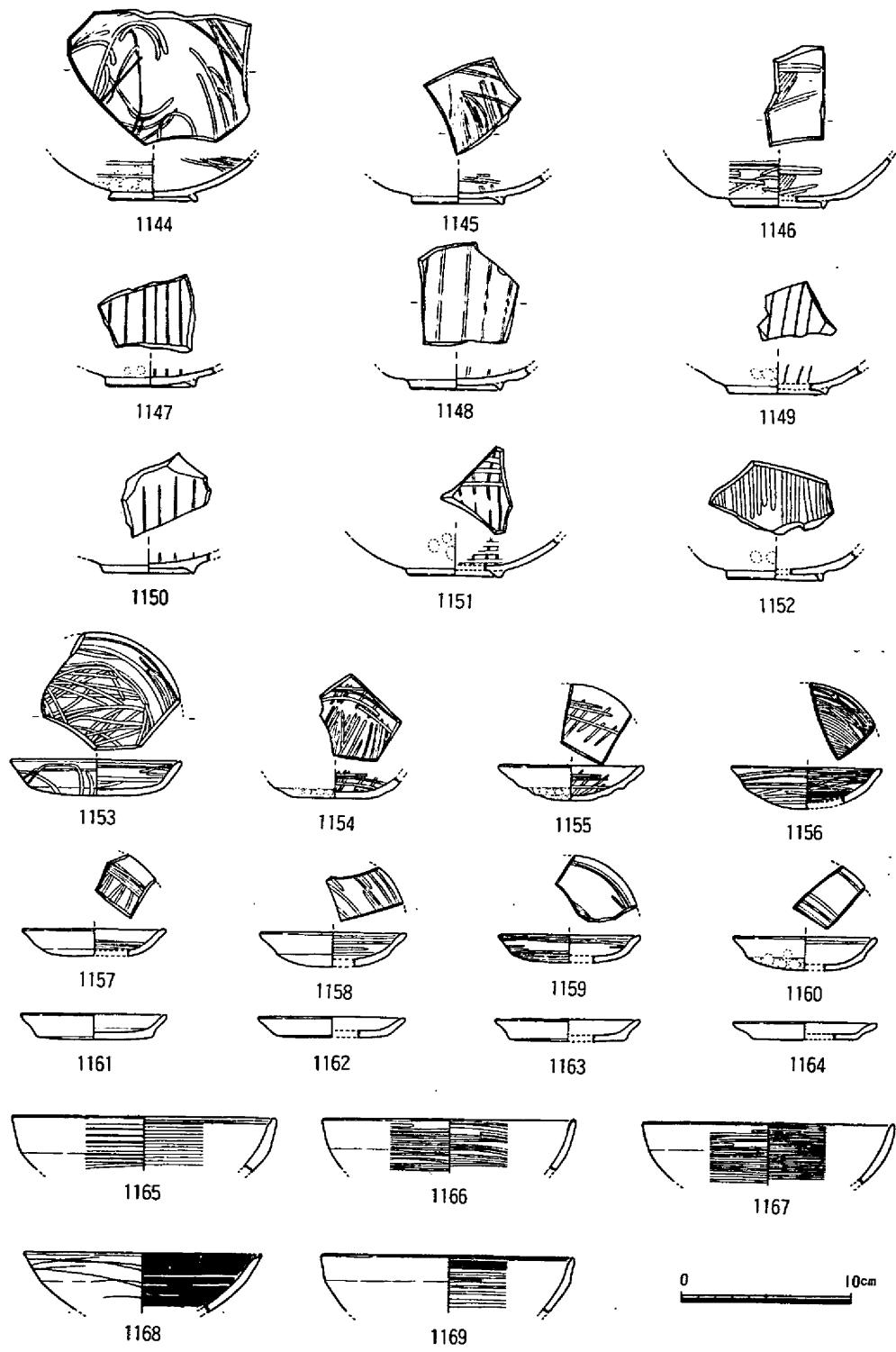


第137図 A地点の遺構に伴わない遺物 (26) ( $\frac{1}{4}$ )

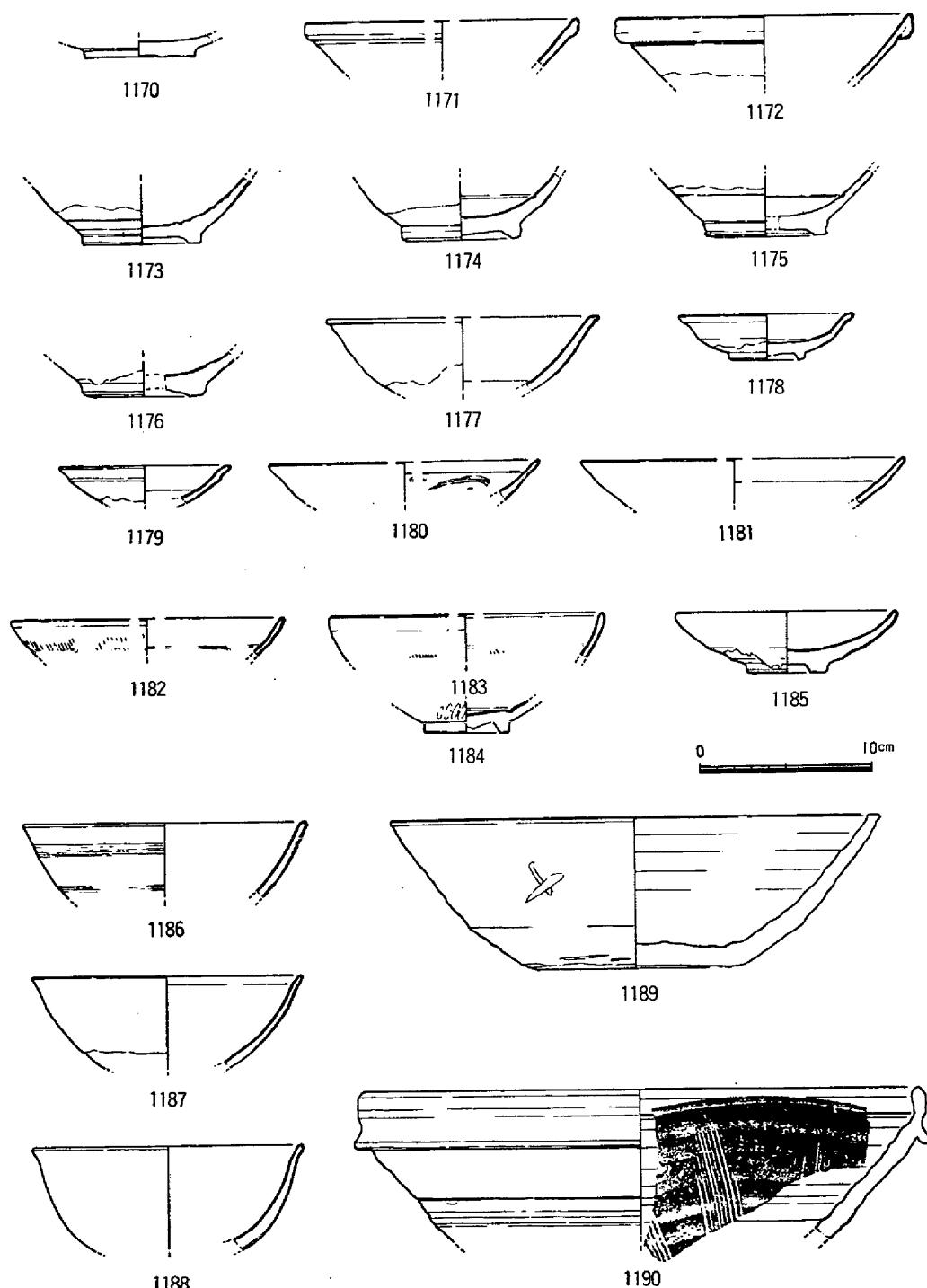
第1節 右岸用水調査区



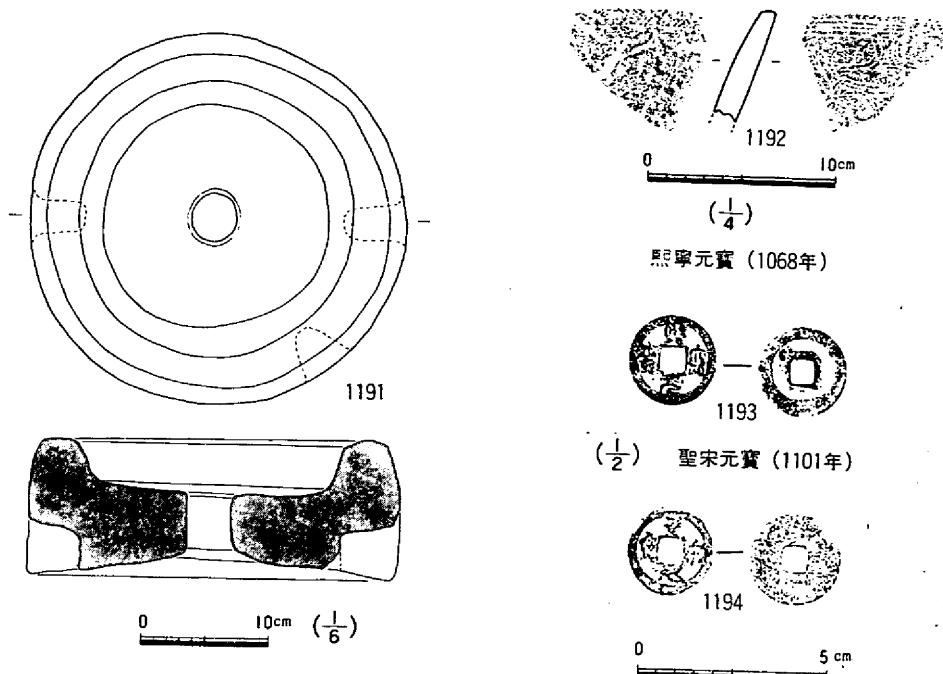
第138図 A地点の遺構に伴わない遺物 (27) (1/4)



第139図 A地点の遺構に伴わない遺物 (28) ( $\frac{1}{4}$ )



第140図 A地点の遺構に伴わない遺物 (29) (1/4)



第141図 A地点の遺構に伴わない遺物 (30)

はわずかに2片のみが認められた。楕形土器（116）と甕形土器（117）の口縁部で、どちらも前期に属するであろう。古墳時代の須恵器には、甕（118, 119）、横瓶（120）、杯蓋（121～124）、杯身（125～128）、短頸壺（129）、平瓶（131, 132）、甕（133）、高杯（130, 134～139）等の破片が認められたが、高杯の脚部破片の中には、奈良時代に属する可能性が強いものも含まれているであろう。

奈良時代から平安時代にかけての時期に属すると推定される土器片は、弥生時代後期から古墳時代にかけての時期に属するものに比して、出土量が著しく多かった。須恵器には、杯蓋（141～159）、高台付長頸壺（160～162）、高台付杯身（163～208）、高台を有しない杯身（209～238）、広口壺（240, 241）等の破片以外に、邑久郡邑久町に所在する古窯址で生産されたと推定される（註4）、特異な形態を有する杯身（140）や、器台とも香炉とも判断しがたい土器片（239）も認められた。土師器には、甕（242～255）、小形壺または小形鉢（256）、高台付杯（257～261, 265, 266）、底部の器壁が極めて厚い杯（262～264）、皿（267～272）、高台を有しない杯（273～290）等が存在した。杯や皿の中には、器表面全体に丹塗りを施したものが多く認められた。奈良時代から平安時代にかけての時期に属すると推定される須恵器と土師器の出土量の比率は、ほぼ同じであった。

A地点の遺構に伴わない遺物の中に、8点のこね鉢（291～298）の破片が認められた。口縁端部がわずかに肥厚して外面に中央部が浅く窪んだ面を有するもの（291～297）と、口縁端部を丸く仕上げているもの（298）が存在する。外面の口縁端部が、重ね焼によって生じたと推定される黒灰色に変色したもの（295～298）も認められる。これらのこね鉢は、兵庫県明石市魚住町中尾に所在する魚住古窯址群地域で生産されたものに極めて酷似しているという（註5）。

底部に糸切り痕跡を有する椀（299～358）は、比較的出土量の多い器種であった。前述したこね鉢と同様に、口縁端部に重ね焼によって生じたと推定される痕跡の認められるものが多い。この椀の生産地は、岡山県内に存在する可能性が強いが、現在のところこの椀のみを生産した古窯址は発見されていないという（註6）。

やや小形の椀で、底部に糸切り痕跡が認められるもの（359～371）と、高台を有しない小形の杯で底部に糸切り痕跡が認められるもの（372～376）は、いずれも器表面が黒青色を呈して焼成が硬質になっている。これらの土器の中には、外面の口縁端部に重ね焼によって生じたと推定される黒灰色の痕跡が認められるもの（359, 365）も存在する。この種の椀や杯は、勝田郡勝央町に所在する勝間田古窯址群で生産されたものにも極めて酷似しているという（註7）。

こね鉢（291～298）、底部に糸切り痕跡を有する椀（299～358）、底部に糸切り痕跡が認められる小形の椀（359～371）や小形の杯（372～376）の時期は、平安時代後半から鎌倉時代にかけてに属すると推定されるが、個々の器種の詳細な点については、現在のところ不明である。

鎌倉時代に属すると推定される土師質の土器片には、土鍋（379～398）、高台付椀（403～628）、皿（629～659）、やや小形の皿（660～674）、小皿（676～1065）等が認められた。これらの土器片のうちでも高台付椀と小皿は、出土量が異常に多く、ほかの器種に比して圧倒的多数を占めていた。土鍋の外面には煤の付着が認められ、煮沸に使用された痕跡を留めている。高台付椀の外面には、指頭圧痕がそのまま残存しているものと、指頭圧痕をなでによって消しているものとが認められるが、高台はいずれも貼り付けで、内面全体と外面の口縁部は丁寧な横なでを加えている。皿と小皿は、底部がいすれも笠切りで、内外面とも全体に回転なでを施している。

なお大形の甕（377）と器壁の厚い土鍋（378）の口縁部破片は、平安時代後半の時期に属する可能性が強い。また形態の揃っていない4点の羽釜（399～402）は、室町時代に属するであろう。

畿内で生産されたと推定されている瓦器（註8）が、畿内以外の遺跡としては極めて多量に出土した。瓦器椀は和泉型のもの（1081～1152）がほとんどで、わずかに楠葉型のもの（1165～1169）が5点のみ認められた（註9）。これらの瓦器椀の中には、外面にも暗文が施されているもの（1081～1107, 1165～1168）も存在する。瓦器小皿（1153～1164）はいずれも和泉型のもので、外面にも暗文が施されているもの（1153, 1156, 1159）も認められる。

中国製の青磁や白磁（1170～1188）も出土した。器種はいずれも椀と推定される。遺構に伴わないものであるから時期は断定しがたいが、鎌倉時代から室町時代に属するであろう。

灰色を呈する須恵質のこね鉢（1189）は、外面に「×」印が認められ、鎌倉時代のものと考える。備前焼擂鉢（1190）は、内面に9本を単位の条線が放射状に施され、室町時代に属するであろう。

## 2. B 地点 (5区, 6区)

B地点は、丘陵部調査区の南に位置する岩盤が露出した低くて頂部の狭い丘陵の部分で、調査区全体の5区と6区が含まれる(第90図)。検出した遺構としては、柱穴と推定される多数のピット以外に、溝状遺構5(D-6～D-10)と土壙6(P-7～P-12)が存在し、テラス状遺構と呼称した「L」字状の平面形を呈する低い段が2箇所に並んで認められた。これらの遺構は薄く堆積した表土直下の岩盤上に構築していたため、表面が著しく削平されて残存状態が極めて悪い。遺構に伴う良好な遺物は検出されなかつたから、B地点に存在する遺構の時期は不明であるが、奈良時代から現代に至る長期間の各時代の遺構が混在していると考えられる。

### 溝状遺構6 (第143図)

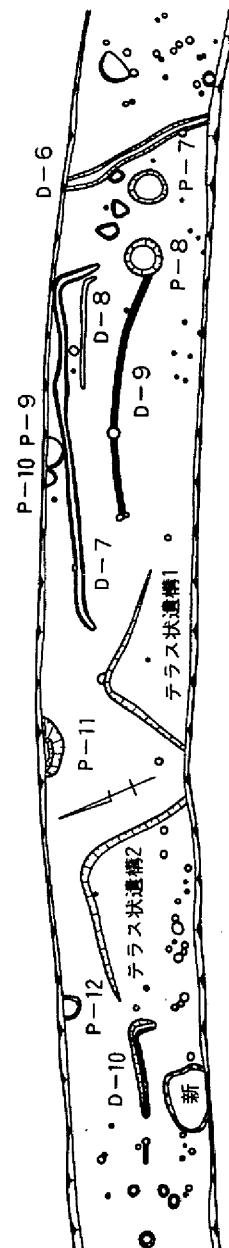
5区の東端で検出した南北方向の溝状遺構である。丘陵斜面に位置するため、北から南へ底部のレベルが著しく傾斜していた。検出面での最大幅は約63cmを測り、断面形は浅い「U」字形を呈していた。遺構内には灰色砂質土が堆積しており、遺物は認められなかつた。この溝状遺構は、丘陵から流れ落ちる雨水や湧水の流路であったと推定される。

### 溝状遺構7 (第144図)

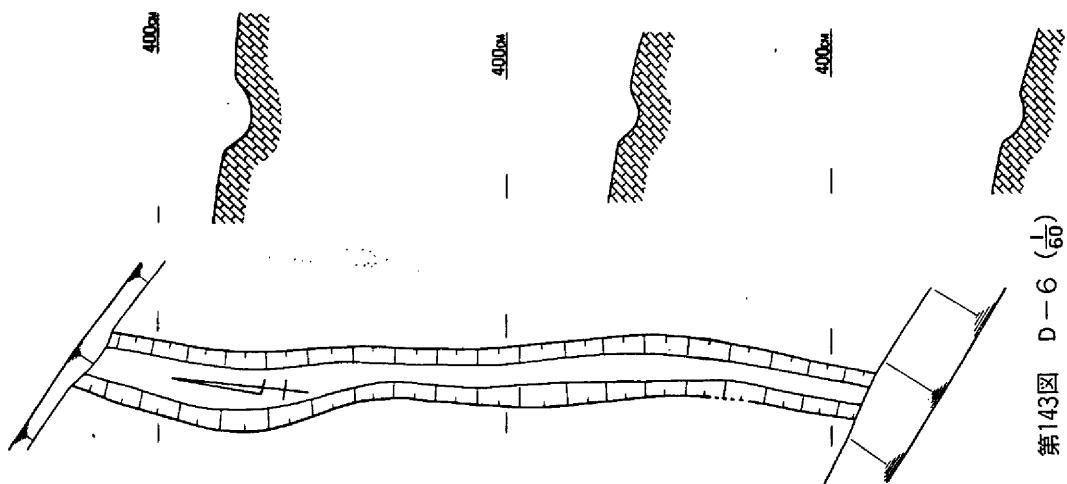
丘陵部調査区に面した5区の丘陵頂部で、もっとも高い位置に存在した溝状遺構である。丘陵の尾根に直交して延長約10mがほぼ直線的な形態を呈し、両端が短く屈曲して途切れていた。検出面での最大幅は約45cm、最小幅は約20cmであった。検出面からもっとも深い地点は約15cmを測り、断面は浅い「U」字形を呈していた。遺構内には花崗岩が風化した灰色を呈する砂質土が認められ、遺物は存在しなかつた。この長大で両端が屈曲した溝状遺構は、建物の雨落溝であった可能性が強い。

### 溝状遺構8 (第144図)

5区の丘陵頂部にD-7とD-9の中間で検出した、平面形が「L」字状を呈する溝状遺構である。東端のD-7に近接した部分



第142図 B地点遺構配置図 ( $\frac{1}{300}$ )



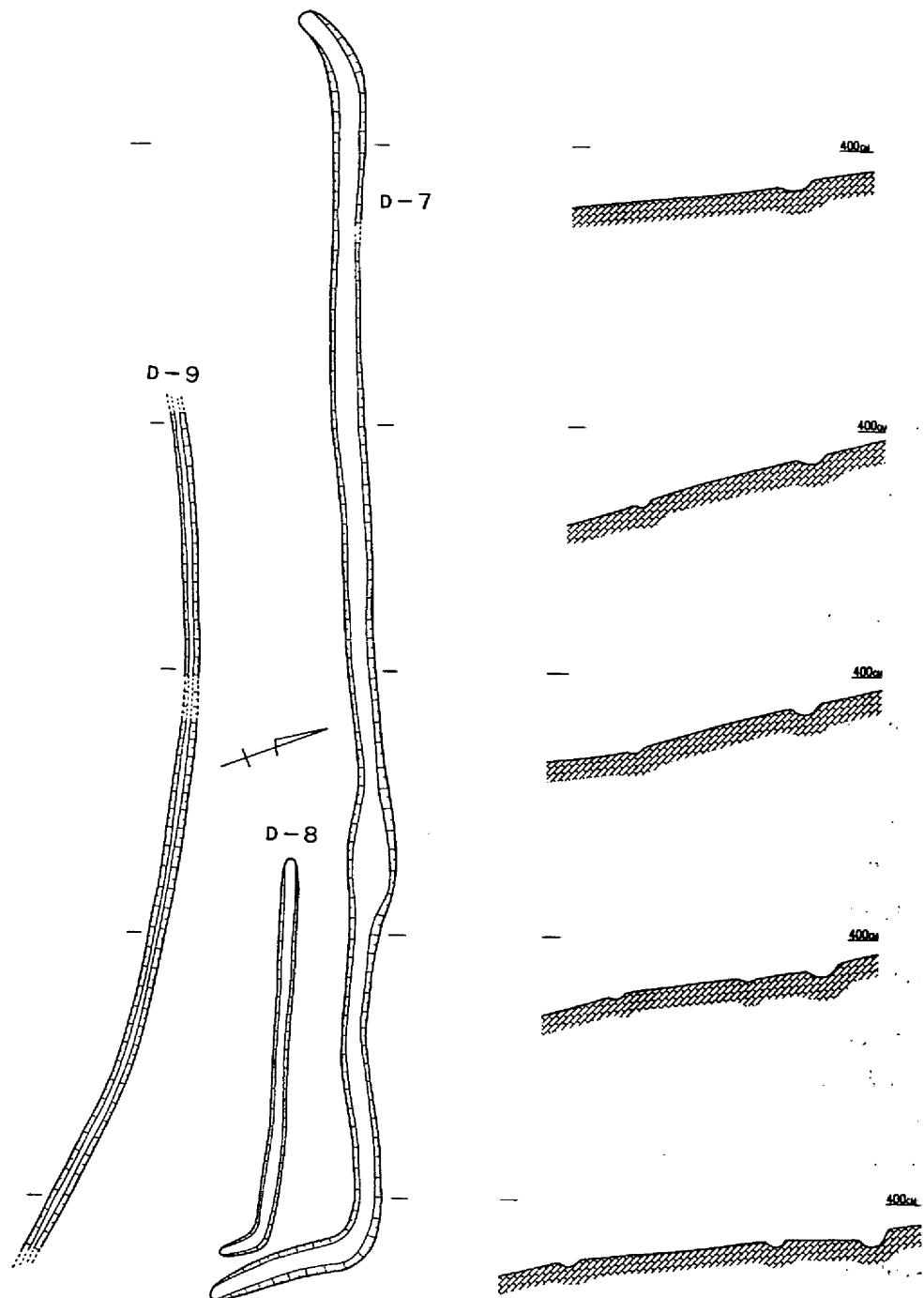
は、ほぼ直角に南方向へ短く屈曲していた。D-7と平行する方向は、延長約5m30cmが残存していた。検出面での幅は12cmから16cmを測り、もっとも深い地点で検出面から約8cmであった。遺構内にはD-7と同様に灰色砂質土が認められ、断面は浅い「U」字形を呈していた。遺構内を精査したにもかかわらず、遺物は検出できなかった。この溝状遺構は、屈曲する溝で囲まれた地点に規則的に並ぶ柱穴が認められなかったとはいえ、建物の雨落溝であった可能性が強い。

#### 溝状遺構9（第144図）

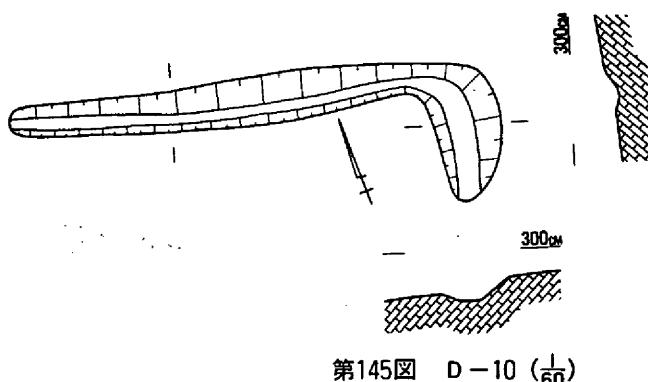
前述したD-7やD-8の南で検出した、緩やかな弧を描く溝状遺構である。東端はP-8によって切られていた。西端は柱穴と推定される小規模なピットによって切られていた。検出面での幅は、約15cmを測るほぼ一定の値を示し、検出面から底部までの深さは、もっとも深い地点で約5cmであった。遺構内には灰色を呈する砂質土が認められ、断面は浅い「U」字形を呈していた。この溝状遺構の残存状態は極めて悪く、遺物も検出できなかったから、構築された時代や性格は不明である。

#### 溝状遺構10（第145図）

丘陵の西斜面に位置する6区の中央部で検出した溝状遺構である。平面形は「L」字状を呈し、東端がほぼ直角に南方向へ短く屈曲していた。この溝状遺構の西側部分は、さらに西方向へ連続していくらしく、柱穴と推定される小規模なピットの間にかすかな痕跡が認められた。残存する東西方向の直線部分は、延長が約3m80cm、検出面での最大幅が約40cm、検出面から底部までもっとも深い地点で約10cmであった。東端の屈曲部分の幅は約55cmを測り、底部までの深さは約20cmであった。南に位置する調査範囲の境界に接して現代の大きな穴が掘り込まれていたこともあって、溝で囲まれた部分に規則的に並ぶ柱穴が認められなかったとはいえ、この溝状遺構は建物の雨落溝であった可能性が強い。遺構内から遺物が出土しなかったので、この溝状遺構が構築された時期は不明である。



第144図 D-7・D-8・D-9 (1/50)

第145図 D-10 ( $\frac{1}{60}$ )**土壤7（第146図）**

D-6とP-8の中間で検出した、岩盤を掘り込んだ土壤である。平面形は円形に近い歪んだ形態を呈していた。検出面での計測値は、南北方向約1m50cm、東西方向約1m35cmであった。検出面から底部までの深さは、もっとも深い地点で約25cmであった。土壤内の底部には暗黄色土が堆積し、その上位には人頭大の角礫を含む暗灰色土が認められた。土壤内を精査したにもかかわらず、遺物は存在しなかった。

**土壤8（第147図）**

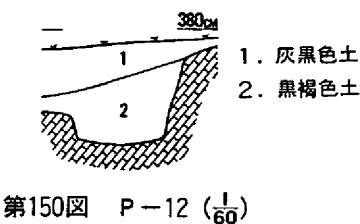
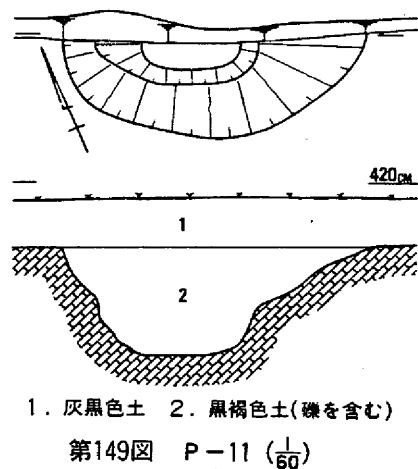
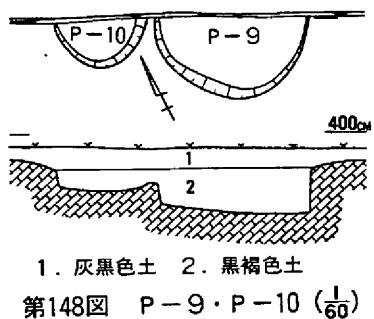
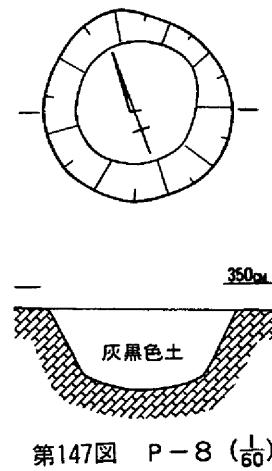
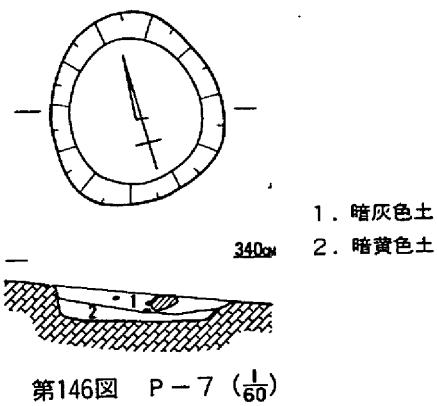
前述したP-7の西側に、新しくD-9を切った状態で検出した土壤である。平面形は直径約1m50cmを測る円形を呈し、検出面から底部までの深さは約65cmであった。土壤内には周辺の表土層に見られる灰黒色土が堆積し、ブリキ製バケツの壊れた残骸が出土した。この土壤は現代のもので、近年まで使用されていたと考える。

**土壤9（第148図）**

丘陵部調査区に面した丘陵の頂部に、南側がD-7に接してP-10と並んだ状態で検出した土壤である。調査範囲の境界部分に位置するため、北側は調査することができなかった。平面形は円形に近い形態を呈し、調査範囲の境界部分での径は約1m20cmであった。検出面からもっとも深い地点で約35cmを測り、底部が東方向へ緩やかに傾斜していた。内部には黒褐色土が認められ、遺物は存在しなかった。この土壤の性格は不明である。

**土壤10（第148図）**

前述したP-9と並んだ状態で検出した土壤である。P-9と同様に調査範囲の境界部分に位置するため、北側は調査することができなかった。平面形は円形に近い形態を呈し、調査範囲の境界部分での径は約73cmであった。この土壤の中央部分の深さは、表土面から約35cm、検出面から約15cmを測



り、底部が平坦でほぼ水平になっていた。土壌内には黒褐色土が認められ、精査したにもかかわらず遺物は出土しなかった。したがってこの土壌の性格や構築された時期は不明である。

### **土壌11（第149図）**

丘陵部調査区に面した5区と6区の境界地点に検出した、土壌と推定される遺構である。調査範囲の境界部分に位置するため、北側は調査することができなかった。平面形は東西方向の径が長い橢円形を呈するであろう。調査範囲の境界部分での径は約2m45cmであった。この遺構は2段に掘り込まれて、断面が「U」字形を呈していた。検出面からもっとも深い地点で約90cmを測り、内部に人頭大から拳大の礫を多量に含む黒褐色土が認められた。遺構内からは図化することが不可能な室町時代に属すると推定される備前焼擂鉢の小破片や、奈良時代と思われる杯蓋の小破片が出土したが、この遺構が構築された時期を断定する遺物は得られなかった。この遺構は丘陵の岩盤を掘り窪めて構築されていたため、絶えず湧水が得られる状況ではなく、飲料水等を常時確保できる井戸の機能は有しなかったであろう。おそらく丘陵から流れ落ちる雨水を溜めておく施設の土壌であったと考えられる。

### **土壌12（第150図）**

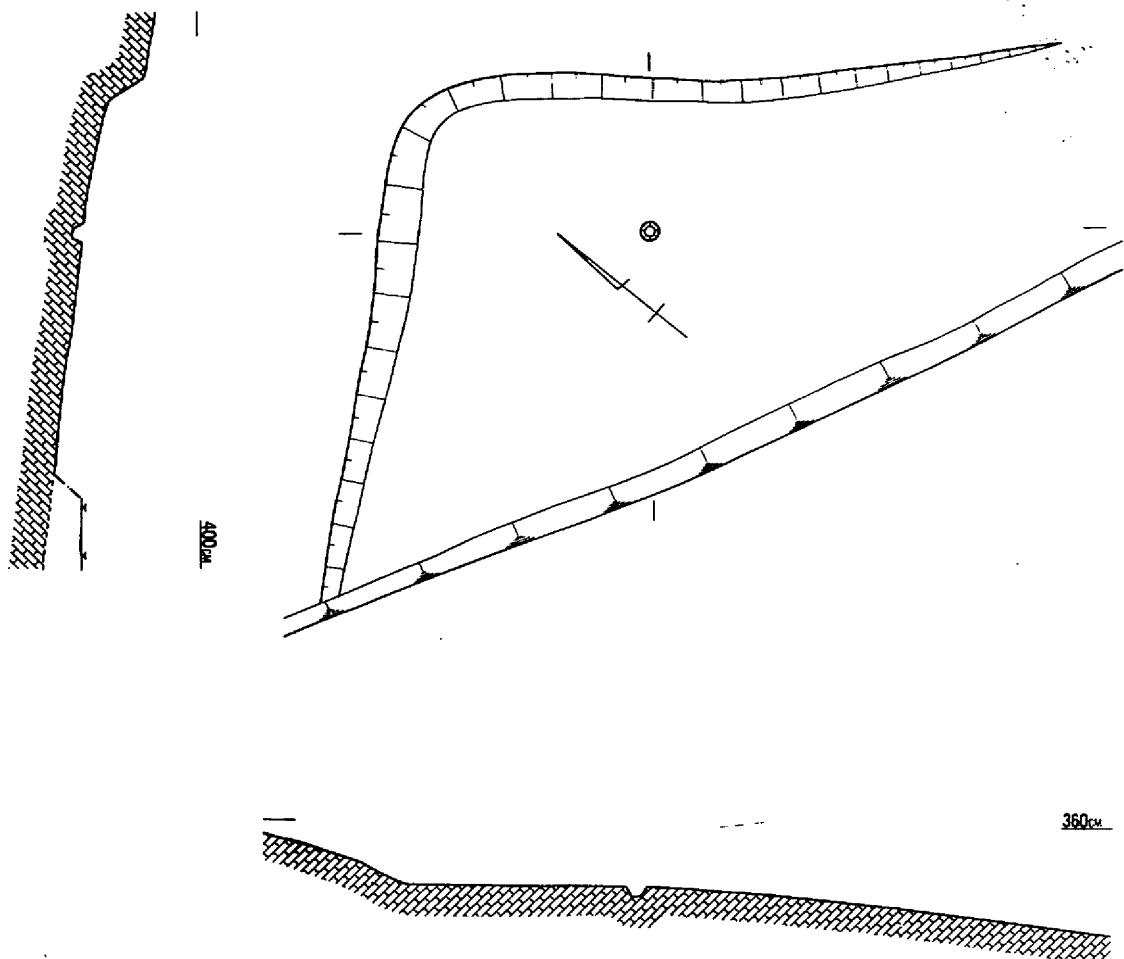
D-10とテラス状遺構2の中間の北側で検出した土壌である。調査区範囲の境界部分に位置するため、北側は調査することができなかった。平面形は隅丸方形または隅丸長方形の歪んだ形態を呈し、調査範囲の境界部分での径は約90cmであった。この土壌の存在する地点は、西側へ傾斜した丘陵の斜面であったため、検出面からの深さは東側で約60cm、西側で約20cmであった。底部には中央部分がわずかに深くなつた平坦面が認められ、土壌の内部に黒褐色土が堆積していた。土壌内を精査したにもかかわらず、遺物は出土しなかった。

### **テラス状遺構1（第151図）**

P-7とP-11の中間の南側で検出した遺構である。調査範囲の境界部分に位置するため、南側は調査することができなかった。地形の高い部分の岩盤を平坦に削平した、平面形が「L」字状を呈する低い段が存在するだけである。屈曲部から北東方向へは、約5m30cmまで直線的に段が続いて途切れていた。残存する段の高さは、屈曲部でもっとも高い約30cmを測る。平坦面には直径約15cmの浅い柱穴と推定されるピットが1箇所に存在するだけであった。この遺構は、平坦面に規則的に並ぶ柱穴が検出できないとはいえ、建物を構築するために岩盤を削平した造成面と考える。この造成された平坦面には、表土と同じ灰黒色土が堆積していただけで、遺物は出土しなかった。

### **テラス状遺構2（第152図）**

P-11とP-12の中間の南側で検出した遺構である。調査範囲の境界部分に位置するため、南側は調査することができなかった。この遺構は前述したテラス状遺構1と同様に、地形の高い部分の岩盤を平坦に削平した、平面形が「L」字状を呈する低い段が存在するだけである。屈曲部から西方向へ

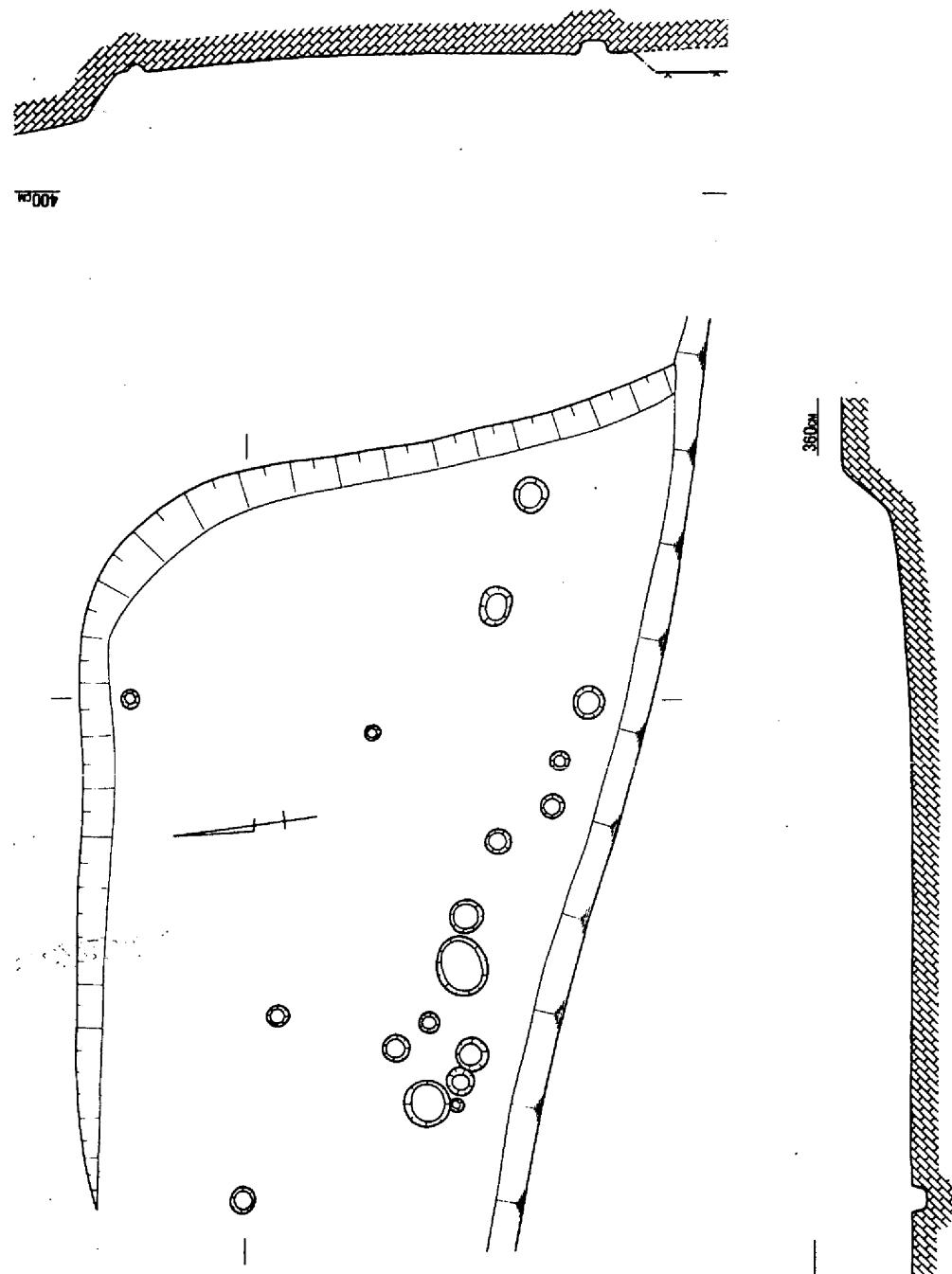


第151図 テラス状遺構 1 ( $\frac{1}{60}$ )

は、約5m50cmまで直線的に段が続いて途切れていた。残存する段の高さは、屈曲部でもっとも高い約40cmを測る。平坦面には大小多数の柱穴と推定されるピットを検出したが、建物にまとまる規則的な配置にはなっていなかった。この遺構も建物を構築するために岩盤を削平した造成面と考える。

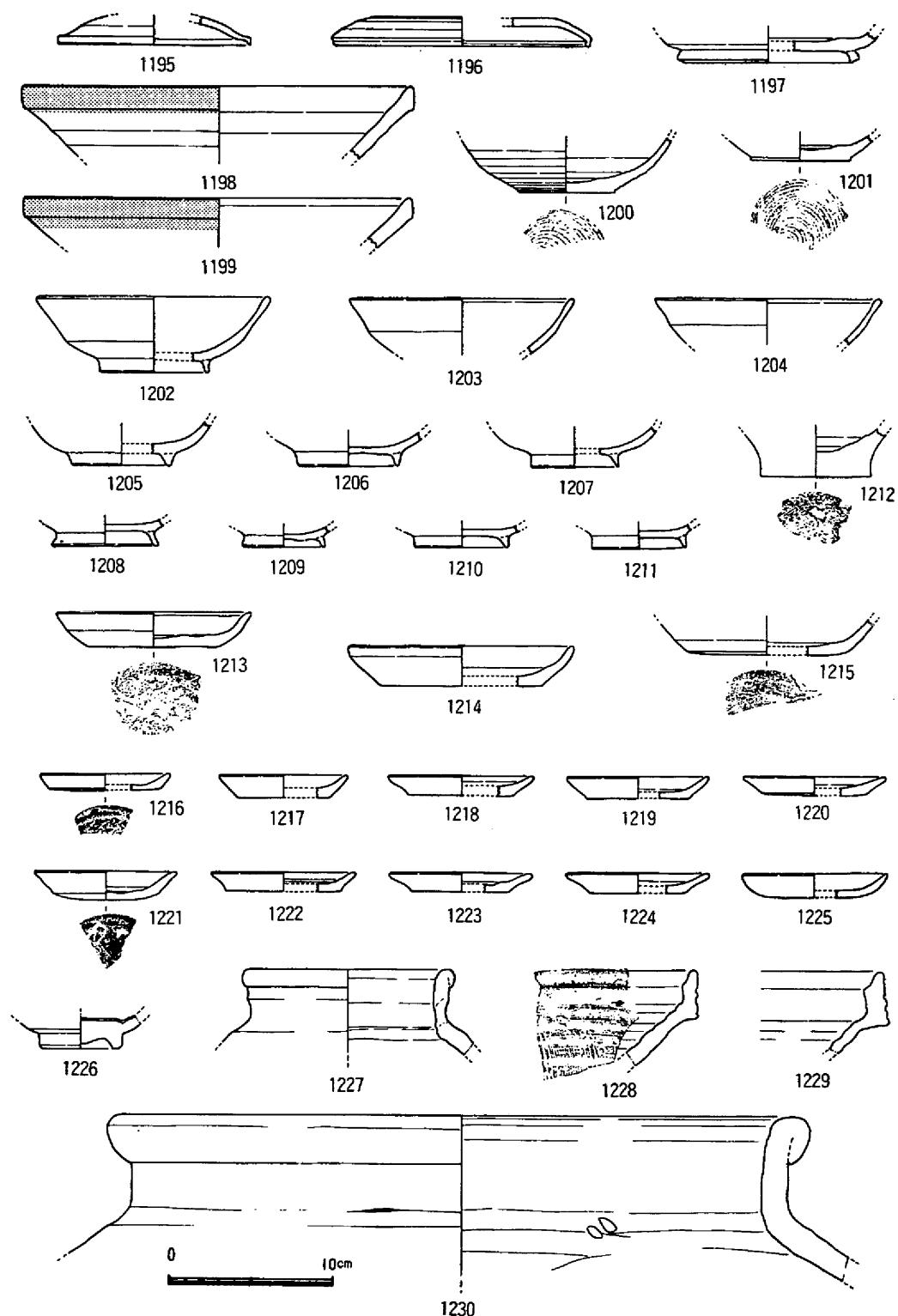
#### B地点の遺構に伴わない遺物（第153図）

B地点は岩盤が露出した丘陵の部分と斜面に位置するため、検出したすべての遺構が岩盤を掘り窪めて構築されていたから、層位的に把握することは不可能であった。また検出した遺構のほとんどが遺物を伴わないこともあって、構築された時期を断定することはできなかった。B地点の遺構に伴わ

第152図 テラス状遺構2 ( $\frac{1}{60}$ )

ない遺物には、奈良時代に属すると推定されるものから江戸時代と思われる備前焼擂鉢の破片まで長期間の各時代の遺物が混在していた。出土した遺物の種類では、鎌倉時代に属すると考えられる高台付椀と小皿の破片が多いから、鎌倉時代に構築された遺構が存在する可能性は極めて強いであろう。

第6章 百間川当麻遺跡



第153図 B地点の遺構に伴わない遺物 ( $\frac{1}{4}$ )

### 3. C 地点 (6区～9区)

C 地点は、丘陵部調査区から南に張り出した低くて頂部の狭い丘陵より西側部分の範囲で、調査区全体の 6 区から 9 区が含まれる（第90図）。発掘調査を実施した時には、雑草の生茂る畠地になっていた。この調査地点は、右岸用水調査区でもっとも遺構の密度が高い部分で、弥生時代後期から現代に至る種々の遺構が複雑に交錯していた。

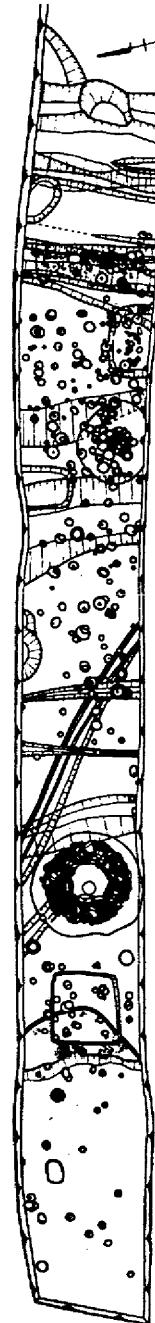
発掘調査は、機械力を導入して表土面から約60cmまでの堆積土を除去した後に、層位順に遺構の検出を行って作業を進行させた。その結果、基本的には 4 面の遺構面が確認され、遺構と共に伴した遺物から推察して、上位より室町時代以降の遺構面、鎌倉時代の遺構面、平安時代・奈良時代の遺構面、古墳時代・弥生時代の遺構面の順になっていた。古墳時代・弥生時代の遺構面の調査が完了した後に、さらに掘り下げを実施したところ、青灰色の粘土の下位に砂層が認められ、遺構や遺物はまったく存在しなかった。

それぞれの遺構面で検出した柱穴と推定される多数の小規模なピットは、底部に板石や柱根が残存したものも確認している（図版57-2）といえ、調査した幅が約 6 m の狭い範囲に限定されたため、建物としてまとめるにはためらいが感じられた。室町時代以降の遺構面と鎌倉時代の遺構面で検出した井戸（井戸 2, 井戸 3）は、調査の過程で 2 台の水中ポンプを投入しても水が処理できないほどの著しい湧水に襲われ、底部の図面作成途中で突然に崩壊してしまい、極めて危険な状態であった。なお丘陵の西側裾部で検出した大溝（D-21）は、備前焼の大甕や擂鉢と混在して多量の埴輪片（第191図～第196図）が出土したので、丘陵部の尾根上にかつて大規模な古墳が存在した可能性が強くなり、丘陵部全体の発掘調査を実施する契機になったのである。

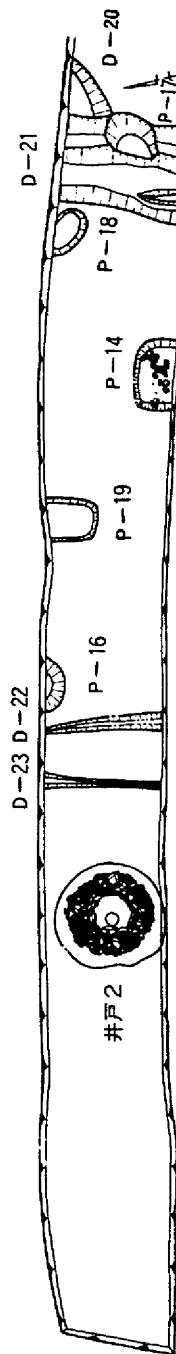
#### 1) 古墳時代・弥生時代の遺構面

この遺構面は、暗黄灰色を呈する粘質土の安定した基盤層の上面に相当するが、部分的にはグライ化が進行した青灰色の粘質土になっていた。検出した遺構としては、柱穴と推定される小規模なピット以外に、溝状遺構 5 (D-11～D-15), 土壙 1 (P-13), 住居址 2 (H-1, H-2) が存在した（第158図）。これらの遺構のうち古墳時代に属するものは、平面形が方形を呈する住居址 (H-2)だけであった。それ以外の遺構は、いずれも弥生時代後期の時期に構築されたと推定される。

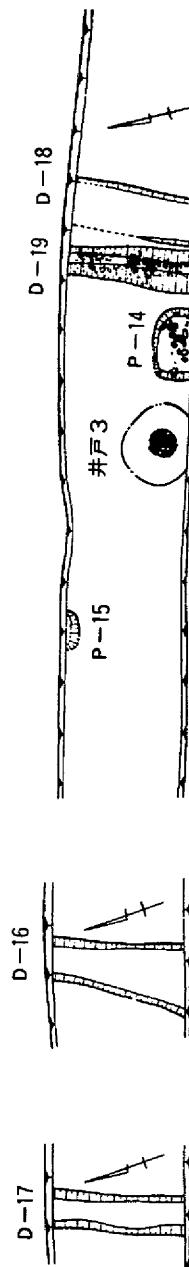
溝状遺構には、調査区とほぼ直交する南北方向に走るもの (D-11, D-12, D-14) と、斜め方向に走るもの (D-13, D-15) とが認められた。いずれの溝状遺構も、後世に構築された井戸や新しい時期の溝状遺構によって部分的に切られていたため、全容を明らかにすることはできなかった。この調査地点の西端で検出した住居址 (H-1) は、西側が著しく削平されていたため、壁体溝と柱穴の一部を検出しただけである。この遺構面で検出した唯一の土壙 (P-13) は、上面を溝状遺構 (D-13) によって削平されていたにもかかわらず、多量の弥生式土器（第167図）が出土した。この弥生式土器は種々の器種が認められ、完形に復原できる個体も存在する一括資料である。



第154図 C地点遺構配置図 ( $\frac{1}{300}$ )

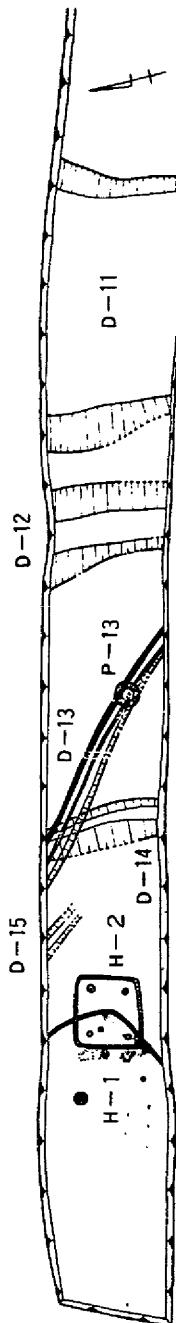


第155図 室町時代以降の遺構配置図 ( $\frac{1}{300}$ )

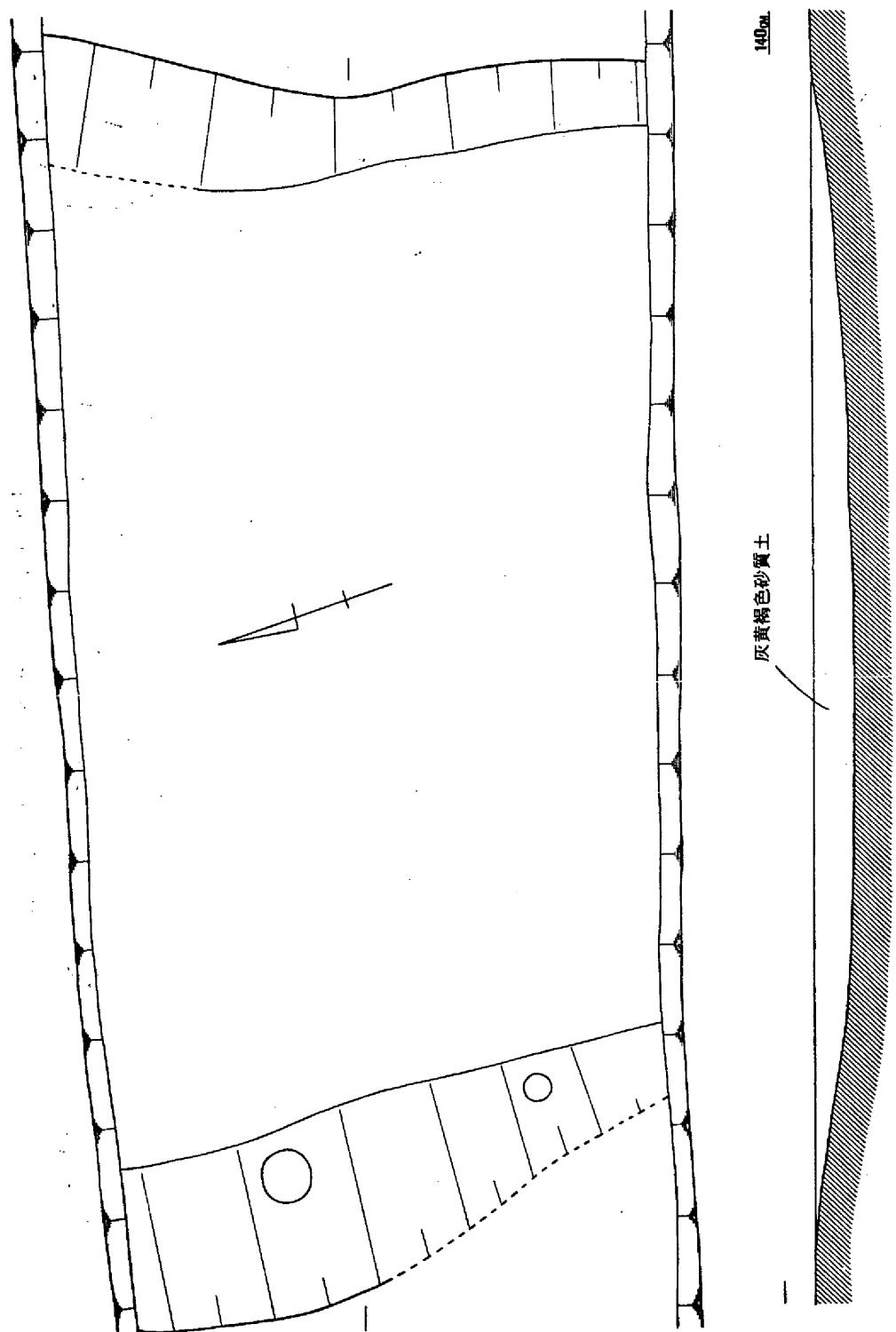


第157図 平安時代・奈良時代の遺構 ( $\frac{1}{300}$ )

第155図 鎌倉時代の遺構配置図 ( $\frac{1}{300}$ )



第158図 古墳時代・弥生時代の遺構配置図 ( $\frac{1}{300}$ )



溝状遺構11（第159図）

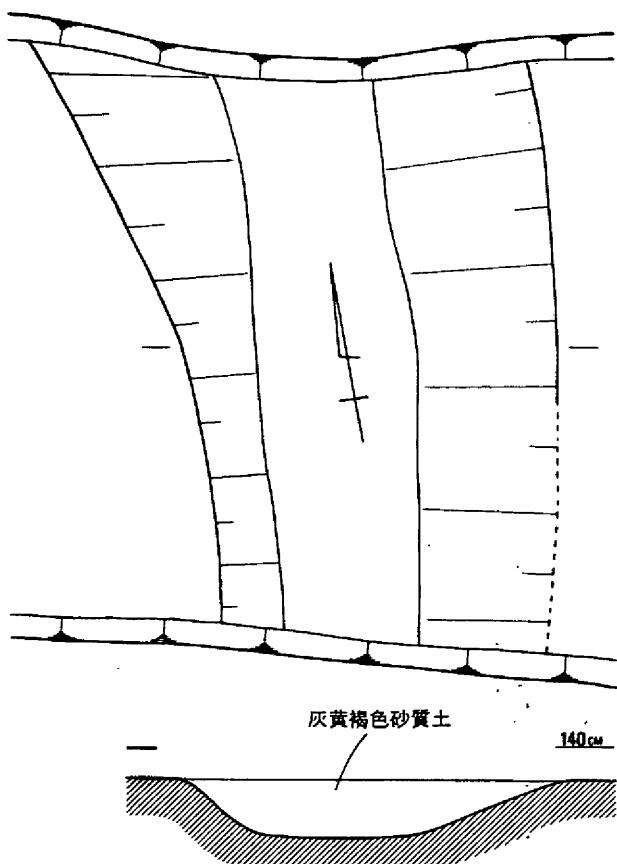
C地点調査区の東側に位置する、丘陵斜面裾部で検出した溝状遺構である。この遺構が存在する上位の遺構面には、後世の新しい溝状遺構や土壌等が複雑に構築されていたため、遺構全体が著しい搅乱を受けていた。この溝状遺構は調査区とほぼ直交する南北方向を示し、北側の幅がわずかに広くなっていた。検出面での最大幅は約11m65cmを測り、もっとも深い地点で約37cmであった。遺構内には灰黄褐色砂質土が認められ、断面は極めて浅い「U」字形を呈していた。遺物としては弥生時代後期に属すると推定される土器片がわずかに出土したが、図化することはできなかった。

溝状遺構12（第160図）

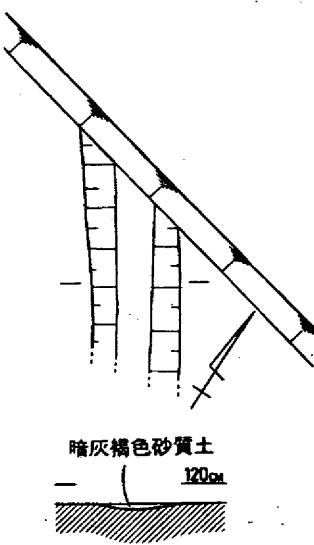
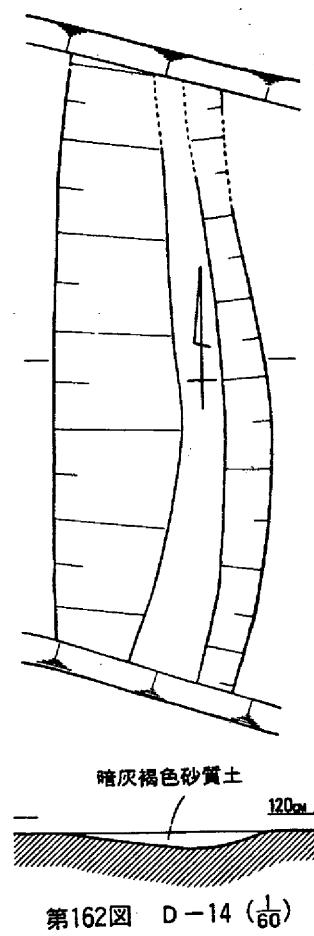
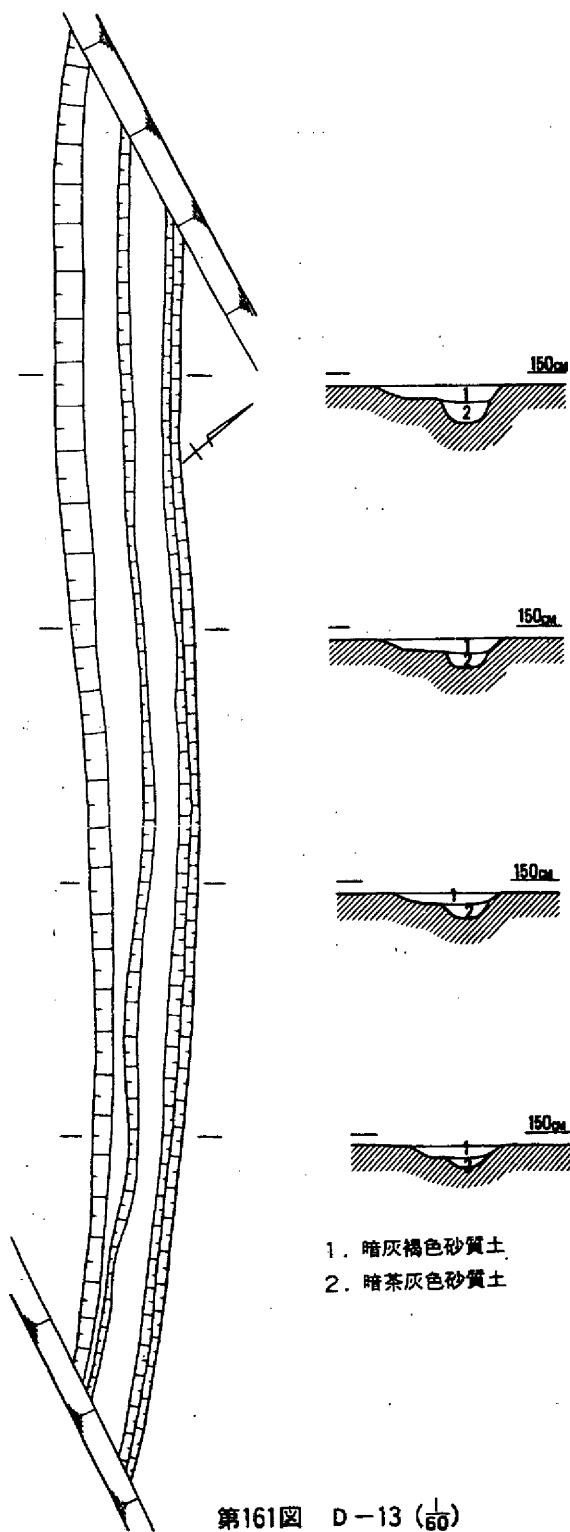
前述したD-11の西側で、7区と8区の境界地点に検出した溝状遺構である。この溝状遺構は、D-11とほぼ平行する南北方向を示し、北側の幅がわずかに広くなっていた。南側に位置する調査範囲の境界地点は、鎌倉時代と推定される素掘りの井戸（井戸3）によって切られていた。検出面での最大幅は約3m70cmを測り、調査範囲外の北側へ移行するにしたがって、幅が広くなっているようである。検出面からの深さはもっとも深い地点で約45cmを測り、断面が浅い「U」字形を呈していた。底部は比較的平坦で、灰黄褐色の砂質土が堆積していた。遺物としては、弥生時代後期に属すると推定される土器片がわずかに出土したが、図化することはできなかった。この溝状遺構は、東側で検出した幅が広くて浅いD-11とあまり時期が異なると考える。

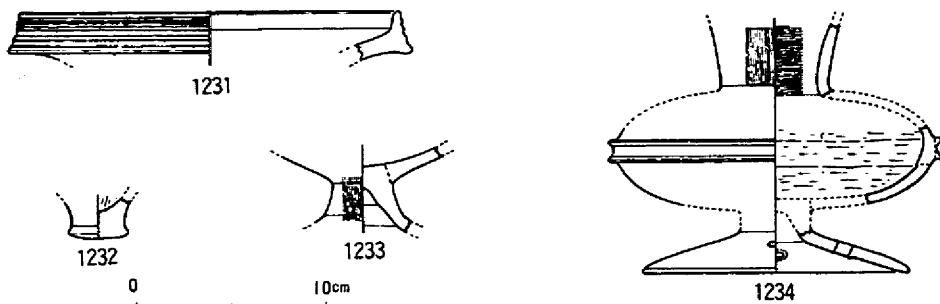
溝状遺構13（第161図）

8区の西側で検出した溝状遺構である。東西に細長い調査区に対して斜め方向を示し、後述する

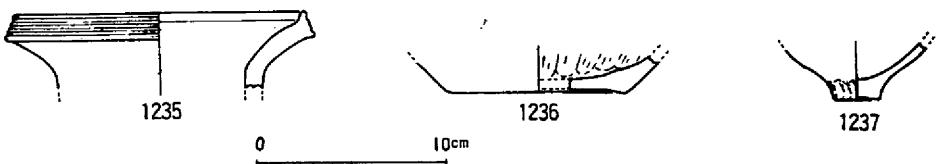


第160図 D-12 (1/60)





第164図 D-13出土遺物 (1/4)



第165図 D-14出土遺物 (1/4)

D-14溝状遺構とP-13土壙を切って存在した。右岸用水計画予定地の発掘調査は、幅の狭い範囲に限定されたため、延長約11mの地点が調査できたのみである。この溝状遺構の内部は2段になっており、断面はいずれも浅い「U」字形を呈していた。遺構内の下層には暗茶灰色砂質土が認められ、弥生時代後期の百間川後期Ⅲの時期に属すると推定される土器片（第164図）が出土した。上層には暗灰褐色砂質土が認められ、百間川後期Ⅳの時期と推定される土器片が出土したが、図化することは不可能であった。この溝状遺構は、百間川後期Ⅲの時期に使用されていたものが、何らかの原因で埋没した後に、再び同じ流路に沿って幅を広めて構築されていたのである。なお底部のレベルは、上層も下層も幅が広くなっている北西方向が低くなっていた。

#### 溝状遺構14（第162図）

8区の西側で検出したほぼ南北方向を示す溝状遺構である。この溝状遺構は、室町時代以降の遺構面で検出した井戸2によって、部分的に著しく削平されていた。また北側部分はD-13溝状遺構と交叉していたが、この遺構がD-13溝状遺構に切られていた。検出面での最大幅は約1m70cmを測り、東側部分が緩やかに彎曲していた。検出面からの深さは、調査した中央部分で約13cmを測り、断面が浅い「U」字形を呈していた。遺構内には暗灰褐色砂質土が認められ、弥生時代後期の百間川後期Ⅱの時期に属すると推定される土器片（第165図）がわずかに出土した。

#### 溝状遺構-15（第162図）

8区と9区の境界地点で検出した溝状遺構である。南東部分は室町時代以降の遺構面で検出した井

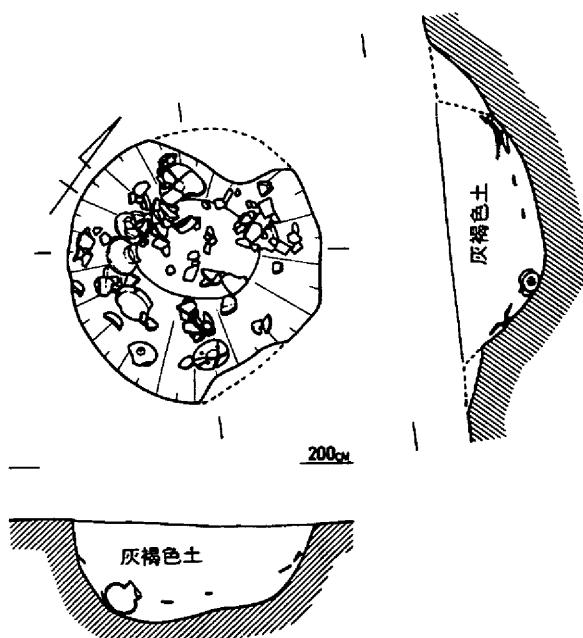
戸2に切られていたため、全容を明らかにすることはできなかった。調査することができたのは、延長約1m50cmの部分だけである。この溝状遺構は、前述したD-13溝状遺構とほぼ平行する方向を示すようである。検出面での幅は約70cmを測り、北西方向へ移行するにしたがってわずかに幅が広くなっていた。検出面からの深さは約5cmと極めて浅く、内部に暗灰褐色砂質土が堆積していた。遺物としては弥生時代後期の百間川後期Ⅲの時期に属すると推定される土器片がわずかに出土したが、図化することはできなかった。

### 土壤13(第166図)

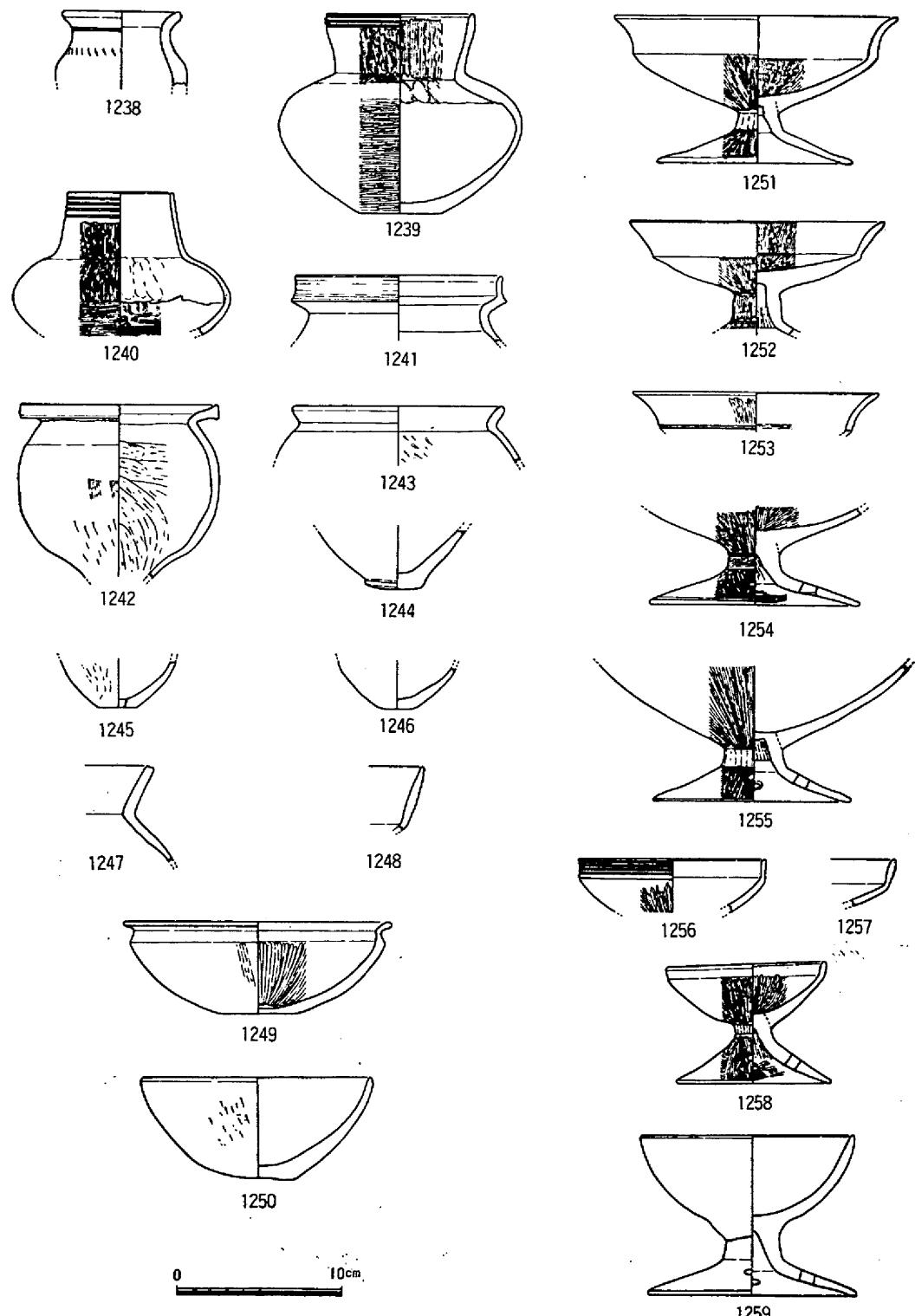
C地点の古墳時代・弥生時代の遺構面で検出した唯一の土壤で、8区のほぼ中央部に存在した。この土壤の上面は、前述したD-13溝状遺構に切られていた。平面形は円に近い歪んだ楕円形を呈し、長径約1m10cm、短径約1m00cmであった。検出面からの深さはもっとも深い地点で約40cmを測り、内部に灰褐色土が認められた。底部は西に寄った地点へ緩やかに傾斜し、断面が「U」字形に近い形態を呈していた。この土壤は規模が極めて小さいにもかかわらず、弥生時代後期の百間川後期Ⅲの時期に属すると推定される多量の弥生式土器(第167図)が出土した。器種には壺、甕、鉢、高杯等が認められ、同一時期の良好な一括資料と考える。

### 住居址1(第168図)

C地点調査区の西端で検出した竪穴住居址である。調査範囲外に遺構が拡張していたのみならず、西側部分が現代の搅乱によって著しく削平されていたため、全容を把握することができなかった。調査で明らかになったのは、壁体溝の一部と2箇所の柱穴である。削平された範囲に楕円形の炭化物を含む小規模な土壤を検出したが、位置関係から推察してこの住居址の中央ピットである可能性が強い。残存する壁体溝の幅は約10cmで、検出面からの深さが約5cmと極めて浅い。検出した壁体溝の形態から推察して、この住居址は円形にも方形にもならない歪んだ大規模な形を呈するであろう。柱穴の径は約18cmで、床面から約30cmの深さに掘り窪められていた。残存する

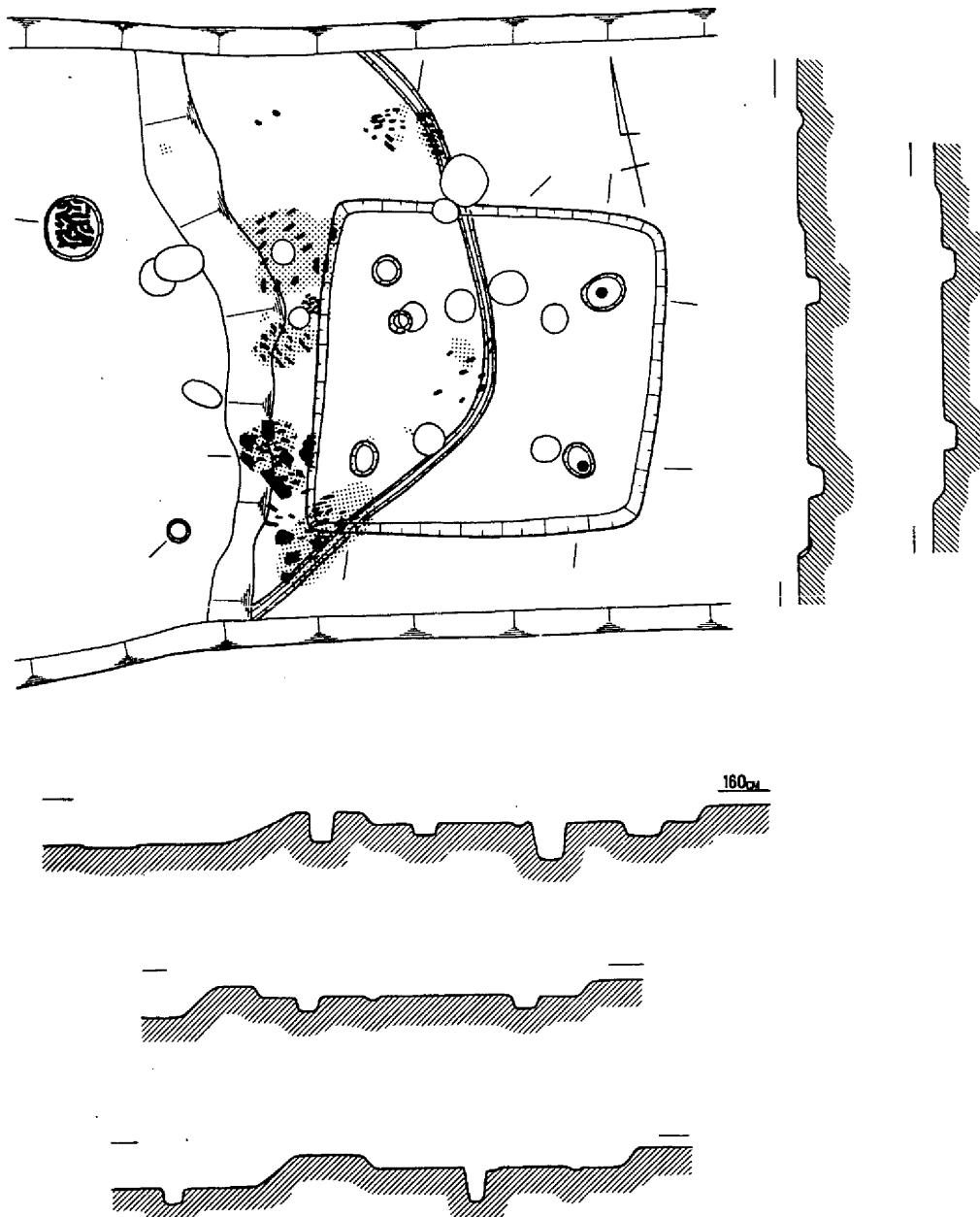


第166図 P-13 (1/30)



第167図 P-13出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )

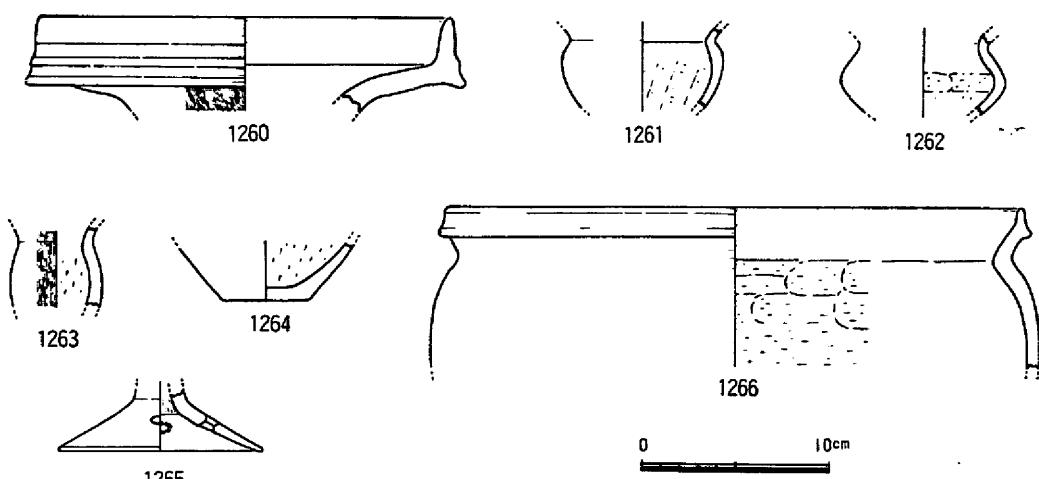
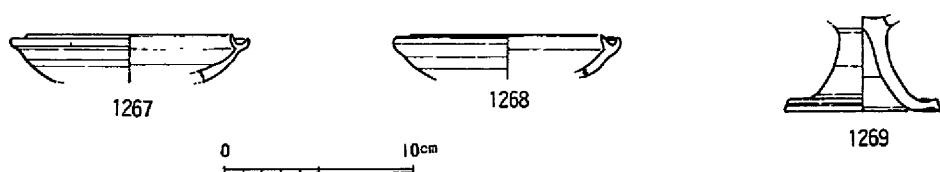
2箇所の柱穴間の距離は約2m50cmで、どちらも柱根や柱の痕跡は認められなかった。床面と壁体溝の上面には炭化物と焼土の散布が認められ、この住居址が火災によって放棄された状態であった。遺物としては弥生時代後期の百間川後期Ⅲの時期に属すると推定される土器片（第169図）がわずかに認められたが、いずれも遺構検出作業の過程に出土した小破片である。

第168図 H-1・H-2 ( $\frac{1}{60}$ )

## 住居址2（第168図）

9区の中央部分にH-1住居址と重複して検出した、4本柱で方形を呈する住居址である。上面が著しく削平されていたため、壁体の高さはもっとも残存状態が良好な地点で床面から約15cmであった。壁体溝は、精査したにもかかわらず検出できなかった。構築された当時から、壁体溝は存在しなかつたのであろう。4箇所の柱穴は、壁体より40cmから50cmほど内側へ寄った地点に存在した。東側で検出した2箇所の柱穴は、直径約8cmの丸太と推定される柱の痕跡が認められた。柱の痕跡が認められた2箇所の柱穴間の距離は約1m45cmで、もっとも柱間が狭くなっていた。柱の痕跡が存在しなかつた2箇所の柱穴間の距離は約1m50cm、東西方向の柱穴間の距離はどちらも約1m80cmであった。柱穴の深さは床面から約15cmと浅く、底部のレベルがほぼ揃っていた。床面全体は水平に構築され、炭化物や焼土は認められなかった。遺物には7世紀前半の時期に属すると推定される須恵器の壺身と高杯脚部（第170図）が出土したが、いずれも小破片である。

なお右岸用水調査区で竪穴住居址を検出したのは、この2軒の住居址が存在した9区だけである。

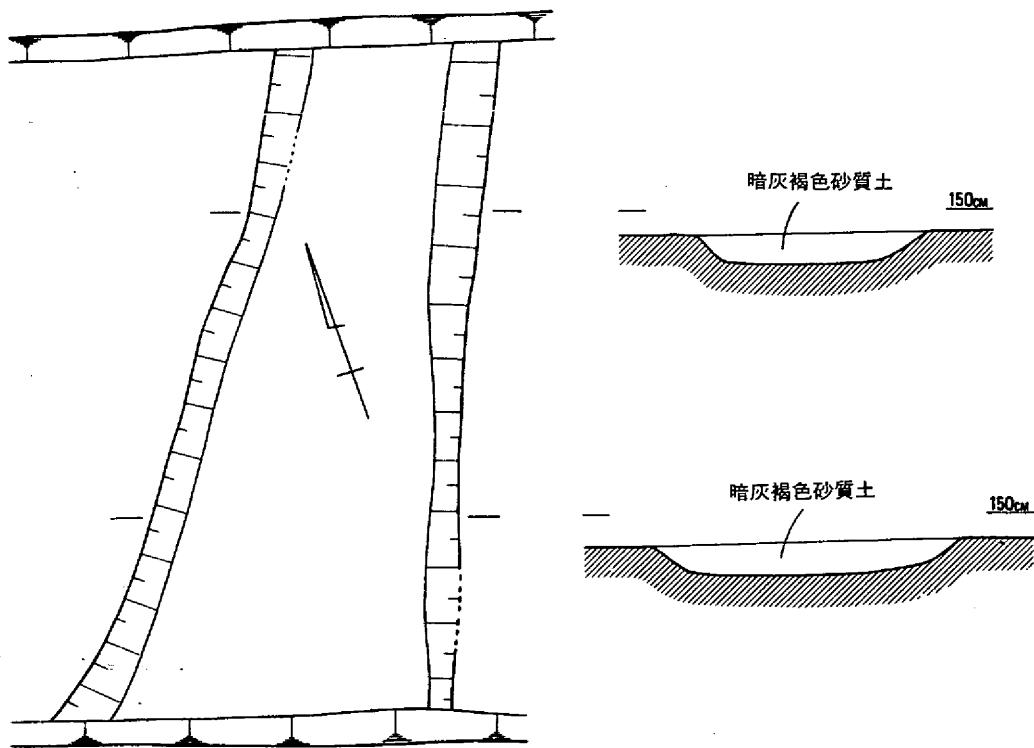
第169図 H-1 出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )第170図 H-2 出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )

## 2) 平安時代・奈良時代の遺構面

この遺構面は、古墳時代と弥生時代の遺構面である暗黃灰色粘質土の上面に堆積した灰褐色を呈する砂質土上で検出したのであるが、遺構が存在するのはC地点の東側に位置する丘陵斜面裾部の7区だけで、西側の8区や9区には遺構のみならず遺物も認められなかった。検出した遺構としては、奈良時代の溝状遺構1(D-16)と平安時代の溝状遺構1(D-17)のみである(第157図)。奈良時代の溝状遺構と平安時代の溝状遺構は重複しており、前者の溝状遺構の幅が狭い状態で後者の溝状遺構を検出したのである。両溝状遺構とも出土遺物が極めて少なく、図化することが不可能な小破片の土器片がわずかに認められただけである。

## 溝状遺構16(第171図)

C地点東端に位置する丘陵斜面裾部の7区で検出した溝状遺構である。この溝状遺構の上面には、平安時代と推定される溝状遺構(D-17)と、鎌倉時代の遺構面で検出した溝状遺構(D-19)が重なって存在した。またこの溝状遺構の下位には、弥生時代後期と推定される幅の広い溝状遺構(D-11)も検出されたから、弥生時代後期より鎌倉時代までの長期間にわたって、同じ流路を示す溝状遺

第171図 D-16 ( $\frac{1}{60}$ )

構が何度も繰返し構築されていたのである。

この溝状遺構の南東側は、平安時代と推定されるD-19溝状遺構に大部分が切られていたため、調査で明らかになったのは西側に位置するわずかな部分だけである。検出面での幅は、北東部分より南西部が広くなっていた。調査範囲の境界での幅は、北東部分が約1m80cm、南西部が約3m20cmであった。検出面からの深さは22cmから25cmを測り、底部のレベルが北東から南西方向へ移行するにしたがって低くなっていた。遺構内には暗灰褐色砂質土が認められ、断面が浅い「U」字形を呈していた。出土遺物は極めて少なく、いずれも図化することが不可能な小破片の土器片であった。形態を知ることができるものとして、須恵器杯蓋の宝珠つまみが存在した。したがってこの溝状遺構の時期は、奈良時代に属すると推定される。

#### 溝状遺構17（第172図）

前述したD-16溝状遺構を切った状態で検出した溝状遺構である。この溝状遺構は、D-16溝状遺構に比して幅が狭くなっていた。南東側の岸は、D-16溝状遺構の岸をそのまま利用していた。検出面での幅は1m45cmから1m55cmを測り、調査した範囲内ではほぼ一定の幅になっていた。底部は全体に南東から北西方向へわずかに傾斜していた。検出面からもっとも深い地点で約28cmを測り、断面が浅い「U」字形

を呈していた。遺

構内の堆積土は、

3層に分離できた。

下層より暗灰色土、

暗茶灰色土、暗灰

褐色土の順である。

出土遺物はいずれ

も小破片の土器片

であるが、遺構の

底部に密着して須

恵器杯身から剥離

したと思われる高

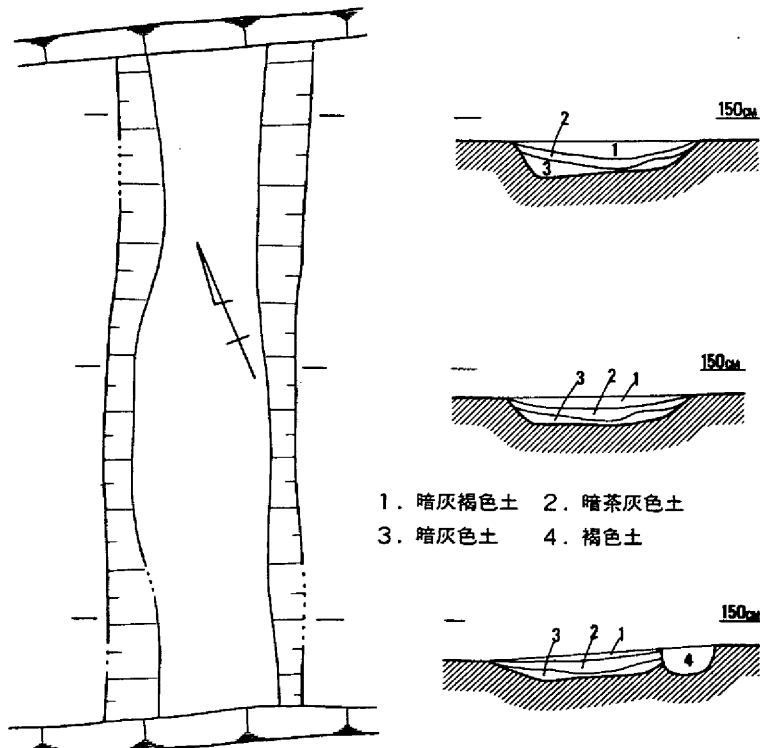
台の小破片が認め

られた。この溝状

遺構の時期は、平

安時代に属すると

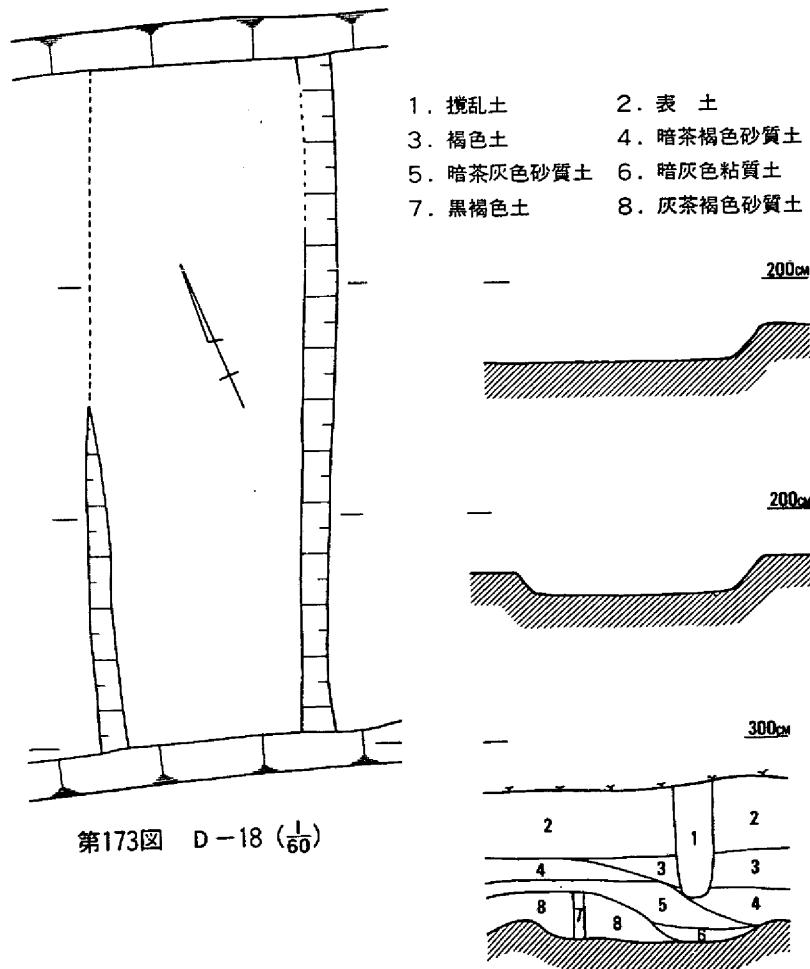
推定される。

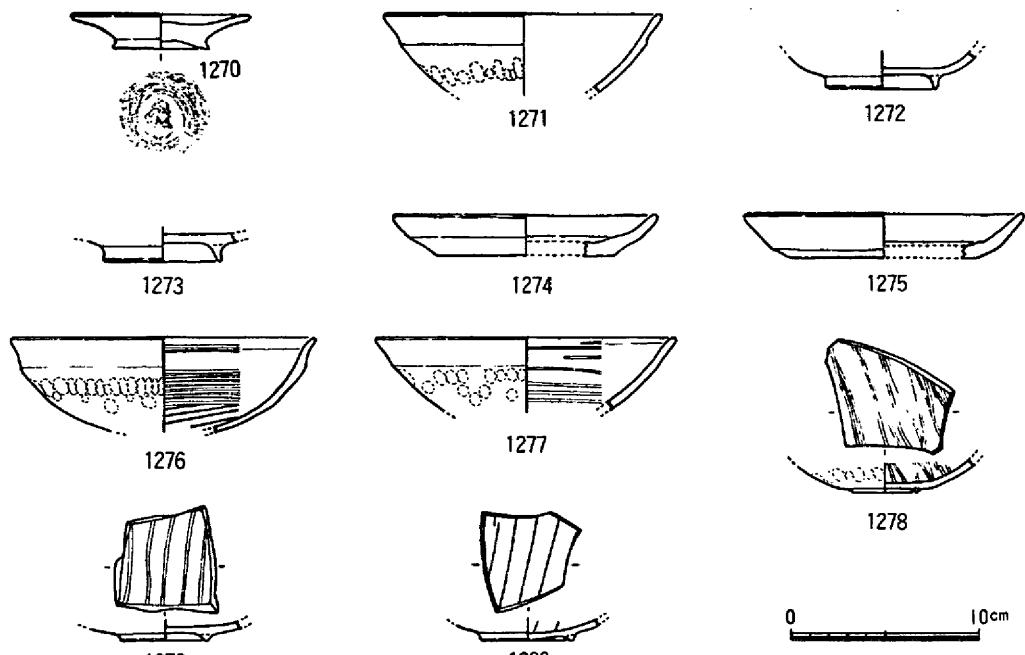


第172図 D-17 (1/60)

## 3) 鎌倉時代の遺構面

この遺構面は、平安時代と奈良時代の遺構面の上位に堆積した灰茶褐色を呈する安定した粘質土上面で検出したのであるが、C地点の西側に位置する9区には遺構が存在しなかった。検出した遺構としては、柱穴と推定される小規模なピット以外に、溝状遺構2(D-18, D-19), 土壙2(P-14, P-15), 素掘りの井戸(井戸3)が存在した(第156図)。2条の溝状遺構は近接した位置に存在し、ほぼ平行した方向を示していた。西側に検出した溝状遺構の底部には、拳大の角礫が数多く認められた。素掘りの井戸の発掘調査では、著しい湧水に襲われ、底部の図面作成途中で突然に壁面が崩壊し、極めて危険な状態であった。この井戸からは、多数の完形品を含む各種類の多数の土器と竹製の笛が出土した。多数の土器を観察した結果、それぞれの器種で口径や器高の計測値がほとんど揃っているのみならず、成形技法や色調も同じであるから、良好な一括資料と考える。





第174図 D-18出土遺物 (1/4)

## 溝状遺構18（第173図）

C地点の東端に位置する、丘陵斜面裾部で検出した溝状遺構である。調査範囲の北東に面した境界地点は、室町時代以降の遺構面で検出した土壙（P-18）に切られていた。西側の岸は、精査したにもかかわらず調査範囲の中央部から北東方向が検出できなかった。検出面での幅は1m85cmから1m90cmを測り、ほぼ同じ幅になっていた。検出面からの深さはもっとも深い地点で約30cmを測り、断面が浅い「U」字形を呈していた。底部は平坦で水平な面になっていた。この溝状遺構の内部には、灰茶褐色砂質土の上面に東側の岸に沿って暗灰色粘質土と暗茶灰色砂質土が堆積していた。したがってこの溝状遺構は、両端の岸までの幅全体に使用されていたのが、何らかの原因で幅が狭くなり、東側の岸に寄った部分に流路が変化していると考えられた。出土遺物（第174図）としては、小皿、高台付椀、皿、瓦器椀が認められた。小皿は両側の岸に密着した状態で灰茶褐色砂質土内から出土したのであるが、ほかの出土遺物に比してやや時期の古いものと考える。この溝状遺構は、出土遺物から推察して鎌倉時代に属するであろう。

なおこの溝状遺構の東側には、近接した位置に幅が広くて深い別の溝状遺構（D-21）を検出している。丘陵斜面裾部を著しく削平したもので、東側の岸には岩盤が露出していた。出土遺物（第191図～第202図）としては埴輪片が多く混在していたものの、室町時代に属すると推定されるものがほほとんどで、鎌倉時代の遺物は極めて少なかった。ところが調査した結果によると、このD-21溝状

遺構は鎌倉時代と推定されるD-18溝状遺構と同時期にも存在していたことが推察された。またD-18溝状遺構の両側に近接して検出したD-19溝状遺構も、出土遺物から推定して鎌倉時代の時期に属すると考えられるから、丘陵斜面裾部の限られた地点に、同時期の3条の溝状遺構が並行して存在したことになる。

#### 溝状遺構19（第175図）

D-18溝状遺構の西側に近接して検出した溝状遺構である。この溝状遺構の特徴は、底部に拳大から人頭大の角礫が数多く認められたことである。検出面での幅は、調査範囲の境界に位置する北東側で約1m15cm、南西側が約1m78cmを測り、北東から南西方向へ移行するにしたがって低くなっている。溝内には淡緑灰色砂質土が認められ、多数の角礫が混在していた。この多数の角礫は、底部に密着していたものも存在したが、底部より浮いた状態のものも多い。溝内の底部には、室町時代以降の遺構面から掘り廻めら

れた柱穴状の小規模な

ピットが認められた。

この溝状遺構の断面

は、浅い「U」字形を

呈していた。出土遺物

（第176図～第178図）と

しては、土鍋、高台付

椀、皿、小皿、瓦器椀、

瓦器小皿、平瓦等の破

片以外に、白磁の四耳

壺（第178図1363）と推

定されるものや椀（第

178図1364～1368）の

小破片も存在した。こ

れらの遺物は、溝内の

淡緑灰色砂質土に認め

られた多数の角礫と混

在しており、あたかも

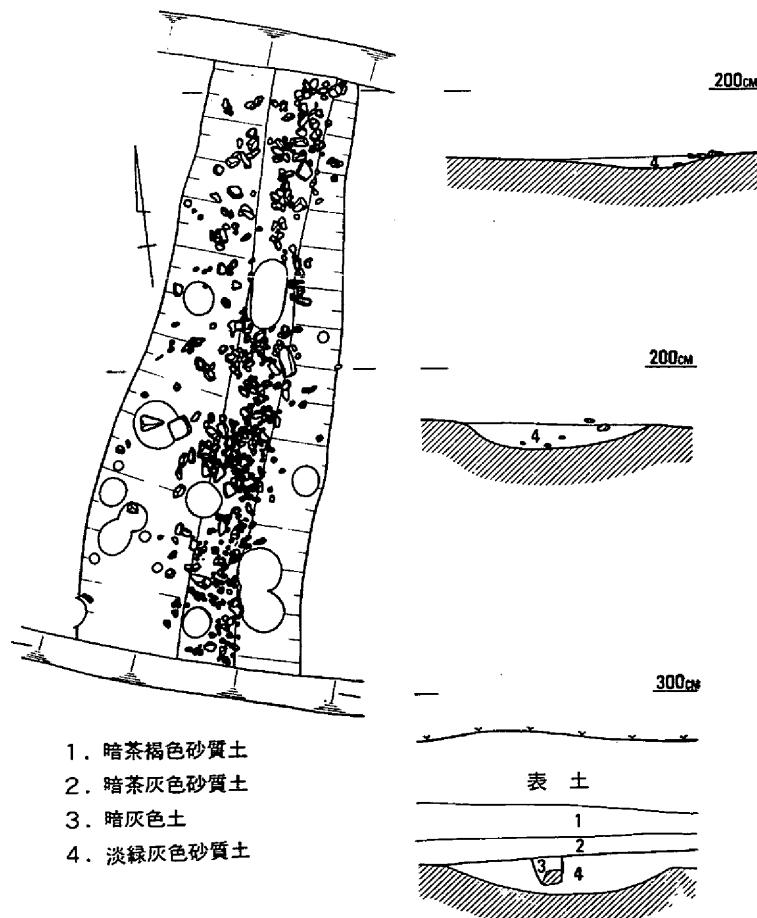
流された状態で出土し

たのである。この溝状

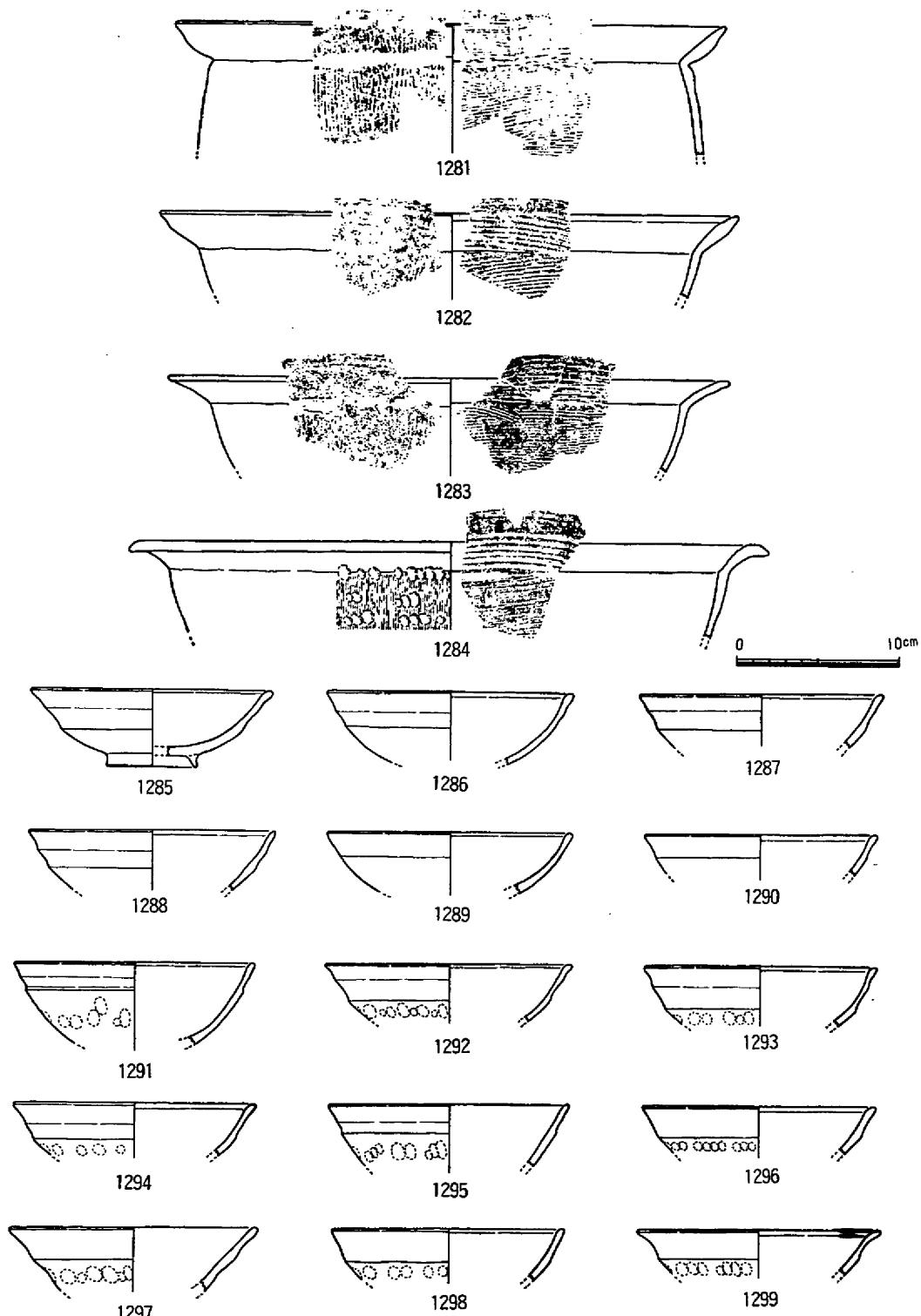
遺構の時期は、出土遺

物から推定して鎌倉時

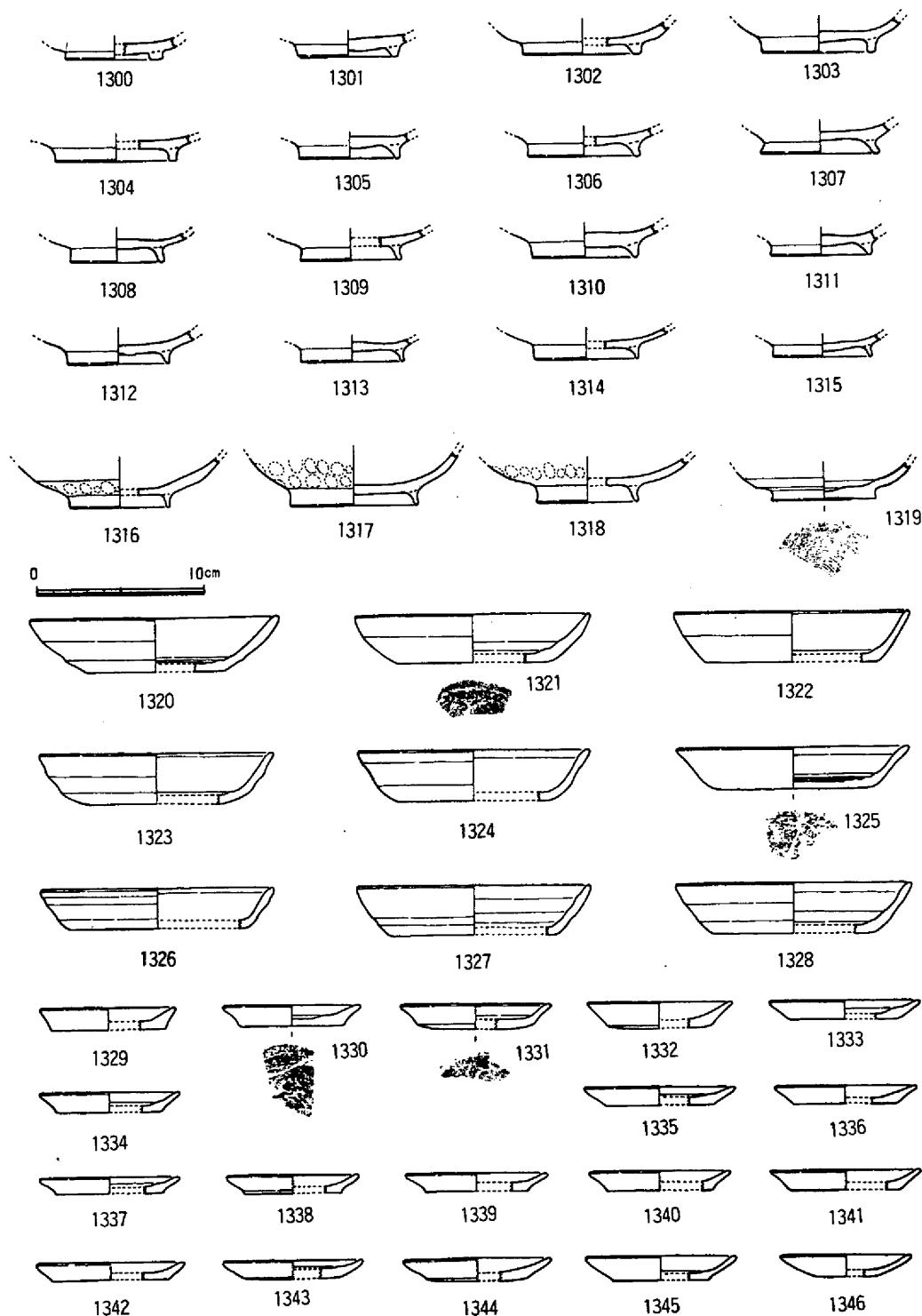
代に属するであろう。



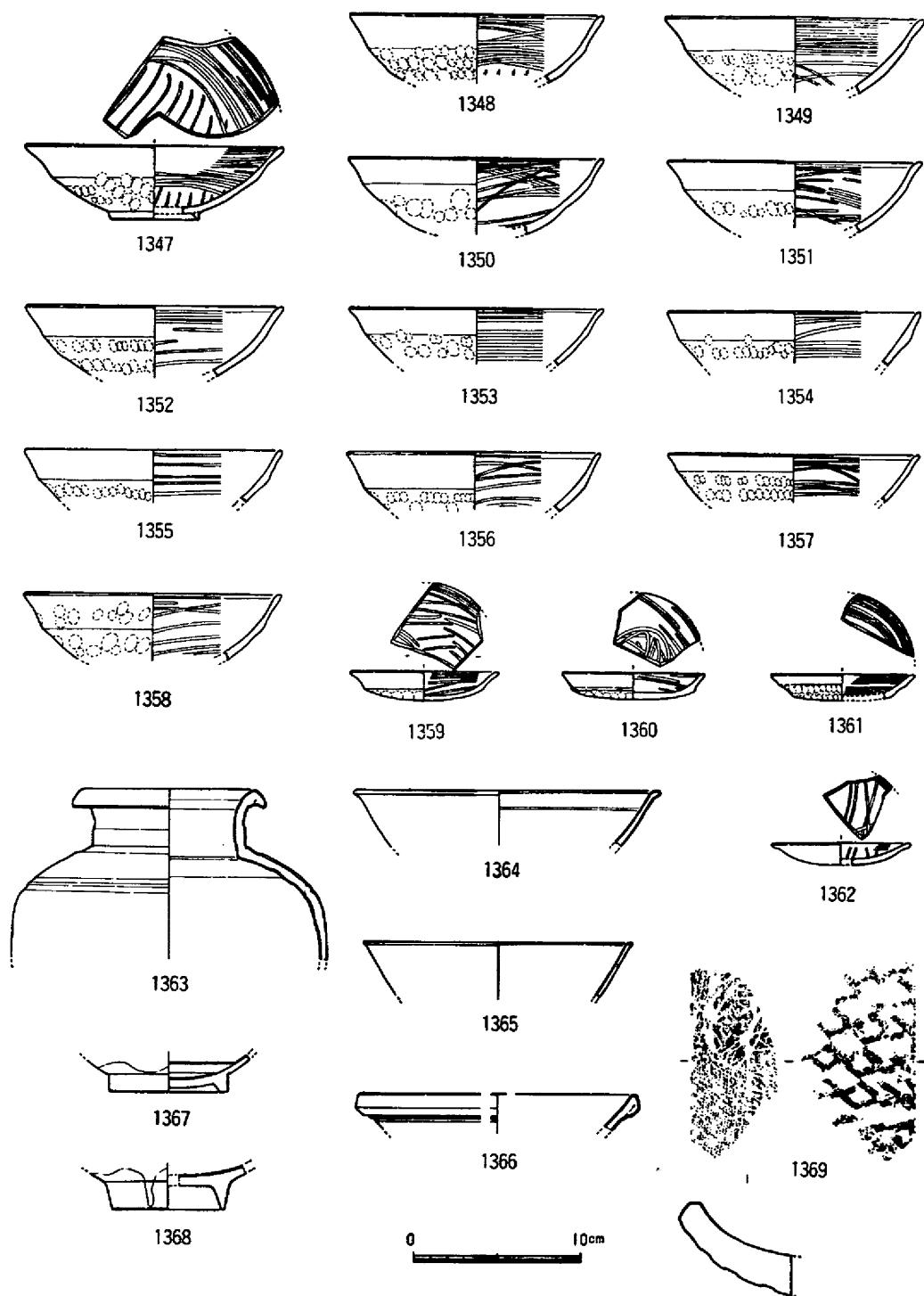
第175図 D-19 ( $\frac{1}{60}$ )



第176図 D-19出土遺物（1）(1/4)



第177図 D-19出土遺物(2) (1/4)

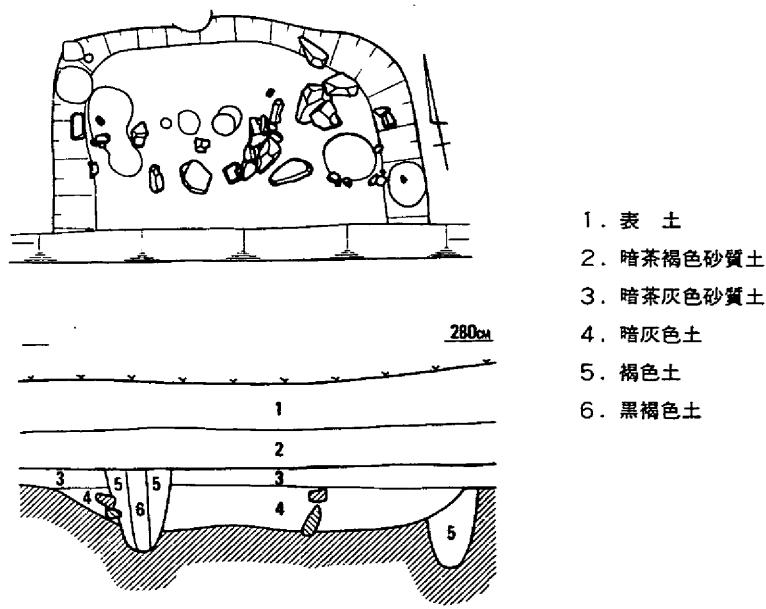


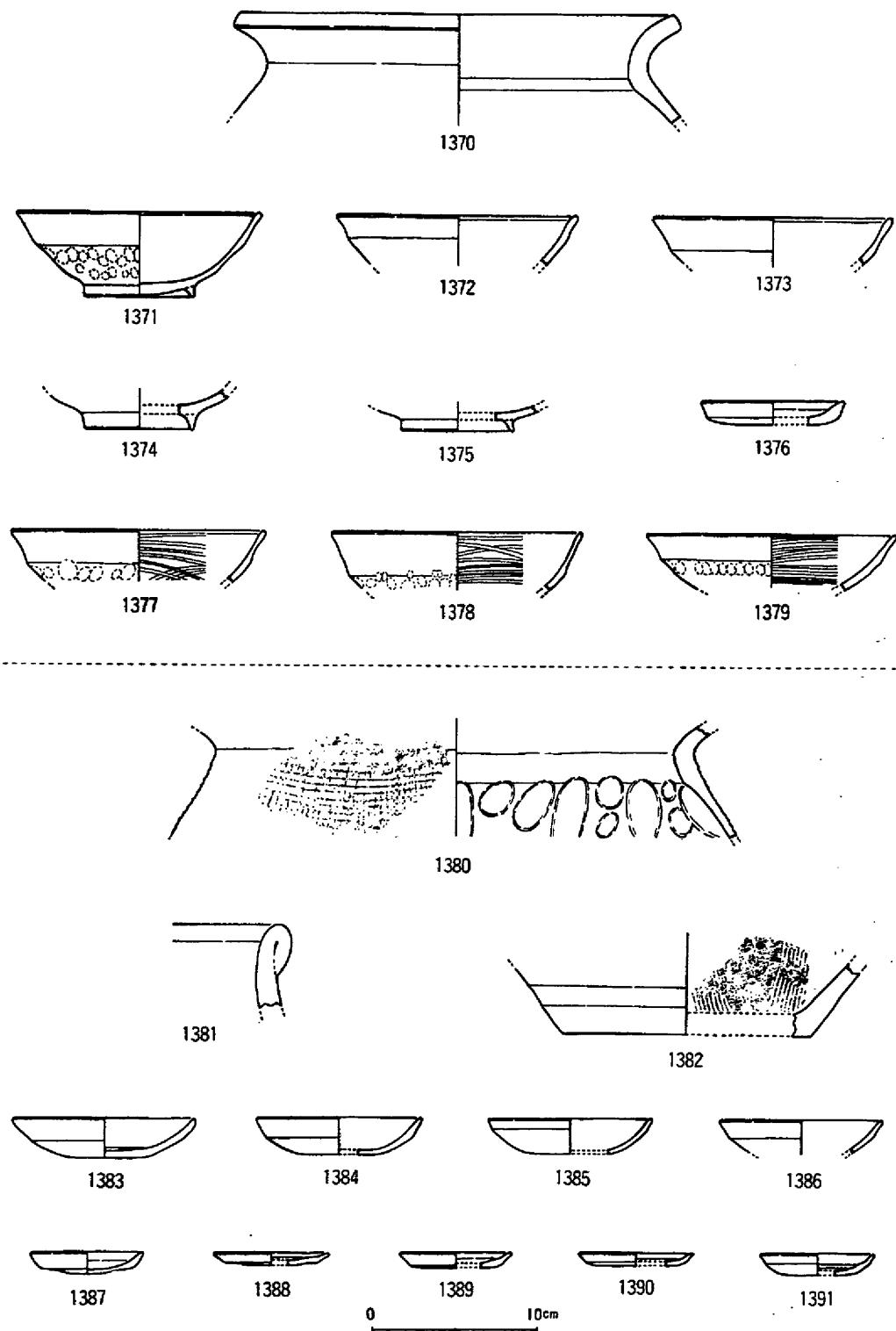
第178図 D-19出土遺物(3) (1/4)

## 土壤14（第179図）

D-19溝状遺構と井戸3の中間地点で検出した土壤である。南側部分は調査範囲外になるため、調査することができなかった。この土壤の平面形は、隅丸方形または隅丸長方形を呈するであろう。調査範囲境界地点の検出面での幅は約3m10cmを測り、調査範囲外の部分がわずかに広くなっているようである。この土壤の底部には、室町時代の遺構面と推定される暗茶灰色砂質土の上面から掘り窪められた柱穴状の小規模なピットや、この土壤が構築される以前の柱穴状の小規模なピットが認められた。検出面からの深さは30cmから35cmを測り、断面が浅い「U」字形を呈していた。土壤の底部には暗灰色土が堆積しており、拳大から人頭大の角礫が数多く認められた。これらの角礫には、底部に密着しているものと底部より浮いた状態のものとが存在した。土壤内に堆積した暗灰色土は、底部に近い下層は粘質土になっていたが、上層には細かい砂質土が混入しており、厳密に分離すれば暗灰色粘質土と砂粒を含む暗灰色土が堆積していたのである。

土壤内の遺物（第180図）には、下層の暗灰色粘質土から底部に密着している状態で出土したもの（1370～1379）と、上層の砂粒を含む暗灰色土から底部より浮いた状態で出土したもの（1380～1391）に分離された。前者の遺物には、須恵器に酷似した胎土を有する甕、高台付椀、小皿、瓦器椀等の破片が認められた。後者の遺物には、外面に格子目の叩きを有する龜山焼と推定される甕、備前焼の大甕や擂鉢、口径と器高が比較的大きな小皿、口径と器高が小さい小皿等の破片が存在した。前者の出土遺物は、鎌倉時代に属するであろう。後者の出土遺物は、室町時代に属すると推定される。したがってこの土壤は、鎌倉時代から室町時代にかけて使用されていた可能性が強い。

第179図 P-14 ( $\frac{1}{60}$ )



第180図 P-14出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )

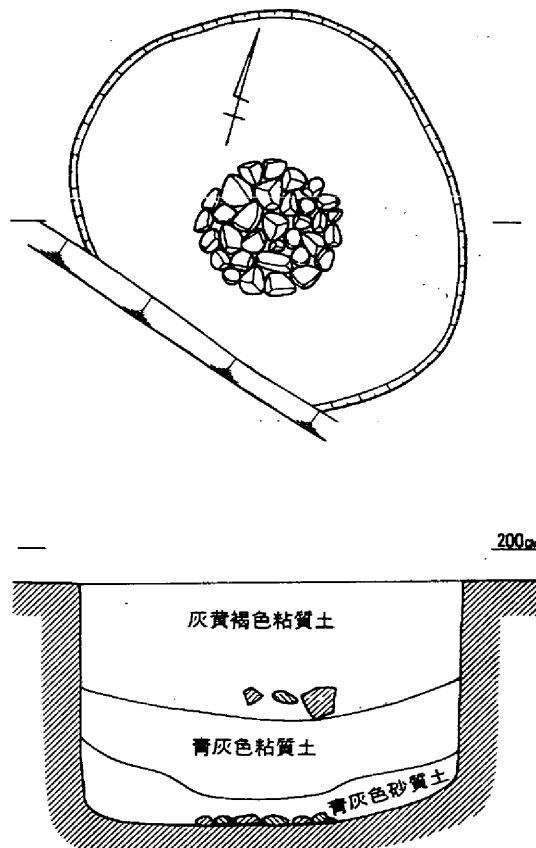
## 井戸 3 (第181図)

7区と8区の境界地点に位置する、P-14土壌の西側で検出した素掘りの井戸である。南側部分は調査範囲外になるため、調査することができなかった。この素掘りの井戸の調査では、2台の水中ポンプを投入しても水の処理ができないほどの著しい湧水に襲われ、底部の凹面作成途中で突然に周囲の壁面が崩壊してしまい、極めて危険な状態であった。このような調査作業であったから、遺物の出土状況の実測図作成や底部の状況写真撮影は、努力したにもかかわらずできなかった。底部で検出した遺物は、水中から手探りで取り上げなければならなかったのである。

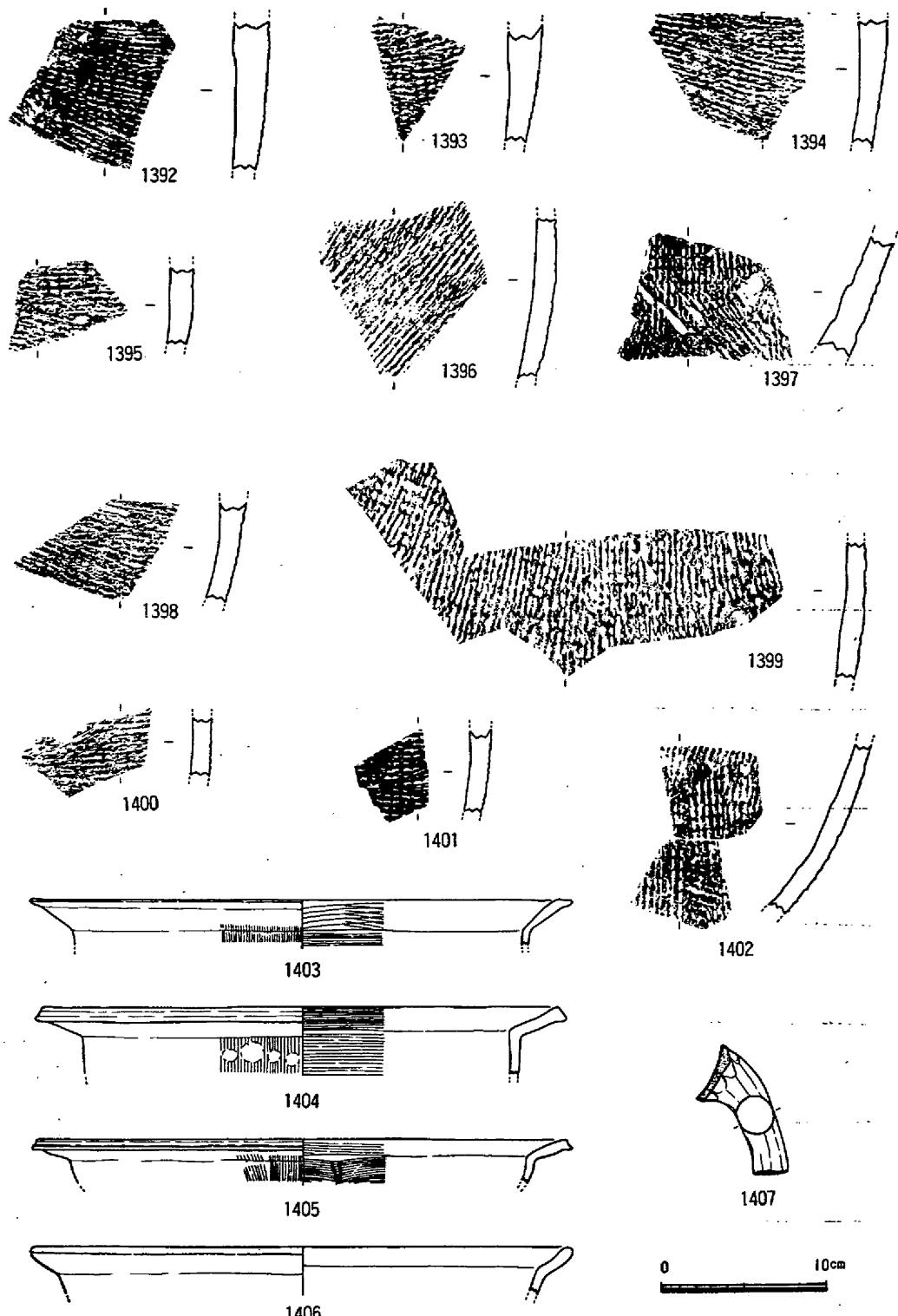
この井戸の平面形は長径約3m40cm、短径約2m90cmを測る橢円形に近い形態になっていた。検出面からの深さは約1m95cmで、ほぼ垂直に砂質土の湧水面まで掘り窪められていた。底部中央の直径約1m10cmの範囲には、拳大よりやや大きな玉砂利が並べた状態で存在した。井戸の内部には、底部に近い部分に青灰色砂質土が認められ、その上位に青灰色粘質土と灰黄褐色粘質土が堆積していた。この青灰色粘質土と灰黄褐色粘質土は、本来は同じ土質のものであったが、湧水の滲透した度合の違いによって色調が変化していたのである。

上層の灰黄褐色粘質土内には、人頭大よりやや大きな角礫が3個も存在したが、この素掘りの井戸に伴うものではない。底部に近い部分に堆積した青灰色砂質土内には、薄くて彎曲した小破片の板材が数多く認められたから、底部中央の玉砂利を並べた地点に曲物の井筒が納められていた可能性が強い。

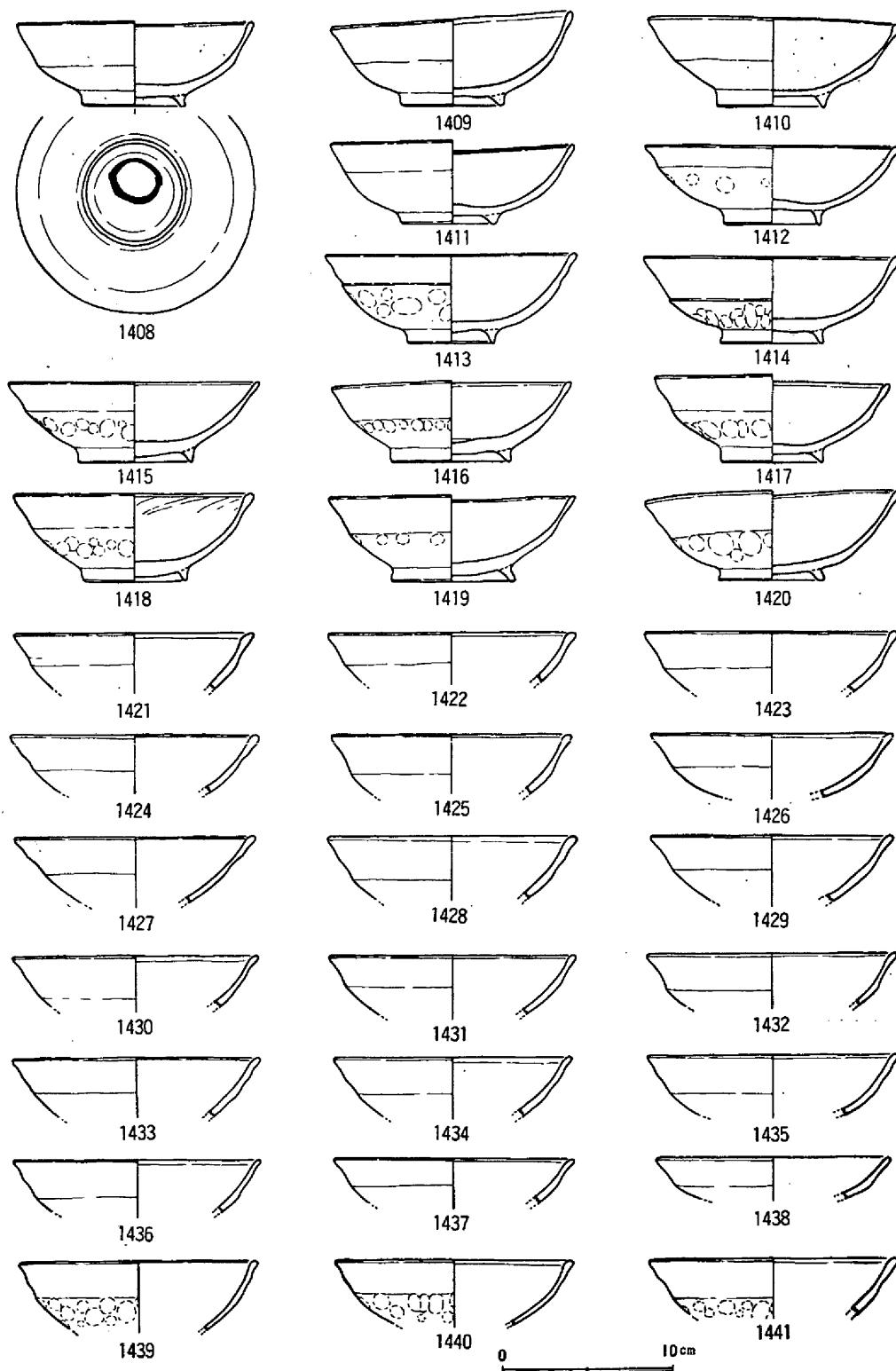
この素掘りの井戸から出土した遺物（第182図～第188図）には、土器以外に竹製の横笛（1620）が存在した。土器には完形品が多く含まれていただけでなく、個体数が極めて多量で、土器の種類も10種に及んでいた。接合が可能であった遺物を検討した結果、底部に近い青灰色砂質土内から出土した破片と、上層の灰黄褐色粘質土内のものが、器表面の色調が著しく異なるとはいえ、同一個体に復原できたものも認められた。器種別に各遺物を観察すれば、口径や器高の計測値がほとんど同じであるばかりか、胎土や色調のみならず成形手法の特徴



第181図 井戸3 (1/60)

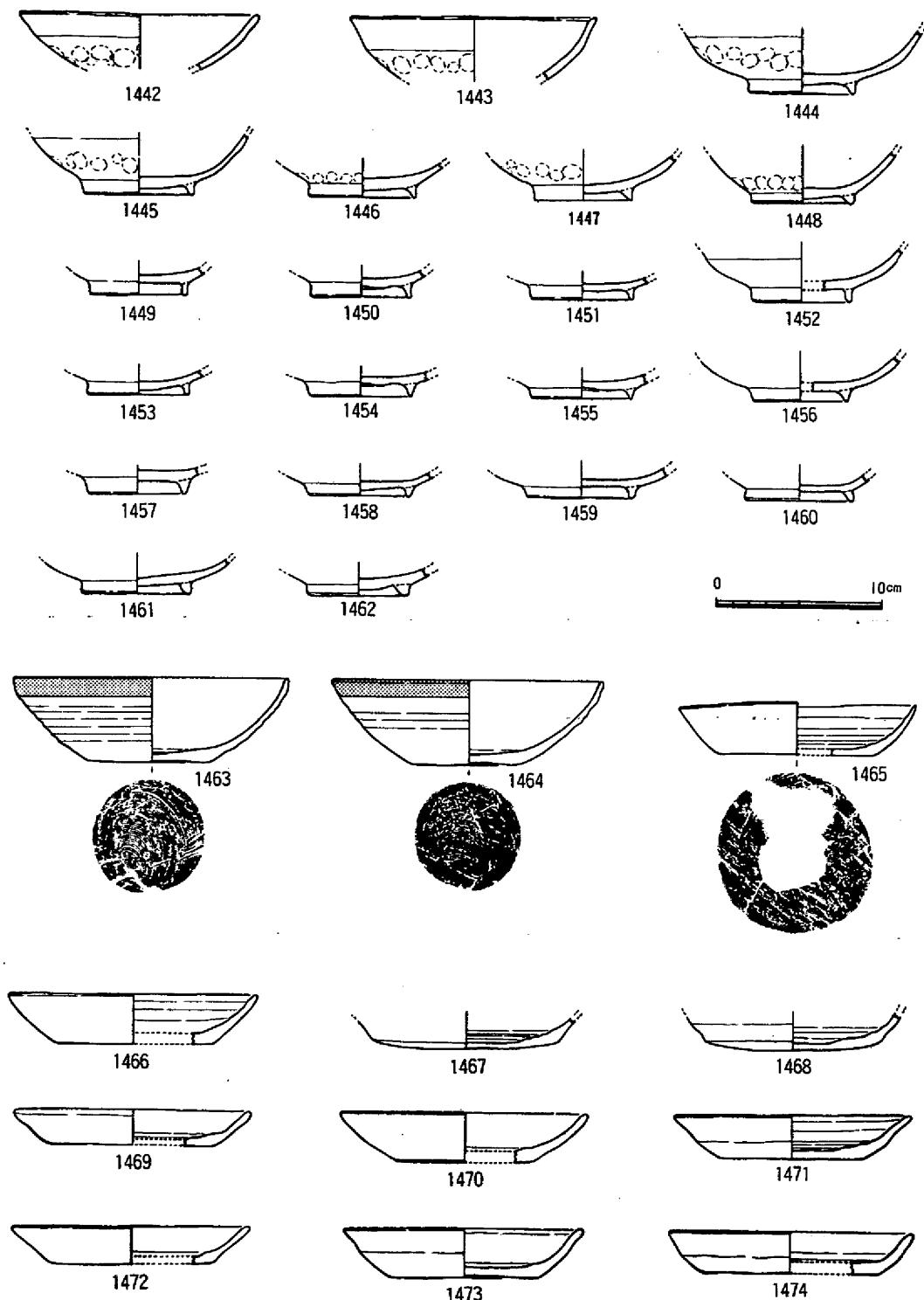


第182図 井戸3出土遺物(1) (1/4)

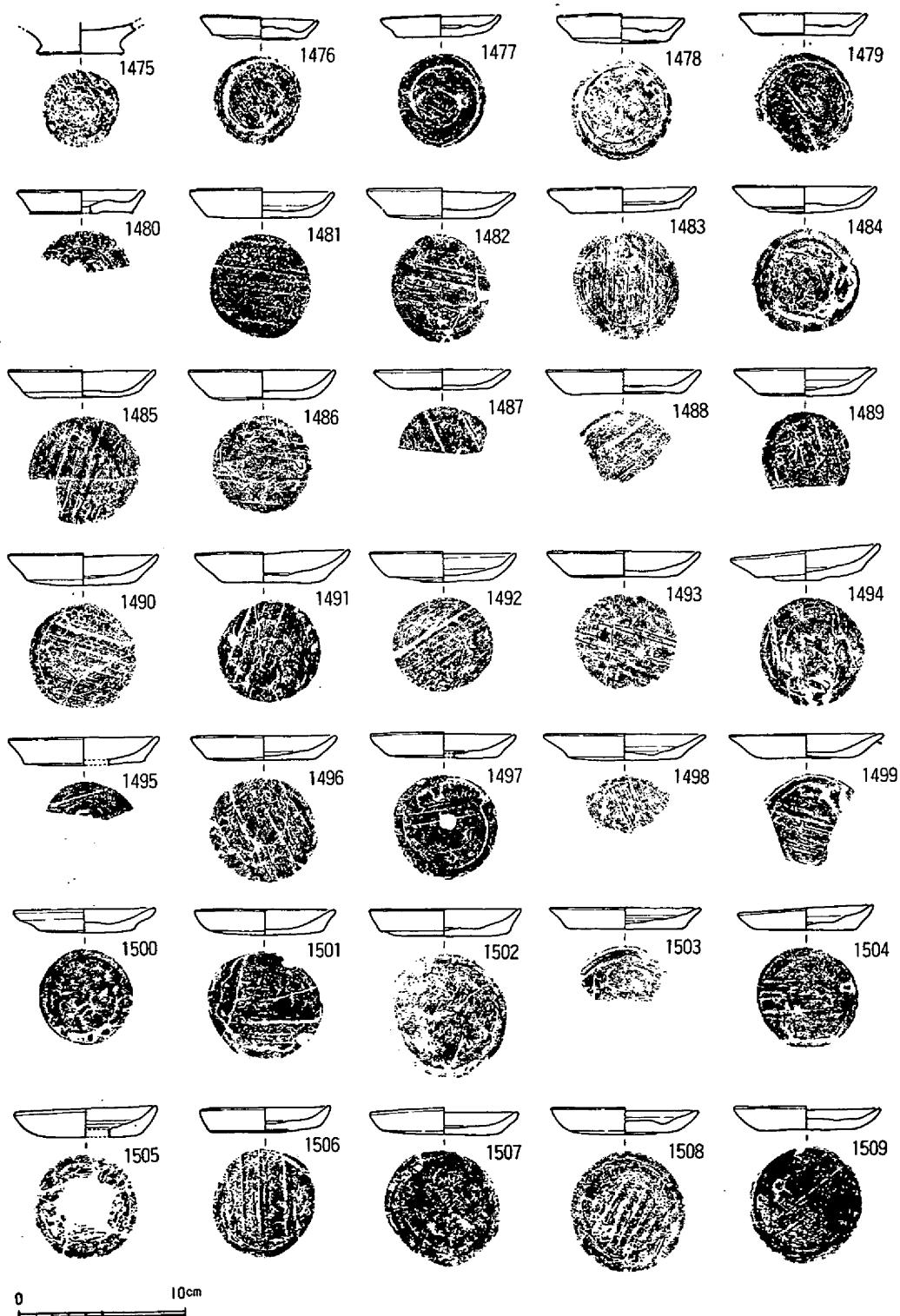


第183図 井戸3出土遺物 (2) ( $\frac{1}{4}$ )

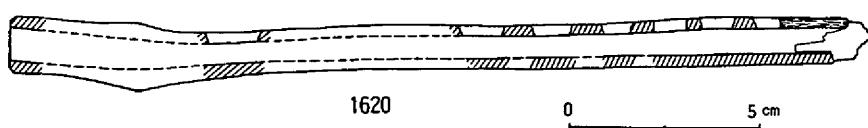
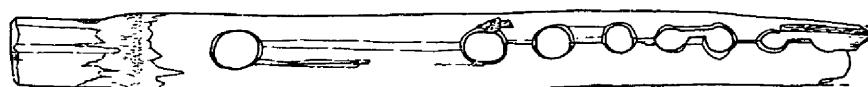
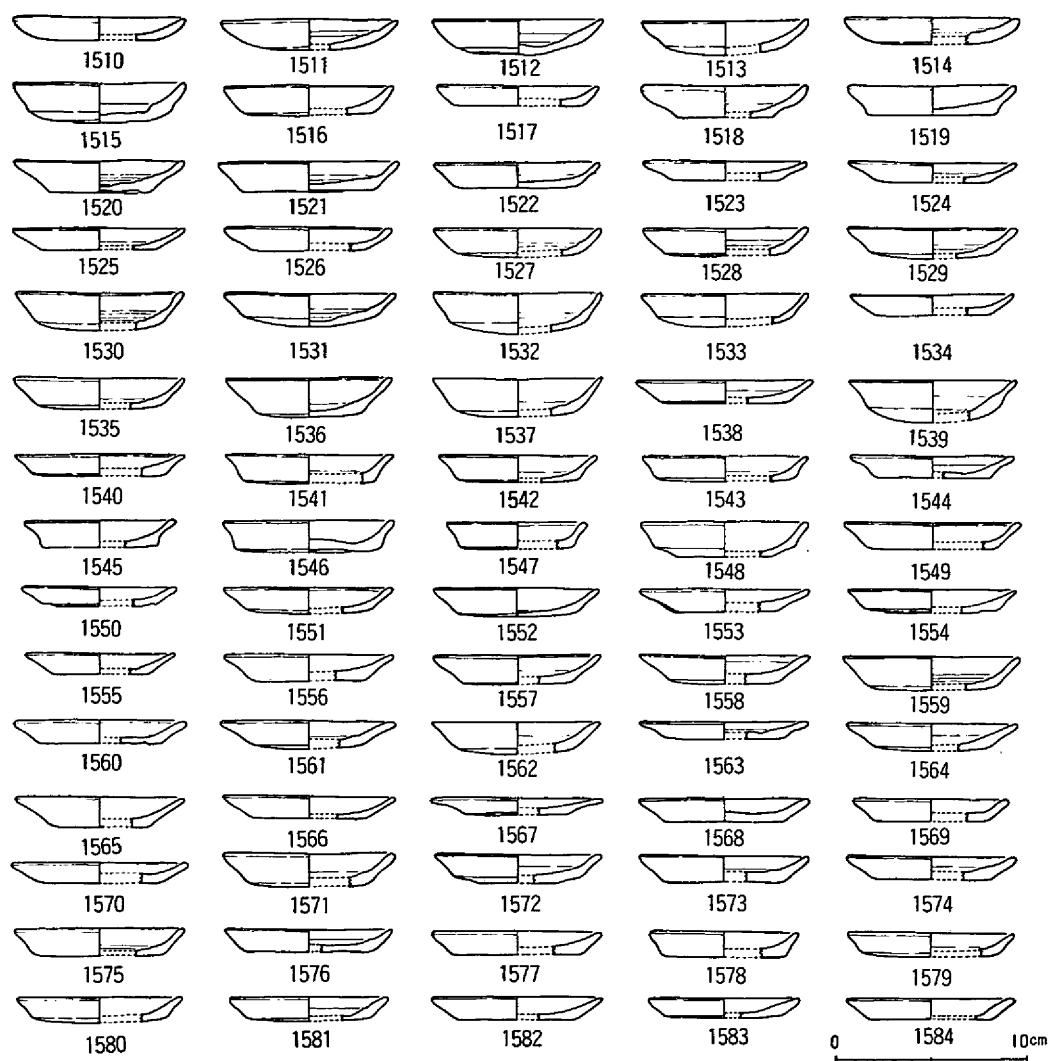
第6章 百間川当麻遺跡



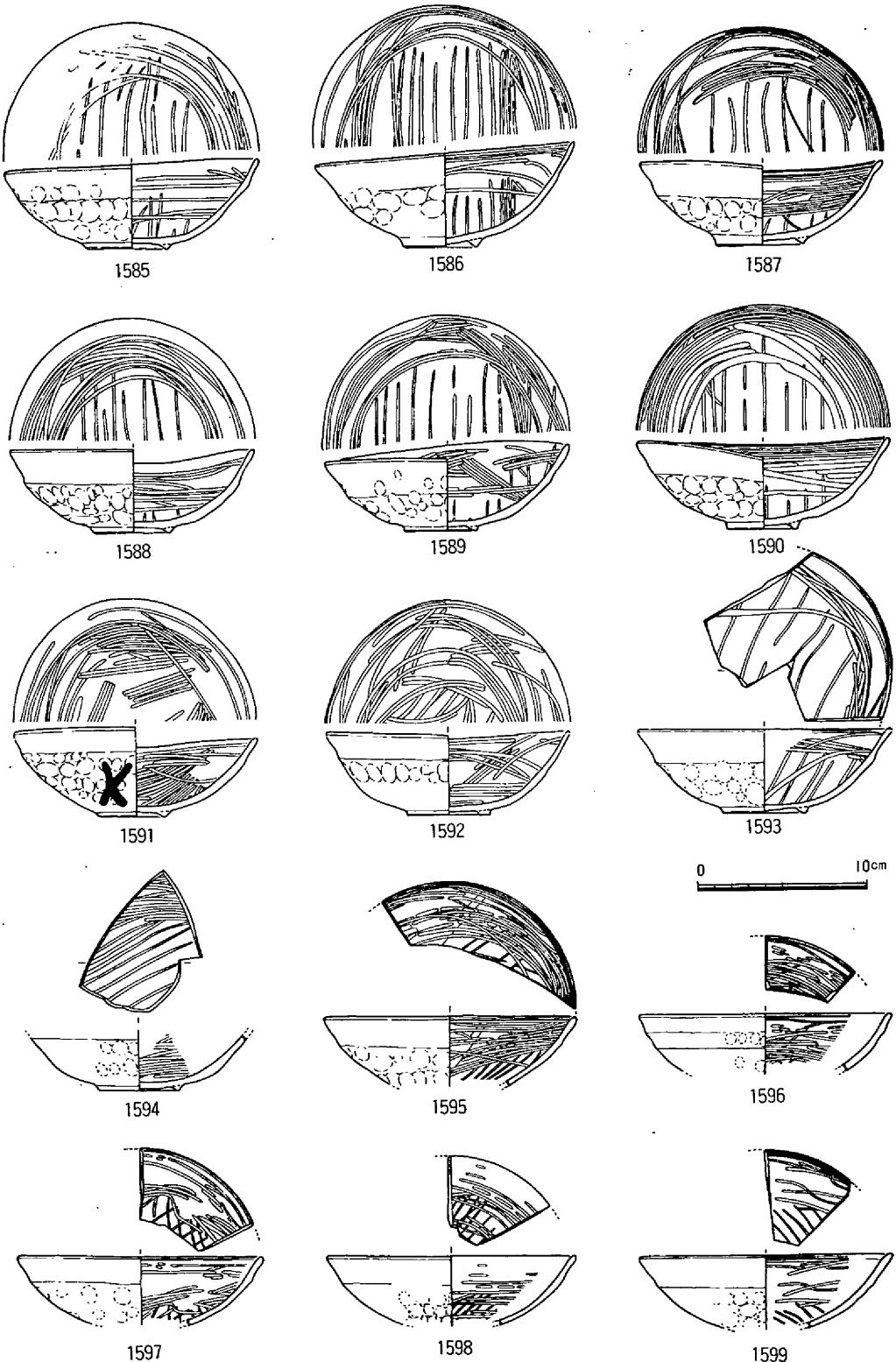
第184図 井戸3出土遺物(3) (1/4)



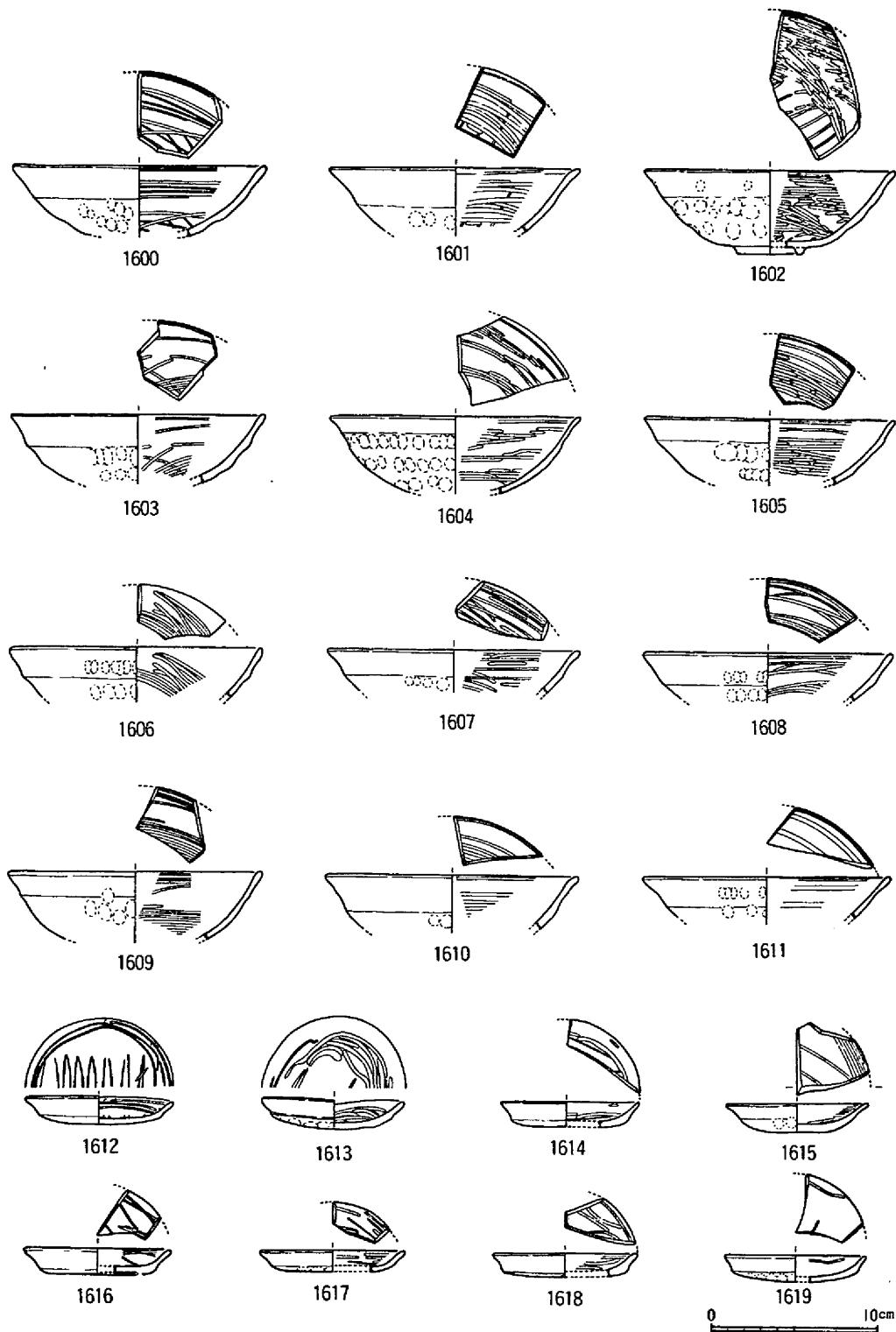
第185図 井戸3出土遺物(4) (1/4)



第186図 井戸3出土遺物（5）



第187図 井戸3出土遺物(6) (1/4)



第188図 井戸3出土遺物(7) (1/4)

も画一になっていた。しかも出土遺物の中には、百間川当麻遺跡の周辺地域で生産された在地の土器（1392～1584）以外に、畿内の和泉地方で生産されたと考えられている（註10）瓦器椀（1585～1611）や瓦器小皿（1612～1619）も含まれていたから、畿内で生産された土器の流通経路の一端を知ることができただけでなく、畿内と岡山県南部地方で独自に進められている土器編年の接点となる一括遺物として、極めて良好な資料と考える。

なおこの素掘りの井戸の時期は、出土遺物から推定して鎌倉時代に属するであろう。

#### 4) 室町時代以降の遺構面

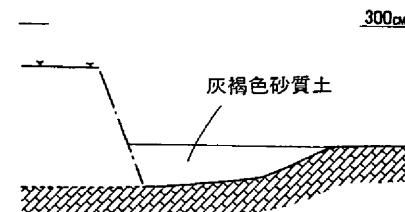
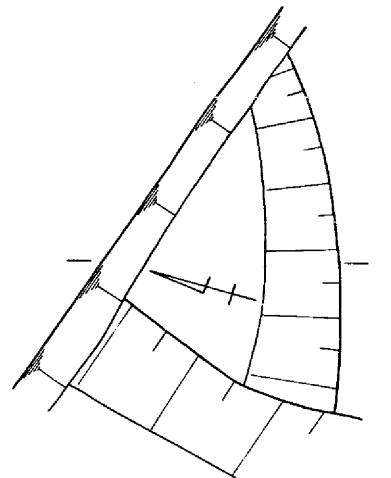
この遺構面は、鎌倉時代の遺構面と推定される安定した灰茶褐色粘質土上に堆積した暗茶灰色土の上面に相当するが、鎌倉時代以前の遺構面と比較すれば、遺構面の基盤となっている堆積土内に細かい砂粒が多く認められた。検出した遺構としては、溝状遺構4（D-20～D-23）、土壙5（P-14, P-16～P-19）、石組みの井戸（井戸2）が存在した（第155図）。なお柱穴と推定される小規模なピットが数多く存在したが、底部に板石や柱根が残存したものも確認しているとはいえ、調査した幅が約6mの狭い範囲に限定されたため、建物にまとめるにはためらいが感じられた。5箇所に検出した土壙のうちP-14土壙は、鎌倉時代から継続して使用されていたと推察される遺構である。

##### 溝状遺構20（第189図）

C地点調査区の東端で検出した遺構である。この遺構の存在した地点は、全体に岩盤が露出していた。調査範囲の北側境界部分に位置するため、全容を明らかにすることはできなかった。この遺構は土壙になる可能性も考えられたが、底部のレベルが東から西方向へ移行するにしたがって傾斜し、内部の堆積土が灰褐色砂質土であったから、後述するD-21溝状遺構へ流入する丘陵斜面裾部に構築された溝状遺構であろう。遺構内を精査してもかかわらず遺物が出土しなかったので時期は不明であるが、土層断面の状況から判断して室町時代以降になると考える。

##### 溝状遺構21（第190図）

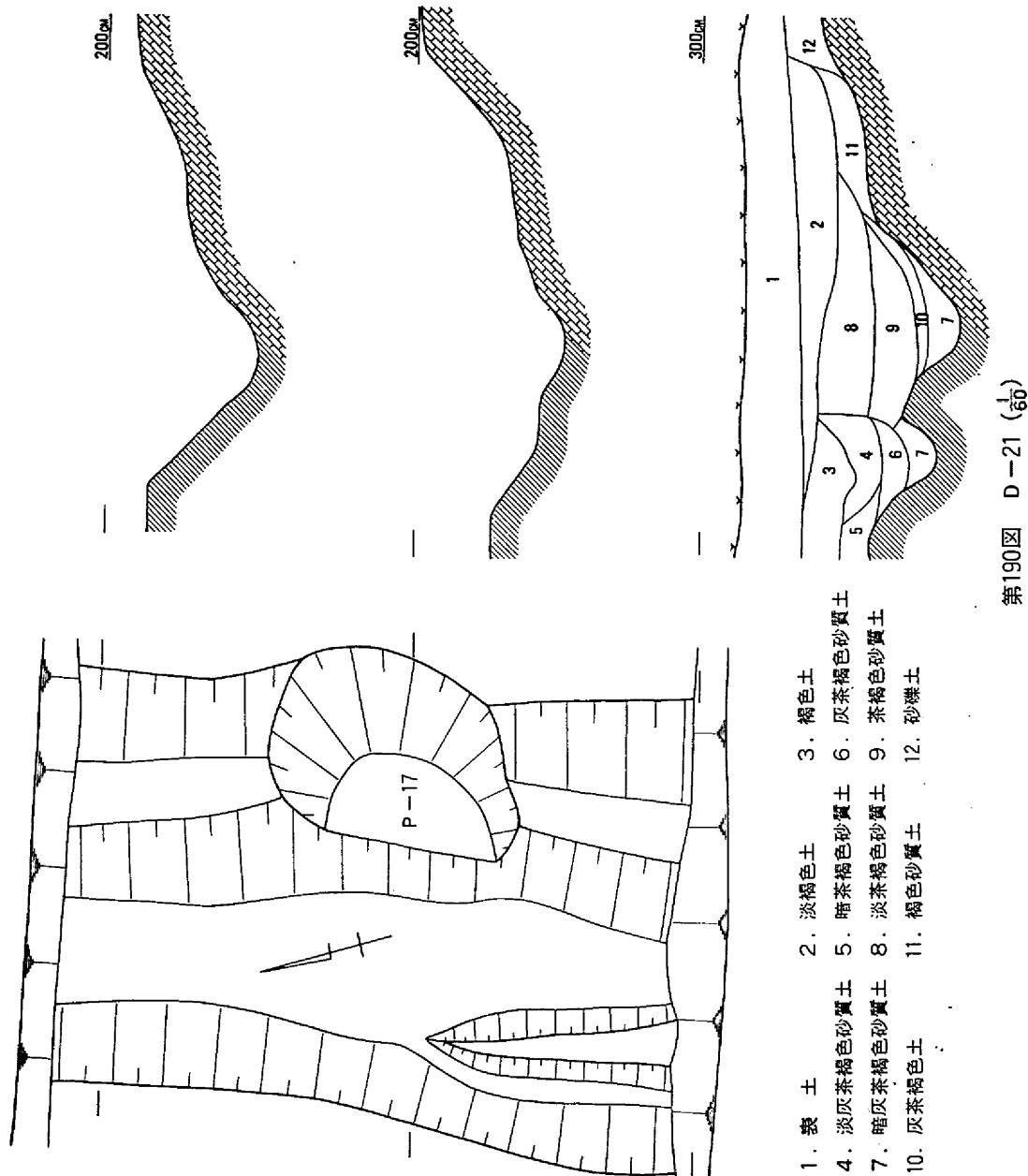
C地点調査区の東端に位置する、丘陵斜面裾部で検出した溝状遺構である。東側に面した岸は、底部の中央部まで岩盤が露出していた。調査範囲内のほぼ中間に位置する東岸には、この溝状遺構が新しく切った土壙（P-



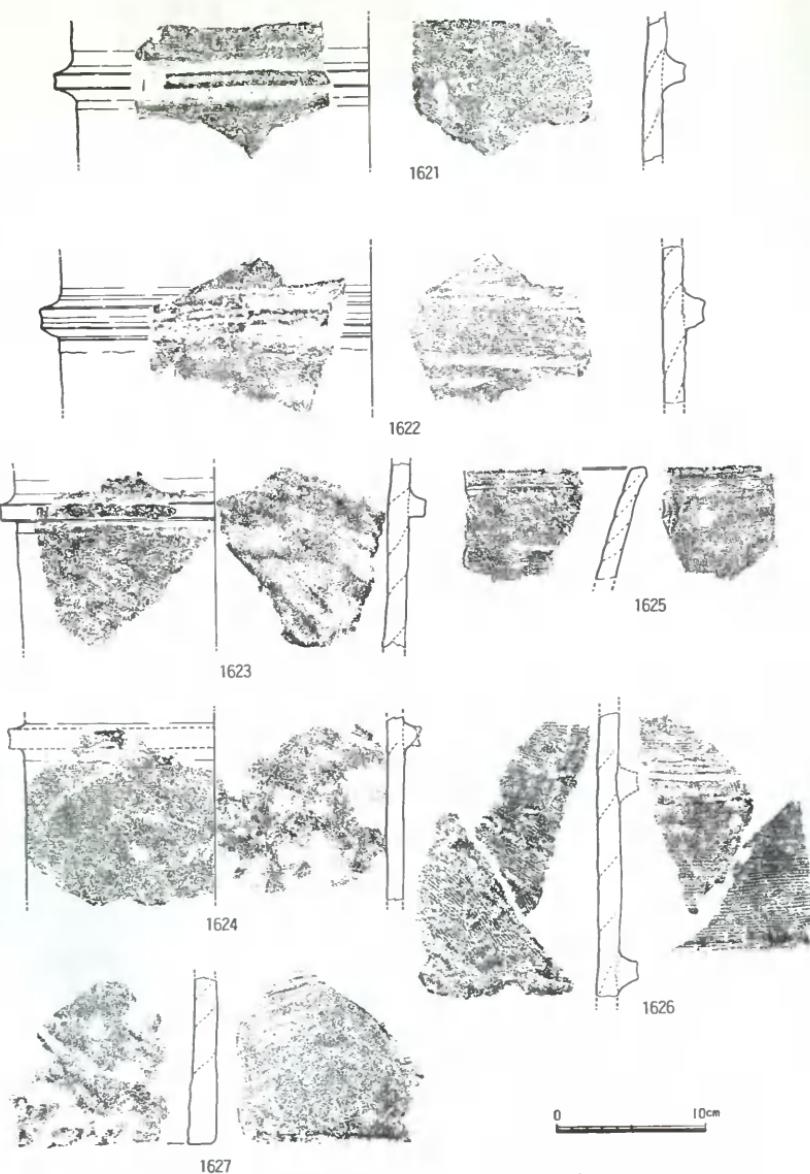
第189図 D-20 (1/60)

## 第6章 百間川当麻遺跡

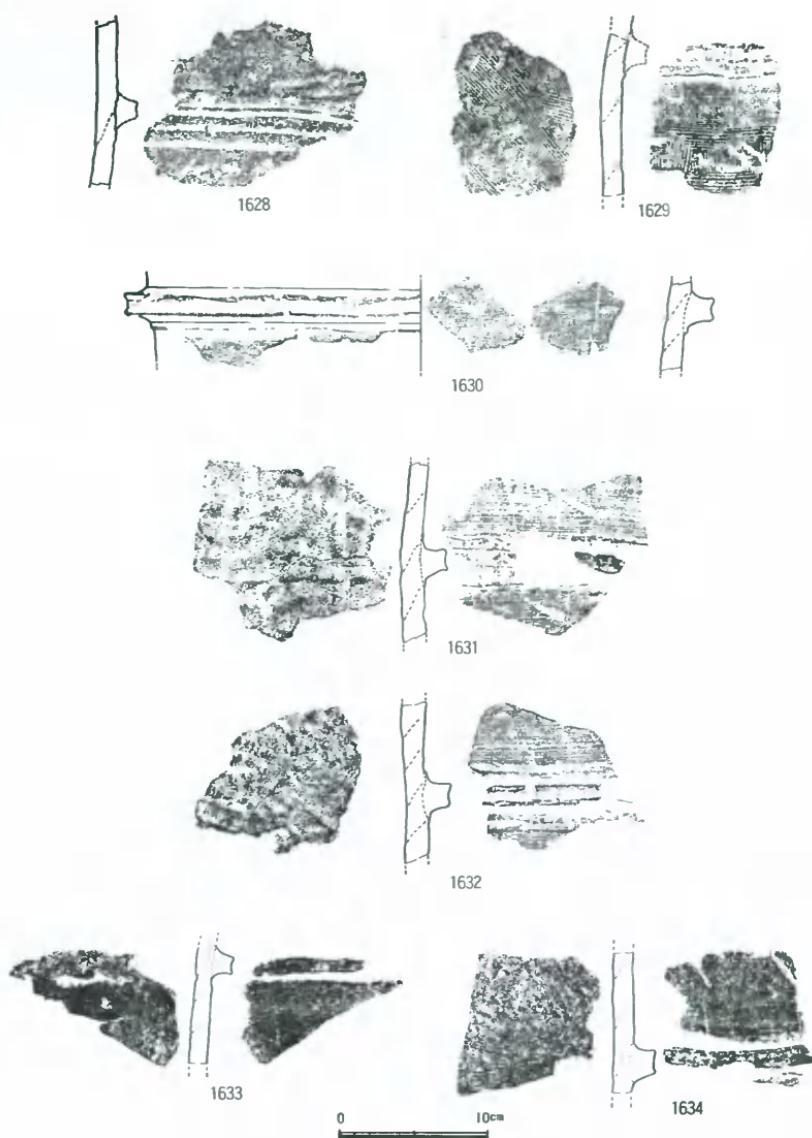
17) が存在した。西側に面した岸の南部分には、枝分れした幅の狭い溝状遺構が認められた。北側に位置する調査範囲境界地点の検出面での幅は約 3m 50cm を測り、幅が極めて広い溝状遺構である。検出面からの深さは 1m 10cm から 1m 20cm を測り、枝分れした幅の狭い溝状遺構の底部は、約 20cm もレベルが高くなっていた。幅の広い溝状遺構の底部は、北から南へ移行するにしたがってレベルがわずかに低くなっていた。土層断面の堆積状態や使用されていた当時の状況から推察すれば、枝分れした



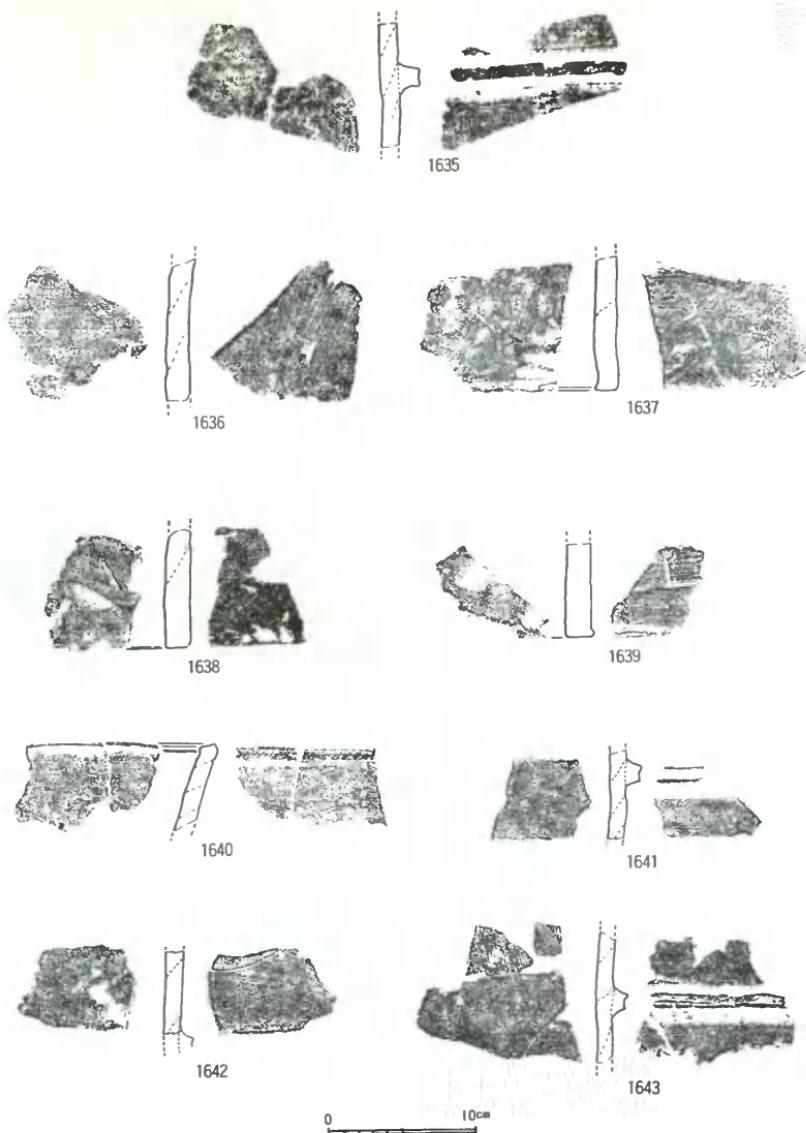
第190図 D-21 (1/60)



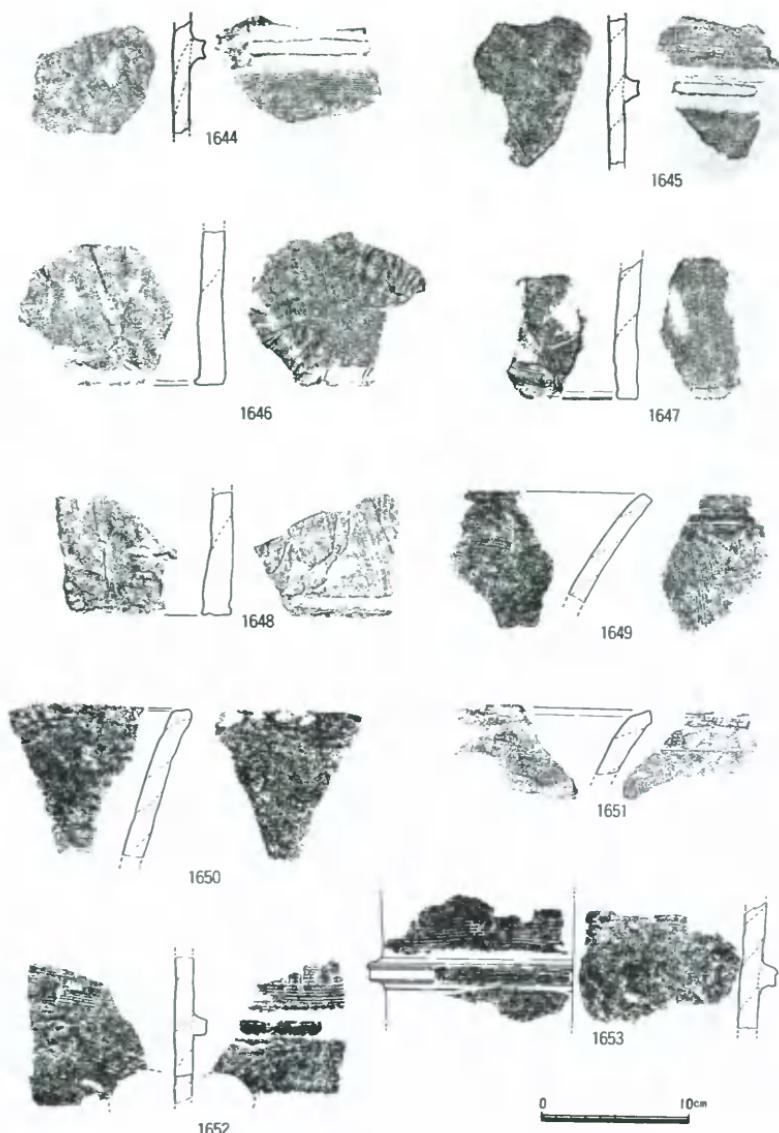
第191図 D-21出土遺物(1) (1/4)



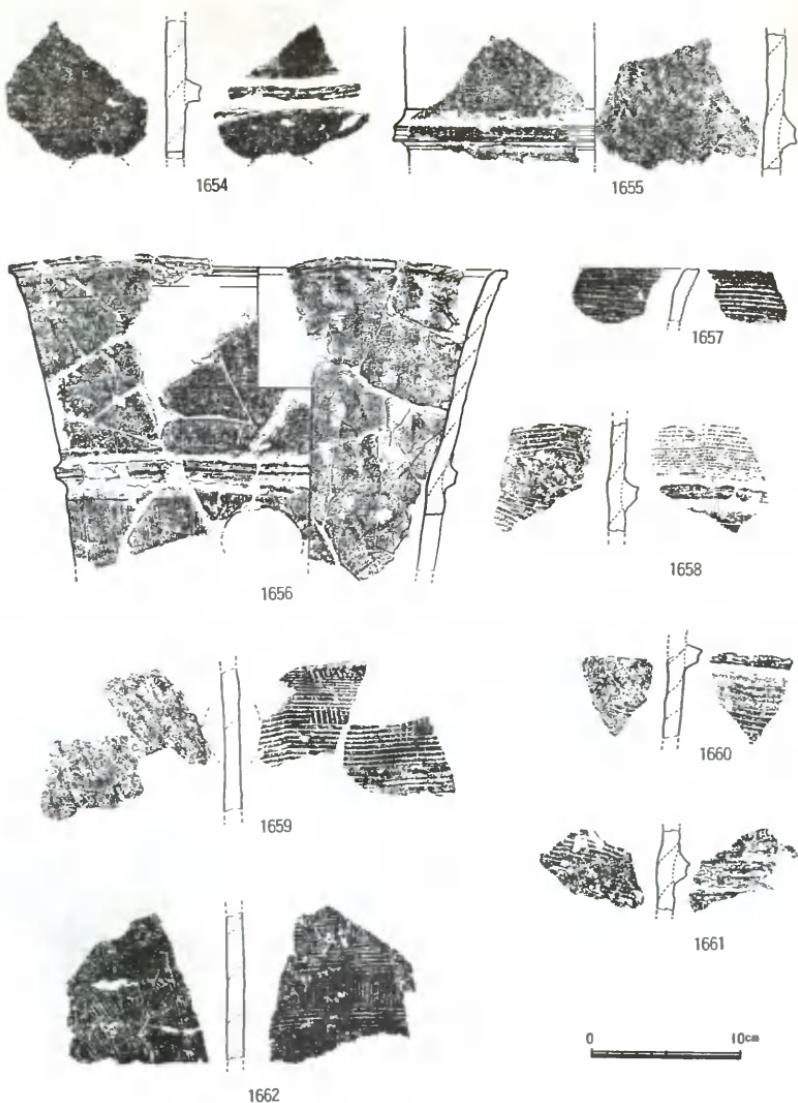
第192図 D-21出土遺物（2）(1/4)



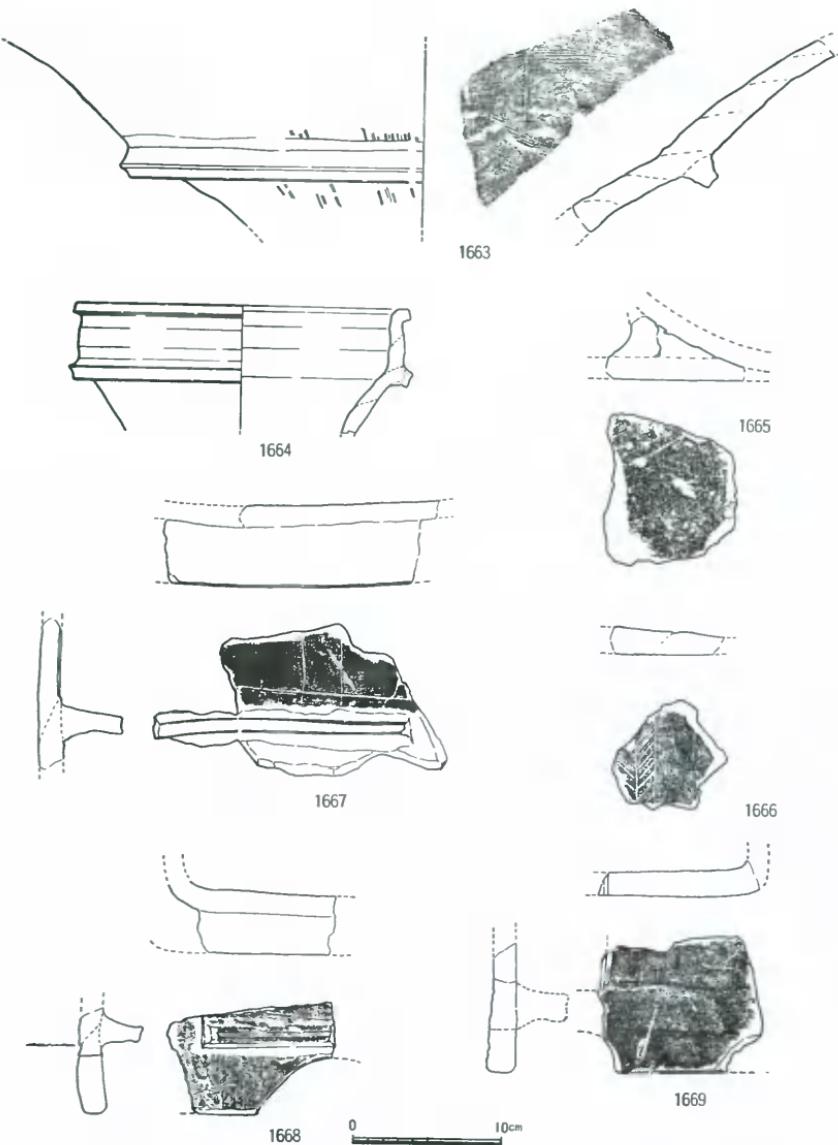
第193図 D-21出土遺物(3) (1/4)



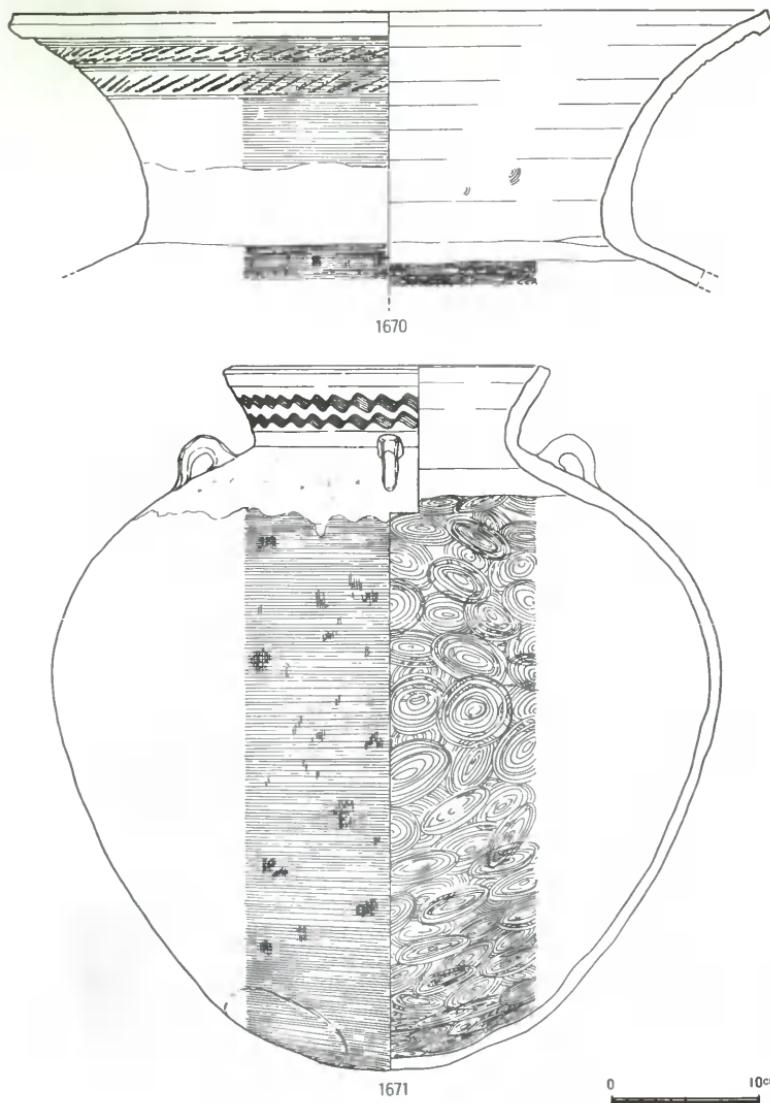
第194図 D-21出土遺物(4) (1/4)



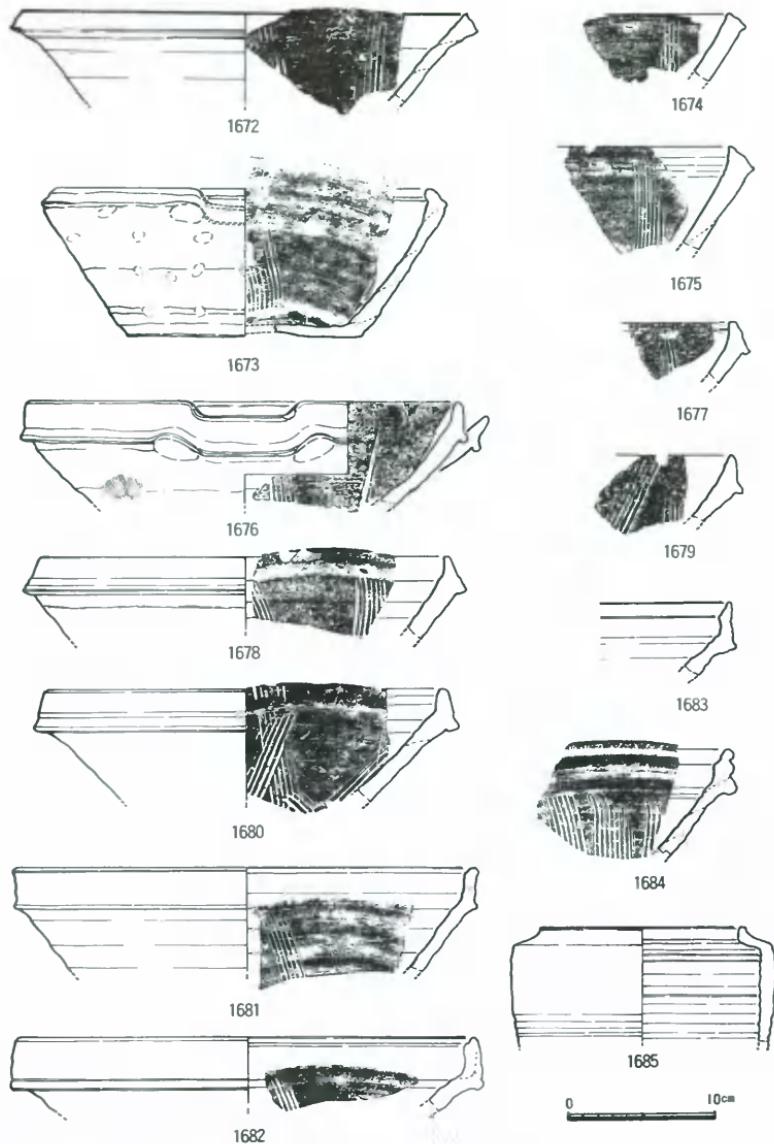
第195図 D-21出土遺物(5)( $\frac{1}{4}$ )



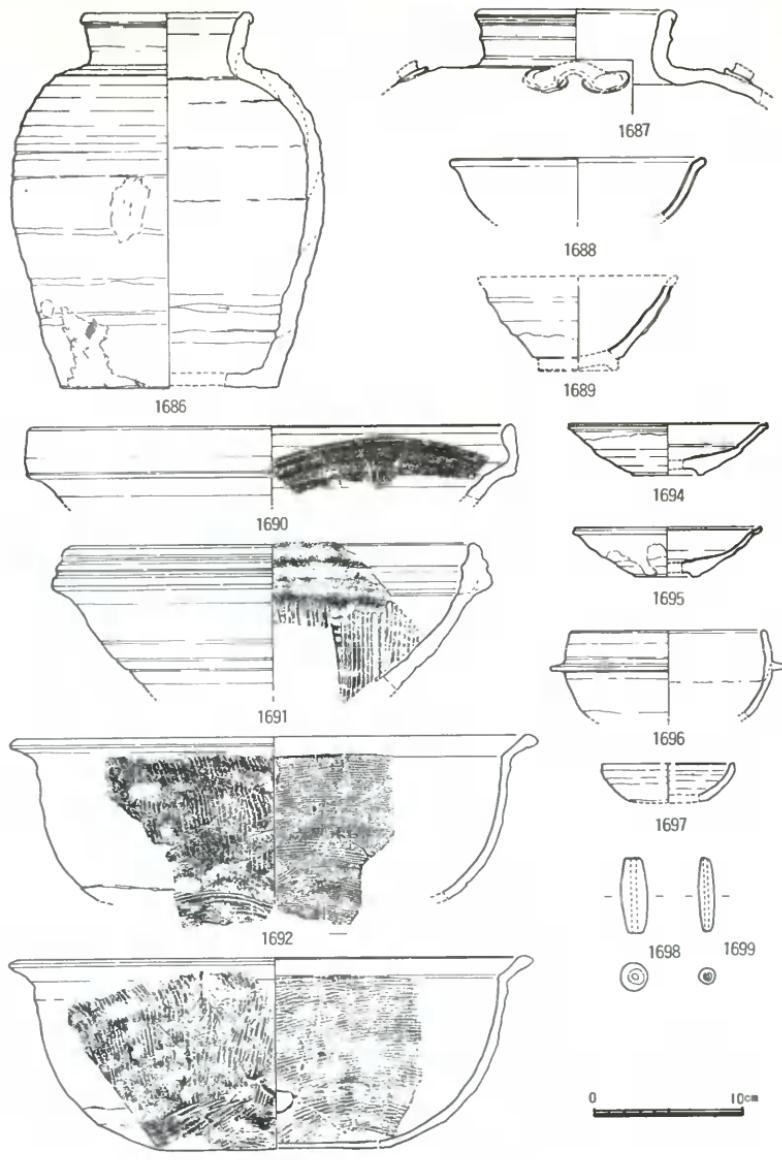
第196図 D-21出土遺物（6）(1/4)



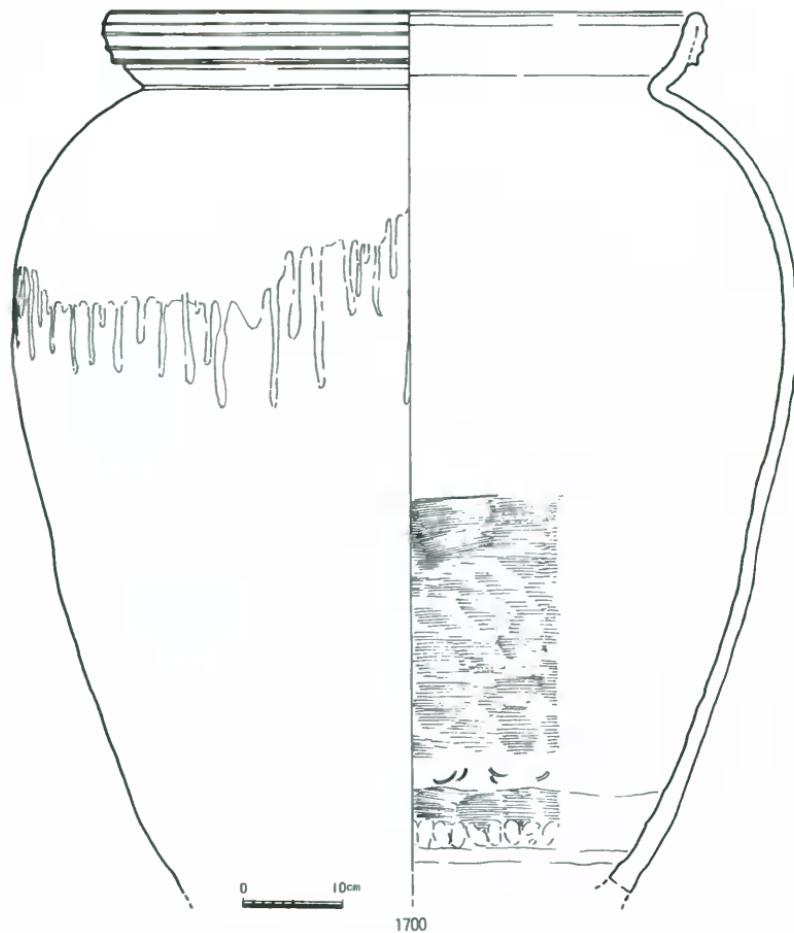
第197図 D-21出土遺物(7) ( $\frac{1}{4}$ )



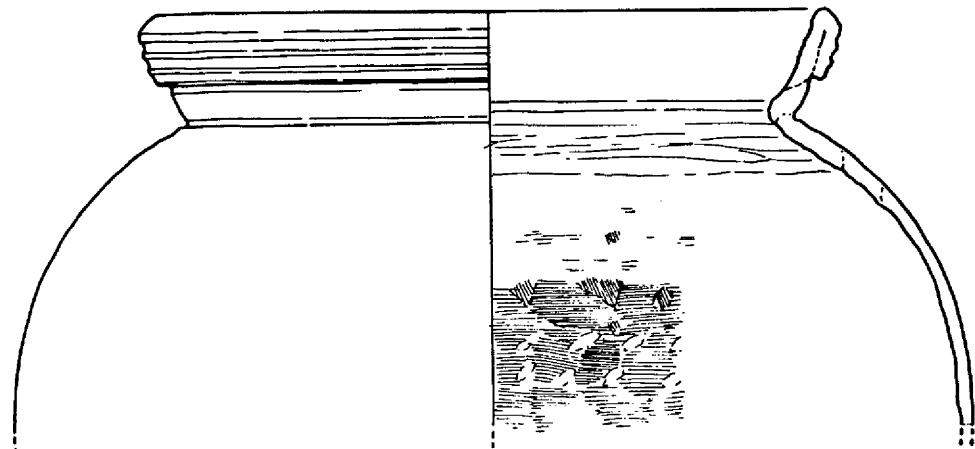
第198図 D-21出土遺物(8) (1/4)



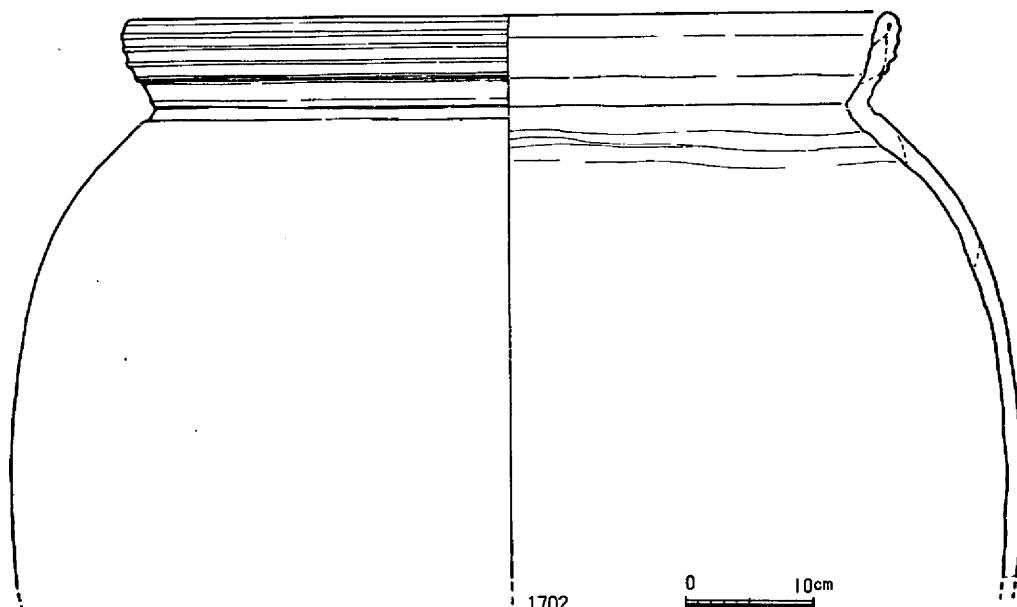
第199図 D-21出土遺物(9) (1/4)



第200図 D-21出土遺物 (10) ( $\frac{1}{6}$ )



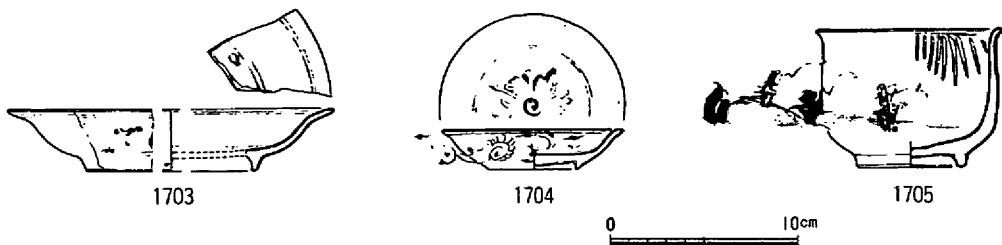
1701



1702

0 10cm

第201図 D-21出土遺物 (II) ( $\frac{1}{6}$ )

第202図 D-21出土遺物 (12) ( $\frac{1}{4}$ )

溝状遺構は、幅の広い溝状遺構から水を取り入れる別の遺構になる可能性が強い。枝分れした地点の周辺を精査したが、井堰等の施設は存在しなかった。枝分れした溝状遺構の内部には、底部に近い下層より暗灰茶褐色砂質土、灰茶褐色砂質土、淡灰茶褐色砂質土が堆積していた。幅の広い溝状遺構の内部には、底部に近い部分は枝分れした溝状遺構と同じ暗灰茶褐色砂質土が堆積していたが、その上位には砂粒を含まない灰茶褐色粘質土が認められ、茶褐色砂質土と淡茶褐色砂質土に覆われていた。

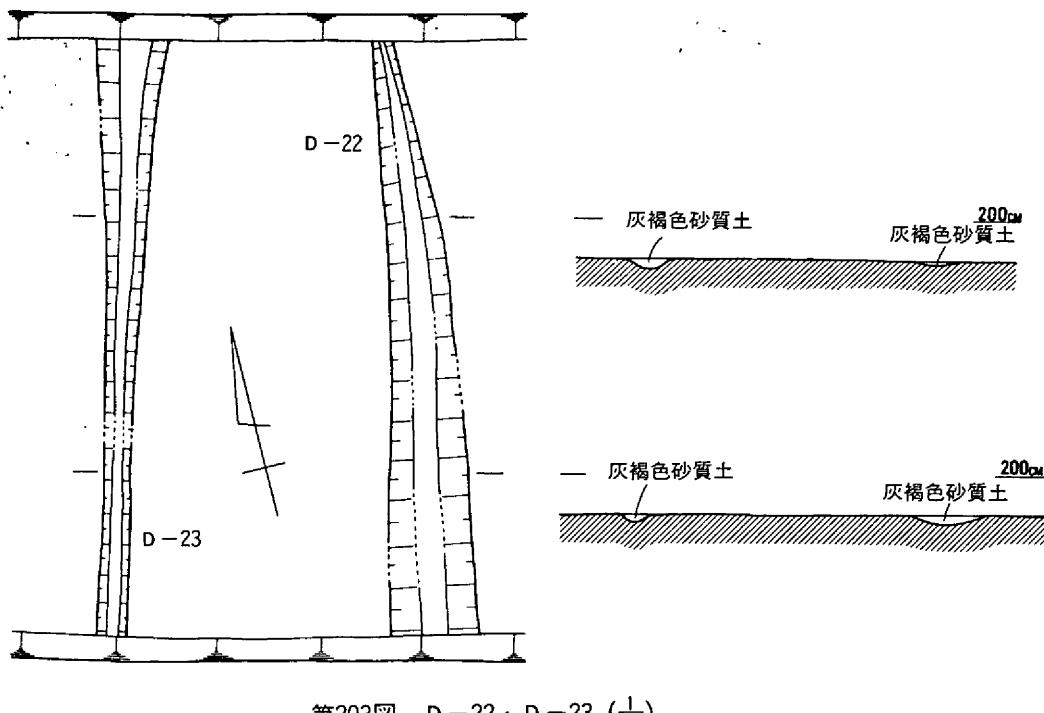
枝分れした幅の狭い溝状遺構には、遺物が存在しなかった。幅の広い溝状遺構からは、壺、大甕、擂鉢の器種が揃った備前焼、佐賀県唐津市地方で生産されたと推定される皿、中国製の染付皿、土鍋等に混在して、多量の埴輪片と須恵器の壺や甕が出土した。この溝状遺構が使用されていた時期は、出土遺物から推察して室町時代にその最盛期があったと考えられるが、須恵器の壺や甕も存在するので、古墳時代後半の時期にはすでにこの遺構が構築されていた可能性が強い。多量に出土した埴輪片は、北東方向に近接して所在する丘陵の頂部に、かつて古墳が存在して埴輪が樹立されていたものが、何らかの契機によってある時期（註11）に古墳が破壊され、丘陵の斜面裾部に位置するこの溝状遺構へ埴輪片が混入したと考えたい。

### 溝状遺構22（第203図）

8区のほぼ中央部で検出した幅が狭くて浅い溝状遺構である。検出面での幅は、調査範囲境界地点の北側で約17cm、南側で約70cmを測り、北から南へ移行するにしたがって幅が広くなっていた。検出面からの深さは3cmから10cmを測り、北側よりも南側が深くなっていたが、底部のレベルはほとんど同じであった。遺構内には灰褐色砂質土が堆積しており、断面が浅い「U」字形を呈していた。遺構内を精査したが、遺物は存在しなかった。この溝状遺構の性格や使用された時期は不明である。

### 溝状遺構23（第203図）

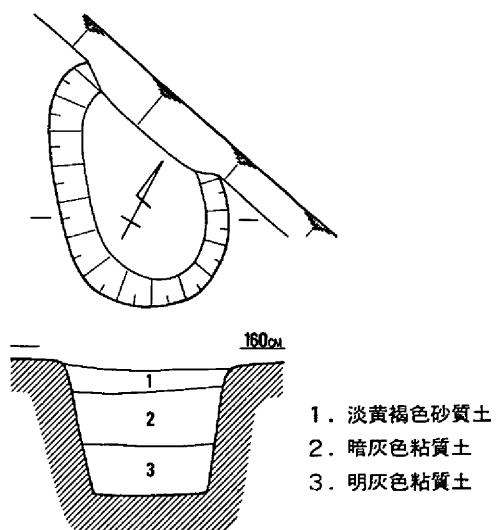
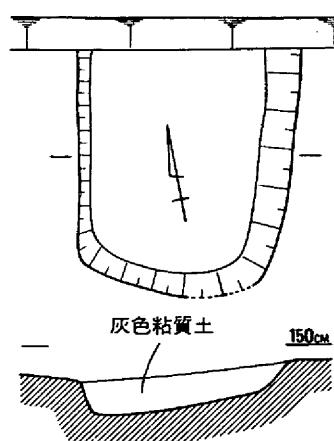
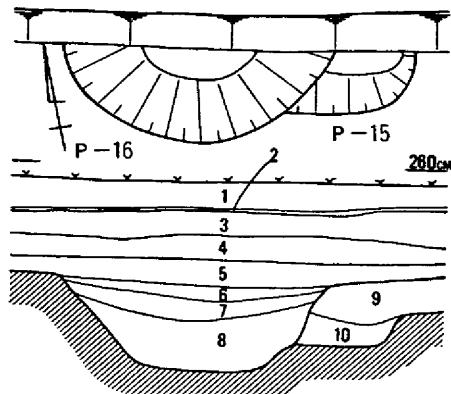
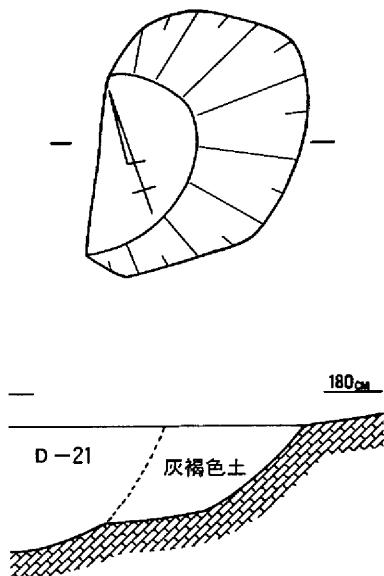
前述したD-22溝状遺構が存在した地点よりも約2m50cmほど西側へ寄った位置で検出した溝状遺構である。この溝状遺構は、D-22溝状遺構とほぼ平行する方向になっていた。検出面での幅は、調査範囲境界地点の北側で約58cm、南側で約23cmを測り、北から南へ移行するにしたがってD-22溝状



遺構とは逆に幅が狭くなっていた。検出面からの深さは5cmから8cmを測り、D-22溝状遺構と同様に極めて浅い。遺構内には灰褐色砂質土が認められ、断面が浅い「U」字形を呈していた。遺構内を精査したが、遺物は存在しなかった。この溝状遺構の周辺には、柱穴と推定される小規模なピットが数多く存在したから、D-22溝状遺構も含めて建物の雨落溝になる可能性も考えられるが、調査範囲が細長くて狭い部分に限定されたため、はっきりした確証は得られなかった。この溝状遺構とD-22溝状遺構の土層断面を検討した結果、これらの遺構は室町時代以降の時期に属すると推定される。

#### 土壤15（第204図）

8区のほぼ中央部で検出した土壤である。北側に位置する調査範囲境界地点に存在し、新しい時期のP-16土壤に西側が切られていたため、全容を明らかにできなかった。本来の平面形は、橢円形に近い形態を呈するであろう。検出面からの深さは約25cmを測り、内部に明灰色粘質土が認められた。底部は平坦な水平面を有し、遺構の断面は浅い「U」字形を呈するであろう。遺構内を精査したが遺物は出土しなかった。この土壤はP-16土壤に切られ、検出したレベルがP-16土壤よりも低い位置であったから、鎌倉時代に属する可能性が強い。したがってこの土壤の説明は、鎌倉時代の遺構面の項で取り扱うべきであったが、P-16土壤との切り合い関係を図示したいがために、こちらへ廻したのである。



**土壤16（第204図）**

8区のほぼ中央部に、P-15土壤を切った状態で検出した土壤である。北側の部分は調査範囲外になるため、調査することができなかった。この土壤の平面形は、円形または橢円形になるであろう。調査範囲境界地点での径は、約2m15cmであった。検出面からの深さは約70cmを測り、断面が上方へ大きく開いた「U」字形を呈していた。底部に近い部分には暗灰色粘質土が認められ、その上位に灰白色土と灰褐色土が堆積していた。この土壤内からは、備前焼大甕の小破片や糸切りの底部と推定される小皿の小破片がわずかに出土したが、図化することはできなかった。この土壤が構築されたのは、室町時代に属するであろう。

**土壤17（第205図）**

C地点調査区の東端に位置する、丘陵斜面裾部で検出した土壤である。この土壤の周辺には、岩盤が露出していた。西側部分を幅が広くて深いD-21溝状遺構が切っていたため、全容を把握することができなかった。本来の平面形は、円形または橢円形を呈するであろう。検出面からの深さは70cmから80cmを測り、底部のレベルが地形に沿って東から西方向へ緩やかに傾斜していた。内部には灰褐色土が認められ、断面は上方へ著しく開いた「U」字形になるであろう。遺構内からは備前焼擂鉢の小破片が出土したが、図化することができなかった。この土壤はD-21溝状遺構に切られていたが、備前焼擂鉢の小破片が伴うので、D-21溝状遺構が使用されていた最盛期の室町時代とあまり時期差がないと考えられる。

**土壤18（第206図）**

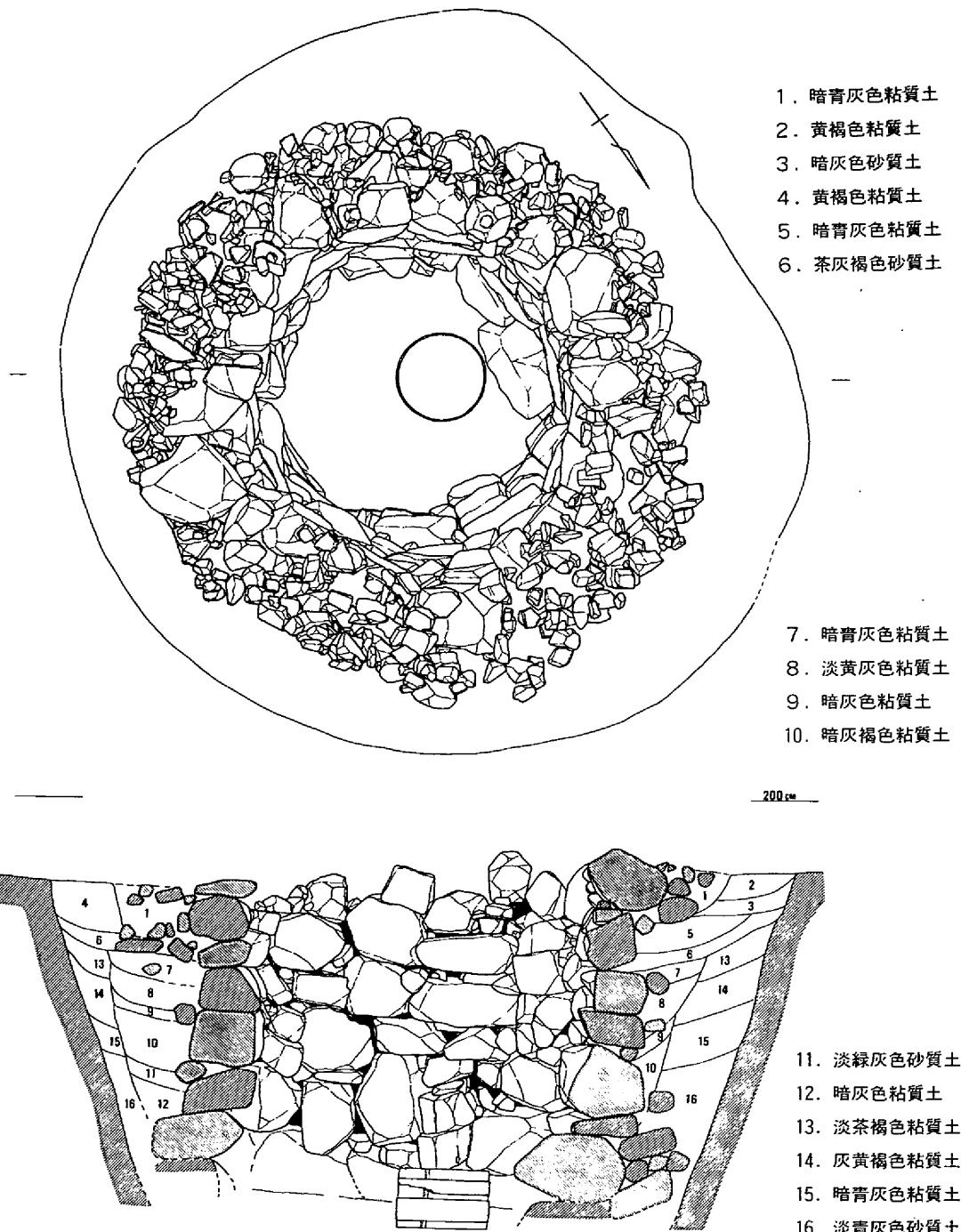
前述した鎌倉時代と推定されるD-18溝状遺構を、新しく切った状態で検出した土壤である。調査範囲の境界地点に位置したため、北側部分は調査することができなかった。この土壤の平面形は、長径約2m10cm、短径約1m30cmの橢円形になるであろう。検出面からの深さは約1m05cmを測り、断面は「U」字形を呈していた。土壤内の底部に近接した部分には明灰色粘質土が認められ、その上位に暗灰色粘質土と淡黄褐色砂質土が堆積していた。土壤内を精査したが、遺物は存在しなかった。検出した層位や、鎌倉時代と推定されるD-18溝状遺構を新しく切っていた状況から判断して、この土壤の時期は室町時代以降に属するであろう。

**土壤19（第207図）**

井戸3の北側で検出した土壤である。調査範囲の境界地点に存在したため、北側は調査することができなかった。この土壤の平面形は、隅丸長方形を呈するであろう。調査範囲境界地点の検出面での幅は、約1m75cmになっていた。検出面からの深さは25cmから30cmを測り、底部が東から西方向へ緩やかに傾斜していた。土壤内には灰色粘質土が認められ、備前焼擂鉢の小破片が出土した。この土壤の時期は、室町時代に属するであろう。

(福田)

井戸 2 (第208図)



第208図 井戸 2 ( $\frac{1}{40}$ )

丘陵の西30mにD-15溝状遺構を切って営まれた石組みの井戸である。井戸3と井戸4の中間に位置する。

井戸は、沖積層を径4m30cm×4m40cm・深さ約2m30cmの規模に掘削され、その掘り形内に比較的大きな石をめぐらし、約7段位に積み上げられたものである。石組み構築後の規模は、径1m80cm×2m00cm・深さ約2mとかなり大きいもので、本調査区検出井戸の中で最大を誇る。なお、石組み構築に先立った陣木の設置は認められなかった。一方、井側底中央部からやや西よりに井筒としての曲げ物が検出されたが、これは砂中に埋置かれたもので、曲げ物を補強する石敷等の施設は認められなかった。

土層の断面観察の結果、掘り形と石組みとの間には、層序にある程度の規則性が認められた。それにより石組みの工程をある程度知ることが出来る。以下にこれを概説する。

先ず、石組み構築の第1段階として、掘り形の底に1~2段位の石の積み上げが行われる。その裏込めには、大小の礫が入れられ、基礎が出来あがる。

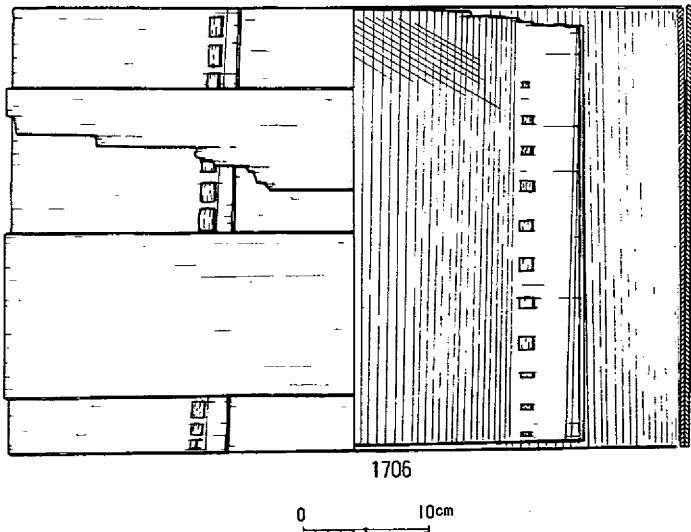
第2段階。第1段階で形成させた基礎に粘質の土を積み上げ、次の第3段階で積み上げる石との間を狭くする。

第3段階。第1段階で形成された基礎の上部に、さらに、2段位に石を積み上げる。その後、裏込めを行い次の段階に備える。

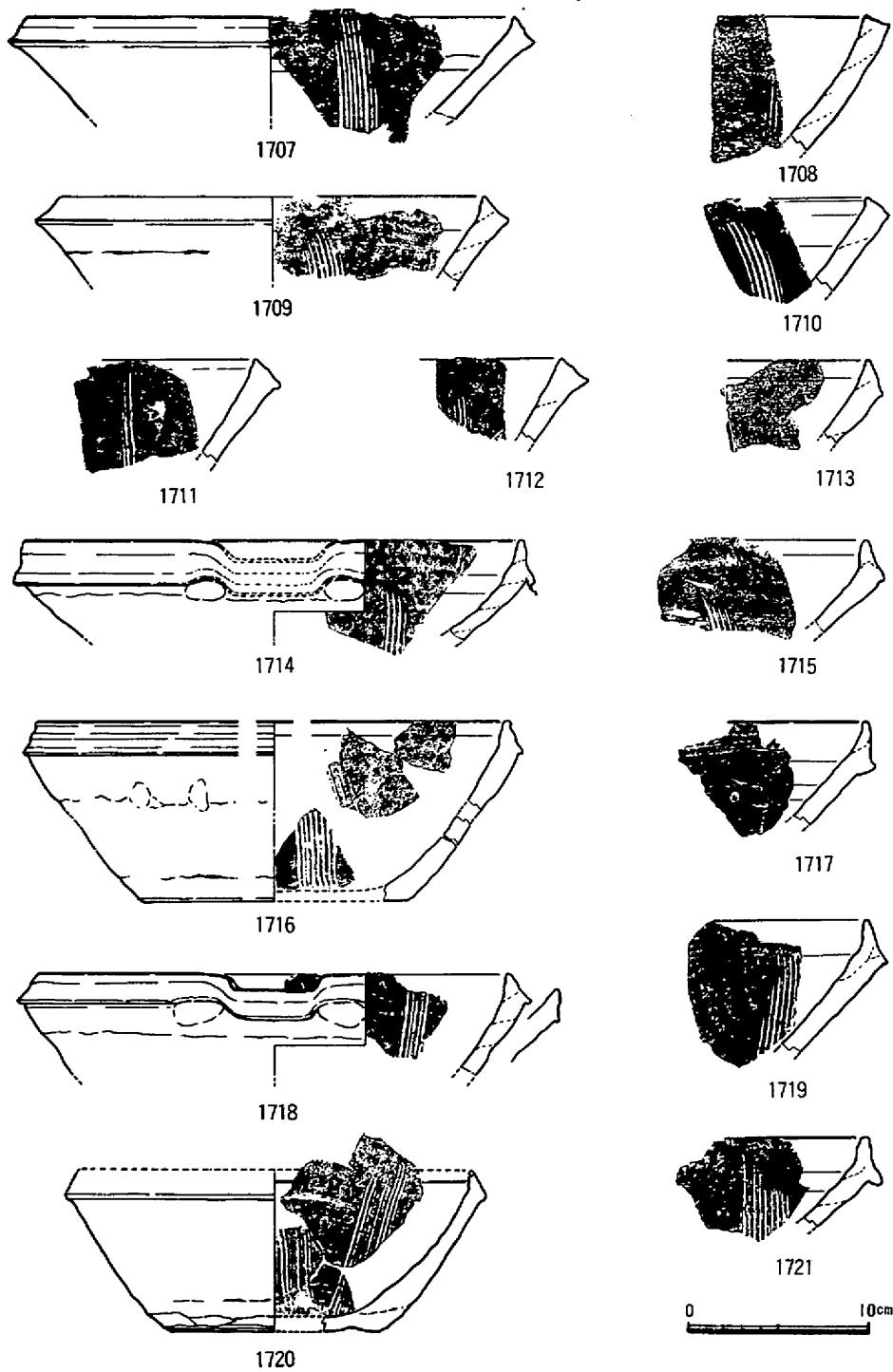
第4段階。第3段階で構築された石組みの上に、さらに、2段位の石組みを巡らす。その後、再び裏込めが行われる。この段階で一応上面の整地を行う。

第5段階。第4段階で整えられた面にさらに1段石を巡らし、裏込めを行う。

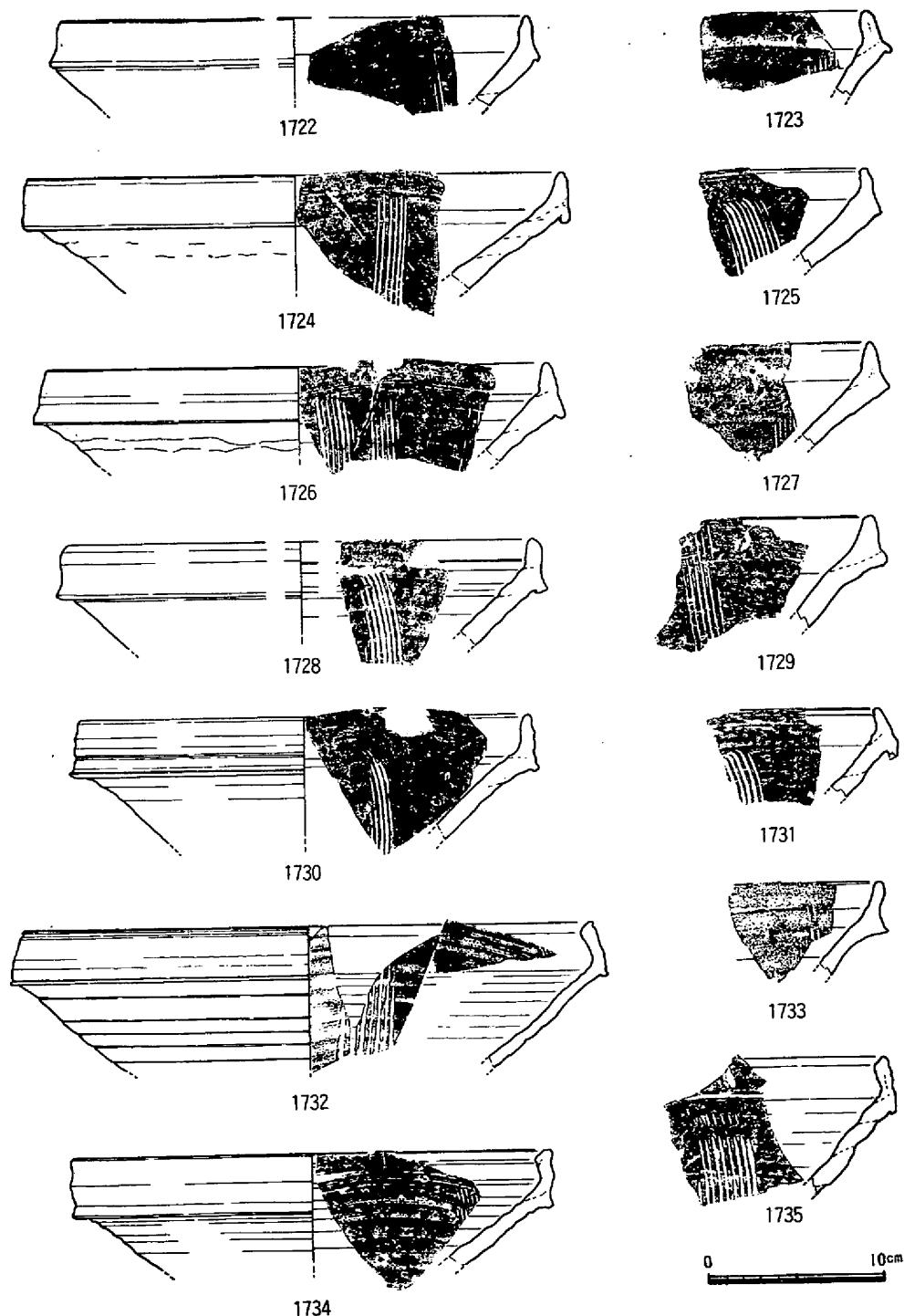
第6段階。前段階までに構築された石組みの上にさらに1段石を巡らし、これをもって井戸の上端とする。また、裏込めには大小の礫が入れられ、上端面を整えてこれを補強する。



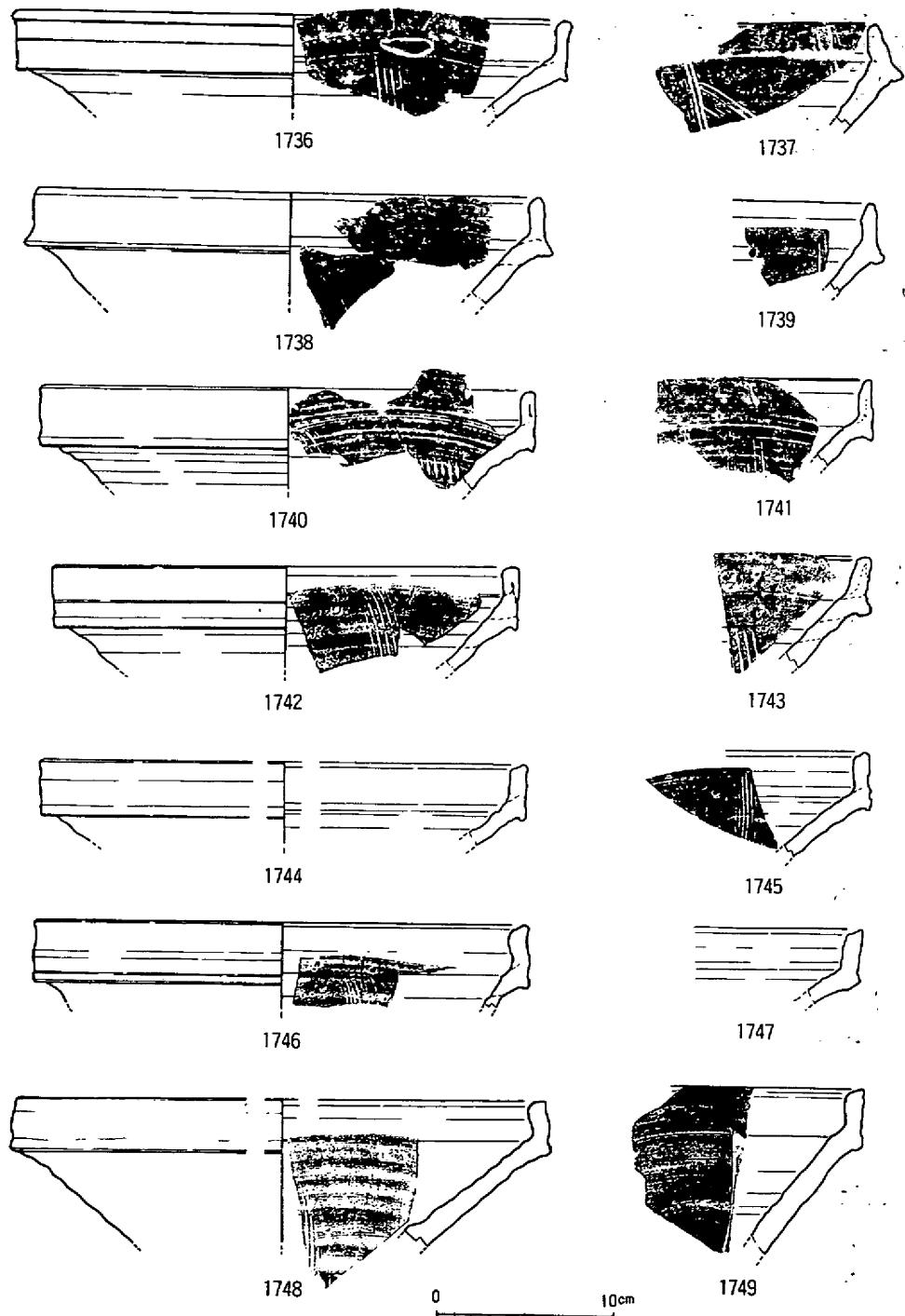
第209図 井戸2出土遺物(1) (1/6)



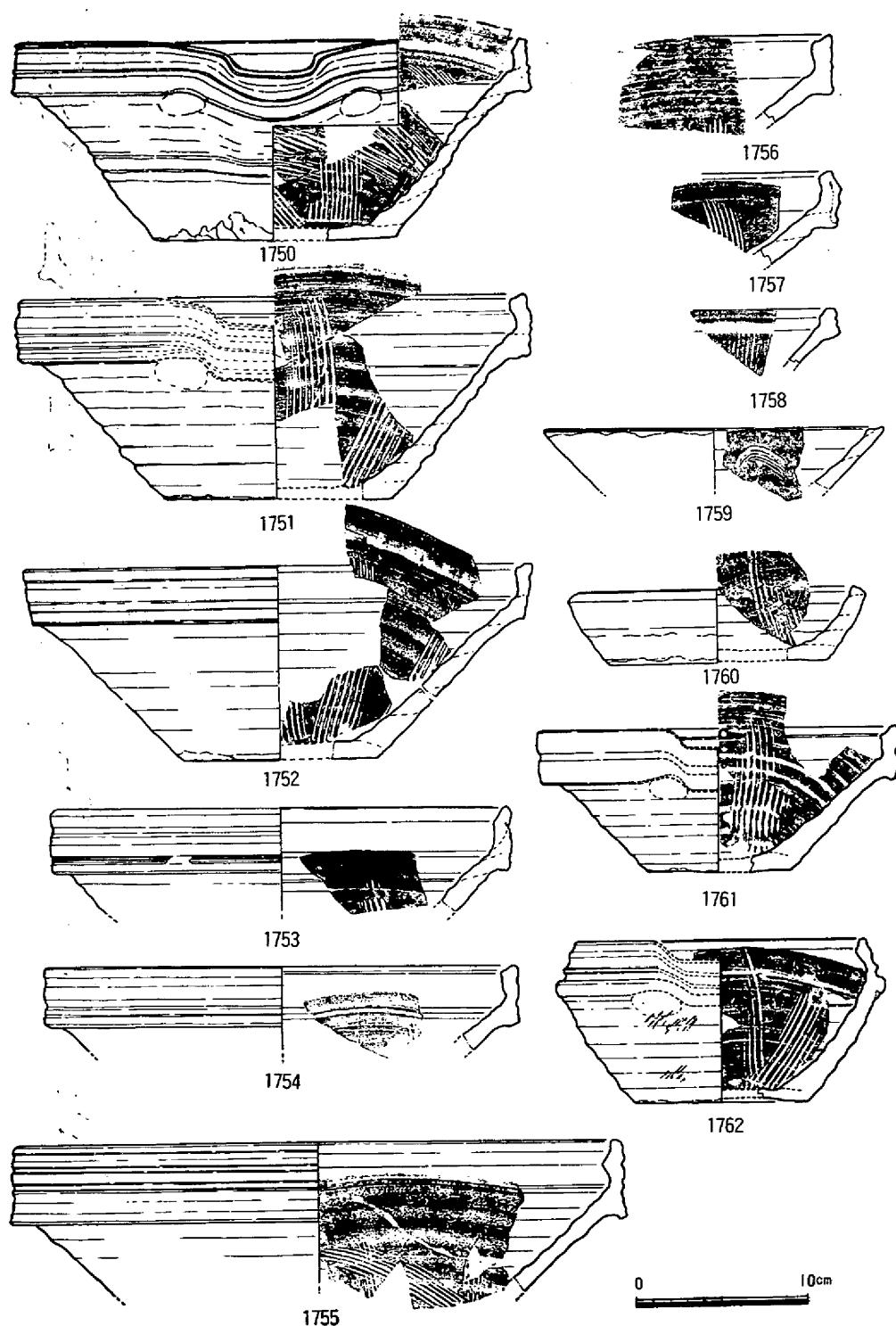
第210図 井戸2出土遺物(2) (1/4)



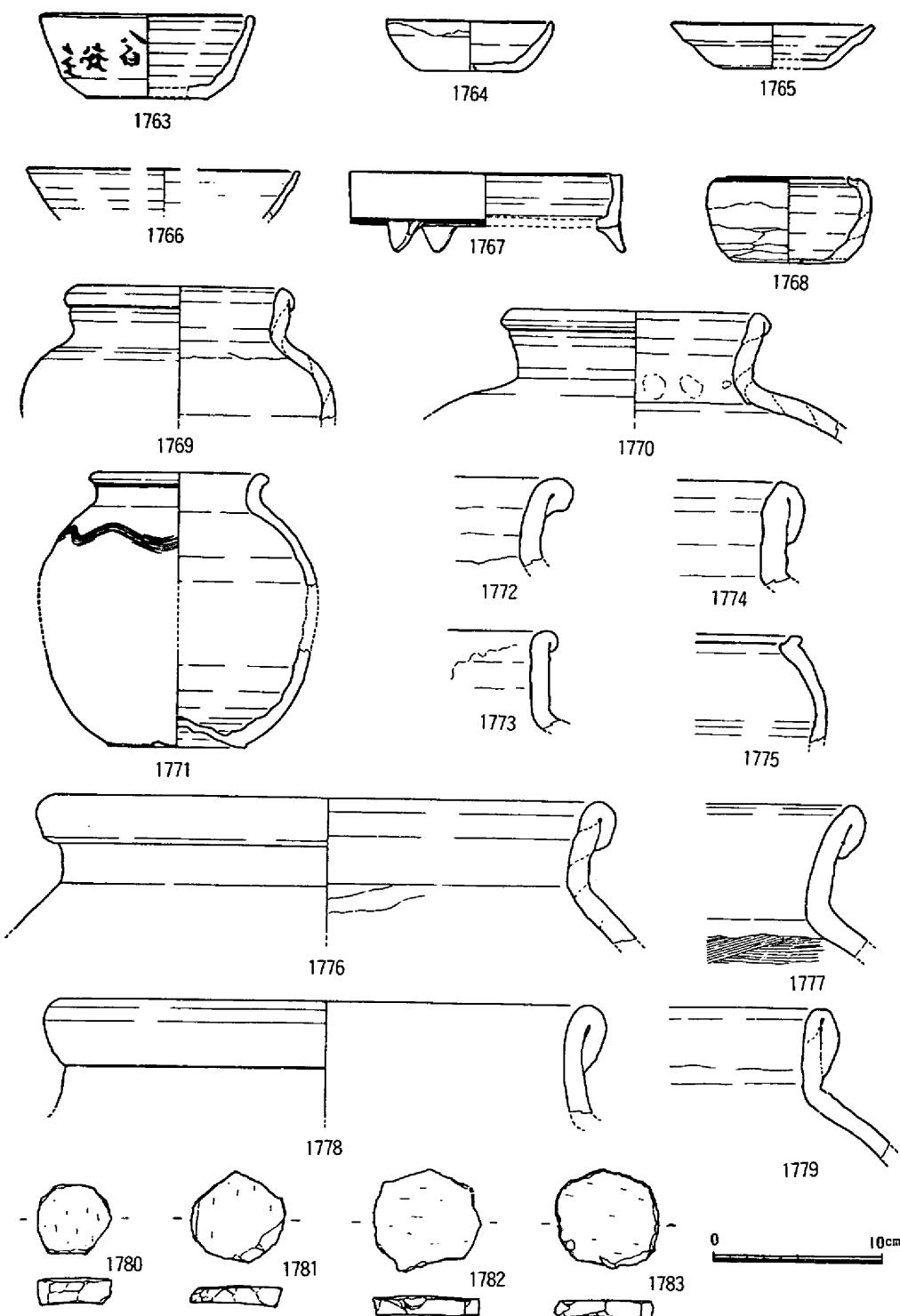
第211図 井戸2出土遺物(3) (1/4)



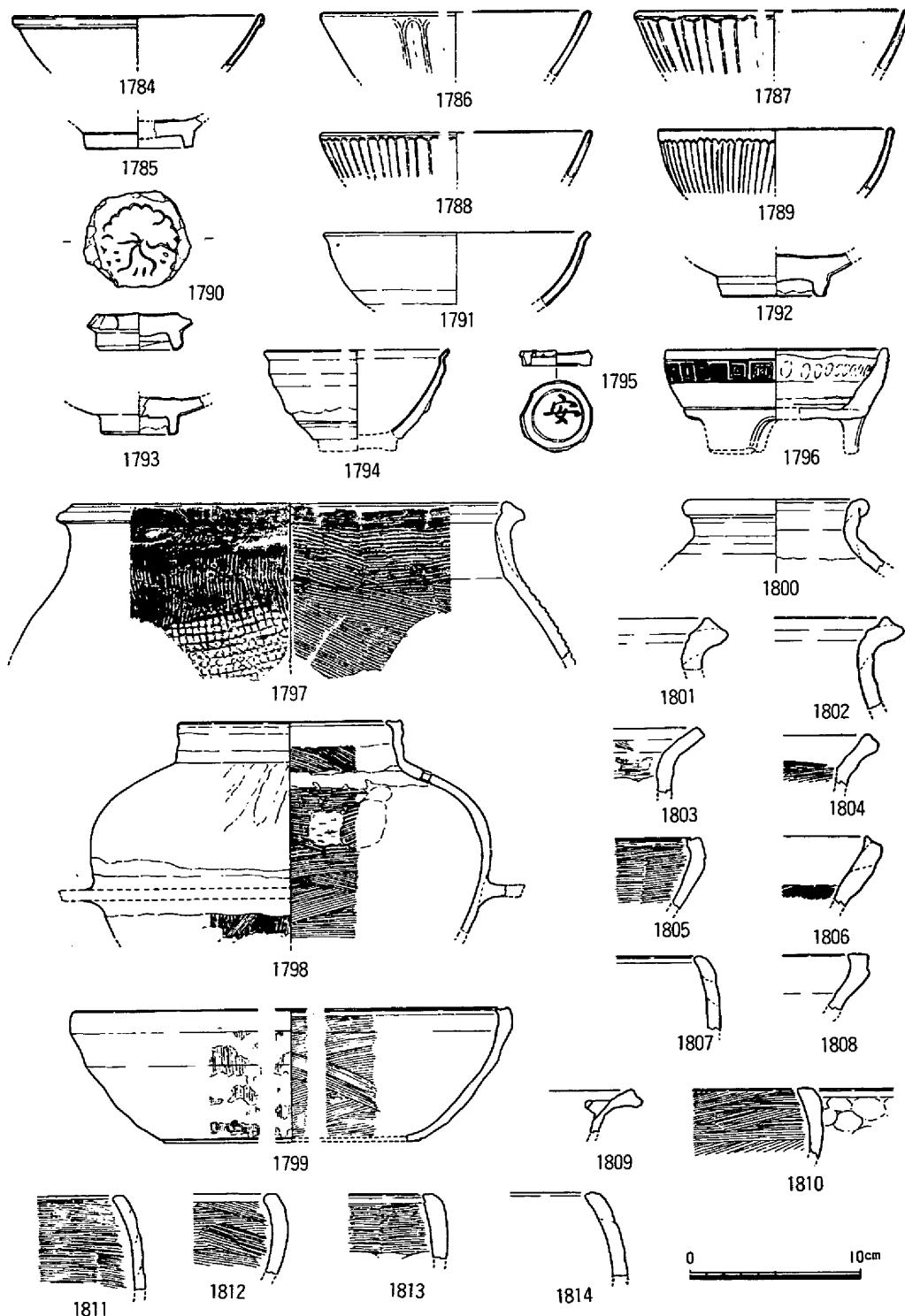
第212図 井戸2出土遺物(4)( $\frac{1}{4}$ )



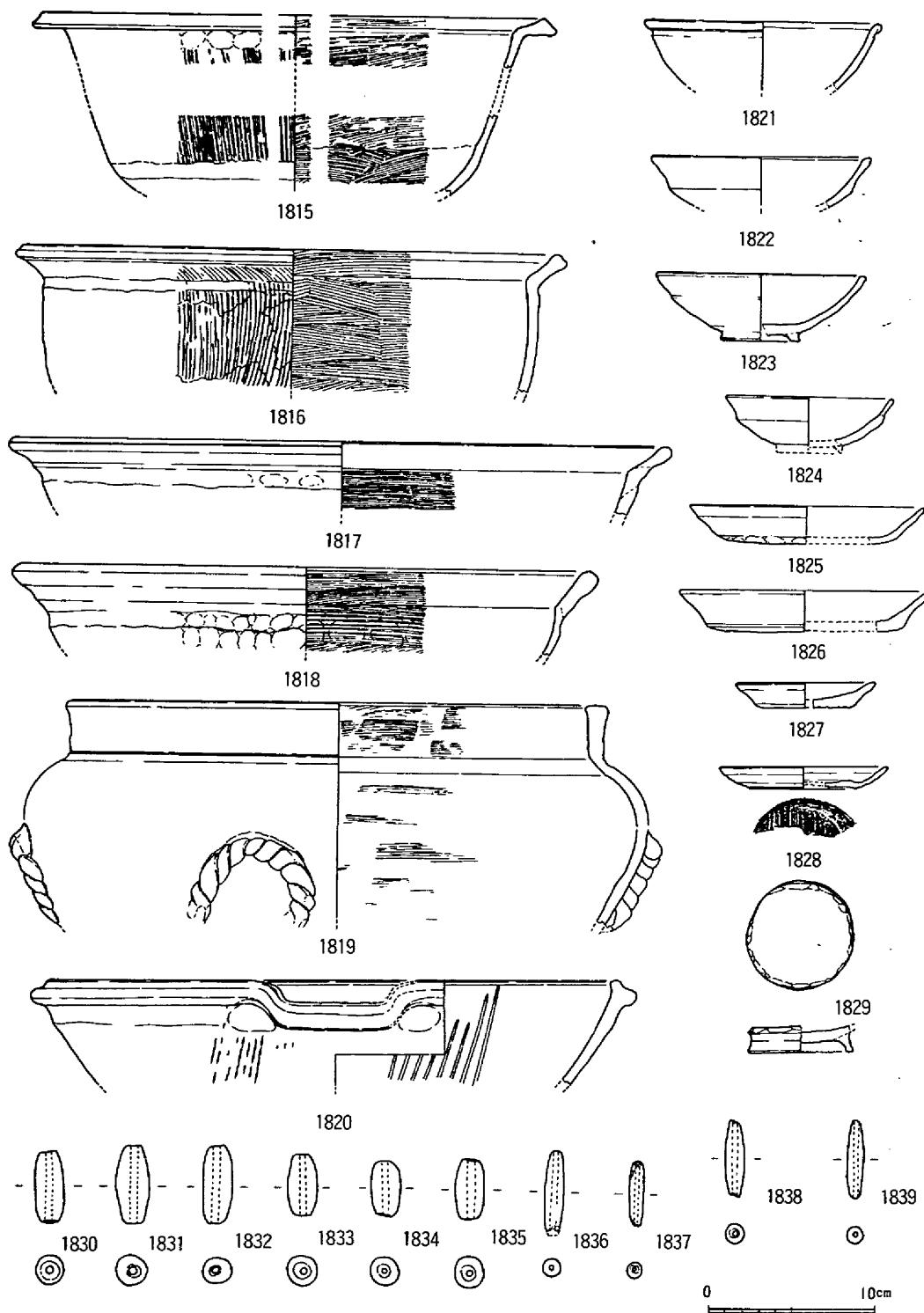
第213図 井戸2出土遺物(5) (1/4)



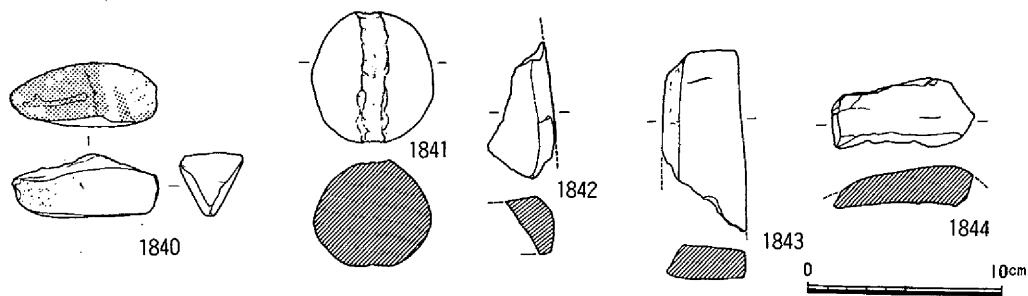
第214図 井戸2出土遺物(6) (1/4)



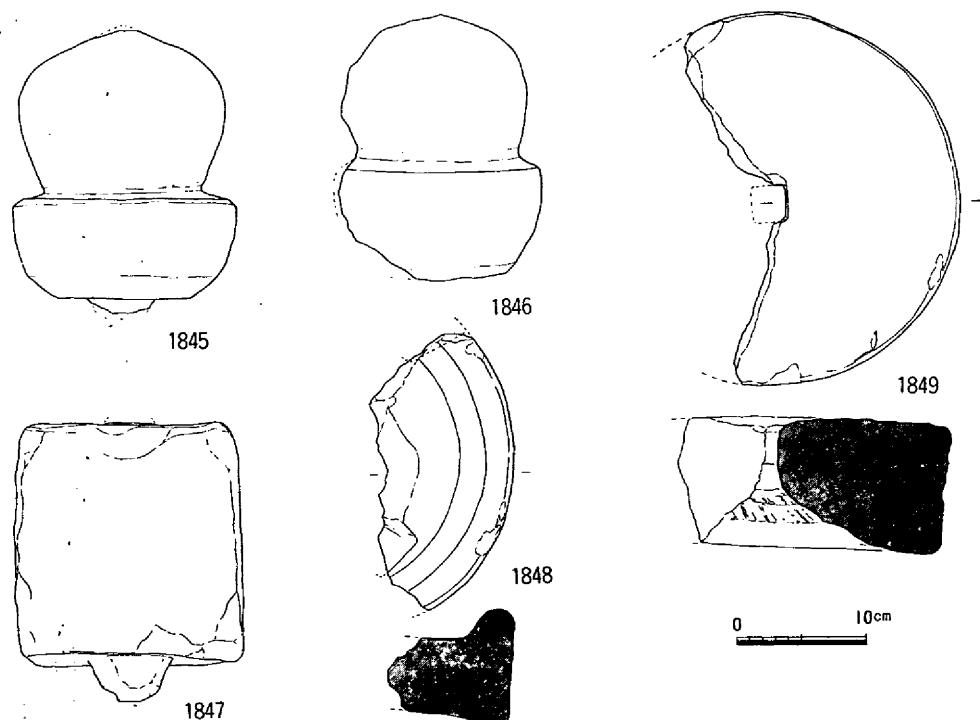
第215図 井戸2出土遺物(7) (1/4)



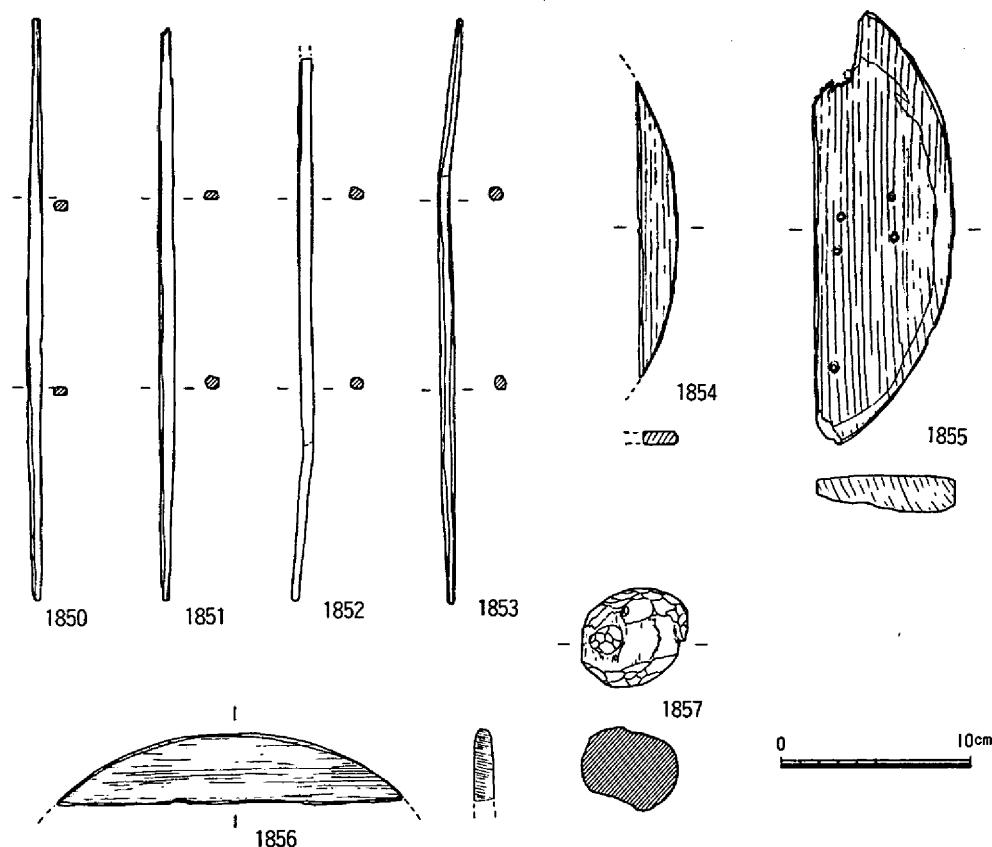
第216図 井戸2出土遺物(8) (1/4)



第217図 井戸2出土遺物(9) ( $\frac{1}{4}$ )



第218図 井戸2出土遺物(10) ( $\frac{1}{6}$ )

第219図 井戸2出土遺物(11)( $\frac{1}{4}$ )

以上、6段階に及ぶ工程で井戸側が形成され、ここに井戸の下部構造が完成する。

次に、井戸上部構造としての覆屋の有無であるが、残念ながらこれを裏づける柱穴等の遺構は井戸検出面においては認められなかった。しかし、井戸検出段階で、上端の石組み列を掘り形側に若干はずれた所でハイガイの堆積が認められた。これは、井戸周辺での炊事作業の実体を具体的に推察させるものといえよう。

井戸検出時には、大小の礫が1箇所に集中していた。中には数多くの焼石とともに、備前焼・中世土器等の日常雑器の破片がおびただしく検出された。この状況は、井戸の底に至るまで同じであった。また、井筒としての曲げ物も口径とほぼ同じ大きさの偏平な石で上を覆わっていた。これらの状況により、この井戸は、何らかの事情により意図的に使用を中止せられ埋められたものと考える。

出土遺物には、備前焼の甕・壺・擂鉢・椀・龜山焼の甕・擂鉢・鉢・鍋・羽釜等の土器類、臼・五輪塔等の石製品類、箸・蓋等の木製品類が数多く検出された。これら出土遺物の中には、D-21溝状遺構出土のものと接合関係にあるものも多く認められる。したがって、D-21溝状遺構同様に本井戸も同時廃絶したものと考える。

出土遺物により井戸の構築は室町時代末期頃であり、廃絶が江戸時代前半期頃と考える。(島崎)

### C 地点の遺構に伴わない遺物（第220図～第227図）

C地点から出土した遺構に伴わない遺物には、検出した遺構の時期と同様に、弥生時代後期から江戸時代前期に至る多量の遺物が認められた。これらの遺物の各時代別の相対量を検討した結果、検出した各時代別の遺構数にはほぼ比例していると考えられた。

弥生時代後期に属すると推定される土器には、壺、甕、高杯の小破片以外に、台付直口壺の完形品（1869）が存在した。この台付直口壺は、調査範囲の境界部分に掘削した排水溝の中から出土したのであるが、出土地点の周辺を精査したにもかかわらず遺構は検出できなかった。

古墳時代に属すると推定される土器には、須恵器の杯蓋（1874）と杯身（1875）以外に、土師器の椀（1873）が出土した。前者の須恵器が属する古墳時代後期の遺構としては、9区で方形の住居址（第168図、図版50）1軒を検出したが、後者の椀の時期である古墳時代前期の遺構は、右岸用水調査区には存在しなかった。

奈良時代から平安時代の時期に属すると推定される土器には、須恵器の杯蓋（1876～1879）と杯身（1880～1885）以外に、胎土に水漉粘土を使用して全体に丹塗りを施した、高台付椀（1886）と皿（1887）が出土した。1876の杯蓋と1886の高台付椀は、約半分が欠損しているものの器形を知ることが可能であるが、それ以外の土器はいずれも小破片であるため、全体の形を把握することができない。1888と1889の甕形土器は、どちらも口縁部の小破片であるため時期が断定できないが、おそらく奈良時代から平安時代の時期に属するであろう。

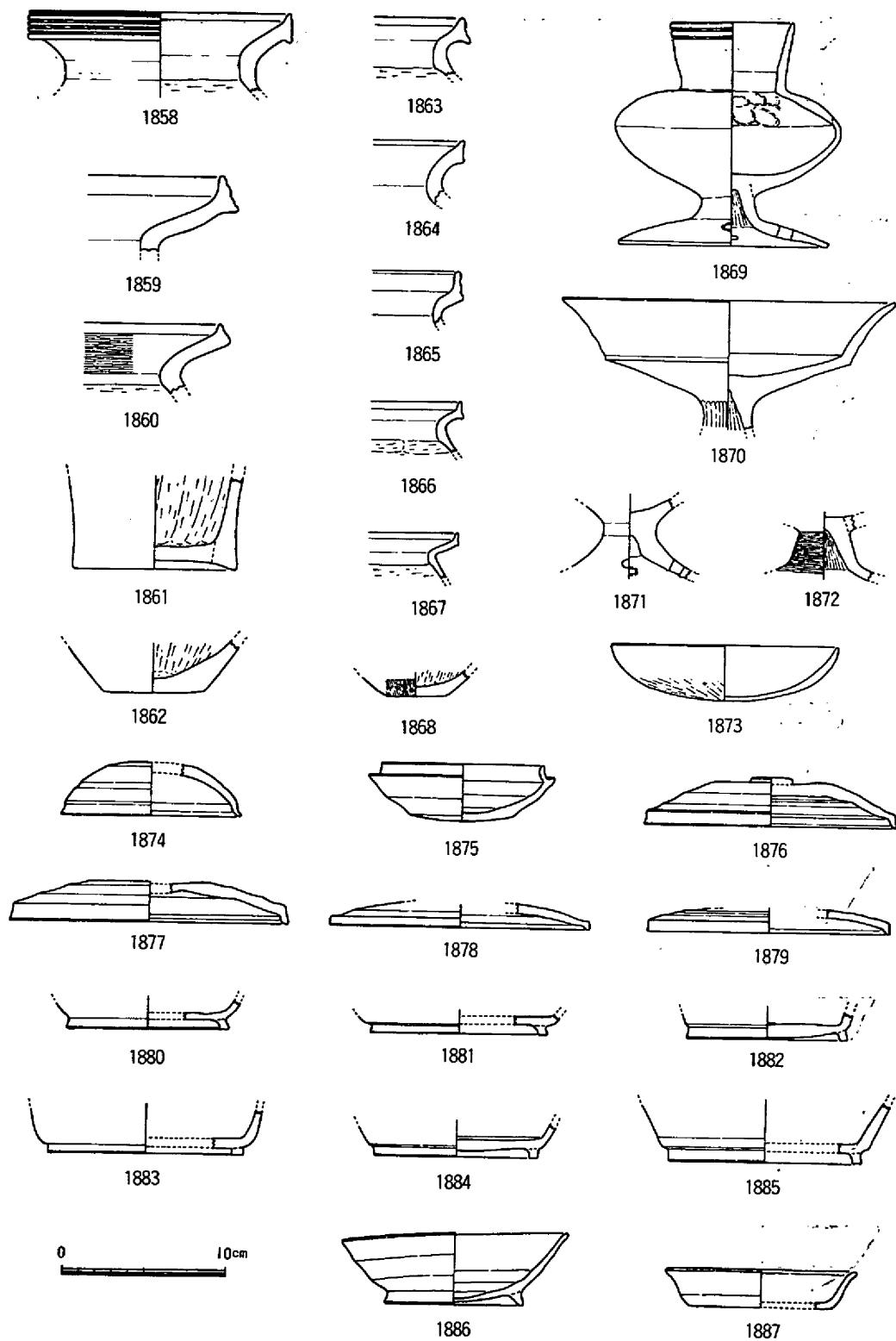
鎌倉時代に属すると推定される土器は、ほかの時期の土器に比較して量的に圧倒的多数を占めていた。器種には、土鍋（1890～1896）、高台付椀（1897～1960）、皿（1975～1982）、小皿（1983～2062）以外に、須恵質の椀（1961～1968）、こね鉢（1969～1971）、小皿（1972～1974）が少量ながら存在した。また畿内の和泉地方で生産されたと推定されている瓦器椀（2074～2115）や瓦器小皿（2116～2130）も比較的多く認められた。C地点の遺構に伴う瓦器は、いずれも外面に暗文が存在しないが、遺構に伴わない瓦器の中には、外面にも暗文が認められるもの（2074～2079、2119、2124～2127）が存在した。須恵質の土器（1961～1974）と外面に暗文が存在する瓦器は、平安時代後期でも鎌倉時代に近い時期に属するのかもしれない。

室町時代に属すると推定される土器には、備前焼の壺（2138）と播鉢（2139、2140）が存在した。中国製の白磁碗（2131～2134）は、岡山県内では室町時代の遺物に伴って出土する場合が多いが、C地点で検出したD-19溝状遺構では、鎌倉時代の遺物（第176図～第178図）と共に伴っていた。

九州の唐津地方で生産されたと推定される皿（2135～2137）と、口縁端部が著しく拡張して外面に凹線が認められる備前焼の播鉢（2141）は、おそらく江戸時代前期の時期に属するものであろう。

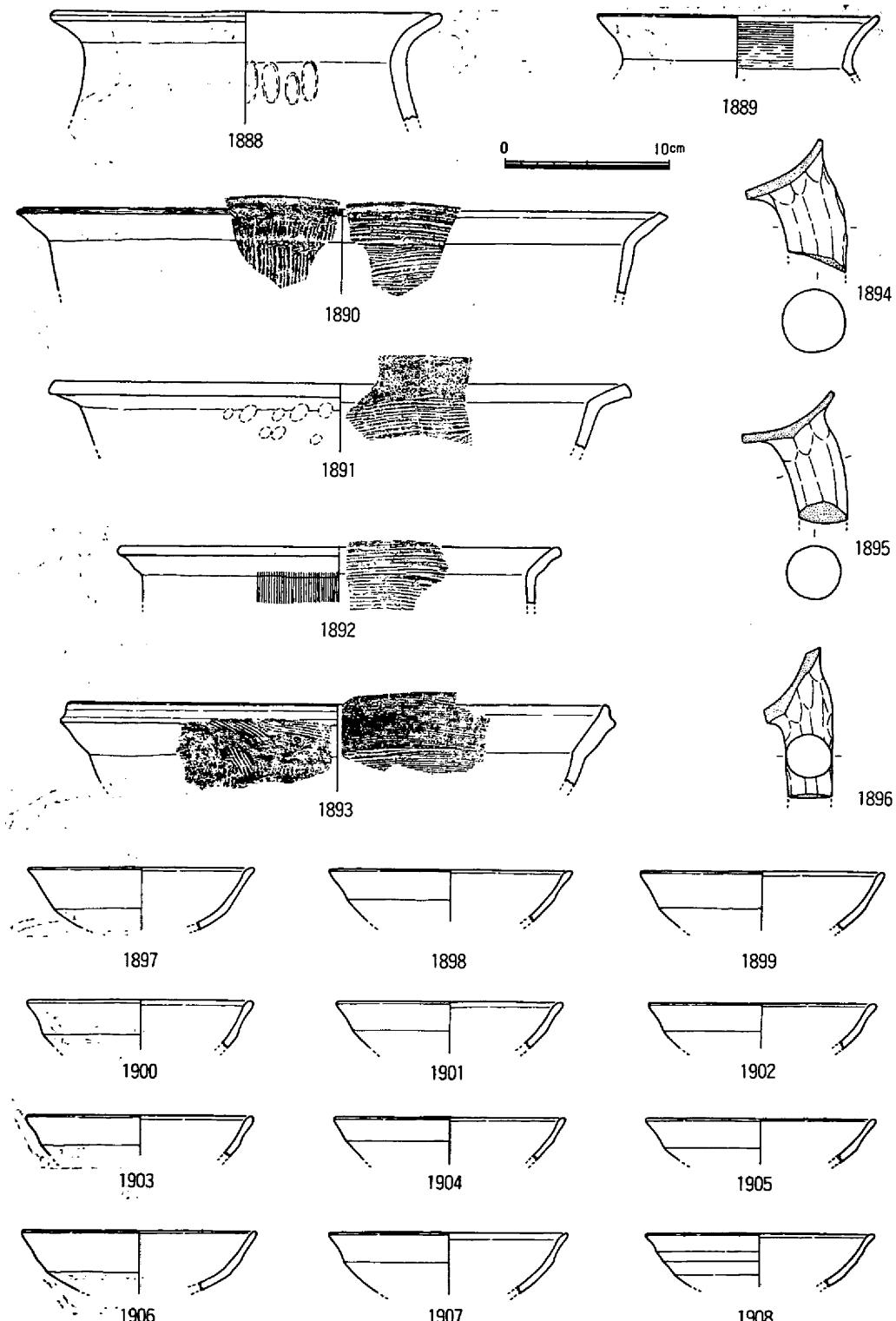
墨書き器片が3点（2071～2073）も認められた。2071の全体に丹塗りを施した底部の破片には、「高田」と書かれていた。おそらく豊饒祈願を意図したものであろう。2072の高台付椀底部の墨書きは、梵字の一種であろう。2073の高台が剥離した底部には、ただ「〇」が書かれていただけである。

土器以外に石錘（2063）と土錘（2064～2070）が出土したが、時期は断定できない。（福田）

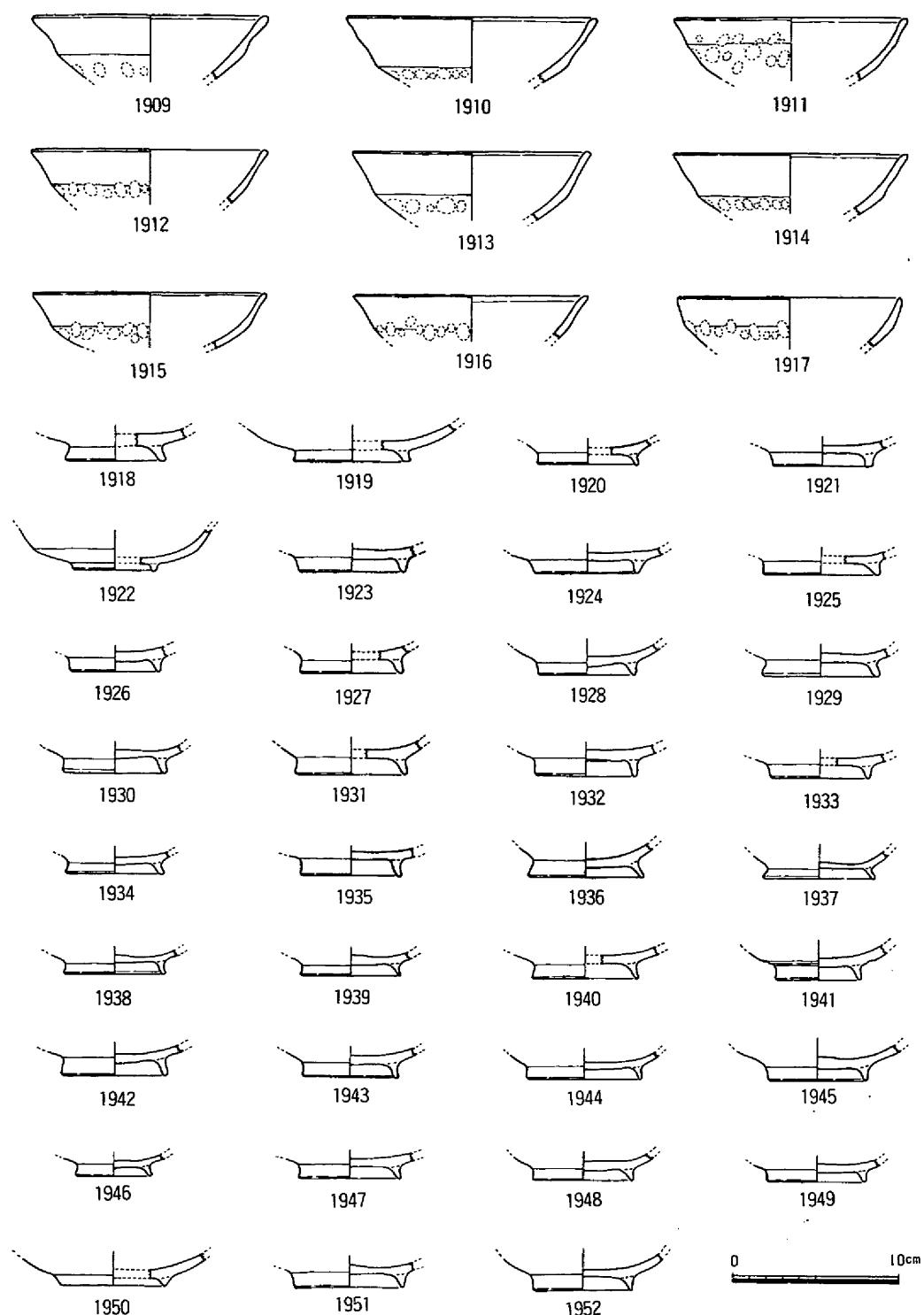


第220図 C 地点の遺構に伴わない遺物 (1) ( $\frac{1}{4}$ )

第1節 右岸用水調査区

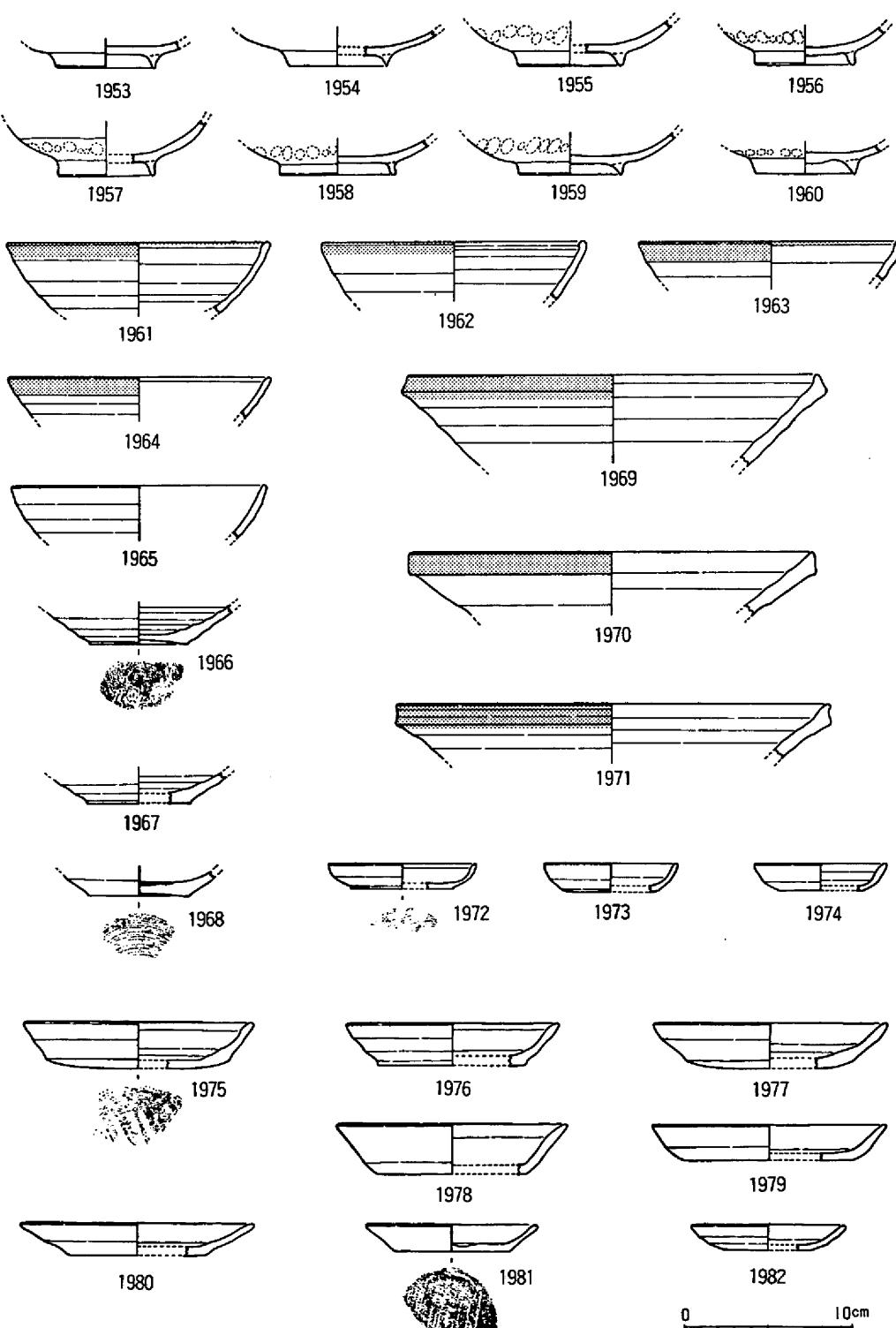


第221図 C 地点の遺構に伴わない遺物 (2) ( $\frac{1}{4}$ )

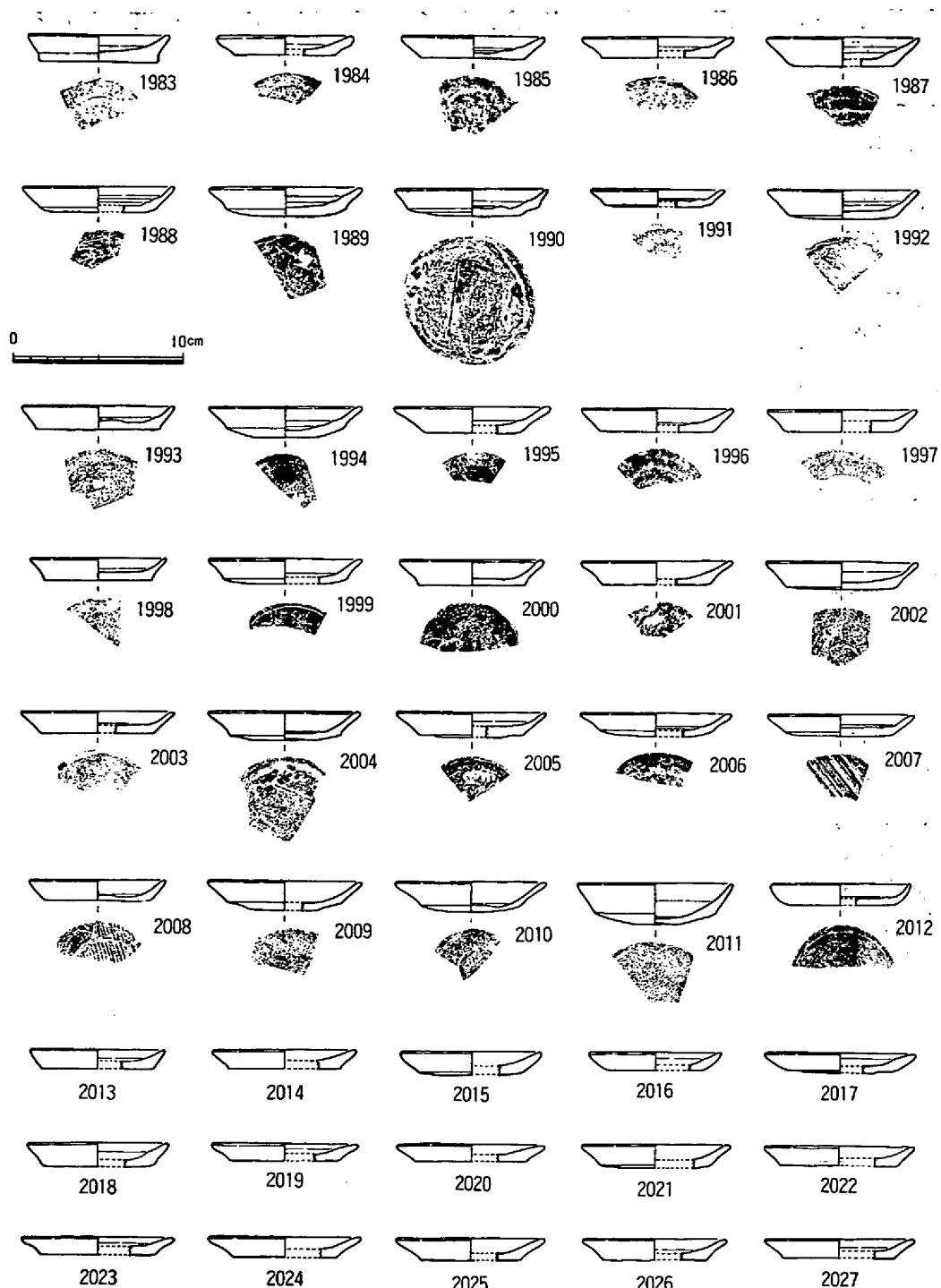


第222図 C地点の遺構に伴わない遺物（3）（ $\frac{1}{4}$ ）

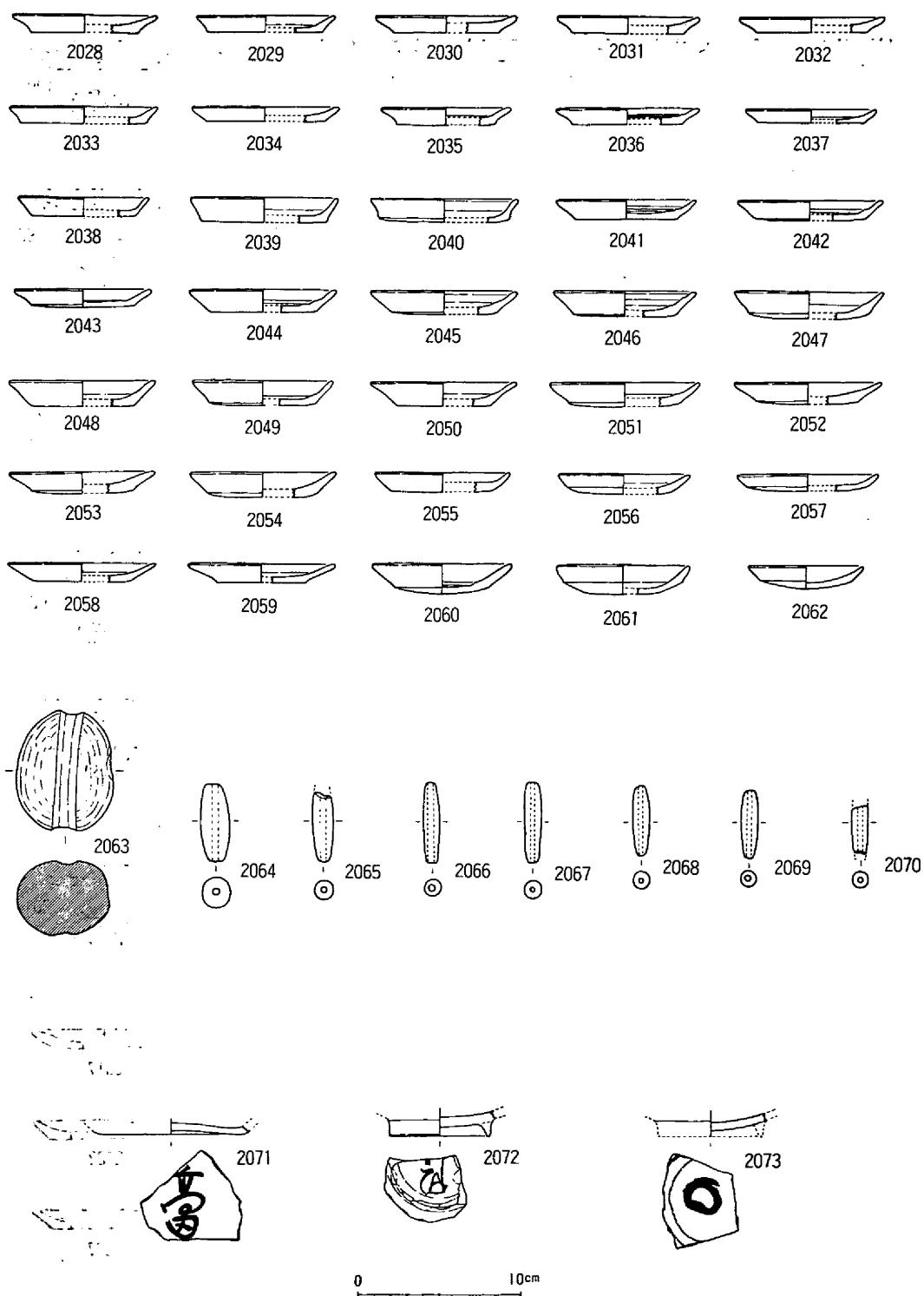
第1節 右岸用水調査区



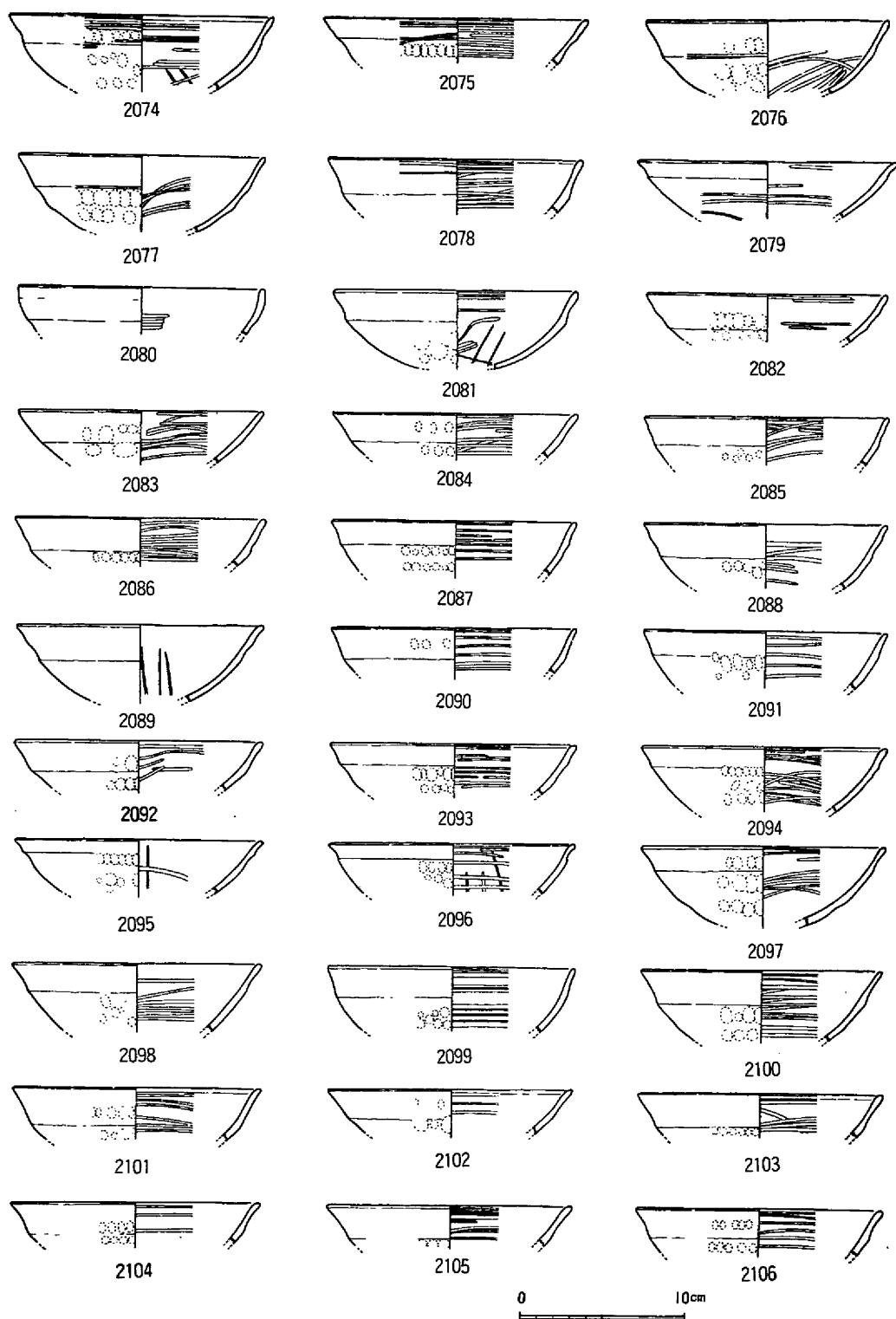
第223図 C地点の遺構に伴わない遺物(4) ( $\frac{1}{4}$ )



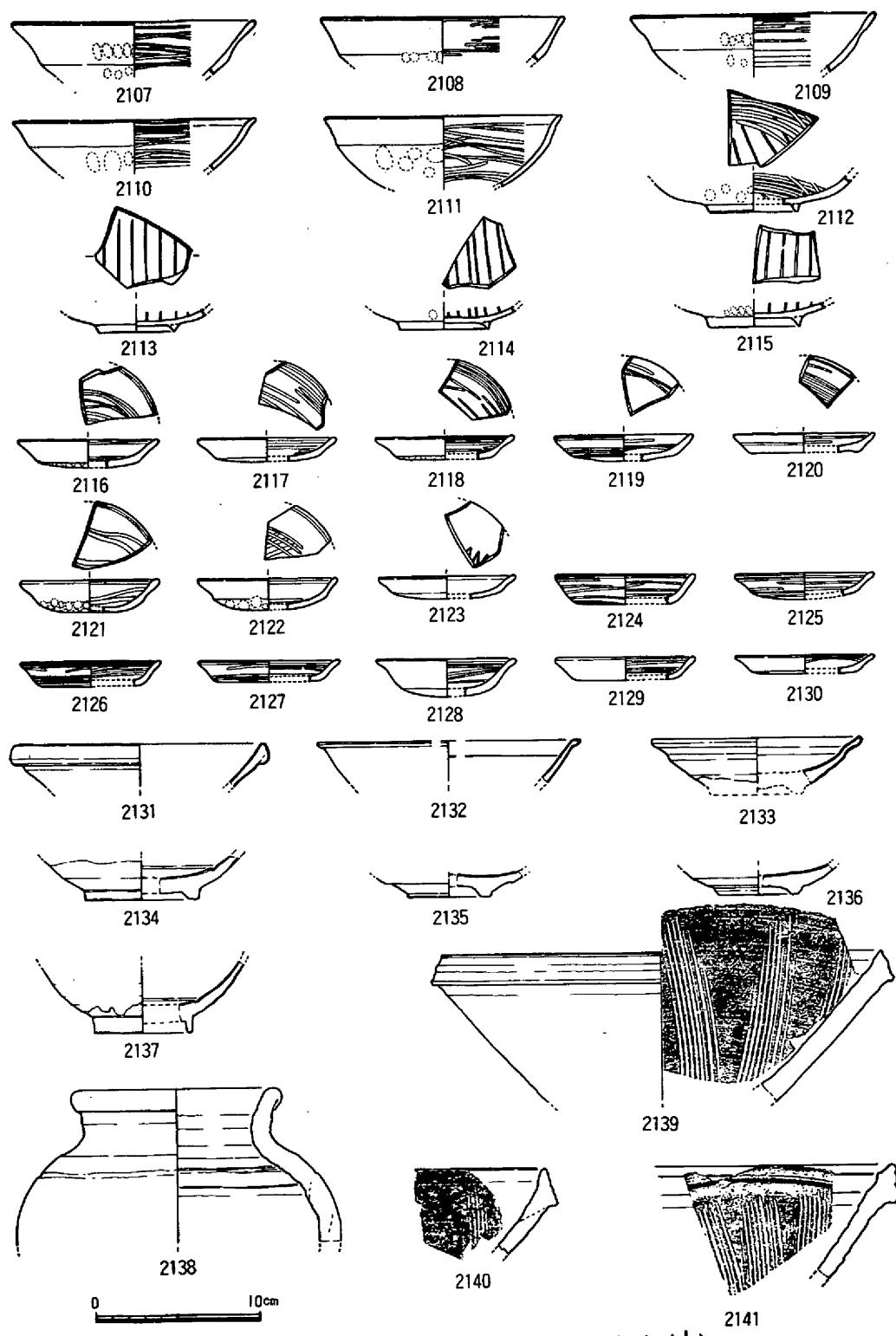
第224図 C地点の遺構に伴わない遺物（5）(1/4)



第225図 C 地点の遺構に伴わない遺物 (6) ( $\frac{1}{4}$ )



第226図 C 地点の遺構に伴わない遺物 (7) ( $\frac{1}{4}$ )



第227図 C地点の遺構に伴わない遺物 (8) ( $\frac{1}{4}$ )

#### 4. D 地点 (10区～12区)

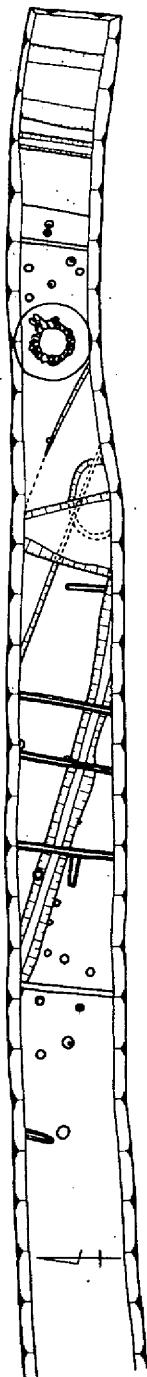
D地点は、百間川岩間遺跡にもっとも近接した西端に位置する範囲で、調査区全体の10区から12区が含まれる(第90図)。当初の発掘調査実施予定地は、C地点の9区までになっていたのであるが、9区の西端部分になっても住居址(H-1, H-2)や柱穴と推定される小規模なピットが検出され、さらに両方向へ遺構の存在する微高地が続いている可能性が想定されたため、調査範囲を拡張したのである。発掘調査を実施した時には、水田面に土盛りを行った広場になっていた。この調査地点は、後世の水田によって著しく削平されていたから、表土面より約70cmも掘り下げるところまで到達した。遺構面は安定した粘質土の上面で検出した1面のみで、A地点やC地点のように遺構面が何層にも重なった状況は認められなかった。D地点で検出した遺構は、弥生時代に属するものと鎌倉時代から江戸時代に属するもので、古墳時代から平安時代の時期の遺構は存在しなかった。

##### 1) 弥生時代の遺構

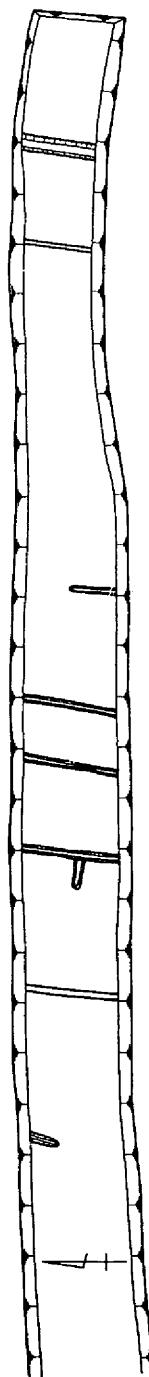
D地点で検出した弥生時代に属すると推定される遺構は、柱穴と考えられる小規模なピット以外に、溝状遺構2(D-24, D-25)と土壙1(P-20)が存在した(第231図)。2条の溝状遺構はほぼ平行しており、細長い調査範囲に対して斜め方向になっていた。P-20土壙は、上面をD-24溝状遺構に削平された後に、さらに鎌倉時代から室町時代と推定されるD-26溝状遺構に西側を大きく切られていた。この土壙が存在した地点は、D-26溝状遺構に沿って流入する水量が多く、調査を実施している時には、手探りで遺物を取り上げなければならなかつたので、遺物の出土状況の写真撮影や実測図の作成は、努力したにもかかわらず不可能であった。この土壙の深さは、検出面から比較的浅かったが、多量の土器片(第237図～第240図)が出土した。

##### 溝状遺構24(第232図)

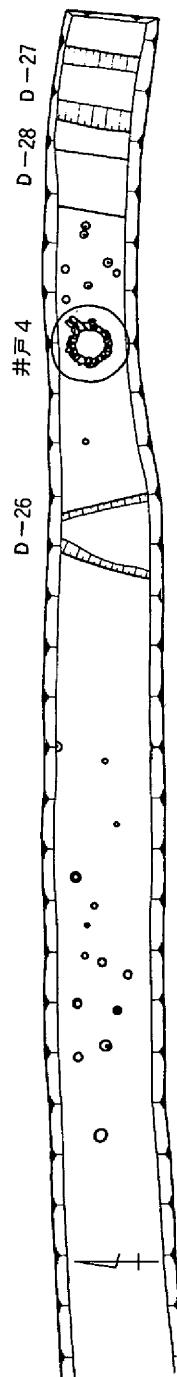
10区と11区の境界地点で検出した溝状遺構である。細長い調査範囲に対して斜め方向を示し、後述するD-25溝状遺構の方向にはほぼ平行していた。上面が著しく削平されていたため、遺構の痕跡が部分的に不明な地点が存在した。この溝状遺構はP-20土壙の上面に存在し、後にD-26溝状遺構に切られていた。部分的に不明な地点が存在するものの、検出面での幅は2m10cmになるようである。検出面からの深さは、もっとも残存状態が良好な地点で約20cmと極めて浅く、断面は上面に開いた「U」字形を呈していた。底部は平坦な水平面になっており、東側のレベルが西側よりも低くなっていた。遺構内には灰黄褐色粘質土が堆積しており、弥生時代後期の百間川後期Ⅲの時期に属すると推定される土器片(第233図)が出土した。この土器片の中には甕と高杯の小破片が認められ、外面に叩きの痕跡を有するもの(2143)も存在した。この溝状遺構に近接した時期の遺構はP-20土壙であるが、遺構の切り合い関係によると、P-20土壙が古くてD-24溝状遺構が新しい。



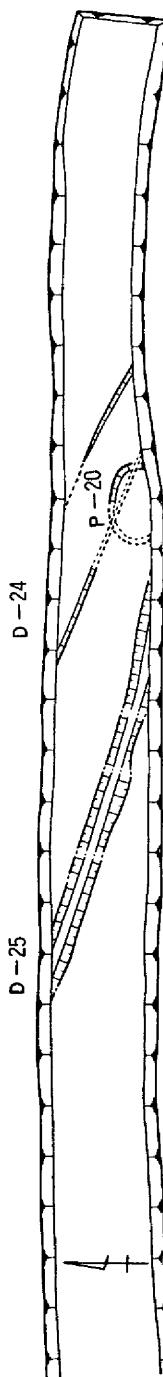
第228図 D地点遺構配置図 ( $\frac{1}{300}$ )



第229図 現代の遺構配置図 ( $\frac{1}{300}$ )

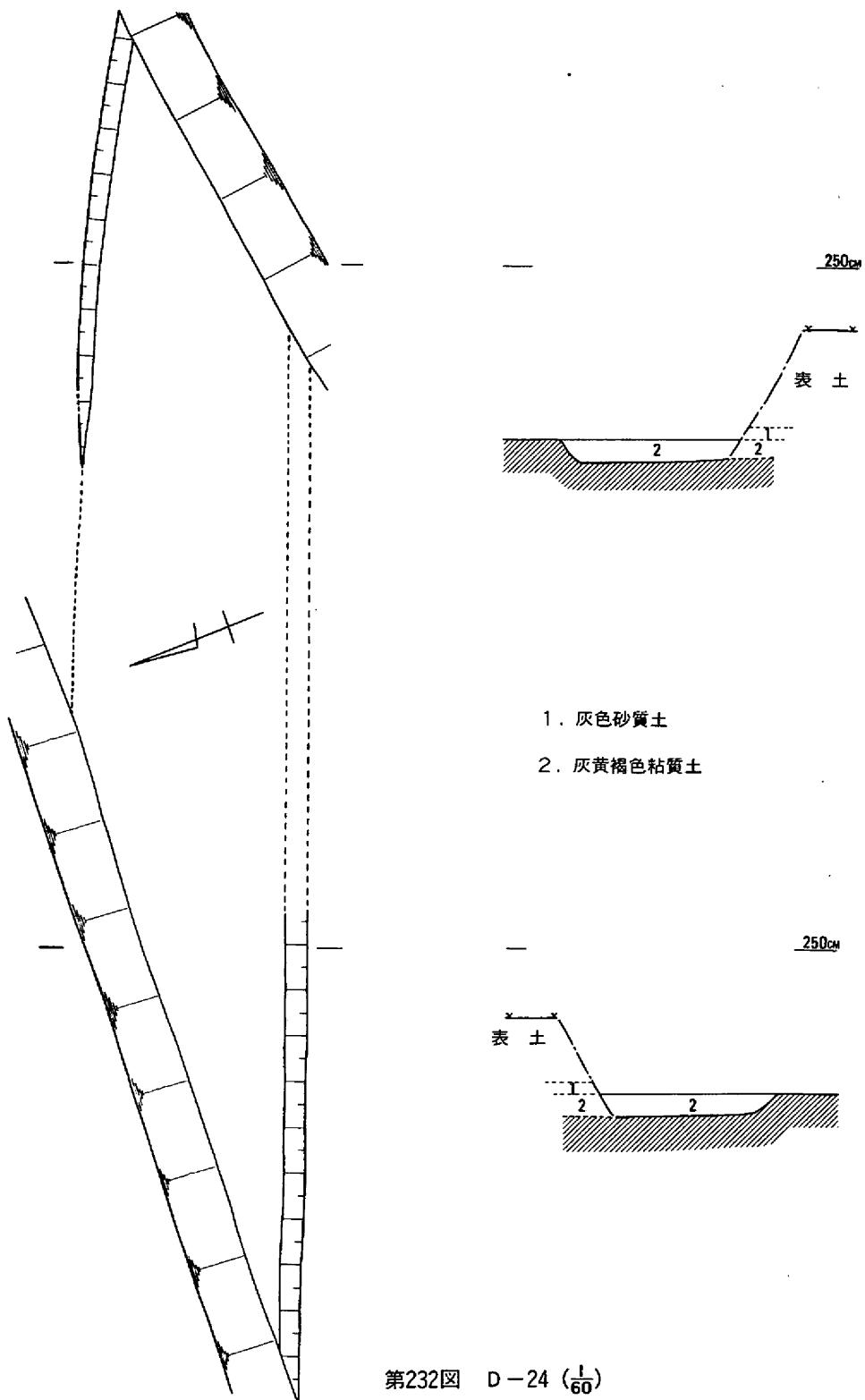


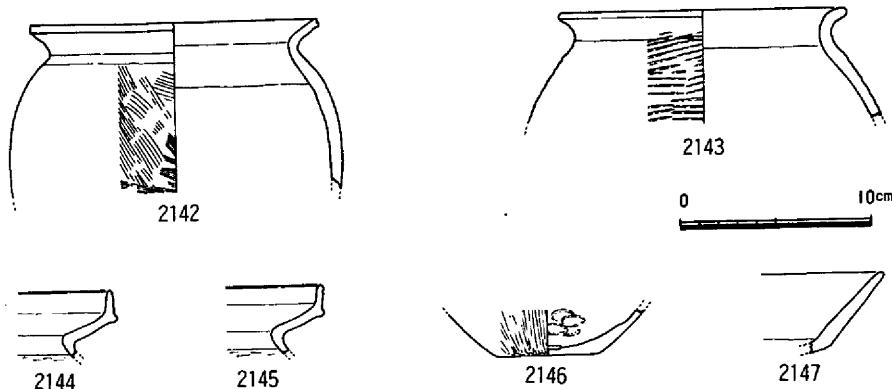
第230図 鎌倉時代から江戸時代の遺構配置図 ( $\frac{1}{300}$ )



第231図 弥生時代の遺構配置図 ( $\frac{1}{300}$ )

第6章 百間川当麻遺跡

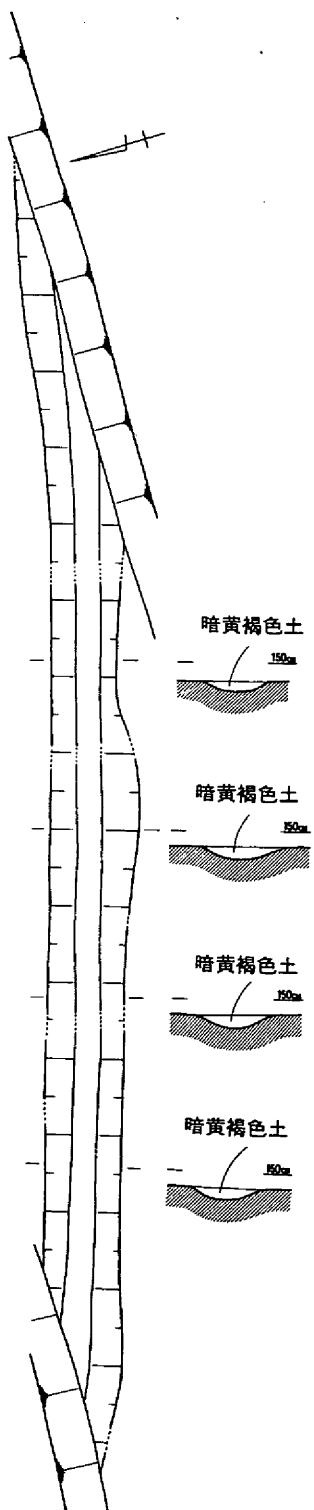


第233図 D-24出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )**溝状遺構25（第234図）**

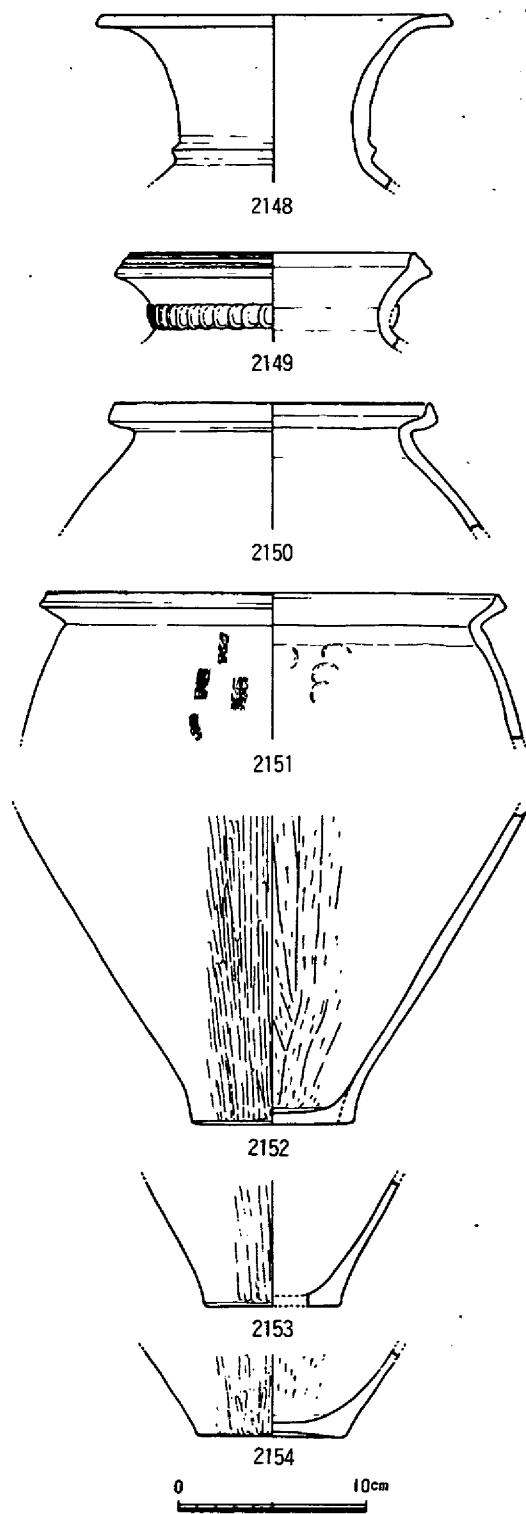
11区で検出した溝状遺構である。細長い調査範囲に対して斜め方向を示し、前述したD-24溝状遺構の方向にはほぼ平行していた。この溝状遺構は上面が著しく削平されていたから、わずかに底部に近い部分が残存していただけであった。検出面での幅は85cmから1m18cm、検出面からの深さは12cmから18cmと極めて浅かった。遺構内には暗黄褐色土が堆積しており、断面は浅い「U」字形を呈していた。この溝状遺構は調査範囲内ではほぼ直線的な方向を示していたが、調査範囲外の東側では緩やかに弯曲するようである。出土遺物はいずれも土器片（第235図）で、弥生時代中期後半の百間川中期Ⅲの時期に属すると推定される。したがってこの溝状遺構は、百間川当麻遺跡の右岸用水調査区で検出した遺構の中では、もっとも古い時期のものである。

**土壙20（第236図）**

10区の西端で検出した土壙である。この土壙が存在した地点は、D-26溝状遺構に沿って流入する水量が多く、発掘調査作業は極めて困難な状況であった。南側部分は調査範囲外になるため、調査することができなかった。この土壙は、北東端部分を弥生時代後期後半の時期に属すると推定されるD-24溝状遺構に新しく切られていた。また西側の約半分は、鎌倉時代から室町時代の時期に属すると推定される幅の広いD-26溝状遺構に、後になって新しく切られていた。したがってこの土壙は、遺構の切り合い関係から考えて、D-24溝状遺構やD-26溝状遺構よりも古い時期の遺構である。この土壙が廃絶されてあまり時間が経過しない時点に、D-24溝状遺構が構築された可能性が強い。この土壙はD-24溝状遺構やD-26溝状遺構に削平されて全容がはっきりしないが、平面形は橢円形に近い形態を呈するようである。推定値の長径は約3m20cm、短径は約2m10cmを測るであろう。検出面からの深さは、上面がD-24溝状遺構に削平されていたから、約35cmと比較的浅くなっていた。遺構

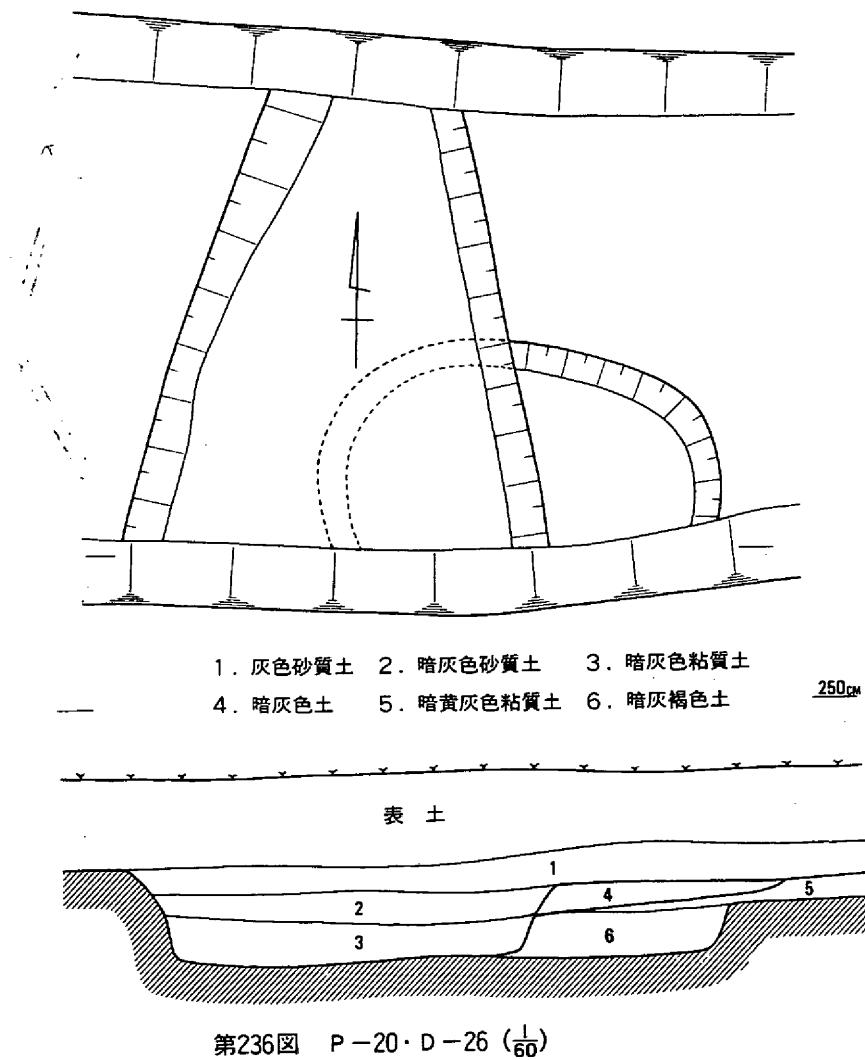


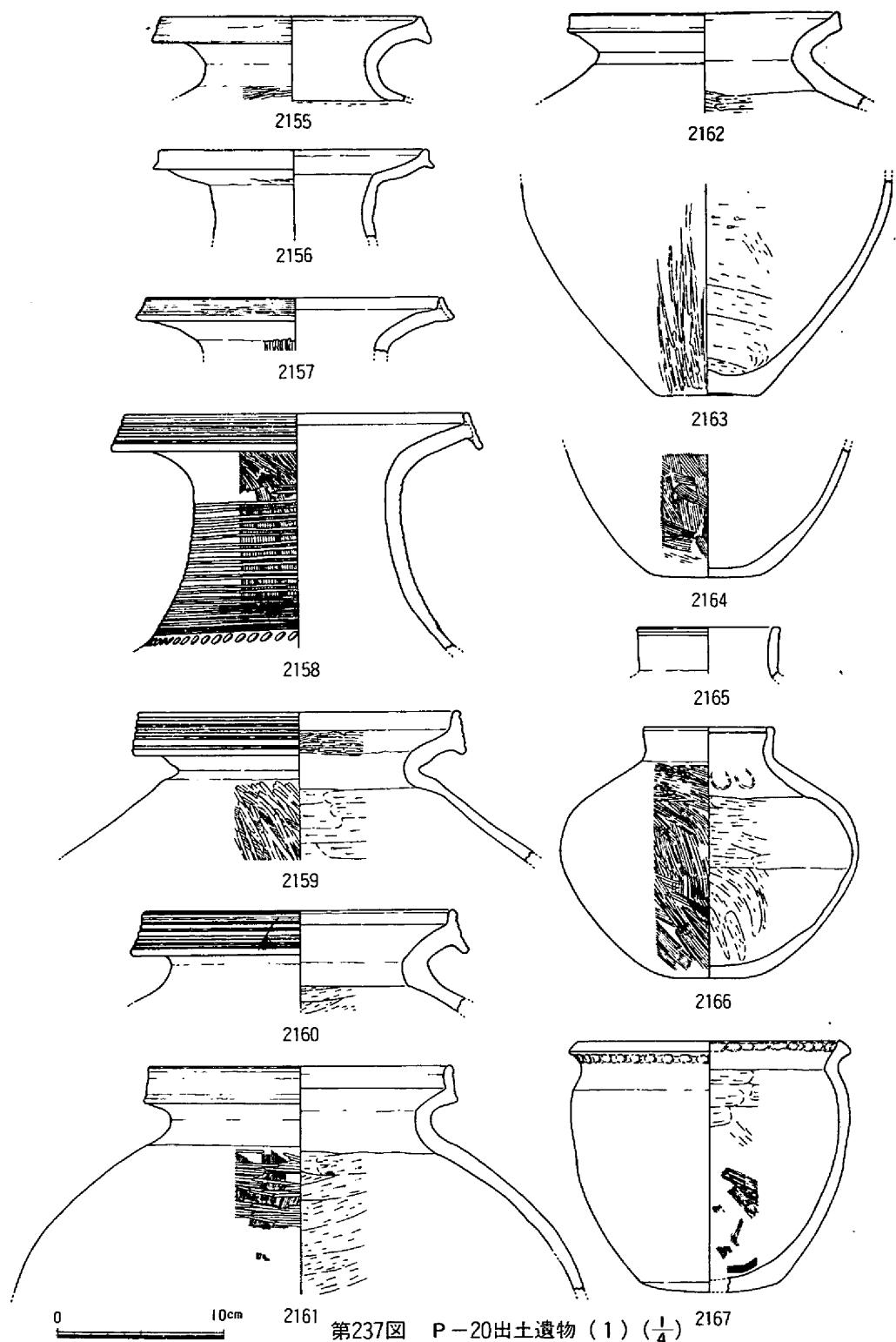
第234図 D-25 ( $\frac{1}{100}$ )

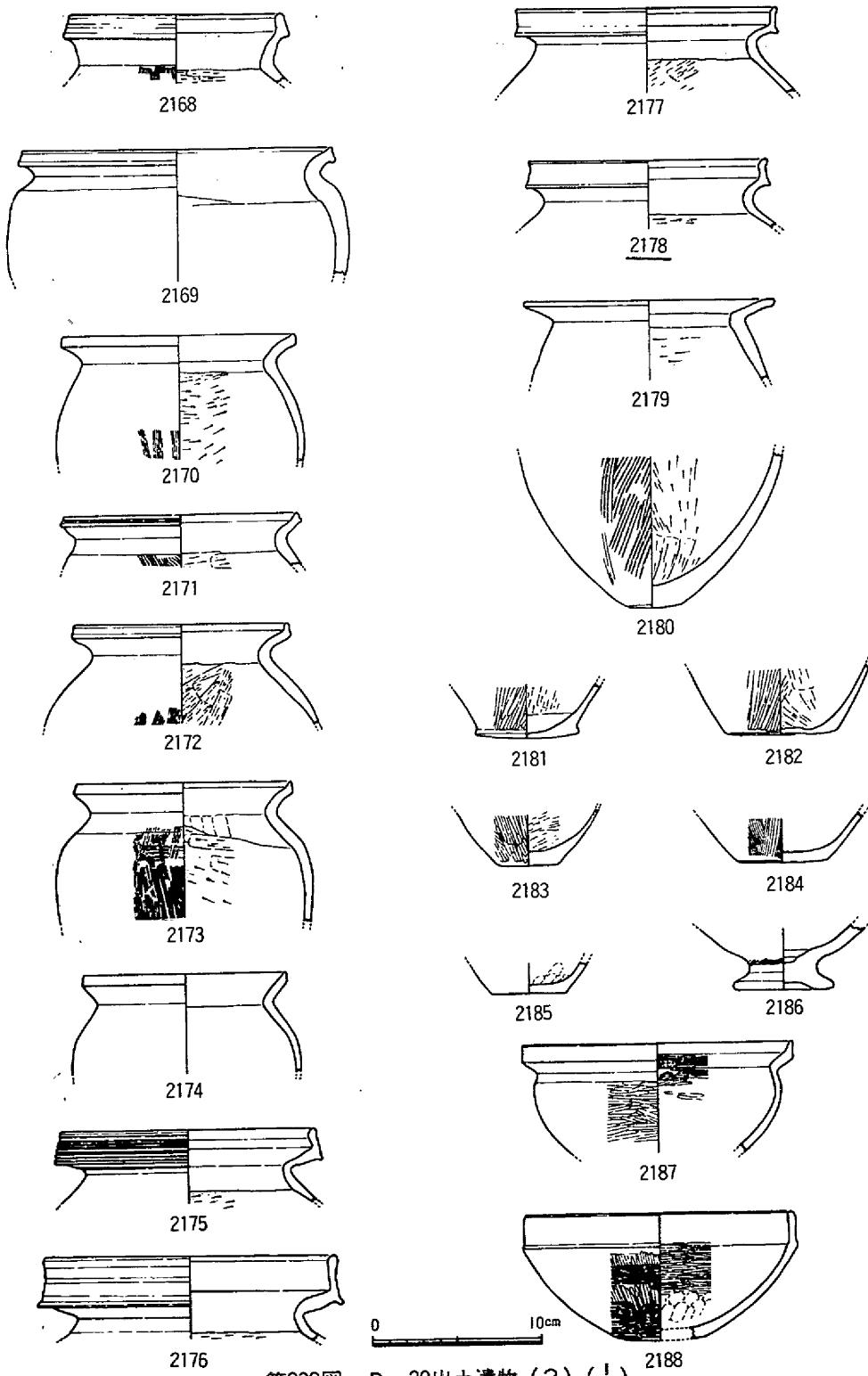


第235図 D-25出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )

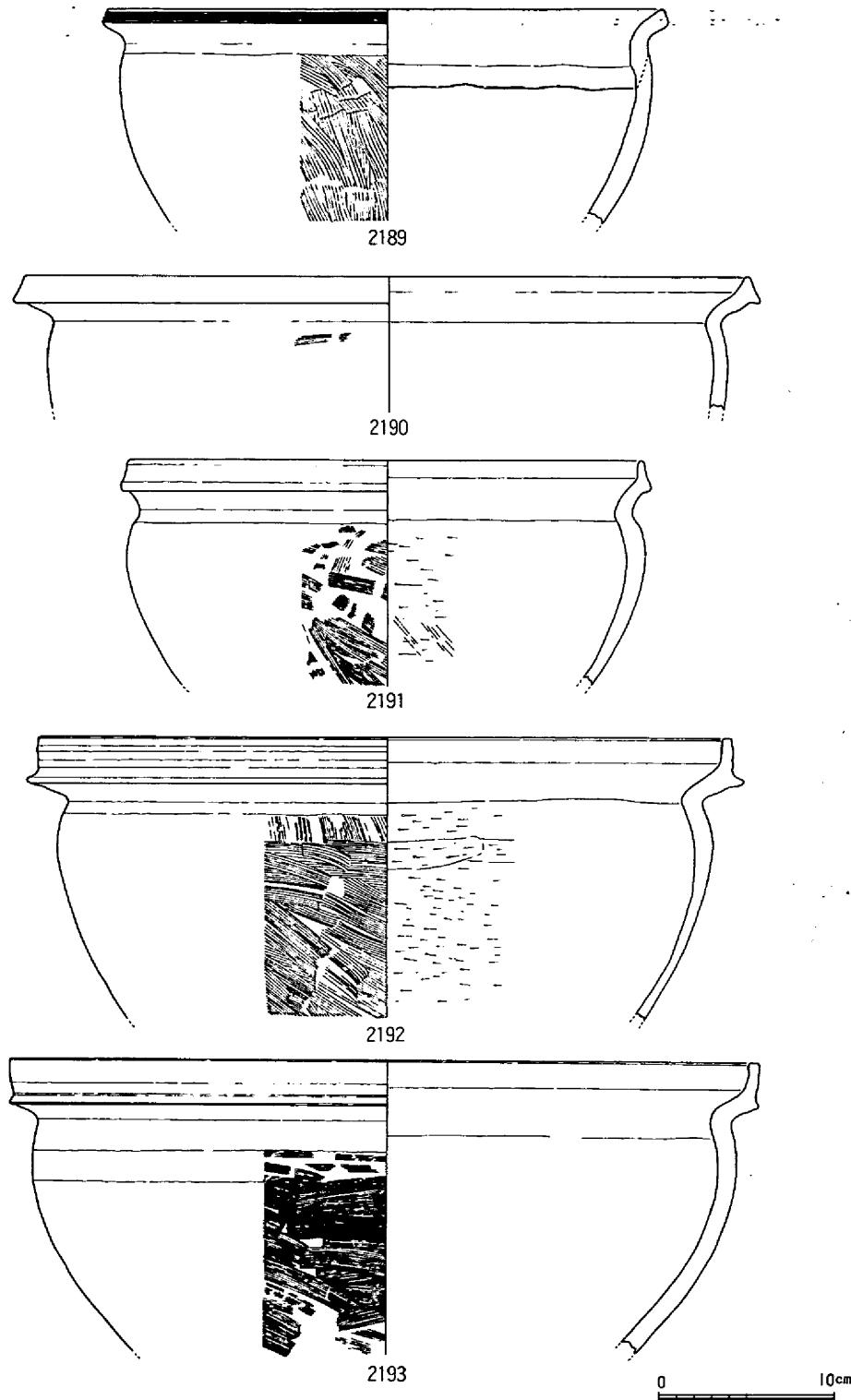
内には暗灰褐色土が堆積しており、断面は浅い「U」字形を呈するようである。この土壤は残存する部分が少なく、検出面から底部まで比較的浅いにもかかわらず、多量の土器片（第237図～第240図）が出土した。湧水が激しかったから、土器片の出土状況写真撮影や実測図作成は不可能で、手探りで土器片を取り上げたのであるが、土器片は土壤内に塊まって密集していた。これらの土器片は、大多数のものが弥生時代後期の百間川後期IVの時期に属すると推定されるが、2197の高杯形土器は明らかに弥生時代後期でも比較的古い時期の百間川後期IIの時期に属すると考える。また2168の壺形土器、2169の甕形土器、2189の鉢形土器は、百間川後期IIIの時期と考えるのが妥当かもしれない。



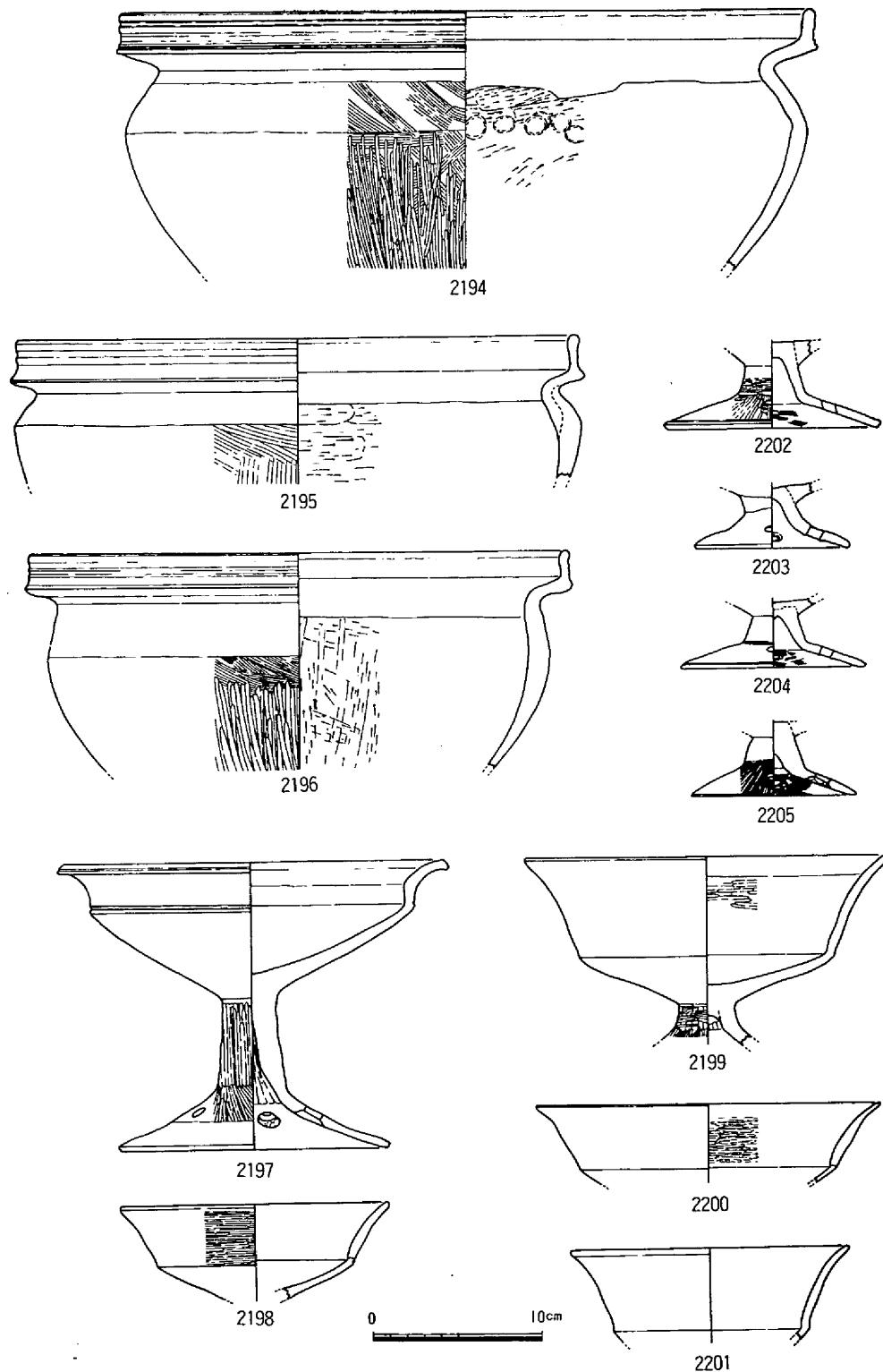




第238図 P-20出土遺物 (2) ( $\frac{1}{4}$ )



第239図 P-20出土遺物(3) ( $\frac{1}{4}$ )



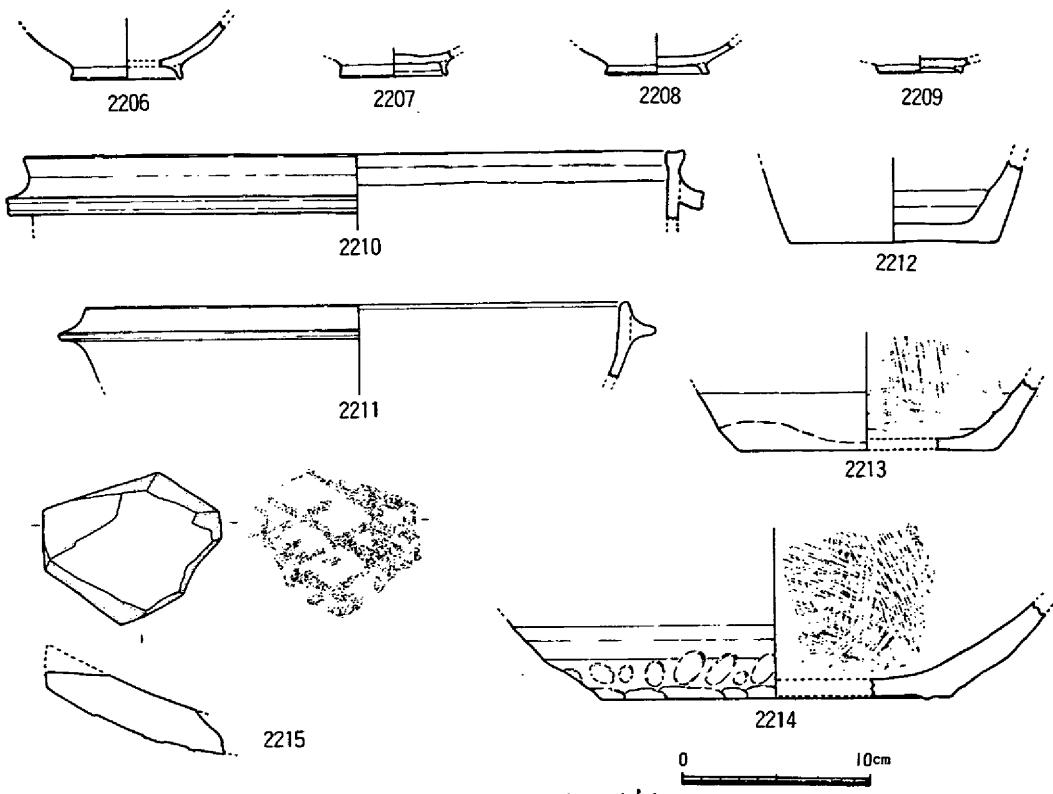
第240図 P-20出土遺物(4) (1/4)

## 2) 鎌倉時代から江戸時代の遺構

D地点で検出した鎌倉時代から江戸時代の時期に属すると推定される遺構は、柱穴と考えられる小規模なピット以外に、溝状遺構3(D-26~D-28)と石組みの井戸(井戸4)が存在した(第230図)。3条の溝状遺構は、いずれも細長い調査範囲に対して直交する南北方向を示していた。D-26溝状遺構とD-27溝状遺構は、底部まで比較的深かったことによって湧水が激しく、発掘調査作業が極めて困難であった。石組みの井戸は、調査範囲内に遺構全体が現われた状態で検出したのであるが、底部は深く掘り進められて砂質土の湧水面に到達していたため、発掘調査中には絶えず多量の湧水が認められた。

## 溝状遺構26(第236図)

10区と11区の調査区境界地点で検出した溝状を呈する遺構である。この遺構は、弥生時代後期に属すると推定されるD-24溝状遺構とP-20土壙を、後に新しく切って構築していた。発掘調査の過程では、激しい湧水に襲われ、作業が極めて困難であった。この遺構の検出面での幅は、調査範囲の北側境界地点で約1m55cm、調査範囲の南側境界地点で約3m40cmを測り、北側地点に比して南側地点



第241図 D-26 出土遺物 (1/4)

の幅が著しく広くなっていた。したがってこの遺構は、調査範囲外にわずかに張り出しているだけで、南北方向へ延々とは続かない「池」のような遺構になるのかもしれないが、調査範囲が東西方向に細長い、幅の狭い部分に限定されたため、詳細は不明であった。検出面からの深さは約80cmを測り、断面が上方へ開いた「U」字形を呈していた。この遺構の底部は、わずかな起伏が認められるものの、ほぼ平坦な面になっていた。底部には25cmから35cmの厚さに暗灰色粘質土が堆積しており、その上位には暗灰色を呈する砂質土が認められた。この遺構の最上位には、東側から流入したと考えられる灰色砂質土が存在した。遺構内から出土した遺物（第241図）には、高台付椀（2206～2209）、羽釜（2210、2211）、備前焼の壺（2212）や擂鉢（2213、2214）、平瓦（2215）等の破片が認められた。この遺構は、出土遺物から推定して鎌倉時代から室町時代にかけて存在していたと考える。ところが2214の備前焼擂鉢は、底部の小破片で詳細が不明であるものの、内面に認められる放射状の条線が多条化して密に施されているから、江戸時代に属する可能性も否定できないので、さらに長期間にわたって存続していたのかもしれない。

#### 溝状遺構27（第242図）

10区の東端で検出した溝状遺構である。この溝状遺構を検出した位置は、地形のレベルがわずかに高い雑草の生茂る畠地であったC地点と、水田面に土盛りを行って広場になっていたD地点との境界部分で、発掘調査の過程には激しい湧水に襲われ、作業が極めて困難であった。検出面での幅は2m 95cmから3m 05cmを測り、ほぼ南北方向に構築されていた。検出面からの深さは約85cmを測り、断面が比較的深い「U」字形を呈していた。遺構内に堆積していた土砂は、底部に接して暗灰褐色土が存在し、その上面に暗灰色土と赤褐色土が認められた。さらにはその上面には、東側から流入した状態で茶褐色土が堆積し、上面を灰褐色土に覆わっていた。この溝状遺構を検出した地点の北側は、発掘調査に必要な器材を運搬するために、自動車が何度も往復したのであるが、雨が降った翌日には、自動車の車輪が埋まってしまう軟弱な部分が南北方向に帯状を呈して存在し、この溝状遺構が調査範囲外の北方向へ続いていることが推察された。

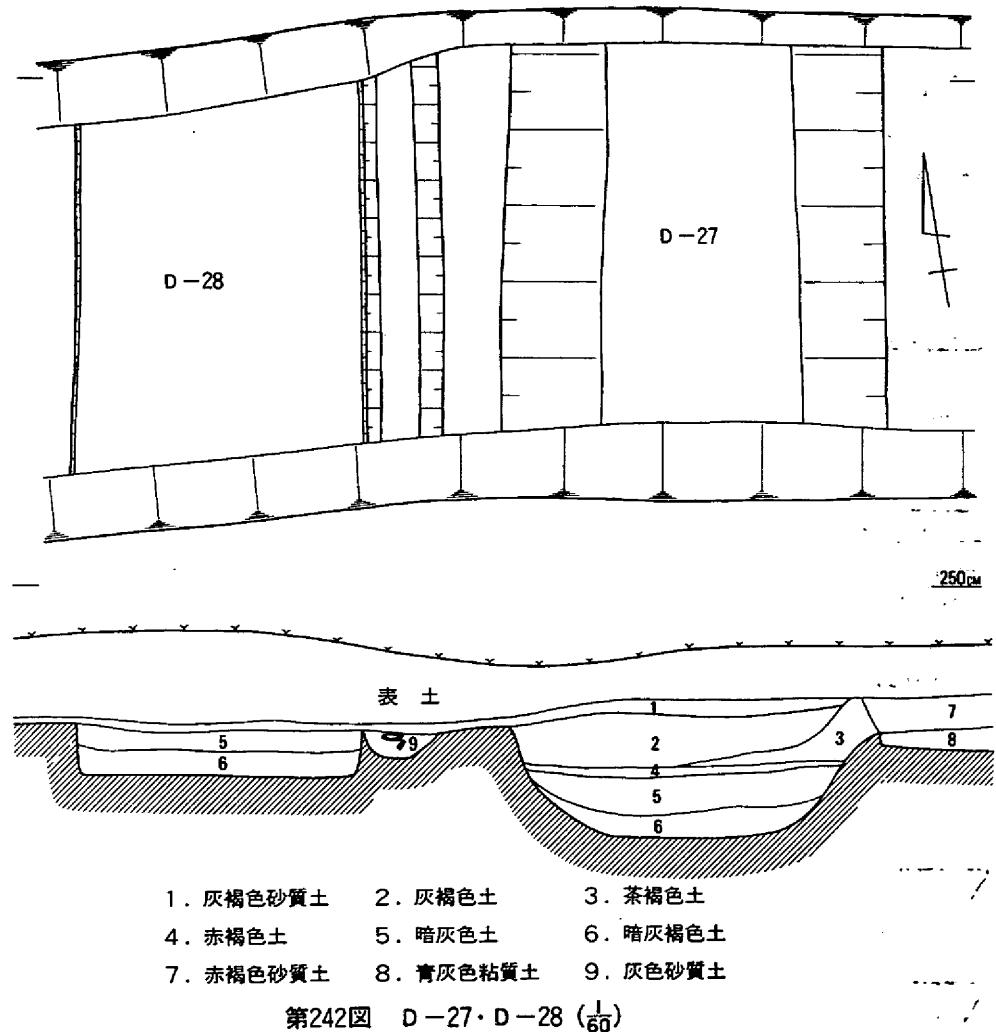
遺構内から出土した遺物（第243図）には、小皿（2216～2227）以外に備前焼の大甕（2228、2229）と擂鉢（2230～2232）の破片が認められた。土器の器種は3種類にすぎないが、小皿は完形品と破片で12個体も図化することが可能であった。これらの小皿は口径が9.2cmから9.4cm、器高が1.3cmから1.8cmと計測値がほぼ揃っており、いずれも底部は糸切りで全体に回転なでを施していた。しかもどの個体も胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で淡灰褐色または淡灰黄褐色を呈していた。備前焼が出土する集落遺跡を発掘調査されたことが極めて少ない現状では、生活に使用されていた備前焼以外の日常雑器のセット関係を知る資料に乏しいが、この溝状遺構から出土した遺物は、備前焼以外の器種は小皿のみであるものの、良好な一括遺物と考える。この溝状遺構の時期は、出土遺物から推定して室町時代の前半期に属するであろう。

なおこの溝状遺構を検出した地点より西側には、柱穴と推定される小規模なピットが極めて少なかった。東側に位置するC地点では、小規模なピットが数多く存在し、柱根が底部に残存していたもの

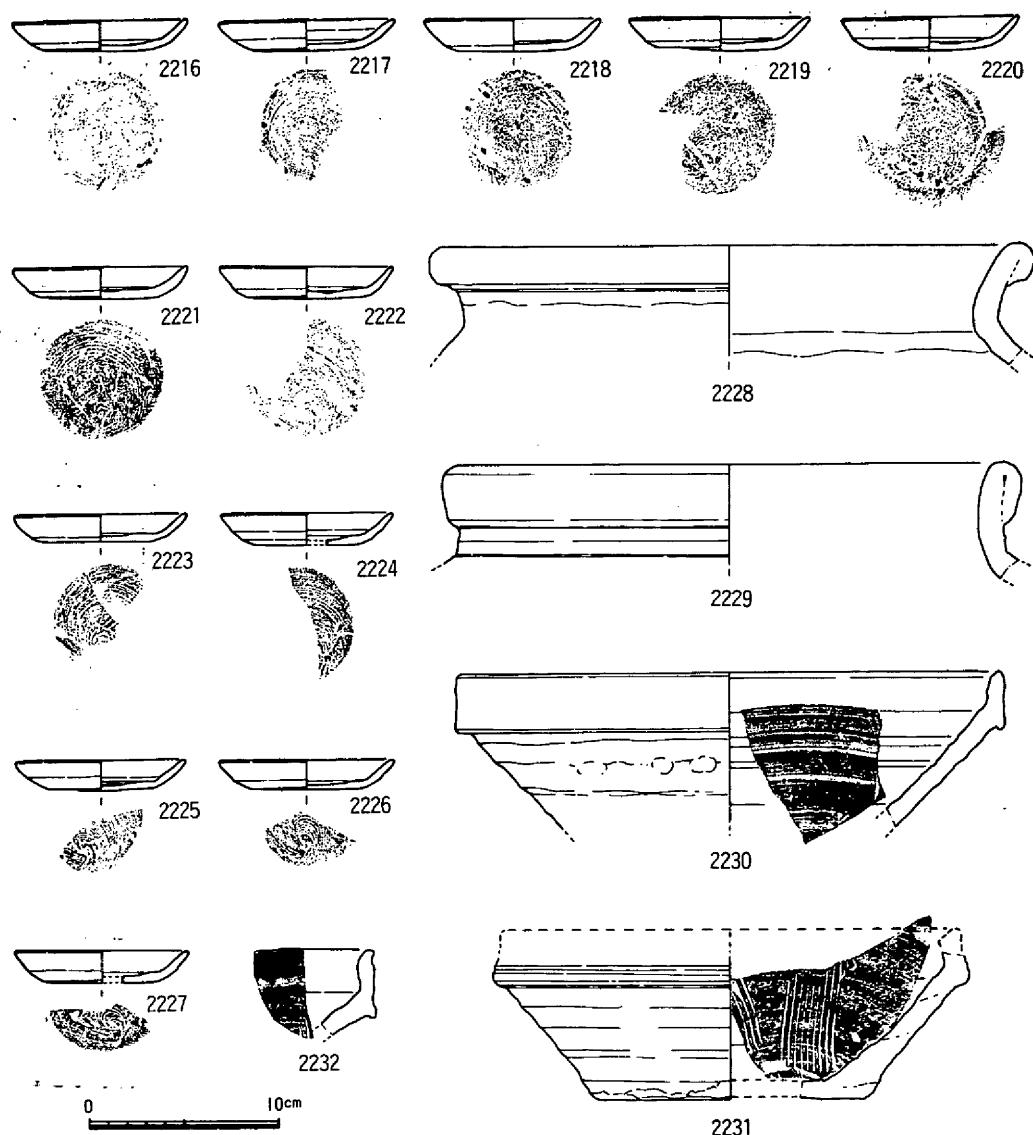
も認められた。調査範囲が細長くて狭い範囲に限定されたため、建物にまとめるにはためらいが感じられたが、少なくとも数棟の建物が存在するのは確実である。したがってこの溝状遺構は、室町時代の前半期における集落を画する西側の境界になっていた可能性が強い。東側の境界に相当するのは、丘陵斜面裾部で検出したD-21溝状遺構ではなかろうか。

溝状遺構28（第242図）

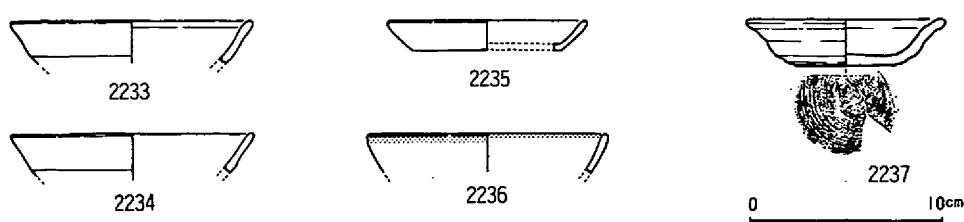
10区のD-27溝状遺構と井戸4の中間地点で検出した溝状遺構である。この溝状遺構は、前述したD-27溝状遺構とはほぼ平行する南北方向に構築されていた。検出面での幅は2m25cmから2m30cmを



第1節 右岸用水調査区



第243図 D-27出土遺物 (1/4)



第244図 D-28出土遺物 (1/4)

## 第6章 百間川当麻遺跡

測り、ほぼ一定の幅になっていた。検出面からの深さは約40cmを測り、断面が浅い「U」字形を呈していた。底部は平坦で水平な面になっていた。遺構内の底部には約20cmの厚さに暗灰褐色土が堆積し、その上位に暗灰色土が認められた。この溝状遺構から出土した遺物（第244図）には、高台付椀（2233, 2234）、皿（2235）、糸切りの底部を有すると推定される椀（2236）、底部に糸切り痕跡が認められる備前焼の皿（2237）の破片が存在した。2233から2236の出土遺物は、鎌倉時代に属するであろう。2237の備前焼の皿は、おそらく室町時代の前半期に属すると推定される。

（福田）

### 井戸4（第245図）

丘陵の西側沖積層を掘削して營まれた石組みの井戸で、井戸2の西約35mに位置する。

掘り形は、上端径3m10cm×3m20cm・深さ1m50cmと比較的規模の大きいものである。海拔0mで灰青色の湧水砂層に達し、そこを井戸底とする。

井戸は、この湧水層直上に比較的大きい石を井側に積み上げたもので、約7段位で上端を成す。形態的には、上端径と底径がほぼ同じで、胴部が若干広く、胴張りの様相を示している。石組み完成後の規模は、上端径1m10cm×1m10cm・深さ1m30cmを測る。

井側には、下層に粘質土と砂の互層、上層に小石混じりの粘土が充満していた。したがって、前述の井戸1と井戸2が意図的に廃絶された様相を示していたのに対して、この井戸4は自然に埋没したものと理解したい。

なお、上部構造施設としての覆屋、あるいは井戸底の陣木等の存在については、本調査での検出・確認は出来なかった。

出土遺物には、鉄製鎌・近世土器の小皿・近世陶器等がある。

（島崎）

### D地点の遺構に伴わない遺物（第247図～第249図）

D地点で検出した遺構は、弥生時代に属するものと鎌倉時代から江戸時代に属するもので、古墳時代から平安時代のものは存在しなかった。この結果は、調査範囲が細長くて狭い範囲に限定されたために生じたもので、遺構に伴わない遺物の中には、奈良時代や平安時代と推定される土器が認められるから、調査範囲外の未調査部分にそれらのものが伴っていた遺構が存在する可能性が考えられる。

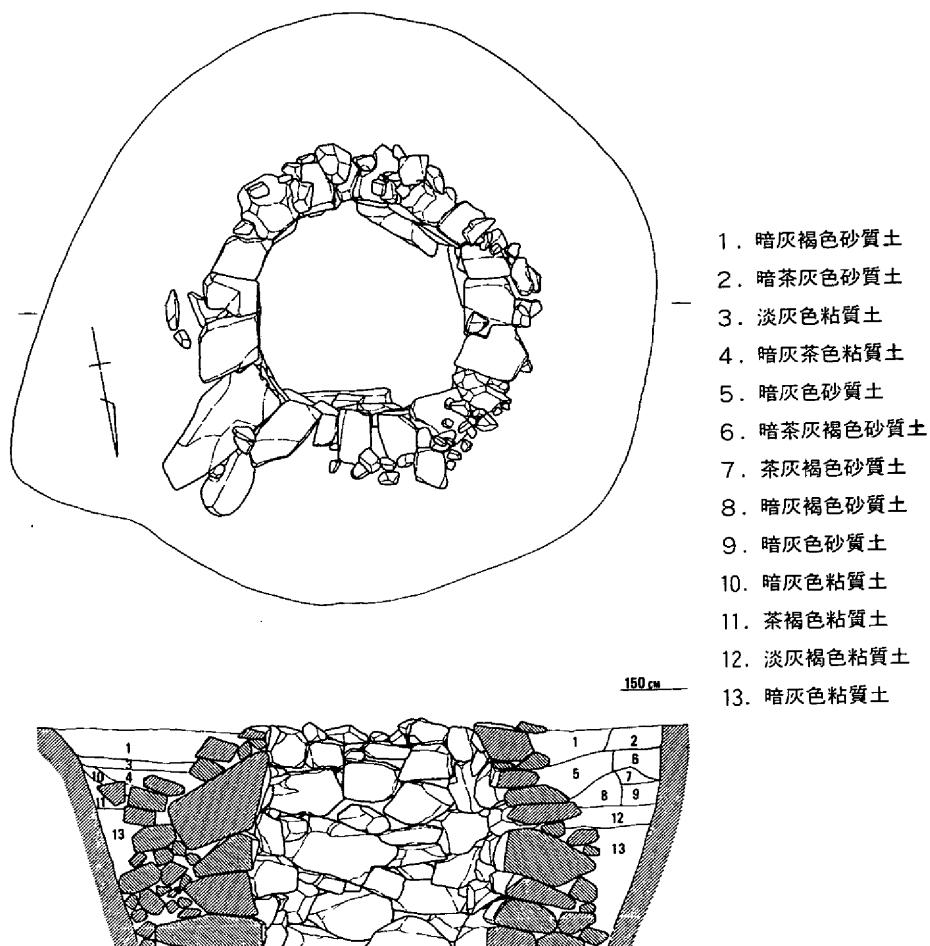
弥生時代に属すると推定される遺物は、壺、甕、高杯の破片が存在した。これらの土器片はいずれも後期と考えられるものの小破片で、D-25溝状遺構に伴って出土した遺物のように、中期に属すると推定されるものは認められなかった。

古墳時代に属すると推定される遺物は、採集したものを検討したにもかかわらず存在しなかった。

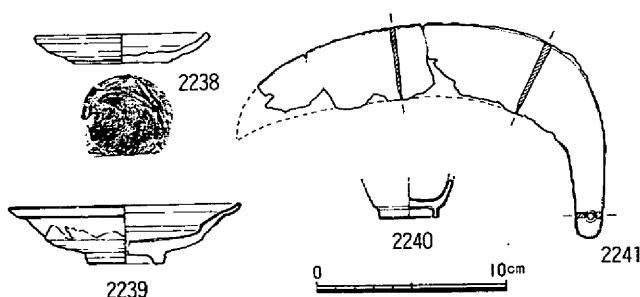
奈良時代から平安時代に属すると推定される遺物は、杯蓋や杯身等の破片が少量だけ認められた。

鎌倉時代に属すると推定される遺物は、土鍋、高台付椀、皿、小皿、瓦器椀、瓦器小皿と、器種のみならず出土量も比較的多く存在した。外面に花弁を描いた青磁碗（2334）と瓦質の胎土を有する羽釜（2335）は、室町時代に属する可能性も否定できない。

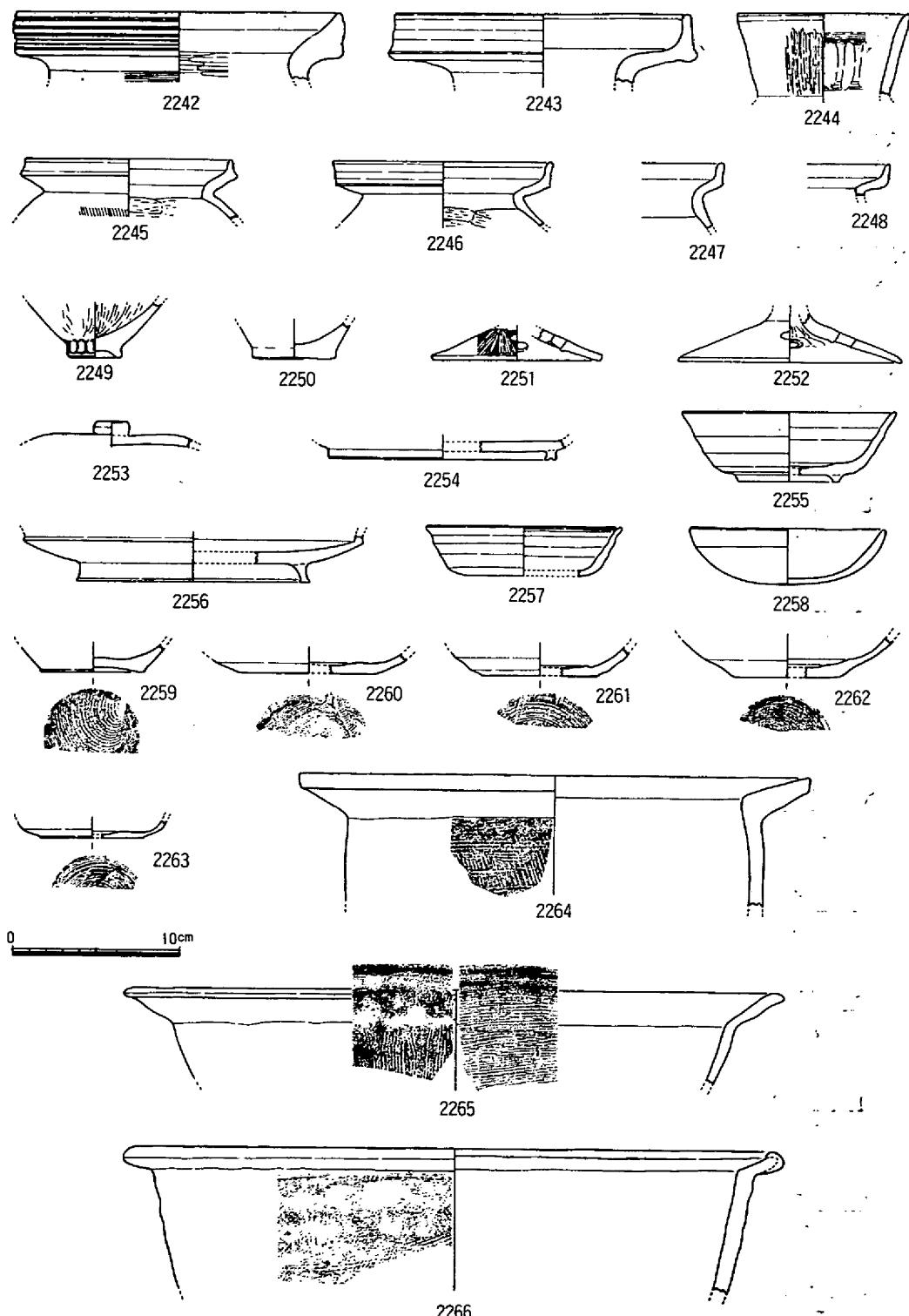
（福田）



第245図 井戸4 ( $\frac{1}{40}$ )

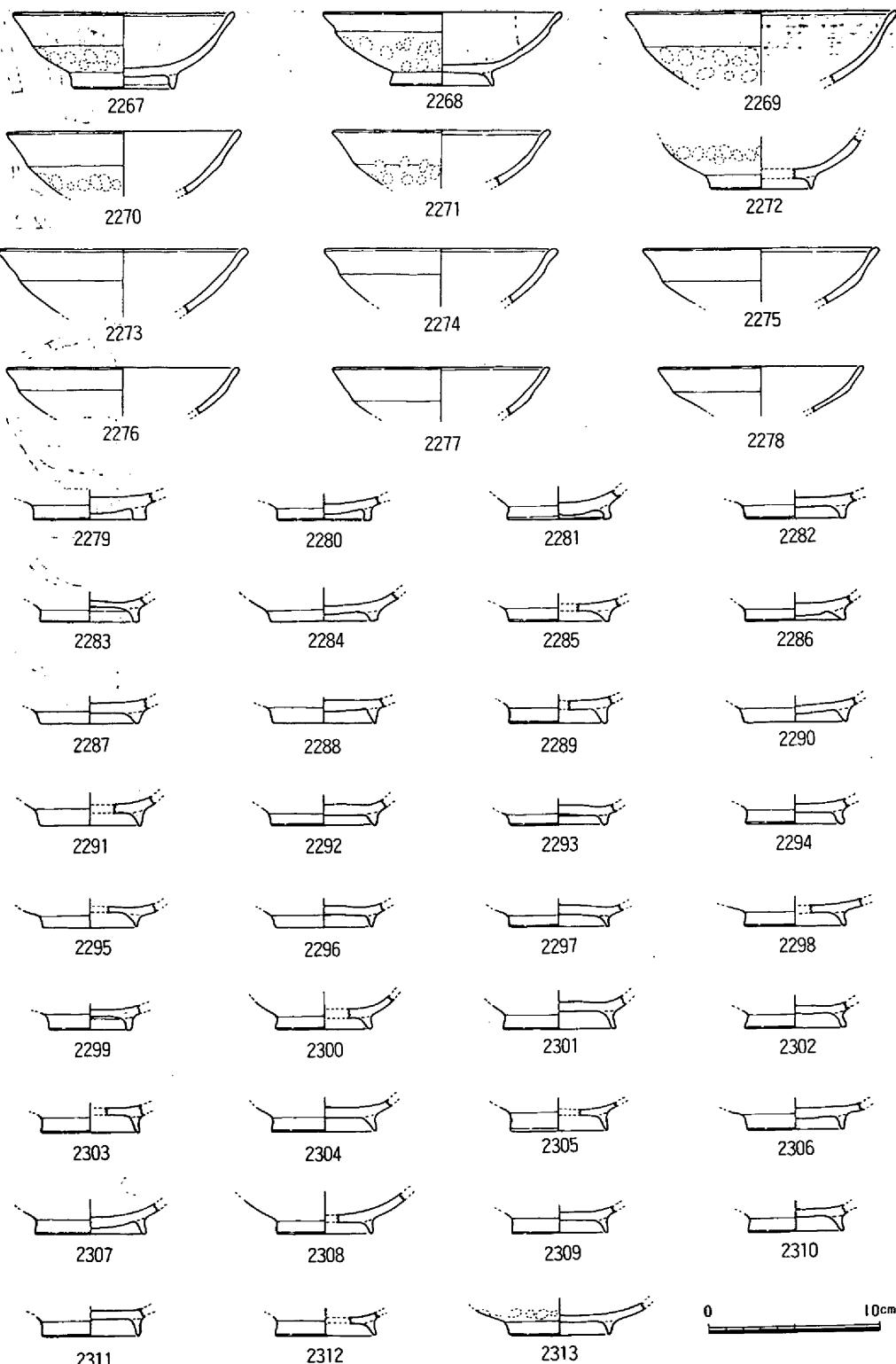


第246図 井戸4出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )

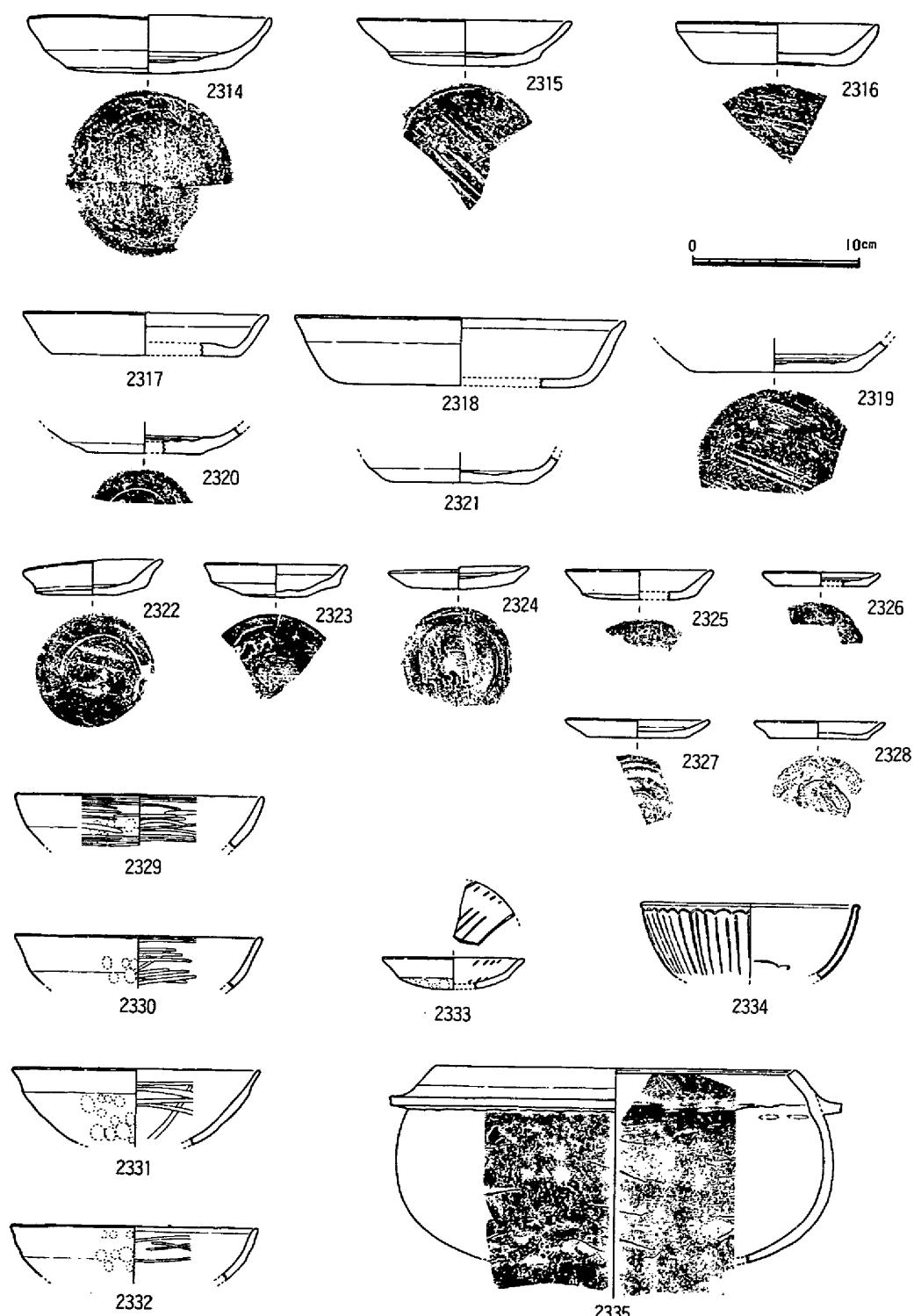


第247図 D 地点の遺構に伴わない遺物 (1) ( $\frac{1}{4}$ )

第1節 右岸用水調査区



第248図 D地点の遺構に伴わない遺物 (2) ( $\frac{1}{4}$ )



第249図 D 地点の遺構に伴わない遺物 (3) ( $\frac{1}{4}$ )

## 5. ま　と　め

百間川当麻遺跡の右岸用水調査区は、幅約6m、延長約240mの細長い範囲であるため、各地点によって検出した遺構や出土遺物が異なっている。

**A地点** 右岸用水調査区の東端に位置する地点である。検出した遺構面は4面である。最下層の第4遺構は安定した基盤層に位置するが、上位の第1遺構面から第3遺構面は、洪水等によって堆積した砂礫土の上面に存在している。検出した遺構はいずれも奈良時代以降のもので、弥生時代や古墳時代になると、遺構に伴わない遺物は確認しているものの遺構は存在しない。A地点で検出した特殊な遺構として、中世墓と石組みの井戸がある。

**B地点** 丘陵部調査区から南方向へ張り出した、低い丘陵上に位置する。表土直下の岩盤が遺構面で、溝状遺構や土壙以外にテラス状遺構を検出している。このB地点には建物が存在した可能性が強いが、遺構に伴う遺物がほとんど認められないので、時期を把握することができない。

**C地点** 丘陵部の西側に位置する調査地点で、右岸用水調査区でもっとも遺構の密度が高い場所である。確認した遺構面は基本的には4面で、下層より古墳時代と弥生時代の遺構面、平安時代と奈良時代の遺構面、鎌倉時代の遺構面、室町時代以降の遺構面となっている。代表的な遺構としては、器種の多い弥生式土器が出土した小規模な土壙、重複した2軒の竪穴住居址、底部に礫が存在する溝状遺構や土壙、素掘りの井戸、石組みの井戸等を検出している。特に素掘りの井戸からは、岡山県南部地方で生産されたと推定される、土師質の高台付椀、皿、小皿や須恵質の椀等に混在して、畿内の和泉地方で生産されたと推定されている、瓦器の高台付椀や小皿が多量に出土し、畿内地方で生産された土器の流通経路の一端が把握されるのみならず、畿内地方と岡山県南部地方の土器編年を行うのに良好な一括資料と考える。

**D地点** 右岸用水調査区の西端に位置する、百間川岩間遺跡に近接した部分である。発掘調査を実施する以前には、レベルが低くて平坦な水田面に山土を盛った広場になっていたため、遺構面が著しく削平されて安定した基盤層がわずかに残存しているだけである。検出した遺構としては、溝状遺構や土壙以外に石組みの井戸が存在する。

百間川当麻遺跡右岸用水調査区は、今回の発掘調査によって、弥生時代から江戸時代にかけての長期間にわたって栄えた集落遺跡であることが判明したのである。

右岸用水調査区でもっとも古い時期の遺構は、D地点で検出した弥生時代中期後半の百間川中期Ⅲの時期に属すると推定されるD-25溝状遺構である。この溝状遺構以外には、弥生時代中期までさかのぼる遺構は検出されていない。弥生時代後期の時期になると、C地点とD地点に溝状遺構や土壙が構築され、竪穴住居址1軒も検出されている。遺構が構築された盛期は、後期後半の百間川後期Ⅲの時期で、後期の古い段階の遺構は存在しない。

古墳時代になると遺構は極めて希薄で、C地点で方形の竪穴住居址を検出しているだけである。

奈良時代から平安時代にかけては、遺構に伴わない遺物は比較的多く確認しているものの、A地点

## 第6章 百間川当麻遺跡

とC地点で5条の溝状遺構と浅い土壙を検出しているだけである。

鎌倉時代になると、遺構が爆発的に増加している。A地点で出土した遺物の半分以上が、鎌倉時代に属すると推定されるものである。C地点では、溝状遺構や土壙以外に素掘りの井戸も存在する。

室町時代の遺構も、鎌倉時代と同様に多い。A地点には、土壙と石組みの井戸以外に中世墓が存在する。C地点には、柱穴と推定される小規模なピットが数多く確認され、建物群が存在したことは明らかで、大規模な石組みの井戸も構築されている。C地点で検出したD-21溝状遺構と、D地点で検出したD-27溝状遺構は、C地点を中心とする集落を隔離するために構築された、東西両方向の境界と考えられる。

江戸時代になると遺構は急激に少くなり、D地点で石組みの井戸を検出しているだけである。

C地点のD-25溝状遺構からは、埴輪片がまとめて出土している。本報告書に掲載された遺跡の中で、埴輪が出土したのは百間川当麻遺跡だけであるから、ここにその分類整理を行う。（福田）

### 埴輪について

本調査区から出土した埴輪は、小破片ながらコンテナ箱（54×34×15cm）に約3箱を数えた。整理の結果、埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・楯形埴輪など数多くの器種が認められた。

これらの個々の具体的な観察についてはすでに埴輪観察表（表6）で詳述したので、ここでは中でも古墳時代のほぼ全期間を通じて古墳の一施設として墳丘（端）に樹立（囲繞）され、且つ型式変化の著しい円筒埴輪に着目して以下に若干の分類整理を行ってみたい。

#### （1類）<1621～1627>

本調査区出土の円筒埴輪の中で型式的にみて最も古く位置づけられるものである。この特徴は、基本的には外面第2次調整に横刷毛目行為の行われているもので、しかもその行為は、刷毛目が器表に対して連続するものではなく、断続するいわゆるA種ヨコハケである点にある。しかし、このような特徴を有するものの中にはタガを隔てて縦方向の刷毛目をみせるものがある。同一器表に施されたこの両刷毛目の共存する状況は、それまで縦刷毛目のみであった外面第2次調整に横刷毛目採用の初現的な様相を示すものである。これらの多くは、岡山市金蔵山古墳（註12）出土の円筒埴輪に類似する。したがって、1類は、川西編年（註13）の第Ⅱ期の4世紀後葉に位置づけて差し支えなかろう。

#### （2類）<1629>

型式的に1類より後出的な様相を示す。それは、内・外面に施された刷毛目が1類に比較して粗雑で、しかも外面第1次調整時の縦刷毛目を第2次調整の横刷毛目が充分に消さず、刷毛目に切り合いが多い点に特徴づけられる。しかし、第2次調整時の横刷毛目は、断続的に施されていたもので、まだ連続する段階にまで至っていない。このような横刷毛目のありかたは、主に岡山市造山古墳・久米郡棚原町月の輪古墳（註14）出土例に多く共通する。したがって、時期は、5世紀初頭から前半にかけてと考える。

#### （3類）<1630～1639>

1～2類をとおして外面第2次調整の主体は、断続する横刷毛目であった。ところがそれらに対し

て同じ横刷毛目であっても連続する一群が存在する。それは、円筒埴輪製作の1つの発展様式として捉えられる技法である。この連続する横刷毛目の存在をもって3類とする。ただし、3類の横刷毛目行為の特徴は、4類が基底部において横刷毛目が省略されているのに対して、基底部においてもその行為が行われている点にある。この類例は、岡山市千足古墳（註15）・牛窓町黒島古墳（註16）などで認められる。時期的には、5世紀前半頃と考えられる。

（4—a類）〈1640～1648〉

基底部の破片に3種類の異なった調整技法が確認できる。のことから4類には、少なくとも3個体の存在が推察される。形態的には、3類に近い印象を受ける。ところが調整技法において、差異を認めることができる。もっとも大きな差は、外面刷毛目調整の基底部への行為省略がある。これは、型式的にも4類が3類に後出することを示すものである。この基底部への横刷毛目の省略は、いまのところ県下では、岡山市柳山古墳（註17）・倉敷市西の平古墳（註18）・倉敷市法伝山古墳（註19）などに認められる。いずれもが初期須恵器を伴っており、おそらく5世紀中葉頃までに位置づけが可能である。

（4—b類）〈1657～1662〉

4—a類同様に外面第2次調整に横刷毛目が施される。しかしその刷毛目行為は、4—a類にみられるように連続する刷毛目ではなく、器表を一気にめぐるいわゆるC種ヨコハケである点に特徴づけられる。これに共通する埴輪は県下にまだみあたらないが、和歌山県西陵古墳（註20）に認められる。それに従えば時期は、4—a類とほぼ同じく5世紀中葉までと考える。

（4—c類）〈1649～1655〉

外面第2次調整に横刷毛目行為が行われる。しかし、同一個体のタガを隔てて縦刷毛目をも認めることができる。この外面調整のタガの状況は、3～4—a類と若干の時期差はあるにせよ、同一型式の中におさまるとして差し支えなかろう。

（5類）〈1656〉

新しくなるにつれて省略化の傾向にある外面第2次調整の横刷毛目行為が5類になって口縁部を残すのみとなった。しかもその行為は、幅の広い板の小口で軽く表面を1周、もしくは連続するものである。県下でこの種のものは、岡山市上の山1号墳（註21）・山陽町宮山4号墳（註22）に認められる。いずれもが古い須恵器を伴っており、それとの共伴関係により5世紀後半から末までに位置づけができる。

（島崎）

### 註

- 註1 葛原克人・松本和男・内藤善史『百間川遺跡第一次調査概報—旭川放水路改修工事に伴う—』岡山県教育委員会 1977年
- 註2 本報告書の第2章に記載されている「調査の経緯」を参照されたい。
- 註3 本報告書の第5章を参照されたい。
- 註4 伊藤晃『新林（宮城）窯址の調査報告』邑久町教育委員会 1974年

## 第6章 百間川当麻遺跡

- 葛原克人「奥更谷古窯址の調査報告」邑久町教育委員会 1975年。
- 註5 兵庫県教育委員会大村敬通氏の御教示による。
- 註6 倉敷考古館長間壁忠彦氏の御教示による。
- 註7 伊藤晃氏の御教示による。
- 註8 橋本久和「上牧遺跡発掘調査報告書」「高槻市文化財調査報告書」第13冊 高槻市教育委員会 1980年。
- 註9 高槻市教育委員会橋本久和氏に実見していただいて御教示を得た。
- 註10 註8と同じ。
- 註11 本遺跡の丘陵部調査区の東側に位置する低位部では、規則的に配置された奈良時代の倉庫群が検出されている（報告書は近刊の予定）。丘陵の頂部に存在した古墳が破壊されたのは、倉庫群が構築された奈良時代と考えたい。
- 註12 西谷真治・鎌木義昌「金蔵山古墳」「倉敷考古館研究報告」第1冊 倉敷考古館 1959年。
- 註13 川西宏幸「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」第64巻第2号 日本考古学会 1978年。
- 註14 近藤義郎編「月の輪古墳」月の輪古墳刊行会 1960年。
- 註15 昭和56年2月に筆者採集。
- 註16 現在吉備考古館に収蔵されている。筆者実見。
- 註17 岡山県立博物館所蔵。筆者実見。
- 註18 間壁荘子・伊藤晃・新東晃一「西の平古墳」「倉敷考古館研究集報」第10号 倉敷考古館 1974年。
- 註19 間壁忠彦・藤田憲司「法伝山古墳」「倉敷考古館研究集報」第10号 倉敷考古館 1974年。
- 註20 川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」「大阪文化誌」第2巻第4号 財団法人大阪文化財センター 1977年。
- 註21 出宮徳尚・根木修「岡山市四御神上の山1号墳発掘調査報告」岡山市教育委員会 1974年。
- 註22 神原英朗・則武忠直「宮山古墳群第4号墳」「四辻土墳墓遺跡・四辻古墳群」岡山県山陽町教育委員会 1973年。

## 第2節 丘陵部調査区

本調査区は標高15mの南北に細長い独立した低丘陵である。この丘陵は周知の遺跡として確認されていなかったが、丘陵を掘削して旭川放水路（百間川）の高水敷として利用されることになっていたため、当麻右岸用水路の調査が終了すると直ちにトレンチ調査による確認調査を実施した。

調査は丘陵尾根部を縦横断するトレンチで、柱穴、堀、溝状遺構を検出した。土層断面観察では丘陵尾根部は2層で、斜面には瓦片を含む造成土層が確認されたため丘陵全域を発掘調査することになった。

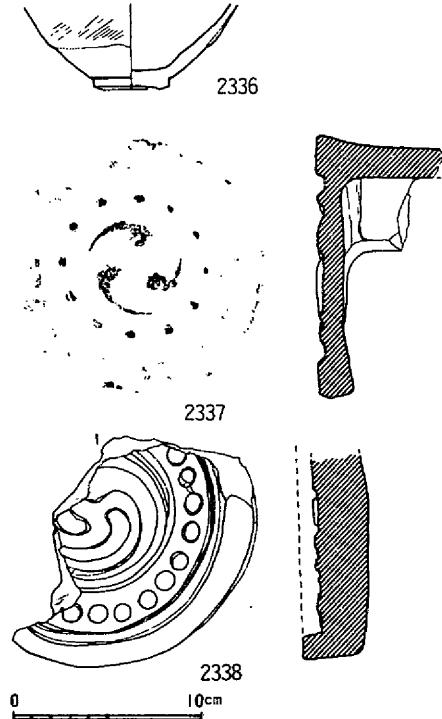
調査範囲内には当麻神社、法来山角山寺という真言宗の伽藍が昔は建立され、また両墓制が行われていた地域であり、この丘陵は二次墓地（參り墓）として使用されていたところである。調査開始時は基礎部分の石垣を残すのみであり、墓地、畠地などは原野となっていた。

調査は丘陵全域を表土排除したのち遺構検出を行った。その結果、近世土壙墓、土壙、堀、溝状遺構、建物址、柵列、柱穴多数が検出された。これらの遺構は岩盤を穿ったものと丘陵端部の造成土層に検出されるものの2種類がある。なお、造成土層内には鎌倉～江戸時代の遺物が出土している。

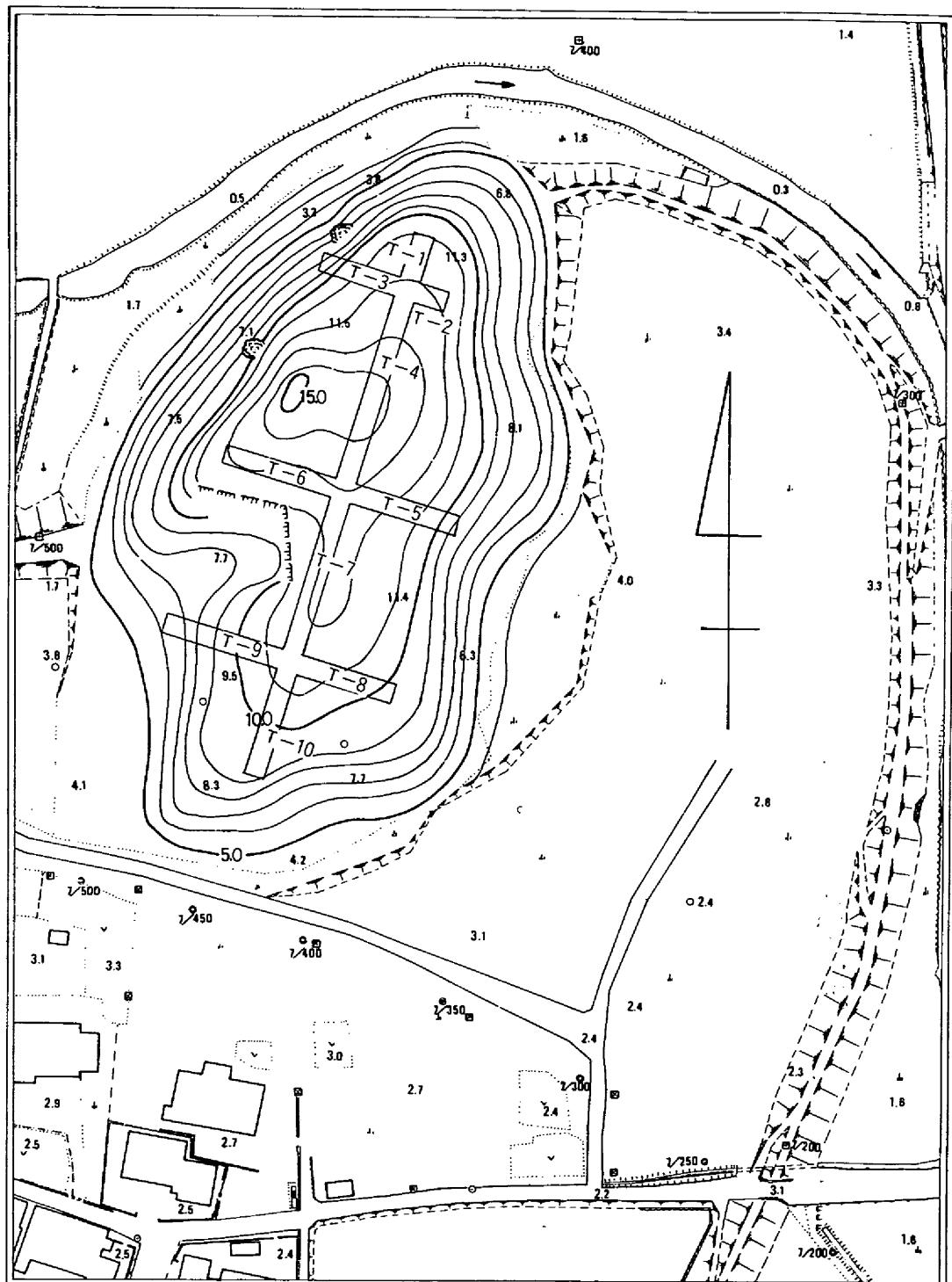
### トレンチ調査

調査はまず丘陵尾根部に3×85mの南北トレンチを設定した。そして地形に応じてこのトレンチに直交する東西トレンチを6ヶ所設定した。こうして10ヶ所に区切られた範囲を北からT-1としてT-10まで調査を実施した。

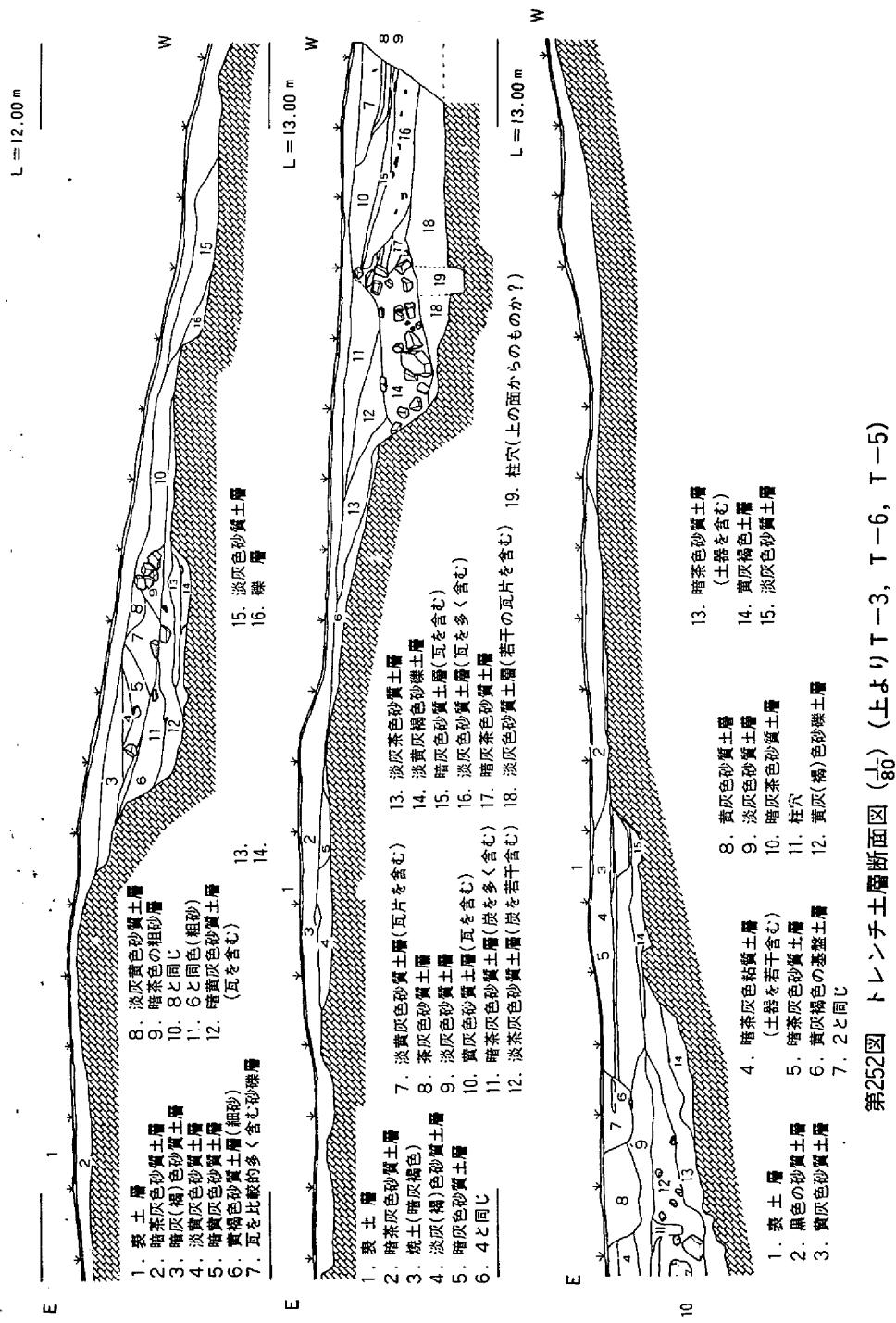
丘陵尾根部は基本的には表土層と暗茶灰色砂質土層の2層のみであり、その下は岩盤となることが判明した。遺構はすべて岩盤で検出されており、主なものとして柱穴、堀状遺構がある。T-2、3では堀2、溝1の一部が確認され、T-5では6層の造成土層と柱穴が観察された。T-6では丘陵をカットして平坦面をつくっており、また地山面で柱穴があることから何らかの遺構が存在することが判明した。T-8～10においても柱穴等が検出され、東側端部においては盛土造成による平坦面の拡張痕跡が認められたことから、丘陵全面に遺構が存在することが予想された。



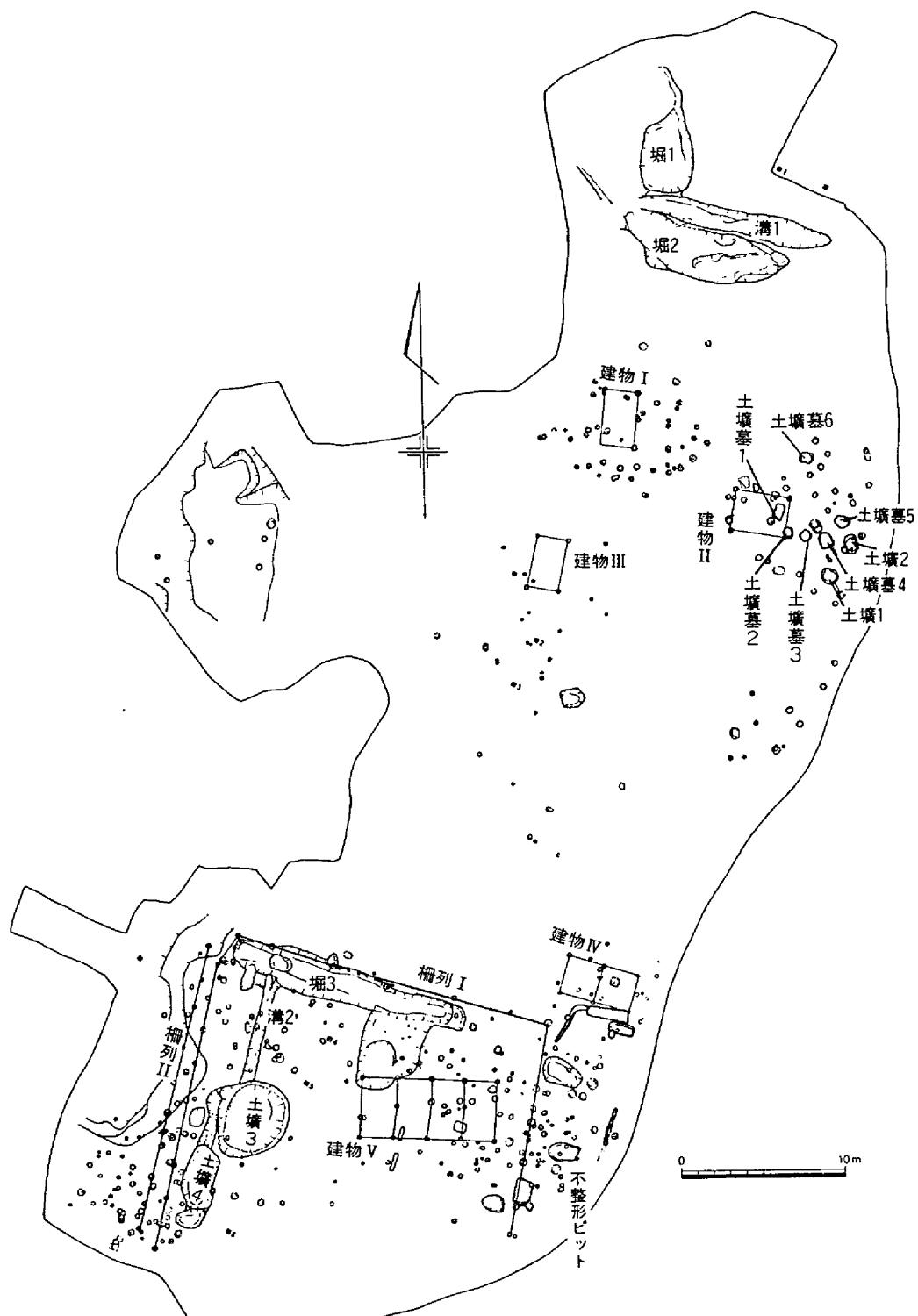
第250図 トレンチ内出土遺物 (1/4)



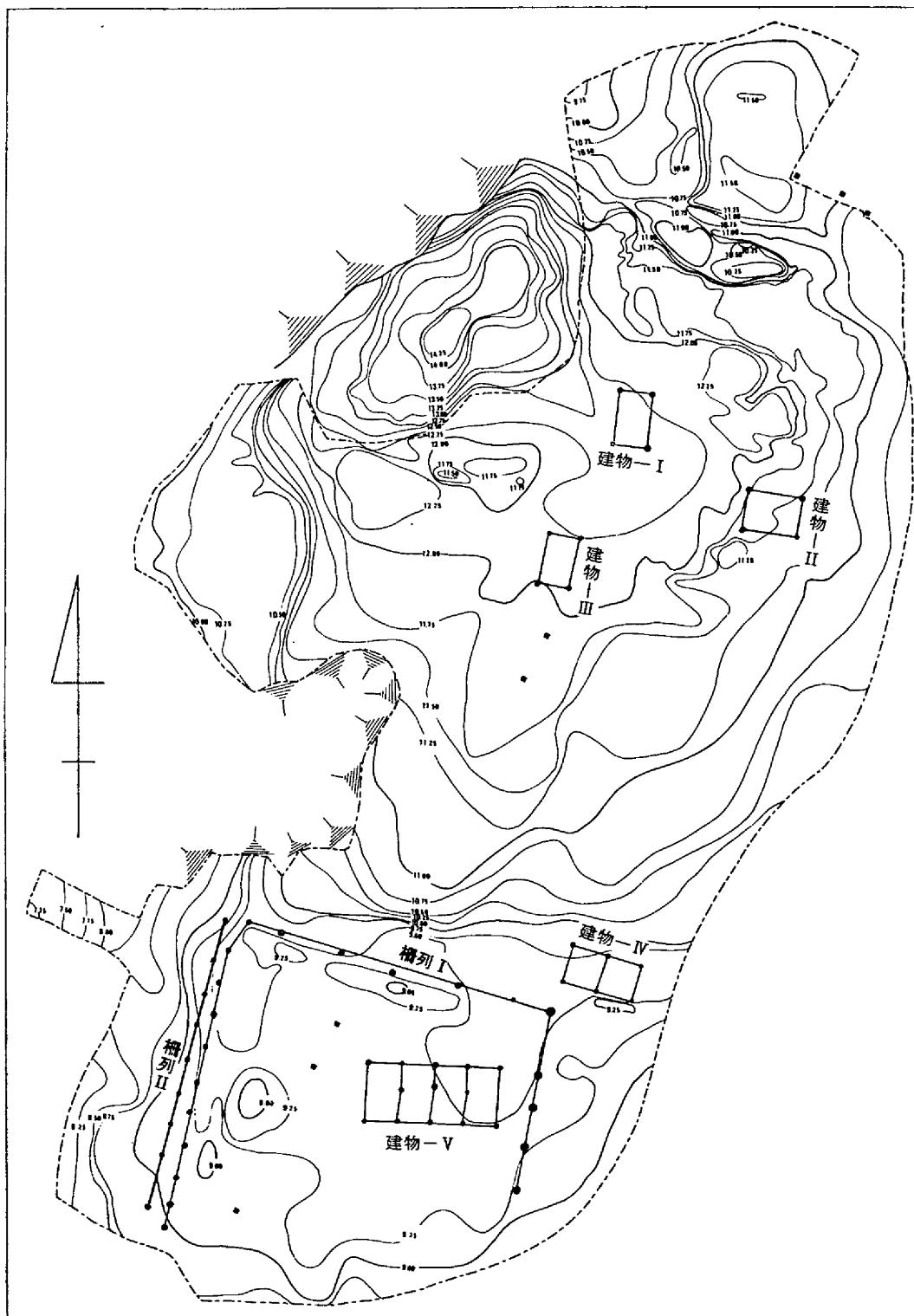
第251図 当麻丘陵地形及びトレンチ設定図 ( $\frac{1}{1,000}$ )



第252図 レンチ土層断面図 ( $\frac{1}{80}$ ) (上より T-3, T-6, T-5)



第253図 遺構配置図 ( $\frac{1}{400}$ )



第254図 調査終了後の地形図及び建物・柵列配置図 ( $\frac{1}{400}$ )

## 第6章 百間川当麻遺跡

遺物は造成土層、斜面堆積層から出土している。2336はT—1で出土した天目塹で、室町～江戸時代のものと考えられる。2337はT—6、2338はT—8で出土した巴瓦である。2338は鎌倉時代、2337は室町時代のものと考えられる。

### 溝 状 遺 構

#### 1) 溝—1

丘陵北端部に削り出し地形を行った1辺約9mの正方形を呈する基壇を思わせる遺構が検出されたが、その南側にとりつく幅1.5m、長さ12m、深さ約93cmを測る溝が検出された。出土遺物は瓦、備前焼が出土しており室町時代のものと考えられる。

#### 2) 溝—2

丘陵の南西部で南北に延びる溝で、堀3、土壙3、4に切られている。幅は0.8m、長さ7m、深さ約0.26cmを測る遺構である。出土遺物は備前焼がある。室町～江戸時代にかけての時期と考えられる。

### 堀 状 遺 構

#### 1) 堀—1

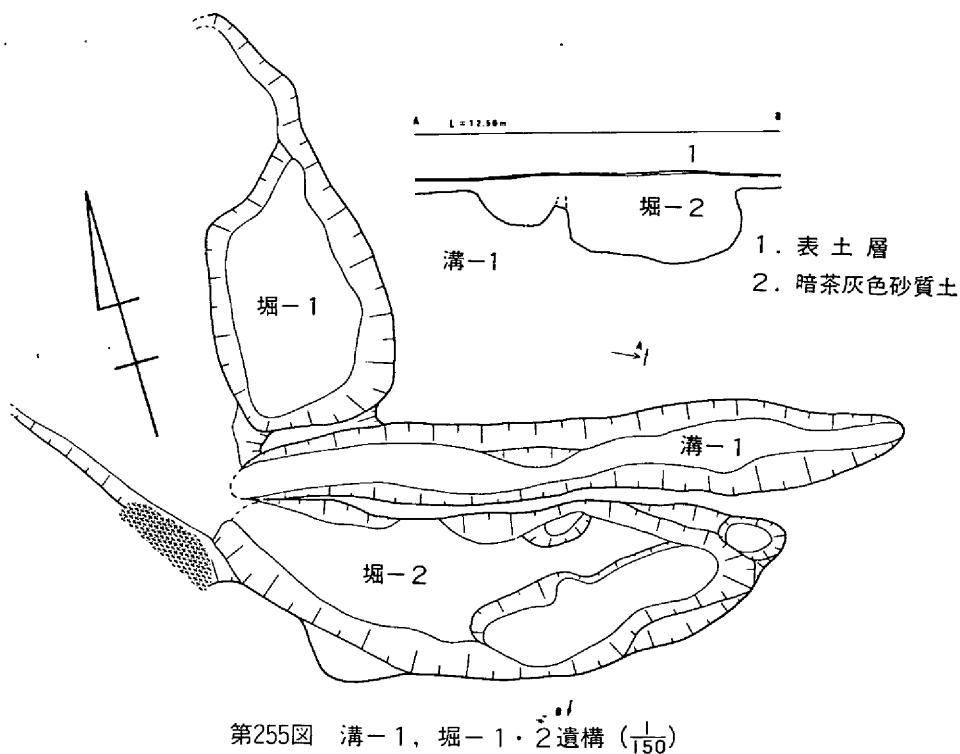
丘陵北端部の基壇西側にとりつく遺構で、溝—1と同時期と考えられる。基壇から堀の底部までの比高差は約1mある。幅は約3m、長さ約5m、深さは約1.13mを測る。出土遺物には瓦、備前焼がある。2339は斜格子の叩目文が凸面にみられるもので鎌倉時代、2340、2341は室町～江戸時代にかけてのものと考えられる。

#### 2) 堀—2

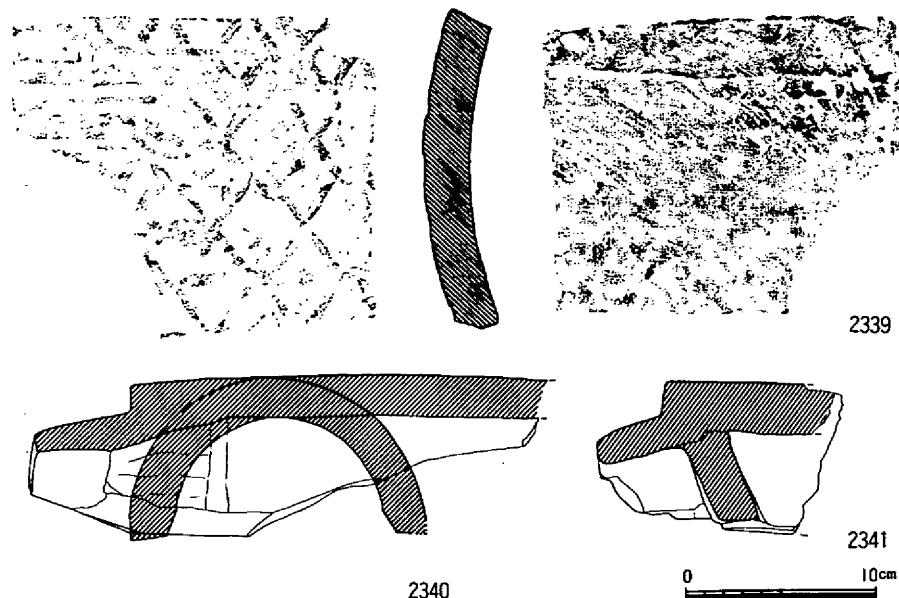
溝—1と平行するが、切り合い関係は確認することが出来なかったが、ほぼ同時期と考えられるものである。幅は約3m、長さ約10m、深さ約1.22mを測る。出土遺物には丸瓦、備前焼がある。2342、2343は備前焼壺である。間壁忠彦、間壁葭子両氏の編年ではIV期に相当するもの（註1）であり室町時代のものと考えられる。

#### 3) 堀—3

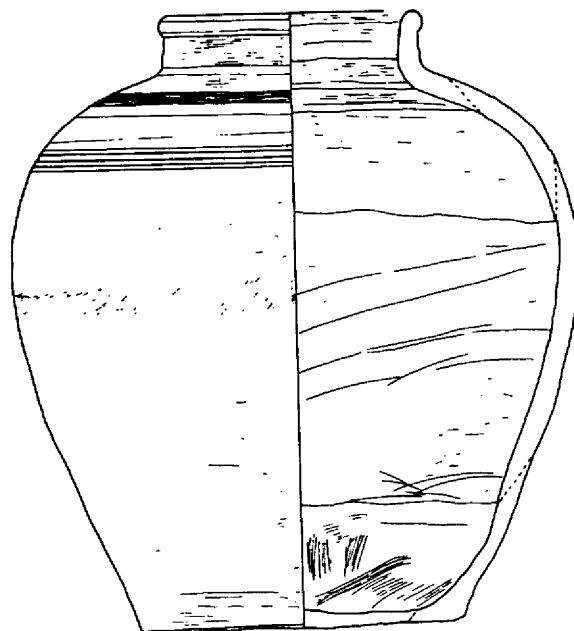
丘陵の南で東西に横断する最大幅2.5m、長さ14.5m、深さ0.22cmを測る浅い遺構である。溝—2、柵列の一部がこの遺構で切られている。出土遺物として瓦、備前焼、近世陶磁器等が出土していることから江戸時代後期のものと考えられる。



第255図 溝-1, 堀-1・2遺構 ( $\frac{1}{150}$ )



第256図 堀-1 内出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )



## 土 壤

土壌は14個ほど検出されているが、代表的なものを4個抽出して述べてみる。

### 1) 土壌1

丘陵の東側で検出された。掘り方が $90 \times 100\text{cm}$ 、深さは $41\text{cm}$ を測り隅丸方形プランを呈し、底部は東に急傾斜する。暗褐色砂質の埋土がみられた。出土遺物はない。

### 2) 土壌2

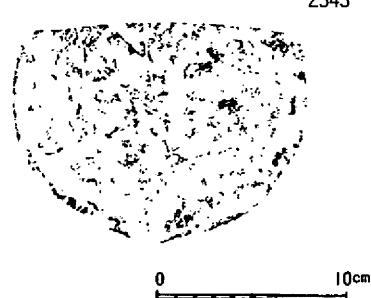
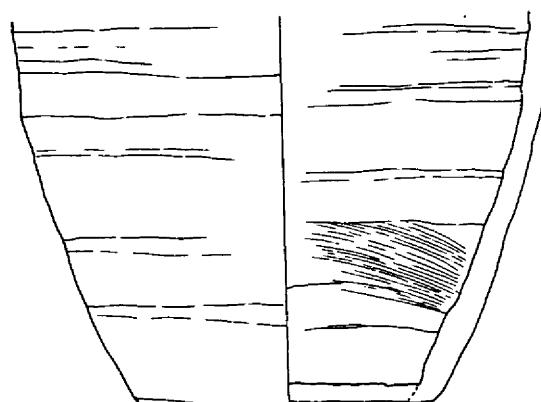
土壌1の北に位置する。掘り方が $80 \times 120\text{cm}$ 、深さは $45\text{cm}$ を測り楕円形プランを呈する。底部は水平であるが、人頭大の角石を含む。出土遺物はない。

### 3) 土壌3

丘陵の南西部に位置する。 $4.5 \times 4.5\text{m}$ 、深さ約 $0.56\text{m}$ を測り楕円形プランを呈し、中には黒色砂質の埋土がみられた。出土遺物には瓦、備前焼がある。なお、この遺構は溝一2を切ってつくられたものである。室町～江戸時代のものと考えられる。

### 4) 土壌4

土壌3の南に位置する。長軸 $4\text{m}$ 、短軸 $2\text{m}$ の長楕円形プランを呈し、深さは $0.2\text{m}$ を測る。出土遺物は無いが、溝一2を切っていることから江戸時代のものと考えられる。



第257図 堀-2内出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )

## 土壙、柱穴内出土遺物について

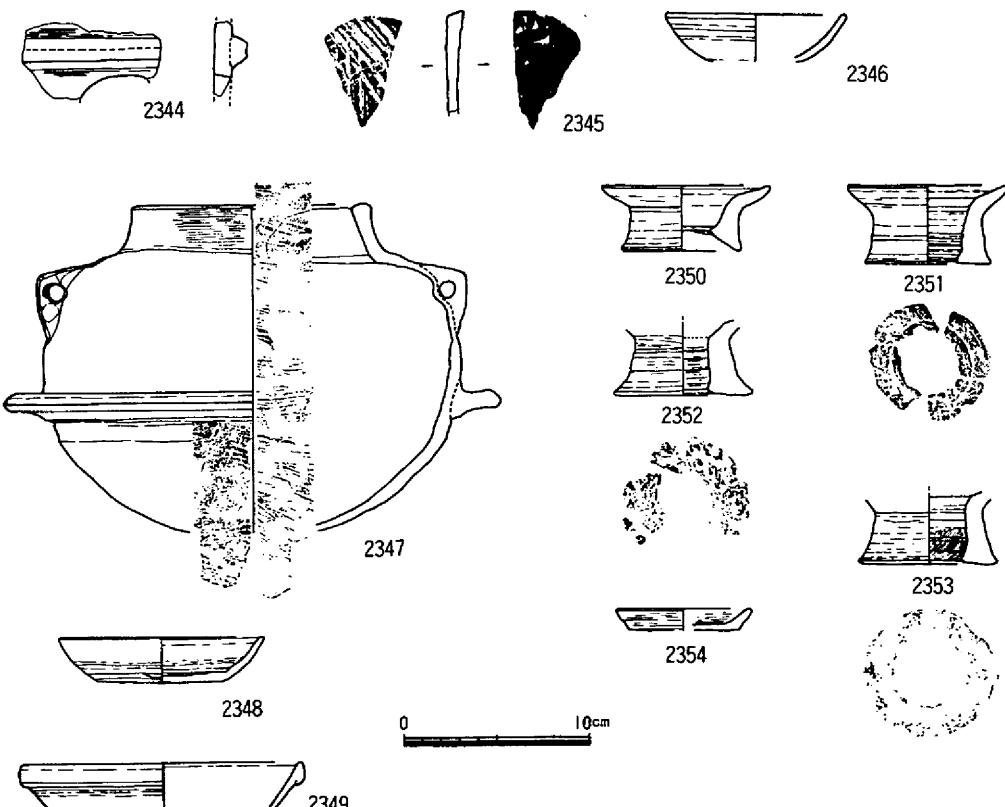
土壙及び柱穴から古墳時代～室町時代の遺物を出土している。2344は円筒埴輪の破片で円形透し孔の一部が認められる。2345は滑石製の皿形製品である。2347は瓦質の羽釜で室町時代後期のものと考えられる（註2）。2350～2353は柱穴C-057から出土した土師質の器台である。2349は平安～鎌倉時代の白磁である。

## 土 壙 墓

丘陵北東部の斜面において土壙墓が6基検出された。土壙墓と判断したのは人骨が残存していたこと、棺の留釘と考えられる鉄釘が出土したことなどからである。

## 1) 土壙墓1

検出された掘り方は幅が60cm、長さ100cm、深さ12cmを測る。長方形プランを呈する。長方形の掘り方周囲は平板材で木枠が組まれていたと思われる。底面は地山傾斜面にそって若干傾いている。人



第258図 土壙・柱穴内出土遺物(1/4)

## 第6章 百間川当麻遺跡

骨は屈葬で埋葬されていた。頭部の一部が後世の削平で欠損している。この頭部位置に副葬品として伊万里焼茶碗（2355）が置かれ、その中に寛永通宝が5枚麻布で包まれた状態で出土した。そしてこの茶碗の下には鉄鎌（2360）が1本置かれていた。その他に土師質の皿（2356～2359）、青磁小破片等が出土した。

### 2) 土壙墓 2

土壙墓 1 の南に位置する。掘り方は直径60cmの円形プランを呈し、深さは22cmを測る。削平をうけているため人骨は一部欠損しているが、座棺方法で埋葬されていたと考えられる。副葬品は大腿骨の近くで茶碗（2361）、土師質の小皿（2362）、碗（2363）、キセル（2364）、麻布で包まれた寛永通宝が茶碗からこぼれた状態で出土した。

### 3) 土壙墓 3

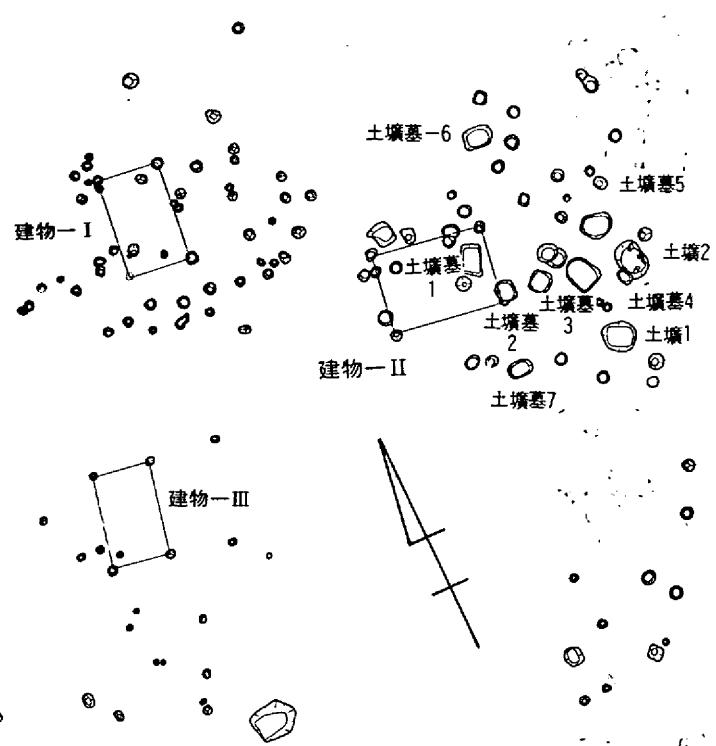
土壙墓 2 の東に位置する。掘り方は70×75cmの隅丸方形プランを呈し、深さは25cmを測る。人骨の出土状態からみて座棺と考えられる。副葬品は大腿骨近くから伊万里焼茶碗（2365, 2369）、土師質の碗（2366）、小皿（2367, 2368）、キセル（2370）、麻布で包まれた寛永通宝6枚が出土している。

### 4) 土壙墓 4

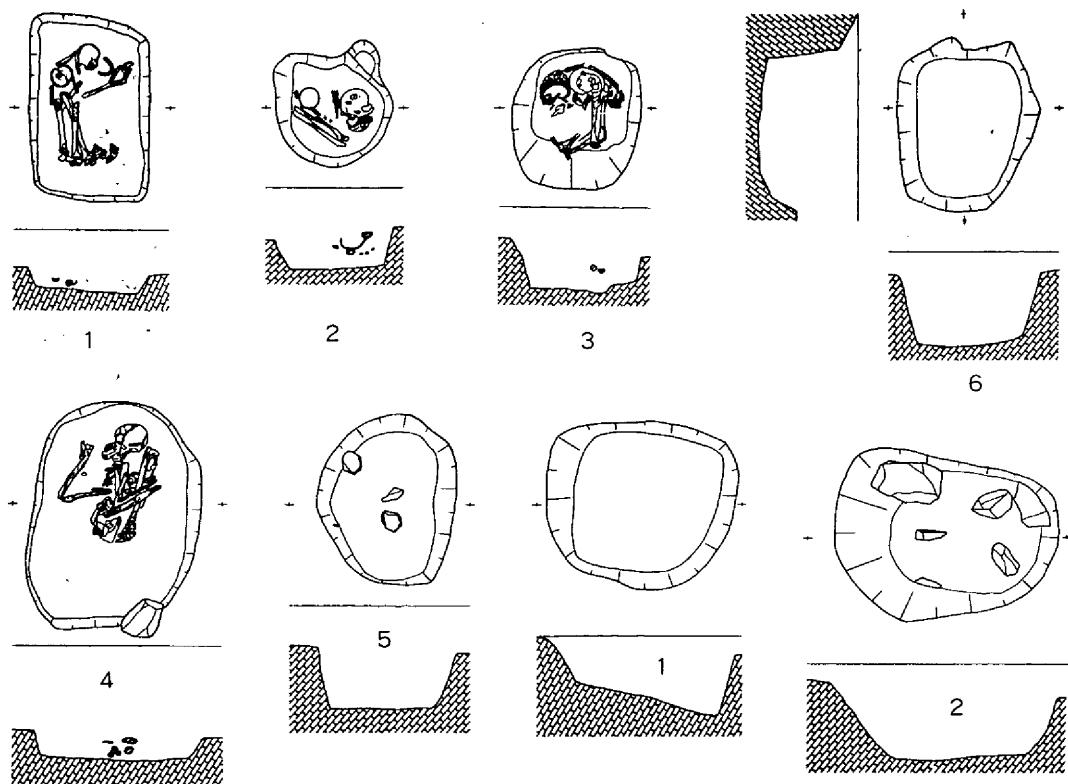
掘り方が85×120cmの楕円形プランを呈し、深さは15cm程しか残存していない。人骨の出土状態や、土壙コーナー付近から鉄釘（2372～2374）が出土していることからみて屈葬の木棺墓と思われる。副葬品は胸部位置から伊万里焼と思われる染付仏飴具（2371）が出土している。

### 5) 土壙墓 5

掘り方が75×90cmの楕円形プランを呈し、深さは32cmを測る。底部は水平である。人骨は無いが、土壙内に3個の角石が浮いた状態で検出され、黒色砂質の埋土がみられた。土壙形態、規模からみて



第259図 丘陵北側遺構配置図 (1/250)

第260図 土壙墓(1~6), 土壙(1・2)平・断面図 ( $\frac{1}{40}$ )

土壙墓と思われる。

#### 6) 土壙墓 6

掘り方が $75 \times 90\text{cm}$ の楕円形プランを呈し、深さは $41\text{cm}$ を測る。底部は水平である。人骨が少量と鉄釘(2375~2389)が出土した。土壙の形態、規模からみて屈葬の木棺墓と思われる。

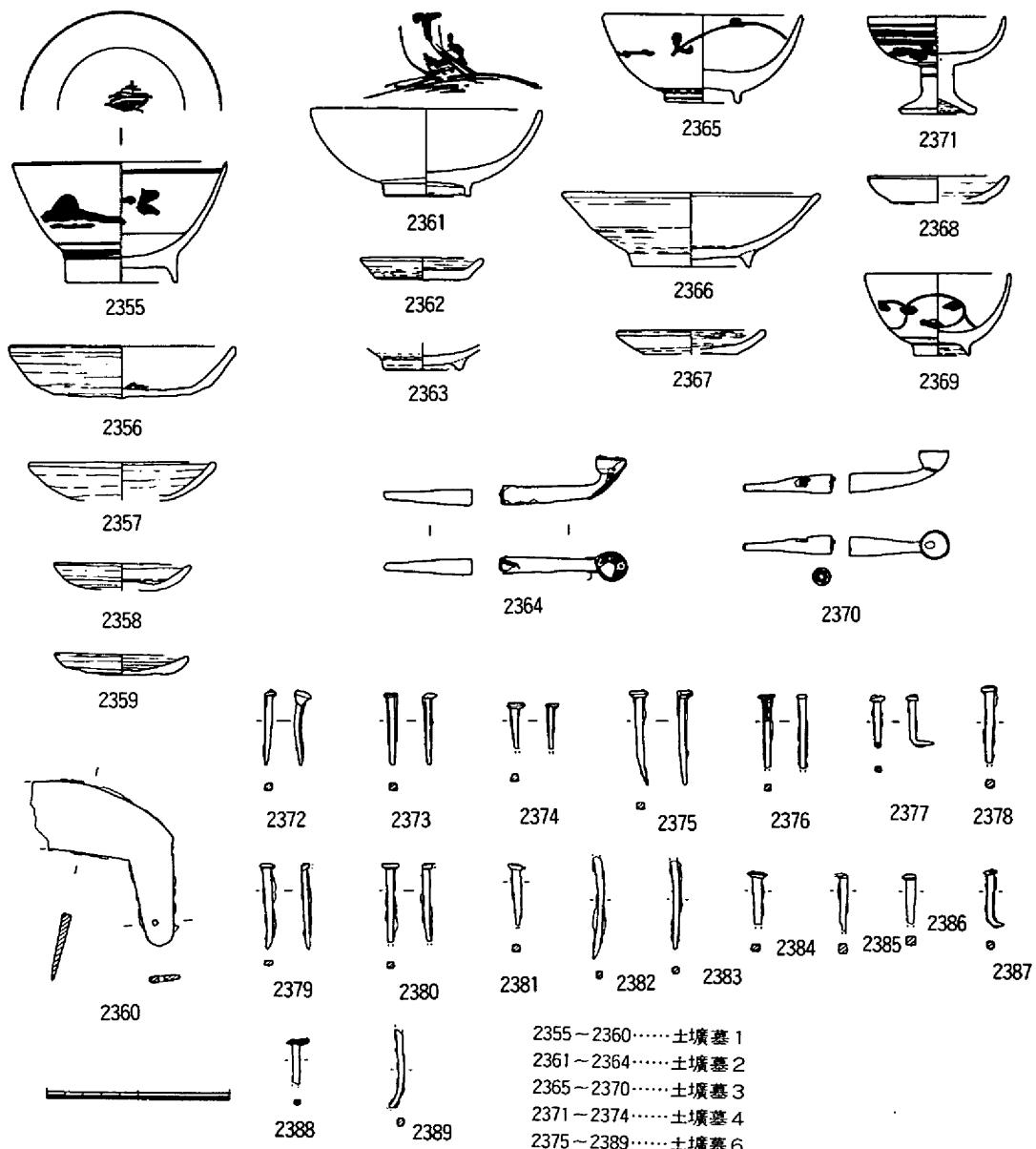
### 建 物 址

丘陵全域から多数の柱穴が検出されたが、構造物としてまとまるものは掘立柱建物が5棟、柵列が2列のみである。

#### 1) 建物 I

$1 \times 1$ 間の掘立柱建物である。梁間は $205\text{cm}$ 、桁行 $330\text{cm}$ の長方形建物である。柱穴掘り方は $30 \sim 40\text{cm}$ 、深さは約 $20\text{cm}$ を測る。

#### 2) 建物 II

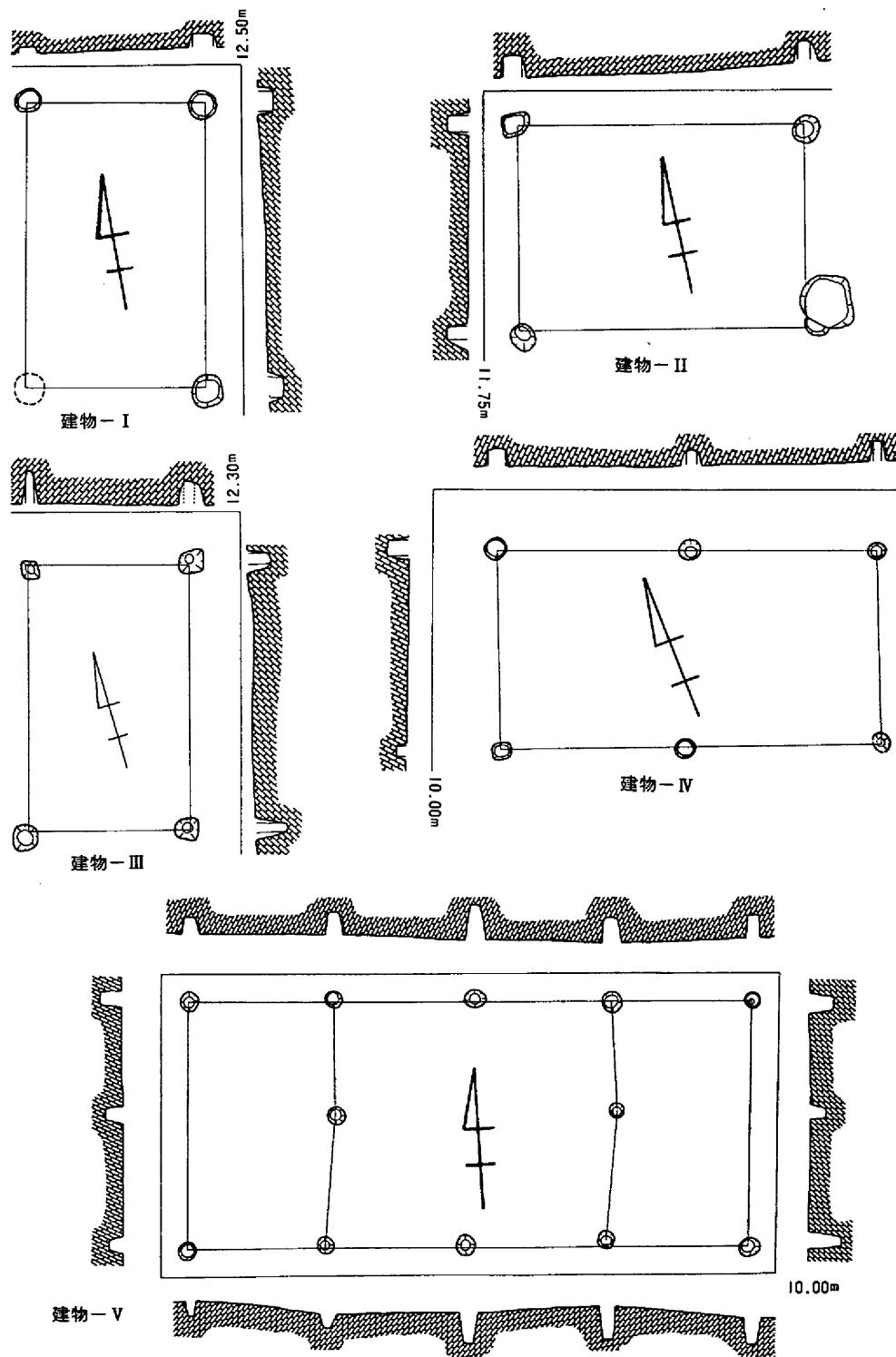


第261図 土壙墓出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )

1×1間の掘立柱建物である。梁間は240cm、桁行は330cmの長方形建物である。柱穴掘り方は約30cm、深さは約25cmを測る。柱穴1個が土壙墓2に切られている。

### 3) 建物III

1×1間の掘立柱建物である。梁間は190cm、桁行は310cmの長方形建物である。柱穴掘り方は約30cm、深さは25～40cmを測る。



第262図 建物 I~V 平面・断面図 (I~IV  $\cdots \frac{1}{80}$ , V  $\cdots \frac{1}{100}$ )

#### 4) 建物IV

東西棟2間(420cm)×1間(230cm)の建物で、柱間は、桁行210cm等間、梁行230cmである。柱穴掘り方は約20~25cm、深さは約15~22cmを測る。

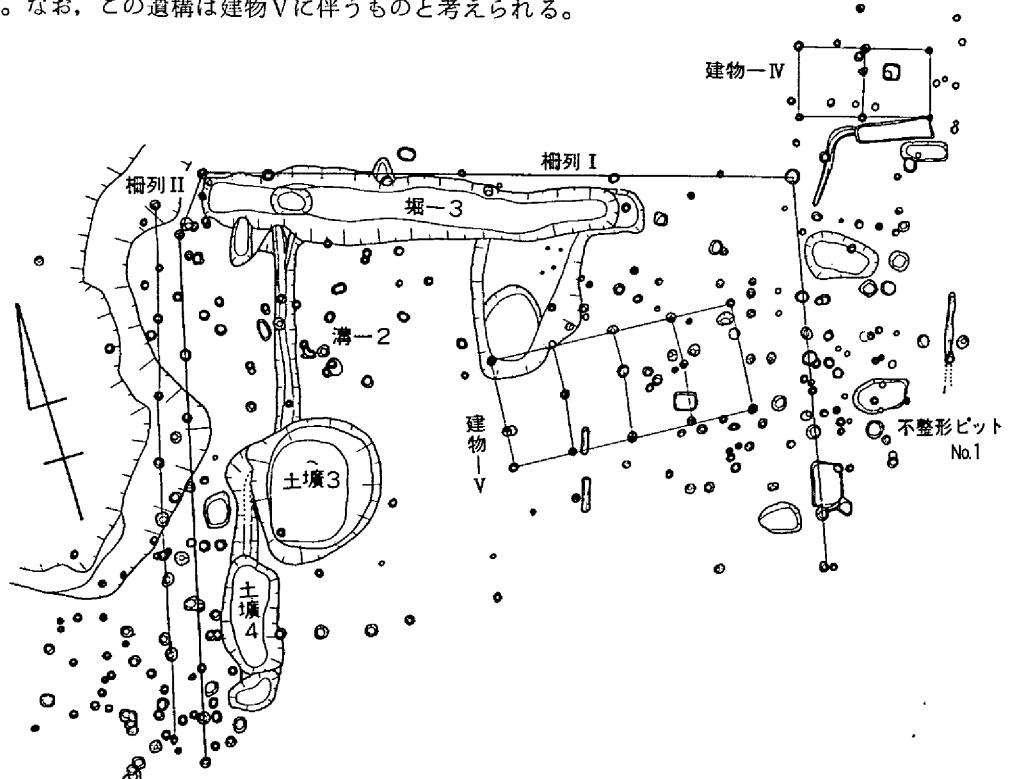
#### 5) 建物V

柵列で囲まれた東西棟4間(815cm)×1間(350cm)の建物で、柱間は、桁行203cm等間、梁行350cmである。柱穴掘り方は約20~30cm、深さは約20~50cmを測る。

### 柵 列

柵列は2列確認できた。柵列Iは丘陵北半分の区域をコの字状に囲む遺構である。柱穴の間隔は西側で約80cm、北側で80~200cm、東側で80~100cmの間隔で認められる。柱穴掘り方は10~30cm、深さは20~40cmを測る。特に東側柱穴は掘り方が40~50cm、深さ70cmを測ることから堅固な構築をしていったことが推測される。

柵列IIはIの西外側に認められる遺構である。柱穴掘り方は20~40cm、深さは20~40cmを測る。柱穴の間隔は160~300cmである。柵列I、IIの前後関係は不明であるが、同時性が強いものと予想される。なお、この遺構は建物Vに伴うものと考えられる。



第263図 丘陵南側遺構配置図 ( $\frac{1}{250}$ )

### 東斜面造成土層内出土遺物

本調査区においては、丘陵東斜面に設定したT—5の調査結果をふまえて、丘陵の東端部から北東端部にかけて顕著な盛土造成がみられたが、遺物もこの範囲で出土したものである。そして、これらの遺物の大部分は中層で出土し、古墳時代から江戸時代までの遺物を包含していた。**2390**は円筒埴輪片、**2391**は室町時代、**2392**は灯明皿、**2394～2400**は土師質の小皿で鎌倉～室町時代のものと思われる。**2401**は平瓦片、**2402～2406**は巴文軒丸瓦、**2407**は16弁の菊花文である。**2408～2411**は軒平瓦である。**2409**は丸い頸の形態であり、鎌倉時代のものと考えられる。

### 表土層出土遺物

表土層で出土した遺物の大部分は、表土層除去の際に採集したものである。後世の削平が著しいため、弥生式土器（**2412～2414**）、青磁（**2415**）、備前焼（**2416～2418、2420**）、瓦器（**2419**）、キセル（**2421**）の他は図示していないが、近世の瓦も多量に出土している。特に**2417**は備前焼の墓入であるが、中には骨片が充満しており、両墓性に関係する遺物と考えられる。**2419**は当麻右岸用水路調査区で出土した瓦器と同時期のものである。**2420**は須恵器系統の窯で焼成されたもので、鎌倉時代初期のものである。

### 小 結

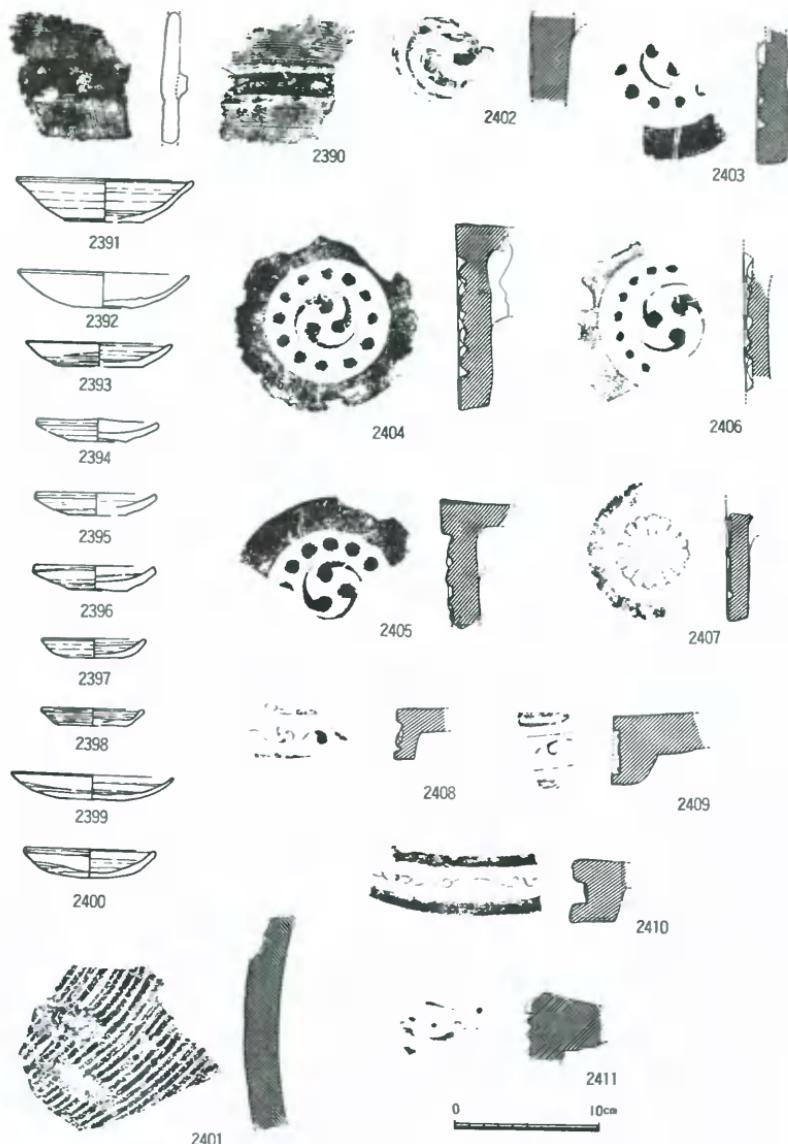
#### 遺物について

遺物は弥生時代から江戸時代までのものが出土している。円筒埴輪片（**2344、2390**）は丘陵南側裾（当麻右岸用水路）を発掘調査した時に多量に出土したが、これらの埴輪と比較して胎土、焼成、成形技法においてもほぼ同時期の様相を呈しており、この丘陵に5世紀後半の古墳が存在していたことは間違いないと思われる。滑石製の皿状製品（**2345**）も本県では類例の少ない製品であるが、瓦は鎌倉時代と室町時代の2種類が認められるが、室町～江戸時代のものが圧倒的に多い。**2346、2348、2420**は須恵器系統の皿形土器である。いずれも底部には糸切り痕跡がある。おそらく**2328、2339、2409**と同時期のものであり、備前の大明神窯址（註3）で焼成された可能性をもつ遺物である。

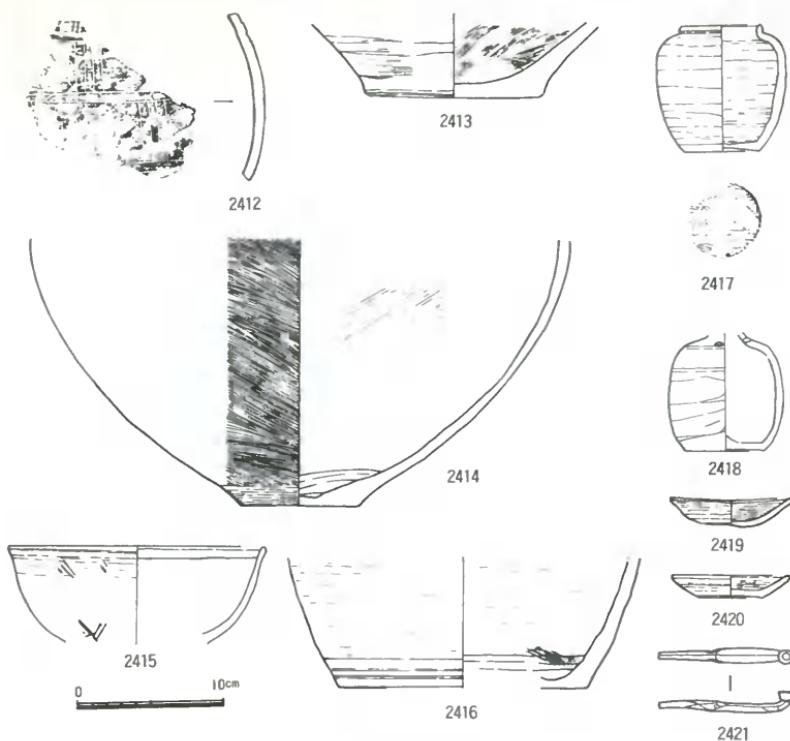
土壙墓内出土遺物（**2355～2370**）はいずれも江戸時代後期の遺物と考えられる。

#### 遺構について

本調査区において検出された遺構は堀、溝状遺構、土壙、土壙墓、建物址、柵列であり丘陵中央部を除いて全域に遺構が認められた。しかし、鎌倉、室町時代の瓦を出土したにもかかわらず、瓦葺の建物址は検出することはできなかった。検出できた建物址はいずれも瓦葺ではない掘立柱の構築物で



第264図 東斜面造成土層内出土遺物 (1/4)

第265図 表土層出土遺物 ( $\frac{1}{4}$ )

ある。

掘一1、溝一1に埋まれた北東端部付近には櫓的な機能をもつ構築物が存在した可能性がある地形であるが、柱穴等の遺構は検出されなかった。建物I～IVは室町～江戸時代初期の構築物と思われる。柵列I・IIとその中に配置された建物Vは同時期の遺構と考えられる。時期は柵列Iの柱穴の一部が江戸時代後期と考えられる堀一3に切られていることから室町～江戸時代初期の遺構であろう。

応仁の乱以後、備前国では金川城を居城とする松田氏、三石城、天神山城を居城とする浦上氏などの有力な国人衆が霸権争いを開始したが、浦上宗景に仕えた宇喜多直家が天正5年に主家を倒して備前国の支配者となった。宇喜多氏は邑久郡の国人で、備前国の支配を図る過程で有名な「明禪寺崩れ」と呼ばれる合戦の他多くの合戦を行ってきたが、本調査区の南に約800m程離れた丘陵尾根端部にある正木城には宇喜多氏の家臣である岡但馬守が居城していたことから、防禦的な施設をもつこの遺構は正木城の砦のような性格をもっていた可能性がある。

## 第6章 百間川当麻遺跡

土壙墓は合計6基検出できた。埋葬は人骨の出土状態、土壙形態からみて1は仰臥屈葬、2、3は座位屈葬、4は横臥屈葬の形式と考えられる。棺の形態は1、4、6が長方形を呈する木棺、2、3が桶棺と考えられる。時期は副葬品からみて、いずれも江戸時代後期のものである。人骨は正式の鑑定をうけていないが、骨格がいずれも大きいことから男性と考えられる。年令は歯の磨耗状態から壮年の人であろう。

当麻地区は両墓制（註4）が実施されてきたところであり、発掘調査前には石塔、家型らん塔、五輪塔が存在していたが、このように屈葬人骨が大量に出土することは予想できなかった。表土層を除去した時に1点だけ備前焼の茶入（2417）に人骨を入れたものが出土したが、これは第二次墓地に分骨したものと解釈されよう。

両墓制の起源は近世以降ではなく、かなり古くからあったのではないかという見解（註5）があるが、この地方では発掘調査の事実からみて、もし、両墓制が実施していたとするならば江戸時代後期以降であろう。いずれにしろ、このことは本地方における両墓制の開始時期を知るうえで貴重な資料であろう。

本調査区では弥生時代から江戸時代までの遺物と室町～江戸時代までの遺構が検出されたが、遺構に伴う遺物があまりないため、検討を要する問題がいくつもある。そして、民俗学においてはこの地方は両墓制が実施されてきた極めて注目される地域だけに、第二次墓地として近年まで機能してきたこの丘陵をどのように評価すべきか今後に残された課題といえよう。

（文 松本  
図 二宮）

### 註

- 註1 間壁忠彦、間壁蘿子「備前焼研究ノート」(1)～(3) 倉敷考古館研究集報1号、2号3号、1966年3月、  
11月、1968年10月
- 註2 伊藤晃、浅倉秀昭「沖の店遺跡」p.118、p.126 山陽自動車道建設に伴う発掘調査2、岡山県埋蔵文化財  
発掘調査報告42、1981年
- 註3 間壁忠彦、間壁蘿子「備前焼研究ノート」(1) p.26、倉敷考古館研究集報第1号 1966年
- 註4 土井卓治、佐藤米司「岡山の民俗」p.205、1972年
- 註5 民俗学研究所編「民俗学辞典」p.673、1977年

表6 百間川当麻遺跡出土土器観察表

1) D-4

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	高杯	1	○「ハ」字状に広がる脚の端部は、屈曲して外側に面を有する。	○内外面とも全体に回転なでを施している。 ○ロクロの回転方向は、時計通りである。	○内面は灰色。外面は青灰色。 ○1.0mm以下の細かい砂粒を含む。 ○焼成は全体に良好である。

2) D-5

土師器	土鍋	2	○口縁部は緩やかに内彎しながら斜め上方へ立ち上がり、端部に面を有する。	○口縁端部外面は、横なでを施す。 ○口縁部外面には、縦方向に櫛状工具の痕跡が存在する。 ○口縁部内面には、横または斜め方向に櫛状工具の痕跡が存在する。 ○外面の頸部直下には、縦または斜め方向に櫛状工具の痕跡が存在する。 ○内面の頸部直下には、横方向に櫛状工具の痕跡が存在する。 ○外面の頸部には、縦方向に施した櫛状工具の痕跡の上面に、横なでを加えている。	○明るい褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は良好で、外面に煤の付着が認められる。
	高台付椀	3	○高台は貼り付けである。	○全体に横なでを施している。 ○全体に丹塗りを加えている。	○全体に丹塗りを行っているため、淡赤色。 ○1.0mm以下の細かい砂粒を含むが、量は少ない。
皿	4		○口縁部は外反して、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底である。	○全体に横なでを施している。 ○全体に丹塗りを加えている。	○全体に丹塗りを行っているため、淡赤色。 ○1.0mm以下の細かい砂粒を含むが、量は少ない。
	5		○底部は平底である。	○内外面とも全体に横なでを施している。 ○底部は回転箝切りである。	○内面は灰色、外面は煤が付着して黒褐色。 ○1.0mm以下の細かい砂粒を多く含む。
須恵器	甕	6	○口縁部は斜め上方へ外反して、端部に中央部が浅く窪んだ面を有する。 ○肩部の器壁は、口縁部よりも厚い。 ○外面の頸部には、凹凸が認められる。	○口縁部から頸部は、全体になでを施している。 ○外面の頸部には、縦方向の叩き目が認められる。 ○内面の頸部には、青海波の叩き目が存在する。	○全体に黒灰色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は極めて良好である。
	椀	7	○底部から口縁部へ移行するにしたがって、器壁が薄くなっている。 ○口縁部は斜め上方へ立ち上がる。 ○内外面とも器表面には、凹凸が認められる。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に黒灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は極めて良好である。
杯蓋	8		○口縁端部は屈曲して、外面に中央部がわずかに窪んだ面を有する。	○全体に回転なでを施している。	○全体に黒灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。
高台付杯身	9		○高台は貼り付けで、斜め方向へ立ち上がる。	○全体に回転なでを施している。	○内面は灰色、外面は青灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。
杯身	10		○肥厚しながら斜め上方へ立ち上がった口縁は、屈曲して端部を丸く仕上げている。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。
	11 12		○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○内面の器表面には、凹凸が認められる。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。

## 第6章 百間川当麻遺跡

### 3) P-4

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器	13		○斜め上方へ外反した口縁の端部は、横方向に張り出して、中央部がわずかに窪んだ面を有する。 ○内面の口縁端部は、わずかに浅く窪んでいる。	○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○内面の口縁部には、全体に横または斜め方向の櫛状工具の痕跡が認められる。 ○外面の頸部下位には、絞または斜め方向に施した櫛状工具の痕跡が存在する。 ○内面の頸部下位は、全体に横なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○3.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は極めて良好である。
	14		○斜め上方へ外反した口縁の端部は、横方向に張り出して、中央部がわずかに窪んだ面を有する。 ○内面の口縁端部は、わずかに浅く窪んでいる。	○内外面とも全体に横なでを施している。	○内面は褐色、外面は煤が付着して黒褐色。 ○3.0mm以下の砂粒を多量に含む。
	15 16		○口縁部は斜め上方へ立ち上がる。	○全体に横なでを施している。 ○全体に丹塗りを加えている。 ○底部は回転箝切りである。	○全体に丹塗りを行っているため、淡赤色。 ○1.0mm以下の細かい砂粒を含むが、量は少ない。
須恵器	17		○口縁端部は屈曲して、外面に中央部がわずかに窪んだ面を有する。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。
	18		○内外面とも器表面には、凹凸が認められる。 ○底部は平底だが、弓なりになっている。	○底部は回転箝切りである。 ○体部は回転なでを施している。	○全体に灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。
	19		○口縁部は内巻して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に青灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。
	20		○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○内面の器表面には、凹凸が認められる。 ○底部は平底であろう。	○内外面とも全体に回転なでを施している。 ○底部は回転箝切りである。	○全体に青灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は極めて良好である。
短頸壺	21	口径 4.5 器高 4.0 頸部最大径 6.9	○口縁部は短く垂直に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○頸部の最大径はほぼ中央部に存在する。 ○内面の器表面には、凹凸が認められる。	○外面の口縁部から頸部は、全体に回転なでを施している。 ○底部は手持ちによる箝削りを行っている。	○全体に灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を含む。 ○焼成は極めて良好である。 ○完形品。

### 4) P-5

土 師 質 土 器	高台付椀	22	○口縁部は内巻ながら斜め上方へ立ち上がり、端部は短く外反して丸く仕上げている。	○内面は全体に不定方向の丁寧ななでを施している。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が認められ、不調整である。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。
	小皿	23	器高 1.2~1.3	○口縁部は斜め上方へ短く立ち上がり、端部を丸く仕上げている。 ○内面の器表面には、凹凸が認められる。 ○底部は器壁の厚い平底である。	○底部は回転箝切りである。 ○内外面とも全体に横なでを施している。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	甕	24	○斜め上方へ外反した口縁の端部は、上下に拡張して外面に中央部がわずかに窪んだ面を有する。	○口縁部の端部と外面全体は、横なでを施している。 ○内面の口縁部には、斜め方向の櫛状工具の痕跡が認められる。 ○内面の頸部下位は、全体に横なでを施している。 ○外面の頸部には、斜め方向の櫛状工具の痕跡が存在する。	○内面は赤褐色、外面は煤が付着して黒褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。
	土鍋	25	○斜め上方へ外反した口縁の端部は、丸く仕上げている。	○口縁部の端部と外面全体は、横なでを施している。 ○内面の口縁部には、交叉する斜め方向の櫛状工具で施した痕跡が存在する。 ○内面の頸部下位は、全体に横方向の櫛状工具の痕跡を施している。	○全体に褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○外面には煤の付着が認められる。
		26	○斜め上方へ外反した口縁の端部は、丸く仕上げている。	○口縁端部は横なでを施している。 ○内面の口縁部には、横または斜め方向の櫛状工具で施した痕跡が存在する。 ○外面の口縁部と頸部には、指頭圧痕が認められる。 ○外面の口縁部から頸部には、縱または斜め方向の櫛状工具の痕跡が存在する。	○内面は褐色、外面は煤が付着して黒褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は極めて良好である。
	小皿	27 ↓ 32	○口縁部は斜め上方へ短く立ち上がり、端部を丸く仕上げている。 ○内面の器表面には、凹凸が認められるもの(27)も存在する。 ○底部は器壁が比較的厚い平底である。	○底部は回転箝切りである。 ○内外面とも全体に横なでを施している。	○いずれも全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも極めて良好である。
	高台付椀	33 ↓ 44	○口縁部は内側しながら斜め上方へ立ち上がり、端部は短く外反して丸く仕上げている。 ○高台は貼り付けである。	○内面は全体に不定方向の丁寧なでを施している。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部は、指頭圧痕の上面に不定方向のなでを加えている。 ○内面には重ね焼の痕跡が認められる。	○いずれも全体に淡黃白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	皿	45 ↓ 47	○内面の器表面には、凹凸が認められる。 ○底部は平底である。	○底部は回転箝切りである。 ○内外面とも全体に横なでを施している。	○いずれも赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を含む。
須恵質土器	碗	48 49	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部を丸く仕上げている。 ○内面の器表面には、凹凸が認められる。	○口縁部は内外面とも全体に回転なでを施している。 ○底部は回転糸切りである。	○全体に灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は極めて良好である。
	皿	50	○底部はわずかに上げ底になっている。	○底部は回転糸切りである。 ○内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。
土師器	高台付椀	51 高台径 8.4	○高台は貼り付けで、斜め方向に最も立ち上がる。	○高台の難ぎ目は、横なでを加えている。 ○内面全体と高台は、横なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を含む。
	皿	52 53	○口縁部は斜め上方へ外反して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○内面の器表面には、凹凸が認められる。 ○底部は平底である。	○底部は回転箝切りで、後に不定方向のなでを加えている。 ○内外面とも全体に横なでを施し、丹塗りを行っている。	○全体に丹塗りを行っているため、淡赤色。 ○1.0mm以下の砂粒を含む。
須恵器	杯身	54	○内外面とも器表面には、凹凸が認められる。 ○底部は平底だが、弓なりになっている。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に灰褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

	器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	高台付杯身	55 56 57		○底部より口縁部にかけては、斜め上方へ立ち上がる。 ○高台はいずれも貼り付けである。	○外面の底部は、回転窓削りを行っている。 ○内外面とも全体に回転なでを施している。	○内面は灰色、外面は青灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。

## 6) 中世墓

中世陶器	変	58	口径 54.3 器高 86.4 胴部最大径 79.3 底部径 46.2	○胴部から肩部にかけて比較的張り出しており、球形に近い形態を呈する。 ○頸部から口縁部にかけては、緩やかに外反する。 ○口縁部は短く外に折り曲げられたもので、玉縁を若干垂下させる。	○内面の胴部は、粘土紐の難ぎ目を消すかのように指頭圧痕が認められ、さらにその指頭圧痕を消すための窓跡が存在する。 ○口縁部は、内外面とも全体に横なでを施している。	○胎土：山土と田土の混合。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面とも暗紫灰色、断面は明赤灰褐色。 ○接合完形品。 ○無焼。
------	---	----	--	--	--	--

## 7) A 地点の遺構に伴わない遺物

弥生式土器	變形土器	99		○口縁部は「く」字状に外反し、端部には中央部に浅い段が認められる面を有する。 ○口縁部の器壁は、胴部よりも厚い。	○口縁部は内外面とも横なでを施している。 ○外面の頸部には、窓状工具による横方向の痕跡が認められる。 ○内面の頸部下位は、横方向の窓削りを行っている。	○全体に赤褐色または淡灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は極めて良好である。
		100		○斜め上方へ外反して立ち上がった口縁の端部は、拡張して面を有する。	○口縁端部には、5条の退化窓跡が認められる。 ○口縁部から頸部にかけて、内外面とも全体に横なでを施している。	○淡赤褐色または淡灰褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を含む。
		101		○「く」字状に短く外反した口縁の端部は、大きく拡張して幅の広い面を有する。 ○頸部の器壁は、口縁部よりも厚い。	○口縁端部には、3条の退化窓跡が認められる。 ○口縁部と頸部は、内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の胴部には、横方向の窓削りを施している。	○全体に黄褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を含む。 ○焼成は極めて良好である。
		102		○肥厚しながら斜め上方へ外反した口縁の端部は、丸く仕上げている。	○内外面とも全体に横なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○口縁端部に黒斑を有する。
		103		○「く」字状に外反した口縁の端部は、わずかに肥厚して面を有する。 ○口縁部はわずかに内傾している。 ○胴部の最大径は、ほぼ中央部に存在する。	○口縁端部には、1条の退化窓跡が認められる。 ○口縁部と頸部は、内外面とも全体に横なでを施している。 ○外面の胴部には、縦方向の窓削りが認められる。 ○内面の胴部には、横または斜め方向の窓削りを行っている。	○全体に淡灰褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を含む。 ○焼成は全体に良好である。
		104		○「く」字状に外反した口縁は、端部へ移行するにしたがってわずかに肥厚している。 ○口縁端部には、中央部が浅く盛んだ面を有する。 ○胴部の最大径は、ほぼ中央部に存在する。	○口縁部から頸部は、内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の口縁端部には、浅い窓跡が認められる。 ○内面の胴部の頸部直下には、横方向の窓削りが認められる。 ○内面の胴部中央部には、縦または斜め方向の窓削りを行っている。 ○外面の胴部には、縦または斜め方向の刷毛目が認められる。	○内面は淡灰褐色、外面は淡褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を含む。 ○焼成は極めて良好である。
		105		○口縁部は「く」字状に肥厚しながら外反し、端部には1条の退化窓跡が認められる面を有する。 ○胴部の最大径は、頸部に近接した比較的上位に存在する。	○口縁端部には、1条の退化窓跡が認められる。 ○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○外面の頸部は、横なでを施している。	○内面は淡乳灰色、外面は淡灰褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面の胴部は、磨滅が著しい。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弥生式土器				<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面の頸部直下には、指頭による押圧痕跡が認められる。</li> <li>○内面の胴部には、横方向の箝削りを行っている。</li> <li>○外面の胴部には、縦方向の刷毛目を施している。</li> </ul>	
	106		<ul style="list-style-type: none"> <li>○「く」字状に外反した口縁の端部は、上下に拡張して1条の退化凹線が認められる面を有する。</li> <li>○胴部の形態は、頸部より「ハ」字状に大きく開いている。</li> <li>○胴部の器壁は、口縁部よりも厚い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部には、1条の退化凹線が認められる。</li> <li>○口縁部と頸部は、内外面とも全体に横なでを施している。</li> <li>○内面の胴部上位には、指頭による押圧痕跡が認められる。</li> <li>○内面の胴部は、横方向の箝削りを行っている。</li> <li>○外面の胴部には、縦または斜め方向の刷毛目を施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に暗灰色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含む。</li> <li>○焼成は極めて良好である。</li> </ul>
	107		<ul style="list-style-type: none"> <li>○「く」字状に外反した口縁の端部は、上下に拡張して2条の退化凹線が認められる面を有する。</li> <li>○胴部の形態は、頸部より「ハ」字状に大きく開いている。</li> <li>○胴部の器壁は、口縁部よりも厚い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部には、2条の退化凹線が認められる。</li> <li>○口縁部と頸部は、内外面とも全体に横なでを施している。</li> <li>○内面の胴部上位は、横なでを施している。</li> <li>○内面の胴部中央部は、全体に横方向の箝削りを行っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は黒灰褐色、外面は淡灰褐色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含む。</li> <li>○焼成は極めて良好である。</li> <li>○外面の胴部は、磨滅が著しい。</li> </ul>
	108 109		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は緩やかにわずかに内傾しながら「く」字状に外反し、端部には1条の浅い退化凹線が認められる面を有する。</li> <li>○胴部の形態は球形に近い形を呈し、最大径はほぼ中央部に存在する。</li> <li>○底部はわずかに上げ底を呈する、安定した平底である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部には、1条の浅い退化凹線が認められる。</li> <li>○口縁部と頸部は、内外面とも全体に横なでを施している。</li> <li>○外面の頸部直下には、刷毛目の上面に箝状工具の押圧痕跡が認められる。</li> <li>○内面の胴部上位は、横方向の箝削りを行っている。</li> <li>○内面の底部に近い部分は、縦または斜め方向の粗い箝削りを行っている。</li> <li>○外面の胴部は、全体に縦または斜め方向の刷毛目を施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に暗褐色。</li> <li>○2.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○胎土中には、細かい雲母粒や石英粒が認められる。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○108と109は同一個体である。</li> </ul>
	110		○底部は安定した平底である。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に縦または横方向の箝削りを行っている。</li> <li>○外面の胴部と底部の境界部分は、指頭圧痕が顕著に認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は赤褐色、外面は淡灰褐色。</li> <li>○1.5mm以下の砂粒を含む。</li> <li>○外面の胴部は、磨滅が著しい。</li> </ul>
	111		○底部は安定した平底である。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面の胴部は、縦方向の箝削りを施している。</li> <li>○内面の底部には、箝状工具の押圧痕跡が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は淡乳灰色、外面は淡赤褐色。</li> <li>○外面の胴部は、磨滅が著しい。</li> </ul>
	112		○底部はわずかに上げ底を呈するが、安定した器壁の厚い平底である。	○内外面とも器表面全体の磨滅が著しくて、仕上げ手法が不明である。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は淡乳白色、外面は暗褐色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多量に含む。</li> <li>○内外面とも全体に磨滅が著しい。</li> </ul>
	113		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は斜め上方へ大きく外反し、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○杯部は比較的浅く、脚部からわずかに内彎して口縁部に至る。</li> <li>○口縁部と杯部の境界部分には鋭い稜が認められ、箝状工具で施した1条の凹線が認められる。</li> <li>○脚部は比較的長く、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○脚部の円孔は、4箇所に認められ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面の口縁部は、横方向の箝磨きを施している。</li> <li>○外面の口縁部は、横なでを行った後に液状を呈する箝磨きを施している。</li> <li>○内面の杯部は、横方向の刷毛目を施した後に縦方向の箝磨きを行っている。</li> <li>○外面の杯部は横方向の箝磨きを施しているが、中央部は磨滅が著しいために不明である。</li> <li>○内面の脚部上位には、絞り痕跡と箝状</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に淡乳褐色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含む。</li> <li>○焼成は極めて良好である。</li> </ul>

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
笄生式土器	高杯形土器		る。 ○脚部と杯部は、脚柱部を杯部に刺し込んでいる。	工具で施した押圧痕跡が認められる。 ○内面の脚部と脚端部は、横なでを施している。 ○外面の脚柱部は、縦方向の蒐磨きを施している。 ○外面の脚端部は、縦方向の刷毛目の上面に縦方向の蒐磨きを施している。 ○円孔はいずれも外から内方向へ刺している。	
			○口縁部は斜め上方へ大きく外反し、端部は丸く仕上げている。 ○杯部は比較的浅く、脚部からわずかに内寄して口縁部に至る。 ○口縁部と杯部の境界部分には長い後が認められ、範状工具で施した1条の凹線が認められる。 ○脚部は比較的長く、脚端部は不明である。 ○脚部の円孔は、推定で7箇所に認められる。 ○脚部と杯部は、脚柱部を杯部に刺し込んでいる。	○外面の口縁部には、縦方向の蒐磨きが認められる。 ○内面の口縁部と杯部全体は、磨滅が著しいので手法は不明である。 ○内面の脚柱部には絞り痕跡が認められ、横なでを施している。 ○外面の脚柱部下位には、推定で15条の浅い沈線が存在する。 ○円孔はいずれも外から内方向へ刺している。	○全体に淡灰白色または淡赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○杯部の一部と脚部の端部を欠損している。
	114		○口縁部は器壁が薄くなつて上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁部の器表面には、凹凸が認められる。 ○体部は内寄して斜め上方へ立ち上がり、口縁部との境界部分に鈍い稜が存在する。	○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の頸部下位には、指頭圧痕が認められる。 ○内面の体部には、指頭によるなで上げ痕跡が存在する。 ○外面の体部は、磨滅が著しくて手法が不明である。	○全体に淡灰褐色。 ○0.5mm前後の砂粒を多く含む。 ○胎土中には雲母粒や石英粒が認められる。 ○焼成は全体に良好である。
土師器	鉢形土器	115	○口縁部は斜め上方へ内寄して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。	○外面は全体に横方向の蒐磨きを施している。 ○内面の口縁部は、横方向の蒐磨きを施している。 ○内面の下位は、縦方向の蒐磨きを施している。	○全体に黄褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
			○口縁部は「く」字状に斜め上方へ外反し、さらに屈曲して上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は丸く仕上げている。	○口縁端部の外面には、柳状工具で施した7条の平行沈線が認められる。 ○口縁部と頸部は、全体に横なでを施している。 ○内面の頸部下位は、横方向の蒐削りを行っている。	○内面は黄褐色、外面は灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は良好で、外面に煤の付着が認められる。
須恵器	壺	116	○口縁部は斜め上方へ内寄して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。	○外面は全体に横方向の蒐磨きを施している。 ○内面の口縁部は、横方向の蒐磨きを施している。 ○内面の下位は、縦方向の蒐磨きを施している。	○全体に黄褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
			○口縁部は「く」字状に外反した口縁の端部は、内寄して丸く仕上げている。 ○外面の口縁部の器表面には、凹凸が認められる。	○内外面とも全体に横なでを施している。	○内面は灰色、外面は青灰色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○外面には自然釉が付着している。
	117		○口縁部はわずかに外反して短く立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○外面の頸部には、扁平な突唇が認められる。 ○胴部は球形を呈し、最大径はほぼ中央部に存在する。	○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の胴部には、青海波の叩き目が認められる。 ○外面の胴部には、横方向の平行叩き目が存在する。	○全体に灰色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に極めて良好である。
	横瓶	120	○口縁部は斜め上方へ短く立ち上がり、端部は下方へ張り出して彎曲した面を有する。 ○胴部は横方向へ大きく張り出している。 ○胴部の器壁は、口縁部よりも厚い。	○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の胴部には、青海波の叩き目が認められる。 ○外面の胴部には、平行叩き目が存在する。	○全体に灰色。 ○2.0mm以外の砂粒を多量に含む。 ○焼成は極めて良好である。 ○外面には自然釉が付着している。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須 恵 器	121	推定口径11.0 推定器高 4.4	○天井部は緩やかに彎曲している。 ○天井部と口縁部の境界部分には、鋸い棱が認められる。 ○口縁部が器高の半分以上を占めている。 ○口縁部は緩やかに屈曲して外傾し、端部は丸く仕上げている。	○外面の天井部中央には、回転窓削りが認められる。 ○外面の口縁部から天井部の約1/3部分は、回転なでを施している。 ○内面は全体に回転なでを施している。	○全体に灰黒色。 ○1.5mm以下の砂粒を含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約%残存。
	122		○天井部は弓なりになっている。 ○天井部と口縁部の境界部分には、鋸い棱が認められる。 ○口縁部は短く直立し、端部は丸く仕上げている。	○外面の天井部中央には、回転窓削りが認められる。 ○外面の天井部中央以外は、全体に回転なでを施している。	○全体に灰黒色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。
	123	推定口径11.0 推定器高 3.5	○天井部は扁平である。 ○天井部と口縁部の境界部分には、鋸い棱が認められる。 ○口縁部は短く直立し、端部は丸く仕上げている。	○外面の天井部には、手持ちの窓削りが認められる。 ○外面の天井部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。 ○ロクロの回転方向は、時計通りである。	○全体に灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。
	124		○天井部は扁平である。 ○天井部と口縁部の境界部分には、鋸い棱が認められる。 ○口縁部はわずかに外傾して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。	○外面の天井部には、回転窓削りが認められる。 ○外面の天井部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に灰色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は極めて良好である。
杯身	125		○口縁部の立ち上がりは、内傾して斜め上方へ張り出し、断面が細長い三角形を呈する。 ○受部の器壁は著しく薄く仕上げ、端部が内弯して立ち上がる。 ○体部は緩やかに内弯して斜め上方へ立ち上がる。	○外面の底部は、回転窓削りを施している。 ○体部から口縁部にかけては、内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。
	126	口径 10.5 受部径 12.4 器高 3.5	○口縁部の立ち上がりは、内傾して斜め上方へ張り出し、端部は丸く仕上げている。 ○受部は内弯して短く立ち上がる。 ○体部は器壁が薄くなりながら、内弯して斜め上方へ立ち上がる。	○外面の底部は、回転窓削りを施している。 ○体部から口縁部にかけては、内外面とも全体に回転なでを施している。 ○ロクロの回転方向は、逆時計通りである。	○全体に灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○接合完形品。
	127	推定口径10.4 推定受部径 12.2 最大器高 3.8	○口縁部の立ち上がりは、外弯して斜め上方へ張り出している。 ○受部は短く斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○全体に歪んだ形を呈し、左右対称にならない。	○外面の底部は、回転窓削りを施している。 ○体部から口縁部にかけては、内外面とも全体に回転なでを施している。 ○底部は内外面とも回転成形によって生じた凹凸が認められる。 ○ロクロの回転方向は、時計通りである。	○全体に灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約%残存。
	128		○口縁部の立ち上がりは、内傾して斜め上方へ張り出し、断面が細長い三角形を呈する。 ○受部は上下に拡張して、外側に面を有する。 ○底部から体部にかけての器壁は薄く、内弯して斜め上方へ立ち上がる。	○外面の底部は、回転窓切りを施している。 ○体部から口縁部にかけては、内外面とも全体に回転なでを施している。	○内面は灰色、外面は灰黒色。 ○1.0mm以下の砂粒を含む。 ○焼成は極めて良好である。
短頸壺	129		○口縁部は短く直立し、端部は丸く仕上げている。 ○胴部は球形を呈し、最大径を有する中央部には1条の凹線が存在する。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○外面には自然釉が付着している。
高杯	130		○杯部は内弯して斜め上方へ立ち上がる。 ○内外面とも器表面は、成形によって生じた凹凸が認められる。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	平瓶 131 132		○口縁部はわずかに内側して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○132の外面には、1条の凹線が存在する。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に灰色または灰黒色。 ○焼成は良好で、外面に自然釉が付着している。
	壺 133		○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁部と頸部の境界部分には鋭い稜が認められ、その上位に1条の凹線が存在する。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に青黒色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は極めて良好である。
	高杯 134 139		○杯部はいずれも欠損して不明である。 ○脚部は「ハ」字状に短く広がり、端部は上下に拡張して中央部がわずかに窪んだ面を有する。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○いずれも灰色または青灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	杯身 140		○受部から屈曲した口縁部は、外側して上方へ短く立ち上がる。 ○体部は外側して斜め上方へ立ち上がる。 ○底部内面の器表面には、凹凸が認められる。	○外面の底部には、回転箝削り痕跡がわずかに存在する。 ○外面の底部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は極めて良好である。 ○邑久郡邑久町折林(宮崎)古窯址出土遺物に類似。
杯蓋	141 推定口径12.2 器高 2.2 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5		○天井部は扁平である。 ○天井部中心部分には、中央部がわずかに窪んだつまみが存在する。 ○つまみは天井部に貼り付けている。 ○口縁部は「ハ」字状に張り出し、端部は丸く仕上げている。 ○口縁端部より0.9cm内側にかえりが存在する。	○天井部は回転箝削りである。 ○つまみは全体に回転なでを施している。 ○外面の口縁部と内側のかえりより外側は、回転なでを施している。 ○内面のかえりより内側は、全体に回転箝削りのままである。 ○ロクロの回転方向は、逆時計回りである。	○全体に灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に極めて良好である。 ○約半残存。
	142 つまみ径 2.2 つまみ高 1.1		○天井部は弓なりに彎曲している。 ○天井部中央には、擬宝珠様のつまみが存在する。 ○つまみは天井部に貼り付けている。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○内面は灰色、外面は青灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。
	143 つまみ径 2.0 つまみ高 0.8		○天井部は扁平である。 ○天井部中央には、上面が弓なりに彎曲したつまみが存在する。 ○つまみは天井部に貼り付けている。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は極めて良好である。
	144 つまみ径 5.6 つまみ高 0.9		○天井部は扁平である。 ○天井部中央には、高台に類似した環状のつまみが存在する。 ○つまみは天井部に貼り付けている。	○つまみも天井部も、内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に青灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は極めて良好である。 ○外面には自然釉が付着している。
	145		○口縁部は「ハ」字状に彎曲して張り出し、端部が著しく拡張してかえりが存在する。 ○口縁端部はわずかに内側して丸く仕上げている。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に灰黒色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は極めて良好である。 ○外面には自然釉が付着している。
	146 つまみ径 3.4 つまみ高 0.6		○天井部は弓なりに彎曲している。 ○天井部中央には、上面が扁平で立ち上がりの低いつまみが存在する。 ○つまみは天井部に貼り付けている。	○つまみは全体に回転なでを施している。 ○外面の天井部は、回転箝削りのままである。 ○内面は全体に回転なでを施している。 ○ロクロの回転方向は、時計回りである。	○全体に青灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	147 推定口径17.0 推定器高 3.8 つまみ径 2.6 つまみ高 1.4		○天井部は弓なりに彎曲している。 ○天井部中心部分には、中央部がわずかに窪んだつまみが存在する。 ○つまみは天井部に貼り付けている。	○つまみは全体に回転なでを施している。 ○外面の天井部は、回転箝削りのままである。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なで	○全体に灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は極めて良好である。 ○約半残存。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	杯蓋		○口縁部は「ハ」字状に内轉して張り出し、端部は抗張して中央部がわずかに窪んだ面を有する。	○ロクロの回転方向は、時計廻りである。 ○施している。	
	148	推定口径18.0 推定器高 3.0 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	○天井部はつまみの存在する中央部がわずかに窪んでいる。 ○天井部中央には、擬宝珠様のつまみが存在する。 ○つまみは天井部に貼り付けている。 ○器表面は内外面とも成形によって生じた凹凸が認められる。 ○口縁部は「ハ」字状に内轉して張り出し、端部は屈曲して外面に中央部が窪んだ面を有する。 ○口縁端部は外脇して、丸く仕上げている。	○つまみは全体に回転なでを施している。 ○外側の天井部は、回転範削りのままである。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。 ○外側の口縁部には、重ね焼痕跡が認められる。 ○ロクロの回転方向は、時計廻りである。	○内面と口縁端部は灰白色、外側は全体に灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1%残存。
	149 159		○天井部は扁平なものがほとんどである。 ○口縁部は「ハ」字状に内轉して張り出し、端部は屈曲または肥厚して外側に面を有する。 ○口径は一樣でない。	○天井部は回転範削りのままのものや、回転なでを加えているものが存在する。 ○外側の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。 ○ロクロの回転方向は、時計廻りである。	○青灰色または灰色を呈している。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は良好で、外側に自然釉の付着が認められるものも存在する。
高台付長頸壺	160 162		○胴部上位から口縁部は、欠損して不明である。 ○胴部の最大径は、中位に存在するようである。 ○高台はいずれも貼り付けである。	○外側底部の高台より内側は、いずれも範削りのままである。 ○外側の底部以外は、全体に回転なでを施している。	○全体に灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○内面の底部と外側の胴部は、自然釉が付着している。
高台付杯身	163 166	166 推定口径16.2 器高 5.5~5.7 推定高台径 10.0 高台高 0.4	○口縁部は斜め上方へ大きく立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部の器壁は、比較的厚くなっている。 ○高台は貼り付けで、断面は四角形に近い形態を呈している。 ○高台接地面の中央部が、わずかに窪んでいるもの(165・166)も認められる。 ○内外面の器表面には、成形によつて生じた凹凸が認められる。	○外側底部の高台より内側は、いずれも回転範削りのままである。 ○外側の底部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。 ○ロクロの回転方向は、時計廻りである。	○163は備前焼に酷似した赤褐色、残りの個体は青灰色または灰色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○166は約1%残存。
	167 170		○口縁部は斜め上方へ大きく立ち上がり、端部は欠損して不明である。 ○高台は貼り付けで、断面は四角形または台形を呈している。 ○169の高台接地面の中央部は、わずかに窪んでいる。	○外側底部の高台より内側は、いずれも回転範削りのままである。 ○外側の底部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。 ○ロクロの回転方向は、いずれも時計廻りである。	○いずれも青灰色または灰色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	171 173 178	173 推定口径14.0 推定器高 4.2 推定高台径 8.6 高台高 0.7	○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部はいずれも丸く仕上げている。 ○口縁部の立ち上がりは、163~166の個体に比して短くなっている。 ○口縁端部の形態は、器壁が薄くなつてわずかに外脇するもの(171・176)と、肥厚して丸く仕上げているもの(172~175)がある。 ○口縁部の器表面には、成形によつて生じた凹凸が認められる。 ○高台はいずれも貼り付けである。 ○高台の断面は、四角形を呈して斜めに短く張り出すものと、外脇して比較的高いもの(173・175)がある。 ○高台の接地面部分は、いずれも内側に存在する。	○外側底部の高台より内側は、いずれも回転範削りのままである。 ○外側の底部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。 ○ロクロの回転方向は、いずれも時計廻りである。	○いずれも青灰色または灰色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○173と176は、どちらも約1%残存。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	高台付杯身 179 1 208	182 推定口径14.5 推定器高 3.7 推定高台径 3.7 高台高 0.4 196 高台径 0.8 高台高 0.4	○口径に比して器高の低い高台付杯身である。 ○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○181の口縁端部は、屈曲して短く外反する。 ○口縁部の器表面には、成形によって生じた凹凸が認められる。 ○高台はいずれも貼り付けである。 ○高台の断面は、四角形または台形を呈している。 ○高台は斜め方向に「ハ」字状を呈して短く張り出すものと、直立するものとが存在する。 ○高台の接地部分が、内側に存在するものが多い。 ○口径や高台径が著しく大きいもの(208)も認められる。	○外面底部の高台より内側は、いずれも回転窪削りのままである。 ○外面底部に「×」印が存在しているもの(207)も認められる。 ○外面の底部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。 ○高台の内側に、貼り付け部分がそのまま残存するもの(205)も存在する。	○いずれも青灰色または灰色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○182は約1%残存。
杯身	209 1 211		○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は短く屈曲して外反する。 ○底部は弓なりに彎曲している。	○外面の底部は、回転窪削りを施している。 ○外面の底部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。	○いずれも灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	212 1 214		○口縁部は内彎して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は弓なりに彎曲している。	○外面の底部は、回転窪削りの後に回転なでを加えている。 ○内外面とも全体に回転なでを施している。	○内面は灰色、外面は青灰色。 ○内面と口縁端部に自然釉の付着が認められる。
	215 1 217		○斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、大きく外彎している。 ○底部は弓なりに彎曲しているもの(215)も認められる。	○外面の底部は、回転窪削りを施している。 ○外面の底部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に青灰色または灰色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	218 1 220 推定口径12.4 228 推定器高 3.4		○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁端部は短く外彎しているもの(224-225)や内彎しているもの(228)が認められる。 ○底部はいずれも平坦になっている。 ○器表面には成形によって生じた凹凸が存在する。	○外面の底部は、回転窪削りのままである。 ○外面の底部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。 ○外面の口縁部に、重ね焼の痕跡が認められるものも存在する。 ○ロクロの回転方向は、時計通りである。 ○220は約1%残存。	○全体に青灰色または灰色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○内面と口縁端部に、自然釉の付着が認められるものも存在する。
	229 1 238		○口縁部はいずれも欠損して不明である。 ○底部は弓なりに彎曲しているものと、平坦なものが存在する。 ○内面の器表面には、成形によって生じた凹凸が認められる。	○外面の底部は、回転窪削りのまでもと、回転窪削りの後に回転なでを加えているものと認められる。 ○外面の底部以外は、いずれも全体に回転なでを施している。	○全体に青灰色または灰色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	239		○脚部と口縁部は、欠損して不明である。 ○陸部と海部の境界は明らかでなく、円面鏡ではないようである。 ○脚部には長方形と十字形の透し窓が存在する。 ○透し窓は外から内方向に切っている。 ○脚部との境界部分には、断面三角形の突唇が存在する。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○内面は灰色、外面は暗灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は極めて良好である。 ○器台か香炉の可能性が強い。
広口壺	240		○斜め上方へ立ち上がった体部は、頸部で著しく屈曲して口縁端部に至る。 ○口縁部は内傾して斜め上方へ短く立ち上がり、端部は外彎して丸く仕上げている。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○内外面とも全体に灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○口縁部には自然釉の付着が認められる。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器			○内面の頸部には、箆状工具で施した凹縁状の窪みがめぐらされている。		
	241	高台径 4.8 高台高 0.5	○体部は斜め上方へ立ち上がり、口縁部は欠損して不明である。 ○高台は貼り付けで、斜め方向に張り出している。	○外面の体部下位には、手持ちによる横方向の箆削りが認められる。 ○外面底部の高台より内側は、回転箆削りのままである。 ○高台は全体に回転などで施している。 ○体部上位と内面全体は、回転などで施している。	○全体に灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。
土師器	242 ↓ 250		○頸部から口縁部にかけては、緩やかに外彎するもの(242・246)、屈曲して「く」字状を呈するもの(245・249)、屈曲して「く」字状を呈した口縁の端部が内彎するもの(243・247)が存在する。 ○248の頸部内面には、接合部分の突起が認められる。	○外面の口縁部から頸部にかけて、指頭圧痕が認められるもの(243・250)が存在する。 ○外面の口縁部から頸部は、横などで施しているが、斜め方向に施した櫛状工具の痕跡が認められるもの(243)も存在する。 ○外面の頸部は、緩などで施しているもの(244・245・249)と縦または斜め方向の櫛状工具が認められるもの(243・246～248)があるが、横方向の箆削りを行っているもの(250)も存在する。 ○内面の口縁部は、横などで施しているもの(242・249・250)と横または斜め方向の櫛状工具の痕跡が認められるもの(243～248)が存在する。 ○内面の頸部は、横などで施しているもの(242～248)と横方向の箆削りを行っているもの(249・250)が存在する。	○いずれも赤褐色または褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○外面に煤の付着が認められるものも存在する。
	251	口径 14.6 器高 13.3 胴部最大径 15.8	○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○内面の頸部は、「く」字状に屈曲している。 ○胴部の最大径は、中位よりやや下方に存在する。 ○底部は丸底である。	○口縁部は横などで施している。 ○内面の口縁部は、横方向の櫛状工具の痕跡が認められる。 ○内面の頸部から底部は、全体に横などで施している。 ○外面の頸部から胴部は、縦方向の粗い櫛状工具の痕跡が存在する。 ○外面の底部には、横または斜め方向の交叉する粗い櫛状工具の痕跡が認められる。	○明るい褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は極めて良好である。 ○復原完形品。
	252		○口縁部は斜め上方へ外反し、端部には浅い窪みがめぐらされている。 ○口縁部の中位は、わずかに肥厚している。 ○胴部の形態は、卵形を呈するようである。 ○胴部の最大径は、中位よりやや下方に存在するようである。 ○胴部の器壁は、底部に移行するにしたがって厚くなるようである。	○口縁部は内外面とも全体に横などで施している。 ○内面の頸部から胴部は、全体に横などで施している。 ○外面の胴部には、縦または斜め方向の交叉する粗い櫛状工具の痕跡が認められる。	○内面は赤褐色、外面は淡黄白色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。
	253 ↓ 255		○口縁部は「く」字状に外反し、端部はわずかに外傾している。 ○口縁端部には中央部が浅く窪んだ面を有する。 ○内面の口縁部上端は、いずれも浅く窪んでいる。 ○内面の頸部には、綺い縫が認められる。	○口縁部はいずれも内外面とも全体に横などで施している。 ○内面の頸部は、横などで施しているもの(253・255)と交叉する粗い櫛状工具の痕跡が認められるもの(254)が存在する。 ○外面の胴部は、縦方向の櫛状工具の痕跡が存在するが、痕跡が極めて細いものの(254)と著しく粗いものの(255)の違いがある。	○全体に褐色または淡黄白色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土 師 器	256	口径 6.2 器高 4.2~ 4.6 体部最大径 6.8	○口縁部は短く屈曲し、端部には鋭い棱が認められる。 ○体部は球形を呈し、最大径は中位に存在する。 ○体部は内脣して頸部に至る。 ○底部は丸底である。	○内外面とも全体に横なでを施している。	○全体に褐色。 ○ 1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
高台付皿	257 258 261	口径 16.2 器高 3.4~ 3.8 高台径 11.1 高台高 1.2	○口縁部は内脣して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○高台はいずれも貼り付けで、斜め方向に張り出している。 ○高台の器壁は厚くて安定感があり、端部はいずれも丸く仕上げている。 ○257は高台の貼り付け部分が、そのままの状態で残存している。	○内面は全体に不定方向の丁寧ななでを施している。 ○外面底部の高台より内側は、箝削りのままである。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○高台は全体に横なでを施し、257以外は貼り付け部分を丁寧に仕上げている。	○いずれも赤褐色または褐色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
杯	262 264	264 底部径 7.7	○口縁部はいずれも欠損して不明である。 ○底部はいずれもわずかに上げ底になっている。 ○底部の器壁は、著しく厚くなっている。 ○底部接地部の端部が、横方向に張り出しているもの(262・263)が存在する。 ○内面の器表面には、成形によって生じた同心円状の凹凸が認められる。	○外面の底部は、回転箝切りのままである。 ○外面の底部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。	○いずれも赤褐色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
高台付楕	265		○高台は貼り付けで、端部を丸く仕上げている。 ○高台は斜め方向へ張り出し、高く立ち上がる。	○内外面とも全体に横なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。
	266	高台径 5.6 高台高 0.6	○体部内面には、成形によって生じた凹凸が認められる。 ○高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。	○外面底部の高台より内側には、板目痕跡が認められる。 ○外面の底部以外は、内外面とも全体に横なでを施している。	○内外面とも全体に淡黄白色。 ○ 1.5mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好である。
皿	267		○体部は緩やかに内脣して立ち上がり、口縁部との境界部分の外面には鈍い棱が認められる。 ○斜め上方へ立ち上がった口縁部は、屈曲して横方向へ張り出し、端部は丸く仕上げている。 ○口縁端部の上位には、凹縁状の浅い窪みがめぐらされている。	○内面全体と外面の口縁部は、全体に丁寧な横なでを施している。 ○外面の体部は、横方向の箝削りのままである。	○全体に赤褐色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	268		○斜め上方へ彎曲して立ち上がった口縁部は、肥厚して瘤状に丸くなっている。 ○内面の口縁端部直下部分には、凹縁状の明顯な窪みが全体にめぐらされている。	○外面の底部は、回転箝切りのままである。 ○体部から口縁部にかけては、内外面とも全体に丁寧な横なでを施している。 ○内外面とも全体に丹塗りを施している。	○全体に丹塗りを施しているために淡赤色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	269 270		○口縁部は短く斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底で、扁平になっている。	○外面の底部は、回転箝切りのままである。 ○体部から口縁部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○内外面とも全体に丹塗りを施している。	○全体に丹塗りを施しているために淡赤色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	271 272		○口縁部は斜め上方へ立ち上げている。 ○271の外面底部は扁平になっているが、272の外面底部は弓なりに彎曲しているようである。	○外面の底部は、回転箝切りのままである。 ○体部から口縁部にかけては、内外面とも全体に丁寧な横なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○ 1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はどちらも良好である。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器	皿	273 274	○内側して斜め上方へ立ち上がった体部は、わずかに屈曲して口縁端部に移行する。 ○口縁部と体部の外面境界部分には、鈍い棱が認められる。	○内外面とも全体に横なでを施している。 ○ 274は内外面とも全体に丹塗りを施している。	○ 273は全体に赤褐色、274は丹塗りを施しているために淡赤色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。
	杯	275 1 290	○底部は扁平で平底を呈するものがほとんどであるが、弓なりに彎曲するもの(275・288)やわずかに上げ底を呈するもの(290)も存在する。 ○体部から口縁部にかけては、斜め上方へ立ち上がって口縁端部を丸く仕上げているものがほとんどであるが、口縁端部がわずかに彎曲して外傾するもの(275・276・277・283・284)も認められる。 ○器表面に成形によって生じた凹凸が認められるもの(285・288・289)も存在する。	○外面の底部は、回転窓切りのままである。 ○ 288の外面底部には、指頭圧痕が顯著に認められる。 ○体部から口縁部にかけては、内外面とも全体に丁寧な横なでを施している。 ○内外面とも全体に丹塗りを施しているものがほとんどであるが、丹塗りを施さないもの(277・281)も存在する。	○丹塗りを施しているものは淡赤色。 ○丹塗りを施さないものは赤褐色。 ○ 1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
須恵質土器	こね鉢	291 1 298	○斜め上方へ肥厚しながら立ち上がった口縁の端部は、拡張して中央部がわずかに窪んだ面を有するものが多いが、口縁端部が瘤状に肥厚して全体に丸く仕上げているものの(298)も存在する。 ○この器形の土器は、片口を有するようである。 ○内外面とも器表面には、成形によって生じた凹凸が認められる。	○内外面とも全体に回転なでを施している。 ○外面の口縁には、重ね焼によって生じたと推定される黒色に変色した部分が存在するもの(295~298)も認められる。	○いずれも灰白色または灰色。 ○ 2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○兵庫県明石市魚住古窯址群出土遺物に酷似。
	碗	299 1 358 323 底部径 5.8~6.0 324 底部径 6.4~6.5 332 底部径 6.0~6.2 333 底部径 6.1	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁部上位がわずかに彎曲して、外面に鈍い棱線が認められるもの(299・300・313・317~322)も存在する。 ○底部はいずれも平底である。 ○内外面とも器表面には、成形によって生じた凹凸が認められる。	○外面の底部には、いずれも回転糸切り痕跡が存在する。 ○外面の底部以外は、全体に回転なでを施している。 ○口縁部には、重ね焼によって生じたと推定される黒色に変色した部分が存在するものが多い。	○いずれも灰白色または灰色。 ○ 1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○岡山県南東地方で生産されたと推定される。
小瓶	359 1 362		○299~358の土器に比して、口径が小さい。 ○口縁部は内側して立ち上がるるもの(359・360)と、直線的に斜め上方へ立ち上がるもの(362)が存在する。 ○底部は平底である。 ○内外面とも器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○外面の底部には、回転糸切り痕跡が存在する。 ○外面の底部以外は、全体に回転なでを施している。 ○口縁部には、重ね焼によって生じたと推定される黒色に変色した部分が存在するもの(359)も認められる。	○いずれも灰黑色または青灰色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	363 1 367	363 推定口径 9.3 推定器高 2.6 364 推定口径 9.6 推定器高 2.6	○口縁部は内側して立ち上がるるもの(363)、わずかに彎曲して斜め上方へ立ち上がるるもの(364~366)、直線的に斜め上方へ立ち上がった端部が外傾するもの(367)が存在する。 ○底部はいずれも平底で、わずかに立ち上がりが認められる。	○外面の底部には、いずれも回転糸切り痕跡が存在する。 ○外面の底部以外は、全体に回転なでを施している。 ○外面の口縁部に、重ね焼によって生じたと推定される黒色に変色した部分が存在するもの(365)も認められる。	○いずれも青黒色または灰黒色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好で、硬質になっている。 ○ 363と364は約1%残存。
小皿	368 1 376	372 器高 1.7	○口縁部が彎曲して斜め上方へ短く立ち上がるもの(368~371・375)、内側して立ち上がるるもの(373・374・376)、口縁端部の器壁が薄くなつて斜め上方へ張り出すもの(372)がある。	○ 368~371の外面底部には、いずれも回転糸切り痕跡が存在する。 ○外面の底部以外は、いずれも回転なでを施している。	○いずれも青灰色または灰黒色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好で硬質になっている。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵質土器			<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部は平底であるが、弓なりに彎曲しているもの（373・374）も認められる。</li> <li>○底部の器壁が著しく厚くなっているもの（372）も存在する。</li> <li>○底部がわずかに立ち上がっているもの（368～371）も認められる。</li> </ul>		
土師質土器	壺	377 378	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外反した口縁部は、中央部がわずかに窪んだ面が存在する。</li> <li>○口縁端部の内面には、浅い窪みが認められる。</li> <li>○内面の頸部には棱が認められ、器壁が厚くなっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の口縁部と内面の頸部は、横なでを施している。</li> <li>○内面の口縁部には、横方向の櫛状工具の痕跡が認められる。</li> <li>○外面の頸部は、縱または斜め方向の櫛状工具の痕跡が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に赤褐色。</li> <li>○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> </ul>
土鍋	379 381 395		<ul style="list-style-type: none"> <li>○斜め上方へ張り出した口縁部の形態は、短く外反して端部に面を有するもの（379～382）、大きく外彎して上端に突起が存在するものの（383）、外反した口縁端部を丸く仕上げているもの（384～395）がある。</li> <li>○外面の口縁部に、突起状の拡張が認められるもの（380・383・384）とわずかに肥厚しているものの（381・385・386）がある。</li> <li>○頸部の最大径は、いずれも頸部との境界部分に存在する。</li> <li>○379の内面の頸部と389の外面の口縁部には、粘土の接合部分が残存している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の頸部から頸部にかけて、指頭圧痕が認められるもの（379・384・385・387・392）が存在する。</li> <li>○口縁端部はいずれも横なでを施している。</li> <li>○内面の口縁部は、横なでを施しているものと、横または斜め方向の櫛状工具の痕跡が存在するものと認められる。</li> <li>○外面の口縁部は、横なでを施しているものと、縱方向の櫛状工具の痕跡が存在するものとある。</li> <li>○内面の頸部は、横なでを施しているものと、横または斜め方向の櫛状工具の痕跡が存在するものと認められる。</li> <li>○外面の頸部には、縱または斜め方向の櫛状工具の痕跡が存在するものが多い。</li> <li>○外面の底部には、横または斜め方向の櫛状工具の痕跡が存在する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○いずれも褐色または赤褐色。</li> <li>○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> <li>○外面の器表面に、煤の付着が認められるものが多い。</li> </ul>
土鍋支脚	396 398		<ul style="list-style-type: none"> <li>○表面にはなでによって生じた鈍い稜がかすかに認められる。</li> <li>○断面は円形に近い形態を呈している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体になでを施している。</li> <li>○頸部との接合部分には、指頭圧痕が顕著に認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○いずれも褐色または赤褐色。</li> <li>○2.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> </ul>
瓶	399		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は肥厚しながらわずかに外傾して立ち上がっている。</li> <li>○口縁端部には面が認められ、全体に丸く仕上げている。</li> <li>○口縁部上端から約0.5cm下位には内外面とも粘土の接合部分が存在する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部と外面の口縁部は、横なでを施している。</li> <li>○内面の口縁部上位には、わずかに横方向の櫛状工具の痕跡が認められる。</li> <li>○内面の体部は、全体に横なでを施している。</li> <li>○外面の体部には、縱方向の櫛状工具の痕跡が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に褐色。</li> <li>○1.5mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> </ul>
瓦質土器	羽釜	400 402	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内彎して立ち上がり、上端には面が認められる。</li> <li>○側はいずれも貼り付けている。</li> <li>○側の上端は、中央部がわずかに窪んだ面が認められる。</li> <li>○体部の形態は、球形に近い形になるようである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の側から上位は、いずれも全体に横なでを施している。</li> <li>○外面の側より下位は、粗い不定方向のなでを施しているものと、指頭圧痕が顕著に認められて調整を施さないもの（400・402）がある。</li> <li>○内面はいずれも全体に横なでを施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表面はいずれも全体に淡黒色。</li> <li>○器壁断面は灰色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> </ul>
土師質土器	高台付碗	403 407 推定口径13.0 推定器高4.8 高台径5.8 高台高0.5 404 推定口径14.0 推定器高5.3 高台径5.8 高台高0.7	<ul style="list-style-type: none"> <li>○緩やかに内彎して斜め上方へ立ち上がった口縁部は、器高の中位よりやや上方でわずかに屈曲して口縁端部へ至る。</li> <li>○口縁端部はわずかに肥厚して短く外反し、端部はいずれも丸く仕上げている。</li> <li>○器壁は口縁端部へ移行するにしたがって薄くなっている。</li> <li>○高台はいずれも貼り付けで、断面が三角形に近い形態を呈している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の口縁部は、いずれも横なでを施している。</li> <li>○外面の体部は、指頭圧痕の上面に不定方向の指頭による粗いなでを加えている。</li> <li>○高台の貼り付け部分は、いずれも横なでを施している。</li> <li>○外面底部の高台より内側は、窓削り痕跡や板目痕跡が残存するものと、横なでを加えているものが認められる。</li> <li>○内面はいずれも丁寧な不定方向のなで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に淡黄白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> <li>○403と404は約1%残存。</li> <li>○407の内面には、有機物が付着している。</li> </ul>

器種		番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考				
土師質土器		高台付碗								
		408 ↓ 410								
				<p>○緩やかに内彎して斜め上方へ立ち上った口縁部は、器高の中位よりや上方でわずかに屈曲して口縁端部へ至る。</p> <p>○口縁端部はわずかに肥厚して外反し、端部はいずれも丸く仕上げている。</p> <p>○器壁は口縁端部へ移行するにしたがって薄くなっている。</p> <p>○高台はいずれも貼り付けで、断面が三角形に近い形態を呈している。</p>	<p>を施し、全体に平滑に仕上げている。</p> <p>○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される、円形を呈する高台の痕跡を有するものが存在する。</p>					
						<p>○外面の口縁部は、いずれも横なでを施している。</p> <p>○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。</p> <p>○高台の貼り付け部分は、いずれも横なでを施している。</p> <p>○内面はいずれも丁寧な不定方向のなでを施し、全体に平滑に仕上げている。</p>				
						<p>○いずれも全体に淡黄白色。</p> <p>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</p> <p>○焼成はいずれも良好である。</p>				
		411 ↓ 497								
				<p>○緩やかに内彎して斜め上方へ立ち上った口縁部は、器高の中位よりや上方でわずかに屈曲して口縁端部へ至る。</p> <p>○口縁端部はわずかに肥厚して、端部はいずれも丸く仕上げている。</p> <p>○器壁は口縁端部へ移行するにしたがって薄くなっている。</p>	<p>○外面の口縁部は、いずれも横なでを施している。</p> <p>○外面の体部は、指頭圧痕の上面に不定方向の指頭による粗いなでを加えている。</p> <p>○内面はいずれも丁寧な不定方向のなでを施し、全体に平滑に仕上げている。</p>	<p>○いずれも全体に淡黄白色。</p> <p>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</p> <p>○焼成はいずれも良好である。</p>				
		498 ↓ 521								
				<p>○緩やかに内彎して斜め上方へ立ち上った口縁部は、器高の中位よりや上方でわずかに屈曲して口縁端部へ至る。</p> <p>○口縁端部はわずかに肥厚して、端部はいずれも丸く仕上げている。</p> <p>○器壁は口縁端部へ移行するにしたがって薄くなっている。</p>	<p>○外面の口縁部は、いずれも横なでを施している。</p> <p>○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。</p> <p>○外面の口縁部にも指頭圧痕が残存しているものがある。</p> <p>○内面はいずれも丁寧な不定方向のなでを施し、全体に平滑に仕上げている。</p>	<p>○いずれも全体に淡黄白色。</p> <p>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</p> <p>○焼成はいずれも良好である。</p>				
		522 ↓ 621 高台径 6.5~ 6.7 高台高 0.8 586 高台径 8.2 高台高 0.9 592 高台径 6.4 高台高 1.0	527 高台径 6.5~ 6.7 高台高 0.8 586 高台径 8.2 高台高 0.9 592 高台径 6.4 高台高 1.0	<p>○底部から体部にかけて、緩やかに内彎して斜め上方へ立ち上がる。</p> <p>○高台はいずれも貼り付けで、断面が三角形に近い形態を呈している。</p>	<p>○外面の体部は、指頭圧痕の上面に不定方向の指頭による粗いなでを加えている。</p> <p>○高台の貼り付け部分は、いずれも横なでを施している。</p> <p>○外面底部の高台より内側は、窓削り痕跡や板目痕跡が残存するものと、横なでを加えているもの認められる。</p> <p>○内面はいずれも丁寧な不定方向のなでを施し、全体に平滑に仕上げている。</p> <p>○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される、円形を呈する高台の痕跡を有するものが存在する。</p>	<p>○いずれも全体に淡黄白色。</p> <p>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</p> <p>○焼成はいずれも良好である。</p>				
		622 ↓ 628 高台径 6.0 高台高 1.1 626 高台径 6.0 高台高 0.8	624 高台径 6.0 高台高 1.1 626 高台径 6.0 高台高 0.8	<p>○底部から体部にかけて、緩やかに内彎して斜め上方へ立ち上がる。</p> <p>○高台はいずれも貼り付けで、断面が三角形に近い形態を呈している。</p>	<p>○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。</p> <p>○高台の貼り付け部分は、いずれも横なでを施している。</p> <p>○外面底部の高台より内側は、窓削り痕跡や板目痕跡が顕著に残存しているもの(625)と、横なでを加えているもの認められる。</p> <p>○内面はいずれも丁寧な不定方向のなでを施し、全体に平滑に仕上げている。</p> <p>○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される、円形を呈する高台の痕跡を有するものが存在する。</p>	<p>○いずれも全体に淡黄白色。</p> <p>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</p> <p>○焼成はいずれも良好である。</p>				
		皿	629 ↓ 659	<p>○斜め上方へ立ち上った口縁端部は、いずれも丸く仕上げている。</p> <p>○口縁部は内彎して斜め上方へ立ち上るものが多いが、口縁端部が</p>	<p>○外面の口縁部は、いずれも全体に回転なでを施している。</p> <p>○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。</p>	<p>○いずれも内外面とも全体に赤褐色。</p> <p>○1.0mm以下の砂粒を含むが、量的に少ないものと多いもの</p>				

第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器皿		641 推定口径14.4 器高 2.6~3.7 推定底部径 9.6 655 底部径 8.4~8.8	わずかに外傾するもの(629·631·637)も存在している。 ○口縁部の器壁は、底部の器壁よりも薄い。 ○内面の底部には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。 ○底部は平底であるが、弓なりに彎曲しているもの(631·659)と、わずかに立ち上がりが認められるもの(638·645)が存在する。	○内面はいずれも全体に回転なでを施している。 ○267~290の皿や杯のように、内外面に丹塗りを施しているものは認められない。	が認められる。 ○胎土中には、細かい赤色粒や白色粒に混在して、金雲母粒が認められるものも存在する。 ○焼成はいずれも良好である。 ○641は約1%残存。
	660 1 674	666 推定口径11.2 器高 1.3 推定底部径 9.0 667 推定口径10.0 器高 1.5~1.8 推定底部径 5.9	○629~659の土器と676~1065の土器の中間の規模を有するものである。 ○斜め上方へ立ち上がった口縁端部は、いずれも丸く仕上げている。 ○口縁部の形態は、内側して斜め上方へ立ち上がるものの(660)、斜め上方へ直線的に張り出しているものの、口縁端部がわずかに外傾するもの(668·670·673·674)が認められる。 ○底部から口縁部にかけて全体に器壁が極めて薄いもの(666·667)が存在する。 ○内面の底部には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。 ○底部は平底であるが、弓なりに彎曲しているもの(660·663·670)と、わずかに上部底になっているもの(671)が存在する。	○外面の口縁部は、いずれも全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○内面はいずれも全体に回転なでを施している。 ○器表面に丹塗りを施しているものは存在しない。	○内外面とも全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○666は約1%残存。 ○667は約1%残存。
椀	675	推定口径16.0 器高 5.8 推定底部径 6.6	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底で、口縁部の器壁に比べて厚い。 ○内外面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。	○外面の底部には、回転糸切り痕跡が顕著に認められる。 ○外面の底部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。	○胎土・焼成・色調は、403~628の高台付椀と同じ。 ○形態は299~358の椀と同じ。 ○約1%残存。
小皿	676	底部径 4.8	○口縁部は欠損して不明である。 ○底部の接地部分は、横方向へ張り出してわずかに立ち上がりが存在する。 ○底部の器壁は、中央部分が肥厚してわずかに上部底になっている。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。 ○外面の底部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に淡黃白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	677	口径 6.9~7.0 器高1.0~1.2 底部径 5.0~5.1	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○底部は平底で、口縁部よりも器壁が厚い。	○外面の底部には、回転糸切り痕跡と板目痕跡が存在する。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は極めて良好である。 ○完形品。
	678	口径 7.9~8.3 器高 1.3~2.1 底部径 6.0~6.5	○底部から口縁部にかけて内側して立ち上がり、口縁端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、弓なりに彎曲している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○胎土中には赤色粒が認められる。 ○焼成は全体に良好である。 ○接合完形品。
	679	口径 9.0 器高1.2~1.6 底部径 6.7~7.0	○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○全体に器壁が厚く、底部は平底である。	○外面の底部には、回転糸切り痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は極めて良好である。 ○完形品。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土 師 質 土 器	680	口径8.6~8.7 器高1.5~1.7 底部径 6.6~ 6.7	○口縁部は斜め上方に立ち上がり、端部はわずかに外傾して丸く仕上げている。 ○底部は平底で、底部と口縁部の境界部分の器壁が厚くなっている。	○外面の底部は磨滅が著しいが、かすかに板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
	681 ↓ 685		○口縁部は斜め上方へ立ち上げり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁端部が内側するもの (681) と、わずかに外傾するもの (682) が存在する。 ○底部はいざれも平底であるが、弓なりに彎曲するもの (681~683) も認められる。 ○底部がわずかに立ち上がっているものの (681・682) も存在する。	○外面の底部には、回転箇切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、いざれも回転などを施している。	○いざれも赤褐色または褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいざれも良好である。
	686	口径 8.5 器高 1.5~ 1.9 底部径 6.3	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○全体に器壁が厚く、底部は平底である。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転箇切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に黄褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1/4残存。
	687	器高 1.4 底部径 6.0	○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底で、器壁が比較的厚くなっている。	○外面の底部は磨滅が著しいが、回転箇切り痕跡と板目痕跡が存在する。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は極めて良好である。 ○約1/4残存。
	688	口径 8.8~ 9.0 器高 1.4~ 1.6 底部径 6.9~ 7.3	○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、弓なりに彎曲している。 ○底部の器壁は、口縁部の器壁に比べて極めて薄くなっている。	○外面の底部は磨滅が著しいが、かすかに回転箇切り痕跡が残存している。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○内外面の器表面には、マンガンが付着している。 ○完形品。
	689	口径8.6~8.7 器高1.2~1.6 底部径 6.4~ 6.5	○口縁部は斜め上方へ内側して立ち上がり、端部はわずかに外傾して丸く仕上げている。 ○外面の底部は平底であるが、器表面には凹凸が認められる。	○外面の底部には、回転箇切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は極めて良好である。 ○完形品。
	690	口径 8.9 器高 1.3~ 1.5 底部径 6.7	○口縁部は器壁が薄くなつて斜め上方へ張り出し、端部はわずかに外傾して丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、弓なりに彎曲している。 ○底部の器表面には、内外面とも成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○外面の底部には、回転箇切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に淡黃白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1/4残存。
	691 ↓ 695		○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁部は内側するものが多いが、端部がわずかに外傾しているもの (693) も存在する。 ○底部はいざれも平底で、弓なりに彎曲しているもの (691・693) と、わずかに上げ底になっているものの (694) がある。	○外面の底部には、回転箇切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、いざれも回転などを施している。	○いざれも赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいざれも良好である。 ○695の外面の底部は、回転箇切り後になでを加えている。
	696	口径 8.7 器高 1.5~ 1.8 底部径 5.9	○口縁部は器壁が著しく薄くなつて斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、わずかに弓なりに彎曲している。 ○内面底部の器表面には、成形によ	○外面の底部には、回転箇切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1/4残存。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	小皿		って生じたと推定される凹凸が頗著に認められる。		
		697 口径 8.3~8.5 器高 1.3~1.8 底部径 5.4~5.6	○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、弓なりに弯曲している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の底部は著しく磨滅しているが、かすかに回転窓切り痕跡が残存している。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
		698 口径 8.6~8.8 器高 0.8~1.5 底部径 6.0	○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、口縁部よりも器壁が薄くなっている。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が頗著に認められる。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
		699 推定口径 8.6 器高 1.9 底部径 6.9	○口縁部は斜め上方へ張り出し、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、著しく変形して弓なりに弯曲している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約%残存。
		700 口径 8.8~8.9 器高 1.2~1.8 底部径 6.9~7.0	○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、口縁部にかけて器壁が薄くなり、部分的に上げ底を呈している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
		701 706	○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁端部が短く外傾しているもの(704・705)も存在する。 ○底部は平底であるが、弓なりに弯曲しているもの(702・705・706)も認められる。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が頗著に認められるものが多い。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、いずれも回転などを施している。	○全体に赤褐色を呈するのがほとんどであるが、706は淡黃白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
		707 口径 8.8 器高 1.3~1.9 底部径 6.9	○口縁部は斜め上方へ短く立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部の器壁は比較的厚くなり、弓なりに著しく弯曲している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡が頗著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約%残存。
		708 口径 8.8 器高 1.0~1.9 底部径 5.5	○口縁部は器壁が薄くなって斜め上方へ張り出し、端部はわずかに外傾して丸く仕上げている。 ○底部の器壁は、口縁部との境界部分が厚くて中央部が薄くなっている。 ○底部は平底であるが、弓なりに弯曲している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の底部は磨滅が著しいが、かすかに回転窓切り痕跡と板目痕跡が残存している。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約%残存。
		709	○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はわずかに外傾して丸く仕上げて	○外面の底部は磨滅が著しいが、かすかに回転窓切り痕跡と板目痕跡が残存している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	小皿	口径 9.1~ 9.2 器高 1.4~ 1.8 底部径 6.7~ 7.0	いる。 ○底部は平底であるが、弓なりに彎曲している。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○復原完形品。
	710	口径 8.9~ 9.1 器高 1.3~ 1.7 底部径 5.4~ 5.8	○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部はわずかに外傾して丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、口縁部よりも器壁が厚くなっている。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
	711	口径 8.8 器高 1.5 底部径 6.2	○口縁部は器壁が薄くなつて斜め上方へ張り出し、端部はわずかに外傾して丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、弓なりにわずかに彎曲している。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。	○外面の底部には、板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約%残存。
	712 713 715		○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は短く外傾して丸く仕上げている。 ○底部はいずれも平底であるが、弓なりに彎曲しているもの(712・713)も存在する。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、いずれも回転などを施している。	○713は全体に淡黄白色、それ以外はいずれも赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	716	口径 7.8 器高 1.5 底部径 5.4~ 5.5	○口縁部は器壁が著しく薄くなつて斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底で、器壁が厚くなっている。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に灰黃褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○口縁端部の一部を欠損しているが、ほぼ完形品。
	717	口径 9.0~ 9.1 器高 1.3~ 1.6 底部径 7.1~ 7.4	○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底で、中央部分の器壁がわずかに肥厚している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○口縁端部の一部を欠損しているが、ほぼ完形品。
	718	口径 8.1 器高 1.1~ 1.5 底部径 5.6~ 6.0	○口縁部は斜め上方へ直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底で、器壁が薄くなっている。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約%残存。
	719	口径 8.4~ 8.5 器高 1.1~ 1.5	○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は短く外傾して丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、中央部分の器壁が盛り上がりで部分的に上げ	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土 師 質 土 器	小皿	底部径 6.4~ 6.6	底を呈している。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顯著に認められる。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。		
	720	口径 8.8~ 9.0 器高 1.6~ 2.0 底部径 6.5~ 6.7	○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は弓なりに著しく彎曲している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の底部は著しく磨滅しているが、かすかに回転窪切り痕跡が残存している。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
	721   730		○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部はいずれも丸く仕上げている。 ○口縁端部が短く外傾しているもの (722~ 724・727・730) も認められる。 ○底部の器壁が弓なりに彎曲しているもの (723・724・728~730) が存在する。	○外面の底部には、回転窪切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、いずれも回転なでを施している。	○723は淡黄白色、725は灰黃褐色、それ以外はいずれも赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	731	口径 8.8 器高 1.5~ 1.8 底部径 7.1	○口縁部は斜め上方へ張り出し、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、中央部の器壁がわずかに肥厚して弓なりに彎曲している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窪切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○底部から口縁部にかけて、わずかに欠損している。
	732   736		○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁端部が内傾するもの (733・735) 、わずかに外傾しているもの (736) が存在する。 ○底部の器壁が弓なりに彎曲しているものが多い。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顯著に認められる。	○外面の底部には、回転窪切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、いずれも回転なでを施している。	○いずれも赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	737	口径 9.2 器高 1.3~ 1.4 底部径 7.0~ 7.1	○底部から口縁部にかけて内側して立ち上がり、端部は器壁が肥厚して丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、弓なりに彎曲している。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顯著に認められる。	○外面の底部には、回転窪切り痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約5%残存。
	738	口径 9.2 器高 1.5~ 1.6 底部径 6.9	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は器壁が薄くなって丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、わずかに上げ底を呈しているもの (739) がある。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顯著に認められる。 ○どちらも全体に器壁が極めて薄くなっている。	○外面の底部は著しく磨滅しているが、かすかに回転窪切り痕跡と板目痕跡が残存している。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約3%残存。
	739 740		○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は器壁が肥厚して丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、わずかに上げ底を呈しているもの (739) がある。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顯著に認められる。 ○どちらも全体に器壁が極めて薄くなっている。	○外面の底部には、回転窪切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、どちらも回転なでを施している。	○どちらも赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はどちらも良好である。 ○740は約1%残存。

器種		番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	小皿	741 1065		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部はいずれも斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○口縁端部の形態は、内側するもの、直線的に張り出しているもの、わずかに外傾しているものが存在する。</li> <li>○底部の形態は、基本的に平底であるが、弓なりに彎曲しているものも認められる。</li> <li>○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められるものが多い。</li> <li>○器壁の厚さは、各個体によって異なっている。</li> <li>○全体に著しく歪んだ形態を呈するものも認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。</li> <li>○外面の口縁部と内面全体は、いずれも回転などを施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○大多数のものが赤褐色を呈するが、灰黄褐色や淡黄褐色のものもわずかに認められる。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> </ul>
瓦器	高台付碗	1081	推定口径14.9 推定器高 6.1 推定高台径 5.6 高台高 0.5	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は器壁が薄くなつてわずかに外傾している。</li> <li>○外面の口縁端部より 1.0cm下位の部分には、鈍い稜が認められる。</li> <li>○高台は貼り付けで、断面は三角形に近い形態を呈している。</li> <li>○全体の器壁は、比較的厚くなっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、横または斜め方向の暗文を密に施している。</li> <li>○外面の口縁端部から鈍い稜の間の部分は、横なでを施している。</li> <li>○外面の体部は、横なでを行った後に横または斜め方向の暗文を施している。</li> <li>○器表面に施した暗文は、いずれも比較的大い。</li> <li>○高台の貼り付け部分は、横なでを加えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○約1%残存。</li> <li>○和泉型。</li> </ul>
		1082		○口縁部は斜め上方へ内側して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、横方向の暗文を密に施している。</li> <li>○外面の口縁部は、横なでを行った後に横方向の暗文を施している。</li> <li>○外面の体部は、指頭圧痕の上面に粗い不定方向のなでを行った後に横方向の暗文を密に施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○和泉型。</li> </ul>
		1083		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は斜め上方へ直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○高台は貼り付けで、貼り付け部分から剥離している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、横方向の暗文を密に施している。</li> <li>○外面の口縁部は、横なでを行った後に横方向の暗文を施している。</li> <li>○外面の体部は、指頭圧痕が顕著に認められる器表面に、横方向の暗文を密に施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○和泉型。</li> </ul>
		1084		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部の器壁がわずかに肥厚して丸く仕上げている。</li> <li>○外面の口縁端部より 1.1cm下位の部分には、鈍い稜が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、横方向の暗文を密に施している。</li> <li>○外面の口縁部は、横なでを行った後に比較的細い暗文を密に施している。</li> <li>○外面の体部は、指頭圧痕が顕著に認められる器表面に、横方向の暗文を密に施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○和泉型。</li> </ul>
		1085		<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○底部から口縁部にかけての器壁は、ほぼ一定の厚さになっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、口縁部は横向き、底部から体部にかけては横方向または円弧を呈する暗文を施している。</li> <li>○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。</li> <li>○外面の体部は、指頭圧痕が顕著に認められる器表面に、横方向の暗文を密に施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○和泉型。</li> </ul>
				○口縁部は斜め上方へ内側して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、横または斜め	○器表面は黒灰色を呈するものが多いが、灰白色を呈するも

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓦器	高台付柄 1106 1107	1086 1108 1143	○口縁端部の内面上位に凹輪状の溝みが認められるもの (1093・1094) や、口縁端部がわずかに外傾するもの (1105~1107) が存在する。 ○外面の口縁端部より約 1.0cm から 約 2.0cm 下位の部分には、鈍い棱が認められるものが多い。	方向の暗文を密に施しているものが多い。 ○外面の口縁部は、横なでを行った後に 橫方向の暗文を施しているものがほとんどであるが、横なでを行っているだけで暗文が認められないもの (1090・1102) もわずかに存在する。 ○外面の体部は、指頭圧痕が顕著に認められる器表面に、横方向の暗文を施している。	のもわずかに認められる。 ○ 1.0mm 以下の砂粒を含むが、量はいずれも少ない。 ○焼成はいずれも良好である。 ○いずれも和泉型。
	1144	高台径 5.2~5.3 高台高 0.3	○底部から体部にかけて内脣して斜め上方へ立ち上がる。 ○高台は貼り付けで、斜め方向に張り出している。	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、横方向または 弓を描く暗文を不規則に施している。 ○外面の体部は、指頭圧痕が顕著に認められる器表面に、横方向の暗文を施している。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。	○器表面は黒灰色を呈するものが多いが、灰白色を呈するものもわずかに認められる。 ○器壁断面はいずれも灰白色。 ○ 1.0mm 以下の砂粒を含むが、量はいずれも少ない。 ○焼成はいずれも良好である。 ○いずれも和泉型。
	1145	高台高 0.4	○底部から体部にかけて内脣して斜め上方へ立ち上がる。 ○高台は貼り付けで、断面は台形を呈している。	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、横または斜め 方向の不規則な暗文を施している。 ○外面の体部は、指頭圧痕の上面に粗い 不定方向のなでを行っているだけである。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○ 1.0mm 以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○和泉型。
	1146	高台高 0.4	○底部から体部にかけて内脣して斜め上方へ立ち上がる。 ○高台は貼り付けで、ほぼ垂直に立ち上がる。	○内面は全体に丁寧な横なでを施して器表面を平滑にした後に、横または斜め 方向の暗文をめぐらせている。 ○外面の体部は、指頭圧痕が顕著に認められる器表面に、横または斜め方向の 暗文を密に施している。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○ 1.0mm 以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○和泉型。
	1147 1150		○底部から体部にかけて内脣して立ち上がる。 ○高台はいずれも貼り付けで、断面は三角形で極めて不安定な様相を呈している。	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、平行して並ぶ細い直線の暗文を施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が認められ、粗い不定方向のなでを行っているものと、二次的な調整を加えていないものがある。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを施している。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○ 1.0mm 以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成はいずれも良好である。 ○和泉型。
	1151	高台高 0.4	○底部から体部にかけて内脣して斜め上方へ立ち上がる。 ○高台は貼り付けで、断面は台形を呈している。	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、底部中央で途切れたり平行して並ぶ細い直線の暗文を施し、さらに横方向に暗文をめぐらせていている。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められる。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○ 1.0mm 以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○和泉型。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
瓦器	高台付椀			られ、二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを施している。		
		1152	○底部から体部にかけて内彎して斜め上方へ立ち上がる。 ○高台は貼り付けで斜め外方へ短く張り出し、断面は台形を呈している。	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、ほぼ平行して並ぶ太い直線の暗文を密に施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顯著に認められ、二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを施している。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○和泉型。	
	小皿	1153	推定口径10.0 器高 2.1 推定底部径 7.7	○口縁部は器壁がわずかに肥厚して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、わずかに弓なりに彎曲している。	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、不定方向で交叉する暗文を密に施している。 ○外面の口縁部は、横なでを行った後に暗文を施している。 ○外面の底部は、指頭圧痕が顯著に認められる器表面に、不定方向の暗文を密に施している。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○和泉型。
		1154		○斜め上方へ立ち上がった口縁端部は、いずれも丸く仕上げている。	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を施しているが、個体によって暗文が密なもの(1154)と疎なもの(1160)の違いがある。	○器表面は全体に黒灰色を呈するものが多いが、黒灰色部分と灰白色部分が認められるもの(1157)も存在する。
		1160		○底部の器壁は弓なりに彎曲し、丸底状を呈するもの(1155・1156・1158)も認められる。	○内面口縁部の暗文は、横方向に施したものが多い。 ○内面底部の暗文は、一定方向に直線を描いて施しているもの(1154・1155・1157)と、同じ円を描いて施しているもの(1158・1159)がある。 ○外面の口縁部は、横なでを行った後に横方向の暗文を施しているもの(1156・1159)と、横なでを行っているだけで暗文を施していないもの(1155・1157・1158・1160)がある。 ○外面の底部には、いずれも指頭圧痕が顯著に認められる。 ○外面の底部にも、指頭圧痕の上面に暗文を施しているもの(1159)が存在する。	○器壁断面はいずれも灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成はいずれも良好である。 ○いずれも和泉型。 ○いずれも小破片。
	1161 ↓ 1164		○斜め上方へ立ち上がった口縁端部は、いずれも丸く仕上げている。 ○口縁部はわずかに肥厚して、端部が短く外傾するもの(1164)も認められる。	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にしているが、暗文は認められない。	○器表面はいずれも黒灰色、器壁断面は灰白色。	
			○底部はいずれも平底であるが、わずかに弓なりに彎曲している。	○外面の口縁部は、横なでを行っているだけで暗文は施していない。 ○外面の底部は指頭圧痕が認められ、二次的な調整はいずれも加えていない。	○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成はいずれも良好である。 ○いずれも小破片。	
	高台付椀	1165 ↓ 1167		○口縁部は器壁が厚く、内彎して斜め上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は丸く仕上げ、内面上端に比較的浅い凹線状の窪みがめぐらされているもの(1165)も認められる。 ○外面の口縁端部より約2.0cm下位の部分には、鈍い棱が認められる。 ○底部はいずれも欠損して不明である。	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、横方向の暗文を施している。 ○外面の口縁部は、横なでを行った後に横方向の暗文を施している。 ○外面の体部は、指頭圧痕の上面に不定方向の粗いなでを行った後に横方向の暗文を施している。	○器表面はいずれも黒灰色。器壁断面は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成はいずれも良好である。 ○口縁部の形態や暗文が比較的細いことから、楠葉型と推定される。
		1168		○口縁部は斜め上方へ内彎して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約1.5cm下位の部分には、鈍い棱が認められる。 ○内面の口縁部上端には、箆状工具	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、横方向の暗文を密に施している。 ○外面の口縁部は、横なでを行った後に交叉する横または斜め方向の暗文を施	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は極めて良好である。

第6章 百間川当麻遺跡

単位：cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓦器	高台付碗		で施したと推定される凹線状の窪みが認められる。	している。 ○外面の体部は、指頭圧痕の上面に指頭による不定方向のなでを施した後に横または斜め方向の暗文を施している。 ○器表面に施された暗文は、いずれも極めて細いものである。	○精葉型。
		1169	○口縁部は斜め上方へ内側して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約1.5cm下位の部分には、鈍い棱が認められる。 ○内面の口縁部上端には、鹿革工具で施したと推定される凹線状の窪みが認められる。	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、横方向の暗文を密に施している。 ○外面の口縁部は、横なでを行っているだけで暗文は認められない。 ○外面の体部は、指頭による不定方向の粗いなでを施しているだけで暗文は認められない。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○口縁部の形態や暗文が比較的細いことから、精葉型と推定される。
縦輪開口器	碗	1170	底部径 6.6 ○口縁部は欠損して不明である。 ○底部は蛇の目高台を呈する。	○底部は窓による削り出し高台を呈している。 ○全体に淡緑灰色の釉薬が施されている。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：須恵質で堅鉄。 ○色調：器表面は全体に淡緑灰色、器壁断面は灰青色。
外来磁器	碗	1171	○口縁端部は外方に折り曲げ、玉縁状を呈する。	○体部外面は窓で調整している。 ○黄白色の釉薬を施しているもの(1171)と、淡灰褐色の釉薬を施しているもの(1172)が存在する。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：堅鉄。 ○色調：器表面は黄白色または淡灰褐色を呈するが、器壁断面は灰白色。
		1172	○体部は斜め上方へ直線的に伸びる。		
	1173 1176	1173	○器壁の厚い底部から、器底の比較的薄い体部に至る。 ○口縁部はいずれも欠損しているが、内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○短く削り出された高台を有する。	○底部は窓による削り出し高台を呈している。 ○体部外面は窓で調整している。 ○内面の見込み部分に、1条の沈線をめぐらせているものが多いが、沈線が認められないもの(1173)も存在する。 ○淡灰色または淡灰白色の釉薬を施している。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：堅鉄。 ○色調：器表面は淡灰色または淡灰白色を呈するが、器壁断面は白色。 ○外面の底部は、磨滅しているものが多い。
		1176			
	1177		○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部に平坦面を形成している。	○内面の見込み部分に、1条の沈線をめぐらせている。 ○内外面とも全体に淡灰色の釉薬を施している。	○色調：器表面は全体に淡灰色を呈するが、器壁断面は白色。
皿	1178		○口縁部は緩やかに外反して、端部を丸く仕上げている。 ○短く削り出された高台を有する。	○底部は窓削りのままである。 ○内外面とも全体に淡灰緑色の釉薬を施している。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：堅鉄。 ○色調：器表面は淡灰緑色、器壁断面は白色。 ○図上復原。
	1179		○口縁部は短く外反させ、端部は丸く仕上げる。 ○外面の口縁下位に、棱が認められる。	○内面の見込み部分に、1条の沈線をめぐらせている。 ○内外面とも全体に淡灰緑色の釉薬が施されている。	○色調：器表面は全体に淡灰緑色、器壁断面は淡灰色。
碗	1180		○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○体部の器壁は比較的厚いが、口縁端部へ移行するにしたがって器壁が薄くなっている。	○内面には搔き目が認められる。 ○内外面とも全体に淡灰緑色の釉薬が施されている。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：堅鉄。 ○色調：器表面は全体に淡灰緑色、器壁断面は白色。
	1181		○口縁部は斜め上方へ張り出し、端部は丸く仕上げている。 ○体部から口縁部にかけて器壁が薄い。	○内面のほぼ中位に、窓描きによる1条の沈線がめぐらされている。 ○内外面とも全体に淡緑灰色の釉薬が施されている。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：堅鉄。 ○色調：器表面は全体に淡緑灰色、器壁断面は灰白色。
	1182		○口縁部は斜め上方へ内側して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁部の器壁は、比較的薄くつくなっている。	○外面の口縁部から体部にかけて、縱方向の搔き目が認められる。 ○内面の見込み部分に、1条の沈線をめぐらせている。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：堅鉄。 ○色調：器表面は全体に緑灰色または淡緑灰色、器壁断面は
	1184				

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
外 来 磁 器			○高台の断面は、逆台形を呈している。	○外面の体部は、範によって調整している。 ○高台は範による削り出しである。 ○内外面とも全体に緑灰色または淡緑灰色の釉薬を施している。	淡灰色。 ○1183と1184は同一個体である。
近 世 陶 器	皿	1185 口径 13.0 器高 3.6 高台径 4.4 高台高 0.5	○底部から口縁部にかけて緩やかに内脣して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁端部へ移行するにしたがって器壁が薄くなっている。 ○断面が逆台形を呈して器壁の厚い高台を有する。	○高台は削り出しによって形成している。 ○外面の底部は、範削り調整を施している。 ○内面全体と外面の体部から口縁部にかけては、全体に淡灰緑色の釉薬を施している。	○胎土：微砂質土。 ○焼成：良好。 ○色調：内面全体と外面の体部から口縁部にかけては淡灰緑色、器壁断面は黄灰色。 ○佐賀県唐津市周辺で生産されたと推定される。
外 来 磁 器	碗	1186	○口縁部は緩やかに内脣して斜め上方へ張り出し、端部は肥厚せずに丸く仕上げている。	○外面の体部から口縁部にかけて、横向に施した数条の搔き目痕跡が顕著に認められる。 ○内外面とも全体に淡緑灰色の釉薬を施している。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：堅緻。 ○色調：器表面は全体に淡緑灰色、器壁断面は白色。
		1187	○口縁部は緩やかに内脣して斜め上方へ張り出し、端部は短く外傾して丸く仕上げている。 ○底部から口縁部へ移行するにしたがって器壁が薄くなっている。	○内外面とも全体に淡白色の釉薬を施している。	○胎土：茶色の細砂粒を含む。 ○焼成：良好。 ○色調：器表面は全体に淡白色、器壁断面は淡灰白色。
		1188	○底部から口縁部にかけて内脣して立ち上がり、端部は外方へ屈曲して丸く仕上げている。 ○底部から口縁部へ移行するにしたがって器壁が薄くなっている。	○内外面とも全体に淡灰色の釉薬を施している。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：堅緻。 ○色調：器表面は全体に淡灰色、器壁断面は淡灰色。
中 世 陶 器	こね鉢	1189 推定口径29.0 器高 8.9 推定底部径 12.2	○口縁部はわずかに内脣して斜め上方へ大きく立ち上がり、端部には平坦な面が認められる。 ○底部は平底である。 ○片口部分は残存しない。	○内面全体と外面の体部から口縁部にかけて、比較的粗い横なでを施している。 ○外面の底部には、乾燥時に付着した複雑な痕跡が顕著に存在する。 ○外面の体部には、範状工具の先端で描いた「X」印が認められる。	○胎土：1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面とも全体に淡灰青色。 ○備前焼。 ○約1/2残存。
	擂鉢	1190	○斜め上方へ立ち上がった口縁端部は、上下に拡張して面を有する。 ○口縁端部は丸く仕上げている。	○内面は全体に丁寧な横なでを行った後に、9本を単位にした条線を放射状に施している。 ○外面の口縁部は、比較的丁寧な横なでを施している。 ○外面の体部は、粗い横なでを施している。	○胎土：1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面とも全体に茶褐色。 ○備前焼。
弥 生 式 土 器	壺形土器	1192	○直線的に立ち上がった口縁端部は、器壁がわずかに薄くなって丸く仕上げている。	○内外とも全体に横なでを施している。 ○内面の上端には、交叉する綫状の文様をめぐらせている。 ○外面の上端には、範状工具の先端で描いた4条の沈線が認められ、さらに下位には、3条を単位に描いた幾何学文様が存在する。	○全体に茶褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○口縁部の小破片。

## 8 ) B 地点の遺構に伴わない遺物

須 要 器	杯蓋	1195	○天井部は弓なりに彎曲している。 ○口縁部は「ハ」字状に内脣して張り出し、端部が拡張して中央部がわずかに窪んだ面を有する。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○外面の口縁部全体に、自然釉が付着している。
		1196	○天井部は平坦である。 ○口縁部は「ハ」字状に内脣して張り出し、端部は丸く仕上げている。	○外面の天井部は、回転窪削りのままである。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なで	○全体に青灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位:cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器			○口縁端部は上下に拡張して、中央部がわずかに畳んだ面を有する。 ○外面の口縁部には、成形によって生じた凹凸が顕著に認められる。	を施している。 ○ロクロの回転方向は、時計通りである。	
杯身	1197		○口縁部は欠損して不明である。 ○高台は貼り付けで斜め方向へ張り出し、断面は四角形を呈している。 ○高台の接地部分は、内側に存在する。	○内面は全体に回転なでを施している。 ○外面底部の高台より内側は、回転窓割りのままである。 ○高台の貼り付け部分は、丁寧な横なでを施している。	○内面は灰色、外面は黒灰色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。
須恵質土器	こね鉢	1198 1199	○斜め上方へ肥厚しながら立ち上がった口縁の端部は、拡張して外面に面を有する。 ○この器形の土器には片口が存在し、平底であると推定される。 ○内外面とも器表面には、成形によって生じた凹凸が認められる。	○内外面とも全体に回転なでを施している。 ○外面の口縁には、重ね焼によって生じたと推定される黒色に変色した部分が存在する。	○重ね焼によって生じたと推定される黒色部分を除いて、内外面とも灰色を呈している。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	椀	1200 1201	○底部から口縁部にかけては、内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○底部の器壁は、口縁部に比して厚い。 ○底部は平底である。 ○内外面とも器表面には、成形によって生じた凹凸が認められる。	○外面の底部には、どちらも回転糸切り痕跡が認められる。 ○外面の底部以外は、全体に回転なでを施している。	○どちらも灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はどちらも良好である。
土師質土器	高台付椀	1202	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○高台は貼り付けで、端部は丸く仕上げている。	○外面の口縁部は、横なでを施している。 ○外面の体部は、指頭圧痕の上面に不定方向の指頭による粗いなでを加えている。 ○高台の貼り付け部分は、横なでを加えている。 ○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、全体に平滑に仕上げている。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	1203 1204		○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○外面の器表面には、鈍い稜が認められる。	○外面の口縁部は、どちらも横なでを施している。 ○外面の体部は、指頭圧痕の上面に不定方向の指頭による粗いなでを加えている。 ○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、全体に平滑に仕上げている。	○1203は淡赤褐色、1204は淡黃白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はどちらも良好である。
	1205 ↓ 1211	1209 高台径 5.2~5.4 高台高 0.5	○高台はいずれも貼り付けである。 ○高台の断面は、三角形に近い形態を呈するものが多いが、器壁が薄くて斜め方向に張り出しているものの(1208)も認められる。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、全体に平滑に仕上げている。 ○外面の体部は、指頭による粗い不定方向のなでを施している。 ○高台の貼り付け部分は、横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側には、板目が残存している。 ○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形の高台痕跡が認められるものが多い。	○いずれも淡黄白色または淡赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○1209の高台は完存である。
	杯	1212	○口縁部は欠損して不明である。 ○底部は器壁が極めて厚くて平底である。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○外面の底部は、回転窓切りのままである。 ○外面の底部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
皿	1213 ↓ 1215	1213 推定口径12.0 器高 2.3~2.4	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁端部が短く外傾しているものの(1213)も認められる。	○内面全体と外面の口縁部は、全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転窓切り痕跡が認められる。	○いずれも全体に赤褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○1213は約半残存。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器		推定底部径 8.1	○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。 ○底部はいずれも平底である。		
	小皿	1216 ↓ 1225	○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁端部がわずかに外傾するもの(1221・1223)も認められる。 ○底部はいずれも平底であるが、弓なりに彎曲しているもの(1221)も存在する。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められるものが多い。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などで施している。	○いずれも全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
外来磁器	碗	1226	○高台の断面は逆台形を呈し、底部の器壁は厚くなっている。	○高台は窓による削り出しである。 ○内面の見込み部分に、1条の沈線をめぐらせている。 ○内面は全体に淡灰緑色の釉薬を施している。 ○外面の底部は、窓によって調整している。	○胎土: 精選粘土。 ○焼成: 良好。 ○色調: 内面は全体に淡灰緑色、外面は灰色、器壁断面は灰色。
中世陶器	壺	1227	○口縁部はわずかに肥厚して直立し、端部は外方に折り曲げられた玉縁になっている。 ○口縁部以外は、欠損して不明である。	○内外面とも全体に回転などで施している。 ○口縁部の器壁には、粘土の接合部分が認められる。	○胎土: 砂粒を多く含む山土。 ○焼成: 良好。 ○色調: 赤褐色。 ○備前焼。
	播鉢	1228 1229	○斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、どちらも上下に拡張して面が認められる。 ○口縁端部の面には、窓状工具で施した数条の沈線が存在する。	○内面は全体に丁寧な横なでを行った後に、条線を放射状にめぐらせている。 ○外面の口縁部は、比較的丁寧な横なでを施している。 ○外面の体部は、粗い横なでを施している。	○胎土: 精選粘土で砂粒を多く含む。 ○焼成: 良好。 ○色調: 茶褐色。 ○備前焼。
	甕	1230	○口縁部はわずかに外反して立ち上がり、端部は外方に折り曲げられた玉縁になっている。	○内外面とも全体に横なでを施している。 ○口縁部の器壁には、粘土の接合部分が認められる。 ○内面の頸部には、窓状工具の先端で施した米粒状の点が存在する。	○胎土: 山土と田土の混合。 ○焼成: 良好。 ○色調: 内面とも全体に灰色。 ○備前焼。

## 9) D-13

弥生式土器	壺形土器	1231	○斜め上方へ外反して立ち上がった口縁の端部は、上下に拡張して外側に面を有する。 ○口縁部の上端は、丸く仕上げている。	○口縁端部の面には、4条の退化凹線が認められる。 ○内外面とも全体に横なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は極めて良好である。	
	甕形土器	1232	底部径 3.1	○底部は面積が狭くて弓なりに彎曲している。 ○底部の器壁は、比較的厚くなっている。	○外面は全体に横なでを施して、器表面を平滑にしている。 ○内面は全体に縱方向の窓割りを施している。	○全体に褐色。 ○外面には黒斑が認められる。
	高杯形土器	1233	○杯部は比較的浅く、脚部からわずかに内彎して斜め上方へ立ち上がる。 ○脚柱部は短脚を呈している。 ○脚部と杯部は、脚柱部を杯部に刺し込んでいる。	○内面の杯部は、不定方向の丁寧な横なでを施している。 ○外面の杯部は、全体に横なでを施している。 ○外面の脚柱部には、縱方向の刷毛目が認められる。 ○内面の脚柱部は、全体に横なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。	
	台付直口壺形土器	1234	○口縁部はわずかに外反して上方へ立ち上がる。	○内面の口縁部は、横方向の窓磨きを施している。	○全体に赤褐色。 ○胎土中には1.0mm以下の砂粒	

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弥生式土器			<ul style="list-style-type: none"> <li>○胴部は橢円形を呈し、最大径が中位に存在する。</li> <li>○外面の胴部には、2条の貼り付け突帯がめぐらされている。</li> <li>○脚部は「ハ」字状に大きく広がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○脚部の円孔は、4箇所に認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の口縁部は、縱方向の荒磨きを施している。</li> <li>○内面の胴部は、横方向の粗い荒削りを施している。</li> <li>○外面の胴部は、全体に横なでを施している。</li> <li>○胴部の器壁には、粘土の接合部分が認められる。</li> <li>○外面の脚部は、磨滅が著しくて調整が不明である。</li> <li>○内面の脚部は、全体に横なでを施している。</li> <li>○円孔はいずれも外から内方向へ刺している。</li> </ul>	<p>が認められるが、量は極めて少ない。</p> <p>○水漉粘土を使用している。</p> <p>○焼成は全体に良好である。</p> <p>○小砂片を図上復原したものである。</p>

### 10) D-14

弥生式土器	1235		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は斜め上方へ外反して立ち上がり、端部はわずかに上下に拡張して退化凹線が認められる面を有する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部の面には、3条の退化凹線が存在する。</li> <li>○内外面とも全体に横なでを施している。</li> </ul>	<p>○全体に赤褐色。</p> <p>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</p> <p>○焼成は全体に良好である。</p>
	1236		<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部は平底で、わずかに上げ底になっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に縱方向の荒削りを施している。</li> <li>○外面は磨滅が著しくて、調整が不明である。</li> </ul>	<p>○全体に褐色。</p> <p>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</p> <p>○焼成は全体に良好である。</p>
壺形土器	1237		<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部は平底で、器壁が厚くなっている。</li> <li>○脚部は内寄して斜め上方へ立ち上がる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は磨滅が著しくて、調整が不明である。</li> <li>○外面の脚部は、全体に縱なでを施している。</li> <li>○外面の底部には、指頭圧痕が顕著に認められる。</li> </ul>	<p>○全体に褐色。</p> <p>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</p> <p>○焼成は全体に良好である。</p>

### 11) P-13

弥生式土器	1238		<ul style="list-style-type: none"> <li>○脚部は内寄して立ち上がり、頸部で屈曲して口縁端部に至る。</li> <li>○口縁端部は短く外寄して丸く仕上げている。</li> <li>○頸部から口縁端部へ移行するにしたがって器壁が薄くなっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。</li> <li>○外面の頸部直下には、範状工具の先端で刺した文様がめぐらされている。</li> <li>○外面の脚部は、縱方向のなでを施している。</li> <li>○内面の脚部は、磨滅が著しくて調整が不明である。</li> </ul>	<p>○全体に淡褐色。</p> <p>○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。</p> <p>○焼成は全体に良好である。</p>
	1239	推定口径 9.0 推定胴部最大径 14.9 高さ 12.3 推定底部径 5.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部はわずかに内寄して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○頸部は「く」字状に屈曲して、内面に稜が認められる。</li> <li>○胴部の最大径は、中位よりやや上方に存在する。</li> <li>○底部は平底である。</li> <li>○外面の口縁端部には、3条の退化凹線がめぐらされている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部は全体に横なでを施している。</li> <li>○口縁部は内外面とも全体に縱方向の荒磨きを施している。</li> <li>○外面の頸部は、縱方向の荒磨きを施している。</li> <li>○内面の頸部直下には、指頭圧痕が顕著に認められる。</li> <li>○外面胴部の頸部直下の位置は、横方向の荒磨きの上面に横なでを加えている。</li> <li>○外面の脚部は、全体に短い単位の荒磨きを施している。</li> <li>○内面の脚部は、荒削りを施した上面に指頭による不定方向の粗いなでを加えている。</li> </ul>	<p>○全体に赤褐色。</p> <p>○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。</p> <p>○焼成は全体に良好である。</p> <p>○外面の底部から脚部にかけて、黒斑が認められる。</p> <p>○約1%残存。</p>
	1240	推定口径 6.5 推定胴部最大径 8.3	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内傾して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○外面の口縁部には、4条の退化凹線が存在する。</li> <li>○脚部は橢円形を呈し、最大径は中</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の口縁部は、上位に退化凹線が存在し、下位に縱方向の荒磨きを施している。</li> <li>○内面の口縁部は、全体に横なでを施している。</li> </ul>	<p>○全体に赤褐色。</p> <p>○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。</p> <p>○焼成は全体に良好である。</p>

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弦生式土器			<p>位に存在する。</p> <p>○底部は欠損して不明であるが、短い脚が存在するであろう。</p> <p>○全体に器壁が薄い。</p>	<p>○内面の頸部直下には、指頭圧痕が認められる。</p> <p>○内面の胴部には、粘土の接合部分が認められる。</p> <p>○内面の胴部の下位には、縦または横方向の刷毛目が存在する。</p> <p>○外面の胴部の上位は、縦方向の蒐磨きを施している。</p> <p>○内面の胴部の下位は、横方向の蒐磨きを施している。</p>	
彫形土器	1241		<p>○頸部から口縁部にかけて外脣して立ち上がり、口縁部はさらに上方へ拡張して擬凹線が認められる面を有する。</p> <p>○口縁端部は器壁が薄くなつてわずかに外傾する。</p> <p>○胴部の器壁は、頸部よりも薄くなっている。</p>	<p>○頸部から口縁部にかけては、全体に横なでを施している。</p> <p>○内面の胴部は、横方向の蒐削りを施している。</p> <p>○外面の胴部は、縦方向のなでを施している。</p>	<p>○内外面とも全体に淡褐色。</p> <p>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</p> <p>○焼成は全体に良好である。</p>
	1242	推定口径12.0 推定胴部最大径 12.2	<p>○口縁部は「く」字状に屈曲して斜め上方へ張り出し、端部は上下に拡張して面を有する。</p> <p>○胴部は内脣して立ち上がり、最大径は中位よりや上方に存在する。</p> <p>○底部は欠損して不明であるが、不安定な平底を呈するであろう。</p>	<p>○口縁部と頸部は、内外面とも全体に横なでを施している。</p> <p>○内面の胴部の上位は、横方向の蒐削りを施している。</p> <p>○内面の胴部の下位は、縦方向の蒐削りを施している。</p> <p>○外面の胴部は器表面の磨滅が著しいが、上位には縦方向の刷毛目が存在し、下位にはひび割れ状の痕跡が認められる。</p>	<p>○内外面とも全体に明るい褐色。</p> <p>○1.5mm以下の砂粒を多く含む。</p> <p>○焼成は全体に良好である。</p>
	1243		<p>○口縁部は「く」字状に短く外反し、端部は器壁が厚くなつて丸く仕上げている。</p> <p>○胴部の器壁は、口縁部よりも薄い。</p>	<p>○内面の口縁と外面の口縁から頸部にかけては、全体に横なでを施している。</p> <p>○内面の胴部は、斜め方向の粗い蒐削りを施している。</p> <p>○外面の胴部は、縦方向のなでを施している。</p>	<p>○全体に褐色。</p> <p>○1.5mm以下の砂粒を多く含む。</p> <p>○焼成は全体に良好である。</p>
	1244		<p>○胴部は器壁が厚く、内脣して斜め上方へ立ち上がっている。</p> <p>○底部は平底であるが、瘤状に拡張している。</p>	<p>○内面は全体に磨滅が著しくて、調整が不明である。</p> <p>○外面の胴部は、縦方向のなでを施している。</p> <p>○外面の底部は、全体に横なでを加えている。</p>	<p>○全体に淡褐色。</p> <p>○1.5mm以下の砂粒を多く含む。</p> <p>○焼成は全体に良好で、底部には黒斑が存在する。</p>
	1245 1246		<p>○胴部は器壁が薄くなりながら、内脣して斜め上方へ立ち上がる。</p> <p>○底部はどちらも平底であるが、不安定である。</p>	<p>○内面は器表面全体の磨滅が著しくて、調整が不明である。</p> <p>○外面の胴部は、どちらも縦方向のなでを施している。</p> <p>○1245の外面胴部の器表面には、ひび割れ状の痕跡が認められる。</p>	<p>○どちらも淡褐色。</p> <p>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</p> <p>○焼成はどちらも良好である。</p>
	1247		<p>○口縁部は斜め上方へ直線的に立ち上がり、上端に平坦な面を有する。</p> <p>○頸部は「く」字状に屈曲して、内面に観い縦が認められる。</p> <p>○胴部の器壁は、口縁部よりも薄くなっている。</p>	<p>○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。</p> <p>○外面の頸部は、全体に横なでを施している。</p> <p>○外面の胴部は、縦方向のなでを施している。</p> <p>○内面の胴部は磨滅が著しいが、蒐削り痕跡がかすかに残存する。</p>	<p>○全体に褐色。</p> <p>○1.5mm以下の砂粒を多く含む。</p> <p>○焼成は全体に良好である。</p>
鉢形土器	1248		<p>○斜め上方へ立ち上がった口縁部は中位の器壁がわずかに肥厚して外面に退化凹線が認められる面を有する。</p> <p>○口縁端部は丸く仕上げている。</p>	<p>○外面の口縁部には、8条の細い退化凹線が認められ、横なでを加えている。</p> <p>○内面の口縁部は、全体に横なでを施している。</p>	<p>○全体に赤褐色。</p> <p>○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。</p> <p>○焼成は全体に良好である。</p>

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弥生式土器	1249	推定口径16.4 器高 5.6 推定底部径 4.4	○底部から体部にかけて緩やかに内 側して立ち上がり、頸部で巻く屈 曲して口縁部に至る。 ○口縁部は器壁が著しく薄くなって 斜め上方へ矧く外反している。 ○口縁端部は丸く仕上げている。 ○内面の頸部には、鋭い棱が認めら れる。 ○底部は平底で、器壁が薄くなっ ている。	○口縁部と頸部は、内外面とも全体に横 なでを施している。 ○外面の体部は磨滅が著しいが、縦方向 の範囲を施している。 ○内面の体部は、全体に丁寧な範囲を 施している。	○全体に赤褐色。 ○胎土には水洗粘土を使用し、 砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面の底部から体部にかけて 黒斑が存在する。 ○約1%残存。
	1250	推定口径14.2 推定器高 6.0~ 6.2 推定底部径 3.7	○底部から口縁部にかけて器壁が薄 くなりながら内側して斜め上方へ 立ち上がり、口縁端部は丸く仕上 げている。 ○底部は平底である。 ○全体に亜んだ形態を呈している。	○口縁端部は横なでを施している。 ○内面は全体に丁寧な縦方向のなでを施 している。 ○外面の体部は縦方向の粗いなでを施し、 器表面にひび割れ状の痕跡が認められ る。	○全体に淡褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含 む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1%残存。
高杯形土器	1251	推定口径17.4 器高 9.0 推定脚端部径 12.0	○口縁部は大きく外側して斜め上方 へ立ち上がり、端部は器壁が薄く なって丸く仕上げている。 ○杯部は内側して斜め上方へ立ち上 がり、上位へ移行するにしたがつ て器壁が薄くなっている。 ○脚部は短脚で、脚縫部が「ハ」字 状に大きく広がり、端部は丸く仕 上げている。 ○脚部と杯部は、脚柱部を杯部に刺 し込んでいる。	○口縁部は内外面とも全体に丁寧な横な でを施している。 ○杯部は外面とも縦方向の範囲を施 している。 ○外面の脚柱部には、範囲工具の先端で 施した縦方向の押圧痕跡が認められる。 ○外面の脚縫部は、全体に縦方向の範囲 を施している。 ○内面の脚部は、全体に横なでを施して いる。 ○脚縫部は全体に横なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○胎土には水洗粘土を使用し、 砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1%残存。
	1252	推定口径15.8	○口縁部は中位の器壁がわずかに肥 厚して斜め上方へ外側し、端部は 丸く仕上げている。 ○杯部は内側して斜め上方へ立ち上 がり、上位に移行するにしたがつ て器壁が薄くなっている。 ○脚柱部は1251よりもわずかに長く なっている。 ○脚部と杯部は、脚柱部を杯部に刺 し込んでいる。	○内面の口縁部は、全体に縦方向の範囲 を施している。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施し ている。 ○杯部は内外面とも全体に縦方向の範囲 を施している。 ○外面の脚部は、全体に縦方向の範囲 を施している。 ○内面の脚柱部には、縦方向のしづら痕 跡が認められる。	○全体に赤褐色。 ○胎土には水洗粘土を使用し、 砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。
	1253		○口縁部は大きく外側して斜め上方 へ立ち上がり、端部は全体に丸く 仕上げている。 ○外面の口縁部と杯部の境界部分に は、1条の凹線状の溝みが認めら れる。	○口縁端部は横なでを施している。 ○内面の口縁部は、全体に横なでを施し ている。 ○外面の口縁部は磨滅が著しいが、縦方 向の範囲を施している。 ○内面の杯部は、横方向の範囲を施し ている。	○全体に赤褐色。 ○胎土には水洗粘土を使用し、 砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。
	1254	脚端部径13.0	○杯部はわずかに内側して斜め上方 へ立ち上がり、上位へ移行するに したがって器壁を薄く仕上げてい る。 ○脚部は短脚で、脚縫部が「ハ」字 状に大きく広がり、端部は丸く仕 上げている。 ○脚縫部には4箇所に円孔が存在す る。 ○脚部と杯部は、脚柱部を杯部に刺 し込んでいる。	○杯部は内外面とも全体に縦方向の範囲 を施している。 ○外面の脚柱部は、横方向の範囲を施 している。 ○内面の脚柱部には、しづら痕跡が顕著 に認められる。 ○外面の脚縫部は、短い単位の範囲を 縦方向に施している。 ○内面の脚縫部は全体に横なでを施して いるが、横方向の刷毛目も認められる。 ○脚端部は横なでを施している。 ○円孔は外から内方向に刺突している。	○全体に赤褐色。 ○胎土には水洗粘土を使用し、 砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。
台付彫形土器	1255	脚端部径12.3	○脚部は大きく内側して斜め上方へ 立ち上がり、上位へ移行するにし たがって器壁が薄くなる。 ○脚部は短脚で、脚縫部が「ハ」字 状に大きく広がり、端部は丸く仕 上げている。	○内面の脚部は磨滅が著しく調整が不明 であるが、範囲痕跡がかすかに残存 している。 ○外面の脚部は、縦方向の範囲を丁寧 に施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、 量は比較的少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面の脚部から脚部にかけて

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弥生式土器			上げている。 ○脚縁部には4箇所に円孔が存在する。 ○脚部と底部は、脚柱部を底部に刺し込んでいる。	○内面の脚柱部には、しばり痕跡が顕著に認められる。 ○外面の脚柱部には、蓖状工具の先端で施した押圧痕が認められる。 ○内面の脚縁部と脚端部は、全体に横なでをしている。 ○外面の脚縁部は、縦方向の篦磨きを施している。 ○円孔は外から内方向に刺突している。	黒斑が存在する。
高杯形土器	1256 1257		○口縁部は直立(1256)または斜め上方(1257)へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○杯部はどちらも内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○外面の口縁部には、退化凹線が認められる。	○外面の口縁部には、4条(1256)または9条(1257)の退化凹線が認められ、上面を全体に横なでしている。 ○内面の口縁部は、どちらも横なでを施している。 ○内面の杯部は、縦方向のなでを施している。 ○外面の杯部は、縦方向の篦磨きを施している。	○どちらも赤褐色。 ○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成はどちらも良好である。 ○鉢形土器になるのかもしれない。
	1258	推定口径 9.9 器高 7.3 推定脚端部径 9.7	○杯部は内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁部に移行するにしたがって器壁が薄くなっている。 ○口縁部の器壁はわずかに肥厚して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○脚部は短脚で、脚縁部が「ハ」字状に大きく広がり、端部は丸く仕上げている。 ○脚縁部には4箇所に円孔が存在する。 ○脚部と杯部は、脚柱部を杯部に刺し込んでいる。	○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○杯部は内外面とも全体に縦方向の篦磨きを施している。 ○外面の脚柱部には、蓖状工具の先端で施した押圧痕が認められる。 ○内面の脚柱部には、しばり痕跡が顕著に認められる。 ○脚端部は横なでを施している。 ○内面の脚縁部には、横または斜め方向の刷毛目が認められる。 ○外面の脚縁部には、刷毛目の上面に縦方向の篦磨きを施している。 ○円孔は外から内方向に刺突している。	○全体に赤褐色。 ○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1%残存。
	1259	推定口径13.2 推定器高 9.7 推定脚端部径 12.9	○杯部から口縁部にかけては、内側して斜め上方へ立ち上がるだけで、杯部と口縁部を画する稜は認められない。 ○口縁端部は全体に丸く仕上げている。 ○杯部から口縁部にかけての器壁は、比較的の厚い。 ○脚部は短脚で、脚縁部が「ハ」字状に大きく広がり、端部は丸く仕上げている。 ○脚部と杯部は、脚柱部を杯部に刺し込んでおり、外面に接合部分の痕跡が顕著に残存している。 ○脚縁部には4箇所に円孔が存在する。	○杯部から口縁部にかけては、内外面とも全体に丁寧な横なでを施している。 ○外面の脚柱部は、全体に横なでを施している。 ○内面の脚柱部は、しばり痕跡の上面に指頭による縦方向のなでを加えている。 ○外面の脚縁部は、全体に縦方向のなでを施している。 ○内面の脚縁部と脚端部は、全体に横なでを施している。 ○円孔は外から内方向に刺突している。	○全体に淡褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1%残存。

## 12) H-1

弥生式土器	壺形土器	1260		○口縁部は斜め上方へ大きく外反して立ち上がり、端部は上下に拡張して擬凹線の認められる面を有する。	○外面の口縁部には、横なでによって生じたと推定される3条の擬凹線が認められる。 ○内面は全体に丁寧な横なでを施している。 ○外面の頸部には、斜め方向の刷毛目が存在する。 ○外面の頸部から口縁部にかけて、全体に丹塗りを施している。	○外面は丹塗りを施して淡赤色、内面は全体に淡褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
弥生式土器	壺形土器	1261		○頸部の器壁は内側して立ち上がり、頸部で屈曲して口縁部に至る。	○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○胎土には水漉粘土を使用し、

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弥生式土器	變形土器		○胴部の最大径は、上位に存在する。	○内面の胴部は、全体に範削りを施している。 ○外面の胴部は、全体に縦方向のなでを施している。	○砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。
	1262		○胴部の器壁は内側して立ち上がり、頸部で屈曲して口縁部に至る。 ○胴部は算盤玉状を呈し、最大径が中位に認められる。	○口縁部から頸部にかけて、内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面胴部の上位は、横方向の範削りを施している。 ○内面胴部の下位は、縦方向の範削りを施している。 ○外面の胴部は、全体に縦方向のなでを施している。	○全体に赤褐色。 ○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。
	1263		○胴部の器壁は内側して立ち上がり、頸部で屈曲して口縁部に至る。 ○全体に細長い器形を呈している。 ○胴部の器壁は、口縁部よりも厚くなっている。	○内面の頸部は、全体に横なでを施している。 ○内面の胴部は、全体に縦方向の範削りを施している。 ○外面の頸部から胴部にかけては、縦方向の刷毛目が存在する。	○全体に赤褐色。 ○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。
	1264		○胴部は内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○底部は平底である。	○内面は全体に縦方向の範削りを施している。 ○外面は全体に縦方向のなでを施している。	○全体に赤褐色。 ○胎土には水漉粘土を使用し、焼成は良好である。
高杯形土器	1265		○脚部は「ハ」字状に広がり、端部は丸く仕上げている。 ○円孔は4箇所に認められる。	○内面の脚柱部には、しばり痕跡が認められる。 ○内面の脚縫部は、全体に横なでを施している。 ○外面は全体に縦方向のなでを施している。	○全体に赤褐色。 ○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。
鉢形土器	1266		○体部の器壁は内側して立ち上がり、頸部で屈曲して口縁部に至る。 ○口縁部は外反して斜め上方へ立ち上がり、端部は上下に拡張して中央部がわずかに窪む面が認められる。 ○口縁部の上端は、丸く仕上げている。	○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の体部は、横方向の範削りを施している。 ○外面の体部は磨滅が著しいが、かすかに斜め方向の刷毛目が認められる。	○口縁部は赤褐色、頸部から体部は全体に淡褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。

## 13) H-2

須恵器	杯身	1267	○口縁部は器壁が極めて薄くなり、斜め上方へ張り出している。 ○受部の端部は内側して上方へ立ち上がり、外側に面を有する。	○体部から口縁部にかけては、内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に淡灰色。 ○胎土中には砂粒が極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。
		1268	○口縁部は断面が細長い三角形を呈して斜め上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は丸く仕上げている。 ○受部の端部は、内側して上方へ張り出している。 ○内面の口縁部と体部の境界部分には、凹線状の窪みがめぐらされている。	○体部から口縁部にかけては、内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に淡灰色。 ○胎土中には砂粒が極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面には自然釉が付着している。
	高杯	1269 脚部径 8.3	○「ハ」字状に広がった脚端部は、上下に拡張して中央部に凹線状の窪みが認められる面を有する。 ○脚端部の器壁は、脚柱部よりも薄くなっている。	○内面は回転範削りのままである。 ○外面全体と脚端部は、回転なでを施している。	○全体に淡灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	小皿	1270 推定口径 9.3 器高 1.7~1.8 底部径 5.0	○口縁部は器壁が薄くなって斜め上方へ張り出し、端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○底部は平底で、器壁が厚くなっている。 ○底部はわずかに上げ底を呈している。	○外面の底部は、回転窓切り痕跡が顕著に認められる。 ○内面は全体に回転なでを施している。 ○外面の口縁部は、全体に回転なでを施している。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約3%残存。
	高台付碗	1271	○口縁部は斜め上方へ内巻して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約1.5cm下位には、鈍い稜が認められる。	○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、調整は加えていない。 ○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面を平滑に仕上げている。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
		1272 1273	○1272の体部は内巻して斜め上方へ立ち上がり、器壁がわずかに肥厚する。 ○高台はどちらも貼り付けで、断面が、三角形に近い形を呈している。	○外面の体部は、指頭圧痕の上面に不定方向のなでを施している。 ○高台の貼り付け部分は、横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側には、板目が残存している。 ○内面はどちらも丁寧な不定方向のなでを施し、全体に平滑に仕上げている。	○1272は淡黄白色、1273は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はどちらも良好である。
	皿	1274 1275	○斜め上方へ立ち上がった口縁端部は、わずかに内巻するもの(1274)と直線的に張り出しているもの(1275)がある。 ○口縁端部はどちらも丸く仕上げている。 ○内面には成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○外面の口縁部は、どちらも全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○内面はどちらも全体に回転なでを施している。	○どちらも内外面とも赤褐色。 ○1.0mm以下の赤色粒や白色粒が認められる。 ○焼成はどちらも良好である。
瓦器	高台付碗	1276	○底部から口縁部にかけて内巻して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は器壁が薄くなつて短く外傾している。 ○外面の口縁端部より約1.5cm下位の部分には、鈍い稜が認められる。	○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、横方向の暗文を密に施している。 ○外面の口縁部は、横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、調整は加えていない。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○胎土中の砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○和泉型。
		1277	○口縁部は内巻して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約1.5cm下位の部分には、鈍い稜が認められる。	○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、横方向の暗文を施している。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面全体が凹凸になっている。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○胎土中の砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○和泉型。
		1278 高台径 3.5 高台高 0.2	○底部から体部にかけて、内巻して斜め上方へ立ち上がる。 ○高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。 ○高台は極めて小さく、全体に不安定である。	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○和泉型。
		1279 高台径 4.6~4.8 高台高 0.3	○高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、平行する暗文を施している。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。	○表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○焼成は全体に良好である。 ○和泉型。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓦器	高台付碗	1280	<ul style="list-style-type: none"> <li>○高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。</li> <li>○底部の器壁は弯曲して、高台の接地面と水平になる部分まで張り出している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、平行する暗文を施している。</li> <li>○暗文は比較的細いものである。</li> <li>○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。</li> <li>○外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。</li> <li>○胎土中の砂粒は極めて少ない。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○和泉型。</li> </ul>

### 15) D-19

土 器 質 土 器	土鍋	1281 । 1284	<ul style="list-style-type: none"> <li>○斜め上方へ張り出した口縁部の形態は、中位の器壁がわずかに肥厚して端部を丸く仕上げているもの(1281・1282)、胴部の器壁とはほぼ同じ厚さで端部が短く外傾するもの(1283)、外反した口縁端部が並張して上端に面を有するもの(1284)が認められる。</li> <li>○胴部の最大径は、頸部との境界部分に存在するもの(1282~1284)と、頸部より7.0cm以上も下方に存在するもの(1281)がある。</li> <li>○1281の頸部は「く」字状に屈曲して、内面に鋭い稜が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部はいずれも横なでを施している。</li> <li>○外面の口縁部は、縱方向の櫛状工具の痕跡が存在するもの(1281)と、全体に横なでを施しているもの(1282~1284)が認められる。</li> <li>○外面の頸部から胴部にかけて、指頭圧痕が顕著に認められるものが多い。</li> <li>○外面の胴部はいずれも縱方向の櫛状工具の痕跡が存在するが、上面に縱方向のなでを加えて櫛状工具の痕跡が消滅しているもの(1282・1283)も認められる。</li> <li>○内面の口縁部は、横または斜め方向の粗い櫛状工具の痕跡が認められる。</li> <li>○1284の内面口縁部は、器表面に凹凸が顕著に認められる。</li> <li>○内面の胴部には、いずれも横または斜め方向の櫛状工具の痕跡が存在する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○いずれも褐色または淡褐色。</li> <li>○1.5mm以下の砂粒を多量に含む。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> <li>○外面の器表面に煤の付着が認められ、器表面が黒褐色に変色しているものが多い。</li> </ul>
	高台付碗	1285 । 高台高 5.5 0.7	<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は肥厚してわずかに外傾する。</li> <li>○口縁端部は丸く仕上げている。</li> <li>○外面の器表面には、2条の鈍い稜が認められる。</li> <li>○高台は貼り付けで、断面が三角形に近い形態を呈し、接地面部分は丸く仕上げている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の口縁部は、下方の鈍い稜の部分まで横なでを施している。</li> <li>○外面の体部は、指頭圧痕の上面に指頭による粗い不定方向のなでを施している。</li> <li>○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。</li> <li>○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、平滑に仕上げている。</li> <li>○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される、円形を呈する高台の痕跡が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に淡黄白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○約1/4残存。</li> </ul>
		1286 । 1290	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○口縁端部がわずかに肥厚しているものが多い。</li> <li>○外面の器表面には、2条の鈍い稜がめぐらされているもの(1286~1288)と、1条の鈍い稜が存在するもの(1289・1290)が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の口縁部は、いずれも横なでを施している。</li> <li>○外面の体部は、指頭圧痕の上面に指頭による粗い不定方向のなでを施している。</li> <li>○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、平滑に仕上げている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○いずれも全体に淡黄白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> </ul>
		1291 । 1299	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○口縁端部の形態は、肥厚して短く外傾するもの(1292~1294)、直線的に張り出しているもの(1291・1295~1298)が認められる。</li> <li>○外面の器表面には、2条の鈍い稲がめぐらされているもの(1291~1295)と、1条の鈍い稲が存在するもの(1295~1299)が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の口縁部は、いずれも横なでを施している。</li> <li>○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。</li> <li>○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、平滑に仕上げている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1298は内外面とも全体に有機物が付着して黒褐色。</li> <li>○1298以外はいずれも淡黄白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> </ul>

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
土師質土器	高台付椀	1300 ↓ 1315	1307 高台径 7.0 高台高 0.8 1308 高台径 5.6 高台高 0.8	○高台はいずれも貼り付けで、断面が台形または台形に近い形態を呈するもの(1301~1309)、三角形または三角形に近い形態を呈するもの(1310~1315)、四角形を呈するもの(1300)が存在し、形態が揃っていない。 ○底部の器壁は、厚いものと薄いもののが存在する。	○高台の貼り付け部分は、いずれも全体に横なでを施している。 ○外面底部の高台より内側は、板目痕跡が認められるものが多い。 ○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される、円形を呈する高台の痕跡が認められるものが多い。	○いずれも全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
		1316 ↓ 1318	1317 高台径 7.6 高台高 0.8	○底部から口縁部にかけては、内彎して斜め上方へ立ち上がる。 ○高台はいずれも貼り付けで、0.8cmから1.0cmの立ち上がりを呈している。 ○高台の接地面部分は、いずれも丸く仕上げている。	○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、いずれも全体に横なでを施している。 ○外面底部の高台より内側には、板目痕跡が認められる。	○いずれも全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	瓶	1319		○底部から口縁部にかけては、内彎して斜め上方へ立ち上がる。 ○底部は平底で、器壁が厚くなっている。 ○内外面とも器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。	○外面の底部には、回転糸切り痕跡が存在する。 ○外面の底部以外は、全体に回転なでを施している。	○全体に灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
		1320 ↓ 1328		○口縁部は内彎して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁端部が短く外傾しているもの(1324・1325)も認められる。 ○内部の底部と外面の口縁部には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡が認められる。 ○外面の底部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。	○内外面とも全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	皿	1329 ↓ 1346		○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部はいずれも丸く仕上げている。 ○底部はいずれも平底であるが、弓なりに彎曲しているもの(1331・1332・1343・1344・1346)も認められる。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。	○いずれも赤褐色または淡黄灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
		1347		○口縁部は内彎して斜め上方へ立ち上がり、端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約2.0cm下位の部分には、鈍い稜が認められる。 ○高台は貼り付けで、断面は三角形を呈している。	○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を密に施している。 ○内面底部の暗文は、0.8cmから1.0cmの間隔ではば平行している。 ○内面口縁部の暗文は、横方向に施している。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められて器表が凹凸になり、二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを施している。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○和泉型。
	瓦器	1348 ↓ 1358		○口縁部は内彎して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○外面の器表面には、いずれも鈍い稜が存在する。	○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を施している。 ○外面の口縁部はいずれも横なでを施しているが、指頭圧痕が残存しているものの(1358)も存在する。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成はいずれも良好である。 ○いずれも和泉型。
		1359 ↓ 1362	1359 器高 1.6	○底部から口縁部にかけて内彎して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。	○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を施している。 ○外面の口縁部は、いずれも全体に横な	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓦器		1360 器高 1.4~1.5 1362 器高 1.3	○底部はいずれも弓なりに弯曲している。 ○内面の脇部には指頭圧痕が顕著に認められ、唇表面が凹凸になっている。 ○外側の底部は、二次的な調整を加えていない。	でを施している。 ○外側の底部には指頭圧痕が顕著に認められ、唇表面が凹凸になっている。 ○外側の底部は、二次的な調整を加えていない。	量は極めて少ない。 ○焼成はいずれも良好である。 ○いずれも和泉型。
外來磁器	四耳壺	1363	○口縁部はわずかに外彎して立ち上がり、端部は玉縁状を呈して外側に弯曲した面を有する。 ○胴部の最大径は、中位よりやや上方に存在する。 ○外側の脇部には、2条の凹線状の窪みがめぐらされている。 ○内面の脇部と頸部の境界部分は、屈曲して後が認められる。	○内外面とも全体に淡緑灰色の釉薬が施されている。 ○脇部の唇壁には、粘土の接合部分が認められる。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：堅緻。 ○色調：器表面は全体に淡緑灰色、器壁断面は灰白色。
楕	1364 1365		○口縁部は内彎して斜め上方へ立ち上がり、端部は短く外傾している。 ○内面の口縁部には、凹線状の窪みが認められるもの(1364)も存在する。 ○1365の器壁は極めて薄くなっている。	○内外面とも全体に淡緑灰色の釉薬が施されている。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：堅緻。 ○色調：器表面は全体に淡緑灰色、器壁断面は灰白色。
	1366		○口縁端部は外方へ折り曲げ、玉縁状を呈する。 ○外側の玉縁状張り出しの直下には、2条の凹線状の窪みが存在する。	○内外面とも全体に淡緑灰色の釉薬が施されている。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：堅緻。 ○色調：器表面は全体に淡緑灰色、器壁断面は灰白色。
	1367	高台高 0.5	○底部の器壁は、弓なりに弯曲して厚い。 ○高台は削り出しで、断面が台形を呈している。	○内面全体と外側の脇部は、灰白色の釉薬が施されている。 ○外側の高台部分は、範削りのままで釉薬が認められない。 ○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形の痕跡が存在し、釉薬が剝離している。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：堅緻。 ○色調：器表面は灰白色、器壁断面は灰褐色。
	1368	高台高 1.4	○高台は削り出しで、断面が細長い三角形を呈している。	○内面全体と外側の脇部は、淡緑灰色の釉薬が施されている。 ○外側脇部の釉薬は、底部まで垂れ下がっている。 ○外側の高台部分は、範削りのままで釉薬が認められない。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：堅緻。 ○色調：器表面は淡緑灰色、器壁断面は淡赤白色。
	平瓦	1369	○断面の厚さは1.6cmから2.2cmを測り、緩やかに弯曲している。	○凸面には斜格子の叩き目痕跡が認められる。 ○凹面には布目が存在する。 ○側面は範削りによる面取りが施されている。	○全体に灰褐色。 ○胎土中には細かい砂粒が多い。 ○焼成は全体に良好である。

16) P-14

須恵質土器	甕	1370	○口縁部は外彎して斜め上方へ立ち上がり、端部には面を有する。 ○内面の脇部には、2条の鋭い縦が認められる。 ○脇部の器壁は、口縁部よりも薄くなっている。	○口縁部から脇部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○内面の脇部直下は、青海波の叩き目の上面に横なでを加えている。 ○外側の脇部は、平行叩き目の上面に横なでを加えている。	○内面は灰褐色、外側は青灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。	
土師質土器	高台付楕	1371	推定口径14.6 器高 5.0~5.1 高台径 6.9 高台高 0.4	○底部から口縁部にかけて大きく内彎して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○脇部の器壁は、口縁部や底部よりも薄い。 ○外側の口縁端部より約2.0cm下位	○内面は全体に不定方向の丁寧なでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外側の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外側の脇部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表が凹凸になって二次的な調整は加えていない。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約3%残存。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	高台付椀		○部分には、鈍い稜が認められる。 ○底部は弓なりに彎曲して器壁が厚くなっている。 ○高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。	○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、二次的な調整は施さないで板目痕跡が残存している。 ○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	
			○口縁部は斜め上方へ内彎して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より1.4cmから2.0cm下位の部分に、鈍い稜が認められる。 ○1372の口縁端部は、短く外傾している。	○内面は全体に不定方向の丁寧ななでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、どちらも横なでを施している。 ○外面の体部は、指頭圧痕の上面に指頭による不定方向の粗いなでを加えている。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はどちらも良好である。
			○高台は貼り付けで、断面は三角形に近い形態を呈している。 ○高台の接地部分は、全体に丸く仕上げている。	○内面は全体に不定方向の丁寧ななでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はどちらも良好である。
小皿	1376		○口縁部は斜め上方へ短く立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、弓なりに彎曲している。 ○全体に器壁が厚い。	○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転窓切り痕跡が認められる。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
瓦器	高台付椀 1377 1379		○体部から口縁部にかけて内彎して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はいずれも丸く仕上げている。 ○体部よりも口縁部の器壁が厚い。 ○外面の口縁端部より1.5cmから2.5cm下位の部分に、いずれも鈍い稜が認められる。	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、横または斜め方向の暗文を密に施している。 ○外面の口縁部は、いずれも横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整はいずれも加えていない。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○いずれも和泉型。
瓦質土器	壺	1380	○頸部は器壁が厚くなって「く」字状に屈曲している。 ○胴部の器壁は、頸部よりも薄くなっている。 ○口縁端部は欠損して不明である。	○頸部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の頸部下位には、指頭圧痕が顕著に認められる。 ○外面の胴部には、全体に格子目を呈する叩き痕跡が顕著に認められる。	○器表面は黒灰色、器壁断面は褐色。 ○胎土中に砂粒は極めて多い。 ○焼成は全体に良好である。 ○龜山焼。
中世陶器	壺	1381	○口縁端部は外方に折れ曲って玉縁を呈している。	○内外面とも全体に横なでを施している。	○全体に赤茶褐色。 ○備前焼。
土師質土器	擂鉢	1382	○体部は斜め上方へ立ち上がり、上位へ移行するにしたがって器壁が薄くなっている。 ○底部は平底である。 ○外面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○内面は全体に横なでを行って器表面を平滑にした後に、8本を単位にした縱方向の条線を全体にめぐらせている。 ○外面は全体に横方向のなでを施している。	○全体に赤褐色。 ○胎土には5.0mmの大砂粒も認められる。 ○焼成は全体に良好である。 ○備前焼。
土師質土器	皿 1383 1386	1383 推定口径10.9 器高 2.1~2.5 推定底部径 4.3	○口縁部は内彎して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底である。	○内面はいずれも全体に横なでを施している。 ○外面の口縁部は、いずれも全体に横なでを施している。 ○外面の体部から底部にかけては、かすかな指頭圧痕が全体に認められ、二次的な調整はいずれも加えていない。	○赤褐色または淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○1383は約2%残存。
	小皿	1387 1387	1387 推定口径 6.8	○口縁部は斜め上方へ短く張り出し、端部はいずれも丸く仕上げている。	○内面はいずれも全体に回転なでを施している。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	1391	器高 1.4 推定底径 5.1	○口縁端部がわずかに外傾するもの (1390・1391) も認められる。 ○底部はいずれも平底であるが、器壁が弓なりに弯曲するもの (1387) も存在する。	○外面の口縁部は、いずれも全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転窪切り痕跡と板目痕跡が認められる。	○焼成はいずれも良好である。 ○1387は約1%残存。

### 17) 井戸3

須恵質土器	壺	1392	○頸部と底部の器壁は、胴部よりも厚い。 ○底部は平底である。 ○口縁部の破片は認められない。	○内面は全体に横なでを施しているが、底部付近には粗い箇割り痕跡が残存している。 ○外面には細長くて格子状を呈した叩き目が、器表面全体に顕著に認められる。 ○外面の底部に近い部分では、叩き目が交叉している。 ○器壁断面と内面の器表面には、粘土の接合部分が認められ、輪積み方法で作製されたと推定できる。	○内面の器表面は黒褐色、外面の器表面は青灰色、器壁断面は灰白色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○1392~1397と1398~1402が同一個体の破片である。
		1402			
土師質土器	土鍋	1403	○斜め上方へ張り出した口縁端部は、外面に中央部分がわずかに窪んだ面を有するものと、肥厚して丸く仕上げているものが認められる。 ○頸部はいずれも「く」字状に屈曲し、内面に縦が認められる。 ○胴部の最大径は、いずれも頸部直下の部分に存在する。	○口縁端部はいずれも横なでを施している。 ○内面の口縁部には、横または斜め方向の櫛状工具の痕跡が存在するものが多いが、横なでを施しているもの(1406)も認められる。 ○外面の口縁部は、いずれも横なでを施している。 ○外面の頸部直下に、指頭圧痕が顕著に認められるもの(1404)が存在する。 ○内面の胴部には、横または斜め方向の櫛状工具の痕跡が存在するものが多いが、横なでを施しているもの(1406)も認められる。 ○外面の胴部には、縱方向の櫛状工具の痕跡が存在するものが多い。	○内面はいずれも淡褐色、外面は煤が付着して黒褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。
		1406			
土鍋支脚		1407	○表面にはなでによって生じた鈍い稜がかすかに認められる。 ○断面は円形に近い形態を呈している。	○全体になでを施している。 ○胴部との接合部分には、指頭圧痕が顕著に認められる。	○淡黄赤褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
		1408			
高台付桶		口径 14.2 器高 4.5~4.8 高台径 6.1~6.2 高台高 0.6	○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は肥厚して丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約2.5cm下位の部分には、鈍い稜が認められる。 ○底部の器壁は、体部や口縁部よりも厚い。 ○高台は貼り付けで、断面が台形を呈している。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部は、指頭圧痕の上面に指頭による不定方向の粗いなでを加えている。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側には、指頭による不定方向の粗いなでを施した後に、「O」印の墨書きを行っている。 ○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	○全体に淡灰白色。 ○胎土中には細かい砂粒を多く含み、8.0mm大的白色砂粒も認められる。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面底部の高台より内側には、墨書きが認められる。 ○完形品。
		1409			
		口径 14.5~14.6 器高 4.5~5.4 高台径 5.8~6.1 高台高 0.5	○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は肥厚して丸く仕上げている。 ○底部から口縁部へ移行するにしたがって、器壁が薄くなっている。 ○外面の口縁端部より約2.0cm下位の部分には、鈍い稜が認められる。 ○高台は貼り付けで断面が台形を呈	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は全体に横なでを施し、器表面に凹凸が認められる部分も存在する。 ○外面の体部は、指頭圧痕の上面に指頭による不定方向の粗いなでを加えている。	○外面の器表面は全体に淡黄灰白色。 ○内面の約半分の器表面が、黒色に変色している。 ○胎土中には細かい砂粒を多く含み、7.0mm大的白色砂粒も認められる。 ○焼成は全体に良好である。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	高台付碗		しているが、接地部分は全体に丸く仕上げている。 ○全体に歪んだ形態を呈して、左右対称になっていない。	る。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側には、板目痕跡が顕著に認められる。 ○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	○完形品。
	1410	口径 14.8 器高 4.6~ 5.2 高台径 6.3 高台高 0.7	○口縁部は内彎して斜め上方へ立ち上がり、端部は瘤状に肥厚して丸く仕上げている。 ○口縁端部の器壁は、著しく薄くなっている。 ○外面の口縁端部より約 2.5cm下位の部分にはかすかに後が認められるが、体部と口縁部の境界は明瞭ではない。 ○底部の器壁は、体部よりも薄くなっている。 ○高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部は、指頭圧痕の上面に指頭による不定方向の粗いなでを加えている。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側には指頭圧痕や板目痕跡がかすかに残存し、二次的な調整は加えていない。	○全体に淡黄白色。 ○胎土中には細かい砂粒を多く含み、5.0mm大の白色砂粒も認められる。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ完形品であるが、体部の一部を欠損している。
	1411	口径 14.4~14.6 器高 4.2~ 5.0 高台径 5.5~ 5.8 高台高 0.5	○底部から口縁部にかけて内彎して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。 ○内面の口縁端部には、1条の凹線状の浅い窪みがめぐらされている。 ○底部の器壁は、中央部分がわずかに肥厚して、内面へ盛り上がっていている。 ○高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部は、指頭圧痕の上面に指頭による不定方向の粗いなでを加えている。 ○高台の貼り付け部分と外面底部の高台より内側は、全体に横なでを加えている。	○全体に淡灰白色。 ○胎土中には細かい砂粒を多く含み、8.0mm大の大きな砂粒も認められる。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ完形品であるが、口縁端部の一部が存在しない。
	1412	推定口径15.1 器高 5.6 推定高台高 5.8 高台高 0.8	○底部から口縁部にかけて内彎して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はわずかに外傾して丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約 1.1cm下位の部分には、鈍い稜が認められる。 ○底部の器壁は、中央部分が肥厚して、内面へ盛り上がっている。 ○高台は貼り付けで断面が長台形を呈し、接地部分は丸く仕上げている。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部は、指頭圧痕の上面に指頭による不定方向の粗いなでを加えているが、部分的に指頭圧痕が残存している。 ○高台の貼り付け部分と外面底部の高台より内側は、全体に横なでを加えている。	○淡黄赤褐色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多く含み、5.0mm大の砂粒も認められる。 ○焼成は全体に良好である。 ○約半残存。
	1413	推定口径15.0 器高 5.2 高台径 5.3~ 5.5 高台高 0.8	○底部から口縁部にかけて内彎して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約 1.8cm下位の部分には、明瞭な稜が認められる。 ○高台は貼り付けで、断面が三角形に近い形態を呈し、接地部分は丸く仕上げている。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は全体に横なでを施し、器表面に凹凸が認められる。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側には、指頭圧痕や板目痕跡が残存する。	○全体に淡灰白色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○口縁部の約半分を欠損している。
	1414	口径 15.1~15.2 器高 5.0~ 5.2	○底部から口縁部にかけて内彎して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約 2.7cm下位	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。	○全体に淡灰白色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多量に含み、5.0mm大の砂粒も存在する。 ○焼成は全体に良好である。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	高台付椀	高台径 6.2~ 6.4 高台高 0.7	の部分には、明瞭な縁が認められる。 ○底部の器壁は厚く、口縁部へ移行するにしたがって器壁は薄くなる。 ○高台は貼り付けで、接地部分は丸くなっている。	○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。 ○内部の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	○完形品。
	1415	口径 14.7~14.9 器高 4.2~ 4.7 高台径 6.7~ 7.0 高台高 0.6	○底部から口縁部にかけて内脣して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約 1.7cm下位の部分には、鈍い縁が認められる。 ○底部の器壁は極めて厚く、口縁部へ移行するにしたがって薄くなっている。 ○高台は貼り付けで断面が三角形に近い安定した形態を呈し、接地部分は全体に丸く仕上げている。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分と外面底部の高台より内側は、全体に横なでを加えている。 ○内部の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	○内外面とも全体に淡黄灰白色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多く含み、3.0mm大の砂粒も認められる。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ完形品であるが、口縁端部の2箇所をわずかに欠損している。
	1416	口径 14.4~15.0 器高 4.2~ 4.8 高台径 7.2 高台高 0.6	○底部から口縁部にかけて内脣して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は肥厚して丸く仕上げている。 ○底部と体部の器壁は著しく厚いが、口縁部の器壁は薄くなっている。 ○高台は貼り付けで断面が台形に近い安定した形態を呈し、斜め方向に盛り出している。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面体部の中位には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。 ○外面体部の底部に近い部分は、指頭圧痕の上面に指頭による不定方向の粗いなでを施している。 ○高台の貼り付け部分と外面底部の高台より内側は、全体に横なでを加えている。 ○内部の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	○全体に淡灰白色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多く含み、5.0mm大の砂粒も認められる。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ完形品であるが、口縁端部の2箇所をわずかに欠損している。
	1417	口径 14.0 器高 4.4~ 5.3 高台径 5.9~ 6.2 高台高 0.6	○底部から口縁部にかけて内脣して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約 2.0cm下位の部分には、鈍い縁が認められる。 ○底部の器壁は、中央部がわずかに肥厚して内面へ盛り上がっている。 ○高台は貼り付けで、断面は三角形を呈している。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凸凹になって二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側には、指頭圧痕や板目痕跡が残存して二次的な調整を加えていない。 ○内部の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	○内面は淡灰白色、外面は淡黃白色。 ○外面の器表面の1箇所は、黒色に変色している。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多く含み、3.0mm大の砂粒も認められる。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
	1418	推定口径14.4 器高 4.5~ 5.2 高台径 6.2~ 6.4 高台高 0.5	○底部から口縁部にかけて内脣して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は瘤状に肥厚して丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約 2.0cm下位の部分には、鈍い縁が認められる。 ○底部の器壁は、著しく厚くなっている。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○内面の口縁端部には、斜め方向のなで痕跡が認められる。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認め	○淡黄灰白色。 ○胎土中には 1.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約半残存。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	高台付椀	口径 14.5~14.7 器高 4.6~ 5.1 高台径 7.2~ 7.4 高台高 0.7	○高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。	られ、部分的に指頭による不定方向の粗いなでを加えている。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。 ○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	
	1419	口径 15.0~15.3 器高 4.6~ 5.3 高台径 6.1~ 6.4 高台高 0.5	○底部から口縁部にかけて内彎して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○底部の器壁は厚く、弓なりに彎曲している。 ○外面の口縁端部より約 2.2cm 下位の部分には、鈍い稜が認められる。 ○底部から口縁部に移行するにしたがって、器壁が薄くなっている。 ○高台は貼り付けで、斜め方向へ張り出している。 ○全体に著しく垂んだ形態を呈している。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分と外面底部の高台より内側は、全体に横なでを加えている。 ○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	○淡黄灰白色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多く含み、5.0mm大の砂粒も認められる。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ完形品であるが、口縁端部の2箇所をわずかに欠損している。
	1420		○底部から口縁部にかけて内彎して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○底部から口縁部に移行するにしたがって、器壁が薄くなっている。 ○外面の口縁端部より約 2.3cm 下位の部分には、鈍い稜がかすかに認められるが、体部と口縁部の境界部分は明瞭ではない。 ○高台は貼り付けで、断面が長台形を呈して斜め方向へ張り出している。 ○全体に著しく垂んだ形態を呈している。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は全体に横なでを施し、器表面が凹凸になっている。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、部分的に指頭による不定方向の粗いなでを加えている。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、指頭圧痕や板目痕跡が残存して二次的な調整は加えていない。 ○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	○淡黄灰白色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多く含み、5.0mm大の砂粒も認められる。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
	1421 1438		○口縁部は内彎して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁端部が肥厚しているものや、わずかに外傾しているものが存在する。 ○外面の器表面には、鈍い稜が認められる。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、いずれも全体に横なでを施している。 ○外面の口縁部の器表面に、横なでによって生じた凹凸が認められるものも存在する。 ○外面の体部は、指頭圧痕の上面に指頭による不定方向の粗いなでを施している。	○いずれも淡黄白色または淡灰白色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	1439 1440		○口縁部は内彎して斜め上方へ立ち上がり、端部はいずれも丸く仕上げている。 ○口縁端部がわずかに肥厚して、短く外傾するもの(1439・1440)も認められる。 ○外面の器表面には、鈍い稜が認められる。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、いずれも全体に横なでを施している。 ○外面の口縁部の器表面に、横なでによって生じた凹凸が顕著に認められるもの(1439・1440)も存在する。 ○外面の体部には、いずれも指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凹凸になって二次的な調整は加えていない。	○いずれも淡黄白色または淡灰白色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	1444 1	1444 高台径 6.4~ 6.5	○底部から体部にかけて、内縁して斜め上方へ立ち上がる。 ○底部の器壁は、体部よりも厚くなっている。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整はいずれも加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、いずれも丸く仕上げている。	○いずれも淡黄白色、または淡灰白色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	1448	高台高 0.6	○高台はいずれも貼り付けで、断面が台形または三角形を呈している。	○高台の貼り付け部分は、いずれも全体に横なでを加えている。	
	1445 3	高台径 6.5~ 6.9	○高台の接地部分は、丸く仕上げている。	○外面底部の高台より内側は、指頭圧痕や板目痕跡が残存して二次的な調整は加えていない。	
	1446	高台高 0.5		○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	
	1449 3	1451 高台径 6.6~ 6.7	○底部から体部にかけて、内縁して斜め上方へ立ち上がる。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。	○いずれも淡黄白色または淡灰白色。
	1462	高台高 0.6	○高台はいずれも貼り付けで、断面が台形または三角形を呈している。	○1452の外面の口縁部は、全体に横なでを施している。	○胎土中には白色の細かい砂粒を多量に含む。
	1458	高台径 6.5~ 6.6	○高台の接地部分は、丸く仕上げているものが比較的多く認められる。	○1452と1456の外面の体部は、指頭圧痕の上面に指頭による不定方向の粗いなでを施している。	○焼成はいずれも良好である。
	1461	高台高 0.5		○高台の貼り付け部分は、いずれも全体に横なでを加えている。	
	1461	高台径 6.6~ 6.8		○外面底部の高台より内側は、指頭圧痕や板目痕跡が残存して二次的な調整を加えていない。	
		高台高 0.7		○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	
須恵質土器	1463	口径 16.4~16.5 器高 4.9~ 5.1 底部径 6.8~ 7.3	○底部から口縁部にかけて大きく内縁して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底で、わずかに上げ底を呈している。 ○外面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。 ○口縁部の器壁は、底部よりも薄く仕上げている。	○外面の底部には、回転糸切り痕跡が顕著に認められる。 ○外面の底部には、板目痕跡もかすかに認められる。 ○外面の底部以外は、全体に回転なでを施している。 ○外面の口縁部には、重ね焼によって生じたと推定される、黒色に変色した部分が認められる。 ○内面の器表面は、全体に平滑になっている。	○内面の器表面は淡黄灰褐色、外面の器表面は淡灰褐色を呈している。 ○胎土中には細かい砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○器表面の色調は、著しく変化している。 ○完形品。
	1464	口径 16.5 器高 4.8~ 5.0 底部径 6.4~ 6.7	○底部から口縁部にかけて大きく内縁して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底で、わずかに上げ底を呈している。 ○外面中位の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。 ○口縁部の器壁は、底部よりも薄く仕上げている。	○外面の底部には、回転糸切り痕跡が顕著に認められる。 ○外面の底部には、板目痕跡もかすかに認められる。 ○外面の底部以外は、全体に回転なでを施している。 ○外面の口縁部には、重ね焼によって生じたと推定される、黒色に変色した部分が認められる。 ○内面の器表面は、全体に平滑になっている。	○内面の器表面は淡黄灰褐色、外面の器表面は淡灰褐色を呈している。 ○胎土中には細かい砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○器表面の色調は、著しく変化している。 ○完形品。
土師質土器	1465	口径 14.4~14.6 器高 2.8~ 3.2 底部径 9.5~ 9.7	○口縁部は内縁して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁部の器壁は、端部へ移行するにしたがって薄くなっている。 ○底部は平底である。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○外面の口縁部は、全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転糸切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。 ○内面は全体に回転なでを施している。	○内外面とも全体に淡灰赤褐色。 ○胎土中には細かい砂粒を多く含み、赤色の砂粒や金雲母粒も存在する。 ○焼成は全体に良好である。 ○底部の中央部を欠損している。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
土師質土器	皿	1466 1474	1467 推定底部径 11.1	○口縁部は斜め上方へ張り出し、端部は丸く仕上げている。 ○口縁端部が内聳するもの(1469・1470)と、わずかに外傾しているもの(1471・1473・1474)が認められる。 ○底部はいずれも平底であるが、弓なりに彎曲しているもの(1467・1468)と、わずかに上げ底を呈しているもの(1473)が認められる。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められるものが多い。	○外面の口縁部は、いずれも全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、いずれも回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○内面はいずれも全体に回転なでを施している。	○いずれも淡赤褐色または淡灰褐色。 ○胎土中には細かい砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○1474の外面には煤が付着している。
	小皿	1475	底部径 4.8~ 5.1	○底部は平底で、器壁が著しく厚くなっている。 ○口縁部は欠損して不明である。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の底部以外は、内外面とも全体に回転なでを施している。	○淡灰赤褐色。 ○胎土中には細かい砂粒を含み、焼成は良好である。
		1476	口径 7.3~ 7.4 器高 0.9~ 1.5 底部径 5.4~ 5.6	○口縁部は器壁が著しく薄くなって斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が著しく厚い。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
		1477	口径 7.3~ 7.6 器高 1.0~ 1.4 底部径 5.5~ 5.7	○口縁部は内聳して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が著しく厚い。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
		1478	口径 7.6~ 7.7 器高 1.2~ 1.5 底部径 5.6~ 5.7	○口縁部は器壁が薄くなって斜め上方へ張り出し、端部は全体に丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が著しく厚い。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ完形品であるが、口縁端部をわずかに欠損している。
		1479	口径 7.6~ 7.7 器高 1.3~ 1.4 底部径 5.8~ 6.2	○口縁部は器壁が薄くなって斜め上方へ張り出し、端部は全体に丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が厚くなっている。 ○内面底部の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ完形品であるが、口縁端部をわずかに欠損している。
		1480	推定口径 7.6 器高 1.2~ 1.4 推定底部径 6.3	○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が厚くなって彎曲している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡が存在する。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1%残存。
		1481	口径8.7~8.9 器高1.4~1.8	○口縁部は内聳して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、わずかに弓	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なでを施している。	○淡灰褐色を呈するが、淡赤褐色部分も認められる。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	小皿	底部径 6.2~ 6.3	なりに彎曲している。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	を施している。	○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
		口径 8.9~ 9.1 器高 1.5~ 1.8 底部径 6.1~ 6.5	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は器壁が薄くなっている。 ○底部は平底であるが、器壁がわずかに弓なりに彎曲している。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○淡灰赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ接合完形品であるが、口縁端部をわずかに欠損している。
	1483	口径 9.0 器高 1.2~ 1.5 底部径 6.5~ 6.7	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁がわずかに弓なりに彎曲している。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に淡灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ完形品であるが、口縁端部の3箇所を欠損している。
	1484	口径 8.6~ 8.7 器高 1.4~ 1.5 底部径 6.2~ 6.3	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、外面の器表面が凹凸になって粘土塊が残存する。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に淡灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○口縁部の約1/3を欠損している。
	1485	口径 9.1~ 9.2 器高 1.4~ 1.8 底部径 6.6~ 6.7	○口縁部は斜め上方へ張り出し、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、中央部がわずかに上げ底を呈している。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に淡灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約3%残存。
	1486	口径 8.9 器高 1.6~ 1.8 底部径 5.9~ 6.1	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、わずかに弓なりに彎曲している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○淡灰赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
	1487	推定口径 8.4 器高 1.2~ 1.3 推定底部径 6.0	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底で、器壁が薄くなっている。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○外面の底部には、板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に淡赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約3%残存。
	1488	推定口径 9.0 器高 1.4~ 1.5 推定底部径 6.9	○口縁部は斜め上方へ張り出し、端部を丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が口縁部よりも薄くなっている。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に淡灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約3%残存。
	1489	推定口径 8.7 器高 1.5~ 1.6 底部径 5.8	○口縁部は斜め上方へ張り出し、端部は短く外傾して丸く仕上げている。 ○底部の器壁は、弓なりに彎曲している。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に淡灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約3%残存。
	1490	口径 9.2 器高 1.6~ 1.9 底部径 6.7	○口縁部は器壁が薄くなって内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が緩やかに弓なりに彎曲している。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認めら	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に淡灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○接合完形品。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
土師質土器	小皿		れる。 ○全体に歪んだ形態を呈している。			
		1491	口径 9.3~ 9.4 器高 1.7~ 1.9 底部径 5.9~ 6.3	○口縁部は器壁が薄くなつて内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が厚い。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なしで施している。	○淡灰赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ完形品であるが、口縁端部をわずかに欠損している。
		1492	口径 8.6~ 8.9 器高 1.3~ 1.8 底部径 5.7~ 6.4	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は器壁が薄くなつて丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁がわずかに弓なりに彎曲している。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なしで施している。	○淡灰赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
		1493	口径 8.7~ 9.4 器高 1.4~ 1.7 底部径 5.9~ 6.4	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が薄い。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なしで施している。	○淡灰赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○口縁部の約1/2を欠損している。
		1494	口径 8.9~ 9.2 器高 1.2~ 2.0 底部径 6.5~ 6.6	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部の器壁は著しく彎曲して、外面の器表面に粘土塊が残存している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なしで施している。	○全体に淡灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
		1495	推定口径 9.2 器高 1.3~ 1.4 推定底部径 7.2	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が薄くなつてわずかに弓なりに彎曲している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なしで施している。	○淡灰赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1/4残存。
		1496	口径 9.1 器高 1.4~ 1.6 底部径 6.3~ 6.8	○口縁部は器壁が厚くなつて内側しながら斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が薄くなっている。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なしで施している。	○全体に淡灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○口縁部の約1/2を欠損している。
		1497	口径 8.7~ 9.0 器高 1.2~ 1.6 底部径 6.4~ 6.7	○口縁部は器壁が厚くなつて斜め上方へ張り出し、端部は全体に丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が薄くなっている。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なしで施している。	○淡灰褐色を呈するが、口縁部の1箇所は黒色に変色している。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好である。 ○底部の中央部を欠損している。
		1498	推定口径 9.4 器高 1.6 推定底部径 6.7	○口縁部は斜め上方へ張り出し、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、弓なりに彎曲している。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転なしで施している。	○全体に淡灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1/4残存。
		1499	推定口径 9.0	○口縁部は器壁が厚くなつて斜め上方へ張り出し、端部は全体に丸く	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。	○全体に淡灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	小皿	器高 1.2~ 1.7 推定底部径 5.8	仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が薄くなつてわずかに上昇底を呈している。	○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○焼成は全体に良好である。 ○約1%残存。
	1500	口径 8.7~ 8.8 器高 1.2~ 1.4 底部径 5.7~ 5.8	○口縁部は斜め上方へ張り出し、端部は丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約 0.6cm 下位の部分には、鋸い縫が認められる。 ○底部は平底であるが、器壁が厚くて弓なりに彎曲している。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○外面の底部には、回転箝切り痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○淡灰赤褐色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
	1501	口径 7.8~ 8.7 器高 1.4~ 1.5 底部径 6.5~ 7.2	○口縁部は斜め上方へ張り出し、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が薄くなつて弓なりに彎曲している。 ○全体に歪んだ精円形に近い形態を呈している。	○外面の底部には、回転箝切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○淡灰赤褐色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ接合完形品であるが、口縁端部を欠損している。
	1502	口径 9.1~ 9.2 器高 1.3~ 1.6 底部径 7.4~ 7.6	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は器壁が薄くなつて丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が薄くなつて弓なりに彎曲している。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○外面の底部には、回転箝切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○淡灰黄褐色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○口縁部をわずかに欠損している。
	1503	推定口径 9.2 器高 1.2 推定底部径 7.0	○口縁部はわずかに外側して斜め上方へ張り出し、端部は器壁が薄くなつて丸く仕上げている。 ○底部は平底で、中央部の器壁が薄くなっている。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○外面の底部には、回転箝切り痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に淡灰褐色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1%残存。
	1504	口径 8.1~ 8.3 器高 1.0~ 1.5 底部径 6.1~ 6.3	○口縁部の器壁は厚くなつて内側しながら斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底で、中央部の器壁が薄くなっている。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転箝切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○淡灰黄褐色。 ○口縁部の1箇所には、黒色に変色した部分が認められる。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
	1505	口径 8.6~ 8.8 器高 1.4~ 1.9 底部径 6.2~ 6.4	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、外面の端部には縫が存在して彎曲した面が認められる。 ○底部は平底であるが、中央部を欠損している。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○底部の中央部は欠損しているが、外面の残存部分には回転箝切り痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○全体に淡灰褐色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○底部の中央部を欠損している。
1506	口径 7.9~ 8.3 器高 1.3~ 1.5 底部径 6.1~ 6.7	○口縁部は器壁が厚くなつて内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、中央部の器壁が薄くなっている。 ○内面の器表面には、成形によって	○外面の底部には、回転箝切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○淡灰褐色。 ○口縁部の1箇所には、黒色に変色した部分が認められる。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。	

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
土 師 質 土 器	小皿		生じたと推定される凹凸が認められる。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。			
		1507	口径 8.6~9.1 器高 1.2~1.7 底部径 6.6~7.3	○口縁部は器壁が厚くなつて内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、中央部の器壁が薄くなつて弓なりに彫曲している。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○淡灰赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
		1508	口径 9.0~9.2 器高 1.3~1.5 底部径 6.2~6.5	○口縁部は斜め上方へ張り出し、端部は器壁が薄くなつて全体に丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が厚くなつて弓なりにわずかに彫曲している。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○淡灰赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ完形品であるが、口縁端部をわずかに欠損している。
		1509	口径 8.9~9.1 器高 1.0~1.4 底部径 6.0~6.5	○口縁部は器壁が薄くなつて内側しながら斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が厚くなっている。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。 ○外面の口縁部と内面全体は、回転などを施している。	○淡灰赤褐色。 ○外面の底部には、黒色に変色した部分が認められる。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○完形品。
		1510 1584		○口縁部は斜め上方へ張り出し、端部はいずれも丸く仕上げている。 ○口縁端部が内側するものや外側するものが認められる。 ○底部はいずれも平底であるが、器壁が弓なりに彫曲しているものが多い。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められるものが多い。	○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められるものが極めて多い。 ○外面の口縁部と内面全体は、いずれも回転などを施している。	○淡灰赤褐色、淡灰褐色、淡赤褐色を呈する。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○小破片のものがほとんどである。
瓦 器	高台付楕	1585	口径 15.5~15.6 器高 4.4~5.2 高台径 4.7~4.9 高台高 0.3	○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約2.0cm下位の部分には、鈎い線が認められる。 ○高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○内面は丁寧な横なでを行つて器表面を平滑にした後に、暗文を施している。 ○内面底部の暗文は、ほぼ平行する方向で直線的に施している。 ○内面の暗文は、底部にはほぼ平行する方向で直線的に施した後に、口縁部に横方向へ施している。 ○内面口縁部の暗文は、時計通り方向に施されている。 ○外面の口縁部は、指頭圧痕の上面に横なでを施しているが、指頭圧痕が残存している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凸凹になつて二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。	○内面の器表面は銀黒色、外面の器表面は黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ完形品であるが、口縁端部をわずかに欠損している。 ○和泉型。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓦器	1586	口径 15.6~16.0 器高 4.5~6.2 高台径 4.6 高台高 0.4	○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は器壁が薄くなつて丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約 2.0cm 下位の部分には、鈍い稜が認められる。 ○底部の器壁は、弓なりに弯曲している。 ○高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。 ○全体に歪んだ形態を呈している。	○内面は丁寧な横なでを行つて器表面を平滑にした後に、暗文を施している。 ○内面底部の暗文は、ほぼ平行する方向で直線的に施しているが、周辺部では鋸歯状を呈したり交叉したりしている。 ○内面口縁部の暗文は、横へ時計回り方向に施している。 ○内面の暗文は、底部へ直線的に施したもの後に、口縁部へ横方向に施している。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	○内面の器表面は銀黒色、外面の器表面は黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○外面の器表面の1箇所は、灰褐色部分が認められる。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ完形品であるが、口縁端部をわずかに欠損している。 ○和泉型。
	1587	口径 14.6~15.0 器高 4.2~4.9 高台径 5.2 高台高 0.4	○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はわずかに肥厚して短く外傾している。 ○外面の口縁端部より約 2.0cm 下位の部分には、鈍い稜が認められる。 ○底部の器壁は口縁部よりも厚く、弓なりに弯曲している。 ○高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○内面は丁寧な横なでを行つて器表面を平滑にした後に、暗文を施している。 ○内面底部の暗文は、ほぼ平行する方向で直線的に施しているが、交叉する方向に極めて細い暗文も認められる。 ○内面口縁部の暗文は、横へ時計回り方向に施している。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○内面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凹凸になって二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○口縁端部の1箇所と、底部から体部にかけての1箇所を欠損している。 ○和泉型。
	1588	口径 15.0~15.5 器高 4.0~5.0 高台径 4.5~4.6 高台高 0.3	○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は器壁が薄くなつて丸く仕上げている。 ○口縁部の器壁は、底部や体部よりも薄い。 ○外面の口縁端部より約 2.0cm 下位の部分には、鈍い稜が認められる。 ○高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○内面は丁寧な横なでを行つて器表面を平滑にした後に、暗文を施している。 ○内面底部の暗文は、ほぼ平行する方向で直線的に施している。 ○内面口縁部の暗文は、横方向へ密に施している。 ○内面の暗文は、まず最初に底部へ直線的に施した後に、口縁部へ横方向に施している。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○内面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凹凸になって二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。	○内外面とも器表面は、黒灰色部分と淡灰色部分に分離されている。 ○器壁断面は全体に灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○口縁端部の3箇所を欠損している。 ○和泉型。
	1589	口径 15.0~15.2 器高 3.9~5.5 高台径 4.2~4.4 高台高 0.3	○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は器壁がわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○底部の器壁は、口縁部や体部よりもやや薄くなっている。 ○外面の口縁端部より約 2.0cm 下位の部分には、鈍い稜が認められる。 ○高台は貼り付けで、断面が台形に	○内面は丁寧な横なでを行つて器表面を平滑にした後に、暗文を密に施している。 ○内面底部の暗文は、ほぼ平行する方向で直線的に施している。 ○内面口縁部の暗文は、横へ時計回り方向に密に施している。 ○内面の暗文は、まず最初に底部へ直線的に施した後に、口縁部へ横方向に施している。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ完形品であるが、口縁端部をわずかに欠損している。 ○和泉型。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓦器			近い形態に変形している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	している。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凹凸になって二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。	
	1590	口径 15.2~15.6 器高 4.1~5.3 高台径 4.1~4.2 高台高 0.3	○底部から口縁部にかけて内脣して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は器壁が薄くなつて丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より1.5cmから2.0cm下位の部分は、鈍い稜が認められる。 ○底部の器壁は、比較的薄くなつて弓なりに彎曲している。 ○高台は貼り付けで、断面が台形を呈している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を密に施している。 ○内面底部の暗文は、ほぼ平行する方向で直線的に施している。 ○内面口縁部の暗文は、横へ時計通り方向に密に施している。 ○内面体部の暗文は、幅が著しく太くなっている。 ○内面の暗文は、まず最初に底部へ直線的に施した後に、口縁部と体部へ横方向に施している。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凹凸になって二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。 ○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	○器表面は淡灰色を呈するが、外面口縁部の2箇所に黒灰色部分が認められる。 ○器壁断面は全体に灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○口縁端部と底部から体部にかけて、わずかに欠損している。 ○和泉型。
	1591	口径 14.4~14.9 器高 4.2~5.3 高台径 4.2 高台高 0.3	○底部から口縁部にかけて内脣して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は器壁が薄くなつて丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約1.5cm下位の部分には、鈍い稜が認められる。 ○底部の器壁は口縁部とほぼ同じ厚さで、体部よりも薄くなっている。 ○高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を密に施している。 ○内面口縁部の暗文は、横へ時計通り方向に密に施している。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凹凸になって二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。	○器表面は黒灰色を呈するが、内面の口縁部と外面の体部に、淡灰色部分が認められる。 ○器壁断面は全体に灰白色。 ○内面の器表面には、マンガンが付着している。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面の体部には、「×」印の墨書きが認められる。 ○口縁端部の2箇所を欠損している。 ○和泉型。
	1592	口径 14.9~15.0 器高 4.3~5.3 高台径 4.8~5.1 高台高 0.2	○底部から口縁部にかけて内脣して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は器壁が薄くなつて丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約1.6cm下位の部分には、鈍い稜が認められる。 ○底部の器壁は比較的薄くなり、口縁部とほぼ同じ厚さになつていている。 ○高台は貼り付けで、断面が台形を呈して厚くなっている。 ○全体に著しく歪んだ形態を呈している。	○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を密に施している。 ○内面に施された暗文の方向は、不規則で交叉している。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凹凸になって二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。	○外面の器表面は黒灰色を呈するが、淡灰色の部分も認められる。 ○内面の器表面は、黒灰色部分と淡灰色部分に分離している。 ○器壁断面は全体に灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ完形品であるが、口縁端部の1箇所を欠損している。 ○和泉型。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓦 器	高台付柄 1593 1 1611		<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。</li> <li>○口縁端部がわずかに外傾するもの(1601・1602・1604・1607)も認められる。</li> <li>○1593と1594の底部の器壁は、中央部がわずかに肥厚している。</li> <li>○外面の器表面には、いずれも鈍い穂が存在する。</li> <li>○1593と1594の高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。</li> <li>○1602の高台も貼り付けであるが、断面が台形を呈している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を施している。</li> <li>○内面底部の暗文は、ほぼ平行する方向で直線的に施している。</li> <li>○内面口縁部の暗文は、横方向に施している。</li> <li>○内面の暗文は、まず最初に底部へ直線的に施した後に、口縁部へ横方向に施している。</li> <li>○外面の口縁部は、いずれも全体に横なでを施している。</li> <li>○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凹凸になって二次的な調整は加えていない。</li> <li>○1593・1594・1602の高台の貼り付け部分は、いずれも全体に横なでを加えている。</li> <li>○1593と1594の外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表面は黒灰色を呈するものが多いが、淡灰色部分が認められるものも存在する。</li> <li>○器盤断面はいずれも灰白色である。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> <li>○いずれも小破片。</li> <li>○いずれも和泉型。</li> </ul>
小皿	1612	口径 8.6~9.0 器高 1.4~1.8 底部径 7.0~7.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部はわずかに外傾して丸く仕上げている。</li> <li>○底部は平底であるが、器壁が弓なりに弯曲している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、極めて細い線の暗文を施している。</li> <li>○内面底部の暗文は、鋸歯状に描かれている。</li> <li>○内面口縁部には、列点状を呈した暗文が認められる。</li> <li>○内面口縁部の暗文は、横方向に施している。</li> <li>○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。</li> <li>○外面の底部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凹凸になって二次的な調整は加えていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表面は全体に黒灰色、器盤断面は灰白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○完形品。</li> <li>○暗文が極めて細い線で描かれているから、精良型である可能性が強い。</li> </ul>
	1613	口径 8.6~8.7 器高 1.1~1.9 底部径 7.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。</li> <li>○底部は平底であるが、器壁が弓なりに著しく弯曲している。</li> <li>○全体に著しく歪んだ形態を呈している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を施している。</li> <li>○内面に描かれた暗文は、線の幅が不揃いになっている。</li> <li>○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。</li> <li>○外面の底部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凹凸になって二次的な調整は加えていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表面は全体に黒灰色、器盤断面は灰白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○ほぼ接合完形品。</li> <li>○和泉型。</li> </ul>
	1614 1 1619		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○底部は平底であるが、器壁が弓なりに弯曲しているものが多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を施している。</li> <li>○外面の口縁部は、いずれも全体に横なでを施している。</li> <li>○外面の底部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凹凸になって二次的な調整を加えていないものが多いが、1614は指頭圧痕の上面に指頭による粗い不定方向のなでを加えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表面は全体に黒灰色、器盤断面は灰白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> <li>○いずれも小破片。</li> <li>○いずれも和泉型。</li> </ul>

18) D-21

埴輪	円筒埴輪	1621 1622 1626 1628	タガ高 1.4~1.5 タガ幅 2.5 刷毛目 1cm間 8~9本	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面調整：第一次調整と第二次調整が認められる。</li> <li>○第一次調整：縱方向の刷毛目を施し、その後にタガの貼り付け予定部に浅い盛みをめぐらす。</li> <li>○第二次調整：突出度の高いタガの間に、横もししくは縱方向の刷毛目を施す。その後に指頭による横ナデでタガを調整する。</li> <li>○内面調整：第一次調整と第二次調整が認められる。</li> <li>○第一次調整：横方向の刷毛目を施す。</li> <li>○第二次調整：横もししくは斜め方向の刷毛目を施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：白色微砂を含む。全体的には微砂質である。</li> <li>○焼成：軟質に焼き上げる。</li> <li>○色調：内外面と断面は、共に黄褐色を呈する。</li> </ul>
----	------	------------------------------	---	--	---

器種	番号	法量	形態・手法の特徴	備考
埴輪	1623	タガ高 1.1 タガ幅 1.9 刷毛目 1cm間 不明	○内外面共に器表面が剥落して調整痕を殆ど留めないが、わずかに外面に縱方向の刷毛目を認める。 ○タガは突出度の高いもので、端部を若干上方に反らす。	○胎土：微砂質で中に白色砂粒を含む。 ○焼成：軟質に焼き上がる。 ○色調：内面と外面は共に淡灰黃色で、器壁断面は暗灰色を呈する。
	1624	タガ高 不明 タガ幅 1.5 刷毛目 1cm間 7本	○外面調整：第一次調整は不明であるが、第二次調整は認められる。 ○第二次調整：タガを貼り付けた後に横方向に断続的な刷毛目を施す。 ○内面調整：刷毛目を用いず、ナデもしくは指頭による調整か。	○胎土：微砂質で中に白色微砂を多く含む。 ○焼成：軟質に焼き上がる。 ○色調：内面は淡黄褐色。 外面は淡灰黃色。 器壁断面は灰色もしくは暗灰色を呈する。
	1625	刷毛目 1cm間 8本	○口縁部の小碎片である。 ○外面調整：第一次調整と第二次調整が認められる。 ○第一次調整：縱方向に刷毛目を施す。 ○第二次調整：口縁部は横ナデ仕上げを行う。 ○内面調整：第一次調整と第二次調整が認められる。 ○第一次調整：横方向に刷毛目を施す。 ○第二次調整：口縁部は横ナデ仕上げを行う。	○胎土：白色微砂を含む。微砂質である。 ○焼成：軟質に焼き上がる。 ○色調：内外面共に淡灰黃色を呈する。 器壁断面は灰褐色を呈する。
	1627		○基底部破片である。 ○外面調整：刷毛目を認めない。ナデ仕上げか。 ○内面調整：刷毛目を認めない。指頭によるナデ仕上げか。 ○底部調整：外面のみに板押え調整される。	○胎土：全体的に砂質粘土を用いる。中に白色砂粒を多く含む。 ○焼成：軟質である。 ○色調：内外面共に灰褐色を呈する。 器壁断面は淡灰色を呈する。
	1630 1636	タガ高 1.8 タガ幅 2.9 刷毛目 1cm間 9本	○外面調整：第一次調整と第二次調整が認められる。 ○第一次調整：縱方向の刷毛目を施し、タガの貼り付け予定部に浅い窪みをめぐらす。 ○第二次調整：タガ貼り付け予定部に突出度の高いタガをめぐらす。その後にタガとタガの間に横方向の刷毛目を連続的に施す。部分的には横刷毛目を施さない所もある。タガは横ナデで仕上げる。 ○内面調整：縱方向と横方向の刷毛目あるいは指頭による粗いナデ痕跡を認める。しかし、それらの調整痕跡に切り合ひ関係が認められない。	○胎土：全体的に微砂質で中に白色砂粒を含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に淡灰黃色を呈する。 外面に丹の塗布が認められる。
	1637 1639	刷毛目 1cm間 8本	○基底部破片である。 ○外面調整：第一次調整と第二次調整が認められる。 ○第一次調整：縱方向の刷毛目を施す。 ○第二次調整：横方向の刷毛目を連続的に施す。 ○内面調整：粗い指頭による横ナデ調整のほかに、縱方向の刷毛目調整痕が認められる。	○胎土・焼成・色調共に、上同じである。 ○内外面共に丹の塗布が認められる。
	1640	刷毛目 1cm間 9本	○口縁部の小碎片である。 ○外面調整：第一次調整と第二次調整が認められる。 ○第一次調整：縱方向の刷毛目を施す。 ○第二次調整：横方向に連続した刷毛目を施し、第一次調整の縱方向の刷毛目を消す。 ○内面調整：左下がりに斜め方向の刷毛目を施す。その上面に横ナデを施す。 ○口縁部上端面は、内外面調整終了後に押圧横ナデ調整が行われる。	○胎土：微砂質粘土を用い、中に白色微砂を含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は淡灰褐色。 外面は淡褐色。 器壁断面は灰色。
	1641 1645	タガ高 1.0 タガ幅 1.8 刷毛目 1cm間 9本	○外面調整：第一次調整と第二次調整が認められる。 ○第一次調整：縱方向の刷毛目を施す。タガ貼り付け部断面に浅い窪みをめぐらす。 ○第二次調整：横方向に刷毛目を断続的に施す。 ○タガは比較的の突出度の高いもので、横方向の刷毛目を施した後に横ナデ調整される。 ○内面調整：縦と斜め方向の刷毛目を施すが、第一次と第二次調整の判別は出来ない。	○胎土：同上。 ○焼成：同上。 ○色調：同上。
	1646 1648	刷毛目 1cm間 9本	○基底部破片である。 ○外面調整：横ナデによる底部調整後に縦方向の刷毛目を施す。	○胎土：同上。 ○焼成：同上。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態・手法の特徴	備考
埴輪			<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面調整：底部を横ナデした後に縦方向の刷毛目を施すもの（1646・1647）と、縱方向にナデるだけで粘土の雜ざりを残すもの（1648）がある。</li> <li>○口縁部の小破片である。</li> <li>○外面調整：1650は表面が剥落して調整痕を認めることがない。それ以外はいずれも縦方向の刷毛目を施し、後に口縁部のみ横ナデ調整される。</li> <li>○内面調整：横方向の刷毛目を施し、後に口縁部に横ナデ調整を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○色調：同上。</li> <li>○胎土：微砂質粘土を用い、中に白色砂を含む。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：内面は淡灰黃色。 外面は灰褐色。 器壁断面は灰褐色、もしくは淡灰色。</li> </ul>
	1649 1	刷毛目 1cm間 5本		
	1651	1650 - 1651 1cm間 8本		
円筒埴輪	1652 1	タガ高 タガ幅 刷毛目 1cm間 4本	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面調整：第一次調整としての縦方向の刷毛目が認められない。タガの貼り付け予定部に、浅い段が付けられる。</li> <li>○第二次調整：タガをめぐらした後に、横方向の刷毛目を施す。タガは横ナデで仕上げられる。</li> <li>○内面調整：横ナデもしくは横方向の刷毛目で調整される。</li> <li>○迷しは、第二次調整終了後に粘土が乾燥しない段階で円形にあけられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：微砂質粘土を用い、中に白色砂を含む。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：内外面共に淡黃褐色を呈する。 断面は灰色を呈する。</li> <li>○1649が同類</li> </ul>
	1655	1.0 1.6 1cm間		
1656		タガ高 タガ幅 刷毛目 1cm間 13本 粘土紐幅 2.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>○緩やかに外方に口縁部が開くもので、口縁部をわずかに外方に折り曲げる。</li> <li>○外面調整：第一次調整と第二次調整を認める。</li> <li>○第一次調整：細かい刷毛目を縦方向に施す。</li> <li>○第二次調整：タガ貼り付け後に口縁部に横方向の刷毛目を連続的にめぐらす。その後はタガと口縁部を横ナデにより仕上げる。</li> <li>○内面調整：指頭により器壁調整後に刷毛目を縦方向に施す。粘土紐接合痕を明瞭に残す。口縁部は横ナデにより仕上げる。</li> <li>○第二次調整後に円形の透しをあける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：微砂質粘土を用い、中に若干の白色微砂を含む。</li> <li>○焼成：良いが軟質である。</li> <li>○色調：内外面と断面は、いずれも黄灰褐色を呈する。</li> </ul>
	1657 1			
1661		タガ高 タガ幅 刷毛目 1cm間 2-3本	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部と胴部の小破片である。</li> <li>○外面調整：第一次調整と第二次調整が認められる。</li> <li>○第一次調整：縦方向の刷毛目を施す。</li> <li>○第二次調整：タガ貼り付け後に横方向の刷毛目をカキ目状に施す。タガは横ナデにより仕上げる。</li> <li>○内面調整：口縁部には横方向の刷毛目が比較的よく施されるが、胴部の一部には刷毛目が施されずにナデ痕跡のみを認めるもの（1659）もある。</li> <li>○第二次調整後に円形の透しをあける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：微砂質で、中に白色砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成：良好。硬質である。</li> <li>○色調：内外面共に淡褐褐色を呈する。 器壁断面は暗灰色を呈する。</li> </ul>
	1662	刷毛目 1cm間 3本		
朝顔形埴輪	1663	タガ高 タガ幅 刷毛目 1cm間 7本	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面調整：第一次調整と第二次調整が認められる。</li> <li>○第一次調整：縦方向に刷毛目を施す。</li> <li>○第二次調整：横方向にカキ目状の刷毛目をめぐらす。</li> <li>○内面調整：粘土紐巻き上げ痕跡を残すが、縦方向の刷毛目により調整する。</li> <li>○第二次調整後に円形の透しをあける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：微砂質で中に多量の白色微砂を含む。</li> <li>○焼成：軟質である。</li> <li>○色調：内外面共に淡茶色を呈する。 器壁断面は淡灰色を呈する。</li> </ul>
	1664			
桶形埴輪	1665 1666		<ul style="list-style-type: none"> <li>○外側する頸部には垂直に長く立ち上がる口縁部を付けるもので、頸部と口縁部屈曲部にタガをめぐらす。</li> <li>○口縁部は外方に短く折り曲げ、タガ状に端部をめぐらす。</li> <li>○内外面の調整は、表面剥落して調整痕を認めない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：微砂質粘土を用いるが、中に4.0mm大の砂粒を含む。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：内外面と器壁断面は、淡黄灰色を呈する。</li> </ul>
	1666			

器種	番号	法量	形態・手法の特徴	備考
埴輪	家形埴輪	1667 裾廻台高 4.0	○底部を欠損する。細かい縱方向の刷毛目を施し、その後に裾廻台を取り付ける。 ○内面には指頭圧痕を認める。 ○外面には丹の塗布痕跡が認められる。	は淡褐色を呈する。 器壁断面は暗灰色を呈する。
				○胎土：微砂質で白色微砂を含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に淡黄灰色を呈する。 器壁断面は淡灰色である。
				○胎土：微砂質で中に白色微砂を含む。 ○焼成：良好。 ○色調：外面は黄褐色。 内面は淡灰黄色。 器壁断面は暗灰青色。
須恵器	1669 刷毛目 1cm間 9本	○裾廻台を欠損する。細かい刷毛目を斜め方向に施し、外面の第一次調整をする。 第二次調整は、裾廻台を取り付けた後に上半のみに縱方向の刷毛目を施す。 ○窓は第二次調整後に長方形に開けられる。 ○内面は斜め方向と横方向の刷毛目で器表面を整える。	○胎土：微砂質粘土で、中に白色砂を含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に淡灰黄色を呈する。 器壁断面は黒灰色。	
中世陶器	1670 推定口径 51.0	○薄手の体部に分厚い頸部が続けられる。 ○頸部は大きく外に開き、口縁部に至る。 ○口縁部は外方に折り返されたもので、端部に稜線をもつ。	○体部の内外面は、同心円の叩きと並行叩きにより調整されている。 ○頸部内面には同心円の叩き目が残る。 ○口縁部内面は横ナデ調整である。 ○口縁部の外面上には3条の沈線がめぐり、その間に斜め方向の刺突文が施されている。 ○頸部はカキ目が粗い横ナデにより消されている。	○胎土：砂粒を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に灰青色、器壁断面は紫灰色。
播鉢	1671 推定口径 21.4 推定器高 47.6	○ほぼ球形の体部に、外方へ伸びる口縁部をもつ。 ○肩部上面に4個の把手が付けられる。 ○口縁端部には外方への折り返しや肥厚等は認められない。	○体部の内面には、同心円状の青海波が顕著に認められる。 ○外面の体部は、カキ目調整により仕上げられる。 ○口縁部の外面上には、横ナデ調整後に2条の波状文が施される。 ○肩部内面から口縁部にかけては、全体に横ナデ調整を施している。	○胎土：微砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面と断面共に灰色。 ○外面底部に焼台の痕跡。
	1672	○薄く外方に伸びて口縁部に至る。 ○口縁部は厚く肥厚し、端部を体部に直交させる。	○内面は横ナデ調整後に縦方向に1単位7本の条線が施される。 ○外面には重ね焼の痕跡を残し、全体に粗く仕上げる。 ○口縁部は横ナデ調整である。	○胎土：粗砂含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に紫灰色、器壁断面は淡紫灰色。 ○内面は磨滅。
	1673 器高 20.2	○平底の底部に、内側気味に外方に伸びる体部を続ける。 ○口縁部は内側上方に拡張し、端部を丸くおさめている。	○内面：横ナデ調整後、縦方向に1単位7本の条線が施される。 ○外面：指頭圧痕を多く残す。横ナデにより仕上げられるが全体に粗い。 ○口部外面に指頭圧痕を認める。	○胎土：粗砂含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は淡赤灰色、外面は暗灰黄色、器壁断面は淡赤灰色。 ○内面は磨滅。
	1674	○口縁端部は拡張せずに直線的に外方へ伸びる。	○内面は横ナデ調整後に縦方向に条線を施す。 ○外面は横ナデにより仕上げられる。	○胎土：微砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に暗灰色。
	1675	○体部は、直線的に外方へ伸びる。 ○口縁部には上方に拡張する端部を有する。	○内面は横ナデ調整後に縦方向に条線が施される。 ○外面は横ナデ調整により仕上げられる。	○胎土：砂粒を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は灰褐色、外面は暗灰褐色。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
中世陶器	擂鉢	1676	○体部は、緩やかな曲線を描いて口縁部に至る。 ○口縁部は上方に拉張し、下方に粘土を若干垂らす。	○内面は横ナデ調整後に縱方向に1単位6本の条線が施される。 ○外面は横ナデされるが、全体に粗く仕上げる。 ○片口部に指頭圧痕を残す。	○胎土：粗砂含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に黄灰色。
		1677	○口縁部を上方に拉張し、下方には粘土を垂らす。 ○口縁部は若干内傾する。	○内面は横ナデ調整後に縱方向に1単位6本の条線を施す。 ○外面は横ナデ調整である。	○胎土：粗砂含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に紫灰色。
		1678 - 1680	○器壁が厚くて、口縁部に至る。 ○口縁部は上方に拉張し、下方には粘土を垂らす。	○内面は横ナデ調整後に縱方向に条線を施す。1680は1単位6本の条線を施す。 ○外面は横ナデ調整である。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に茶褐色、器壁断面は紫色。
		1679	○口縁部を肥厚させ、端部を上方に拉張する。下方には粘土を垂らす。	○内面は横ナデ調整後に縱方向に1単位6本の条線を施す。 ○外面は横ナデ調整である。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に暗茶褐色。
		1681	○体部は、直線的に外方に伸びて口縁部を長く直立させる。 ○端部に平坦面をつくる。	○内面は横ナデ調整後に縱方向に1単位9本の条線を施す。 ○外面は横ナデ調整である。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に茶褐色。
		1682	○口縁端部は上方へ長く直立させる。	○内面は横ナデ調整後に縱方向の条線を施す。 ○外面は横ナデ調整である。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：暗褐色。
		1683	○口縁端部は上方へ長く直立させる。 ○口縁端部には内傾する面を有する。 ○口縁の外面には、浅い沈線をめぐらす。	○口縁部は外方への折り返しにより拉張される。 ○内面は横ナデ調整後に縱方向の条線を施す。 ○外面は横ナデ調整である。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面と器壁断面は共に紫灰色。
		1684	○薄い体部に器壁の厚い口縁部をつける。 ○口縁部は端部上面を内傾させている。 ○口縁部外面の器表面は、凹凸が著しい。	○内面は横ナデ調整後に縱方向に1単位8本の条線を密に施す。 ○外面は横ナデ調整である。	○胎土：砂粒を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に赤灰褐色、器壁断面は淡青灰色。
広口壺	1685		○円柱状の体部に、短く内傾する肩部をつくりて口縁部に統する。 ○口縁部は短く直立するもので、端部に平坦面をつくる。	○内外面共に横ナデ調整により仕上げられる。 ○内面には細かい凹凸を残す。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に暗紫灰色。器壁断面は紫灰色。
	壺	1686	推定口径11.0 器高 25.4 推定底部径 14.7	○肩部は、平底の底部から開き気味に上方に伸びる。 ○肩部から内側しながら頸部に統く。 ○頸部は外反気味に口縁部に統く。 ○口縁部は玉縁を呈する。	○内面には粘土紐の接合痕跡をよく残す。 ○内面下半には蓖削り痕跡が認められる。 ○内面下半から外面底部にかけては、横ナデ調整である。
外来磁器		1687	○綻やかに口頸部を上方に伸ばす。 ○口縁端部をわずかに外方に折り曲げる。 ○肩に耳をつける。	○内外面共に横ナデ調整である。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に暗緑灰色。
碗	1688	○体部は、内寄気味に上方に伸び、口縁端部をわずかに外方に折る。	○鉛灰色の釉薬を施す。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：器壁断面は灰白色。	
擂鉢	1689	○口縁部と底部を欠損している。 ○天目茶碗の形態に同じ。	○緑灰色の釉薬を施す。 ○底部外面は、蓖削り調整である。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：器壁断面は淡灰色。	
中世陶器	擂鉢	1690	○口縁部を直立させる。 ○口縁端部を肥厚させて丸くおさめる。	○内面は横ナデ調整後に縱方向に条線を施す。 ○外面は横ナデ調整である。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に赤褐色、器壁断面は紫灰色。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
中世陶器	標鉢	1691	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内唇気味に口縁部へと至る。</li> <li>○口縁部は厚く肥厚し、内傾する面を有する。</li> <li>○口縁外面に凹凸を残す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は横ナデ調整後に縱方向に1単位10本の条線を密に施す。</li> <li>○外面は横ナデ調整である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：精選粘土。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：内外面と器壁断面共に紫灰褐色。</li> </ul>
土師質土器	土鍋	1692 1693	<ul style="list-style-type: none"> <li>○平底の底部に丸味を帯びた胴部が続き、口縁部に至る。</li> <li>○口縁部は「く」字状に外方に折れ曲がり、端部をさらに外方へ伸ばす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は横方向に刷毛目を施す。</li> <li>○外面は全体に粗い縱方向の刷毛目を施す。</li> <li>○外面底部に横または斜め方向の刷毛目を施す。</li> <li>○口縁部は横ナデ調整である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：微砂質。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：赤褐色もしくは黄褐色を基調とする。</li> </ul>
中世陶器	皿	1694 1695	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器壁の厚い底部に薄い体部を統け、口縁部に至る。</li> <li>○口縁端部上面には、浅い溝みをめぐらす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部の高台は、窓による削り出し調整である。</li> <li>○内面は外面底部近くまで淡灰緑色の釉薬をかける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：砂質粘土。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：器壁断面は淡灰褐色。</li> <li>○唐津系陶器。</li> </ul>
土師質土器	羽釜	1696	<ul style="list-style-type: none"> <li>○球形状の体部にタガ状の突部をめぐらす。</li> <li>○口縁部は丸くおさめている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面共に横ナデ調整である。</li> <li>○外面下半に煤が付着する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：微砂質。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：内面は淡灰色、外面と器壁断面は黒色。</li> </ul>
	皿	1697	<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部は丸味を帯びて口縁部に至る。</li> <li>○口縁端部は丸くおさめている。</li> </ul>	○内外面共に横ナデ調整である。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：精選粘土。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：内外面と器壁断面は共に淡黄褐色。</li> </ul>
中世陶器	甕	1700 1701 1702	<p>推定口径59.5 推定胴部最大径 79.0</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○器壁の厚い底部を上方に統け、肩部を大きく内脣させる。</li> <li>○口縁部は肩部から「く」字状に外反させ、上方へ伸びる。</li> <li>○口縁部は長く外方に折り返されたもので、外面に凹凸をめぐらす。</li> </ul> <p>推定口径53.0</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○胴部は内脣しながら頸部へ至る。</li> <li>○口縁部は「く」字状に外方へ折れ、上方へ口縁部を伸ばす。</li> <li>○口縁部は長く外方に折り返されたもので、外面に凹凸をめぐらす。</li> </ul> <p>推定口径59.5</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○同上。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面下半に同心円状の叩き目と指頭圧痕状の溝みを残す。上半に横方向の板目を残す。それ以外は横ナデ調整である。</li> <li>○外面は横ナデ調整である。頸部から肩部にかけては、暗緑灰色もしくは淡緑灰色の自然釉が付着している。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は縱方向と横方向に粗い板目が施される。その上面は横ナデ調整される。</li> <li>○外面は横ナデ調整である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：微砂質。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：内外面共に暗茶色、器壁断面は淡灰色。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：微砂質。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：内外面共に暗灰茶色、器壁断面は暗灰褐色。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：精選粘土。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：内面は明茶色、外面は暗茶褐色、器壁断面は淡灰紫色。</li> </ul>
外来磁器	皿	1703 1704 1705	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に薄作りである。</li> <li>○体部を内脣気味に上方へ伸び、さらに口縁部を外反させる。</li> <li>○高台は断面が逆三角形状を呈する。</li> </ul> <p>口径 9.5 器高 2.1</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○体部を内脣させ、口縁部を緩やかに外反させる。</li> <li>○高台は断面が逆三角形状を呈する。</li> </ul> <p>口径 9.8 器高 7.2</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○体部は、器壁の厚い底部から垂直に上方に伸び、口縁部を外に若干外反させる。</li> <li>○高台は逆台形を呈する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○高台は削り出し高台を呈する。</li> <li>○外面の口縁部と底部の染付重團文間に唐草文を染付ける。</li> <li>○内面は口縁部と見込みに重團文を染付ける。</li> </ul> <p>口径 9.5 器高 2.1</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○高台は削り出し高台を呈する。</li> <li>○外面に退化した唐草文を染付ける。</li> <li>○内面の見込み部分の重團文内に、花弁を染付ける。</li> <li>○全面に釉薬を施す。</li> </ul> <p>口径 9.8 器高 7.2</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の口縁部に1単位9本の籠描き沈線が粗く付けられる。</li> <li>○体部外面には、風景を図化して染付けている。</li> <li>○高台は削り出して、砂高台を呈する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○染付けの色調は淡い藍色。</li> <li>○釉薬は透明釉。</li> <li>○景德鎮窯系か。</li> </ul> <p>口径 9.5 器高 2.1</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○染付けの色調は淡い藍色。</li> <li>○釉薬は淡い白色。</li> </ul> <p>口径 9.8 器高 7.2</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○染付けの色調は淡い藍色。</li> <li>○釉薬は透明釉。</li> </ul>

## 第6章 百間川当麻遺跡

### 19) 井戸2

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
中世陶器	1707		○体部から口縁部へと外方に直線的な伸びをみせ、体部にはば直交する口縁端部をもつ。 ○口縁端部は、上下に若干の拡張をみせる。	○外面：縱方向に印き状の沈線が施され、その後に、横ナデ調整される。 ○口縁端部と内面は、横ナデにより仕上げる。 ○1単位9本の条線が施される。	○粘土：細砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は紫灰色、外側は黒灰褐色、器壁断面は紫色と黒灰色の互層になっている。 ○内面下半は磨滅が著しい。
	1708		○内側気味に口縁部へ至りほぼ体部に直交する口縁端部をもつ。 ○口縁端部に、上下の拡張を認めない。	○内外面共に横ナデにより調整される。 ○外面には指紋やナデ等の痕跡をよく残す。	○粘土：粗い砂粒を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に赤褐色。 ○内面下半は磨滅が著しい。
	1709		○体部から口縁部にかけて外開き気味に伸びる。 ○口縁端部は、体部にはば直交するもので、上方に若干拡張する。	○内外面共に横ナデ調整が施されるが、外側に指紋やナデ等の痕跡をよく残す。 ○内面には1単位7本の条線が施される。	○粘土：大粒の砂粒を含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に灰青色、器壁断面は灰色と赤褐色の互層である。
	1710		○やや内側気味に口縁部へと至る。 ○口縁端部は、体部にはば直交する。	○内外面共に横ナデによる調整をうけるが、外側に指紋やナデ痕等をよく残す。 ○内面は横ナデ後に条線をつける。 ○条線は1単位7本。	○粘土：砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は淡赤褐色、外側は暗灰色。
	1711		○体部から口縁部にかけて外方にまっすぐ伸びる。 ○口縁端部は、体部に対してほぼ直交する。	○横ナデ調整の後に、内面に比較的深い条線をつける。	○粘土：細砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に茶褐色。
	1712		○直線的に口縁部へ至る。 ○口縁端部は、体部に対してほぼ直交する。 ○口縁端部近くで器壁の厚さを若干増す。	○横ナデ調整後、内面に条線をつける。	○粘土：細砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は暗灰褐色、外側は暗赤褐色、器壁断面は暗赤褐色。
	1713		○緩やかに口縁部を内側させる。 ○口縁端部は、体部に対してほぼ鋭角的に上方へ伸びる。	○横ナデ調整後、内面に条線をつける。	○粘土：長石を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は淡茶灰色、外側は黒灰色、器壁断面は灰褐色。
	1714		○体部は、内側気味に外方に伸び、口縁部へと至る。 ○口縁部は、体部に対してかなり鋭い角度の端部をもち、若干下方に粘土を垂らす。	○内外面横ナデ調整後、片口をつくる。片口部外面に指頭痕跡を残す。 ○内面に条線をつける。	○粘土：微砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に暗茶色。
	1715		○体部は、口縁部まで外方に直線的に伸びる。 ○口縁端部は、上方に若干拡張する。	○内面から口縁端部下半まで、丁寧な横ナデを施すが、端部下半にはナデ後の指紋を多く残す。	○粘土：微砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に暗赤褐色。
	1716		○内側しながら若干、外開きに上方に伸びる。 ○口縁端部は、体部に斜交して、上下に若干の拡張をする。	○内面は丁寧な横ナデの後に、1単位8本の条線をつける。 ○外面には、体部形成時の凹凸と指紋を多く残す。	○粘土：細砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に暗茶灰色、器壁断面は暗褐色と灰色の互層である。
	1717		○体部は、直線的に外方に伸びる。 ○口縁端部は、上方に長く拡張する。	○内面は、横ナデ後に比較的浅い条線がつけられる。 ○外面は粗く仕上げる。 ○口縁端部下方への粘土の垂れは、横ナデにより押さえられる。	○粘土：粗砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は淡灰茶色、外側は灰茶色、器壁断面は暗赤褐色。
	1718		○体部は、内側気味に外方向に伸び、口縁部へと続く。 ○口縁部に片口をつくる。 ○口縁端部は体部に斜交し、下方に	○内面は、丁寧な横ナデ後に比較的浅い条線をつける。 ○外面は粗い仕上げで、指紋やナデ痕を多く残す。	○粘土：粗砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に暗灰色、器壁断面は灰色と赤褐色の互層

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
中世陶器	擂鉢		粘土を若干垂らす。	○片口部外面に、形成時の指紋をそのまま残す。	である。
		1719	○体部は、直線的に外に開くもので、口縁近くで器壁の厚さを増す。 ○口縁端部は、もっぱら上方に拡張される。	○内面は横ナデ調整され、その後に比較的深い条線がつけられる。 ○外面には指頭圧痕やナデ痕跡等をよく残す。	○胎土：粗砂を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は明灰褐色、外面は暗灰褐色、器壁断面は暗紫色。
		1720	○体部は、底部から緩やかに外方に開き、やや内萼気味に口縁部へと至る。 ○口縁端部を若干内傾させる。	○内面は横ナデ調整後に1単位8~9本の条線を浅くつける。 ○外面の底部付近に、窓削りが施される。	○胎土：微砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面と器壁断面は共に赤灰褐色。 ○内面は磨滅が著しい。
		1721	○口縁部を上方に拡張させ、下方にも粘土を垂らす。	○内面は横ナデ調整後に、1単位9本の条線を比較的浅くつける。 ○外面には指紋やナデ痕等を残す。	○胎土：粗砂含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に暗茶褐色。
		1722	○体部は、器厚を増しながら外方に伸びる。 ○口縁部は比較的長く拡張する。	○内面は横ナデ調整後に、1単位8本の条線をつける。 ○外面は粗く仕上げる。	○胎土：微砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に暗茶褐色。
		1723	○「く」字状に内傾する口縁部をもつ。 ○口縁部は、上方に長太く拡張し、下方にも粘土を垂らす。	○内面は横ナデ後に条線をつける。 ○外面は成形時の凹凸をよく残す。	○胎土：2.0~3.0mmの砂粒を含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は淡茶色、外面は暗灰青色。 ○口縁端部は磨滅が著しい。
		1724	○体部は、直線的に外方へ伸び、口縁部に至る。 ○口縁端部を上方に拡張させ、下方にも若干粘土を垂らす。	○内面は横ナデ調整後に1単位7本の条線を浅くつける。 ○粘土紐の巻き上げ痕跡を残し、さらに調整時の指紋やナデ痕跡を残す。	○胎土：砂粒を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に暗紫褐色。 ○内面の器壁は磨滅が著しい。
		1725	○体部は、やや内萼気味に外方に伸びる。 ○口縁端部を上方に拡張させる。	○内面は横ナデ調整後に1単位9本の条線を深くつける。 ○外面は指紋やナデ痕跡をよく残す。	○胎土：砂粒を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に灰色を基調としている。
		1726	○器壁の厚さを増しながら体部を上方に伸ばし、口縁部に至らす。 ○口縁部は上方へ拡張し、下方にも粘土を若干垂らす。	○内面は横ナデ調整後に1単位7本の条線をつける。 ○粘土紐の巻き上げの痕跡をよく残す。	○胎土：砂粒を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：暗茶灰色を基調とする。
		1727	○体部は、外方に直線的に伸び、口縁付近で器壁の厚さを増す。 ○口縁部は、長く上方に拡張する。	○内面は横ナデ調整後に細目で浅い条線をつける。 ○外面には、指紋やナデ等の痕跡を残す。	○胎土：大粒の砂粒を含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面と器壁断面は共に淡灰褐色。
		1728	○体部は、逆「ハ」字状に外方に伸びる。 ○口縁部は、長く上方に拡張される。 ○口縁端部は、丸くおさまる。	○内面は横ナデ調整後に1単位7本の条線が深くつけられる。 ○外面には粗いナデ痕跡や指紋を残す。	○胎土：砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は淡紫灰色、外面は暗紫灰色、器壁断面は淡紫灰色。
		1729	○体部は、口縁部付近で器壁の厚さを増し、端部を上方に伸ばす。 ○口縁部下半は、外方に丸くおさまる。	○内面は横ナデ後に1単位6本の条線が浅めにつけられる。 ○外面はナデ痕跡を粗く残す。	○胎土：砂粒含む。 ○焼成：不良。 ○色調：内外面と器壁断面は共に黄灰褐色。
		1730	○体部は、緩やかに外反しながら口縁部に至る。 ○口縁部は、長く上方に拡張される。	○内面は横ナデ後に条線を深くつける。 1単位6本。 ○外面は横ナデ調整されるが、粘土紐の痕跡を残す。	○胎土：粗砂含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は暗茶灰色、外面は淡紫灰色。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
中世陶器	1731		○体部は、直線的に口縁部へ続く。 ○口縁部は、内傾して端部を丸くおさめる。 ○口縁端部下半は、粘土を下に垂らす。	○内面は横ナデ調整後に深めに条線をつける。	○粘土: 白色砂を含む。 ○焼成: 良好。 ○色調: 内面は灰褐色、外面は明灰黄色、器壁断面は灰褐色。 ○口縁端部は著しく磨滅。
	1732		○体部は、内巻気味に口縁部に至る。 ○口縁部は、内傾して端部を平坦につくる。 ○口縁部下に粘土を少し垂らす。	○内面は横ナデ調整後に不規則な条線を深くつける。本数不明。 ○外面は横ナデされるが、やや粗めに仕上げる。	○粘土: 精選粘土。 ○焼成: 堅鍛。 ○色調: 内外面共に暗紫灰色。
	1733		○口縁部を上に長く拡張させ、下半を鋸く外方に伸ばす。	○内面は粗い横ナデ後に条線をつける。 ○外面は横ナデによって仕上げる。	○粘土: 砂粒を多く含む。 ○焼成: 良好。 ○色調: 内面は暗紫灰色、外面は暗灰褐色、器壁断面は暗赤灰色。
	1734		○体部は、直線的に外に伸び、ほぼ直立する口縁部をもつ。 ○口縁部は内側に屈曲し、端部を肥厚させる。	○比較的細くて浅い条線を、内面の横ナデ後につける。 ○外面は横ナデによって仕上げる。	○粘土: 精選粘土。 ○焼成: 堅鍛。 ○色調: 内面は紫灰色、外面は灰色、器壁断面は紫灰褐色。
	1735		○体部は、粘土紐の巻き上げ痕跡を残して口縁部に至る。 ○口縁部は内傾してかなり長く上方に拡張させる。 ○口縁端部は内傾する。	○内面は横ナデ調整後に1単位9本の条線を太く深くつける。 ○外面には粘土紐の痕跡を明瞭に残す。	○粘土: 精選粘土。 ○焼成: 堅鍛。 ○色調: 内外面共に紫灰色。
	1736		○体部は、器壁の厚さを増しながら外方に伸びる。 ○口縁部はほぼ直立し、端部を丸くおさめる。	○内面は横ナデ後に条線をつける。 ○外面の口縁下位は粗い横ナデが施されるが、粘土紐巻き上げの痕跡をよく残す。	○粘土: 大粒の砂粒を含む。 ○焼成: 堅鍛。 ○色調: 内面は紫灰色、外面は暗灰褐色、器壁断面は紫灰色。
	1737		○体部は、かなり厚手につくられて口縁部へ続く。 ○口縁部は長く内傾し、端部を丸くおさめる。 ○口縁下端は、鈍く外方に張り出す。	○内面は横ナデ調整後に縦方向と斜め方向に条線がつけられる。 ○外面は横ナデ調整である。	○粘土: 微沙質。 ○焼成: 良好。 ○色調: 内外面共に明茶褐色、器壁断面は淡茶褐色。
	1738		○長く直立する口縁部をもつ。 ○口縁部は端部を丸くおさめる。 ○口縁下端は、鈍く外方に出ている。	○内面は横ナデ後に比較的浅い条線をつける。 ○外面は横ナデにより仕上げる。	○粘土: 粗砂含む。 ○焼成: 良好。 ○色調: 内外面共に紫灰色。 ○内面に磨滅痕跡。
	1739 - 1741		○口縁部は長く上方に拡張する。 ○口縁端部は若干内傾する。	○内面は横ナデ後に条線をつける。 ○外面は粗く仕上げる。横ナデ。	○粘土: 粗砂含む。 ○焼成: 良好。 ○色調: 内外面と器壁断面は共に紫灰色。
	1740 - 1742		○体部は、器壁の厚さを増しながら口縁部へ続く。 ○口縁部は長く直立し、端部に平坦面をつくる。	○口縁端部は粘土紐を外方へ折り曲げる。 ○内面は横ナデ後に条線をつける。	○粘土: 精選粘土。 ○焼成: 堅鍛。 ○色調: 内面は暗褐色、外面は紫灰褐色、器壁断面は紫灰色。
	1743		○体部は分厚く、口縁部へと至る。 ○口縁部は緩やかに外傾しながら上方に拡張を続ける。 ○口縁下端の粘土を丸くおさめる。	○口縁部は粘土紐を外方へ折り曲げて形成している。 ○内面は横ナデ後に条線を施す。	○粘土: 粗砂含む。 ○焼成: 良好。 ○色調: 内外面と器壁断面は紫灰色。
	1744 - 1749 1754 1756		○分厚い口縁部を長く直立させる。 ○口縁端部は平坦面をつくる。	○内面は横ナデ調整後に条線を施している。 ○外面は粗く仕上げる。ナデ痕跡や指紋を多く残す。	○粘土: 精選粘土。 ○焼成: 良好。 ○色調: 紫灰色を基調にしている。
	1750	推定口径30.0 器高 12.0 推定底部径	○体部は、薄手の平底から厚く外方に伸びる。 ○体部上半から緩く外反して口縁部に至る。	○内面は横ナデ調整後に1単位11本の条線を縦と斜め方向に施す。 ○外面は横ナデにより仕上げられるが、	○粘土: 精選粘土。 ○焼成: 良好。 ○色調: 内面は黄灰色、外面は

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
中世陶器		14.3	○口縁部は長く直立し、端部に内傾する面をつくる。	下半にナデ痕跡を多く残す。	紫灰褐色、器壁断面は紫色。 ○内面底部は磨滅。
	1751		○底部から口縁部にかけて直線的に外方へと伸び、器壁の厚さを増して口縁部を直立させる。 ○口縁部は内彎気味に拡張し、端部を平坦にする。	○内面は横ナデ調整後に1単位8本の条線が施される。 ○外面は横ナデ仕上げされるが、粘土紐の巻き上げ痕跡をよく残す。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は暗灰色、外面は褐色、器壁断面は紫灰褐色。
	1752		○体部は直線的に外方に伸び、直立する口縁部をもつ。 ○口縁部は端部を肥大させ、平坦面を若干内傾させる。	○内面は横ナデ調整後に1単位8本の条線を比較的深くつける。 ○外面は横ナデ仕上げである。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は暗茶色、外面は灰色、器壁断面は淡灰黄色。 ○内面に磨滅痕跡。
	1753		○口縁部は長く直立する。 ○口縁端部は若干内傾している。	○内面は横ナデ調整後に太めの条線を施す。 ○外面は横ナデによる仕上げである。	○胎土：微砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は暗灰色、外面は灰色、器壁断面は暗灰褐色。
	1755		○体部は直線的に外方に伸び、極めて長く口縁部を直立させる。 ○口縁部は内傾する面をもち、断面三角形の稜線をめぐらす。	○内面は横ナデ調整後に直線と斜線の条線を施す。 ○外面は口縁部に浅い沈線をめぐらす。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に紫灰色、器壁断面は紫褐色。 ○内面に磨滅痕跡。
	1757		○体部は直線的に外方に伸び、内彎気味の口縁部に至る。 ○口縁部外面には凹凸を残している。	○口縁部は粘土紐を外に折り曲げている。 ○内面は横ナデ調整後に1単位9本の条線をつける。	○胎土：微砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は紫灰色、外面は暗灰綠色。
	1758		○体部は薄く外方に伸びる。 ○口縁部は短く太いもので、端部を内傾させる。	○内面は横ナデ調整後に1単位7本の条線を施す。 ○外面は横ナデ仕上げである。	○胎土：微砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に暗褐色、器壁断面は灰色。
	1759		○体部は逆「ハ」字状に外方に伸び、口縁端部に平坦面をつくる。	○内面は横ナデ後に半円状の沈線をつける。 ○外面は横ナデである。	○胎土：微砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面と器壁断面は共に淡紫灰色。
	1760		○体部は内彎気味に外方に伸びるが、短く口縁部に至る。 ○口縁部は体部にはば直交する。	○内面は横ナデ後に条線をつける。 ○外面は横ナデ調整されるが、全体に粗く仕上げられる。	○胎土：白色砂粒を含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は灰褐色、外面は紫灰褐色、器壁断面は紫灰色。
	1761		○体部は短く外方に伸び、口縁部を直立させる。 ○口縁部には内傾する面を有する。	○内面は横ナデ調整後に1単位10本の深い条線を施す。 ○外面は横ナデにより仕上げる。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に暗灰色。 ○内面上半は磨滅が著しい。
瓶	1762		○体部は内彎して口縁部に至り、口縁部を内傾させる。 ○口縁部外面に凹凸を残す。	○内面は横ナデ調整後に条線を深めに粗く施す。 ○体部外面は粗く横ナデ仕上げされる。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に暗灰褐色。 ○内面は磨滅。
	1763		○体部から口縁部にかけて緩やかに外方に伸びるもので、内彎気味に端部を丸くおさめる。	○水引き成形される。 ○底部に糸切り痕跡を残す。	○胎土：微砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に淡赤灰褐色。 ○体部に墨書き。
	1764		○体部は、内彎して口縁部に至る。 ○端部を丸くおさめる。	○水引き成形される。 ○底部に糸切り痕跡を残す。	○胎土、焼成、色調共に上に同じ。
	1765		○体部は、大きく外方に開く。 ○端部を丸くおさめる。	○水引き成形される。 ○底部に糸切り痕跡を残す。	○同上

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
中世陶器	皿	1766	○体部は薄く外方に伸び、口縁端部を丸くおさめる。	○水引き成形される。	○粘土、焼成、色調共に前に同じ。
	脚付皿	1767	○体部は短く直立し、端部を平坦にする。 ○三足を有する。	○内外面共に横ナデにより調整される。 ○足は手づくねにより仕上げる。	○粘土：微砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に暗紫褐色。 器壁断面は灰白色。
碗	1768	推定口径 7.0 器高 5.1 推定底部径 6.6	○深い底部に厚く内傾する体部をもち、口縁を上方にわずかに引き上げる。	○内外面は横ナデされる。 ○外面は横ナデ後に手持ちによる粗い範削りを底部に施す。	○粘土：粗選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は灰褐色、外面は暗灰褐色、器壁断面は紫灰色。
亞	1769		○ほぼ直立する頸部に、口縁端部を外に若干折り曲げた口縁部を有する。 ○肩はあまり強らず丸みを帯びる。	○内外面共に横ナデ調整される。	○粘土：粗砂含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に淡茶褐色。
	1770	推定口径 14.4	○頸部は、外開きに口縁部に至る。 ○口縁部は端部を外に若干折り曲げる。	○内外面共に横ナデ調整されるが、頸部内面に指頭压痕を残す。	○同上。
	1771	推定口径 9.7 推定底部径 8.0	○丸味をもった体部に、やや外反気味の口縁部をつける。 ○底部は上げ底状を呈する。	○内外面共に横ナデにより仕上げられる。 ○外面は肩部に1単位4本の櫛状工具により波状文が施される。	○粘土：微砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は淡茶褐色、外面は淡紫灰色、器壁断面は暗灰褐色。
甕	1772		○外輪気味の頸部に、端部を大きく外に折り曲げた口縁部を有する。	○内外面共に横ナデ調整。	○粘土：微砂質。 ○焼成：不良。 ○色調：内外面と器壁断面は共に淡灰褐色。
	1773		○ほぼ垂直に長く立ち上がる頸部に、口縁端部を玉縁状に丸く折り曲げた口縁部を有する。	○内外面共に横ナデ調整である。	○粘土：微砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に淡茶灰色、器壁断面は灰白色。
	1774		○分厚く直立する頸部に、長く下方に折り曲げられた口縁部を有する。	○内面は横ナデにより仕上げられている。	○粘土：微砂質。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に淡灰色、器壁断面は淡緑灰色。
桶	1775		○体部は、内輪して口縁部に至る。 ○口縁部は短く外方に伸び、内側に受部をつくる。	○内面は粗い横ナデ仕上げである。	○粘土：粗選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内面は赤褐色、外面は黄灰褐色。
壺	1776		○わずかに外方に伸びた頸部に、端部を外に折り曲げた玉縁状の口縁部を有する。	○内面は頸部以下を粗いナデを施し、頸部から口縁までは横ナデ仕上げである。 ○外面は横ナデ仕上げである。	○粘土：粗砂含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面と器壁断面は共に灰褐色。
	1777		○緩やかに外反する頸部に、下方に垂れた玉縁の口縁部を有する。	○内面の頸部は比較的丁寧な横ナデ仕上げを施し、頸部下位は粗い板目がつく。 ○外面は横ナデ仕上げである。	○粘土：砂粒含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に紫灰色。
	1778		○内輪気味に立ち上がる頸部を、外に大きく折り曲げて玉縁状の口縁部をつくる。	○内外面共に横ナデ調整されるが、全体に粗く仕上げる。	○粘土：砂粒を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面と器壁断面は共に明紫灰色。
	1779		○ほぼ垂直に上方へ伸びる頸部に、長く下方に折り曲げられた口縁部を有する。	○内外面共に横ナデ調整である。	○粘土：白色砂粒を含む。 ○色調：内外面と器壁断面は共に紫灰色。
めんこ	1780 1783		○いずれも円形を呈する。	○備前焼大形品の破片を丸く打ち欠いて作られる。	

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
				○1780の一部に成形時の磨滅痕跡が認められる。	
外来磁器	1784		○体部は逆「ハ」字状に外方に伸びるもので、口縁をわずかに玉縁状に折り曲げている。	○全面に釉薬を施す。	○胎土：微砂質。 ○色調：内外面共に淡黄色、器壁断面は白色。
	1785	推定高台径 6.3	○約 1.0cmの高さに高台を削り出す。	○外面はすべて窓削りにより成形されている。	○色調：内外面と器壁断面は共に淡灰白色。
	1786 1789		○1789を除いて体部は直線的に外方に伸び、口縁端部を丸くおさめる。 ○1789は内唇気味に口縁に至る。	○外面は窓状工具により花弁が施され、その上面に淡青灰色もしくは淡緑灰色の釉薬が施される。	○色調：器壁断面は青灰色を基調にしている。
	1790 1792		○楕の底部である。 ○いずれも約 1.0cmの長い高台を有する。	○高台は削り出しにより成形されている。 ○外面は高台端部にまで淡緑色の釉薬を施す。	○色調：器壁断面は青灰色を基調にしている。
	1793		○同上	○高台は削り出しにより成形されている。 ○外面は白色釉薬を施す。	○色調：器壁断面は黒灰色。
	1791		○緩やかに内唇して外方に伸びる。 ○口縁部をわずかに外方に折り曲げる。	○横ナデによる調整後に淡白色の釉薬が施される。	○胎土：微砂質。 ○色調：器壁断面は白色。
	1794		○体部は内唇気味に外方に伸び、口縁部を外方に短く屈曲させる。	○内面および外面下半にまで鉄釉を施す。 ○外面大半は丁寧な窓削り調整を施している。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：器壁断面は暗灰色。
	1795		○天目茶碗の高台部を丸く打ち欠いている。	○底に「安」を朱で墨書きしている。	○胎土：微砂質。 ○色調：器壁断面は暗灰色。
中世陶器	脚付皿	1796	推定口径 13.0	○薄い底部に厚手の体部を続け、口縁部に至る。 ○口縁部は丸くおさめる。 ○底部端に3足をつける。	○体部内面に指頭圧痕を残す。 ○横ナデ調整後に底部端に3足を取り付ける。 ○外面は窓状工具により雷文や直線文が施される。
瓦質土器	甕	1797		○内傾気味の頸部に、端部を上下に拡張させる口縁部をもつ。 ○頸部以下は緩やかに下に広がり、撫肩を呈する。	○内面の口縁以下は、横方向の櫛目が施される。 ○外面は先ず縦方向に粗い櫛目がつけられ、頸部以下に格子の叩きを施す。 ○口縁部は横ナデ調整である。
	羽釜	1798		○球形の体部に、内傾気味の口縁部をつける。 ○体部には長い突帯がめぐらされる。 ○肩上面には焼成後の円孔を穿つ。	○内面の口縁部は、横ナデ後に斜め方向の刷毛目を施す。体部は横方向の刷毛目を施す。 ○外面は細かい縱刷毛目を施した後に、ナデによる調整を加えている。 ○鋲は横ナデにより仕上げる。 ○鋲より下位の体部には、縱刷毛目を残す。
	こね鉢	1799		○体部は薄い底部から内唇して、口縁部に至る。 ○口縁端部は平坦につくられる。	○内面は細かい横刷毛を施す。 ○外面は細かい縱刷毛により仕上げる。 ○口縁端部は横ナデである。
中世陶器	壺	1800		○外唇気味に玉縁の口縁に至るもので、短い頸部を有する。	○口縁端部は丸く外に折り曲げる。 ○内外面共に横ナデ仕上げである。
瓦質土器	甕	1801 1802		○外唇気味になって口縁部に至る。 ○口縁端部を上下に丸く拡張させる。	○内面剥落して調整が不明である。 ○外面は粗い櫛目が縦方向に施される。 ○口縁部は横ナデ仕上げである。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	土鍋	1803 1804	○大きく外方に張り出し、短い口縁部を有する。 ○口縁端部は拡張するもの(1804)としないものがある。	○1803は全体に粗い横ナデにより仕上げる。 ○1804の内面には横方向の刷目が施され、口縁部は横ナデ仕上げである。	○胎土:微砂質。 ○焼成:良好。 ○色調:1803は内外面共に灰色、1804は内外面共に黒灰色、器壁断面は灰色。
瓦質土器	こね鉢	1805 1807 1810 1814	○いずれも内湾気味に口縁部に至るもので、端部は内側よりに丸くおさめるもの(1807・1811・1814)と、端部上面に平坦面をつくるものの(1805・1810・1812)がある	○1807と1814の内面は不定方向のナデ仕上げである。それ以外は横ナデにより仕上げられる。 ○外面は粗く仕上げられる。	○胎土:精選粘土。 ○焼成:不良。 ○色調:内外面共に黒灰色、器壁断面は灰色。
土師質土器	土鍋	1806 · 1808	○口縁部は緩く外方に伸びる。端部を内側に伸ばすもの(1806)と、端部を水平にするもの(1808)がある。	○外面は粗い仕上げである。 ○内面は粗い刷毛目調整を施す。 ○口縁部は横ナデ仕上げである。	○胎土:微砂質。 ○焼成:不良。 ○色調:灰色を基調にしている。
		1809	○外反する口縁部に内耳を有する。	○外面は粗い仕上げである。 ○内面は横ナデ仕上げである。	○色調:内面は灰黄色、外面は黒灰褐色、器壁断面は赤褐色。
		1815	○緩やかに外方に伸び、口縁部を逆「し」字状に屈曲させる。	○内面は横方向の刷毛目が施されている。底部付近はさらに粗い刷毛目が施される。 ○外面は縦方向の刷目が粗くつけられる。下半には横方向の刷目が施される。 ○口縁部は横ナデにより仕上げる。	○胎土:微砂質。 ○焼成:良好。 ○色調:内外面共に暗茶灰色、器壁断面は明茶褐色。
		1816	○丸味をおびた肩部に、外反する口縁部を有する。	○内面は横方向の刷毛目を施す。 ○外面は粗い刷毛目を縦方向に施している。 ○口縁部は横ナデ調整である。	○胎土:粗砂含む。 ○焼成:不良。 ○色調:内面は淡灰茶色、外面は黒褐色、器壁断面は淡黄褐色。
		1817	○内側して口縁部に至る。 ○口縁部は外方に屈曲して短く、端部を丸くおさめる。	○内面は横方向の刷毛目調整を施している。 ○外面は指頭圧痕を多く残す。 ○口縁部は横ナデ調整である。	○胎土:粗砂含む。 ○焼成:良好。 ○色調:外面は淡灰色、外面は灰色、器壁断面は淡灰褐色。
		1818	○同上。	○同上	○焼成:良好。 ○色調:内外面共に黒灰色、器壁断面は灰色。
甕	1819	推定口径 32.0 推定肩部最大 径 36.8	○口縁部は、直立して長く上方に伸びるもので、端部上面を平坦にする。 ○肩部に繩状把手を対称して取り付ける。	○内外面共に横ナデ調整である。 ○内面に細かい刷毛目が残る。	○胎土:砂粒を多く含む。 ○焼成:良好。 ○色調:内面は暗灰色、外面は淡灰褐色、器壁断面は淡灰褐色。
瓦質土器	擂鉢	1820	○緩やかに外方に伸び、口縁部に至る。 ○口縁端部は内外方向に拡張する。 ○片口を有する。	○内面は横ナデ調整後に縦方向に条線を施す。 ○外面は縦方向に粗い板目が残る。	○胎土:微砂質。 ○焼成:不良。 ○色調:内面は暗灰色、外面は明灰褐色、器壁断面は明灰褐色。
土師質土器	高台付瓶	1821	○体部は丸味をもって外方に伸び、口縁部に至る。 ○口縁部は外方に小さく折り曲げたもので、玉縁を呈する。	○内外面共に横ナデ調整である。	○胎土:精選粘土。 ○焼成:良好。 ○色調:内外面と器壁断面は共に灰白色。
		1822	○緩やかに体部を外方に伸ばし、口縁部に至る。 ○口縁部は丸くおさめる。	○内外面共に横ナデ調整である。 ○外面下半に指紋を残す。	○胎土:砂粒含む。 ○焼成:良好。 ○色調:内外面と器壁断面は共に淡灰黄色。
		1823 · 1826	○体部は緩やかに外方に伸び、口縁部を丸くおさめる。 ○高台は断面が逆台形を呈する。	○内外面共に横ナデ調整である。 ○内面底部には重ね焼痕跡が認められる。	○胎土:砂粒含む。 ○焼成:良好。 ○色調:内外面と器壁断面は共に淡黄色。

器種		番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	皿	1825 1826		○部は、平底の底部から鈍角に外方に短く伸びる。 ○口縁部は丸くおさめる。	○内外面共に横ナデ調整である。 ○1825は外面底部に指頭圧痕を残す。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：1825は灰黄色、1826は淡黄褐色。
	小皿	1827	推定口径 8.6 器高 1.5	○部は分厚く、口縁部に至る。 ○口縁部は丸くおさめる。	○底部は糸切り仕上げである。 ○内外面は横ナデにより仕上げる。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：不良。 ○色調：内外面と器壁断面は共に黄褐色。
	皿	1828	推定口径10.0 器高 1.3	○部は大きく外方に伸び、口縁部に至る。 ○口縁部は丸くおさめている。	○全体に薄くつくられる。 ○外面底部に板目を残す。 ○外面底部を除いて全体に横ナデ調整である。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面共に灰白色、器壁断面は黒灰色。
	高台付椀	1829		○椀の底部を円形に打ち欠く。	○高台は貼り付けである。	○胎土、焼成、色調共に1821に同じ。

## 20) C地点の遺構に伴わない遺物

弥生式土器	壺形土器	1858		○斜め上方へ張り出した口縁の端部は、上下に拡張して面を有する。 ○頸部は短く直立して、器壁が厚くなっている。 ○胴部は欠損して不明であるが、器壁は薄くなっているようである。	○口縁端部の面には、4条の退化凹線が認められる。 ○口縁部と頸部は、内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の胴部は、横方向の窪削りを施している。	○全体に淡赤褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	1859			○斜め上方へ大きく張り出した口縁の端部は、上下に拡張して退化凹線が存在する面を有する。 ○口縁部の上端は、全体に丸く仕上げている。	○口縁端部の面には、3条の退化凹線が認められる。 ○内面全体と外面の口縁部は、横なでを施している。 ○外面の頸部には、縱方向の刷毛目が認められる。	○全体に赤褐色。 ○胎土には水滌粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。
	壺形土器	1860		○「く」字状に外反した口縁の端部は、断面が三角形を呈して上方へ拡張している。 ○頸部の器壁は、口縁部よりも厚くなっている。	○口縁端部と外面全体は、横なでを施している。 ○内面の口縁部は、横方向の短い単位の窪きを施している。 ○内面の頸部下位は、横方向の窪削りを施している。	○全体に淡赤褐色。 ○胎土には水滌粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。
	1861	推定底部径 10.0		○底部から胴部にかけて、円筒状に立ち上がる。 ○底部は平底で、わずかに上げ底を呈している。 ○底部の器壁は、粘土の接合部分が顕著である。	○内面は全体に縱方向の粗い窪削りを施している。 ○外面の器表面は、磨滅が著しくて調整が不明である。 ○底部の器壁は、後になって粘土を充填している。 ○外面の底部には、指頭圧痕が顕著に認められる。	○全体に淡褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面の底部には、黒斑が存在する。
	1862	推定底部径 6.0		○底部は平底で、器壁が厚くなっている。	○内面は全体に縱方向の粗い窪削りを施している。 ○外面の器表面は、磨滅が著しくて調整が不明である。	○全体に淡黄褐色。 ○焼成は全体に良好である。
	壺形土器	1863		○外脇して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、上下に拡張して中央部がわずかに窪んだ面が認められる。	○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の頸部下位は、横方向の窪削りを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	1864			○縦やかに外脇して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、上下に拡張して中央部が浅く窪んだ面を有する。	○内外面とも全体に横なでを施している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	1865			○口縁端部は上方へ大きく拡張して、2条の縦凹線が存在する面を有す	○口縁端部の外面には、2条の縦凹線が認められる。	○全体に淡赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弦生式土器			る。 ○口縁端部は全体に丸く仕上げている。	○内外面とも全体に横なでを施している。	○焼成は全体に良好である。
	1866		○外脣して斜め上方へ立ち上がった 口縁の端部は、上方へ拡張して中央部がわずかに腫んだ面が認められる。 ○口縁端部は全体に丸く仕上げている。	○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○内面の頸部より下位は、横方向の窪削りを施している。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	1867		○「く」字状に屈曲した口縁の端部 は、上方へ拡張して端部を丸く仕上げている。 ○全体に器壁は薄いが、頸部はわずかに肥厚している。	○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○内面の胴部は、横方向の窪削りを施している。 ○外面の胴部は、斜め方向の刷毛目が認められる。	○全体に淡褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	1868	底部径 3.5	○底部は平底である。	○内面は全体に縱方向の窪削りを施している。 ○外面には縱方向の刷毛目が認められる。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を含む。 ○焼成は全体に良好である。
台付直口壺形土器	1869	口径 7.6 器高 13.6 胴部最大径 13.8 脚端部径 13.6	○口縁部はわずかに外傾して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁部の器壁は、端部へ移行するにしたがって薄くなっている。 ○胴部は算盤珠状を呈し、最大径が中位よりやや上方に存在する。 ○脚部は短脚で、脚端部は大きく「ハ」字状に開いている。 ○脚端部はわずかに立ち上がるが、全体に丸く仕上げている。 ○脚部の円孔は、4箇所に認められる。 ○脚部と胴部は、脚柱部を胴部に刺し込んでいる。	○外面の器表面は、全体に磨滅が著しいために調整が不明である。 ○内面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の口縁部の上位には、2条の浅い凹線が存在する。 ○内面の胴部には、粘土の接合部分が明瞭に認められる。 ○内面胴部の上位には、指頭圧痕が顕著に認められる。 ○内面の脚柱部には、しづら痕跡が認められる。 ○内面の脚柱部と脚端部は、全体に横なでを施している。 ○円孔はいずれも外から内方向へ刺突している。	○全体に赤褐色。 ○粘土には水洗粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○復原完形品。
高杯形土器	1870		○口縁部はわずかに外傾して斜め上方へ大きく張り出し、端部は丸く仕上げている。 ○外面の口縁部には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。 ○杯部は斜め上方へ張り出し、口縁部へ移行するにしたがって器壁が薄くなっている。 ○脚部と杯部は、脚柱部を杯部に刺し込んでいる。	○杯部から口縁部の内面は、磨滅が著しくて調整が不明である。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の杯部は、全体に縱方向のなでを施している。 ○内面の脚柱部には、しづら痕跡が認められる。 ○外面の脚柱部は、縱方向の窪磨きを施している。	○全体に赤褐色。 ○粘土には水洗粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。
	1871 1872		○どちらも短脚である。 ○杯部と脚端部は、欠損して不明である。 ○脚部と杯部は、脚柱部を杯部に刺し込んでいる。 ○1871の脚部の円孔は、4箇所に認められる。	○1871は内外面とも器表面が磨滅して調整が不明である。 ○1872の脚柱部内面には、しづら痕跡が認められる。 ○1872の脚柱部外面は、横方向に短い単位の窪磨きを施している。 ○1871の円孔は、外から内方向へ刺突している。	○どちらも赤褐色。 ○粘土には水洗粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成はどちらも良好である。
土師器	1873	推定口径 14.0 推定器高 3.4	○底部から口縁部にかけて内脣して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。 ○底部の器壁は、口縁部よりも薄くなっている。 ○底部は丸底である。	○内面は全体に丁寧な横なでを施している。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の底部は、窪削りのままで二次的な調整は加えていない。 ○外面の器表面には、全体に丹塗りが施されている。	○内面は褐色、外面は全体に丹塗りが施されて淡赤色。 ○1.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成は全体に良好である。
須恵器	杯蓋	1874	○口縁端部は短く外脣して丸く仕上げている。	○内外面とも全体に回転なでを施している。	○全体に青灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須 恵 器			<ul style="list-style-type: none"> <li>○天井部から口縁端部へ移行するにしたがって、器壁が薄くなっている。</li> <li>○外面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>○焼成は全体に良好である。</li> </ul>
杯身	1875	推定口径 9.9 推定受部径 11.4 器高 3.5	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は外側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○受部は斜め上方へ短く張り出し、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○部体の器表面には、内外面とも成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に回転なでを施している。</li> <li>○外面の底部は窓削りのままで、二次的な調整は加えていない。</li> <li>○外面の底部以外は、全体に回転なでを施している。</li> <li>○ロクロの回転方向は、時計通りである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は茶褐色、外面は青灰色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は悪い。</li> <li>○約3%残存。</li> </ul>
杯蓋	1876	推定口径 15.6 推定器高 3.0 つまみ径 2.6 つまみ高 0.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>○天井部の器壁は、全体に平坦になっている。</li> <li>○口縁端部は屈曲して立ち上がり、外面に中央部がわずかに窪んだ面が認められる。</li> <li>○口縁端部は丸く仕上げている。</li> <li>○内外面とも器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が頗著に認められる。</li> <li>○天井部の中央には、上面が扁平なつまみが存在している。</li> <li>○つまみは天井部の中央に貼り付けている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の天井部は、全体に窓削りのままである。</li> <li>○外面の天井部以外は、全体に回転なでを施している。</li> <li>○ロクロの回転方向は、反時計通りである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に青灰色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○約1%残存。</li> </ul>
	1877 1 1879		<ul style="list-style-type: none"> <li>○1877年の天井部は、全体に平坦である。</li> <li>○口縁端部は屈曲して短く立ち上がり、外側に面を有する。</li> <li>○口縁端部はいずれも丸く仕上げている。</li> <li>○天井部から口縁端部へ移行するにしたがって器壁が薄くなっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1877年の外面天井部は、窓削りのままである。</li> <li>○外面の天井部以外は、全体に回転なでを施している。</li> <li>○1877のロクロの回転方向は、反時計通りである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1877と1879は全体に灰色、1878は全体に黒褐色。</li> <li>○1.5mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> </ul>
高台付杯身	1880 1885		<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部は斜め上方へ立ち上がるが、口縁端部はいずれも不明である。</li> <li>○高台はいずれも貼り付けで、断面が台形または四角形に近い形態を呈している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部は内外面とも全体に回転なでを施している。</li> <li>○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。</li> <li>○外面底部の高台より内側は、窓削りのままである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○いずれも青灰色または黒褐色。</li> <li>○1.5mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> </ul>
土 師 器	1886	口径 13.8 器高 3.8~ 4.4 高台径 8.2~ 8.5 高台高 0.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はわずかに外傾している。</li> <li>○口縁端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。</li> <li>○底部の器壁は、著しく薄くなっている。</li> <li>○内外面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が存在する。</li> <li>○高台は貼り付けで、断面が三角形に近い形態を呈し、接地面部分は丸く仕上げている。</li> <li>○全体に著しく歪んだ形態を呈している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な横なでを施している。</li> <li>○外面の部体から口縁部にかけては全体に横なでを施している。</li> <li>○高台の貼り付け部分は、横なでを加えている。</li> <li>○外面底部の高台より内側には、指頭圧痕が頗著に認められ、二次的な調整は加えていない。</li> <li>○内外面とも全体に丹塗りを施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に丹塗りを施しているために淡赤色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> </ul>
杯	1887		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は外側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○口縁端部へ移行するにしたがって器壁が薄くなっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に横なでを施している。</li> <li>○内外面とも全体に丹塗りを施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に淡赤色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> </ul>
羹	1888		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は外側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に淡黄白色。</li> <li>○1.5mm以下の砂粒を多く含む。</li> </ul>

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土 師 器			○胴部は内傾して立ち上がり、頸部に至る。	○内面の頸部直下には、指頭圧痕が顕著に認められる。 ○外面の胴部は、縱方向の粗いなでを施している。	○焼成は全体に良好である。
			○頸部で「く」字状に外反した口縁部は、外寄して斜め上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は丸く仕上げている。 ○内面の頸部には、稜が認められる。	○内面の口縁部には、構状工具の痕跡が横方向に施されている。 ○口縁端部と外面の口縁部は、全体に横なでを施している。	○全体に淡褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
土 師 質 土 器	土鍋	1890	○斜め上方へ張り出した口縁の端部は、わずかに肥厚して中央部が浅く窪んだ面を有する。 ○胴部の最大径は、頸部との境界部分に存在する。 ○胴部の器壁は、口縁部よりも薄くなっている。	○口縁端部は全体に横なでを施している。 ○内面の口縁部には、横方向に施された構状工具の粗い痕跡が認められる。 ○内面の頸部には、横または斜め方向の構状工具の痕跡が存在する。 ○外面は全体に縱方向の構状工具の痕跡が認められる。	○全体に淡褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面の頸部には、煤が付着して黒色に変色している。
		1891	○斜め上方へ張り出した口縁の端部は、わずかに肥厚して緩やかに彎曲した面が存在する。 ○胴部の最大径は、頸部との境界部分にも存在する。 ○胴部の器壁は、口縁部よりも薄くなっている。	○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の頸部には、横または斜め方向の構状工具の痕跡が存在する。 ○外面の頸部から頸部にかけて、指頭圧痕が存在する。 ○外面の頸部から頸部にかけては、指頭による不定方向の粗いなでを施している。	○全体に淡褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
		1892	○斜め上方へわずかに肥厚して張り出した口縁の端部は、全体に丸く仕上げている ○外面の口縁中央部の器壁は、わずかに肥厚して盛り上がっている。	○口縁端部と外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○内面の口縁部から頸部にかけて、横方向の粗い構状工具の痕跡が認められる。 ○外面の頸部から頸部にかけては、縱方向の構状工具の痕跡が認められる。	○全体に黒褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面には煤の付着が認められる。
瓦 質 土 器	土鍋	1893	○斜め上方へ肥厚して張り出した口縁の端部は、並張して中央部が浅く窪んだ面を有する。 ○胴部の最大径は、頸部との境界部分に存在する。 ○胴部の器壁は、口縁部よりも薄くなっている。 ○内面の頸部には、稜が認められる。	○口縁端部は全体に横なでを施している。 ○内面の口縁部には、横方向の細い構状工具の痕跡が認められる。 ○内面の頸部には、横方向の粗い構状工具の痕跡が存在する。 ○外面の口縁部から頸部にかけて、短い単位の横または斜め方向の構状工具の痕跡が認められる。	○内面は黒褐色、外面は黒灰色、器壁断面は黄灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○龜山焼。
土 師 質 土 器	土鍋支脚	1894 1896	○表面にはなでによって生じた純い稜がかすかに認められる。 ○断面は円形に近い形態を呈している。	○全体になでを施している。 ○頸部との接合部分には、指頭圧痕が顕著に認められる。	○いずれも褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
		1897 1908	○口縁部は内寄して斜め上方へ立ち上がり、端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約1.5cmから約2.5cm下位の部分には、いずれも純い稜が認められる。 ○外面の器表面に、成形によって生じたと推定される凹凸が認められるもの(1908)も存在する。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部は、指頭圧痕の上面に指頭による粗い不定方向のなでを施している。	○いずれも全体に淡黃白色。 ○粘土中には白色の細かい砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	高台付椀	1909 1917	○口縁部は内寄して斜め上方へ立ち上がり、端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○口縁端部が短く外傾するものが多い。 ○外面の口縁端部より約1.5cmから約2.5cm下位の部分には、いずれも純い稜が認められる。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部はいずれも横なでを施しているが、指頭圧痕が複数しているもの(1911)も認められる。 ○外体の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。	○いずれも全体に淡黃白色。 ○粘土中には白色の細かい砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	高台付碗 1918   1954	1942 高台径 6.6 高台高 0.9  1943 高台径 5.8~ 6.0 高台高 0.8	○底部から体部にかけて、内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○高台はいずれも貼り付けで、断面が台形または三角形を呈している。 ○高台の接地面部分は、いずれも丸く仕上げている。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○1922の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○高台の貼り付け部分は、いずれも全体に横なでを加えている。 ○外面部の高台より内側は、指頭圧痕や板目痕跡が残存しているものが多い。 ○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められるものが多い。	○全体に淡黄白色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	1955   1960		○底部から体部にかけて、内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○高台はいずれも貼り付けで、断面が細長い台形に近い形態または三角形を呈している。 ○高台の接地面部分は、いずれも丸く仕上げている。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面部の高台より内側は、指頭圧痕や板目痕跡が残存している。 ○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	○いずれも全体に淡黄白色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。
須恵質土器	椀 1961   1965		○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○内外面とも器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。	○内外面とも全体に回転なでを施している。 ○口縁端部の器表面には、重ね焼によって生じたと推定される黒色に変色した部分が認められるもの(1961~1964)が存在する。	○いずれも灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	1966   1968		○底部はいずれも平底で、わずかに上げ底を呈するもの(1966~1968)も存在する。 ○体部は斜め上方へ立ち上がる。 ○内外面とも器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められる。	○外面部の底部には、いずれも回転糸切り痕跡が存在する。 ○外面部の底部以外は、全体に回転なでを施している。	○いずれも灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○岡山県の南東地方で生産されたと推定される。
こね鉢	1969   1971		○斜め上方へ肥厚しながら立ち上がった口縁の端部は、上下に拡張して面を有する。 ○この器形の土器は、片口を有するようである。 ○内外面とも器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○内外面とも全体に回転なでを施している。 ○外面部の口縁端部には、重ね焼によって生じたと推定される黒色に変色した部分が存在する。	○1969は黒青色。 ○1970は灰色。 ○1971は青灰色。 ○2.0mm以下の砂粒を多量に含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○兵庫県明石市魚住古窯址群出土遺物に酷似。
小皿	1972   1974		○口縁部は肥厚しながら内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部はいずれも平底である。	○外面部の底部には、いずれも回転糸切り痕跡が存在する。 ○外面部の底部以外は、いずれも回転なでを施している。	○いずれも青灰色または灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
土師質土器	皿 1975	推定口径 14.0 器高 2.6~ 2.7 推定底部径 11.2	○斜め上方へ内側して立ち上がった口縁の端部は、内側へ肥厚して丸く仕上げている。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。 ○外面部の口縁端部より約 1.1cm下位の部分には、鈍い稜が認められる。 ○底部は平底であるが、弓なりに脣曲している。	○内面は全体に回転なでを施している。 ○外面部の口縁部は、全体に回転なでを施している。 ○外面部の底部には、板目痕跡が顕著に認められる。	○内外面とも全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は比較的少ない。 ○胎土中には赤色粒や白色粒に混在して、金雲母粒も認められる。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1/4残存。
			○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。	○内面はいずれも全体に回転なでを施している。	○いずれも全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	四 1976 1 1980		○口縁端部が短く外傾するもの(1978・1979)も存在する。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。 ○底部はいずれも平底であるが、弓なりに彫曲しているもの(1977)も存在する。	○外面の口縁部は、いずれも回転なでを施している。 ○外面の底部は、いずれも回転窓切りである。	○量は比較的少ない。 ○焼成はいずれも良好である。
			○斜め上方へ張り出した口縁の端部は、わずかに肥厚して全体に丸く仕上げている。 ○底部は平底である。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○内面は全体に回転なでを施している。 ○外面の口縁部は、全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。	○全体に灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1%残存。
	1981	推定口径 10.4 器高 1.8 推定底部径 7.0	○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、弓なりに彫曲している。 ○外面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○内面は全体に回転なでを施している。 ○外面の口縁部は、全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転窓切りを行っている。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
小皿	1983 1 2011	1990 口径 8.9~9.1 器高 1.2~1.5 底部径 7.6~8.0	○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部はいずれも丸く仕上げている。 ○口縁端部が内寄するものと、わずかに外傾するものがある。 ○底部はいずれも平底であるが、弓なりに彫曲しているものが多い。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められるものが多い。 ○全体に歪んだ形態を呈するものが多い。	○内面はいずれも全体に回転なでを施している。 ○外面の口縁部は、いずれも全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。	○全体に赤褐色を呈するものが多い。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。 ○1990は完形品。
			○口縁部は内寄して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が口縁部よりも厚い。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が存在する。	○内面は全体に回転なでを施している。 ○外面の口縁部は、全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転糸切り痕跡が顕著に認められる。	○全体に淡黄白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1%残存。
	2012	推定口径 8.4 器高 1.2~1.3 推定底部径 6.2	○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部はいずれも丸く仕上げている。 ○底部はいずれも平底であるが、弓なりに彫曲しているものも存在する。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が存在するものが認められる。	○内面はいずれも全体に回転なでを施している。 ○外面の口縁部は、いずれも全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が認められる。	○全体に赤褐色を呈するものが多い。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
土師器	杯	2071	○底部の小破片である。 ○底部はわずかに上部底を呈している。	○内面は全体に丁寧な横なでを施している。 ○外面の底部には、籠状工具の先端で施した凹線状の浅い溝みが認められる。 ○内外面とも全体に丹磨りを施している。	○全体に淡赤色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面の底部には、「高田」と墨書きされている。
土師質土器	高台付楕	2072	○底部の小破片である。 ○高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○高台の貼り付け部分は、横なでを加え	○全体に淡黄褐色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器	高台付椀			ている。 ○外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。 ○内部の底部には、重ね焼によって生じたと推定される高台の痕跡が認められる。	○外面底部の高台より内側には、梵字の墨書きが認められる。
	2073		○底部の小破片である。 ○高台は貼り付けである。 ○高台は貼り付け部分から剥離して存在しない。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。	○器表面は淡黄白色であるが、器壁断面は黒灰色。 ○外面底部の高台より内側には、墨書きの「〇」印が描かれている。
瓦器	高台付椀	2074 ↓ 2079	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁端部がわずかに外傾するもの(2079)も認められる。 ○外面の口縁端部より約1.0cmから約2.2cm下位の部分には、いずれも鈍い稜が認められる。	○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を施している。 ○外面の口縁部は、指頭圧痕の上面に横なでを行った後に、横方向の暗文を施している。 ○2074と2076の外面口縁部には、指頭圧痕が残存している。 ○2074から2079の外面体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。 ○2078と2079の外面体部は、指頭による粗い不定方向のなでを施している。 ○2079の外面体部には、横方向の暗文を施している。	○器表面は黒灰色、器壁断面はいずれも灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成はいずれも良好である。 ○外面の器表面にも暗文が存在するのが特徴である。 ○いずれも和泉型。
	2080 ↓ 2111		○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はいずれも丸く仕上げている。 ○口縁端部がわずかに外傾するものも認められる。 ○外面の器表面には、いずれも鈍い稜が存在する。	○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を施している。 ○内面底部の暗文は、ほぼ平行する方向で直線的に施している。 ○内面口縁部の暗文は、横方向に施しているものが多い。 ○外面の口縁部は、いずれも全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凹凸になって二次的な調整は加えていない。	○器表面は黒灰色のものが多いが、器壁断面は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成はいずれも良好である。 ○外面の器表面に暗文が存在しないものばかりである。 ○いずれも和泉型。
	2112 ↓ 2115	2113 推定高台径 4.8 高台高 0.4	○体部の器壁は、内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○高台はいずれも貼り付けで、断面が三角形を呈している。	○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を施している。 ○内面底部の暗文は、ほぼ平行する方向で直線的に施している。 ○2112の内面口縁部の暗文は、横方向に施している。 ○2112の内面の暗文は、まず最初に底部へ直線的に施した後に、口縁部へ横方向に施している。 ○2112と2115の外面体部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凹凸になっている。 ○高台の貼り付け部分は、いずれも全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、二次的な調整を加えていない。	○器表面は黒灰色、器壁断面はいずれも灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成はいずれも良好である。 ○いずれも和泉型。
小皿	2116 ↓ 2130		○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○口縁端部がわずかに外傾するものが多い。 ○底部は平底であるが、器壁が弓なりに彫曲しているものが多い。	○内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を施している。 ○外面の口縁部はいずれも全体に横なでを行っているが、さらに横方向の暗文を施しているもの(2124~2127)も認められる。 ○外面の底部には指頭圧痕が顕著に認められ、器表面が凹凸になっている。 ○外面の底部には、暗文が施されているものの(2124~2127)も認められる。	○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。 ○焼成はいずれも良好である。 ○いずれも和泉型と推定されるが、鋸齒文状の暗文を有する2123は、楠葉型かもしれない。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
外 来 磁 器	瓶	2131	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は外方へ折り曲げて玉縁状を呈している。</li> <li>○体部は斜め上方へ直線的に張り出し、口縁端部へ移行するにしたがって器壁が厚くなっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部外面は既で調整している。</li> <li>○器表面には淡灰緑色の釉薬を施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：精選粘土。</li> <li>○焼成：堅緻。</li> <li>○色調：器表面は淡灰緑色、器壁断面は灰白色。</li> </ul>
		2132	<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部から口縁部にかけて斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は短く外傾している。</li> <li>○口縁端部へ移行するにしたがって器壁が厚くなっている。</li> <li>○内面には1条の凹線状の浅い窪みがめぐらされている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に白色の釉薬を施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：精選粘土。</li> <li>○焼成：堅緻。</li> <li>○色調：器表面は白色、器壁断面は灰白色。</li> </ul>
	皿	2133	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は屈曲して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○口縁部が屈曲しているため、内外面に鋭い棱が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも淡灰緑色の釉薬を施しているが、外面の底部には認められない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：精選粘土。</li> <li>○焼成：堅緻。</li> <li>○色調：器表面は淡灰緑色、器壁断面と外面の底部は灰白色。</li> </ul>
中 世 陶 器	瓶	2134 ↓ 2137	<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部から体部にかけて内背して斜め上方へ立ち上がる。</li> <li>○底部の器壁は、いずれも体部よりも厚い。</li> <li>○2134と2137の内面には、1条の凹線状の窪みがめぐらされている。</li> <li>○高台はいずれも削り出しで、断面が逆台形を呈している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面全体と外面の口縁部には、淡灰色または淡灰緑色の釉薬が施されている。</li> <li>○外面の底部には、いずれも釉薬が認められない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：精選粘土。</li> <li>○焼成：堅緻。</li> <li>○色調：釉薬は淡灰色または淡灰緑色、器壁断面と外面の底部は灰白色。</li> </ul>
	壺	2138	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部は外方へ折り曲げられて、玉縁になっている。</li> <li>○胴部は内背して斜め上方へ立ち上がり、頸部に移行する。</li> <li>○内外面の器表面には、成形によって生じた凹凸が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に横なでを施している。</li> <li>○胴部の器壁断面には、粘土の接合部分が2箇所に認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：精選粘土に砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：茶褐色。</li> <li>○備前焼。</li> </ul>
近 世 陶 器	擂鉢	2139	<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部から口縁部にかけて直線的に斜め上方へ張り出し、口縁端部はわずかに上下に拡張して2条の擬四線状を呈する幅の広い窪みが認められる面を有する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な横なでを施した後に、8条を単位にした条線を放射状にめぐらせている。</li> <li>○口縁端部と外面全体は、横なでを施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：粗い砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：全体に赤褐色。</li> <li>○備前焼。</li> </ul>
		2140	<ul style="list-style-type: none"> <li>○肥厚しながら内書して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、上下に拡張して浅い四線状の窪みが認められる面を有する。</li> <li>○内外面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が存在する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な横なでを施した後に、6条を単位にした条線を放射状にめぐらせている。</li> <li>○口縁端部と外面全体は、横なでを施している。</li> <li>○器壁断面には粘土の接合部分が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：粗い砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：赤褐色。</li> <li>○備前焼。</li> </ul>
近 世 陶 器	擂鉢	2141	<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部から口縁部にかけて肥厚しながら直線的に斜め上方へ張り出し、口縁端部は下方に拡張して四線状の窪みが認められる面を有する。</li> <li>○内面の口縁端部には、鋭い棱が認められる。</li> <li>○内外面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が存在する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は横なでを施した後に、9条を単位にした条線を放射状に密にめぐらせている。</li> <li>○口縁端部と外面全体は、横なでを施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：大粒の砂粒を多量に含む。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：茶褐色。</li> <li>○備前焼。</li> </ul>

21) D-24

弥生式土器	2142		<ul style="list-style-type: none"> <li>○器壁が薄くなっている頸部で「く」字状に外反した口縁部は、斜め上方へ短く張り出している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体に丁寧な横なでを施している。</li> <li>○内面の胴部は、磨滅者がしくて調整が</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に淡褐色。</li> <li>○5.0mm以下の砂粒を含む。</li> <li>○赤色粒や豊雲粒も認められる。</li> </ul>
-------	------	--	--	---	--

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弥生式土器			○胴部の器壁は口縁部よりも厚く、内側して頸部に至る。	不明である。 ○外面の胴部には、斜め方向の刷毛目を施している。	○焼成は全体に良好である。
	2143		○口縁部は内側して短く斜め上方へ立ちあがり、端部は丸く仕上げている。 ○胴部の器壁は、内傾して斜め上方へ立ち上がる。	○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の頸部は、全体に横なでを施している。 ○内面の胴部は、磨滅が著しくて調整が不明である。 ○外面の頸部から胴部にかけては、全体に叩きの痕跡が存在する。	○内面は淡褐色、外面は赤褐色。 ○3.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	2144 2145		○「く」字状に外反した口縁部の端部は、上方へ大きく立ち上がって外面に極めて浅い擬凹線が認められる面を有する。 ○口縁端部はどちらも丸く仕上げている。	○外面の口縁部には、2条または3条の擬凹線が認められる。 ○口縁部と頸部は、内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の頸部下位は、横方向の窪削りを施している。	○どちらも淡褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はどちらも良好である。
	2146		○胴部は内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○底部は平底である。	○内面には指頭圧痕が認められる。 ○外面の胴部は、縱方向の荒磨きを施している。 ○外面の底部は、横方向の荒磨きを施している。	○全体に黒褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	2147		○口縁部は斜め上方へ直線的に大きく張り出し、端部は丸く仕上げている。 ○口縁部の器壁は、端部へ移行するにしたがって薄くなっている。	○内外面とも全体に横なでを施している。	○全体に乳白色。 ○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。

## 22) D-25

弥生式土器	2148		○口縁部は大きく外側して斜め上方へ立ち上がり、端部はわずかに肥厚している。 ○内面の口縁端部には、浅い窪みが認められる。 ○外面の頸部には、断面が三角形を呈する突帯が存在する。	○内外面とも全体に横なでを施している。 ○内外面とも器表面は、磨滅が著しくて部分的に剥離している。	○内外面とも全体に淡灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○長石粒や石英粒に混在して金雲母粒も認められる。 ○焼成は全体に良好である。
彫形土器	2149		○肥厚しながら外側して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、拡張して外面に2条の凹線が認められる面を有する。 ○外面の頸部には粘土紐を貼り付けた突帯が認められ、上面を窓状工具の先端で押圧している。	○内外面とも全体に横なでを施している。 ○口縁端部の上面には、2条の浅い凹線が認められる。	○全体に茶褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	2150		○胴部は内傾して斜め上方へ立ち上がり、頸部で逆「L」字状に屈曲して口縁部に至る。 ○器壁の厚い口縁部は、上方へ拡張して端部を丸く仕上げている。 ○内面の頸部には、縫が認められる。	○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○内面の胴部は、丁寧な不定方向のなでを施している。 ○外面の胴部は、全体に縱方向のなでを施している。	○全体に茶褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	2151		○内側して斜め上方へ立ち上がった胴部の器壁は、頸部で「く」字状に外反して口縁端部に至る。 ○口縁端部は上下にわずかに拡張して、外面に中央部が浅く窪んだ面が認められる。 ○内面の頸部には、縫が認められる。	○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○内面の胴部には指頭圧痕が認められ、丁寧な不定方向のなでを加えている。 ○外面の胴部には、縦方向の刷毛目が認められる。	○全体に茶褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位:cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弥生式土器	2152		○胴部は直線的に斜め上方へ立ち上がる。 ○底部は平底である。	○底部の器壁は、後に粘土を充填して内外面から押圧している。 ○内面の胴部は、全体に縱方向の蒐削りを施している。 ○外側の胴部は、全体に縱方向の蒐磨きを施している。 ○内面の底部には指頭圧痕が認められ、指頭による不定方向のなでを加えている。 ○外側の底部は、指頭圧痕の上面に不定方向のなでを加えている。	○全体に茶褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○粘土中には長石粒が多く存在する。 ○焼成は全体に良好である。
	2153		○胴部は直線的に斜め上方へ立ち上がる。 ○底部は平底である。	○内面の胴部は磨削が著しくて調整が不明であるが、縱方向の蒐削りを施していると推定される。 ○外側の胴部は、全体に縱方向の蒐磨きを施している。 ○外側の底部は、指頭圧痕の上面に不定方向のなでを加えている。	○全体に淡灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○石英粒や金雲母粒が存在する。 ○焼成は全体に良好である。
	2154	底部径 7.8	○胴部は直線的に斜め上方へ立ち上がる。 ○底部は平底であるが、わずかに上げ底を呈している。	○内面の胴部は、全体に縱方向の蒐削りを施している。 ○外側の胴部は、全体に縱方向の蒐磨きを施している。 ○内面の底部には指頭圧痕が認められ、指頭による不定方向のなでを加えている。 ○外側の底部は、指頭圧痕の上面に不定方向のなでを加えている。	○全体に淡灰褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○外側には黒斑が認められる。

### 23) P-20

弥生式土器	2155		○頸部から口縁部にかけて大きく外脣して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は上下に拉張して外側に退化凹線が認められる面を有する。 ○頸部から口縁端部へ移行するにしたがって器壁が厚くなっている。	○口縁端部の外側には、2条の退化凹線が認められる。 ○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○内面の頸部直下は、横方向の蒐削りを施している。 ○外側の頸部直下には、横方向の蒐磨きが認められる。	○全体に淡褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○粘土中には石英粒と長石粒が認められる。 ○焼成は全体に良好である。
	2156		○口縁部はわずかに内脣して斜め上方へ大きく張り出し、端部は上下に拉張して外側に中央部が窪んだ面を有する。 ○頸部はわずかに外傾して長く直立している。	○外側の頸部には、成形によって生じたと推定される爪の痕跡が認められる。 ○内外面とも全体に横なでを施している。	○全体に淡灰褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	2157		○口縁部は外脣して斜め上方へ大きく張り出し、端部は粘土を貼り付けて上方に拉張している。	○口縁端部の外側には、浅い退化凹線が多く認められる。 ○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○外側の頸部には、縱方向の蒐磨きを施している。	○全体に淡赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	2158		○頸部は内傾して長く立ち上がり、さらに外反して口縁部に至る。 ○口縁部は大きく外反して斜め上方へ立ち上がり、端部は粘土を貼り付けて上下に拉張している。 ○典型的な上東式の長頸壺の形態を呈している。	○口縁端部の外側には、5条の退化凹線が認められる。 ○内面は全体に丁寧な横なでを施している。 ○外側の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外側の口縁部直下には、斜め方向の刷毛目を施している。 ○外側の頸部には、縱方向の刷毛目の上面に横方向の蒐磨き沈線を数多く施している。	○全体に赤褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○粘土中には石英粒と長石粒が多く認められる。 ○焼成は全体に極めて良好である。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弦生式土器	壺形土器			○外面の頸部直下には、範状工具の先端で施した列点文を横方向にめぐらしている。	
				○口縁端部と外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○内面の口縁部には、横方向に短い単位の範磨きを施している。 ○頸部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の胴部は、横方向の粗い範削りを施している。 ○外面の胴部は、斜め方向の刷毛目の上面に斜め方向の範磨きを施している。	○内外面とも全体に淡褐色。 ○3.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○胎土中には石英粒と長石粒が多く認められる。 ○焼成は全体に良好である。
				○口縁端部から頸部にかけて「く」字状に外反し、口縁端部は上下に大きく拡張している。 ○全体の規模に比して、器壁が著しく厚くなっている。	○全体に淡赤褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
				○頸部は球形を呈し、最大径はほぼ中位に存在するようである。 ○口縁端部は上方へ大きく拡張し、上端は丸く仕上げている。	○口縁端部の外面には、2条の浅い退化凹線が認められる。 ○口縁端部の外面には、範齒文が認められる。 ○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○内面の胴部は、横方向の粗い範削りを施している。
	2162			○頸部から口縁部にかけて「く」字状に外反し、口縁端部はほとんど拡張が認められない。 ○全体に器壁が厚くなっている。	○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○内面の胴部は、横方向の範削りを施している。
				○内面の胴部は、横または斜め方向の範削りを施している。 ○外面の胴部は、縱または斜め方向の刷毛目の上面に横方向の範磨きを施している。	○全体に淡褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
直口壺形土器	2163			○頸部の器壁は、内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○底部は平底であるが、器壁が厚くなつてわずかに上げ底を呈している。	○内面の胴部は、横または斜め方向の範削りを施している。 ○外面の胴部は、縱方向の範磨きを施している。 ○外面の底部は、不定方向のなでを施している。
				○内面の器表面は磨滅が著しくて調整が不明であるが、範削りを施しているであろう。 ○外面の胴部は、縱または斜め方向の刷毛目を施している。 ○外面の底部は、全体に横なでを施している。 ○内面の底部には、指頭圧痕がかすかに認められる。	○全体に淡赤褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好で、外面に黒斑が認められる。
				○内面の器表面は磨滅が著しくて調整が不明であるが、範削りを施しているであろう。 ○外面の胴部は、縱または斜め方向の刷毛目を施している。 ○外面の底部は、全体に横なでを施している。 ○内面の底部には、指頭圧痕がかすかに認められる。	○全体に淡赤褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○2163と同様に、壺形土器になるのかもしれない。
				○口縁部は垂直に短く立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○頸部は球形に近い形態を呈し、最大径は中位よりやや上方に存在する。 ○底部は平底であるが、器壁が厚くなつて不安定である。	○2165の口縁端部外面には、1条の退化凹線が認められる。 ○2166の口縁端部内面には、凹縁状の浅い溝みがめぐらされている。 ○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の頸部には指頭圧痕が認められ、指頭による不定方向のなでを加えている。 ○内面胴部の上位は、横方向の範削りを施している。
	2165	2166	推定口径 7.9 器高 15.3 推定頸部最大径 18.0 推定底部径 4.5		

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弥生式土器				○内面胴部の下位は、縱または斜め方向の範削りを施している。 ○外面の頸部は、全体に縱または斜め方向の刷毛目を施している。	
縦形土器	2167		○底部から頸部にかけて内寄して斜め上方へ立ち上がり、頸部で「く」字状に短く外反して口縁端部に至る。 ○斜め上方へ張り出した口縁端部は、上下にわずかに拡張している。 ○内面の頸部には、徒が認められる。 ○底部は平底であるが、器壁が弓なりに彎曲して不安定である。	○内面の口縁端部には、指頭圧痕が連続してめぐらされている。 ○外面の頸部には、壓状工具の先端で押圧した痕跡が連続してめぐらされている。 ○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○外面の頸部は、壓状工具の押圧痕跡の上面を横なでしている。 ○内面胴部の上位は、横方向の粗い範削りを施している。 ○内面胴部の下位には、斜めまたは横方向の刷毛目が認められる。	○内外面とも全体に灰褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○粘土中には石英粒や長石粒が混在して、金雲母粒も認められる。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面の底部から頸部にかけて、黒斑が存在する。
壺形土器	2168		○「く」字状に外反した口縁の端部は、斜め上方へ拡張して上端を丸く仕上げている。 ○外面の頸部上位の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○口縁端部の外面には、2条の退化凹線が認められる。 ○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の頸部下位は、横方向の粗い範削りを施している。 ○外面の頸部下位は、縱方向の磨きを施している。	○全体に淡赤褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○粘土中には石英粒と長石粒が多く認められる。 ○焼成は全体に良好である。
縦形土器	2169		○頸部の器壁は内寄して斜め上方へ立ち上がり、頸部で屈曲して口縁端部に至る。 ○口縁部は短く外反して、外面の端部に中央部が浅く窪んだ面を有する。 ○全体に器壁が厚くなっている。 ○底部には2186のような脚を有する可能性が強い。	○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○内面の胴部は磨滅が著しくて調整が不明であるが、横方向の粗い範削りを施しているであろう。 ○外面の胴部は、内面の胴部と同様に磨滅が著しくて調整が不明である。	○内外面とも全体に淡灰褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○粘土中には石英粒と長石粒が多く認められる。 ○焼成は全体に良好である。
	2170		○頸部は卵形を呈する。 ○頸部の器壁は内寄して斜め上方へ立ち上がり、頸部で「く」字状に鋭く屈曲して口縁部に至る。 ○口縁部は斜め上方へ張り出し、端部は上方へわずかに拡張している。	○内面の口縁部上端は、浅い窪みがめぐらされている。 ○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○内面の頸部上位は、横方向の範削りを施している。 ○内面の頸部下位は、斜め方向の範削りを施している。 ○外面胴部の上位は磨滅が著しくて調整が不明であるが、下位には縱方向の刷毛目が認められる。	○内外面とも全体に淡褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○粘土中には石英粒と長石粒が多く認められる。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面の頸部には、黒斑が存在する。
	2171		○口縁部は「く」字状に外反し、端部外面には退化凹線が認められる面を有する。 ○口縁部の器壁は、頸部よりも薄くなっている。 ○内面の口縁部は、浅く窪んで彎曲している。	○口縁端部の外面には、1条の退化凹線が認められる。 ○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○内面の頸部下位には、横方向の粗い範削りを施している。 ○外面の頸部下位には、斜め方向の刷毛目を施している。	○全体に赤褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	2172		○頸部の器壁は内寄して斜め上方へ立ち上がり、頸部で「く」字状に外反して口縁部に至る。 ○口縁部は斜め上方へ張り出し、端部が上方へ拡張して丸く仕上げている。 ○口縁部の器壁は、頸部よりも薄くなっている。	○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○内面の頸部は、斜め方向の粗い範削りを施している。 ○外面胴部の上位は磨滅が著しくて調整が不明であるが、下位には縱方向の刷毛目が認められる。	○全体に淡赤褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○粘土中には石英粒と長石粒が多く認められる。 ○焼成は全体に良好である。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弥生式土器	2173		<ul style="list-style-type: none"> <li>○胴部の器壁は内脣して斜め上方へ立ち上がり、頸部で「く」字状に外反して口縁部に至る。</li> <li>○胴部の最大径は、上位の肩部に存在する。</li> <li>○斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、上方へわざかに拡張している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。</li> <li>○外面の頸部は、全体に横なでを施している。</li> <li>○内面の頸部直下には指頭圧痕が認められ、上面に指頭による不定方向のなでを加えている。</li> <li>○外面胴部の上位は、横方向の範磨きを行った後に縦方向の範磨きを施している。</li> <li>○外面の胴部下位には、縦方向の刷毛目が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は淡灰褐色、外面は淡褐色。</li> <li>○1.5mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○胎土中には石英粒や長石粒に混在して、金雲母粒も認められる。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○外面の胴部には、黒斑が存在する。</li> </ul>
	2174		<ul style="list-style-type: none"> <li>○胴部は球形に近い形態を呈し、最大径はほぼ中位に存在するようである。</li> <li>○口縁部は「く」字状に外反して斜め上方へ立ち上がる。</li> <li>○口縁部の器壁は、胴部よりも厚くなっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。</li> <li>○胴部は内外面とも磨減が著しくて調整が不明であるが、内面は範削りを施しているであろう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に淡灰褐色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○胎土中には石英粒と長石粒が多く認められる。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> </ul>
	2175		<ul style="list-style-type: none"> <li>○頸部で「く」字状に短く外反した口縁部は、さらに上方へ大きく拡張して外側に退化凹線が認められる面を有する。</li> <li>○口縁部上端は、わずかに肥厚して全体に丸く仕上げている。</li> <li>○外面頸部の上位には、範状工具の先端で施したと推定される凹線状の窪みがめぐらされている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部の外面には、6条の退化凹線が認められる。</li> <li>○口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体に丁寧な横なでを施している。</li> <li>○内面の胴部は、横方向の範削りを施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に淡灰褐色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○胎土中には石英粒と長石粒が多く認められる。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○外面には煤の付着が認められる。</li> </ul>
	2176		<ul style="list-style-type: none"> <li>○「く」字状に斜め上方へ外反した口縁の端部は、上下に著しく拡張して外面に退化凹線が認められる面を有する。</li> <li>○口縁部上端は、わずかに肥厚して全体に丸く仕上げている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部の外面には、3条の退化凹線が認められる。</li> <li>○口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体に丁寧な横なでを施している。</li> <li>○内面の胴部は、横方向の範削りを施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に淡褐色。</li> <li>○1.5mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○この土器は、壺形土器になるのかもしれない。</li> </ul>
	2177 2178		<ul style="list-style-type: none"> <li>○斜め上方へ短く外脣した口縁の端部は、さらに屈曲してわざかに外傾しながら上方へ張り出す。</li> <li>○口縁上端は、どちらも丸く仕上げている。</li> <li>○胴部の器壁は、内脣して頸部に至る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部の外面には、擬凹線がかすかに認められる。</li> <li>○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。</li> <li>○内面の胴部は、横または斜め方向の範削りを施している。</li> <li>○外面の胴部は、磨減が著しくて調整が不明である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○どちらも全体に淡灰褐色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成はどちらも良好である。</li> </ul>
	2179		<ul style="list-style-type: none"> <li>○「く」字状に外反した口縁の端部は、丸く仕上げている。</li> <li>○胴部は内傾して斜め上方へ立ち上がる。</li> <li>○胴部の器壁は、口縁部よりも厚くなっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。</li> <li>○内面の胴部は、横方向の範削りを施している。</li> <li>○内面の胴部は、磨減が著しくて調整が不明である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に淡褐色。</li> <li>○2.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> </ul>
	2180		<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部から胴部にかけて、内脣して斜め上方へ立ち上がる。</li> <li>○底部はわざかに平底が残るが、器壁が厚くて不定定である。</li> <li>○全体に器壁が厚い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面の胴部は、縦方向の範削りを施している。</li> <li>○外面の胴部は、縦方向の粗い刷毛目を施している。</li> <li>○外面の底部は、不定方向の丁寧ななでを施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に赤褐色。</li> <li>○2.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○外面の底部には、黒斑が存在する。</li> <li>○器壁が厚いから、壺形土器になるのかもしれない。</li> </ul>
	2181	底部径 6.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部から胴部にかけて、内脣して斜め上方へ立ち上がる。</li> <li>○底部は平底であるが、器壁が弓なりに脣曲して不安定である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部の器壁は、後に外方向から粘土を貼り付けている。</li> <li>○内面の胴部は、縦方向の粗い範削りを施している。</li> <li>○外面の胴部は、縦方向の範磨きを施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は淡赤褐色、外面は赤褐色。</li> <li>○1.5mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○胎土中には石英粒や長石粒に混在して、金雲母粒も認められる。</li> </ul>

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕生式土器				ている。 ○内面の底部は、指頭圧痕の上面に指頭による不定方向のなでを加えている。 ○外面の底部は、不定方向のなでを施している。	る。 ○焼成は全体に良好で、外面の底部に黒斑が存在する。
	2182		○胴部の器壁は、内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○底部は平底で、器壁が薄くてわずかに上げ底を呈している。	○内面の胴部は、縱または斜め方向の窪削りを施している。 ○外面の胴部は、全体に縱方向の窪磨きを施している。 ○外面の底部には指頭圧痕が認められ、上面に不定方向のなでを加えている。	○内面は淡灰褐色。外面は淡褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	2183	底部形 3.5	○底部から胴部にかけて、内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○底部は平底であるが、器壁が厚くなっている。	○内面の胴部は、横または斜め方向の窪削りを施している。 ○外面の胴部は、縱または斜め方向の窪磨きを施している。 ○外面の底部は、不定方向のなでを施している。	○全体に淡灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	2184		○胴部の器壁は、斜め上方へ内側して立ち上がる。 ○底部は平底である。 ○底部の器壁は、胴部よりも厚くなっている。	○内面の胴部は磨減が著しくて調整が不明であるが、窪削りを施しているであろう。 ○外面の胴部は、縱方向の刷毛目を施している。	○全体に淡赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	2185		○胴部の器壁は、斜め上方へ内側して立ち上がる。 ○底部は平底である。	○内面には指頭圧痕が存在する。 ○外面の胴部は、磨減が著しくて調整が不明である。	○全体に淡灰色。 ○焼成は全体に良好である。
	2186	脚部径 5.9~6.0	○脚部は貼り付けである。 ○胴部の器壁は、内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○脚部は「ハ」字状に張り出し、端部は丸く仕上げている。	○内面の底部には、指頭圧痕が顎者に認められる。 ○外面の脚部貼り付け部分には、範状工具の先端で施した横方向の痕跡が存在する。 ○脚部は内外面とも全体に横なでを施している。	○内外面とも全体に淡灰褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
鉢形土器	2187		○体部は内側して斜め上方へ立ち上がり、頸部で緩く屈曲して口縁部に移行する。 ○体部の最大径は、頸部直下の部分に存在する。 ○斜め上方へ短く張り出した口縁の端部は、上方へ拉張して上端を丸く仕上げている。	○口縁部と外面の口縁部から頸部にかけては、全体に横なでを施している。 ○内面の口縁部は、横方向の窪磨きを施している。 ○内面の頸部下位は、横または斜め方向の窪磨きを施している。 ○外面の体部は、全体に横または斜め方向の窪磨きを施している。	○内外面とも全体に淡赤褐色。 ○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面の体部には、黒斑が存在する。
	2188		○口縁部は垂直に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○体部は緩やかに内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○底部は平底であるが、不安定になっている。 ○底部の器壁は、体部や口縁部よりも厚い。	○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の体部上位は、横方向の窪磨きを施している。 ○内面の体部下位から底部にかけては、指頭圧痕が顎者に存在する。 ○外面の体部は、縱方向の窪磨きを施した上面に、横方向の窪磨きを加えている。	○全体に赤褐色。 ○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒が極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面の体部から底部にかけて、黒斑が認められる。
	2189		○体部の器壁は内側して斜め上方へ立ち上がり、頸部で「く」字状に短く外反して口縁部に至る。 ○斜め上方へ短く張り出した口縁の端部は、拉張が認められない。 ○体部の最大径は、頸部との境界部分に存在する。 ○体部の器壁は、口縁部よりも厚くなっている。	○口縁部の外面には、3条の細い退化凹線が認められる。 ○頸部と体部の境界部分には、粘土の接合が認められる。 ○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○内面の体部は、全体に丁寧な横なでを施している。 ○外面の体部は、全体に縱または斜め方向の刷毛目を施している。	○内面は淡褐色、外面は赤褐色。 ○3.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○胎土中には石英粒と長石粒が多く認められる。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面の体部には、黒斑が存在する。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弥生式土器	2190		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は肥厚しながら斜め上方へ張り出し、端部は上下に拡張して外面に中央部がわずかに窪んだ面を有する。</li> <li>○体部の器壁は内凹して立ち上がり、最大径は頸部に近接した部分に存在する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。</li> <li>○内面の体部は、磨滅が著しくて調整が不明である。</li> <li>○外面の体部は磨滅が著しくて調整が不明であるが、かすかに横方向の刷毛目が残存している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に淡灰褐色。</li> <li>○2.5mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○胎土中には石英粒と長石粒が多く認められる。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> </ul>
	2191		<ul style="list-style-type: none"> <li>○緩やかに内凹して立ち上がった体部の器壁は、頸部で屈曲して口縁部に移行する。</li> <li>○斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、上下に拡張して上端を丸く仕上げている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部の外面には、浅い窪みが認められる。</li> <li>○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。</li> <li>○内面の体部は、横または斜め方向の窪削りを施している。</li> <li>○外面の体部には、短い単位の不定方向の刷毛目が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に赤褐色。</li> <li>○4.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○外面の体部には、黒斑が存在する。</li> </ul>
	2192		<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部は肥厚しながら緩やかに内凹して斜め上方へ立ち上がる。</li> <li>○口縁部は「く」字状に短く外反し、端部は垂直方向に拡張して上位に面を有する。</li> <li>○体部の最大径は、頸部直下の部分に存在する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部の外面には、3条の極めて浅い退化凹線が認められる。</li> <li>○内面の口縁部と外面の口縁部から頸部にかけては、全体に横なでを施している。</li> <li>○内面の体部は、全体に横方向の窪削りを施している。</li> <li>○外面の体部は斜め方向の刷毛目を施しているが、頸部直下の部分には縱方向の刷毛目が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は淡褐色、外面は赤褐色。</li> <li>○4.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に優めて良好である。</li> <li>○外面の体部には、黒斑が存在する。</li> </ul>
	2193		<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部は緩やかに内凹して斜め上方へ立ち上がり、頸部で短く屈曲して口縁部に至る。</li> <li>○斜め上方へ短く外反した口縁の端部は、垂直方向に大きく拡張して上位に面を有する。</li> <li>○体部の最大径は、頸部に近接した上位に認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。</li> <li>○内面の体部は、全体に丁寧な横なでを施している。</li> <li>○外面の体部は、全体に横または斜め方向の刷毛目を施している。</li> <li>○外面体部の頸部直下の部分は、横方向の刷毛目の上面に横なでを加えて、刷毛目が部分的に消滅している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は淡赤褐色、外面は赤褐色。</li> <li>○3.5mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○胎土中には石英粒と長石粒が多く認められる。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○外面の体部には、黒斑が存在する。</li> </ul>
	2194		<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部の器壁は緩やかに内凹して斜め上方へ立ち上がり、最大径部分で屈曲して頸部に至る。</li> <li>○体部は算盤珠に近い形態を呈している。</li> <li>○口縁部は「く」字状に外反して斜め上方へ張り出し、端部は垂直方向に大きく拡張して上端を丸く仕上げている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部の外面には、4条の退化凹線が認められる。</li> <li>○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。</li> <li>○内面の体部は、全体に横または斜め方向の窪削りを施しているが、最大径を有する部分には、指頭圧痕が認められる。</li> <li>○外面の頸部下位には、斜め方向の刷毛目を施している。</li> <li>○外面体部の最大径を有する部分より下位は、刷毛目の上面に縱方向の窪磨きを施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に淡赤褐色。</li> <li>○4.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○胎土中には石英粒や長石粒に混在して金雲母も認められる。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○外面の体部には、黒斑が存在する。</li> </ul>
	2195		<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部の器壁は厚く、内凹して頸部に至る。</li> <li>○口縁部は「く」字状に短く外反し、端部は垂直方向に大きく拡張して上端を丸く仕上げている。</li> <li>○口縁部の器壁は、体部に比して著しく薄くなっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部の外面には、2条の極めて浅い退化凹線が認められる。</li> <li>○頸部と体部の境界部分の器壁断面には、粘土の接合が認められる。</li> <li>○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。</li> <li>○内面の体部は、横方向の粗い窪削りを施している。</li> <li>○外面の体部は、斜めまたは縱方向の刷毛目を施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は褐色、外面は淡褐色。</li> <li>○3.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○胎土中には石英粒と長石粒が多く認められる。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> </ul>
2196		<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部の器壁は、緩やかに大きく内凹して斜め上方へ立ち上がり、頸部で短く屈曲して口縁部に移行する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部の外面には、3条の退化凹線が認められる。</li> <li>○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に赤褐色。</li> <li>○4.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○胎土中には石英粒や長石粒に混在して、金雲母も認められ</li> </ul>	

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位:cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弦生式土器			<ul style="list-style-type: none"> <li>○斜め上方へ短く外反した口縁の端部は、垂直方向に大きく笠張して上端を丸く仕上げている。</li> <li>○口縁部の器壁は、体部の中位よりも薄い。</li> <li>○体部の最大径は、頸部に近接した上位の部分に存在する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面の体部は、横または斜め方向の範削りを行った後に、縱方向の範削りを施している。</li> <li>○外面体部の最大径を有する部分には、横または斜め方向の刷毛目が認められる。</li> <li>○外面体部の下位は、縱方向の丁寧な範削きを施している。</li> </ul>	<p>る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○外面の体部には、黒斑が存在する。</li> </ul>
高杯形土器	2197	推定口径 23.0 器高 16.9 推定脚端部径 16.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は外寄して斜め上方へ立ち上がり、端部の器壁は薄くならないで、退化凹線状の浅い凹みが認められる彎曲した面を有する。</li> <li>○内面の口縁部には、鋭い棱が認められる。</li> <li>○杯部は器壁が薄くなりながらわずかに内寄して斜め上方へ立ち上がる。</li> <li>○外面の口縁部と杯部の境界部分には、1条の凹線があげられていく。</li> <li>○脚柱部は長く立ち上がって脚裾部が「ハ」字状に広がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○脚裾部の円孔は、5箇所に存在する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。</li> <li>○杯部の内面は、全体に横なでを施している。</li> <li>○杯部の外表面は、全体に縱方向のなでを施している。</li> <li>○脚柱部の内面には、しづら痕跡が顕著に認められる。</li> <li>○脚裾部の内面は、全体に横なでを施している。</li> <li>○外面の脚裾部上位全体に、横なでを施している。</li> <li>○外面の脚裾部上位は、縱方向の範磨きを施している。</li> <li>○外面の脚裾部下位は、全体に横なでを施している。</li> <li>○円孔はいずれも内外両面から刺突している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に淡褐色。</li> <li>○1.5mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○胎土中には石英粒と長石粒が多く認められる。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○約1%残存。</li> </ul>
	2198		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は大きく外寄して斜め上方へ立ち上がり、端部は全体に丸く仕上げている。</li> <li>○杯部はわずかに内寄して斜め上方へ張り出し、口縁部に至る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面全体と口縁端部は、丁寧な横なでを施している。</li> <li>○外面の口縁部は、全体に横方向の範磨きを施している。</li> <li>○外面の杯部は、縱方向のなでを施している。</li> <li>○口縁部と杯部の境界部分は、粘土を接着している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に赤褐色。</li> <li>○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> </ul>
	2199	推定口径 21.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部から杯部にかけての規模が大きく、短脚を有する。</li> <li>○口縁部は外寄して斜め上方へ大きく張り出し、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○杯部はわずかに内寄して斜め上方へ立ち上がり、口縁部に接続する。</li> <li>○脚部と杯部は、脚柱部を杯部に刺し込んでいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部と外面の口縁部は、全体に丁寧な横なでを施している。</li> <li>○内面の口縁部は、横方向の範磨きを施している。</li> <li>○内面の杯部は、横方向の丁寧ななでを施している。</li> <li>○外面の杯部は、縱方向のなでを施している。</li> <li>○内面の脚柱部には、範状工具の先端で押圧した痕跡が認められる。</li> <li>○外面の脚柱部は、縱方向の幅の広い範磨きを行った上面に、横方向の範磨きを施している。</li> <li>○外面の脚裾部上位には、縱方向の範磨きが認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に赤褐色。</li> <li>○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。</li> <li>○焼成は全体に極めて良好である。</li> <li>○口縁部と杯部は約1%残存。</li> </ul>
	2200		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は器壁が薄くなりながら外寄して斜め上方へ大きく立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○杯部の器壁は、口縁部よりも薄くなっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁端部と外面の口縁部は、全体に丁寧な横なでを施している。</li> <li>○内面の口縁部は、横方向の範磨きを施している。</li> <li>○口縁部と杯部の境界部分は、粘土を接着している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に赤褐色。</li> <li>○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> </ul>
	2201		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は緩やかに外寄して斜め上方へ大きく立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内外面とも全体に丁寧な横なでを施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に赤褐色。</li> <li>○胎土には水漉粘土を使用し、焼成は良好である。</li> </ul>
	2202	推定脚端部径 12.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>○脚部は短脚である。</li> <li>○脚裾部は「ハ」字状に大きく広がり、端部はわずかに立ち上がって</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面の脚柱部は、縱方向の範削りの上面に指頭による不定方向のなでを加えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に赤褐色。</li> <li>○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。</li> </ul>

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弥生式土器			いる。 ○脚裾部には円孔が4箇所に認められる。 ○脚部と杯部は、脚柱部を杯部に刺し込んでいる。	○外面の脚柱部は、横方向の窪磨きを施している。 ○内面の脚裾部には、横または斜め方向の刷毛目が認められる。 ○外面の脚裾部は、刷毛目の上面に縦方向の窪磨きを施している。 ○脚端部は横なでを施している。 ○脚部の円孔は、外から内方向に刺突している。	○焼成は全体に良好である。 ○脚部は約½残存。
			○脚部は短脚である。 ○脚裾部は「ハ」字状に広がり、端部は全体に丸く仕上げている。 ○脚裾部の円孔は、4箇所に認められる。 ○脚部と杯部は、脚柱部を杯部に刺し込んでいる。	○外面の脚柱部は、全体に横なでを施している。 ○内面の脚裾部と脚端部は、全体に横なでを施している。 ○外面の脚裾部は、全体に縦方向のなでを施している。 ○脚部の円孔は、いずれも外から内方向に刺突している。	○内外面とも全体に淡灰褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○脚部は約½残存。
			○脚部は短脚で、脚裾部が「ハ」字状に大きく広がって端部を丸く仕上げている。 ○脚裾部の円孔は、4箇所に認められる。 ○外面の脚端部には、1条の凹線状の溝みがめぐらされている。 ○脚部と杯部は、脚柱部を杯部に刺し込んでいる。	○内面の脚柱部は、縦方向の窪削りの上面に指頭による不定方向のなでを加えている。 ○外面の脚柱部は、全体に横なでを施している。 ○外面の脚柱部と脚裾部の境界部分には、窓工具の先端で施した横方向の痕跡が認められる。 ○内面の脚裾部には、横方向の刷毛目が認められる。 ○外面の脚柱部は、全体に縦方向のなでを施している。 ○脚端部は横なでを施している。 ○脚裾部の円孔は、いずれも外から内方向に刺突している。	○内外面とも全体に赤褐色。 ○胎土には水洗粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○脚部は約½残存。
			○脚部は短脚であるが、脚柱部の器壁が厚い。 ○脚裾部は「ハ」字状に広がり、端部は全体に丸く仕上げている。 ○脚裾部の円孔は、4箇所に認められる。 ○脚部と杯部は、脚柱部を杯部に刺し込んでいる。	○外面の脚柱部は、全体に横なでを施している。 ○内面の脚裾部には、刷毛目が認められる。 ○外面の脚裾部は、全体に縦方向の窪磨きを施している。 ○脚柱部の円孔は、いずれも内外両面から刺突している。	○内外面とも全体に赤褐色。 ○胎土には水洗粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。 ○脚部は約½残存。

## 24) D-26

土師質土器	高台付橈 2206 2209 I	2207 高台径 5.5 高台高 0.7  2208 高台径 5.5 高台高 0.5	○体部の器壁は、内側して斜め上方へ立ち上がり。 ○高台はいずれも貼り付けで、断面が台形または三角形を呈している。 ○2208以外の高台の接地部分は、いずれも丸く仕上げている。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○2206と2208の外面部には、指頭圧痕がかすかに認められて、二次的な調整を加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、いずれも全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、指頭圧痕や板目痕跡が残存している。 ○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	○いずれも全体に淡黄白色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
瓦質土器	羽釜	2210	○口縁部は上方へ立ち上がり、端部はわずかに肥厚して上端に中央部が浅く窪んだ面を有する。 ○縁は貼り付けで斜め下方へ短く張り出し、端部には中央部が浅く窪んだ面を有する。	○内外面とも全体に横なでを施している。	○器表面は全体に黒褐色、器壁断面は灰白色。 ○胎土中には細かい砂粒を含む。 ○焼成は全体に良好である。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位:cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓦質土器	羽釜	2211	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部の器壁は内側して上方へ立ち上がり、端部は器壁が肥厚して丸く仕上げている。</li> <li>○外面の口縁部に近接して貼り付けの鈎が認められ、断面が三角形を呈して端部を丸く仕上げている。</li> </ul>	○内外面とも全体に横なでを施している。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。</li> <li>○粘土中には細かい砂粒を含むが、量は極めて少ない。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> </ul>
中世陶器	壺	2212 推定底部径 11.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部から胴部にかけて、器壁が薄くなりながら斜め上方へ内側して立ち上がる。</li> <li>○底部は平底である。</li> <li>○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。</li> </ul>	○内外面とも全体に横なでを施している。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：精選粘土。細かい砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：内外面とも全体に濃赤褐色。</li> <li>○偏前焼。</li> </ul>
擂鉢	2213		<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部から体部にかけて、斜め上方へ立ち上がる。</li> <li>○底部は平底で、器壁が体部よりも著しく薄くなっている。</li> <li>○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な横なでを施した後に、10条を単位にした条線を放射状にめぐらせている。</li> <li>○外面の体部は、全体に横なでを施している。</li> <li>○外面の底部には、尾削り痕跡が残存して二次的な調整を加えていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：精選粘土。細かい砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成：全体に良好で堅緻。</li> <li>○色調：内外面とも全体に茶褐色。</li> <li>○偏前焼。</li> </ul>
	2214		<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部の器壁は厚くて、内側して斜め上方へ立ち上がる。</li> <li>○底部は平底であるが、外面の器表面は凹凸になっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な横なでを施した後に、平行する条線を不定方向に密に施している。</li> <li>○外面の体部は、全体に横なでを施している。</li> <li>○外面体部の底部に近接した部分には、指頭圧痕が認められる。</li> <li>○外面の底部には指頭圧痕や尾削り痕跡が顕著に認められ、器表面が凹凸になっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：精選粘土。細かい砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成：全体に良好で堅緻。</li> <li>○色調：内外面とも全体に濃赤褐色。</li> <li>○偏前焼。</li> </ul>
瓦	平瓦	2215	<ul style="list-style-type: none"> <li>○断面の厚さは 2.1cmから 2.2cmを測り、緩やかに弯曲している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○凸面には斜格子の叩き目痕跡が顕著に認められる。</li> <li>○凹面には布目の上面に不定方向のなでを加えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に灰色。</li> <li>○粘土中には細かい砂粒が多く、焼成は良好である。</li> </ul>

## 25) D-27

土師質土器	小皿	2216 口径 9.2~ 9.4 器高 1.4~ 1.6 底部径 6.0~ 6.1	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○底部は平底であるが、器壁が全体に弓なりに弯曲している。</li> <li>○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な回転なでを施している。</li> <li>○外面の口縁部は、全体に回転なでを施している。</li> <li>○外面の底部には、回転糸切り痕跡が顕著に認められる。</li> <li>○ロクロの回転方向は、時計通りである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に淡灰褐色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○完形品。</li> </ul>
		2217 推定口径 9.4 器高 1.4~ 1.5 推定底部径 6.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は中位の器壁がわずかに肥厚して斜め上方へ立ち上がり、端部は中位から外傾して丸く仕上げている。</li> <li>○底部は平底であるが、器壁が全体に弓なりに弯曲している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な回転なでを施している。</li> <li>○外面の口縁部から体部にかけて、全体に回転なでを施している。</li> <li>○外面の底部には、回転糸切り痕跡が顕著に認められる。</li> <li>○ロクロの回転方向は、時計通りである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に淡灰褐色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○約1%残存。</li> </ul>
		2218 口径 9.4 器高 1.5~ 1.8 底部径 5.8~ 6.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は斜め上方へ直線的に張り出し、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○底部は平底であるが、わずかに弓なりに弯曲している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な回転なでを施している。</li> <li>○外面の口縁部から体部にかけて、全体に回転なでを施している</li> <li>○外面の底部には、回転糸切り痕跡が顕著に認められる。</li> <li>○ロクロの回転方向は、時計通りである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に淡灰褐色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○約1%残存。</li> </ul>
			<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部はわずかに内側して斜め上方へ張り出し、端部は全体に丸く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な回転なでを施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に淡灰褐色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> </ul>

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
土師質土器	小皿	2219	口径 9.4 器高 1.5~ 1.7 底部径 6.1	仕上げている。 ○底部は平底で、部分的に凹凸が認められる。	○外面の口縁部から体部にかけて、全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転糸切り痕跡が顕著に認められる。 ○ロクロの回転方向は、時計通りである。	○焼成は全体に良好である。 ○約名残存。
		2220	口径 9.3 器高 1.6~ 1.8 底部径 6.4	○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が弓なりに大きく脊曲している。 ○内外面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が存在する。	○内面は全体に丁寧な回転なでを施している。 ○外面の口縁部から体部にかけて、全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転糸切り痕跡が顕著に認められる。 ○ロクロの回転方向は、時計通りである。	○内外面とも全体に淡灰黄褐色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約名残存。
		2221	口径 9.4 器高 1.4~ 1.6 底部径 6.0~ 6.1	○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が厚く弓なりに脊曲している。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○内面は全体に丁寧な回転なでを施している。 ○外面の口縁部から体部にかけて、全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転糸切り痕跡が顕著に認められる。 ○ロクロの回転方向は、時計通りである。	○内外面とも全体に淡灰黄褐色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○ほぼ完形品であるが、口縁端部をわずかに欠損している。
	2222	口径 9.3 器高 1.5~ 1.6 底部径 6.3	○口縁部は端部へ移行するにしたがって器壁が薄くなつて斜め上方へ張り出し、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底であるが、器壁が弓なりにわずかに脊曲している。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○内面は全体に丁寧な回転なでを施している。 ○外面の口縁部から体部にかけて、全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転糸切り痕跡が顕著に認められる。 ○ロクロの回転方向は、時計通りである。	○内外面とも全体に淡灰黄褐色。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約名残存。	
		2223 ↓ 2227		○口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底である。 ○底部の器壁は、口縁部から体部にかけてよりも薄くなっている。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○内面はいずれも全体に丁寧な回転なでを施している。 ○外面の口縁部から体部にかけて、全体に回転なでを施している。 ○外面の底部には、いずれも回転糸切り痕跡が顕著に認められる。 ○ロクロの回転方向は、いずれも時計通りである。	○いずれも淡灰褐色または淡灰黄褐色を呈している。 ○ 1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
中世陶器	甕	2228		○頸部で「く」字状に外反して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、外方へ折れ曲がって玉縁を呈している。 ○内面の頸部には、鈍い稜が認められる。	○内外面とも全体に横なでを施している。	○胎土：精選粘土に砂粒を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：茶褐色。 ○備前焼。
		2229		○外側して垂直方向に立ち上がった口縁の端部は、外方へ折れ曲がって玉縁を呈している。 ○頸部には約 1.5cm の立ち上がりが認められる。	○内外面とも全体に横なでを施している。	○胎土：精選粘土に砂粒を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：茶褐色。 ○備前焼。
	擂鉢	2230		○体部は斜め上方へ立ち上がり、口縁部に至る。 ○口縁部は上下に大きく拡張して外側に面が認められる。 ○口縁部の上端は、全体に丸く仕上げている。 ○内外面の器表面には、成形によって生じた凹凸が認められる。	○内面は全体に丁寧な横なでを施した後に、縱方向の条線を放射状にめぐらせている。 ○外面は全体に横なでを施しているが、体部には指頭圧痕が認められる。	○胎土：精選粘土に砂粒を多く含む。 ○焼成：全体に良好で堅緻。 ○色調：赤褐色。 ○備前焼。
		2231		○体部は斜め上方へ立ち上がり、口縁部は内傾している。	○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。	○胎土：精選粘土に砂粒を多く含む。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
中世陶器	擂鉢		○底部は平底である。	○内面の体部は、全体に丁寧な横なでを施した後に、9条を単位に条線を放射状にめぐらせている。 ○外面の体部は、全体に横なでを施している。 ○外面の底部には、莧削り痕跡が顕著に認められる。	○焼成：全体に良好で堅緻。 ○色調：赤褐色。 ○備前焼。
			○口縁部は上下に大きく延張し、外 面に凹線状の浅い溝みが認められ る面を有する。 ○口縁端部は器壁が薄くなつて丸く 仕上げている。	○口縁部と外面の体部は、全体に横なでを施している。 ○内面の体部は、全体に丁寧な横なでを施した後に縱方向の条線をめぐらせて いる。	○胎土：精選粘土に砂粒を多く含む。 ○焼成：全体に良好で堅緻。 ○色調：赤褐色。 ○備前焼。

### 26) D-29

土師質土器	高台付椀	2233 2234		○口縁部は内側して斜め上方へ立ち 上がり、端部は丸く仕上げている。 ○2233の口縁部は、わずかに外傾し ている。 ○外面の口縁端部より約1.8cm下位 の部分には、鈍い棱が認められる。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを 施し、器表面全体を平滑に仕上げてい る。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施し ている。	○どちらも全体に淡黄白色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒 を多量に含む。 ○焼成はどちらも良好である。
	皿	2235		○口縁部はわずかに肥厚して斜め上 方へ張り出し、端部は全体に丸く 仕上げている。 ○底部は平底である。	○内面は全体に回転なでを施している。 ○外面の口縁部は、全体に回転なでを施 している。	○全体に赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
須恵質土器	椀	2236		○口縁部は内側して斜め上方へ立ち 上がり、端部は丸く仕上げている。	○内外面とも全体に丁寧な回転なでを施 している。 ○口縁端部には、重ね焼によって生じた と推定される黒色に変色した部分が認 められる。	○全体に灰白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
中世陶器	皿	2237	口径 10.4 器高 2.4 底部径 5.2	○口縁部は外側して斜め上方へ立ち 上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底である。 ○内外面とも器表面には、成形によ って生じたと推定される凹凸が認 められる。	○内面は全体に丁寧な回転なでを施して いる。 ○外面の口縁部から体部にかけて、全体 に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転糸切り痕跡が顕 著に認められる。	○胎土：精選粘土に砂粒を多く含む。 ○焼成：全体に良好で堅緻。 ○色調：赤褐色。

### 27) 井戸4

土師質土器	小皿	2238	口径 9.0 器高 1.5 底部径 5.0	○口縁部は内側して斜め上方へ立ち 上がり、端部は丸く仕上げている。 ○底部は平底で、器壁が厚くなつて いる。 ○内外面とも器表面には、成形によ って生じたと推定される凹凸が顕 著に認められる。	○内面は全体に丁寧な回転なでを施して いる。 ○外面の口縁部から頸部にかけて、全体 に回転なでを施している。 ○外面の底部には、回転糸切り痕跡が顕 著に認められる。 ○ロクロの回転方向は、時計通りである。	○胎土：精選粘土。 ○焼成：良好。 ○色調：内外面とも全体に灰白 色。 ○完形品。
近世磁器	高台付皿	2239	推定口径 12.4 器高 3.0 推定高台径 4.0 高台高 0.5	○口縁部は器壁が薄くなりながら、 屈曲して斜め上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は内側して丸く仕上げて いる。 ○底部の器壁は厚く、断面が逆台形 を呈する高台を有する。 ○内面の体部には、稜が認められる。	○高台は削り出しである。 ○内面には全体に淡灰緑色の釉薬を施 している。 ○外面の口縁部から体部は、全体に淡灰 緑色の釉薬を施している。 ○外面の体部から底部にかけて、莧削 りのままで釉薬は認められない。	○胎土：微砂質土 ○焼成：良好。 ○色調：釉薬の施された器表面 は全体に淡灰緑色、外面の底 部と器壁断面は暗黄色。 ○佐賀県唐津市周辺で生産され たと推定される。
	広口壺	2240	高台径 3.2 高台高 0.6	○体部は内側して斜め上方へ立ち上 がる。 ○底部は器壁が厚く、細くて短い高 台を有する。	○内外面とも全体に乳白色の釉薬が施さ れている。	○胎土：微砂質土。 ○焼成：良好。 ○色調：器表面は乳白色、器壁 断面は白色。

## 28) D 地点の遺構に伴わない遺物

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
弥生式土器	2242		○斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は、上下に拡張して外面に退化凹線が認められる面を有する。	○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○口縁端部の外面には、5条の退化凹線が認められる。 ○頸部は内外面とも横方向の鉛磨きを施している。	○内面は赤褐色、外面は淡赤褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	2243		○斜め上方へ大きく張り出した口縁の端部は、上方へ拡張して外側に浅い擬凹線が認められる面を有する。 ○口縁端部は全体に丸く仕上げている。	○口縁端部の外面には、2条の浅い擬凹線が認められる。 ○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。	○内外面とも全体に淡乳白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
直口壺形土器	2244		○斜め上方へ直線的に立ち上がった口縁の端部は、丸く仕上げている。	○外面の口縁端部直下には、浅い凹線状の窪みが認められる。 ○内面の口縁部は、横方向の鉛磨きを行った後に、指頭による縱方向のなでを施している。 ○外面の口縁端部は、全体に横なでを施している。 ○外面の口縁部は、縱方向の鉛磨きを施している。	○内面は淡赤褐色、外面は淡乳褐色。 ○胎土には水漉粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。
裴形土器	2245		○内側して斜め上方へ立ち上がった頸部は、「く」字状に外反して口縁部に至る。 ○口縁部は胴部よりも器壁が肥厚して斜め上方へ立ち上がり、端部は上方へ拡張して全体に丸く仕上げている。 ○内面の頸部には、棱が認められる。	○口縁端部の外面には、中央部に浅い窪みが認められる。 ○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○外面の頸部は、全体に横なでを施している。 ○内面の頸部下位は、横方向の粗い笠削りを施している。 ○外面の頸部には、縱方向の刷毛目が認められる。	○外面と内面の口縁部は淡赤褐色、内面の胴部は淡乳白色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○胎土中には金雲母粒も存在する。 ○焼成は全体に良好である。
	2246		○頸部で「く」字状に外反した口縁部は、肥厚しながら斜め上方へ立ち上がり、端部は外傾して上方へ大きく拡張する。 ○口縁端部は全体に丸く仕上げている。 ○胴部の器壁は、口縁部や頸部よりも薄くなっている。	○口縁端部の外面には、2条の浅い擬凹線が認められる。 ○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○内面の胴部は、横方向の粗い笠削りを施している。 ○外面の胴部は、磨減が著しくて調整が不明である。	○内外面とも全体に淡乳灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○胎土中には石英粒や長石粒に混在して金雲母粒も認められる。 ○焼成は全体に良好である。
	2247 2248		○斜め上方へ張り出した口縁の端部は、上方へ拡張して丸く仕上げている。	○口縁端部の外面には、浅い窪みが認められる。 ○口縁部から頸部にかけては、内外面とも横なでを施している。 ○2247の内面胴部は、横方向の笠削りを施している。	○全体に淡黄灰色。 ○0.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はどちらも良好である。
	2249	底部径 3.3	○胴部の器壁は、内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○器壁の厚い底部には、高台状の立ち上がりが認められる。 ○底部の接地部分は、全体に丸く仕上げている。	○外面の胴部と底部の境界部分は、指頭圧痕がめぐらされている。 ○内面の胴部は、縱方向の笠削りを施している。 ○外面の胴部は磨減が著しくて調整が不明であるが、器表面にひび割れ状の痕跡が認められる。 ○外面の底部は、指頭圧痕が存在して二次的な調整は加えていない。	○内外面とも全体に淡乳褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○胎土中には細かい金雲母粒が認められる。 ○焼成は全体に良好である。
	2250		○胴部の器壁は、斜め上方へ立ち上がる。 ○底部は器壁が厚くて平底である。	○内面の胴部は、磨減が著しくて調整が不明である。 ○外面の胴部は、縱方向のなでを施している。 ○外面の底部には、刷毛目が認められる。	○全体に淡赤褐色。 ○6.0mm以下の砂粒を含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面の底部には、黒斑が存在する。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕生式土器	2251		○脚部は「ハ」字状に広がり、脚端部はわずかに立ち上がっている。 ○脚部には、4箇所に円孔が認められる。	○外面の脚部は、全体に縱方向の荒磨きを施している。 ○内面の脚部と脚端部は、全体に横なでを施している。 ○脚部の円孔は、いずれも外から内方向に刺突している。	○全体に赤褐色。 ○粘土には水洗粘土を使用し、砂粒は極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。
	2252		○脚部は「ハ」字状に大きく広がり、脚端部は丸く仕上げている。 ○脚部には、4箇所に円孔が認められる。	○脚部には、しばり痕跡が認められる。 ○内面の脚部の円孔周辺には、指頭圧痕が存在する。 ○内面の脚部と脚端部は、全体に横なでを施している。 ○脚部の円孔は、外から内方向に刺突している。	○内外面とも全体に赤褐色。 ○粘土には水洗粘土を使用し、砂粒が極めて少ない。 ○焼成は全体に良好である。
須恵器	2253	つまみ径 2.2 つまみ高 0.9	○天井部の器壁は、平坦になっている。 ○天井部の中央部には、上面が浅く僅んだ貼り付けのつまみが存在する。	○外面の天井部は、全体に荒削りのままである。 ○つまみと内面全体は、回転なでを施している。 ○外面の天井部には、自然釉の付着が認められる。	○内面は灰色、外面は黒青色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	2254		○底部には貼り付けの高台が存在する。 ○高台の接地面部分の中央部は、浅く盛んでいる。	○内面は全体に回転なでを施している。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、荒削りのままである。	○全体に青灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
高台付杯身	2255		○体部から口縁部にかけて器壁が薄くなつて斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はわずかに外傾して丸く仕上げている。 ○高台は貼り付けで、断面が台形を呈している。 ○内外面の器表面には、成形によつて生じたと推定される凹凸が存在する。	○内面は全体に丁寧な回転なでを施している。 ○外面の口縁部から体部にかけて、全体に回転なでを施している。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、荒削りのままである。	○内面は灰白色、外面は黒灰色。 ○1.5mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
	2256		○底部の器壁は、緩やかに内彎している。 ○底部の器壁は、中央部が厚くなっている。 ○底部には細くて長い高台が貼り付けられている。 ○高台の接地面部分は、横方向に拡張している。	○内面は全体に丁寧な回転なでを施している。 ○外面の体部は、全体に回転なでを施している。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。 ○外面底部の高台より内側は、荒削りのままである。	○内外面とも全体に黒青色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好で堅緻である。
土師器	2257		○口縁部は器壁が薄くなりながら斜め上方へ立ち上がり、端部は屈曲して短く外傾して丸く仕上げている。 ○内外面の器表面には、成形によつて生じたと推定される凹凸が存在する。	○内面は全体に丁寧な横なでを施している。 ○外面の口縁部から体部は、全体に横なでを施している。 ○内外面とも全体に丹塗りを施している。	○全体に丹塗りを施しているために淡赤色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
土師質土器	2258		○底部から口縁部にかけて緩やかに内彎して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は器壁が肥厚して丸く仕上げている。 ○底部の器壁は弓なりに彎曲して、口縁部よりも薄くなっている。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部は指頭圧痕がかかるに認められ、上面に指頭による不定方向の粗いなでを施している。	○全体に淡黄白色。 ○粘土中には白色の細かい砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約半存。
須恵質土器	2259		○体部は内彎して斜め上方へ立ち上がる。 ○底部は平底であるが、わずかに上	○外面の底部には、回転糸切り痕跡が観察に認められる。 ○内面全体と外面の体部は、回転なでを	○全体に灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵質土器	杯		げ底を呈している。	施している。 ○ロクロの回転方向は、時計通りである。	
			○体部は内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○底部は平底である。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○外面の底部には、いずれも回転糸切り痕跡が顕著に認められる。 ○内面全体と外面の体部は、いずれも回転なでを施している。 ○ロクロの回転方向は、2260が反時計通り、2262は時計通りである。	○2260と2262は灰白色、2261は灰色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成はいずれも良好である。
	小皿	2263	○体部は内側して斜め上方へ立ち上がる。 ○底部は平底である。 ○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。	○外面の底部には、回転糸切り痕跡が顕著に認められる。 ○内面全体と外面の体部は、回転なでを施している。 ○ロクロの回転方向は、時計通りである。	○全体に黒褐色。 ○1.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
土師質土器	羹	2264	○胴部の器壁は内側して上方へ立ち上がり、頸部で鋭く屈曲して口縁部へ移行する。 ○口縁部は器壁が厚くて斜め上方へ短く張り出し、端部の外側には面が認められる。	○口縁部は内外面とも全体に横なでを施している。 ○内面の胴部は、全体に横なでを施している。 ○外面の胴部は、縱方向の粗い柄状工具の痕跡の上面に、横方向の柄状工具の痕跡を施している。	○内外面とも全体に赤褐色。 ○3.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。
土鍋	2265		○胴部の器壁は内側して斜め上方へ立ち上がり、頸部で屈曲して口縁部へ移行する。 ○口縁部は肥厚しながら斜め上方へ張り出し、端部は比較的丸く仕上げている。 ○胴部の最大径は、頸部との境界部分に存在する。	○口縁端部は全体に横なでを施している。 ○内面の口縁部から胴部にかけての部分は、全体に横方向の柄目を施している。 ○外面の頸部には、指頭圧痕が顕著に認められる。 ○外面の口縁部から頸部は、縱方向の粗い柄状工具の痕跡が顕著に認められる。	○内面は淡赤褐色、外面は黒褐色。 ○2.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面には煤が付着している。
			○胴部は器壁が厚くて、斜め上方へわずかに内側して立ち上がる。 ○口縁部は斜め上方へ短く外反し、端部には粘土を貼り付けて丸く仕上げている。 ○内面の頸部には、棱が認められる。	○口縁端部は粘土を貼り付けて拡張している。 ○口縁部と内面胴部は、全体に横なでを施している。 ○外面の胴部には指頭圧痕が顕著に認められ、上面に縱方向の粗い柄目を施した後に、板状工具で横なでを加えている。	○内外面とも全体に黒褐色。 ○4.0mm以下の砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○外面の胴部には、煤が付着しているのが認められる。
高台付椀	2267	推定口径 13.2 器高 4.5 推定高台径 6.3 高台高 0.8	○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約2.0cm下位の部分には、鈍い棱が認められる。 ○底部の器壁は口縁部よりも厚く、貼り付け高台が存在する。 ○高台の接地部分は、全体に丸く仕上げている。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを施している。 ○外面底部の高台より内側には、指頭圧痕や板目が残存している。 ○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。	○内外面とも全体に淡黄白色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。 ○約1/2残存。
			○底部から口縁部にかけて内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はわずかに肥厚して丸く仕上げている。 ○外面の口縁端部より約1.1cm下位の部分には、鈍い棱が認められる。 ○高台は貼り付けで、斜め下方へ張り出して端部を丸く仕上げている。	○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。 ○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。 ○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。 ○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。	○内外面とも全体に灰褐色。 ○胎土中には白色の細かい砂粒を多く含む。 ○焼成は全体に良好である。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位:cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土 師 質 土 器				<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面底部の高台より内側には、指頭圧痕が認められる。</li> <li>○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が存在する。</li> </ul>	
皿	2314	推定口径 14.7 器高 3.0~ 3.5 底部径 9.8	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は器壁がわずかに肥厚して丸く仕上げている。</li> <li>○外面の口縁端部より約 2.0cm下位の部分には、鈍い棱が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。</li> <li>○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。</li> <li>○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に淡黄白色。</li> <li>○胎土中には白色の細かい砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> </ul>
	2315   2321		<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部は内側して斜め上方へ立ち上がる。</li> <li>○高台は貼り付けで、断面が三角形を呈している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。</li> <li>○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。</li> <li>○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。</li> <li>○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が存在する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に淡黄白色。</li> <li>○胎土中には白色の細かい砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> </ul>
	2273   2278		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は肥厚して丸く仕上げている。</li> <li>○外面の口縁端部より約 1.5cmから約 2.0cm下位の部分には、鈍い棱が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。</li> <li>○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。</li> <li>○外面の体部には指頭圧痕がかすかに認められ、二次的な調整は加えていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に淡黄白色または淡灰色。</li> <li>○胎土中には白色の細かい砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> </ul>
	2279   2312	2279 高台径 6.7 高台高 0.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部は内側して斜め上方へ立ち上がる。</li> <li>○高台は貼り付けで、断面が台形または三角形を呈している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○高台の貼り付け部分は、いずれも横なでを加えている。</li> <li>○外面底部の高台より内側には、指頭圧痕が認められる。</li> <li>○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が存在するものが比較的多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体に淡黄白色または淡灰色。</li> <li>○胎土中には白色の細かい砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> <li>○底部の高台部分は完存。</li> </ul>
	2313	高台径 5.0 高台高 0.8	<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部は内側して斜め上方へ立ち上がる。</li> <li>○高台は貼り付けで、断面が三角形に近い形態を呈している。</li> <li>○高台の接地面部分は、全体に丸く仕上げている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面全体を平滑に仕上げている。</li> <li>○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。</li> <li>○高台の貼り付け部分は、全体に横なでを加えている。</li> <li>○外面底部の高台より内側には、指頭圧痕や板目痕跡が存在する。</li> <li>○内面の底部には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に赤褐色。</li> <li>○胎土中には白色の細かい砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○底部の高台部分は完存。</li> </ul>
	2314		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は器壁が薄くなりながら内側して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○底部は平底であるが、器壁が厚くなつて弓なりに彫曲している。</li> <li>○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。</li> <li>○全体に歪んだ形態を呈している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は全体に丁寧な回転なでを施している。</li> <li>○外面の口縁部から体部にかけて、全体に回転なでを施している。</li> <li>○外面の底部には、回転窪切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に赤褐色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○胎土中には赤色粒が認められる。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○約%残存。</li> </ul>
	2315   2321		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内側して斜め上方へ立ち上がり、端部が内傾するものと強く外傾するものが存在する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面はいずれも全体に丁寧な回転なでを施している。</li> <li>○外面の口縁部から体部は、いずれも全</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○いずれも赤褐色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○胎土中には赤色粒が認められ</li> </ul>

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土 師 質 土 器			<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部はいずれも平底であるが、器壁が弓なりに彎曲するもの(2315)と、わずかに上げ底を呈するもの(2316)が認められる。</li> <li>○2318の内面口縁部には、稜が認められる。</li> <li>○内面の器表面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められるもの(2315・2319~2321)が多い。</li> </ul>	<p>体に回転なでを施している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の底部には、回転窓切り痕跡や板目痕跡が認められる。</li> </ul>	<p>る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> </ul>
小皿	2322	口径 8.3~ 8.5 器高 1.4~ 2.2 底部径 6.5~ 7.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は器壁が薄くなりながら斜め上方へ外寄して立ち上がり、端部は全体に丸く仕上げている。</li> <li>○底部は平底であるが、器壁が弓なりに彎曲している。</li> <li>○内面の底部には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。</li> <li>○全体に著しく歪んだ形態を呈している。</li> </ul>	<p>○内面は全体に丁寧な回転なでを施している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の口縁部は、全体に回転なでを施している。</li> <li>○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に赤褐色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○完形品。</li> </ul>
	2323	推定口径 8.5 器高 1.7~ 2.1 推定底部径 7.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は斜め上方へ短く立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○底部の器壁は、著しく立ち上がりついている。</li> <li>○内面の底部には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。</li> <li>○全体に著しく歪んだ形態を呈している。</li> </ul>	<p>○内面は全体に丁寧な回転なでを施している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の口縁部は、全体に回転なでを施している。</li> <li>○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に赤褐色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○約4%残存。</li> </ul>
	2324	推定口径 8.5 器高 0.8~ 1.4 底部径 6.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は器壁が薄くなつて斜め上方へ短く張り出し、端部は全体に丸く仕上げている。</li> <li>○底部の器壁は、著しく厚くなつて弓なりに彎曲している。</li> <li>○内面の底部には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。</li> <li>○全体に著しく歪んだ形態を呈している。</li> </ul>	<p>○内面は全体に丁寧な回転なでを施している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の口縁部は、全体に回転なでを施している。</li> <li>○外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内外面とも全体に赤褐色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○約4%残存。</li> </ul>
	2325 ↓ 2328		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は斜め上方へ張り出し、端部はいずれも丸く仕上げている。</li> <li>○底部はいずれも平底を呈している。</li> <li>○2326の内面底部には、成形によって生じたと推定される凹凸が存在する。</li> </ul>	<p>○内面はいずれも丁寧な回転なでを施している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の口縁部は、いずれも全体に回転なでを施している。</li> <li>○外面の底部には、いずれも回転窓切り痕跡と板目痕跡が存在する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2325と2327は全体に赤褐色、2326と2328は淡黄白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> </ul>
瓦 器	2329		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内寄して斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。</li> <li>○外面の口縁端部より約2.0cm下位の部分には、鈍い稜が認められる。</li> <li>○全体に器壁が厚くなっている。</li> </ul>	<p>○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、横方向の暗文を密に施している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の口縁部は、横なでを行った後に横方向の暗文を施している。</li> <li>○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、上面に横方向の暗文を密に施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○和泉型。</li> </ul>
	2330 ↓ 2332		<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は内寄して斜め上方へ立ち上がり、端部はいずれも丸く仕上げている。</li> <li>○2331の口縁部の器壁は、著しく薄くなっている。</li> <li>○外面の口縁端部より約1.5cmから約2.2cm下位の部分には、いずれも鈍い稜が認められる。</li> </ul>	<p>○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、いずれも暗文を施している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○外面の口縁部はいずれも横なでを施しているが、2330と2332の器表面には指頭圧痕が残存している。</li> <li>○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○いずれも器表面は黒灰色、器壁断面は灰白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。</li> <li>○焼成はいずれも良好である。</li> <li>○いずれも和泉型。</li> </ul>

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位:cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓦器	小皿	2333	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部はわずかに内側して斜め上方へ張り出し、端部は全体に丸く仕上げている。</li> <li>○底部の器壁は、弓なりに彎曲している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面は丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を施している。</li> <li>○内面底部の暗文は、平行する方向に直線的に施している。</li> <li>○内面の口縁部にも、列点状に暗文が認められる。</li> <li>○外面の口縁部は、全体に横なでを施している。</li> <li>○外面の底部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整は加えていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表面は全体に黒灰色、器壁断面は灰白色。</li> <li>○1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少ない。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> <li>○和泉型。</li> </ul>
外来縦器	高台付椀	2334	<ul style="list-style-type: none"> <li>○体部から口縁部にかけて緩やかに内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は短く外傾している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外面には蓖状工具によって花弁が描かれている。</li> <li>○内面の底部にも、蓖状工具によって花弁が描かれている。</li> <li>○内外面とも全体に、淡青灰色または淡緑灰色の釉薬を施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○胎土：精選粘土。</li> <li>○焼成：良好。</li> <li>○色調：器表面は淡青灰色または淡緑灰色、器壁断面は灰白色。</li> </ul>
瓦質土器	羽釜	2335	<ul style="list-style-type: none"> <li>○底部から口縁部にかけて大きく内側して斜め上方へ立ち上がり、口縁部の上端には中央部が浅く窪んだ面が存在する。</li> <li>○鉢は貼り付けで、断面が台形に近い形態を呈し、端部には浅い窪が認められる面を有する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内面の鉢の貼り付け部分には、指頭圧痕が残存している。</li> <li>○内面の器表面には、全体に横方向の細い刷毛目が認められる。</li> <li>○外面の口縁部から鉢にかけては、全体に横なでを施している。</li> <li>○外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ、上面に横方向の細い刷毛目が認められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表面は内外面とも黒灰色、器壁断面は灰白色。</li> <li>○1.5mm以下の砂粒を多く含む。</li> <li>○焼成は全体に良好である。</li> </ul>

## 百間川当麻遺跡（丘陵部）出土遺物観察表

単位：cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
陶磁器	天目碗	2336	○底部は上げ底である。体部はゆるやかに立ち上がる。	○底部はヘラケズリ、端部は面とりをしている。体部下半はヘラ磨きしている。	○体部上半、内面全体は黒褐色の釉薬、下半部は青灰色を呈する。
瓦	軒丸瓦	2337	○中心に三巴文、周囲に珠文12個を巡らす。 ○2338は珠文の外に凸巻が巡る。外縁は素文である。	○2338の裏は指ナデ、裏面はヘラ削りで仕上げている。巴の尾部は次の巴の頭部に届くものから半分以上届くものとがある。	○黄淡褐色～黒灰色を呈す。細粗砂粒を含むが確實。2337表面は黒褐色、裏面は灰黒色を呈す。
		2338			
備前焼	平瓦	2339	○正方形に近い形態を呈する。周囲はヘラによる面とりがなされている。 2340、2341は玉縁式である。 2341は裏面に粘土板が取り付けられている。	○表面は斜格子の叩き目が残存し、裏面には布目痕跡がみえる。 ○双方の表面はヘラ磨き、裏面はヘラ削り、2340の裏面には布目が、両側縁には面取りが認められる。	○表裏面共に淡黄白色と褐色を呈す。若干の砂粒を含む。 ○表面は黒色、裏面は灰色を呈し、細粗砂を含む。
	丸瓦	2340 2341			
埴輪	壺	2342 2343	口径 13.0 器高 32.6 底径 17.0 底径 15.4	○直立する口縁部で端部は玉縁状をなす。肩部には5本、4本単位のクシ書き沈線が施されている。 ○体部には凹凸があるが、上記とほぼ同形であろう。下端部にヘラ削りあり。	○底部貼り付けでヘラおこし、体部は粘土帶の輪積みで形成され、内外面共にナデ調整にて仕上げている。 ○粘土紐の輪積み、内外面とも粗いナデを施す。底部はヘラ起し。 ○2～5mm位の小石を含む。赤茶褐色を呈す。 ○若干の小石を含み、暗黒茶褐色を呈している。
	円筒埴輪	2344		○裏面は「タガ」取り付け時の指頭痕が見られる。	○外面は横方向の刷毛調整。
	皿状石製品	2345		○中央部に向けて徐々に薄くなる。口縁端部は研磨されている。裏面はノコ切り。	○表面は切り取った後、磨きをかけている。裏面はノコにより縱横斜め方向の切断。
土師器	皿	2346 2348 2354	口径 9.4 口径 11.0 器高 2.4 口径 7.2 器高 1.2 底径 6.0	○体部は緩やかに立ち上がり、端部は丸く終る。 ○上方に向けて、緩やかに立ち上がり、端部は丸く仕上げる。 ○口縁部は外反する。体部は若干厚くなっている。	○内外面共に横ナデにより仕上げている。 ○内外面共に横ナデ仕上げ、底部は糸切りが行われている。 ○内外面は横ナデ、底部はヘラ起し、体部端にヘラ削りがみられる。
	羽釜	2347	口径 12.8	○球状の体部から直立する口縁部を持ち、中央部近くに鈎がつき、上部には一对の釣手がつく。	○内面は横方向の刷毛、外面上半は横、鈎より下半は斜め横方向の刷毛調整、釣手の内側には指頭痕が残る。
白磁	碗	2349	口径 15.0	○口縁部が肥厚して玉縁状になる。	○内外面共にナデ仕上げ。
土師器	器台	2350 2351 2352 2353	口径 9.0 器高 3.5 底径 6.3 口径 8.5 器高 4.2 底径 6.6 口径 7.4 底径 7.3	○口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸く終る。脚部は若干広がり、端部は丸く終わっている。	○2350の底部内面はヘラ削り、他の底部はヘラ起し、内面下半はヘラ状工具による横方向の削り、上半は横ナデ。 ○2352の外面上にはヘラ先による刺突がみられる。
	碗	2355 2361 2365	口径 11.8 器高 6.7 口径 12.5 器高 4.9 口径 11.0 器高 4.9	○わずかに丸味を持って立ち上がり、先細りで終る。高台部の幅が広い。 ○緩やかに立ち上がり、前者に比べ厚ぼったく、口縁部は丸く終わっている。 ○器壁は厚味があり、先細りで終えている。	○内面底部に文様あり、外面は抽象化された文様。 ○外面無文、内面底部には抽象化した文様を有す。 ○内面は無文、外面はツタ状の文様。
	茶碗	2369	口径 8.0 器高 4.6	○丸味を持った碗で、小形ではあるが器壁は厚ぼったい。先細りで終えている。	○外面はツタ状文様が連続し、内面は無文。
	仏龕具	2371	口径 7.5 器高 5.5 底径 4.0	○口縁はわずかに内湾しながら上方にのびる。脚端部はヘラ削りがなされている。	○外面には抽象化された文様、内面は無文。
土師器	皿	2356 2359	口径 7.4～12.5 器高 1.1～2.9	○口縁がゆるやかに内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸味を持って仕上げている。外面底部が下に突き出しているものもある。	○内面は淡茶褐色、赤褐色、茶褐色、暗茶褐色。外面は淡茶褐色、黄褐色、茶褐色、暗茶褐色を呈し、細粗砂を含む。

## 第6章 百間川当麻遺跡

単位: cm

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土 師 器	皿 柄 高台付椀	口径 器高 口径 器高 口径 底径 口径 口径	○口縁は緩やかに立ち上がり、厚味 がある。 ○貼り付け高台。 ○体部は内湾丸味に立ち上がり、口 縁部はわずかに外反し、端部は丸 く收める。 ○緩やかに立ち上がり、端部は丸く 收めている。	○内外面共にナデ仕上げ、内底部はヘラ 状工具による豊形、糸切り底。 ○内外面共に横ナデ仕上げ。 ○内面、外面上半は横ナデ、下半はヘラ 磨き、貼り付け高台である。 ○内外面共に横ナデ、2367の底部は糸切 り、2368はヘラ起し。	○淡赤黄色を呈す。若干砂粒を 含む。 ○内面暗赤黄白色、外面淡赤黃 白色。 ○色調は乳白色を呈し、細砂を 含む。 ○白灰色。2368は黄褐色、細砂 を含む。
	煙管	2364 2370		○銅製で、雁首と吸い口とに分かれて出来ている。雁首はろくろ錐で穴をあけた火皿に円筒状にしたものを作っている。吸い口は徐々に直径が細くなっていくものである。2364の火皿の直径は1.6cmの円形、雁首の長さ6.8cm、吸い口は4.3cm、2370は火皿の直径1.6cmの円形、雁首の長さ5.6cm、吸い口は4.9cmを測る。2つの雁首、吸い口は銅板を丸めて作っているものであろう。しかしあせ目部分を見ることはなかった。	
	鉄 釘	2360		○中程より先の欠損したもので、目釘穴は1つ、刃幅3.8cm、厚さは0.45cmを測るのみである。	
	2372 ↓ 2389			○断面が正・長方形をした、いわゆる角釘である。頭部の形態は、一度叩いて延ばした後に折り曲げを行ったものである。全て鉄釘である。	
	円筒埴輪	2390		○「タガ」貼り付け時に内面に指頭 痕が残り、ナデが焼き消されてい る。	○外表面は横方向、内面は縱横斜め方向の 刷毛ナデ、調整後に「タガ」は取り付 けられている。
	皿	2391 ↓ 2400	口径 7.0~12.0 器高 1.15~2.9	○2391の体部は内湾ぎみ、口縁部は 若干外反ぎみで端部は丸く收める。 ○2392は緩やかに内湾し、口縁端部 は丸く收める。見込み部分に凸帯 がある。 ○2393は緩やかに立ち上がり、口縁 端部は丸味を持って收める。 ○2394~2396は緩やかに立ち上がり、 底部がやや上昇底となる。全体的 に厚手となっている。 ○2397~2398は、いずれも緩やかに 立ち上がり、端部は丸い。2397は 体部が、2398は底部が厚めである。 ○2399は緩やかに内湾する体部で先 細りで丸く終る。わずかに上昇底 気味を呈している。 ○2400は底部に丸味を持って立ち上 がる。体部は比較的厚めである。	○内外面は共に横ナデ仕上げ、底部は糸 切り。 ○内面はナデ仕上げ、外面、底部は削り を行っている。 ○外表面は共に横ナデ、内面底部は指オ サエ、糸切り底である。 ○口縁端部は指オサエが行われている。 ○内面は共にナデ仕上げ、底部は糸切 りが行われている。 ○内面底部は指オサエ、他は横ナデによ って仕上げ、糸切り底である。  ○内面は横ナデ、外面はヘラ磨き、糸切 り底である。  ○内外面は横ナデ、底部は指押え、口縁 端部は丸くナデ上げられている。
瓦	平瓦	2401		○側端面は面取りがなされている。	○表面は刷毛状工具による搔き上げ、裏 面はナデ仕上げのため、わずかに布目 が残るのみである。
	軒丸瓦	2402 ↓ 2405		○中央に三巴文、周囲に珠文を12個 あるいはそれ以上を巡らす。外縁 は素文である。	○型入れのようである。裏面は指ナデ、 表面はヘラ磨き、裏面はヘラ削り。巴 の尾部は次の頭部に届くものから、若 干越えるものがある。
	棟瓦	2407		○軒先部で、中房の邊りに菊花文を 16弁数える。外縁は素文。	○型枠に入れて作られたものであり、裏 面はナデ仕上げ。
	軒平瓦	2408 ↓ 2411		○額が角張るもの、丸くなるものと ある。単純化した唐草文がみら れる。	○表面はヘラ削りにて仕上げ、裏面はヘ ラ磨き。軒面はヘラ削りと、指ナデにて 仕上げている。
	壹形土器	2412		○体部の一部分のみ。	○内面は指ナデ、外面はヘラ磨きを施し、 器面に縦4本組、横2本組の凹線文様。
		2413		○厚味のある底部で安定感がある。	○内面は刷毛、外面は横ナデ、底部はヘ ラ起し後ナデによって仕上げが行わ れている。
		2414	底径 12.2	○胴張りを呈するもので、底部は安 定した平底。	○内面淡黄灰白色、外面黄淡褐 色。粗砂粒を含む。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
青磁	碗	2415 口径 17.7	○体部は内湾し、口縁部は外反し、口縁端部は若干肥厚し丸く収めている。		○外面に抽象化された文様。口縁端部内側には浅い沈線あり。
備前焼	壺	2416 底径 17.0	○体部に比べ比較的底部が薄く、外面下端部には2本の沈線がみられる。	○内外面は共にナデ仕上げ、底部はヘラ起しを行う。輪揃で成形されている。	○内面暗灰茶褐色、外面は暗灰色を呈す。半焼けの状態。
	茶入壺	2417 口径 5.3 器高 8.6 底径 5.0	○直立し、丸味を持った口縁部。肩部が張る。底部は若干上げ底となっている。	○外面下部にヘラ削り。底部はヘラ起し、内外面はナデ仕上げ。ロクロで引き上げる方法を用いている。	○赤味をおびた茶褐色を呈している。
	徳利	2418 底径 5.3	○丸味おびた体部で、肩部に穴を開けている(これは焼成前)。	○外面下部にはヘラ削りが見られ、仕上げはナデによる。底部ヘラ起し。・	○若干茶味をおびた暗茶色を呈す。
瓦器	皿	2419	○底部は不整な丸味を持ち、継やかに立ち上がり、端部は丸く仕上げている。	○指オサエで調整し、横ナデで仕上げている。見込み部分に暗文がみられる。	○胎土は灰色、外面は黒色を呈す。指紋がついている。
須恵器	皿	2420 口径 8.0 器高 1.6 底径 4.3	○若干上げ底を呈し、継やかに立ち上がり、端部を丸く収める。	○横ナデにより仕上げる。底部は糸切りによるものである。	○暗灰色を呈している。
	煙管	2421	○雁首、吸い口が1枚の銅板から成り立っていて、火皿部分に結合させて作っている。合せ目は上面に認められる。全長 9.3cm、火皿は0.9~1.1cmの橢円形を呈する。雁首の部分が不整なのは、打ち叩いたためである。		



百間川当麻遺跡遠景（南東から）

図版36

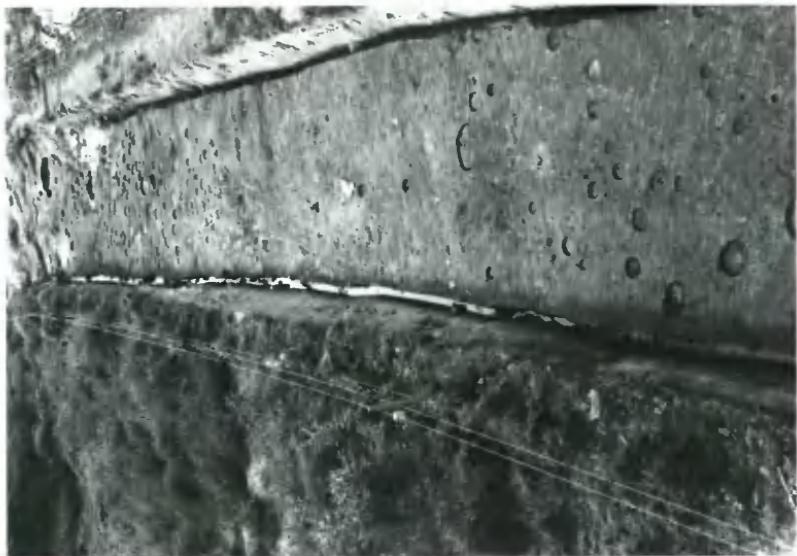


1 A・B 地点調査区 調査前全景（東から）



2 B・C・D 地点調査区 調査前全景（西から）

図版37

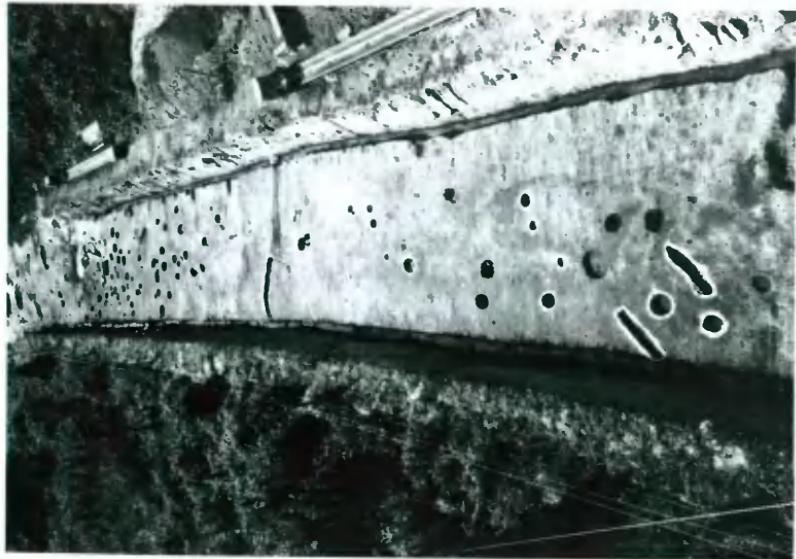


1 A地点調査区第1橋構面全景(東から)



2 A地点調査区第1橋構面全景(西から)

図版38

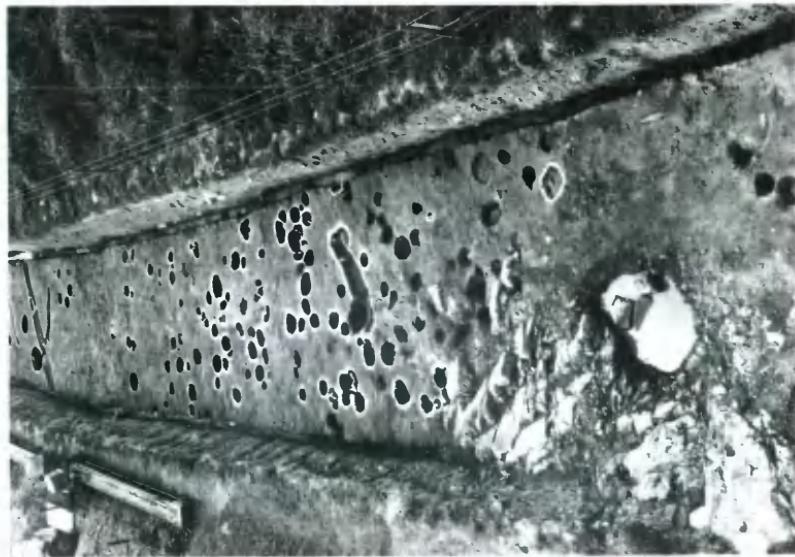


1 A地点調査区第2遺構面全景（東から）



2 A地点調査区第2遺構面全景（西から）

図版39



図版40



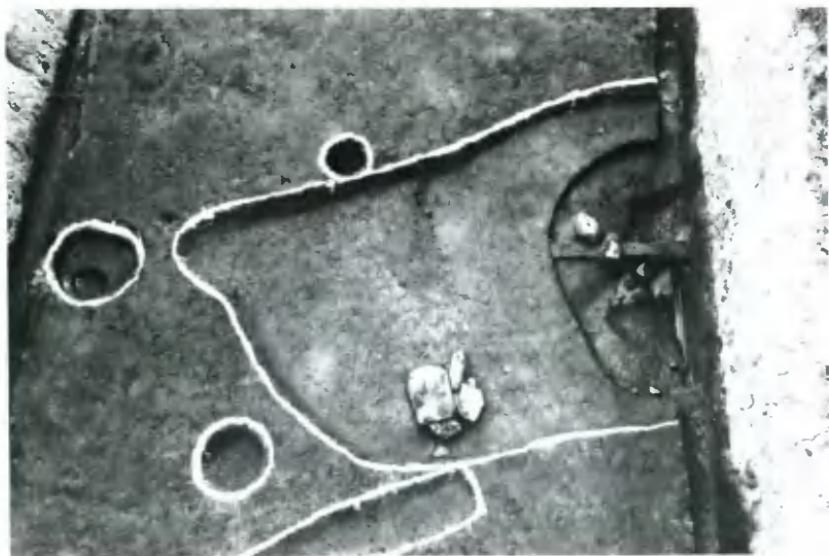
1 A 地点調査区第4邊縁面全景（東から）



2 A 地点調査区第4邊縁面全景（西から）



1 P-2 検出状況（北西から）



2 P-4・P-5 検出状況（西から）

図版42



1 中世墓 検出状況（東から）



2 中世墓 古銭出土状況（西から）



1 井戸1 検出状況（北から）

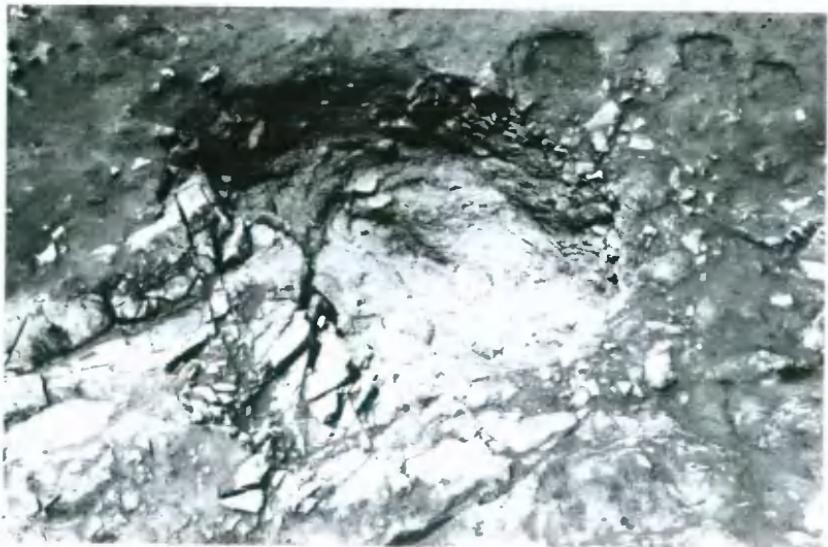


2 井戸1 全景（北から）

図版44



1 井戸 1 構築状況（北から）



2 井戸 1 掘り形全景（北から）



1 D-7~9・P-8~10 検出状況（東から）



2 テラス状遺構 1・2 検出状況（東から）

図版46



1 P-9・P-10 検出状況（南から）



2 P-11 検出状況（南から）

図版47



1 C 地点調査区全景（東から）



2 C 地点調査区全景（西から）

図版48



1 D-11・D-12 検出状況（東から）



2 D-11・D-12 検出状況（西から）



1 D-13 検出状況（東から）

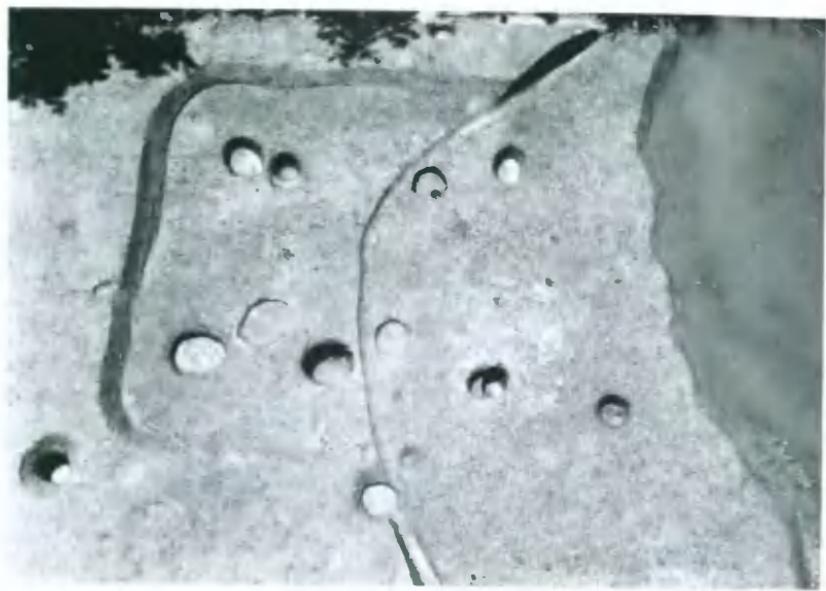


2 P-13 検出状況（東から）

図版50



1 H-2 検出状況（北から）



2 H-1・H-2 検出状況（北から）

図版51



1 D-16 採出状況（北から）

2 D-17 採出状況（北から）



図版52



1 D-18・D-19・P-14 検出状況（西から）



2 D-19 検出状況近景（南から）



1 P-14 検出状況（北から）



2 P-14 検出状況 近景（西から）

図版54



1 井戸3 検出状況（北から）



2 井戸3 遺物出土状況（西から）

図版55



1 D-21・P-17 検出状況（西から）



2 D-22・D-23 検出状況（北から）

図版56



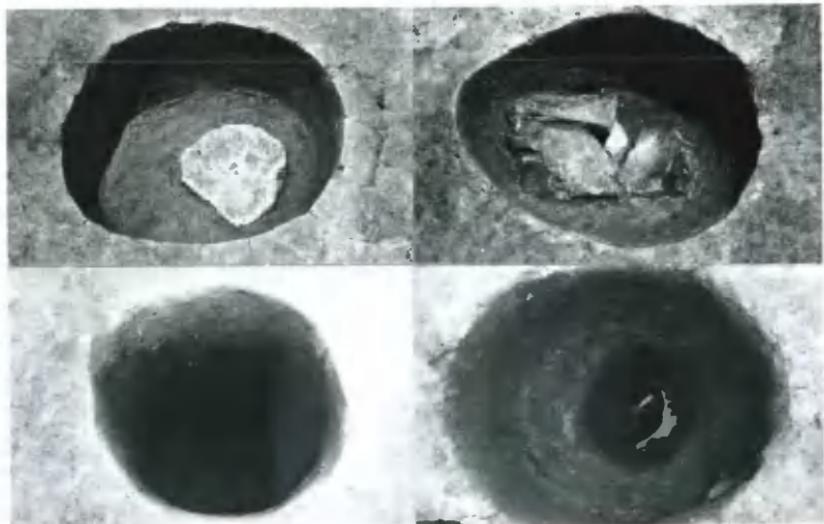
1 P-15・P-16 検出状況（南から）



2 P-18 検出状況（南から）



1 P-19 検出状況（西から）



2 C 地点調査区柱穴 検出状況（西から）

図版58



1 井戸2 検出状況(1) (北から)



2 井戸2 検出状況(2) (北から)

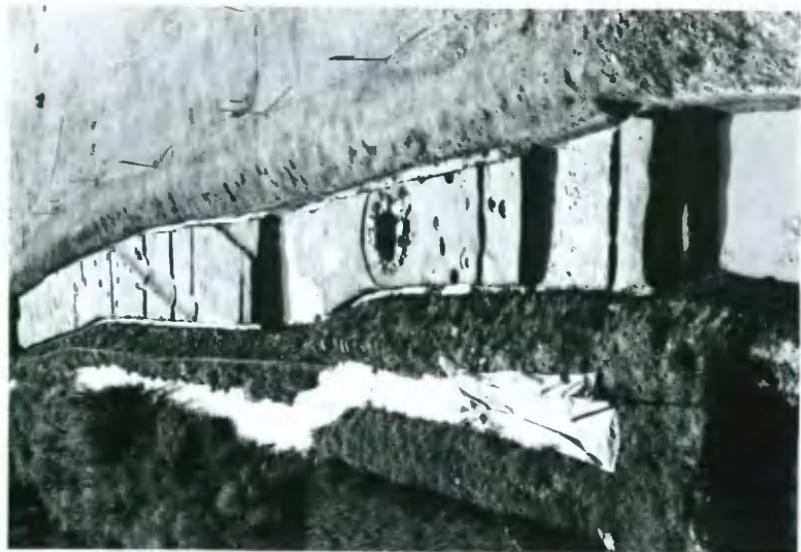


1 井戸2 石組み状況（南から）



2 井戸2 曲物検出状況（南から）

図版60



1 D 地点調査区全景（東から）



2 D 地点調査区全景（西から）

図版61



1 D-24・D-26・P-20 検出状況（西から）

2 D-25 検出状況（西から）



図版62



1 D-24・D-26・井戸4 掘出状況(東から)



2 D-27・D-28 掘出状況(西から)



1 井戸4 検出状況(1) (東から)



2 井戸4 検出状況(2) (東から)

図版64



1 当麻丘陵部調査区全景（東より）



2 当麻丘陵部調査区全景（東より）



1 当麻丘陵部調査区近影（北より）



2 丘陵部上段より下段を望む（北々東より）

図版66



1 丘陵部下段より上段を望む（南西より）



2 遺構全景 航空写真（西上空より）



1 東西トレンチ (T-6) (東より)



2 トレンチ (T-3) 土層断面 (北より)

図版68



1 トレンチ (T-5) 土層断面 (北より)



2 トレンチ (T-6) 土層断面 (北より)



1 丘陵北端部 堀-1・2, 溝-1 全景 (南西より)



2 丘陵北端部 堀-1・2, 溝-1 全景 (南より)

図版70



1 堀-1・2, 溝-1 全景 (西北西より)



2 丘陵北半分遺構全景 (南西より)



1 土塙墓 全景（左…土塙墓2、右…土塙墓1）（東より）



2.



3.



4.

2 1…土塙墓2 2…土塙墓1 3…土塙墓3 4…土塙墓4

図版72



1 建物II・土塙墓全景（北西より）



2 建物III 全景（南西より）



1 丘陵上段西側遺構全景（南より）



2 丘陵南東部遺構全景（北より）

図版74



1 丘陵南側遺構全景（北々東より）



2 建物V全景（北東より）

図版75



1408



1409



1465



1410



1411



1465



1414



1463



1464



百間川当麻遺跡右岸用水調査区出土遺物（1）

図版76



1415



1417



1416



1418



1585



1586



百間川当麻遺跡右岸用水調査区出土遺物（2）

図版77



1419



2267



1420



1886



1587

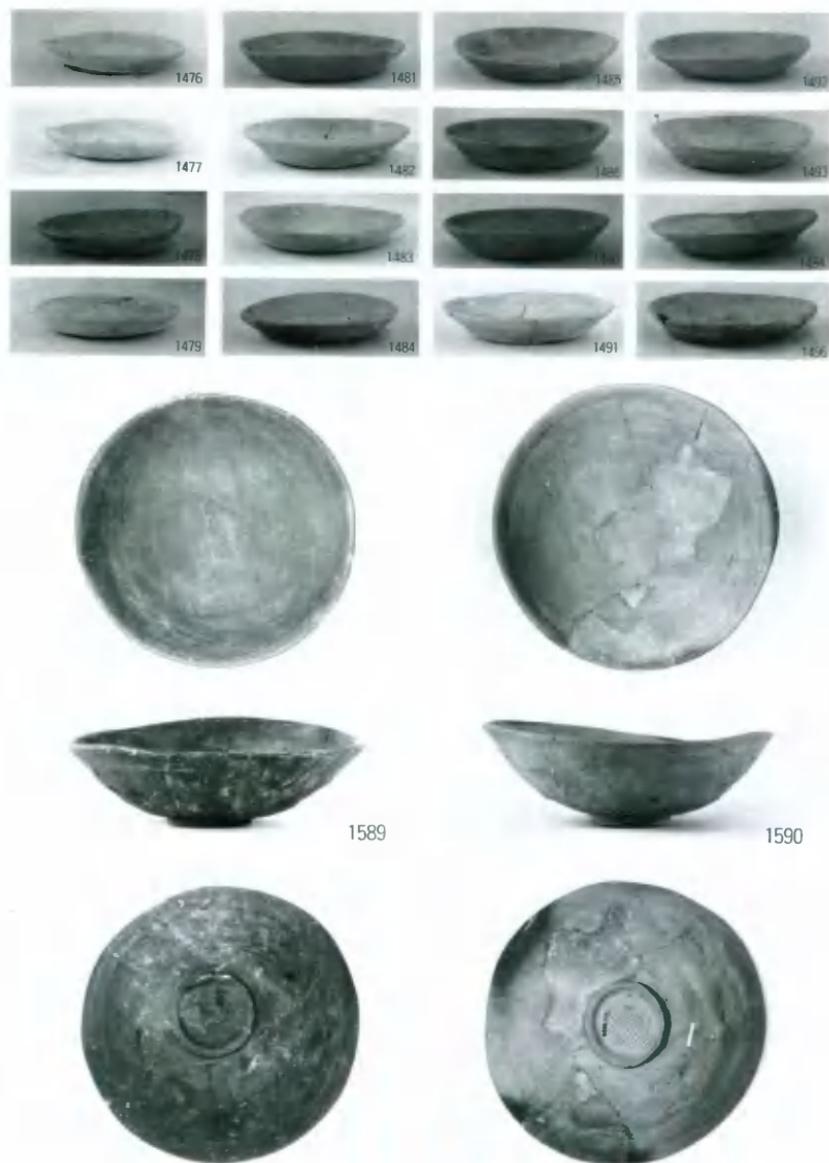


1588



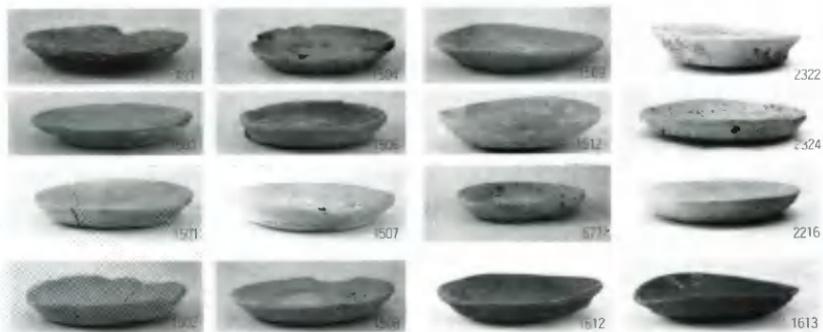
百間川当麻遺跡右岸用水調査区出土遺物（3）

図版78



百間川当麻遺跡右岸用水調査区出土遺物（4）

図版79



1591

1592



百間川当麻遺跡右岸用水調査区出土遺物（5）

図版80



2339



2340



2347



2419



2417



2418

堀-1, 柱穴, 土塙内出土遺物



2342



2345



2369



2371



2355



2361



2364



2366



2370

図版82



2338



2342



2337



2406



2404



2405



2410



2407

トレンチ東斜面造成土層内出土遺物

## 第7章 まとめ

### 第1節 水田遺構について

百間川遺跡群において、最初に水田遺構を検出したのは、昭和52年度の調査においてである。検出された場所は、百間川沢田遺跡の低水路部分の調査においてであった。その概要についてはすでに報告されているとおりである(註1)。その後、百間川沢田遺跡を中心に水田遺構の調査が進められ、全容が明らかになりつつある。右岸用水路の調査が本格化する頃には、その存在と土壤構造もほぼ判明しており、水田遺構への関心をもって調査した。

今回、報告された調査区は、右岸用水路のため調査範囲が最大で幅6mであり、多くの調査区は幅3mであったため広範囲に水田遺構の様相を知ることができなかった。水田遺構の具体的な問題点などは、低水路部の報告にゆずるとして、今回は右岸用水路の調査で判明した事実と若干の問題点について述べる。

今回の報告の中で水田遺構を検出したのは、百間川沢田遺跡の第1, 2, 3, 4調査区である。いずれの水田遺構も数10cmの砂層がその上面を覆っていた。この砂層は、低水路の調査においても確認されているもので、広範囲にわたりこの砂層が堆積している状況が予想される。この砂層は、堆積状況からみて一時的な洪水によるものであろうと考えられる。この洪水による砂層の堆積こそが、百間川遺跡群の水田遺構の保存を良好なものとした主たる原因とも考えられる。このことは、群馬県内の水田遺構を覆っている火山灰と同様な作用をしている。

また、その砂層の上層には、暗灰褐色を呈する粘質土層が存在する。この暗灰褐色粘質土層は、微高地部、低湿地にも存在し、住居址、井戸、及び溝などの遺構が検出されている。この遺構、及び包含する土器の時期は、百古Ⅰ期を示すものである。この層の存在は、遺物をあまり伴わない水田遺構の時期の下限を示す重要な要素となっている。

水田遺構には、水田耕作土層と考えられる暗灰色粘土層(約5cm前後)が水平堆積している。その水田耕作土層の下には、床土と考えられる層が存在する。さらに、微高地上、微高地縁辺部の水田耕作土下層には、鉄分、マンガンが分離し集積層をなしている。低湿地部においては、この鉄分、マンガンの集積層は認められない。前者の場合は、第1, 3, 4調査区で、後者は、第2調査区の水田遺構において認められる。この事は、微高地上、微高地縁辺部においては乾田ないし半乾田で、低湿地部においては、半湿田という耕地利用形態が異なる水稻耕作が行なわれていた可能性が考えられる。この様に当時の土地利用は、微高地上、微高地縁辺部、及び低湿地と、耕作が可能な土地はほとんど耕地化していると考えられる。この様なことからも、第2, 3調査区間の旧河道埋没地にも水田遺構が存在した可能性は強い。

また、第1, 2, 3調査区では、百間川遺跡群の水田遺構を特徴づけている『島状高まり』遺構が

## 第7章 まとめ

多く検出された。この『島状高まり』遺構は、土壤構造からみて水田遺構と同時に存在したことはまちがいなく、水田遺構と有機的関係にある。また、『島状高まり』遺構は、生活面としての微高地が水田として掘削された残存部であることが明らかになっている。これは、逆に言うと『島状高まり』遺構が多く存在する地域は、微高地上、及び微高地縁辺部であるといえる。これは、微高地、及び微高地縁辺部が、当時の社会的要求に基づき、耕地化されていく過程の遺産と考えることができよう。この『島状高まり』遺構の形態を見ると、第1、4調査区で検出されているような不整円形、円形、橢円形を呈するものと、細長く土手状を呈するものに大別できる。前者のものは、耕地化していく段階で、有益かつ障害物として残存せられたものと思われる。また、後者の場合は、水田の大きな区画を示す畦の機能を意識している。しかし『島状高まり』遺構については、まだ問題点が多い。

次に畦畔について少し述べておく。これは、水田面に幅20~30cm、高さ約5cmの凸状に盛り上がる部分が存在し、それが区画性をもっている。これを畦畔と判断した。畦畔は、水田耕作土と同質の土壤で構成されている。また、畦畔には、一部に凸部が途切れる部分が検出されている。これは、水田から水田へ水を引くための水口と考えられる。畦畔は、第3調査区のように微高地に取り付いたり、第4調査区の『島状高まり』遺構を意識しかつ規制されるように存在する。-

今回の報告の調査区では、水田遺構からの遺物は非常に少なかった。しかし、先述したように、上層の遺構、包含層からみて百古I期を下らない時期であることは明らかである。また、『島状高まり』遺構中や水田耕作土の下層から出土した土器は、百後II期のものであった。このことから、今回検出した水田遺構は百後II期から百古I期の内に使用されたものと考えられる。さらに、砂層中に検出できた少量の土器片からみて、この水田遺構は、百後IV期に洪水により埋没したものと思われる。

また、第3調査区で明らかになったことであるが、以上述べてきた水田遺構の下層に水平堆積を示す粘土層が存在することがわかった。この事は、百後II期より古い水田遺構の存在を示すものである。この下層の水田については、今後の調査で明らかになるであろう。

以上は、百間川沢田遺跡の弥生時代後期末の水田遺構について述べたが、百間川長谷遺跡では、平安時代と思われる水田遺構が検出されている。

水田址は、茶褐色を呈する土層の上層に、暗灰色を呈する粘質土があり、その境に鉄分の集積が見られたことから、暗灰色を呈する層位を水田層と考えるものである。水田層は、西側の山寄りの地山層を、ほぼ垂直に切り込み、水田とし、そこから東へ9mの位置で、ほぼ南北に向く畦畔を検出した。畦畔の基底部の巾は広く、1.4mを測る。畦畔の土層と、水田層の土層とは、ほとんど変わることがなく、水田層の土を盛り上げた可能性が強い。

以上、右岸用水路の調査区で検出した水田遺構を中心に概要を述べた。しかし、今回は、調査範囲に制約があって、水田遺構の具体的な様相については述べられないだけに問題点のみを多く残すことになった。この点については、低水路部の報告の時に改めて述べてみたい。

(井上・中野)

註1 「旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査概要」『岡山県埋蔵文化財報告』8 岡山県教育委員会  
1978年3月

## 第2節 中世の土器について

本報告書に掲載されている遺跡からは、鎌倉時代から室町時代にかけての中世の時期に属する遺物が数多く出土している。ここで百間川当麻遺跡右岸用水調査区（以下については「百當右」と省略する場合がある）から出土した遺物を参考に、代表的な器種について若干の考察を試みたい。

### 土師質土鍋

岡山県南部地方から広島県南東部地方の中世に属する遺跡（註1）からは、完形品がほとんど認められないものの、一般的に数多く出土している大形の土器である。

口縁部はいずれも斜め上方へ立ち上がるが、内縁または外縁しているものと、直線的に張り出しているものが認められる。口縁端部には、肥厚して外面に中央部が浅く窪んだ面を有するものと、全体に丸く仕上げているもののが存在する。遺構に伴う良好な一括資料（註2）を検討した結果では、口縁端部に面を有するものと丸く仕上げているものの形態の相違は、同時期におけるそれぞれの土器の個体差による現象と推定され、時間的な経過によって生じた形態の変化と理解するのは無理である。頸部はいずれも屈曲して、内面に稜が認められる。胴部は大きく内縁して斜め上方へ立ち上がり、器壁は比較的薄くなっている。胴部の最大径は、頸部との境界部分に存在するものが多い。底部はいずれも丸底で、器壁が弓なりに彎曲して胴部へ移行する。

この土師質土鍋には、胴部の中位に支脚が伴うもののが存在する。ところが遺跡から出土する支脚には、胴部から欠損して支脚そのものが分離された状態のものが多いから詳細は不明であるが、すべての土師質土鍋が支脚を有するのではないと推定される（註3）。支脚を有するもの（上東765・771）はやや小形品のものが多く、支脚の数は3本で、2本や4本以上を有するものは認められない。支脚を有しない土師質土鍋（上東766～768・772・773）は、支脚を有するものよりも大形品のものが一般的であるが、口縁部や胴部の破片だけで支脚の有無を判断することは不可能である。支脚を有する土師質土鍋は、平安時代後期から鎌倉時代にかけての時期に属する遺跡で多く認められ、量的に増加しているのは鎌倉時代である。支脚を有するものと支脚を有しないものは、同時期に共存するから、使用する用途の違いがあったと考えたい（註4）。

室町時代になると、内面頸部の屈曲部分に内耳を有する土師質土鍋（註5）が出現する。内耳は対になって存在し、2箇所に円孔が認められるから、つる等によって下げられたと考えられる。この内耳を有する土師質土鍋の存在する時期になると、内耳や支脚を有しないやや大形のものは共存して認められるが、支脚を有するものは存在しない。支脚を有する土師質土鍋が、内耳を有するものに変化している。したがって、支脚を有する土鍋が存在しない沖の店遺跡（註6）や、出土量が極めて少ない草戸千軒町遺跡（註7）は、室町時代に栄えた遺跡と考えられるのである。

土師質土鍋には、支脚を有するもの、内耳を有するもの、支脚も内耳も有しないやや大形のものが存在するが、手法はいずれも同じで、それぞれの器種や時期差によって相違することはない。

## 第7章 まとめ

口縁端部は、いずれも横なでを施している。内面の口縁部には、横方向の櫛状工具の痕跡（註8）が認められ、上面に横なでを加えているものも存在する。内面の胴部には、横方向の櫛状工具の痕跡が顕著に認められる。内面の底部には、櫛状工具の痕跡が交叉しており、方向が定まっていない。外面の器表面には指頭圧痕が認められ、口縁部から胴部にかけては、縦方向の櫛状工具の痕跡が存在する。外面の底部には、交叉する櫛状工具の痕跡が認められる。

断面が円形に近い形態を呈する支脚は、いずれも外面の胴部に貼り付けている。貼り付け部分には、指頭圧痕が顕著に認められる（上東765・771）。内耳も貼り付けであるが、口縁部に面した上位の貼り付け部分は丁寧に仕上げているものの、胴部に面した下位は二次的な調整を加えないものが多い（沖の店205～233）。

このような観察知見から、この土器の製作行程を考えてみたい。土師質土鍋は器形が大きいから、底部から頸部にかけては粘土紐を巻き上げて作られている。頸部にはいずれも粘土の接合が認められるから、底部から頸部まで形を整えた後に、粘土紐を板状に伸ばした口縁部を貼り付けている。

底部から口縁部までの形ができると、底部から頸部の粘土紐の継ぎ目や頸部と口縁部の接合部分は、空間が生じないように粘土を締めつける丁寧な調整が加えられたと推定される。支脚や内耳は、この段階になって貼り付けられる。貼り付け部分は、剥落しないように調整が加えられる。支脚については、口縁部が水平で全体が安定するように、支脚相互のバランス調整が行われる。

ここまで作業が進められると、櫛状工具を使用して器表面の仕上げに移行する。まず先に着手するのは外面である。その仕上げ作業の順序は、口縁部から胴部上位を行った後に、胴部下位から底部に進めている。口縁部から胴部上位は、片手を土器の内面にあてがった手持ちの状態か、あるいは片手を内面の頸部または口縁端部に添えて、底部から胴部の一部を作業台の上や地面に斜めに置いた状態で、櫛状工具を口縁部から胴部に向けて縦方向に移動させている。胴部下位から底部は、土器を口縁部が下になるように反転して置いた状態で行ったと推定されるが、櫛状工具の移動方向は定まっていない。内面の器表面の仕上げは、手持ちによって行われる。なぜならば、どの土師質土鍋を観察しても、外面の器表面に施された櫛状工具の痕跡の上面に、指頭圧痕が顕著に認められるからである。また支脚を有しないやや大形のものであっても、外面に存在する櫛状工具の痕跡が磨滅したり消滅することがないから、作業台の上や地面に置いて仕上げを行うことはなかったと考えられる。内面の仕上げ作業は、櫛状工具によって口縁部から底部に向けて行われる。櫛状工具の動きは、口縁部から胴部上位は、原則的に横方向を示している。胴部下位から底部は、外面と同様に方向が定まっていない。口縁部から胴部上位と胴部下位から底部では、仕上げに使用した工具が異なっているものも認められる（註9）。最後の仕上げ作業は、口縁端部である。この作業も手持ちで行われる。湿った麻布または動物の革のようなものを使用し、親指を外面、人差指を内面に当てて行ったのであろう。この親指と人差指の微妙な動きによって、口縁端部が内彎または外彎するのである。口縁端部に横なでを加えることによって、口縁部上位の内外面に存在する櫛状工具の痕跡が消滅している。この作業が終ると、土器を乾燥させて焼成に移るのである。

なお土師質土鍋の胎土中には、1.0mmから4.0mmまでの白色の砂粒を多く含み、焼成はいずれも良好

で、赤褐色または褐色を呈している。支脚や内耳を有するやや小形のものと、支脚や内耳を有しない比較的大形のものでは、用途が相違することが考えられるが、いずれも外面の器表面に媒が付着しているから、煮沸に使用されたと推定される。

### 土師質高台付椀

従来から岡山県南部の児島半島を中心に、主として貝塚から発見されていた土器で、俗に「早島式土器」と呼ばれている（註10）。近年になって発掘調査が実施されることが多くなり、この土器の出土する遺跡（註11）も急激に増加している。その遺跡の分布範囲は、岡山県南部地方から広島県南東部地方の地域に集中しているが、特異な遺跡として、大阪府高槻市柱本地先の淀川河床に所在する柱本遺跡（註12）がある。なお高台付椀の土器を焼成した窯そのものは、岡山県内では沖の店遺跡で検出されている（註13）。

まず百間川当麻遺跡右岸用水調査区の井戸3から出土した土器（百當右1408～1462）について、形態や手法の特徴を検討する。体部から口縁部にかけては、緩やかに内彎して斜め上方へ立ち上がる。口縁端部はわずかに肥厚して全体に丸く仕上げているが、屈曲して短く外傾するもの（百當右1412・1413・1434）も認められる。外面体部の中位からやや上位にかけては、いずれも鈍い稜が存在する。その鈍い稜と口縁端部の間に、さらに極めて鈍い稜がめぐらされて、口縁部外面の器表面が凹凸になっているもの（百當右1409・1413・1420）も認められる。外面の底部には、いずれも貼り付け高台が存在する。高台の断面は、三角形に近い形態を呈するものが多く、接地部分は全体に丸く仕上げている。高台の断面が台形になって、接地部分に面が認められるもの（百當右1408・1420）もわずかに存在するが、本来の形態は丸く仕上げられていたにもかかわらず、焼成前の段階で変形しているのである。底部の器壁は、体部や口縁部の器壁よりも厚くなっているものが多い。

この土器の内面は、全体に丁寧な不定方向のなでを施し、器表面を平滑に仕上げている。外面の口縁部は、いずれも横なでを施している。外面の体部は、指頭圧痕が顕著に認められて二次的な調整を加えていないもの（百當右1412～1420、1439～1448）と、指頭圧痕の上面に指頭による不定方向の粗いなでを施しているもの（百當右1408～1411・1421～1438）が存在する。高台の貼り付け部分は、いずれも横なでを加えている。外面底部の高台より内側には、指頭圧痕や板目痕跡（註14）が残存しているものが多い。内面の見込み部分には、重ね焼によって生じたと推定される円形を呈した高台の痕跡が認められる。

このような観察知見から、井戸3から出土した土器の製作過程を考えてみたい。内面全体に丁寧ななでを施して、器表面を平滑にしているにもかかわらず、粘土の接合部分が明瞭に認められる土器（百當右1419）が存在する。それによると、底部から口縁部にかけては、粘土紐を巻き上げて作られる。巻き上げ作業が終ると、継ぎ目に空間が生じないように、粘土の締めつけを行っている。その場合には、内外面の器表面に残存している指頭圧痕から推察して、底部、体部、口縁部の3段階に分けて作業を進めていると考えられる。底部は手持ちの状態で、片手を使用して内面から押さえついているものと、作業台の上や地面に置いた状態で、内面から押さえついているものがある。体部は片手で土器

## 第7章 まとめ

を持ち、利き手の親指を外面に、残る4本の指を内面に当てて、強くなでつけるように挟みつけている。口縁部は体部と同様の手法である。この粘土の締めつけ作業によって、体部と口縁部の器表面には、横方向に連続した指頭圧痕が残存するのである。

ここまで作業が進められると、湿った麻布または動物の革のようなものを使用して、手持ちの状態で内外面の仕上げに移行する。内面の体部から口縁部と外面の口縁部は、片手で土器を持って回転させながら、利き手の親指を外面に、残る4本の指を内面に当てて作業を行っている。内面の見込み部分は、不定方向の丁寧ななでを施している。内面の体部から口縁部は、さらに不定方向のなでを加えている。

この段階でしばらく乾燥させると、高台の貼り付けに移行する。この作業は、作業台の上や地面上に、土器の口縁部が下になるように反転して置いた状態で行ったと推定される。粘土紐を輪にして底部の中央に押し付け、親指と人差指で全体を摘んで高台の形を整えた後に、貼り付け部分を横なでして高台が剥離しないようにしている。高台が貼り付けられると、口縁端部のみについて再調整を行う。高台の接地部分が、押しつぶされて変形しているもの（百當右1408・1420）もわずかに認められるから、作業台の上や地面に置いた状態で作業を進めることがあったと考えられるが、手持ちの状態で行うのが一般的であろう。この作業は、先の仕上げ作業と同様に湿った麻布や動物の革のようなものを使用するが、今度は利き手の親指と人差指、さらには中指で口縁端部を挟み、片方の手で土器に回転を加えながら作業を進めている。この仕上げ作業によって口縁端部の形態が決まるが、外方へ短く摘み出しているもの（百當右1412・1413・1434）も認められる。口縁部の仕上げは、高台を貼り付ける前に全体を行った後に、さらに最終段階で端部の調整を加えているから、口縁部外面に認められる鈍い稜が、2段になっている（百當右1409・1413、1420）のである。口縁端部の仕上げが最後になるのは、高台の貼り付けによって口縁端部の形態が変形するからであろう。なお外面の体部は、粘土の締めつけを行っているだけで仕上げ調整を施していないもの（百當右1412～1420・1439～1448）が多く、仕上げ調整を加えているもの（百當右1408～1411・1421～1438）も、指頭による不定方向の粗いなでを施すだけである。

形ができ上がると、乾燥させて窯で焼成する。土器を窯で焼成する場合には、見込み部分にいずれも高台の痕跡が残存しているから、土器を順々に高く積み上げる重ね焼を行ったと推定される。

これらの土器の胎土中には、1.0mmから5.0mmの白色の砂粒を多く含む。焼成はいずれも良好で、淡黄白色または淡褐色を呈している。完形品または完形品に近い形態が残存する土器（百當右1408～1420）の計測値は、口径14.2cm～15.3cm、器高4.2cm～5.4cm、高台径5.3cm～7.4cmを測り、平均値は、口径14.6cm、器高4.8cm、高台径6.3cmである。

ここで岡山県教育委員会が調査を実施した遺跡で、ほかの器種が共伴する良好な一括資料を含む遺構から出土した高台付椀について概観したい。

沖の店遺跡1号窯址から出土した高台付椀（註15）は、前述した百間川当麻遺跡の井戸3から出土したものよりも全体に器壁が厚くて土器そのものの法量が大きく、形態や手法もかなり相違している。この土器は、ロクロ（回転体）の上に粘土紐を巻き上げて作っている。粘土紐の継ぎ目に空間が

生じないように、ロクロを徐々に回しながら両手で粘土を締めつけて形を整えると、さらに同様の手法で内外面の器表面の仕上げを行っている。ここまで作業が進むと、ロクロを回転させて底部を糸で切り離し、高台を貼り付けている。回転糸切り痕跡が、外面底部の高台より内側に明瞭に認められるもの（沖の店3・4）がある。高台の貼り付け以後の作業行程は、百間川当麻遺跡井戸3の土器と同様の手法によって行われると推定されるが、貼り付けられた高台は異なっている。断面が四角形または台形に近い安定した形態を呈し、接地面に浅い窪みが認められるものが多い。口縁端部はいずれも丸く仕上げているが、短く外反させているものが多数を占めている。外面の器表面は、口縁端部から高台の貼り付け部分まで全体に磨きに近い丁寧な面を施している。井戸3から出土した土器のように、体部の器表面に仕上げ調整を加えないものは存在しない。外面の器表面の仕上げは、3段階から4段階に分けて入念に行われているものばかりで、器表面に鈍い稜が残存している。

これらの土器の胎土中には、3.0mm以下の赤色粒に混在して金雲母粒も認められるが、水漉粘土に近い良質の粘土を使用している。焼成はいずれも極めて良好で、器表面にひび割れが生じている土器も認められ、赤褐色または灰褐黄色を呈している。計測値表（沖の店表1）によると、口径14.3cm～16.4cm、器高5.2cm～6.3cm、高台径5.8cm～7.4cmを測り、平均値は、口径15.7cm、器高5.9cm、高台径6.6cmである。

昭和54年3月に調査が実施された百間川当麻遺跡低位部調査区の中世土壙墓から出土した高台付椀（註16）は、右岸用水調査区の井戸3から出土した土器の形態や手法の特徴をよく残している。その土器の計測値は、口径14.1cm～14.3cm（14.2cm）、器高4.4cm～5.4cm（4.9cm）、高台径5.0cm～5.2cm（5.1cm）である。

上東遺跡のP-123井戸状遺構から出土した高台付椀（註17）はどうであろうか。この土器には、曲げ物の井筒内から出土したもの（上東764）と、埋土中の土器溜りより出土したもの（上東762・763）があるから、前者がやや先行する時期になると考えられる。土器の形態は、井戸3や中世土壙墓から出土したものに酷似するが、全体の器形が小さくなつて外面の口縁部の仕上げが簡略化されている。つまり井戸3や中世土壙墓から出土した土器は、高台を貼り付ける前の段階に口縁部全体を横なでた後に、さらに最終段階になって口縁端部だけの部分に再調整を加えているが、P-123井戸状遺構から出土した土器は、最終段階で一度だけ口縁部全体を簡単に横なでするように手法が変化しているのである。胎土中に含まれる砂粒はより多くなり、いずれも淡灰白色に発色して淡黄白色を呈するものは存在しない。曲げ物の井筒内から出土した土器の計測値は、口径14.6cm、器高5.3cm～5.9cm（5.6cm）、高台径5.4cmである。埋土中の土器溜りより出土した土器で完形品のもの（上東762）の計測値は、口径14.0cm、器高4.9cm～5.5cm（5.2cm）、高台径5.7cmである。

川入遺跡のP-9土壙からは、100個体以上の高台付椀（註18）がほかの器種の土器と共に出土している。これらの土器は、上東遺跡のP-123井戸状遺構から出土した土器と形態や手法が酷似しているが、器形はさらに小さくなっているものが多い。それぞれの土器の計測値表（川入表3）によると、かなりのはらつきが認められるのは、遺構の性格によると考えられる。調査担当者が抽出した100個体の土器は、口径11.0cm～15.0cm、器高3.0cm～5.0cmの範囲内に含まれ、集中しているのは、

## 第7章 まとめ

口径12.0cm～13.5cm、器高3.8cm～4.5cmである。

御堂奥遺跡（註19）で検出された建物址の北辺部からは、30個体以上の高台付椀が出土している。上東遺跡P—123井戸状造構や川入遺跡P—9土壙から出土した土器と比較すると、さらに器形が小さくなつて全体の器壁が薄いものが多い。口縁端部の仕上げ手法に個体差が認められ、法量にもばらつきがあるものの、口径の平均値は12.0cmで、器高は4.0cm～4.5cmになっている。

本報告書に掲載されている百間川岩間遺跡の土壙Ⅱから出土した高台付椀（第72図26～39）は、御堂奥遺跡の建物址北辺部から出土した土器よりも全体の器壁が厚くて安定した高台を貼り付けているが、土器そのものの法量はわずかに減少している。完形品または完形に近いもの（岩間26～35）の計測値は、口径11.0cm～12.3cm、器高3.5cm～4.1cm、高台径4.7cm～5.6cmを測り、平均値は、口径11.7cm、器高3.8cm、高台径5.0cmである。

上東遺跡のH—9住居址から出土した高台付椀（註20）は、内外面の器表面の仕上げ調整が極度に簡略化され、胎土中に含まれる砂粒が著しく多くなつて焼成が粗悪である。百間川岩間遺跡の土壙Ⅱから出土した土器と比較すると、さらに全体の器形が小さくなっている。それらの計測値は、口径10.8cm～12.2cm、器高2.8cm～3.6cm、高台径4.0cm～4.7cmを測り、平均値は、口径11.4cm、器高3.4cm、高台径4.4cmである。

ところで畿内では、奈良時代から平安時代にかけての土師器製作の手順について、器形の用途にかなうものができるかぎり、ぎりぎりまで簡略にしようとする傾向があり、器形の種類が減少して、土器そのものの法量が縮小することが指摘されている（註21）。この現象は、平安時代から鎌倉時代にかけて使用された瓦器についても認められている（註22）。畿内の土師器や瓦器に認められる技術の簡略化と法量の縮小化傾向が、岡山県南部地方から広島県南東部地方の地域特有の土師質高台付椀にもあてはめることができるならば（註23）、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査で出土した土器は、百間川当麻遺跡井戸3——百間川当麻遺跡中世土壙墓——百間川岩間遺跡土壙Ⅱの変遷を示している。さらに岡山県南部地方の遺跡から出土した資料を加えるならば、沖の店遺跡1号窯址——百間川当麻遺跡井戸3——百間川当麻遺跡中世土壙墓——上東遺跡P—123井戸状造構（上東遺跡P—123井戸状造構井筒内）——上東遺跡P—123井戸状造構埋土中土器溜り）——川入遺跡P—9土壙——御堂奥遺跡建物址——百間川岩間遺跡土壙Ⅱ——上東遺跡H—9住居址となる。

この高台付椀を焼成した窯は、沖の店遺跡1号窯址で確認されたように、比較的簡単な構造で規模も小さいから、集落の周辺で構築するのは容易であると考えられる。したがつてこの土器の生産地も、岡山県南部地方から広島県南東部地方の地域に広く分布していることが推定されるから、地域差があることも考慮しなければならないであろう。

俗に「早島式土器」と呼ばれているこの高台付椀の形態に酷似した土器は、奈良時代や平安時代の時期でも認められる。たとえば毎戸遺跡（註24）では、高くてしっかりした貼り付け高台を有する椀が出土している。百間川当麻遺跡右岸用水調査区のC地点でも、内外面の器表面全体に丹塗りを施したもの（百當右1886）が出土している。これらの土器と沖の店遺跡1号窯址から出土した土器（沖の店1～47）を比較すると、全体の器形が著しく異なつてゐる。奈良時代や平安時代の高台付椀が、時

間の経過とともに変化して中世の高台付椀に移行していると考えるならば、平安時代後期の時期に大きな画期が認められる。すなわち、短くて安定した高台を有し、器壁が厚くて法量の大きな土器が、突如として出現しているのである。この特異な現象がいかなる要因によるのか、詳細は不明であるが、あえて想像をたくましくすれば、外来磁器の影響によるものではなかろうか。

この土器の終末段階は、どのようになるのであろうか。技術の簡略化と法量の縮小傾向がさらに進むならば、外面の器表面は不調整で高台が存在しない小形の椀になると考えるのが自然であろう。広島県福山市の芦田川中州に所在する草戸千軒町遺跡（註25）で検出された遺構から出土した土器を参考にすれば、多種類の遺物が共伴する良好な一括資料を含む遺構が多く検出され、土師質土器の編年（註26）も試みられているが、椀の終末段階の形態変化が把握できる資料は少ないようである。昭和53年度に発掘調査が実施された尾道市土堂2丁目に所在する尾道市街地遺跡（註27）の調査では、20層からなる安定した良好な層位が確認されて、草戸千軒町遺跡では得られなかった成果が提示されている。その調査結果を参考にしたい。

土師質椀が存在するのは、室町時代後期の8層から、鎌倉時代後期から室町時代初期にかけての時期の18層までである。18層から出土した椀は、高台を有する形態のものばかりで、高台を有しない丸底のものが混在して出土している。ところが8層から14層になると、高台を有しない丸底のものばかりで、高台を有する形態のものは存在しない。つまり予測されたように、椀の形態が高台を有するものから高台を有しない丸底のものに変化しているのが明らかなのである。なお底部を押さえて安定させた椀は、15層と17層を除く13層から18層にかけて出土しているが、畿内で出土している「へそ皿」に形態や手法が類似しているから、鎌倉時代後期の時期に畿内からの影響で出現した土器と考えたい。この土器は室町時代後期になると存在しなくなっているが、高台を有しない丸底のものは依然として認められる。だから高台を有しない丸底の椀が、底部を押さえて安定させた椀に形態が変化していることはないのである。

### 土師質皿

この土器は、土師質の高台付椀や小皿と共に出土する場合が多い。本報告書に掲載されている土器は、口径に比して器高の値が小さいものが多いので、杯と呼ぶべき個体も少数ながら認められるものの、いずれも皿として取り扱うこととした。

この土器の体部から口縁部にかけては斜め上方へ立ち上がり、口縁端部はいずれも丸く仕上げている。口縁端部の器壁が屈曲して、短く内傾または外傾するものも存在する。底部はいずれも平底であるが、弓なりに内縛しているものや、わずかに上げ底を呈するものも認められる。器表内面は、全体に回転などを施している。器表内面には、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められるものが多い。外面の口縁部から体部にかけても、全体に回転などを施している。外面の底部には、回転窓切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められる。これらの土器の胎土には、水漉粘土に近い良質の粘土を使用し、赤色の細かい砂粒や金雲母粒が認められる。焼成はいずれも良好で、赤褐色または淡赤褐色を呈するものが多い。

## 第7章 まとめ

このような観察知見から推察して、土師質皿の製作は、ロクロの中心に粘土塊をすえ、急速に廻るロクロの回転力をを利用してその塊から器形をひき出す「粘土塊ロクロ法」（註28）によって行われたと考えられる。この作業では、両手を使用して口縁部から体部までの器形を整えた後に内面の底部を仕上げ、回転を加えながら箒状工具によって底部を粘土塊から切り離している。外面の底部に認められる板目痕跡は、回転箒切り痕跡の上面に存在していることから、土器を粘土塊から切り離した後に生じた痕跡と考えられるのである。

この土師質皿に類似した器形の土器は、奈良時代や平安時代の時期にも認められる。たとえば百間川当麻遺跡では、右岸用水調査区のA地点から比較的多く出土している（百當右268～290）。これらの土器には器壁の薄いものが多く、いずれも粘土紐を巻き上げて器形を整えている。内外面の器表面の調整も丁寧に行われ、外面の底部に指頭圧痕が顕著に認められるもの（百當右288）や、内外面の器表面全体に丹塗りを施しているものが多い。このように奈良時代や平安時代の土器は、粘土紐を巻き上げて丁寧に仕上げているのに、中世の土師質皿になると粘土塊ロクロ法によって簡単に作られているのである。

本報告書に掲載されている遺跡で、土師質皿がほかの器種と共に伴して出土している良好な遺構に、百間川当麻遺跡右岸用水調査区の井戸3と百間川岩間遺跡の土壙Ⅱがある。井戸3から出土した土器（百當右1465～1474）は、いずれも破片で法量が計測できるのは1個体（百當右1465）のみである。その計測値は、口径14.4cm～14.6cm（14.5cm）、器高2.8cm～3.2cm（3.2cm）である。後者の土壙Ⅱから出土した土器（岩間54～58）は、井戸3から出土した土器よりも法量が小さいにもかかわらず、全体の器壁は厚くなっている。それらの土器の計測値は、口径10.6cm～12.6cm、器高2.6cm～3.1cmを測り、平均値は、口径11.8cm、器高2.9cmである。この土師質皿については、比較対照する良好な資料に乏しいが、土師質高台付椀に認められた現象と同様に、時間の経過とともに法量の縮小化傾向が存在するようである。

### 土師質小皿

中世の時期に属する遺跡を調査すれば、必ずと言っても過言ではないほど多量に出土する小形の土器である。

この土器の口縁部は、短く斜め上方へ立ち上がり、端部はいずれも丸く仕上げている。口縁端部の形態は、内彎または外彎するものと、直線的なものが存在する。底部は平底であるが、内彎しているものや、わずかに上げ底を呈するものが存在する。器表内面は全体に回転などで施していく、成形によって生じたと推定される凹凸が顕著に認められるものが多い。外面の口縁部から体部にかけては、全体に回転などで施している。外面の底部には、回転箒切り痕跡と板目痕跡が顕著に認められるものが多く、回転糸切り痕跡を有するものも存在する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成はいずれも良好である。この土師質小皿は、全体に著しく歪んだ形態を有するものが多い。

このような観察知見から、この土器の成形手法について考えてみたい。百間川当麻遺跡や百間川岩間遺跡から出土した小皿を観察すれば、基本的には土師質皿の成形手法と同様に、粘土塊ロクロ法に

よって作られたと考えられるのである。ところが幡多廃寺跡から出土した小皿には、3種類の製作過程が認められるという（註29）。すなわち、粘土紐巻き上げ成形→口縁部横なで調整の2技法2手順によるもの、粘土紐巻き上げ成形→粘土板張り付け整形→口縁部横なで調整の3技法3手順によるもの、粘土紐巻き上げ成形→粘土板張り付け整形→底部叩き締め調整→口縁部横なで調整の4技法4手順によるものである。この製作に認められる差異は、時間的な技術の推移に起因する時間差の反映ではなく、広い意味での同時期内における個体差として理解されている。また川入遺跡のP-9土壙から出土した小皿は、成形段階で粘土紐の巻き上げを行い、整形段階と調整段階でロクロの使用が認められるという（註30）。それで土師質小皿の破片をつぶさに観察したが、粘土紐を巻き上げた痕跡は認められない。底部だけが円板状に残ったものはわずかに認められるが、口縁部だけが輪になって剝離しているものは存在しない。その器形の用途にかなうものができるかぎり、ぎりぎりまで作業を簡略化したと考えられるから、手間のかかるることは極度に排除するであろう。粘土紐を巻き上げて成形したものを、仕上げの段階になってロクロを使用するよりも、当初からロクロの上に粘土塊を置いて、ロクロを回転させながら小皿の形に摘み出せば、作業は簡単で能率的である。

ここで遺構から出土している小皿を概観したい。百間川当麻遺跡右岸用水調査区の井戸3から出土した土器の中には、2種類の土師質小皿が認められる。口径や器高が比較的小さい小形のもの（百當右1476～1480）と、全体の法量がやや大きいもの（百當右1481～1509）である。前者の小皿は、口径7.3cm～7.7cm、器高0.9cm～1.5cmを測り、平均値は、口径7.5cm、器高1.3cmである。この土器の胎土や色調は井戸3から出土した高台付椀（百當右1408～1462）と同じで、出土量は少ない。後者のやや大きい小皿は、口径7.8cm～9.4cm、器高1.0cm～2.0cmを測り、平均値は、口径8.9cm、器高1.5cmである。この土器の胎土や色調は、井戸3から出土した土師質皿（百當右1465～1474）と同じで、出土量は前者の小皿よりも圧倒的に多い。

百間川当麻遺跡低位部調査区の中世土壙墓から出土した土師質小皿（註31）は、口径8.7cm～8.9cm（8.8cm）、器高1.1cm～1.5cm（1.3cm）で、井戸3から比較的多量に出土した法量がやや大きいものに極めて酷似している。

川入遺跡のP-9土壙からは、多量の高台付椀や土鍋等とともに、小皿がまとまって出土している（註32）。抽出された50個体の法量は、口径6.7cm～8.2cm、器高1.0cm～1.8cmである。

御堂奥遺跡で検出された建物址の北辺部からは、30個体以上の高台付椀や白磁片と共に伴して多量の小皿が出土している（註33）。その計測値は、口径7.0cm前後、器高1.0cm～1.5cmである。

百間川岩間遺跡の土壙Ⅱから出土した小皿（第72図40～53）は、口径7.6cm～8.4cm、器高1.1cm～1.8cmを測り、平均値は、口径8.0cm、器高1.3cmである。

以上の遺構から出土した小皿は、いずれも外面の底部が回転箇切りで、ほかの器種として高台付椀が共伴している。百間川当麻遺跡の井戸3から出土した法量がやや大きいものから、御堂奥遺跡の建物址北辺部より出土した小皿までは、土器そのものの口径や器高の値が縮小して、高台付椀に認められる現象と一致しているが、百間川岩間遺跡の土壙Ⅱから出土した小皿については、様相が異なっている。つまり高台付椀の法量は、御堂奥遺跡から出土したものよりも縮小しているが、小皿は逆に口

## 第7章 まとめ

径や器高の値が大きくなつて、全体の器壁も厚く作られているのである。

百間川当麻遺跡右岸用水調査区のD-27溝状遺構からは、備前焼の大甕や擂鉢とともに、外面底部が回転糸切りで全体の器壁が薄い小皿（百當右2216～2227）が出土している。この小皿の出土数は12個体以上にもなるが、全体の器形はよく揃っている。口径9.3cm～9.4cm、器高1.4cm～1.8cmを測り、平均値は、口径9.4cm、器高1.6cmである。このD-27溝状遺構から出土した小皿は、全体の器壁が薄いにもかかわらず、外面の底部が回転糸切りで法量の大きい特殊な形態になっている。外面の底部に回転糸切り痕跡を有する小皿は、沖の店遺跡1号窯址（註34）からも出土している。完形品のもの（沖の店48）の計測値は、口径8.8cm、器高1.6cmである。

このように、外面の底部に回転糸切り痕跡を有する小皿が出土している良好な遺構は、百間川当麻遺跡のD-27溝状遺構と沖の店遺跡の1号窯址が存在する。百間川当麻遺跡のD-27溝状遺構は、共伴する備前焼の大甕や擂鉢から推定して室町時代に属するであろう。沖の店遺跡の1号窯址は、残留地磁気測定によって平安時代後期に属する可能性が強い。このような状況から推察すれば、平安時代後期と室町時代の土師質小皿は、外面底部と回転糸切りで仕上げているものが多いように思われるが、草戸千軒町遺跡（註35）の室町時代に属する遺構から出土した小皿を観察すると、大多数が笠切りのもので、回転糸切り痕跡を有するものは極めて少ないのである。土師質小皿を作る段階で粘土塊から底部を切り離すには、笠状工具か糸を使用するしか方法がないと考えられるが、良好な資料が乏しい現時点では不明である。どちらを使用するかは、便宜的に決められたのかもしれない。ただ、岡山県南部地方から広島県南東部地方の地域に所在する遺跡で、鎌倉時代に属すると推定される遺構から出土した土師質の小皿は、管見の限りでは外面の底部に回転笠切りを行っているものが多く、回転糸切り痕跡を有するものは極めて少ないのである。

北九州地方では、太宰府史跡の発掘調査が進むにつれて、輸入中国陶磁器の分析（註36）とともに土師器の研究（註37）も盛んに行われている。その成果として、「杯の法量の減少化傾向の中で、10世紀後半から11世紀前半の段階で器種の分化が現われる。杯はこの分化した段階から大型化し始め、最大径15cm～16cmまでになる。このもっとも大型化した時期に底部切り離しがこれまでの笠切りから糸切りに転換する。この期からまた小型化が始まり、14世紀前後の段階でもっとも小さくなり、径12cm前後になる。14世紀中頃の段階から大型化が始まると、単に大型化が始まるとだけではなく、口径に対して底径の比が小さくなる。つまり底部から立ち上がる体部の外傾が大きく器高が高くなり、体部がラッパ状を呈するようになる。10世紀後半から11世紀前半の段階で杯から分岐した小皿は、口径を14世紀中頃の段階まで減じ続ける。しかし、器高は12世紀中頃の段階から一定化し、1cm前後を測る。14世紀前後の段階からそれまでの平たい小皿とは相違した小皿bが現われる。小皿bも杯に見られたように器高を高めて行くようである。」（註38）という結果が得られている。また畿内でも、「8世紀中頃すぎにあった5種類の器形は、その後その違いが不明確になり、9世紀初めには深くて大きいものと、浅くて小形の2種類に統合される方向を示し、最後には大小2種類の皿になっている。この器形の種類の減少は、同時に器の法量の縮小でもあることもわかる。」（註39）という。

岡山県南部地方や広島県南東部地方の地域ではどうであろうか。中世に属する遺構から出土した土

師質土器には、皿（杯）と小皿が存在するのは確実であるが、北九州地方や畿内における現象に必ずしも一致するとは限らない。たとえば、百間川当麻遺跡の井戸3から出土した小皿（百當右1476～1509）には、法量の異なる2種類のものが認められる。百間川岩間遺跡の土壙Ⅱから出土した土師質土器（岩間26～58）は、高台付椀の法量が縮小化傾向にあるにもかかわらず、小皿は逆に器壁が厚くなっている器形が大きくなっている。また地域が離れるが、岡山県真庭郡落合町に所在する赤野遺跡（註40）のA—5号ピットから出土した約60個体にも及ぶ土師質の皿は、口径6.8cm～13.4cm、器高1.4cm～3.2cmの範囲内の計測値で、大形の皿と小形の小皿に分化しているとは言えない状況を呈しているのである。このように当地域では、北九州地方や畿内の状況と大筋では一致した様相を呈しているものの、異なる事例も少なからず認められるのである。

### 須恵質椀

百間川当麻遺跡右岸用水調査区の井戸3から、2個体の完形品（百當右1463・1464）が出土しているが、中世の遺構から出土する須恵質土器の量は、土師質土器よりも極めて少ない状況である。百間川当麻遺跡の井戸3から出土した須恵質椀の形態や手法の特徴は、以下のようなである。

底部から口縁部にかけては、大きく内彎して斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は全体に丸く仕上げている。底部は平底であるが、体部や口縁部よりも器壁が厚くなっている。わずかに上げ底を呈している。体部外面には、成形によって生じたと推定される凹凸が認められる。外面の底部には、回転糸切り痕跡が顕著に認められる。外面の口縁端部には、重ね焼によって生じたと推定される、黒色に変色した部分が存在する。内面は全体に丁寧な回転などを施し、外側も口縁部から体部は全体に回転などを施している。胎土中には細かい砂粒を含み、焼成は極めて良好である。色調は外面の口縁部を除いて灰黄褐色を呈しているが、出土した井戸内の地下水によって器表面の色調が変色しているのであって、本来は灰色または灰褐色の可能性が強い。

このような観察知見から推察して、須恵質椀の製作は、粘土紐を巻き上げて形を整えた後に、ロクロを使用して器表面の仕上げを行っていると考えられる。ロクロから底部を切り離すには、ロクロを回転させて糸を使用している。土器を乾燥させて窯で焼成する場合には、重ね焼が行われたと推定される。

百間川当麻遺跡右岸用水調査区から出土した遺構に伴わない遺物の中には、この須恵質椀に類似した土器（百當右299～358、1200・1201・1961～1968・2260～2262）が多量に認められる。井戸3から出土した2個体の完形品の土器（百當右1463・1464）と比較すると、底部の形態が異なっている。つまり、遺構に伴わない土器は、底部がわずかに突出して器壁が厚いが、井戸3から出土した土器は、外面の底部と体部の境界部分を丸く仕上げているのである。この形態の違いは、時期差を反映しているようである。前者は、平安時代後半期に属すると考えられている備前市佐山の光明見古窯址灰原採集資料（註41）に認められる。後者の井戸3から出土した土器に酷似するものは、平安時代終末期から鎌倉時代初期に属する備前焼成立期の各古窯址（註42）から採集されている。したがってこれらの土器は、形態が相違して時期差が認められるものの、いずれも岡山県南東部地域で生産された可能

## 第7章 まとめ

性が強い。川入遺跡のP-9 土壙から出土した糸切り底を有する須恵質の椀（川入51）は、井戸3から出土した2個体の完形品のものよりも法量が著しく縮小しているが、同器種の土器と考えられる。

### 須恵質こね鉢

遺構に伴う良好な資料は存在しない。百間川当麻遺跡右岸用水調査区から出土した遺構に伴わない遺物の中に、小破片（百當右291～298・1198・1199・1969～1971）がわずかに認められる。この土器は、兵庫県の東播地方で生産された可能性が強いという（註43）。すなわち、平安時代後期から室町時代中頃まで操業が行われ、備前焼擂鉢が圧倒的に流通するようになると操業を停止した古窯址が確認されているのである。魚住古窯址（明石市魚住町）、神出古窯址（神戸市垂水区神出町）、久留美古窯址（三木市久留美）、与呂木古窯址（三木市志染町与呂木）、宿原古窯址（三木市志染町宿原）である（註44）。以上の古窯址から出土した瓦は、京都の六勝寺へ運ばれている（註45）から、生産された土器や瓦の流通範囲はかなり広かったと推定され、百間川当麻遺跡からそれらの窯のものが出土しても不思議ではない。

このこね鉢の体部から口縁部にかけては、直線的に斜め上方へ伸び、口縁端部の形態は、わずかに拡張して外面に中央部が浅く窪んだ面を有するものや、瘤状を呈するものが存在する。この土器には、片口が認められる。底部は平底である。器表面は全体に回転なでを施している。外面の口縁端部には、重ね焼によって生じたと推定される、黒色部分が存在するものも認められる。この土器も粘土紐を巻き上げて形を整え、ロクロを使用して器表面の仕上げを行っていると考えられる。窯での焼成は、重ね焼が行われたと推定される。

### 瓦器

本報告書に掲載されている遺跡から出土した瓦器は、高台付椀も小皿もすべて畿内で生産されたものである（註46）。畿内で生産された瓦器は、地域によって形態や成形手法が異なり、楠葉型・和泉型・大和型・丹波型に分類されている（註47）が、岡山県南部地域から出土する瓦器は、和泉型のものが圧倒的多数を占め、楠葉型のものは極めて少ない状況である。本報告書に掲載されている楠葉型の瓦器は、百間川当麻遺跡右岸用水調査区から出土した遺構に伴わない高台付椀（百當右1165～1169）と、井戸3から出土した内面の見込み部分に鋸歯状を呈する暗文を施している小皿（百當右1612）の6個体のみである。大和型や丹波型の瓦器は、現時点では確認されていない。北九州地方や北四国地方では、畿内で生産されたものとは器形や暗文が異なる在地の瓦器が確認されている（註48）。岡山県南部地域では、建久4年（1193年）に備前国司となった俊乗房重源が、赤磐郡瀬戸町万富で東大寺瓦を生産している（註49）から、畿内との密接な交流があつて瓦器の生産技術も伝播したと考えられるが、現地点では畿内から持ち込まれた和泉型と楠葉型の瓦器ばかりが出土している。この地域から出土した瓦器で、以前から知られていたものに、吉井川河床遺跡から出土した2個体の高台付椀がある（註50）が、遺構に伴って多量の瓦器が確認されたのは、この旭川放水路（百間川）改修工事に伴う調査が実施されてからである。瓦器がほかの器種と共に伴して出土している遺構は、百間

川当麻遺跡右岸用水調査区で検出したD-18溝状遺構, D-19溝状遺構, P-14土壙, 井戸3が存在するが, 完形品を多く含む井戸3から出土した瓦器(百當右1585~1619)について, その形態や手法の特徴を詳細に検討したい。

井戸3から出土した瓦器の高台付椀は, 完形品または完形品に復原できたものが8個体(百當右1585~1592)存在する。底部から口縁部にかけては, 大きく内轉して斜め上方へ立ち上がる。口縁端部はいずれも丸く仕上げている。口縁端部の形態が, 短く外反するもの(百間右1587・1601・1607)も存在する。外面の口縁部と体部の境界部分には, いずれも鈍い稜が認められる。外面の底部には, 低くて不安定な貼り付け高台が存在する。高台の断面形は三角形に近いものが多いが, 台形に近いもの(百當右1592)も認められる。これらの土器には, 著しく歪んでいるものが多い。

内面は丁寧な不定方向のなでを行って全体を平滑にした後に, 暗文を施している。内面に施された暗文には, 見込み部分に平行する直線を描いた後に, 体部から口縁部にかけて横方向に直線を描いているもの(百當右1585~1590)が多いが, 見込み部分から口縁部まで連続して不定方向の直線や曲線を描いているもの(百當右1591・1592)も認められる。内面の見込み部分には, 重ね焼によって生じたと推定される高台の痕跡が認められるものが多い。外面の口縁部はいずれも横なでを施しているが, 指頭圧痕が残存しているもの(百當右1585・1589・1606, 1608・1611)も存在する。外面の体部には指頭圧痕が顕著に認められ, いずれも二次的な調整を加えていない。外面の体部に墨書の「×」印が認められるもの(百當右1591)がある。高台の貼り付け部分は, 全体に横なでを加えている。外面底部の高台より内側には, 指頭圧痕が顕著に認められる。

このような観察をもとに, 井戸3から出土した瓦器の高台付椀(百當右1585~1611)の製作過程を考えてみたい。この土器は, 内外面とも全体に炭素を吸着させているため, 粘土の継ぎ目や貼り付け部分を観察するのは, 極めて困難である。しかし, 形態や成形手法が先に検討した同じ井戸3から出土している土師質高台付椀(百當右1408~1462)に類似しているため, その土器と同様に粘土紐を巻き上げていると考えたい。粘土紐の巻き上げから締めつけを経て調整に至る諸段階は, 土師質高台付椀とほぼ同様の経過をたどると考えている。詳細については前述の該当部分を参照していただくとして, 瓦器の特色である暗文の施文段階に移行したい。

この作業は, 土器そのものの乾燥状態が問題である。湿って器壁が軟弱であれば, 器表面の粘土を削り取ってしまう。逆に極度に乾燥していると, 暗文を施すことができないのである。この暗文を施す作業は, 手持ちの状態で箆状工具を使用して行われたと考える。暗文を施す順序は, まず先に見込み部分を行って, 体部から口縁部へ移行している。井戸3から出土した瓦器の高台付椀(百當右1585~1611)は, いずれも外面には暗文が認められない。暗文を施す作業が終ると, さらに乾燥させて窯で焼成する。土器を窯で焼成する場合には, 内面の見込み部分に高台の痕跡を有するものが多いから, 土器を順々に高く積み上げる重ね焼を行ったと推定される。内外面全体が黒灰色または銀黒色になっているから, 炭素を吸着させているのである。

これらの土器の胎土中には1.0mm以下の砂粒を含むが, 量は極めて少なく, 良質の粘土を使用している。焼成はいずれも良好で黒灰色を呈するものが多いが, 銀黒色を呈するもの(百當右1586)も認

## 第7章 まとめ

められる。完形品または完形品に復原できた8個体（百當右1585～1592）の計測値は、口径14.4cm～15.6cm・器高3.9cm～6.2cm、高台径4.1cm～5.2cmを測り、平均値は、口径15.2cm、器高4.8cm、高台径4.6cmである。

井戸3からは、瓦器の小皿も出土している。口縁部は短く斜め上方へ立ち上がる。端部はいずれも丸く仕上げている。底部は、弓なりに彎曲しているものが多いが、安定した平底を呈するもの（百當右1616）も認められる。内面は全体に丁寧な横なでを行って器表面を平滑にした後に、暗文を施している。外面の口縁部は、横なでを施しているだけで暗文は認められない。外面の底部には指頭圧痕が顕著に認められ、二次的な調整を加えていない。この瓦器の小皿は底部の円板に口縁部の粘土を接合し、手持ちの状態で内外面から押えつけて形を整えている。器表面の仕上げ調整や暗文を施す作業も、手持ちの状態で行われたと推定される。これらの小皿の胎土中には1.0mm以下の砂粒を含むが、量は極めて少なく、良質の粘土を使用している。焼成は良好で、いずれも黒灰色を呈している。

内面に鋸歯文状の細い線で暗文を描いた楠葉型と推定されるもの（百當右1612）は完形品である。口径8.6cm～9.0cm、器高1.4cm～1.8cmを測る。和泉型と推定される小皿の中にも、接合して全形を知ることができるるもの（百當右1613）が1個体存在する。口径8.6cm～8.7cm、器高1.1cm～1.9cmである。この2個体の小皿は、内面に描かれた暗文は相違するが、形態や成形手法では酷似している。

百間川当麻遺跡右岸用水調査区から出土した瓦器には、高台付椀と小皿の器種が認められるが、どちらも個体数が比較的多く、それぞれの器種で形態や法量のみならず成形手法も互いに酷似している。これらの瓦器は畿内から搬入されたと考えられるから、単に、畿内で生産された土器の流通経路の一端を知ることができるだけでなく、畿内で精力的に行われている土器編年の成果を、岡山県南部地域へ導入することが可能である良好な一括資料として注目される。井戸3から出土した瓦器を畿内における編年と比較対照すれば、橋本久和氏による高槻における編年（註51）のⅢ—1期、尾上実氏による挟山遺跡における編年（註52）のV期になり、13世紀初頭の鎌倉時代前期に属するであろう。

岡山県南部地域に所在する遺跡で瓦器が出土しているものは、三蔵畠遺跡（赤磐郡山陽町河本）（註53）、賀田廃寺跡（岡山市賀田）（註54）、幡多廃寺跡（岡山市幡多）（註55）、百間川原尾島遺跡（岡山市原尾島）（註56）、百間川岩間遺跡（岡山市米田）、百間川当麻遺跡（岡山市米田）、百枝月遺跡（岡山市百枝月）（註57）、福元遺跡（邑久郡邑久町福元）（註58）、沖須賀遺跡（玉野市後閑）（註59）、舟津原貝塚（倉敷市粒江）（註60）、大飛島遺跡（笠岡市大飛島）（註61）の11遺跡と、以前から知られていた吉井川河床遺跡（岡山市西大寺觀音前）（註62）が存在する。これらの遺跡のうち楠葉型の瓦器が出土しているのは、三蔵畠遺跡と百間川当麻遺跡の2遺跡だけである。残る10遺跡は、いずれも和泉型の瓦器が確認されている。出土した瓦器の年代は、百間川当麻遺跡の井戸3と同じ13世紀初頭のものが多く、外面の体部から口縁部にかけてかすかに暗文が存在する、12世紀終末と推定されるものも認められる。ところが、百間川当麻遺跡右岸用水調査区の遺構に伴わない遺物の中に存在する瓦器（百當右1081～1169・2074～2130・2329～2333）を概観すれば、古い時期のものから新しい時期のものまで混在して認められるため、12世紀から13世紀と推定される瓦器だけが、岡山県南部地域に流通したのではないと考えられる。古い時期や新しい時期の良好な遺構が、現時点では検出さ

れていないのである。今後、これらの時期の瓦器を含む資料の増加を期待しつつ、岡山県南部地域における在地土器の編年研究を進め、近い将来、畿内と中部瀬戸内地方との中世土器編年の対応関係の樹立を目指したい。

(福田)

### 備前焼

百間川当麻遺跡右岸用水調査区からは、中世日常雑器としての中世土器・陶器などが多量に出土した。の中には、所謂中世六古窯の1つに数えられ、汎西日本一帯をその流通圏とする備前焼がかなりの量含まれていた。

ところで、これまで備前焼の集落遺跡からの多量の出土例は、今日までの県下各地、特に備前焼産地である広義の備前地方での発掘調査ではほとんど例をみないものであった。それだけに今回の出土例は、産地に直結した地域での流通を考える意味において興味深いものである。

出土した備前焼には、小破片資料ながら鉢・甕・壺・椀などの器種が認められた。その中にあって鉢、特に擂鉢は、質・量ともに充実しており、型式変化が追えるだけの年代幅を有するものである。

以下、本調査区出土の備前焼についてのまとめを、間壁忠彦氏の編年（註63）に基づいて行ってみたい。

本調査区から出土した備前焼の中で最も古く位置づけられるものにA地点包含層出土の鉢（百當右1189）、P-14出土の壺（百當右1370）、井戸3出土の椀（百當右1463・1464）・甕（百當右・1392～1402）などがある。鉢は、その内面に縦方向に条線が施されない「こね鉢」と称されるものである。壺は、口縁端部にまったく拡張のみられないものである。椀は、糸切り底を呈するもので、体部を内巻気味に口縁部へと伸ばしている。甕は、口縁部を欠損するものの外面に格子目状の叩き痕を留める。これらの特徴は、備前焼第Ⅰ期（以下、備前焼を省略）に属する大明神窯・胡耶山奥窯出土品（註64）中にみられる。したがって、時期的には、平安時代末から鎌倉時代初頭に位置づけられる。

次にⅡ期であるが、本調査区はもとより、百間川当麻遺跡全体をみてもこの時期の製品はみられない。

続くⅢ期も量的には決して多くはない。ここに図示できたものだけで擂鉢（百當右1708）と甕（百當右1772・2228）の3点にすぎない。しかもそれは、小破片資料で、全体の詳細部分を欠くものである。擂鉢は、体部から口縁部にかけて内巻気味に上方へと開き、口縁端部を体部に対して直交させる。その口縁端部には、内外への拡張がほとんど認められない。甕は、頸部を大きく外反させ、そのまま口縁端部を頸部側に短く折り曲げる。玉縁の初現的な形態を示す。なお、甕の焼成・色調は、Ⅰ期の特徴、即ち一見須恵器と見まちがえるものを残す。しかし、擂鉢は、既に胎土中に山土を含み、色調も備前焼特有の暗赤褐色とでもいうべき色を呈している。時期は、鎌倉時代後半から南北朝前半頃に比定される。

Ⅳ期になると本調査区においても出土量が増加する。これは、Ⅳ期が丁度大窯への胎動期として認識される（註65）ことからもうなずける1つの事象であろう。その多くは、百間川当麻遺跡右岸用水調査区の井戸2とD-21中に投げ込まれたものである。中には、擂鉢（百當右1672～1679・1707・

## 第7章 まとめ

1709～1721)・甕(1774・1776～1777)などの器種がみられる。IV期は、さらに前半と後半に細分される。前半のなかでも擂鉢は、その口縁部の形態の違いにより、さらに2つに細分可能である。いまこのIV期前半の擂鉢を仮にa・bと分類した場合、a類に相当するのが(百当右1672・1674～1675・1707・1709～1712)である。これは、口縁部が体部に対して直交するもので、端部に拡張をほとんど認めさせない。b類は、(百当右1673・1676～1779・1713～1721)である。これは、口縁部が体部に対して斜交し、口縁端部を上方に若干拡張させる。また、下方には、調整の際の余剰粘土をわずかに垂らすものである。このIV期前半のa・b類の在り方は、丁度水の子岩海揚がりの一括資料(註66)に類似する。水の子岩の場合は、備前焼舶載船の沈没地点からの一括海揚がりということで、a・b類の差は、‘同時期の製品の変化形のあり方’(註67)、即ち工人差(註68)として理解されるものである。したがって、水の子岩に類似するa・b類も、水の子岩の備前焼同様に同時期の所産とすることができます。一方、甕は、量的には少なく、しかも小破片である。わずかに口縁部の一部を認めるにすぎない。この時期のものは、玉縁の口縁部が下方へと垂れ始める。時期は、南北朝後半から室町時代初頭頃に比定される。

IV期も半ばの室町時代前半頃から窯の規模が大型化し、大窯操業の時代を迎えるより一層生産量を高める。それを反映するかのように本調査区においては、この時期以降の出土量が倍増する。この時期の擂鉢(百当右1680・1772～1731・2230)はIV期前半期で既にきざしのみえ始めた口縁端部の上方への拡張がより助長され、より丈夫なイメージをほぼ完成させる。しかし、口縁端部は、まだ丸くおさめられており、V期の口縁端部に平坦面、もしくは段を有するまでには至っていない。甕(百当右1778～1779)は、口縁部の玉縁が下方に長く垂れて頸部の長さをより短いものとしている。

V期は、IV期からの発展形態としてそれまで各地に点在していた窯が数箇所に集約され、その結果として東西南北の大窯などでの操業が開始する時期である。本調査区出土のものの多くは、このV期に集中する。擂鉢(百当右1681～1683・1690・1732・1734～1736・1783～1757・1761～1762)は、口縁部がIV期よりさらに拡張を続ける。それは、ただ単に口縁部を調整段階の横なでより上方へとつまみあげる感じに伸びていたⅢ・Ⅳ期のものとは技法的に異なっている。V期の口縁部は、従来までの口縁部にさらに粘土紐を1条多くめぐらし、それを上方へと長く引き伸ばし、さらにそれを外反させて折り曲げるといった工程が認められる。その結果、口縁端部は器厚を増して、端部に平坦面、もしくは斜行する面をもつてある。なお、この時期の擂鉢の胎土には、砂粒をまったく含まない田土が用いられるのが一般的である。甕(百当右1700～1792)は、口縁部がより一層分厚くなり、口縁部外面には凹凸が施される。技法的には擂鉢に共通する。V期は、室町時代末から江戸時代初頭頃までに比定される。

(島崎)

## 註

註1 岡山県南部地方の代表的な遺跡として、本報告書に掲載されている遺跡以外に、沖の店遺跡・水江遺跡・上東遺跡・川入遺跡・曾原遺跡・延寿寺跡・三蔵烟追跡等がある。広島県南東部地方の代表的な遺跡として、草戸千軒町遺跡・鞆市街地遺跡・尾道市街地遺跡等がある。沖の店遺跡の所在地は岡山県浅口郡鴨方町小坂西で、亀山焼の古窯址群に近接しているため、器表面が黒灰色または灰褐色を呈する比較

## 第2節 中世の土器について

的硬質に焼成された土器が多く出土している。三蔵畠遺跡からは、土師質土鍋を焼成した窯そのものが検出されているが、残留地磁気測定によると、A.D. 1150年～1220年という結果が得られているから、平安時代末期にさかのぼる可能性が強いので、中世の遺跡と考えるのは不適当かもしれない。

- (ア) 伊藤晃・浅倉秀昭「沖の店遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 岡山県教育委員会 1981年  
(イ) 間壁葭子「倉敷市酒井——水江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第8号 倉敷考古館 1973年  
(ウ) 柳瀬昭彦・藤田憲司・伊藤晃・池畠耕一・村上幸雄・大谷猛「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第2集 岡山県教育委員会 1974年  
(エ) 中野雅美・柳瀬昭彦・江見正己「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(10) 岡山県教育委員会 1977年  
(オ) 伊藤晃・山磨康平・福田正継「曾原地区の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 岡山県教育委員会 1980年  
(カ) 出宮徳尚・根木修「足守庄莊園遺構緊急調査延寿寺跡第2次発掘調査概報」岡山市遺跡調査団 1979年  
(キ) 神原英朗・則武忠直・国安敏樹・太田耕一「三蔵畠遺跡」『岡山県吉山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』(6) 岡山県山陽町教育委員会 1976年  
(ク) 松下正司他『草戸千軒町遺跡』福山市教育委員会・広島県教育委員会・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1966年・1969年～1980年  
(ケ) 松下正司・小田原昭嗣・佐道弘之・志田原重人・篠原芳秀・園尾裕「鞆——市街地遺跡発掘調査報告——」福山市教育委員会・福山市文化財協会 1980年  
(コ) 福井万千・篠原芳秀・山県元他「尾道——市街地発掘調査概要——」尾道市教育委員会 1977年～1980年  
(メ) 篠原芳秀・志田原重人・志道和直「尾道中世遺跡発掘調査概報——尾道市土堂一丁目所在——」尾道市文化財協会 1977年  
(シ) 山県元・吉原渡・志田原重人・堀信行「尾道中世遺跡発掘調査報告——尾道市土堂二丁目所在——」尾道中世遺跡発掘調査団 1980年

註2 註1(ウ)の第83図P-123井戸状遺構出土遺物(1)と第86図H-9住居址出土遺物、註1(エ)の第21図P-9土壤出土遺物(2)、註1(キ)の第177～179図三蔵畠遺跡出土土師器実測図(1～3)、本報告書の第176図D-19構状遺構出土遺物(1)と第182図井戸3出土遺物(1)等を参考にした。

註3 註1(ウ)の第83図P-123井戸状遺構出土遺物(1)と第86図H-9住居址出土遺物を参照。

註4 支脚を有しないものは、かまどに掛けで使用したと考える。

註5 註1(ケ)の内耳鍋Aと内耳鍋Bを参照。

註6 註1(ア)に同じ。

註7 註1(ケ)に同じ。

註8 檐状工具の痕跡は、器表面をなでつけて粘土を締めつけるとともに、余分の粘土を削り取って器壁を薄くする仕上げの作業によって生じたものである。弥生式土器の外面などに認められる刷毛目と同じ性格を有するが、器表面に残存した痕跡が極めて粗いので、刷毛目と区別して檐状工具の痕跡とする。檐状工具は、その作業を行うのに使用した道具のことである。参考文献：横山浩一「刷毛目調整工具に関する基礎的研究」『九州文化史研究所紀要』第23号 九州文化史研究所 1978年

註9 沖の店遺跡出土の土鍋は、胴部下位から底部に認められる檐状工具の痕跡が、口縁部から胴部上位の痕跡よりも目が粗いものになっている。

註10 都窪郡早島町字無津小字小松露で発見された窯址出土品に対して名付けられた名称である。参考文献：快舟散史(水原岩太郎)「考古行脚」「吉備考古」第32号 吉備考古学会 1937年

註11 土師質高台付椀が出土している遺跡は、岡山県南部地方から広島県南東部地方には極めて多い。岡山県南部地方の遺跡で、ほかの器種が共伴する窯以外の良好な遺構として、本報告書に掲載した百間川当麻

## 第7章 まとめ

- 遺跡右岸用水調査区の井戸3と百間川岩間遺跡の土壙Ⅱ以外に、上東遺跡のP-123井戸状遺構とH-9住居址、川入遺跡のP-9土壙、御堂奥遺跡の建物、延寿寺跡W-NIV-Tの配石土壙墓等がある。
- 註12 橋本久和「上牧遺跡発掘調査報告書」「高槻市文化財調査報告書」第13冊 高槻市教育委員会 1980年
- 註13 註1(カ)の1号窯址。残留地磁気測定によると、A.D. 1190±60年という結果が得られているから、平安時代末期にさかのぼる可能性が強いので、中世の遺構と考えるのは不適当かもしれない。
- 註14 板目痕跡というのは、外面底部の器表面に平行して認められる凹凸になった痕跡のことである。後述する土師質皿や土師質小皿には、その痕跡が顕著に認められるものが多い。現時点では、土器を成形する時に作業台の板の上で押えつけるために生じた痕跡か、成形した後の乾燥の段階で、板の上に並べることによって生じた痕跡と考えている。ところが板の面が平滑であれば、痕跡は残らないことになる。作業台の板や土器を乾燥させる板の表面は、土器が吸着しないように、あえて凹凸にすることも推定されるが、これから追求しなければならない課題である。
- 註15 註1(カ)の図77沖の店遺跡1号窯出土遺物(1)と図78沖の店遺跡1号窯出土遺物(2)。
- 註16 松本和男氏の御教示による。報告書は近刊の予定である。
- 註17 註1(カ)の第83図P-123井戸状遺構出土遺物(2)。
- 註18 註1(カ)の第20図P-9土壙出土遺物(1)。小結で中野雅美氏がP-9出土の椀・小皿について考察している。
- 註19 葛原克人・池畠耕一「御堂奥遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」第2集 岡山県教育委員会 1974年
- 註20 註1(カ)の第86図H-9住居址出土遺物。
- 註21 田中琢「古代・中世窯業の地域的特質——畿内——」「日本の考古学」VI 河出書房 1967年
- 註22 註12に同じ。
- 註23 1980年5月18日に開催された第5回広島考古学研究会で、伊藤晃氏が岡山県南部地方で出土した土師質高台付椀の法量減少傾向について発表されたことがある。
- 註24 大谷猛・下沢公明「毎戸遺跡の調査」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」(5) 岡山県教育委員会 1974年
- 註25 註1(カ)に同じ。
- 註26 志道和直「草戸千軒町遺跡出土の土師質土器編年試案」「草戸千軒」No. 48 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1977年
- 註27 註1(カ)に同じ。
- 註28 註21に同じ。
- 註29 根木修「寺院以降の土師器」「幡多廃寺発掘調査報告」岡山市教育委員会 1975年
- 註30 註1(カ)に同じ。
- 註31 註16に同じ。
- 註32 註18に同じ。
- 註33 註19に同じ。
- 註34 註13に同じ。
- 註35 註1(カ)に同じ。
- 註36 九州歴史資料館を中心に行われている。
- (ア) 亀井明徳「九州出土の宋・元代陶磁の分析」「考古学雑誌」第58巻第4号 日本考古学会 1973年
- (イ) 亀井明徳「日本出土の越州窯陶磁の諸問題」「九州歴史資料館研究論集」1 九州歴史資料館 1975年
- (ウ) 亀井明徳「平安期輸入陶磁器の名称と実体」「考古学雑誌」第61巻第1号 日本考古学会 1975年
- (エ) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」「九州歴史資料館研究論集」4 九州歴史資料館 1978年
- 註37 九州歴史資料館と福岡南バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査担当者を中心に行われている。

## 第2節 中世の土器について

- (ア) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集』2 九州歴史資料館 1976年
- (イ) 森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き(2)」『九州歴史資料館研究論集』3 九州歴史資料館 1977年
- (ウ) 前川威洋・新原正典『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集 福岡県教育委員会 1975年
- (エ) 前川威洋・新原正典・倉住靖彦『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集 福岡県教育委員会 1976年
- (オ) 前川威洋・新原正典・馬田弘稔『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第6集 福岡県教育委員会 1977年
- (カ) 前川威洋・新原正典・倉住靖彦『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集 福岡県教育委員会 1977年
- 註38 註35(エ)に同じ。各遺構名を世纪に置き換えさせていただいた。
- 註39 註21に同じ。
- 註40 岡田博・橋本惣司・山磨康平「赤野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 岡山県教育委員会 1973年
- 註41 間壁忠彦・西川宏「備前の古窯」『古代の日本』4 角川書店 1970年
- 註42 備前焼については、間壁忠彦氏と間壁葭子氏の共同研究が著名である。
- (ア) 間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート(1)——備前焼の成立——」『倉敷考古館研究集報』第1号 倉敷考古館 1966年
- (イ) 間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート(2)——中世備前焼の推移——」『倉敷考古館研究集報』第2号 倉敷考古館 1966年
- (ウ) 間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート(3)——備前焼窯址の分布とその性格——」『倉敷考古館研究集報』第5号 1968年
- 註43 兵庫県教育委員会大村敬通氏の御教示による。
- 註44 大村敬通「中世古窯址」『魚住古窯ニュース』2 魚住古窯址調査事務所 1979年
- 註45 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14 元興寺文化財研究所考古学研究室 1978年
- 註46 高槻市教育委員会橋本久和氏の御教示による。
- 註47 註12に同じ。
- 註48 森田勉「九州地方の瓦器碗について」『考古学雑誌』第59巻第2号 日本考古学会 1973年  
沢井静芳・六車功「西村遺跡」香川県教育委員会 1980年
- 註49 岡本寛久「泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 岡山県教育委員会 1980年
- 註50 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」『古代学研究』54 古代学研究会 1969年
- 註51 註12に同じ。
- 註52 尾上実「狭山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要」 大阪府教育委員会 1978年
- 註53 註1(エ)に同じ。
- 註54 出宮徳尚・水内昌康・伊藤晃「貧田廃寺発掘調査報告」 岡山市教育委員会 1971年
- 註55 出宮徳尚・水内昌康・根木修・間壁忠彦・間壁葭子「幡多廃寺発掘調査報告」 岡山市教育委員会 1975年
- 註56 正岡睦夫・光永真一両氏の御教示による。
- 註57 木村幹夫氏の表面採集資料を実見させていただいた。
- 註58 柳瀬昭彦氏の御教示による。
- 註59 玉野市立山田中学校の校舎改築工事に伴って発掘調査が実施された。
- 註60 下沢公明氏の御教示による。

## 第7章　まとめ

- 註61 錄木義昌・間壁忠彦「大飛島遺跡」『倉敷考古館研究小報』1 倉敷考古館 1964年
- 註62 註50に同じ。
- 註63 間壁忠彦「遺跡調査と備前焼」『陶説』333 日本陶磁協会 1980年
- 註64 註42(ア)に同じ。
- 註65 伊藤晃・上西節雄「備前」『日本陶磁全集』10 中央公論社 1977年
- 註66 葛原克人・栗野克己・狐塚省蔵「学術調査報告」「海底の古備前——水ノ子岩学術調査記録——」山陽新聞社 1978年
- 註67 註63に同じ。
- 註68 註66に同じ。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46

旭川放水路(百間川)改修  
工事に伴う発掘調査 II

昭和56年11月 印刷

昭和56年11月 発行

編集 岡山県教育委員会文化課  
発行 建設省岡山河川工事事務所  
岡山県教育委員会  
印刷 岡山県農協印刷株式会社